

ゲスト OS インストール ガイド

2009 年 5 月 20 日

GSTOS-JPN-Q209-198



最新情報を反映したテクニカル ドキュメントは、ヴァイエムウェアの Web サイトにてご覧いただけます。

<http://www.vmware.com/jp/support>

ヴァイエムウェアの Web サイトでは、最新の製品アップデート情報も提供しています。
本書に関するコメントがございましたら、次のメールアドレスまでご連絡ください。

docfeedback@vmware.com

©2006 -2009 VMware, Inc. All rights reserved. この製品は、米国および国際著作権法ならびに知的財産法によって保護されています。ヴァイエムウェアの製品は、
<http://www.vmware.com/go/patents> に記載されている 1 つまたは複数の特許により保護されています。

VMware、VMware 「ボックス」ロゴとデザイン、Virtual SMP、および VMotion は、VMware, Inc. の米国およびその他の国における登録商標または商標です。ここに記載されているその他の名称およびマークは各社の商標です。

VMware, Inc.
3401 Hillview Ave
Palo Alto, CA 94304
www.vmware.com

ヴァイエムウェア株式会社
105-0013 東京都港区浜松町 1-30-5
浜松町スクエア 13F
www.vmware.com/jp

目次

本書について 37

ゲスト OS の選択

 およびインストール 53

 最新の更新情報 53

 サポート対象ゲスト OS 56

 ゲスト OS のサポート状況 62

 VMware ESX Server 3i バージョン 3.5 のサポート 62

 オペレーティングシステムのベンダーがサポートを終了したオペレーティングシステム 62

 ESX 4.0 で前回サポートされていたゲスト 62

 VMware Tools のサポート 63

 VMware Tools の ISO ファイル フォーマット 63

 VMware Tools Operating System Specific Package 64

 Linux VMware Tools の ESXi 4.0 へのサポート 65

 Linux ゲスト OS への VMware Tools のインストール 65

 一部の Linux ゲスト OS で VMware Tools の vmware-user プロセスが自動的に起動しない 65

 SMP のサポートと仮想ハードウェア 66

 ホット アド CPU、ホット アド メモリ、およびホット プラグ デバイス 67

 64 ビット ゲスト OS の使用 77

 64 ビット ゲスト OS の要件 77

 64 ビット ゲスト OS の実行 77

 64 ビット Linux ゲストおよび ED (Execute Disable) 機能 77

 VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン 78

 試験的な機能のサポート 79

 仮想マシンのメモリ設定 79

 GSX Server および VMware Server のサウンド アダプタ 80

 ゲスト OS の実行 80

 Windows 7 81

 32 ビット版 81

 64 ビット版 81

インストール上の注意点	81
ゲスト OS のインストール	82
VMware Tools	82
Windows Preinstallation Environment	83
32 ビット版	83
64 ビット版	83
インストール上の注意点	84
インストールの手順	85
VMware Tools	85
既知の問題	85
VMware Tools ドライバの使用	85
Windows Recovery Environment	87
32 ビット版	87
64 ビット版	87
インストール上の注意点	87
Windows Server 2008	88
32 ビット版	88
64 ビット版	90
インストール上の注意点	92
ゲスト OS のインストール	93
VMware Tools	93
既知の問題	93
LSI Logic Storport Driver 1.26.05 を使用してインストールされた Windows ゲ	
ストの起動中のクラッシュ	93
Microsoft Update 932596 がインストールされた Windows Server 2008 (64	
ビット) の不規則な再起動	94
VMware Tools のコントロール パネルの表示	94
一部の VMware 製品に VMware Tools をインストールしたときに表示される	
警告メッセージ	94
Windows Vista	96
32 ビット版	96
64 ビット版	98
インストール上の注意点	100
ゲスト OS のインストール	101
VMware Tools	101
既知の問題	102
LSI Logic Storport Driver 1.26.05 を使用してインストールされた Windows ゲ	
ストの起動中のクラッシュ	102
VMware Tools のコントロール パネルの表示	102

一部の VMware 製品に VMware Tools をインストールしたときに表示される警告メッセージ	102
一部の VMware 製品に必要なネットワーク アダプタの変更	103
Windows Server 2003	104
32 ビット版	104
64 ビット版	108
インストール上の注意点	111
ゲスト OS のインストール	112
VMware Tools	112
64 ビットのゲストに必要なサウンド ドライバ	112
既知の問題	112
LSI Logic Storport Driver 1.26.05 を使用してインストールされた Windows ゲストの起動中のクラッシュ	112
Windows Server 2003 での拡張 vmxnet アダプタの有効化	112
vmxnet3 ネットワーク アダプタのリンク スピードの誤った表示	113
プロダクト アクティベーション機能	113
ディスプレイ ハードウェアのアクセラレーション機能	114
ハイバネーション機能	114
チェック (デバッグ) ビルド	114
Windows Server 2003 SP1 での ESX Server および Microsoft Clustering Service のサポート	114
PAE モードの Windows Server 2003 仮想マシンで発生する vance イーサネット アダプタの起動エラー	114
ESX Server 仮想マシンでの PAE の無効化	115
Windows を実行する ESX Server 仮想マシンでの VMware Tools のインストール後に再起動しなかった場合のパワーオン エラー	115
Intel Woodcrest ベースのホストで、仮想マシンに 64 ビット版の Windows 2003 Enterprise Server R2 をインストールすると発生する可能性のある仮想マシンのクラッシュ	115
Windows XP	116
32 ビット版	116
64 ビット版	119
インストール上の注意点	120
インストールの手順	121
VMware Tools	121
既知の問題	122
LSI Logic Storport Driver 1.26.05 を使用してインストールされた Windows ゲストの起動中のクラッシュ	122
vmxnet3 ネットワーク アダプタのリンク スピードの誤った表示	122

Windows XP Service Pack 3 仮想マシンで仮想パラレル ポートを介したデータ転送の失敗	122
プロダクト アクティベーション機能	122
インストール中の PAE メッセージ	123
ハイバネーション機能	123
チェック (デバッグ) ビルド	124
ESX Server 仮想マシンでの PAE の無効化	124
Windows を実行する ESX Server 仮想マシンでの VMware Tools のインストール後に再起動しなかった場合のパワーオン エラー	124
Windows 2000	125
32 ビット版	125
インストール上の注意点	130
インストールの手順	130
VMware Tools	130
既知の問題	131
Service Pack 3 の起動エラー	131
インストール中のハングアップ	131
ESX Server 仮想マシンでの PAE の無効化	131
Windows を実行する ESX Server 仮想マシンでの VMware Tools のインストール後に再起動しなかった場合のパワーオン エラー	132
Windows NT 4.0	133
32 ビット版	133
インストール上の注意点	134
インストールの手順	134
VMware Tools	135
Windows NT 4.0 ゲストに対する複数のディスクの設定	135
Windows NT のインストール後のネットワークの有効化	135
既知の問題	136
サービス パックを使用しないでインストールを行う場合のメモリ制限	136
ESX Server 仮想マシンでの PAE の無効化	136
Windows を実行する ESX Server 仮想マシンでの VMware Tools のインストール後に再起動しなかった場合のパワーオン エラー	136
Windows Me	137
32 ビット版	137
インストール上の注意点	137
インストールの手順	138
VMware Tools	138
既知の問題	138

USB 2.0 ドライバの未サポート	138
Windows 98	140
32 ビット版	140
インストール上の注意点	141
インストールの手順	141
VMware Tools	141
Windows 98 のインストール後のネットワークの有効化	142
既知の問題	142
実在しない COM ポート	142
USB 2.0 ドライバの未サポート	142
Windows 95	143
32 ビット版	143
インストール上の注意点	144
インストールの手順	144
VMware Tools	146
Windows 95 のインストール後のネットワークの有効化	146
既知の問題	147
ネットワークの動作不能	147
実在しない COM ポートの表示	147
USB 2.0 ドライバの未サポート	147
MS-DOS 6.22 および Windows 3.1x	149
16 ビット版 MS-DOS 6.22	149
32 ビット版 Windows 3.1x	149
32 ビット版 MS-DOS 6.22 および Windows 3.1x	149
インストール上の注意点	150
MS-DOS 6.22 のインストール上の注意点	150
Windows 3.1x のインストール上の注意	150
既知の問題	150
マウスに関する問題	150
VMware Tools 未対応	151
Asianux Server 3.0	152
32 ビット版	152
64 ビット版	153
インストール上の注意点	153
インストールの手順	154
VMware Tools	154
既知の問題	155

VMware Tools のインストール後における vSphere Client の [サマリ (Summary)] タブでの Asianux Server 3.0 Service Pack 1 の 32 ビット ゲストの誤った表示 155

TSC クロックソースを使用して Linux が稼動している SMP 仮想マシンでの応答の停止またはストール 155

適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更 156

ゲストのスクリーン セーバー 156

CentOS 5.0 157

32 ビット版 157

64 ビット版 158

インストール上の注意点 159

インストールの手順 159

VMware Tools 160

既知の問題 161

コピーした仮想マシンでネットワークを利用する際に必要な手動の変更 161

TSC クロックソースを使用して Linux が稼動している SMP 仮想マシンでの応答の停止またはストール 161

適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更 161

ゲストのスクリーン セーバー 162

異なるプロセッサへの移行 162

CentOS 4.0 163

32 ビット版 163

64 ビット版 163

インストール上の注意点 164

インストールの手順 165

VMware Tools 165

既知の問題 166

コピーした仮想マシンでネットワークを利用する際に必要な手動の変更 166

TSC クロックソースを使用して Linux が稼動している SMP 仮想マシンでの応答の停止またはストール 167

適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更 167

異なるプロセッサへの移行 167

Debian 5.0 168

32 ビット版 168

64 ビット版 168

インストール上の注意点 168

インストールの手順 169

VMware Tools 169

既知の問題	169
TSC クロックソースを使用して Linux が稼動している SMP 仮想マシンでの 応答の停止またはストール	169
適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更	170
異なるプロセッサへの移行	170
Debian 4.0	171
32 ビット版	171
64 ビット版	171
インストール上の注意点	171
インストールの手順	172
VMware Tools	172
既知の問題	173
Debian 4.0 の 64 ビット ゲストのインストール後に発生する X サーバの起動 エラー	173
TSC クロックソースを使用して Linux が稼動している SMP 仮想マシンでの 応答の停止またはストール	173
適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更	173
異なるプロセッサへの移行	174
IBM OS/2 Warp 4.5.2	175
32 ビット版	175
インストール上の注意点	175
インストールの手順	175
起動ディスクの作成	176
VMware Tools	176
既知の問題	177
32 ビット IBM OS/2 Warp 4.5.2 ゲストで機能しない VI Client を使用したマウ ス ホイールでのスクロール アップ操作不能	177
IBM OS/2 Warp ゲストへのディスクの追加	177
IBM OS/2 Warp 4.5.2 ゲストに CD 書き込みソフトウェアをインストールする と発生するシステムのクラッシュ	177
IBM OS/2 Warp 4.0	178
32 ビット版	178
インストール上の注意点	178
インストールの手順	178
起動ディスクの作成	179
VMware Tools	180
既知の問題	180
32 ビット IBM OS/2 Warp 4.0 ゲストにおける VI Client を使用したマウス ホ イールのスクロール アップ操作不能	180
IBM OS/2 Warp ゲストへのディスクの追加	180

OS/2 Warp 4.0 ゲストに CD 書き込みソフトウェアをインストールすると発生するシステムのクラッシュ	180
Mac OS X Server 10.5	181
32 ビット版	181
64 ビット版	181
インストール上の注意点	181
インストールの手順	181
VMware Tools	183
既知の問題	184
Mac OS X ディスク ユーティリティを使用したディスク パーティション サイズの拡張	184
Mandriva Corporate Desktop 4	185
32 ビット版	185
64 ビット版	185
インストール上の注意点	185
インストールの手順	186
VMware Tools	187
既知の問題	187
ゲスト OS の解像度の変更	187
ゲスト OS 内での DHCP アドレスの取得	188
適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更	188
ゲストのスクリーン セーバー	188
異なるプロセッサへの移行	188
Mandriva Corporate Server 4	190
32 ビット版	190
64 ビット版	190
インストール上の注意点	190
インストールの手順	191
VMware Tools	192
既知の問題	192
ゲスト OS の解像度の変更	192
ゲスト OS 内での DHCP アドレスの取得	193
適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更	193
ゲストのスクリーン セーバー	193
異なるプロセッサへの移行	193
Mandriva Linux 2008	195
32 ビット版	195
64 ビット版	195
インストール上の注意点	196

インストールの手順	196
VMware Tools	197
既知の問題	198
ゲスト OS の解像度の変更	198
ゲスト OS 内での DHCP アドレスの取得	198
TSC クロックソースを使用して Linux が稼動している SMP 仮想マシンでの 応答の停止またはストール	199
適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更	199
ゲストのスクリーンセーバー	199
異なるプロセッサへの移行	199
Mandriva Linux 2007	200
32 ビット版	200
64 ビット版	200
インストール上の注意点	201
インストールの手順	201
VMware Tools	202
既知の問題	203
ゲスト OS の解像度の変更	203
ゲスト OS 内での DHCP アドレスの取得	203
適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更	203
ゲストのスクリーンセーバー	203
異なるプロセッサへの移行	204
Mandriva Linux 2006	205
32 ビット版	205
64 ビット版	206
インストール上の注意点	206
インストールの手順	207
VMware Tools	208
既知の問題	208
ゲスト OS の解像度の変更	208
ゲスト OS 内での DHCP アドレスの取得	208
適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更	209
ゲストのスクリーンセーバー	209
異なるプロセッサへの移行	209
Mandrake Linux 10.1	211
32 ビット版	211
インストール上の注意点	212
インストールの手順	212
VMware Tools	213

既知の問題	214
ゲスト OS の解像度の変更	214
ゲスト OS 内での DHCP アドレスの取得	214
適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更	214
ゲストのスクリーン セーバー	214
異なるプロセッサへの移行	215
表示上の問題	215
Mandrake Linux 10	216
32 ビット版	216
インストール上の注意点	217
インストールの手順	217
VMware Tools	218
既知の問題	219
ゲスト OS の解像度の変更	219
ゲスト OS 内での DHCP アドレスの取得	219
適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更	219
ゲストのスクリーン セーバー	219
異なるプロセッサへの移行	220
Mandrake Linux 9.2	221
32 ビット版	221
インストール上の注意点	222
インストールの手順	222
VMware Tools	224
既知の問題	225
適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更	225
ゲストのスクリーン セーバー	225
異なるプロセッサへの移行	225
Mandrake Linux 9.1	227
32 ビット版	227
インストール上の注意点	227
インストールの手順	228
VMware Tools	228
既知の問題	230
適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更	230
ゲストのスクリーン セーバー	230
異なるプロセッサへの移行	230
Mandrake Linux 9.0	231
32 ビット版	231
インストール上の注意点	232

インストールの手順	232
VMware Tools	233
既知の問題	235
適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更	235
ゲストのスクリーンセーバー	235
異なるプロセッサへの移行	235
Mandrake Linux 8.2	236
32 ビット版	236
インストール上の注意点	236
インストールの手順	237
VMware Tools	238
既知の問題	239
適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更	239
ゲストのスクリーンセーバー	239
異なるプロセッサへの移行	240
Mandrake Linux 8.0 および 8.1	241
32 ビット版	241
インストール上の注意点	241
インストールの手順	242
VMware Tools	242
XFree86 へのシンボリックリンクの設定	243
既知の問題	244
Mandrake Linux 8.0 のインストールのハングアップ	244
Mandrake Linux 8.0 のシャットダウン	244
適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更	244
ゲストのスクリーンセーバー	244
異なるプロセッサへの移行	245
Novell Linux Desktop 9	246
32 ビット版	246
インストール上の注意点	247
インストールの手順	247
VMware Tools	248
既知の問題	249
コピーした仮想マシンでネットワークを利用する際に必要な変更	249
適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更	249
異なるプロセッサへの移行	249
Oracle Enterprise Linux 5	251
32 ビット版	251
64 ビット版	251

インストール上の注意点	252
インストールの手順	252
VMware Tools	253
既知の問題	254
コピーした仮想マシンでネットワークを利用する際に必要な手動の変更	254
適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更	254
異なるプロセッサへの移行	255
Red Hat Enterprise Linux 5	256
32 ビット版	256
64 ビット版	259
インストール上の注意点	263
インストールの手順	263
VMware Tools	264
既知の問題	265
SELinux の Enforcing モードがオンになっている一部の Linux ゲストでの VMware Tools のアンインストール時における読み取り専用のファイルシステム	265
インストール中の PAE メッセージ	265
コピーした仮想マシンでネットワークを利用する際に必要な手動の変更	265
TSC クロックソースを使用して Linux が稼動している SMP 仮想マシンでの応答の停止またはストール	266
適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更	266
異なるプロセッサへの移行	266
Red Hat Enterprise Linux 4	267
32 ビット版	267
64 ビット版	272
インストール上の注意点	276
インストールの手順	276
VMware Tools	277
既知の問題	278
インストール中の PAE メッセージ	278
ESX Server 仮想マシンでの PAE の無効化	279
コピーした仮想マシンでネットワークを利用する際に必要な手動の変更	279
適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更	279
ゲストのスクリーン セーバー	280
異なるプロセッサへの移行	280

Virtual Infrastructure Client で正しくオペレーティング システムの種類が表示されない Red Hat Enterprise Linux 4 Update 2 および Update 3 ゲスト	280
Red Hat Enterprise Linux 3	281
32 ビット版	281
64 ビット版	285
インストール上の注意点	288
インストールの手順	289
VMware Tools	291
既知の問題	291
インストール中の PAE メッセージ	291
ESX Server 仮想マシンでの PAE の無効化	292
適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更	292
ゲストのスクリーン セーバー	292
異なるプロセッサへの移行	293
4GB を超えるメモリが構成されているユニプロセッサ仮想マシンへのインストール	293
「汚染された (Tainted)」ドライバに関するメッセージ	293
画面色深度がデフォルトで 24 に設定されている場合に、仮想マシンで発生する X ウィンドウ システムの起動エラー	294
Red Hat Enterprise Linux 2.1	295
32 ビット版	295
インストール上の注意点	297
インストールの手順	298
VMware Tools	300
既知の問題	301
マウスの正常な操作不能	301
適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更	301
ゲストのスクリーン セーバー	301
異なるプロセッサへの移行	302
ESX Server 仮想マシンでの PAE の無効化	302
Red Hat Linux 9.0	303
32 ビット版	303
インストール上の注意点	304
インストールの手順	305
VMware Tools	306
既知の問題	307
インストーラに 2 枚目のインストール CD の読み取りを強制	307
適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更	308

ゲストのスクリーン セーバー	308
INIT エラーまたはパフォーマンスの低下	308
異なるプロセッサへの移行	309
Red Hat Linux 9.0 仮想マシンでの DHCP アドレスの取得	310
「汚染された (Tainted)」ドライバに関するメッセージ	310
ESX Server 仮想マシンでの PAE の無効化	311
Red Hat Linux 8.0	312
32 ビット版	312
インストール上の注意点	313
インストールの手順	313
VMware Tools	315
既知の問題	315
適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更	315
ゲストのスクリーン セーバー	316
異なるプロセッサへの移行	316
「汚染された (Tainted)」ドライバに関するメッセージ	316
ESX Server 仮想マシンでの PAE の無効化	316
Red Hat Linux 7.3	317
32 ビット版	317
インストール上の注意点	318
インストールの手順	318
VMware Tools	319
既知の問題	321
適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更	321
ゲストのスクリーン セーバー	321
異なるプロセッサへの移行	321
ESX Server 仮想マシンでの PAE の無効化	321
Red Hat Linux 7.2	322
32 ビット版	322
インストール上の注意点	323
インストールの手順	323
VMware Tools	325
既知の問題	326
インストール中のハング アップ	326
適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更	326
ゲストのスクリーン セーバー	326
異なるプロセッサへの移行	327
ESX Server 仮想マシンでの PAE の無効化	327
Red Hat Linux 7.1	328

32 ビット版	328
インストール上の注意点	329
インストールの手順	329
VMware Tools	331
既知の問題	331
インストール中のハング アップ	331
適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更	332
ゲストのスクリーン セーバー	332
異なるプロセッサへの移行	332
Red Hat Linux 7.0	333
32 ビット版	333
インストール上の注意点	334
インストールの手順	335
VMware Tools	336
既知の問題	336
適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更	336
ゲストのスクリーン セーバー	337
異なるプロセッサへの移行	337
Red Hat Linux 6.2	338
32 ビット版	338
インストール上の注意点	338
インストールの手順	339
VMware Tools	340
既知の問題	341
適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更	341
ゲストのスクリーン セーバー	341
異なるプロセッサへの移行	341
Sun Java Desktop System 2	342
32 ビット版	342
インストール上の注意点	343
インストールの手順	343
VMware Tools	343
既知の問題	343
ゲスト OS の解像度の変更	343
ゲスト OS のインストール時に発生する可能性のある仮想マシンのハング アップ	344
ゲストのスクリーン セーバー	344
SCO OpenServer 5.0	345
32 ビット版	345

インストール上の注意点	345
インストールの手順	347
Maintenance Pack 5 のインストール	348
VMware Tools	348
既知の問題	348
X ウィンドウ システムの機能停止	348
Open Server 5.0.6 および 5.0.7 MP5 でのマウスの機能停止	348
ネットワーク アダプタおよびプロトコルの構成	349
SCO UnixWare 7	350
32 ビット版	350
インストール上の注意点	350
インストールの手順	351
SCO UnixWare メンテナンス パックのインストール	351
SMP のインストールと構成	351
VMware Tools	351
既知の問題	352
ネットワークの構成時に発生する SCO UnixWare 7.1.1 のカーネルパニック	352
SUSE Linux Enterprise Desktop 11	353
32 ビット版	353
64 ビット版	353
インストール上の注意点	354
インストールの手順	354
VMware Tools	354
既知の問題	355
4 ビット カラーの使用不可	355
コピーした仮想マシンでネットワークを利用する際に必要な手動の変更	355
適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更	356
異なるプロセッサへの移行	356
SUSE Linux Enterprise Desktop 10	357
32 ビット版	357
64 ビット版	359
インストール上の注意点	360
インストールの手順	360
VMware Tools	361
既知の問題	362
4 ビット カラーの使用不可	362

コピーした仮想マシンでネットワークを利用する際に必要な手動の変更	362
適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更	362
異なるプロセッサへの移行	363
SUSE Linux Enterprise Server 11	364
32 ビット版	364
64 ビット版	364
インストール上の注意点	365
インストールの手順	365
VMware Tools	366
既知の問題	366
4 ビット カラーの使用不可	366
コピーした仮想マシンでネットワークを利用する際に必要な手動の変更	367
適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更	367
異なるプロセッサへの移行	367
SUSE Linux Enterprise Server 10	369
32 ビット版	369
64 ビット版	371
インストール上の注意点	374
インストールの手順	374
VMware Tools	375
既知の問題	375
4 ビット カラーの使用不可	375
コピーした仮想マシンでネットワークを利用する際に必要な変更	376
適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更	376
異なるプロセッサへの移行	376
SUSE Linux Enterprise Server 9	378
32 ビット版	378
64 ビット版	381
インストール上の注意点	384
インストールの手順	384
VMware Tools	385
既知の問題	386
Intel EM64T ハードウェア上での 64 ビットの SLES 9 SP 1 による自動初期化	386
4 ビット カラーの使用不可	386
コピーした仮想マシンでネットワークを利用する際に必要な手動の変更	386

適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更	386
ゲストのスクリーン セーバー	387
AMD Opteron プロセッサを使用するホストで SMP モード時に発生する SLES 9 SP3 ゲストのモニタ パニック	387
ESX Server 仮想マシンでの PAE の無効化	387
異なるプロセッサへの移行	387
SUSE Linux Enterprise Server 8	389
32 ビット版	389
インストール上の注意点	390
インストールの手順	391
VMware Tools	391
既知の問題	392
ESX Server 仮想マシンでの PAE の無効化	392
適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更	392
ゲストのスクリーン セーバー	392
異なるプロセッサへの移行	393
SUSE Linux Enterprise Server 7	394
32 ビット版	394
インストール上の注意点	395
インストールの手順	395
VMware Tools	396
既知の問題	396
適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更	396
ゲストのスクリーン セーバー	396
異なるプロセッサへの移行	397
Open SUSE Linux 11.1	398
32 ビット版	398
64 ビット版	398
インストール上の注意点	398
インストールの手順	399
VMware Tools	399
既知の問題	401
コピーした仮想マシンでネットワークを利用する際に必要な手動の変 更	401
TSC クロックソースを使用して Linux が稼動している SMP 仮想マシンでの 応答の停止またはストール	401
適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更	401
異なるプロセッサへの移行	402
Open SUSE Linux 10.3	403

32 ビット版	403
64 ビット版	403
インストール上の注意点	404
インストールの手順	404
VMware Tools	405
既知の問題	406
コピーした仮想マシンでネットワークを利用する際に必要な変更	406
TSC クロックソースを使用して Linux が稼動している SMP 仮想マシンでの 応答の停止またはストール	406
適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更	406
異なるプロセッサへの移行	407
Open SUSE Linux 10.2	408
32 ビット版	408
64 ビット版	408
インストール上の注意点	409
インストールの手順	409
VMware Tools	410
既知の問題	411
コピーした仮想マシンでネットワークを利用する際に必要な手動の変 更	411
TSC クロックソースを使用して Linux が稼動している SMP 仮想マシンでの 応答の停止またはストール	411
適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更	412
異なるプロセッサへの移行	412
SUSE Linux 10.1	413
32 ビット版	413
64 ビット版	414
インストール上の注意点	414
インストールの手順	415
VMware Tools	415
既知の問題	416
コピーした仮想マシンでネットワークを利用する際に必要な変更	416
適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更	417
異なるプロセッサへの移行	417
SUSE Linux 10	418
32 ビット版	418
64 ビット版	419
インストール上の注意点	419
インストールの手順	420

VMware Tools	420
既知の問題	421
コピーした仮想マシンでネットワークを利用する際に必要な変更	421
適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更	422
異なるプロセッサへの移行	422
SUSE Linux 9.3	423
32 ビット版	423
64 ビット版	424
インストール上の注意点	424
インストールの手順	425
VMware Tools	425
既知の問題	426
64 ビット ホストに SUSE Linux 9.3 をインストールする際のアーキテクチャ の選択	426
4 ビット カラーの使用不可	427
コピーした仮想マシンでネットワークを利用する際に必要な変更	427
ESX Server 仮想マシンでの PAE の無効化	427
適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更	427
ゲストのスクリーン セーバー	428
異なるプロセッサへの移行	428
SUSE Linux 9.2	429
32 ビット版	429
64 ビット版	430
インストール上の注意点	430
インストールの手順	431
VMware Tools	431
既知の問題	432
4 ビット カラーの使用不可	432
コピーした仮想マシンでネットワークを利用する際に必要な変更	432
ESX Server 仮想マシンでの PAE の無効化	433
適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更	433
ゲストのスクリーン セーバー	433
異なるプロセッサへの移行	433
SUSE Linux 9.1	434
32 ビット版	434
64 ビット版	435
インストール上の注意点	435
インストールの手順	436
VMware Tools	436

既知の問題	437
ゲスト OS のインストール時に発生する可能性のある仮想マシンのハングアップ	437
DVD からのインストールが中断してエラー メッセージが表示される	437
4 ビット カラーの使用不可	438
コピーした仮想マシンでネットワークを利用する際に必要な変更	438
ESX Server 仮想マシンでの PAE の無効化	438
適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更	438
ゲストのスクリーン セーバー	439
異なるプロセッサへの移行	439
SUSE Linux 9.0	440
32 ビット版	440
インストール上の注意点	441
インストールの手順	441
VMware Tools	442
X サーバを起動する前に	443
既知の問題	443
ゲスト OS のインストール時に発生する可能性のある仮想マシンのハングアップ	443
DVD からのインストールの中断によるエラー メッセージの表示	443
4 ビット カラーの使用不可	443
ESX Server 仮想マシンでの PAE の無効化	444
適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更	444
ゲストのスクリーン セーバー	444
異なるプロセッサへの移行	444
SUSE Linux 8.2	445
32 ビット版	445
インストール上の注意点	446
インストールの手順	446
VMware Tools	447
X サーバを起動する前に	448
既知の問題	448
ゲスト OS のインストール時に発生する可能性のある仮想マシンのハングアップ	448
DVD からのインストールの中断によるエラー メッセージの表示	448
ESX Server 仮想マシンでの PAE の無効化	449
適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更	449
ゲストのスクリーン セーバー	449
異なるプロセッサへの移行	449

SUSE Linux 8.1	451
32 ビット版	451
インストール上の注意点	452
インストールの手順	452
VMware Tools	453
X サーバを起動する前に	454
既知の問題	454
ゲスト OS のインストール時に発生する可能性のある仮想マシンのハングアップ	454
適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更	454
ゲストのスクリーン セーバー	454
異なるプロセッサへの移行	455
SUSE Linux 8.0	456
32 ビット版	456
インストール上の注意点	457
インストールの手順	457
VMware Tools	458
X サーバを起動する前に	459
既知の問題	459
適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更	459
ゲストのスクリーン セーバー	459
異なるプロセッサへの移行	459
SUSE Linux 7.3	461
32 ビット版	461
インストール上の注意点	462
インストールの手順	462
VMware Tools	463
既知の問題	463
適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更	463
ゲストのスクリーン セーバー	463
異なるプロセッサへの移行	464
Turbolinux 10 Server	465
32 ビット版	465
64 ビット版	465
インストール上の注意点	465
インストールの手順	466
VMware Tools	466
既知の問題	467
Turbolinux 10 Server のインストールの最後での黒い画面表示	467

適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更	467
ゲストのスクリーン セーバー	467
異なるプロセッサへの移行	467
X から VGA への切り替えに関する問題	468
Turbolinux 10 Desktop	469
32 ビット版	469
インストール上の注意点	469
インストールの手順	470
VMware Tools	470
既知の問題	471
適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更	471
ゲストのスクリーン セーバー	471
異なるプロセッサへの移行	471
Turbolinux Enterprise Server 8	472
32 ビット版	472
インストール上の注意点	473
インストールの手順	473
VMware Tools	474
X サーバを起動する前に	474
既知の問題	475
適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更	475
ゲストのスクリーン セーバー	475
異なるプロセッサへの移行	475
Turbolinux Workstation 8	476
32 ビット版	476
インストール上の注意点	476
インストールの手順	477
VMware Tools	477
X サーバを起動する前に	478
既知の問題	478
適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更	478
ゲストのスクリーン セーバー	478
異なるプロセッサへの移行	479
Turbolinux 7.0	480
32 ビット版	480
インストール上の注意点	481
インストールの手順	481
VMware Tools	482
既知の問題	483

適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更	483
ゲストのスクリーン セーバー	483
異なるプロセッサへの移行	483
Ubuntu 8.10	484
32 ビット版	484
64 ビット版	485
インストール上の注意点	485
インストールの手順	486
VMware Tools	486
既知の問題	488
32 ビットの Ubuntu ゲストに VMware Tools をインストールしたあとのネットワークアダプタ エラー メッセージ	488
TSC クロックソースを使用して Linux が稼動している SMP 仮想マシンでの応答の停止またはストール	488
適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更	488
異なるプロセッサへの移行	488
Ubuntu 8.04 LTS	489
32 ビット版	489
64 ビット版	491
インストール上の注意点	492
インストールの手順	492
VMware Tools	493
32 ビット版の Ubuntu ゲストに VMware Tools をインストールしたあとのネットワークアダプタ エラー メッセージ	495
TSC クロックソースを使用して Linux が稼動している SMP 仮想マシンでの応答の停止またはストール	495
適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更	495
異なるプロセッサへの移行	495
Ubuntu Linux 7.10	496
32 ビット版	496
64 ビット版	497
インストール上の注意点	497
インストールの手順	498
VMware Tools	498
既知の問題	500
32 ビット版の Ubuntu ゲストに VMware Tools をインストールしたあとのネットワークアダプタ エラー メッセージ	500
TSC クロックソースを使用して Linux が稼動している SMP 仮想マシンでの応答の停止またはストール	500
適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更	500

異なるプロセッサへの移行	500
Ubuntu Linux 7.04	501
32 ビット版	501
64 ビット版	502
インストール上の注意点	503
インストールの手順	503
VMware Tools	504
既知の問題	505
32 ビット版の Ubuntu ゲストに VMware Tools をインストールしたあとの ネットワーク アダプタ エラー メッセージ	505
TSC クロックソースを使用して Linux が稼動している SMP 仮想マシンでの 応答の停止またはストール	506
適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更	506
異なるプロセッサへの移行	506
Ubuntu Linux 6.10	507
32 ビット版	507
64 ビット版	508
インストール上の注意点	509
インストールの手順	509
VMware Tools	509
既知の問題	511
適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更	511
異なるプロセッサへの移行	511
Ubuntu Linux 6.06	512
32 ビット版	512
64 ビット版	513
インストール上の注意点	513
インストールの手順	514
VMware Tools	514
既知の問題	515
適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更	515
異なるプロセッサへの移行	516
Ubuntu Linux 5.10	517
32 ビット版	517
64 ビット版	518
インストール上の注意点	518
インストールの手順	519
VMware Tools	519
VMware Tools と 64 ビット版の Ubuntu Linux 5.10	520

既知の問題	520
適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更	520
異なるプロセッサへの移行	521
Ubuntu Linux 5.04	522
32 ビット版	522
64 ビット版	522
インストール上の注意点	523
インストールの手順	523
VMware Tools	524
既知の問題	525
適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更	525
異なるプロセッサへの移行	525
FreeBSD 7.1	526
32 ビット版	526
64 ビット版	526
インストール上の注意点	526
インストールの手順	527
VMware Tools	528
既知の問題	528
奇数の仮想 CPU での FreeBSD 7.1 ゲストの停止	528
4 つの仮想 CPU がある 64 ビット版の FreeBSD 7.1 ゲストでの長時間のインストールおよび再起動	528
大容量メモリを持つ FreeBSD 7.1 ゲストでのスプラッシュ画面表示後のストール	528
FreeBSD 7.1 ゲストの画面解像度の変更不可	528
FreeBSD 7.1 ゲストでのサスペンド電源イベントのカスタム スクリプトの実行不能	528
32 ビット版の FreeBSD 7.1 ゲストでの VI Client を使用したマウス ホイールでのスクロール アップ操作不能	529
64 ビット版の FreeBSD ゲスト起動時の /etc/vmware-tools/locations ファイルの増大	529
サウンド	529
FreeBSD 7.0	530
32 ビット版	530
64 ビット版	530
インストール上の注意点	531
インストールの手順	531
VMware Tools	531
既知の問題	531

64 ビット版の FreeBSD ゲストの起動時の /etc/vmware-tools/locations ファイルの増大	531
サウンド	531
ゲストのスクリーン セーバー	532
FreeBSD 6.4	533
32 ビット版	533
64 ビット版	533
インストール上の注意点	533
インストールの手順	534
VMware Tools	535
既知の問題	535
FreeBSD 6.4 ゲストでのサスペンド電源イベントのカスタム スクリプトの実行不能	535
32 ビットの FreeBSD 6.4 ゲストでの VI Client を使用したマウス ホイールでのスクロール アップ操作不能	535
64 ビット版の FreeBSD ゲスト起動時の /etc/vmware-tools/locations ファイルの増大	535
サウンド	535
FreeBSD 6.3	536
32 ビット版	536
64 ビット版	536
インストール上の注意点	536
インストールの手順	537
VMware Tools	538
既知の問題	538
FreeBSD 6.3 ゲストでのサスペンド電源イベントのカスタム スクリプトの実行不能	538
32 ビットの FreeBSD 6.3 ゲストでの VI Client を使用したマウス ホイールでのスクロール アップ操作不能	538
64 ビット版の FreeBSD ゲスト起動時の /etc/vmware-tools/locations ファイルの増大	538
サウンド	538
FreeBSD 6.2	539
32 ビット版	539
64 ビット版	539
インストール上の注意点	539
インストールの手順	540
VMware Tools	540
既知の問題	540

64 ビット版の FreeBSD ゲスト起動時の /etc/vmware-tools/locations ファイルの増大	540
サウンド	540
ゲストのスクリーン セーバー	540
FreeBSD 6.1	541
32 ビット版	541
64 ビット版	541
インストール上の注意点	541
インストールの手順	542
VMware Tools	542
既知の問題	542
64 ビットの FreeBSD ゲスト起動時の /etc/vmware-tools/locations ファイルの増大	542
サウンド	542
ゲストのスクリーン セーバー	542
FreeBSD 6.0	543
32 ビット版	543
64 ビット版	543
インストール上の注意点	544
インストールの手順	544
VMware Tools	544
既知の問題	544
64 ビット版の FreeBSD ゲスト起動時の /etc/vmware-tools/locations ファイルの増大	544
サウンド	544
ゲストのスクリーン セーバー	545
FreeBSD 5.5	546
32 ビット版	546
64 ビット版	546
インストール上の注意点	547
インストールの手順	547
VMware Tools	547
既知の問題	548
64 ビット版の FreeBSD ゲスト起動時の /etc/vmware-tools/locations ファイルの増大	548
サウンド	548
ゲストのスクリーン セーバー	548
FreeBSD 5.4	549
32 ビット版	549

64 ビット版	549
インストール上の注意点	550
インストールの手順	550
VMware Tools	550
既知の問題	551
64 ビット版の FreeBSD ゲスト起動時の /etc/vmware-tools/locations ファイルの増大	551
サウンド	551
ゲストのスクリーン セーバー	551
FreeBSD 5.3	552
32 ビット版	552
64 ビット版	552
インストール上の注意点	553
インストールの手順	553
VMware Tools	553
既知の問題	554
64 ビット版の FreeBSD ゲスト起動時の /etc/vmware-tools/locations ファイルの増大	554
サウンド	554
ゲストのスクリーン セーバー	554
FreeBSD 5.2	555
32 ビット版	555
インストール上の注意点	555
インストールの手順	556
VMware Tools	556
既知の問題	556
64 ビット版の FreeBSD ゲスト起動時の /etc/vmware-tools/locations ファイルの増大	556
サウンド	556
ゲストのスクリーン セーバー	556
FreeBSD 5.1	557
32 ビット版	557
インストール上の注意点	557
インストールの手順	558
VMware Tools	558
既知の問題	558
64 ビット版の FreeBSD ゲスト起動時の /etc/vmware-tools/locations ファイルの増大	558
サウンド	558

ゲストのスクリーン セーバー	558
FreeBSD 5.0	559
32 ビット版	559
インストール上の注意点	559
インストールの手順	560
VMware Tools	560
既知の問題	560
64 ビット版の FreeBSD ゲスト起動時の /etc/vmware-tools/locations ファイルの増大	560
サウンド	560
ゲストのスクリーン セーバー	560
FreeBSD 4.11	561
32 ビット版	561
インストール上の注意点	561
インストールの手順	562
VMware Tools	562
既知の問題	562
64 ビット版の FreeBSD ゲスト起動時の /etc/vmware-tools/locations ファイルの増大	562
サウンド	562
ゲストのスクリーン セーバー	562
FreeBSD 4.10	563
32 ビット版	563
インストール上の注意点	563
インストールの手順	564
VMware Tools	564
既知の問題	564
64 ビットの FreeBSD ゲスト起動時の /etc/vmware-tools/locations ファイルの増大	564
サウンド	564
ゲストのスクリーン セーバー	564
FreeBSD 4.9	565
32 ビット版	565
インストール上の注意点	565
インストールの手順	566
VMware Tools	566
既知の問題	566
64 ビット版の FreeBSD ゲスト起動時の /etc/vmware-tools/locations ファイルの増大	566

サウンド	566
ゲストのスクリーン セーバー	566
FreeBSD 4.4、4.5、4.6.2、4.8	567
32 ビット版	567
インストール上の注意点	568
インストールの手順	568
VMware Tools	568
既知の問題	569
64 ビット版の FreeBSD ゲスト起動時の /etc/vmware-tools/locations ファイルの増大	569
サウンド	569
ゲストのスクリーン セーバー	569
異なるプロセッサへの移行	570
FreeBSD 4.0、4.1、4.2、4.3	571
32 ビット版	571
インストール上の注意点	571
インストールの手順	572
VMware Tools	572
既知の問題	573
64 ビット版の FreeBSD ゲスト起動時の /etc/vmware-tools/locations ファイルの増大	573
FreeBSD の SCSI 仮想ディスク用のディスク ジオメトリの設定	573
サウンド	575
ゲストのスクリーン セーバー	575
異なるプロセッサへの移行	576
NetWare 6.5 Server	577
32 ビット版	577
インストール上の注意点	580
インストールの手順	581
NetWare 6.5 Server ゲスト OS 向け VMware Tools	583
既知の問題	583
再起動後のキーボードおよびマウス コントロールの回復	583
テキスト モードでの検索	583
非パススルーの RAW デバイス マッピングを使用するゲストでのイーサネット ドライバの選択後に発生する NetWare 6.5 Server SP3 および SP5 のインストールのハング アップ	583
以前インストールした Windows NT RDM ゲストと同じ LUN を使用する RDM 仮想マシンとしてインストールするとアクセス不可能になる Netware サーバのゲスト	584
NetWare 6.0 Server	585

- 32 ビット版 585
- インストール上の注意点 587
 - インストールの手順 587
 - NetWare 6.0 Server ゲスト OS 向け VMware Tools 589
- 既知の問題 590
 - VMware Tools の ISO ファイルの切断 590
 - はじめてのインストールでの中断 590
 - マウスのポインタの有効化 590
 - カーソル キーによるファイルシステムの検索不可 591
 - スタック ダンプが有効なメモリ制限を超えると発生する NetWare 6.0 Server SP5 のクラッシュ 591
 - 以前インストールした Windows NT RDM ゲストと同じ LUN を使用する RDM 仮想マシンとしてインストールするとアクセス不可能になる Netware サーバのゲスト 591
- NetWare 5.1 Server 592
 - 32 ビット版 592
 - インストール上の注意点 593
 - インストールの手順 594
 - NetWare 5.1 Server ゲスト OS 向け VMware Tools 596
 - 既知の問題 596
 - LSI Logic SCSI ドライバの更新 596
 - VMware Tools の ISO ファイルの切断 596
 - Pentium 4 ホスト上でのページ違反 597
 - CD-ROM をボリュームとしてマウント不可 597
 - 同一ネットワークでの複数の仮想ネットワーク アダプタの使用 597
 - マウスのポインタの有効化 598
 - カーソル キーによるファイルシステムの検索不可 598
 - 以前インストールした Windows NT RDM ゲストと同じ LUN を使用する RDM 仮想マシンとしてインストールするとアクセス不可能になる Netware サーバのゲスト 598
- NetWare 4.2 Server 600
 - 32 ビット版 600
 - インストール上の注意点 601
 - NetWare 仮想マシンの作成および構成 601
 - ゲスト OS のインストール 601
 - NetWare 4.2 Server ゲスト OS 向け VMware Tools 604
 - 既知の問題 604
 - 以前インストールした Windows NT RDM ゲストと同じ LUN を使用する RDM 仮想マシンとしてインストールするとアクセス不可能になる Netware サーバのゲスト 604

Solaris 10 オペレーティングシステム x86 プラットフォーム版	605
32 ビット版	605
64 ビット版	608
インストール上の注意点	610
Solaris 10 のメモリ要件	611
インストールの手順	611
VMware Tools (ESX Server 3.x のみ)	611
既知の問題	612
Solaris 10 および Solaris10 Update 1 上で通知される障害	612
ESX Server 3.x ネットワーク アダプタ ドライバでの 32 ビットおよび 64 ビット の Solaris 10 ゲストのサポート	612
64 ビット ホストでの Solaris 10 の 32 ビット モードでの使用	612
インストール後の小さすぎる画面表示	612
インストール中の PAE メッセージ	613
ハイパースレッドを使用するホスト上の、4 個の仮想プロセッサが構成さ れた ESX Server 3.x 仮想マシンで発生するパフォーマンスの問題	613
中断すると応答しなくなる Solaris 10 ゲスト	614
Virtual SMP を使用する Solaris 10 1/06 (Update 1) および Solaris 10 6/06 (Update 2) ゲストでパワーオン時に発生するハングアップ	614
Solaris 10 ゲストで CD-ROM としてマウントされた ISO イメージのイジェク ト不可	614
Intel Pentium M ベース システム Merom、Woodcrest、および Conroe で発 生する、64 ビット版の Solaris 10 1/06 (Update 1) および Solaris 10 6/06 (Update 2) のトリプル フォルトのエラー	614
Solaris 9 オペレーティングシステム x86 プラットフォーム版	616
32 ビット版	616
インストール上の注意点	617
インストールの手順	618
VMware Tools	619
Solaris 8 オペレーティングシステム x86 プラットフォーム版	620
32 ビット版	620
インストール上の注意点	621
インストールの手順	621
SCSI ドライバの追加	623
VMware Tools	623
インデックス	625

本書について

本『ゲスト OS インストールガイド』では、VMware 仮想マシンで使用するゲスト OS の選択方法およびインストール方法に関する情報を、VMware® ESX Server、VMware GSX Server、VMware Server、VMware ACE、VMware Workstation、および VMware Fusion™ のユーザーに提供します。

改訂履歴

本書は、各製品のリリース時に、あるいは必要に応じて改訂されます。改訂版には大小さまざまな変更が加えられます。

表 P-1. 改訂履歴

リビジョン	説明
20090520	<p>ESX 4.0 リリースを追加。</p> <p>新規サポート</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Windows 7 Home Premium、Professional、Enterprise、および Ultimate（32 ビットおよび 64 ビット）（試験的サポート）。 ■ Windows Server 2008 R2 Standard Edition、R2 Datacenter Edition、R2 Enterprise Edition、R2 Essential R2 Business Server Standard、R2 Essential Business Server Premium、R2 Small Business Server Standard、および R2 Small Business Server Premium（64 ビット）（試験的サポート）。 ■ Windows 98 および Windows 98 Second Edition（32 ビット）。 ■ Windows 95、Windows 95 Service Pack 1、およびこれらの OEM Service Release である OSR1、OSR2、OSR2.1、および OSR2.5（32 ビット）。 ■ Windows 3.1（32 ビット）。 ■ MS-DOS 6.22（16 ビット）。 ■ Asianux 3.0 Server および Asianux 3.0 Server Service Pack 1（32 ビットおよび 64 ビット）。 ■ CentOS 4.5、4.6、および 4.7（32 ビットおよび 64 ビット）。 ■ Debian 5.0（32 ビットおよび 64 ビット）。 ■ Debian 4.0 r3、r4、r5、および r6（32 ビットおよび 64 ビット）。 ■ IBM OS/2 Warp 4.5.2（32 ビット）。 ■ IBM OS/2 Warp 4.0（32 ビット）。 ■ SCO OpenServer 5.0.6 および 5.0.7 MP5（32 ビット）。 ■ SCO UnixWare 7.1.1 MP5 および 7.1.4 MP4（32 ビット）。 ■ FreeBSD 6.4（32 ビットおよび 64 ビット）。 ■ FreeBSD 6.3（32 ビットおよび 64 ビット）。 ■ FreeBSD 7.0（32 ビットおよび 64 ビット）。 ■ FreeBSD 7.1（32 ビットおよび 64 ビット）。 ■ Solaris 9 Update 1、Update 2、Update 3、Update 4、Update 5、Update 6、Update 7、および Update 8（32 ビット）（試験的サポート）。 ■ Solaris 8 06/00、10/00、01/01、04/01、07/01、10/01、および 02/02（32 ビット）（試験的サポート）。

表 P-1. 改訂履歴（続き）

リビジョン	説明
	<p>アップデート版のサポート</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Windows Preinstallation Environment 2.1（32 ビットおよび 64 ビット）。 ■ Windows Server 2008 Service Pack 2 の Web Server、Enterprise、Standard、および Datacenter（32 ビットおよび 64 ビット）。 ■ Windows Vista Service Pack 2 の Enterprise、Business、Home Basic、Home Premium、および Ultimate（32 ビットおよび 64 ビット）。 ■ Windows XP Embedded Service Pack 2（32 ビット）。 ■ Windows 2000 Professional Service Pack 3（32 ビット）。 ■ CentOS 5.0 および 5.1（32 ビットおよび 64 ビット）。 ■ Solaris 10 Update 7（32 ビットおよび 64 ビット）。 <p>その他のサポート</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 準仮想化 SCSI（pvscsi）ストレージアダプタのサポート：Windows Server 2008、Windows Server 2003、および Red Hat Enterprise Linux 5。 ■ vmxnet3 ネットワークアダプタのサポート：Windows Server 2008、Windows Server 2008 R2、Windows Server 2003、Windows Server 2003 R2、Windows 7、Windows Vista、Windows XP、Red Hat Enterprise Linux 5、CentOS 5 SUSE Linux Enterprise Server 11、SUSE Linux Enterprise Server 10、Ubuntu 7.04、Ubuntu 7.10、Ubuntu 8.04 LTS、Ubuntu 8.10、Asianux Server 3、Debian 5.0、Debian 4.0、Solaris 10 Update 4 から Update 7。 ■ ホットアドメモリ、ホットアドCPU、およびホットプラグデバイスのサポート。 ■ OSP（Operating System Specific Package）のサポート：CentOS 4.5、4.6、4.7、CentOS 5.0、5.1、5.2、5.3、および SUSE Linux Enterprise Server 11。 ■ VMI のサポート：SUSE Linux Enterprise Server 10、SUSE Linux Enterprise Server 11、および SUSE Linux Enterprise Desktop 10。 ■ IPv6 のサポート。
20090512	<ul style="list-style-type: none"> ■ ESX 3.5 Update 4 で稼動する Windows Vista Service Pack 2（32 ビットおよび 64 ビット）のサポート情報を追加。 ■ ESX 3.5 Update 4 で稼動する Windows Server 2008 Service Pack 2（32 ビットおよび 64 ビット）のサポート情報を追加。 ■ ESX 3.0.3 で稼動する Ubuntu 8.04.2 に対する PBM のサポート情報を追加。
20090410	<ul style="list-style-type: none"> ■ VMware Fusion 2.0.4 リリースを追加。 ■ CentOS 5.0 および CentOS 4.0 ゲスト OS のインストール手順を修正。

表 P-1. 改訂履歴（続き）

リビジョン	説明
20090406	<ul style="list-style-type: none"> ■ ESX 3.5 Update 4 および ESX 3.0.3 で稼動する CentOS 5.3（32 ビットおよび 64 ビット）のサポート情報を追加。 ■ ESX 3.5 Update 4 で稼動する Red Hat Enterprise Linux 5.3 に対する OSP のサポート情報を追加。 ■ ESX 3.5 Update 4 で稼動する Ubuntu 8.04.2 に対する OSP のサポート情報を明記。 ■ Workstation 6.5.2 で稼動する SUSE Linux Enterprise Desktop 11 および SUSE Linux Enterprise Server 11 のサポート情報を追加。
20090402	<ul style="list-style-type: none"> ■ VMware Fusion 2.0.3 リリースを追加。 ■ ACE 2.5.2 および VMware Server 2.0.1 リリース情報の一部を訂正。
20090331	<ul style="list-style-type: none"> ■ VMware Workstation 6.5.2 リリースを追加。このリリースでは、次の新規ゲスト OS をサポート。 <ul style="list-style-type: none"> ■ Windows Vista Service Pack 2（32 ビットおよび 64 ビット）。 ■ Asianux Server 3.0 Service Pack 1（32 ビットおよび 64 ビット）。 ■ OpenSUSE 11.1（32 ビットおよび 64 ビット）。 ■ Ubuntu 8.10 Desktop および Server（32 ビットおよび 64 ビット）。 ■ Ubuntu 8.04.2 Desktop および Server（32 ビットおよび 64 ビット）。 ■ Solaris 10 Update 6（32 ビットおよび 64 ビット）。 ■ VMware ACE 2.5.2 リリースを追加。 ■ VMware Server 2.0.1 リリースを追加。このリリースでは、次の新規ゲストをサポート。 <ul style="list-style-type: none"> ■ Windows Server 2008 Essential Business Server および Small Business Server、Service Pack 1（64 ビット）。 ■ Windows Vista Service Pack 1（32 ビットおよび 64 ビット）。 ■ Windows XP Service Pack 3（32 ビット）。 ■ Windows 2003 Small Business Server Standard および Premium、Service Pack 2（32 ビット）。 ■ Asianux Server 3.0 Service Pack 1（32 ビットおよび 64 ビット）。 ■ CentOS 5.2（32 ビットおよび 64 ビット）。 ■ CentOS 4.7（32 ビットおよび 64 ビット）。 ■ VMware Server 1.0.9 リリースを追加。 ■ Windows Server 2008、Windows Vista、Windows Server 2003、および Windows XP のオペレーティングシステムのインストール時に、ESX Server 3.5 Update 2 以前のバージョンで LSI Logic SCSI ドライバを使用すると発生するブルー スクリーンの問題の解決策について記述したナレッジベースの記事 1006224 への参照を追加。

表 P-1. 改訂履歴（続き）

リビジョン	説明
20090330	<ul style="list-style-type: none"> ■ ESX 3.5 Update 4 のサポート情報を追加。このリリースでは、次の新規ゲストをサポート。 <ul style="list-style-type: none"> ■ SUSE Linux Enterprise Desktop 11（32 ビットおよび 64 ビット）。 ■ SUSE Linux Enterprise Server 11（32 ビットおよび 64 ビット）。 ■ Ubuntu 8.10 Desktop Edition および Server Edition（32 ビットおよび 64 ビット）。 ■ Windows Preinstallation 2.0（32 ビットおよび 64 ビット）。 ■ ESX 3.5 Update 4 で稼動する Ubuntu 8.04.2 および Ubuntu 8.10 に対する新規 OSP のサポート情報を追加。 ■ ESX 3.5 Update 4 で稼動する Ubuntu 8.04.2 に対する事前構成済みカーネル モジュール（PBM）のサポート情報を追加。 ■ SUSE Linux Enterprise Desktop、SUSE Linux Enterprise Server、および Ubuntu ゲストでの VMware Tools 用カーネル モジュールの手動構築方法への参照を追加。 ■ Ubuntu 7.04 以降のバージョンに対して VMware Tools をインストールしたあとに表示されるエラー メッセージについての参照を追加。
20090213	<p>Fusion 2.0.2 リリースを追加。このリリースでは、次の新規ゲスト OS をサポート。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Ubuntu 8.10（32 ビットおよび 64 ビット）。 ■ Mac OS X Server 10.5.6（32 ビットおよび 64 ビット）。
20090212	<ul style="list-style-type: none"> ■ ESX 3.0.3 および 3.5 Update 3 で稼動する Ubuntu 8.04.2 JeOS（32 ビット）のサポート情報を追加。 ■ ESX 3.5 Update 2 で稼動する Red Hat Enterprise Linux 5.3（32 ビットおよび 64 ビット）のサポート情報を追加。 ■ VMware Tools の vmware-user プロセスに関する情報を追加。 ■ VMware 製品上で稼動する Linux ゲストへの VMware Tools のインストールに関する情報を修正。
20090126	<ul style="list-style-type: none"> ■ VMware Tools の全般的な情報を追加。 ■ ESX 3.0.3 および 3.5 Update 3 で稼動する Ubuntu 8.04.2 のサポート情報を追加。 ■ Ubuntu への VMware Tools のインストールに関する独特な手順を追加。 ■ Ubuntu 8.0.4 LTS および Ubuntu 7.10 に対する IPv6 の無効化手順を追加。
20090120	<ul style="list-style-type: none"> ■ ESX Server で稼動する Windows Server 2003（32 ビット）のサポート情報を明記。 ■ ESX 3.0.2、3.0.3、および 3.5 Update 3 で稼動する Red Hat Enterprise Linux 5.3 のサポート情報を追加。 ■ ESX 3.5 Update 3 で稼動する Red Hat Enterprise Linux 5.2 の既知の問題を追加。 ■ 一部の情報を訂正。

表 P-1. 改訂履歴（続き）

リビジョン	説明
20090112	<ul style="list-style-type: none"> ■ Red Hat Enterprise Linux 5、Red Hat Enterprise Linux 4、SUSE Linux Enterprise Server 10、SUSE Linux Enterprise Server 9、Ubuntu 8.04 LTS などのサポート対象のゲストに対する VMware Tools Operating System Specific Packages の情報を追加。 ■ SUSE Linux Enterprise Server 10、SUSE Linux Enterprise Server 9、および NetWare 6.5 Server で稼動する Novell Open Enterprise Server のサポート情報の書式を変更。 ■ MS-DOS のサポート対象バージョンを明記。 ■ インデックス エントリを修正。 ■ 一部で編集上の統合。
20081215	<ul style="list-style-type: none"> ■ VMware Tools Operating System Specific Packages のサポート情報について記載した新規セクションを追加。 ■ ESX Server 3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 Update 1、3.5 Update 2、3.5 Update 3 で稼動する Red Hat Enterprise Linux 5 のサポート情報を追加。 ■ Windows Server 2008 の Server Core 機能に関するサポート情報を追加。
20081211	<ul style="list-style-type: none"> ■ ヴィエムウェアが 2008 年 12 月 3 日にサポートを宣言した、ESX Server 2.5.5 で稼動する NetWare 6.5 Server Support Pack 8（32 ビット）のサポート情報を追加。 ■ 64 ビット ゲスト OS の稼働情報を修正。
20081203	<ul style="list-style-type: none"> ■ ESX Server 3.0.2、3.0.3、および 3.5 Update 3 で稼動する NetWare 6.5 Server Service Pack 8（32 ビット）のサポート情報を追加。 ■ ESX Server 3.0.2、3.0.3、および 3.5 Update 3 で稼動する Novell Open Enterprise Server 2 Support Pack 1、SUSE Linux Enterprise Server 10 Service Pack 2（32 ビットおよび 64 ビット）、および NetWare 6.5 Server Support Pack 8（32 ビット）のサポート情報を追加。
20081201	<ul style="list-style-type: none"> ■ VMware Workstation 6.5.1 および ACE 2.5.1 リリースを追加。Workstation および ACE で稼動する SUSE Linux Enterprise Server 10 Service Pack 1 のサポート情報を修正。Workstation および ACE で稼動する Open SUSE Linux 10.2 のサポート情報をすべて試験的なサポートに変更。 ■ NetWare 6.5 および SUSE Linux Enterprise Server 9、10 を実行する仮想マシンの作成に関する情報を追加。 ■ ESX Server 3.0.2、3.0.3、および 3.5 Update 3 で稼動する Solaris 10 Update 6（32 ビットおよび 64 ビット）のサポート情報を追加。 ■ クロックの動作が速いまたは遅い場合の問題について記載したナレッジベースの記事 1420 への参照を、Linux でのタイムキーピングのベスト プラクティスについて記載したナレッジベースの記事 1006427 への参照に置き換え。

表 P-1. 改訂履歴（続き）

リビジョン	説明
20081119	<ul style="list-style-type: none"> ■ ESX Server 3.5 Update 3 で稼動する Windows Essential Business Server 2008 (64 ビット) のサポート情報を追加。 ■ ESX Server で稼動する SUSE Linux Enterprise Desktop (32 ビットおよび 64 ビット) のサポート情報を追加。 ■ Windows NT 4.0 ゲストで VMware Tools オンライン ヘルプを表示するには Windows Internet Explorer 4.0 以降が必要であることを示す注記を追加。
20081114	<ul style="list-style-type: none"> ■ Fusion 2.0.1 リリースを追加。
20081112	<ul style="list-style-type: none"> ■ ESX Server 3.5 Update 3 で稼動する Windows Small Business Server 2008 (64 ビット) のサポート情報を追加。 ■ ESX Server 3.x で稼動する Solaris 10 1/06 (Update 1) および Solaris 10 6/06 (Update 2) に対する VMware Tools のサポートの制限に関する注記を削除。
20081106	<ul style="list-style-type: none"> ■ ESX Server 3.5 Update 3 リリースを追加。このリリースでは、Ubuntu 8.04.1 ゲスト OS を新規にサポート。 ■ VMware Workstation 5.5.9、ACE 1.0.8、および VMware Server 1.0.8 リリースを追加。
20081024	<ul style="list-style-type: none"> ■ Microsoft Update 932596 をインストールした Windows Server 2008 (64 ビット) の稼働に関する既知の問題を追加。 ■ VMware Workstation への Turbolinux 10 Server のインストールに関する既知の問題を追加。 ■ Windows Server 2003 および Windows XP で誤ったリンク速度を表示する vmxnet3 ネットワーク アダプタに関する既知の問題を追加。 ■ ESX Server で稼動する Windows Server 2003 で vmxnet アダプタを有効にするときの既知の問題を追加。 ■ TSC Clocksource を使用したときの Linux 仮想マシンの応答停止またはストールについての既知の問題を追加。影響を受けるゲストは、Asianux 3.0、CentOS 5.0、Mandriva Linux 2008、Red Hat Enterprise Linux 5、Open SUSE Linux 10.3、Open SUSE Linux 10.2、Ubuntu 8.04 LTS、Ubuntu Linux 7.10、および Ubuntu Linux 7.04。 ■ SUSE Linux Enterprise Server 9 および 10 のインストール手順を修正。テキストモードにするには、<F2> キーを押すのではなく、起動オプションに textmode=1 を入力するように修正。
20081008	<ul style="list-style-type: none"> ■ ESX Server 3.5、3.5 Update 1、および 3.5 Update 2 で稼動する Red Hat Enterprise Linux 5 Desktop with Workstation option (32 ビット および 64 ビット) のサポート情報を追加。 ■ SUSE Linux Enterprise Server 9、SUSE Linux Enterprise Server 10、Red Hat Enterprise Linux 4、Red Hat Enterprise Linux 5、および CentOS 5.0 での IPv6 の無効化手順を修正。 ■ 情報が当てはまらないため、Windows ゲスト OS の「ゲストのスクリーンセーバー」セクションを削除。

表 P-1. 改訂履歴 (続き)

リビジョン	説明
20080925	ESX Server 3.0.3 で稼動する CentOS 5.2 (32 ビット)、および ESX Server 3.0.3、3.5 U2 で稼動する CentOS 5.2 (64 ビット) のサポート情報を追加。
20080923	<p>サポート対象のゲスト OS に VMware Workstation 6.5 および ACE 2.5 リリースを追加。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Workstation 6.5 では次のゲスト OS を試験的にサポート。 Windows Preinstallation Environment (すべてのバージョン)、Windows Recovery Environment、Windows Server 2008 Standard、および Ubuntu LTS 8.04.1 ■ Workstation 6.5 で次のゲスト OS をフル サポート。 Asianux 3.0、CentOS 5.0 ~ 5.2、Mandriva Linux 2008、Oracle Enterprise Linux 5.0 ~ 5.2、Red Hat Enterprise Linux 4 Update 7 (Workstation、Enterprise Server、Advanced Server)、Red Hat Enterprise Linux 5.1 および 5.2 (Advanced Platform、Desktop、Server)、Solaris 10 オペレーティングシステム x86 プラットフォーム版 10 5/08 (Update 5)、SUSE Linux Enterprise Desktop 10 Support Pack 1 および Support Pack 2、SUSE Linux Enterprise Server 10 Support Pack 2、Ubuntu LTS 8.04 ■ ACE 2.5 で次のゲスト OS をフル サポート。 Red Hat Enterprise Linux 4 Update 7 (Workstation、Enterprise Server、Advanced Server)、Red Hat Enterprise Linux 5.1 および 5.2 (Advanced Platform、Desktop、Server)、Solaris 10 オペレーティングシステム x86 プラットフォーム版 10 5/08 (Update 5)、SUSE Linux Enterprise Desktop 10 Support Pack 1 および Support Pack 2、SUSE Linux Enterprise Server 10 Support Pack 2、Ubuntu LTS 8.04
20080923	<ul style="list-style-type: none"> ■ サポート対象ゲスト OS に VMware Server 2.0 リリースを追加。新しい VMware Server 2.0 では次のゲスト OS をサポート。 <ul style="list-style-type: none"> ■ Windows Server 2008 Enterprise および Standard、Windows Vista Business および Ultimate、Windows Server 2003 Web Edition、Standard Edition、Enterprise Edition の Service Pack 2、Windows XP Service Pack 2 ■ Mandriva Linux 2008 および Mandriva Linux 2007 ■ Open SUSE Linux 10.2 ■ Red Hat Enterprise Linux 5、Red Hat Enterprise Linux 5.1、および Red Hat Enterprise Linux 4 Update 5 ■ SUSE Linux Enterprise Server 10 Service Pack 1、および SUSE Linux Enterprise Server 9 Service Pack 4 ■ Ubuntu 8.04 LTS、Ubuntu Linux 7.10、Ubuntu Linux 7.04、および Ubuntu Linux 6.10 ■ Netware 6.5 Service Pack 6 ■ Solaris 10 オペレーティングシステム x86 プラットフォーム版 Update 3 および Update 4

表 P-1. 改訂履歴（続き）

リビジョン	説明
20080915	<ul style="list-style-type: none"> ■ サポート対象ゲスト OS に VMware Fusion 2.0 リリースを追加。次のゲスト OS を新規サポート。 <ul style="list-style-type: none"> ■ Mac OS X Server 10.5（試験的サポート） ■ Windows Server 2008 Enterprise および Standard（試験的サポート）、Windows Vista Home Basic および Home Premium の Service Pack 1、Windows Server 2003 Enterprise Edition Service Pack 2、Windows XP Professional および Home Edition の Service Pack 3 ■ Mandriva Linux 2008 ■ Red Hat Enterprise Linux 5.0 Advanced Server、Enterprise Server、および Workstation の Update 2、Red Hat Enterprise Linux 4.0 Update 6、Red Hat Enterprise Linux 3.0 Update 9 ■ SUSE Linux Enterprise Desktop 10 Service Pack 2、および SUSE Linux Enterprise Server 10 Service Pack 2 ■ Turbolinux Server 10 ■ Ubuntu 8.0.4、Ubuntu 8.04.1、Ubuntu Linux 7.10、および Ubuntu 7.04 ■ FreeBSD 7 ■ Netware 6.5 Support Pack 7 ■ Solaris 10 オペレーティングシステム x86 プラットフォーム版（Update 5）
20080908	ESX Server 3.5 Update 2 で稼動する CentOS 5.2（32 ビット）のサポート情報を追加。
20080828	<ul style="list-style-type: none"> ■ Workstation 5.5.8 および 6.0.5、ACE 1.0.7 および 2.0.5、および VMware Server 1.0.7 のサポート情報を追加。 ■ Ubuntu 8.04 LTS（32 ビットおよび 64 ビット） <ul style="list-style-type: none"> ■ ESX Server 3.0.3 で稼動する Ubuntu 8.04 LTS のサポート情報を追加。必要となるパッチ情報も記載。 ■ ESX Server 3.0.3 で稼動する Ubuntu 8.04.1 LTS のサポート情報を追加。必要となるパッチ情報も記載。 ■ Solaris 10 オペレーティングシステム x86 プラットフォーム版（32 ビットおよび 64 ビット） <ul style="list-style-type: none"> ■ ESX Server 3.0.3 で稼動する Solaris 10 Update 4 のサポートに必要なとなるパッチ情報を追加。 ■ ESX Server 3.0.1 で稼動する Solaris 10 Update 5 のサポート情報を追加。必要となるパッチ情報も記載。 ■ ESX Server 3.0.2 および 3.0.3 で稼動する Solaris 10 Update 5 のサポートに必要なとなるパッチ情報を追加。

表 P-1. 改訂履歴（続き）

リビジョン	説明
20080821	ESX Server 2.5.2、2.5.3、2.5.4、および 2.5.5 で稼動する Red Hat Enterprise Linux 4 Update 6 および Update 7（32 ビット）に対する BusLogic SCSI アダプタのサポート情報を追加。ESX Server 上で Windows XP Professional（32 ビット）の稼働に必要なサービスパックの 1 つとして、Service Pack 3 を追加。Workstation で稼動する Ubuntu Linux 7.10（64 ビット）に誤って追加された VMI のサポート情報を削除。
20080808	ESX Server 3.0.3 リリースを新しく追加。
20080801	Windows Server 2008（64 ビット）の既知の問題を文書化。ESX 3.0.1、3.0.2、および 3.5 Update 2 で稼動する Windows 2000 Professional Service Pack 4（32 ビット）のサポート情報を追加。ESX 2.5.4、2.5.5、3.0.1、3.0.2、3.5 Update 2 で稼動する Red Hat Enterprise Linux 4 Update 7（32 ビット）、および ESX 3.0.1、3.0.2、3.5 Update 2 で稼動する Red Hat Enterprise Linux 4 Update 7（64 ビット）のサポート情報を追加。
20080725	ESX Server 3.5 Update 2 リリースを新しく追加。このリリースでは、次のゲストを新規サポート。 <ul style="list-style-type: none"> ■ Windows Server 2008 Datacenter、Enterprise、Standard、および Windows Web Server 2008。 ■ SUSE Linux Enterprise Server 10 Service Pack 2（32 ビットでの VMI を含む）。 ■ Ubuntu 8.04 LTS Server、Desktop、および JeOS の各エディション。 ESX 3.0.1（Patch ESX-1005100 が必要）および ESX 3.0.2（Patch ESX-1005107 が必要）で稼動する SUSE Linux Enterprise Server 10 Service Pack 2 のサポート情報を追加。
20080714	ESX 2.5.4 および 2.5.5 で稼動する Windows XP Service Pack 3 のサポート情報を追加。ESX 3.0.2、3.5、および 3.5 U1 で稼動する Solaris 10 Update 5 のサポート情報を追加。
20080630	ESX Server 3.0.2 で稼動する Windows Server 2003 Datacenter Edition のサポート情報を追加。Red Hat Enterprise Linux 3 および 4 に対する Fusion のサポート情報を明記。Ubuntu Linux ゲストでの IPV6 の無効化手順を更新。
20080530	VMware Fusion 1.1.3 リリースを新しく追加。
20080529	VMware Workstation 5.5.7 および 6.0.4、ACE 1.0.6 および 2.0.4、VMware Server 1.0.6 リリースを新しく追加。Workstation 6.0.4、ACE 2.0.4、Visual Studio 統合型仮想デバッグ、および Eclipse 統合型仮想デバッグで稼動する Windows Vista Service Pack 1 のサポート情報を追加。Visual Studio および Eclipse 統合型仮想デバッグに対する Workstation のサポート情報を変更。
20080528	ESX Server 3.0.1、3.0.2、3.5、および 3.5 Update 1 で稼動する Windows XP Service Pack 3 のサポート情報を追加。Fusion で稼動する Windows 2000 のサポート情報を修正。ESX Server 3.0.2、3.5、および 3.5 Update 1 で稼動する Red Hat Enterprise Linux 5.2 のサポート情報を追加。

表 P-1. 改訂履歴（続き）

リビジョン	説明
20080508	ESX Server 3.0.1、3.0.2、3.5、および 3.5 U1 で稼動する SUSE Linux Enterprise Server 10 Service Pack 1 に対する Novell Open Enterprise Server 2 のサポート情報を追加。ESX Server 3.0.1、3.0.2、3.5、および 3.5 U1 で稼動する NetWare 6.5 Support Pack 7 に対する Novell Open Enterprise Server 2 のサポート情報を追加。ESX Server 3.5 U1 で稼動する NetWare 6.5 Support Pack 7 に関して欠落していたサポート情報を追加。ESX Server 3.5 で稼動する SUSE Linux Enterprise Server 9 Service Pack 4 に関して誤って記載されていたサポート情報を削除。
20080418	ESX Server 3.5 および 3.5 Update 1 で稼動する Windows Vista Service Pack 1 のサポート情報を追加。Windows Vista Service Pack 1 仮想マシンに VMware Tools をインストールしたあとの画面解像度の問題に関する注記を追加。
20080410	新しい ESX Server 3.5 Update 1 リリースに合わせて更新。Intel ホストで稼動する Ubuntu 7.10 64 ビット SMP ゲスト OS の動作に関する情報を追加。Red Hat Enterprise Linux 5 のインストール手順を修正。一部のゲストに対し、ESX Server の既存および新規サポートに関連する注記を修正。ESX Server 2.x および 3.x で稼動する Netware 6.5 Support Pack 7 のサポート情報を追加。ESX Server で稼動する Ubuntu 7.04 に Virtual SMP のサポート情報を追加。
20080314	新しい Workstation 5.5.6、ACE 1.0.5、および VMware Server 1.0.5 リリースに合わせて更新。新しい Workstation 6.0.3 および ACE 2.0.3 リリースに合わせて更新。ESX Server 3.0.2 で稼動する Red Hat Enterprise Linux 5.1 のサポート情報を追加。ESX Server で稼動する Red Hat Enterprise Linux 2.1 WS でのネットワークおよび SCSI アダプタの使用に関する情報を修正。また、さまざまな編集上の変更。
20080225	ESX Server 3.0.2 で稼動する SUSE Linux Enterprise Server 9 Service Pack 4 のサポートに必要な ESX-1002431 Patch を記載。Windows Vista に関連のない既知の問題を削除。
20080220	VMware ACE、VMware Server、GSX Server、および Workstation で稼動する Windows Vista に関して、誤って記載されていた試験的サポート情報を削除。64 ビット ホスト上に SUSE Linux 9.3 ゲストをインストールする場合の、32 ビットまたは 64 ビットのアーキテクチャの選択に関する既知の問題を追加。
20080124	新しい Fusion 1.1.1 リリースに合わせて更新。Ubuntu 7.0.4 のインストール手順に注記を追加。Red Hat Linux 9.0 のインストール手順を修正。
20071221	ESX Server で稼動する Red Hat Enterprise Linux 4 Update 6 のサポート情報を追加。ESX Server 3.0.1 で稼動する Solaris 10 8/07 (Update 4) の 9 月の月例パッチ要件が誤って記載されていたため削除。ESX Server 3.0 で稼動する Red Hat Enterprise Linux 3 (64 ビット) における Virtual SMP のサポート情報が誤って記載されていたため削除。
20071220	VMware ESX Server 3i バージョン 3.5 のサポートに関する記述を追加。ESX 3.0.1 および 3.0.2 で稼動する Red Hat Enterprise Linux 3 および Red Hat Enterprise Linux 4 アップデートに対するサポート情報を追加。ESX 2.5.4、2.5.5、3.0.1、および 3.0.2 で稼動する SUSE Linux Enterprise Server 9 Service Pack 4 のサポート情報を追加。
20071211	ESX Server 3.5 リリースを新しく追加。

表 P-1. 改訂履歴（続き）

リビジョン	説明
20071126	ESX Server 3.x での Solaris 10（32 ビットおよび 64 ビット）ゲスト向けネットワーク アダプタ ドライバのサポート情報を変更。
20071111	新しい Fusion 1.1 リリースに合わせて更新。オペレーティング システムのベンダーがサポートを終了したオペレーティング システムに関する記述を修正。ESX 3.0 で稼動する Solaris 10 6/06（Update 2）のサポート情報を追加。
20071105	Windows Server 2008 を実行する Workstation のネットワーク アダプタに関する不適切な情報を削除。ESX Server で稼動する SUSE Linux Enterprise Server 10 SP1 のサポート情報を訂正。
20071019	新しい Workstation 6.0.2 および ACE 2.0.2 リリースに合わせて更新。
20071015	ESX 3.0.1 および 3.0.2 で稼動する Solaris 10 8/07（Update 4）（32 ビットおよび 64 ビット）のサポート情報を追加。Windows Server 2008 64 ビット ゲストに必要なサウンド ドライバに関する情報を削除。VMware Workstation で稼動する Windows Server 2008 向けのネットワーク アダプタのサポート情報を修正。
20071009	ESX Server 3.0.2 で稼動する Ubuntu 7.04 Server および Desktop エディション（32 ビットおよび 64 ビット）のサポート情報を追加。ESX Server 3.0.1 および 3.0.2 で稼動する SUSE Linux Enterprise Server 10 Service Pack 1 のサポート情報を追加。VMware Workstation での Solaris 10 オペレーティングシステム x86 プラットフォーム版のサポート情報を修正。
20070919	VMware Workstation 6.0.1 および ACE 2.0.1 リリースを新しく追加。Workstation 5.5.5、ACE 1.0.4、および VMware Server 1.0.4 リリースを新しく追加。Workstation 上で稼動する Ubuntu 7.0.4 での準仮想化のサポート情報を追加。リビジョン履歴表のエントリ順を反転。Ubuntu Linux ゲスト OS に VMware Tools をインストールするときに IPv6 を無効にするためのファイル名およびディレクトリ名を修正。
20070906	表 1 内の不正なリンクを修正。Windows Vista に関連する既知の問題を追加。Red Hat Linux 4.5 のセクションを削除。Red Hat Linux 4 に Update 5 を追加。Red Hat Enterprise Linux 4 における Virtual SMP のサポート情報を訂正。Red Hat Enterprise Linux 3 に Update 9 を追加。Red Hat Enterprise Linux 2.1 に関連する既知の問題を追加。FreeBSD 6.1 のリリース番号を訂正。Ubuntu 5.04 のリリース番号を訂正。Solaris 10 に関連する既知の問題を追加。
20070806	サポート対象ゲスト OS に、Mac OSX 向けの新製品である VMware Fusion 1.0 を追加。
20070731	サポート対象ゲスト OS に VMware ESX Server 3.0.2 リリースを新しく追加。Red Hat Enterprise Linux 4.5 ゲスト OS のサポート情報をすべて記載。Red Hat Enterprise Linux 5 のサポート情報を明記。本ガイドには記載されていなかったが、以前からサポートされていた FreeBSD 5.5 のサポート情報を追加。また、一部の情報を訂正。

表 P-1. 改訂履歴（続き）

リビジョン	説明
20070530	サウンドを有効にして、GSX および VMware Server にサウンド アダプタを追加する手順を変更。X サーバが正常に動作するために必要なドライバが、Ubuntu Linux 5.10 の 64 ビット版では不足していることについて詳細を記載。RHEL 5.0 および 4.5 のインストール手順を修正。EM64T ハードウェアで稼動する 64 ビット Linux ゲストが、ED（Execute Disable）機能を要求する方法について詳細を記載。ESX Server で稼動する 64 ビット Windows 2003 Server のサポート情報を削除。ESX Server で稼動する Windows 2000 のサポート情報を明記。一部の情報を訂正および追加。
20070508	VMware Workstation 6.0 および ACE 2.0 リリースの新規サポート情報を記載。Visual Studio および Eclipse 統合型仮想デバッグの新規サポート情報を記載。ESX Server で稼動する Windows Server 2003 ゲスト OS（32 ビットまたは 64 ビット）Service Pack 2 の新規サポート情報を記載。 Windows 2003 および Windows Vista 向けマルチメディア オーディオ コントローラ ドライバのインストール方法を記載。Windows 95、98、および Me で、USB 2.0 ドライバがサポート対象外であることを追加。Mandrake 10.1 での表示上の問題を解決する手順について記載。また、一部の情報を更新および訂正。
20070327	ESX Server 2.5.3 および 2.5.4 で稼動する Solaris 10 Update 3（32 ビット）のサポート情報、および ESX Server 3.0 で稼動する Solaris 10 Update 3（64 ビット）のサポート情報を削除。Solaris 10 Update 6/06 の日付を変更。ベンダーがサポートを終了したオペレーティングシステムに関する記述を追加。
20070314	ESX 2.5.3、2.5.4、3.0、および 3.0.1 で稼動する NetWare 6.5 Support Pack 6 のサポート情報を更新。64 ビットのゲストを実行する、32 ビット Intel ホストの Intel VT のサポート情報を更新。Red Hat Enterprise Linux 4 の LSI Logic アダプタのサポート情報を追加。ESX 2.5.3、2.5.4、3.0、および 3.0.1 で稼動する Solaris 10 Update 3（32 ビット）のサポート情報を更新。また、ESX 3.0.1 で稼動する Solaris 10 Update 3（64 ビット）のサポート情報を更新。前書きで、「最新の更新情報」セクションを追加。
20070202	NetWare 6.5 Server での ESX Server 2.5.4 の Upgrade Patch 1 のサポートに関する情報を修正。一部の情報を編集上変更。
20070126	VMware ESX Server 2.x および 3.x の『システム互換性ガイド』に記載されていたデータを、比較、統合して『ゲスト OS インストールガイド』へ記載。
20070102	ESX Server 3.0 および ESX Server 3.0.1 で稼動する Red Hat Enterprise Linux 4 Update 3 および Update 4 に関する情報と SUSE Linux Enterprise Server 9 Service Pack 3 に関する情報を追加。
20061206	ESX Server 3.0.x での Windows Vista、Windows XP、Red Hat Enterprise Linux 4、および Red Hat Enterprise Linux 3 のサポート情報を更新。
20061129 ~ 20061130	ESX Server 3.0.1 および VMware Server 1.x での SUSE Linux Enterprise Server 9 のサポート情報を修正。
20061116	Workstation 5.5.3 に関する情報を追加。

表 P-1. 改訂履歴（続き）

リビジョン	説明
20061109	ESX Server 3.0.1 での SUSE Linux Enterprise Server 9（64 ビット）のサポート情報を追加。ESX Server での Windows Server 2003 SP1 における Microsoft Clustering Service のサポート情報を修正。
20061023	Workstation 4.5.3 に関する情報を追加。
20061005	ESX Server 2.5.4 に関する情報を追加。
20061004	一部の情報を変更。
20061002	ESX Server 3.0.1 に関する情報を追加。
20060816	VMware Server 1.0.1 メンテナンス リリースに関する情報を更新。
20060810	Workstation 5.5.2 に関する情報を追加。ESX Server 2.5.3 および ESX Server 2.1.3 パッチ リリースに関する情報を更新。
20060727	ESX Server 2.5.3 および ESX Server 2.1.3 パッチ リリースに関する情報を追加。
20060711	VMware Server 1.0 に関する情報を追加。
20060619 ~ 20060622	一部の情報を変更。
20060614	ESX Server 3.0 および VirtualCenter 2.0 に関する情報を追加。
20060502	ESX Server 2.5.3 に関する情報を追加。

対象読者

本書は、VMware 製品がサポートするオペレーティングシステムとそれらのインストール方法、さらに既知の問題について知りたい方を対象としています。

本書へのフィードバック

ドキュメントの向上にご協力ください。本書に関するコメントがございましたら、次の電子メールアドレスまでフィードバックをお寄せください。

docfeedback@vmware.com

テクニカル サポートおよびエデュケーション リソース

ここでは、お客様にご利用いただけるテクニカル サポート リソースを紹介します。本書やその他の文書の最新バージョンは、次の URL をご覧ください。

<http://www.vmware.com/jp/support/pubs>

オンライン サポートおよび電話によるサポート

テクニカル サポート リクエストの提出や、製品および契約情報の確認、製品の登録をオンラインで行うことができます。詳細は次の URL をご覧ください。

<http://www.vmware.com/jp/support>

該当するサポート契約を結んでいるお客様の場合、迅速な対応が必要な Severity 1 の問題に関しては電話でのサポートをご利用ください。詳細は次の URL をご覧ください。

http://www.vmware.com/jp/support/phone_support.html

サポート サービス

お客様のビジネス ニーズに適した各種サポートの詳細については、次の URL をご覧ください。

<http://www.vmware.com/jp/support/services>

ヴェイムウェア プロフェッショナル サービス

ヴェイムウェアの教育サービス コースでは、広範なハンズオン ラボやケース スタディをご紹介します。また、業務の際のリファレンスとしてお使いいただける資料も提供しています。トレーニングは、オンサイト、講義形式、およびライブ オンラインで受講できます。オンサイトのパイロット プログラムおよび実装のベスト プラクティスについては、ヴェイムウェア コンサルティング サービスがご使用の仮想環境の評価、計画、構築、および管理に役立つサービスを提供しています。教育コース、認定プログラム、およびコンサルティング サービスについては、次の URL をご覧ください。

<http://www.vmware.com/jp/services>

ゲスト OS の選択 およびインストール

ここでは、『ゲスト OS インストール ガイド』に新しく変更および追加された情報、サポート対象ゲストに関する情報、インストールおよびサポートに関する一般的な注意事項について説明します。特定のゲスト OS に関する説明だけでなく、一般的なガイドラインにも目を通してください。

- [最新の更新情報](#) (P.53)
- [ゲスト OS のサポート状況](#) (P.62)
- [VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)

最新の更新情報

ヴァイエルムウェアの Web サイト (<http://www.vmware.com/jp/support/pubs>) で、『ゲスト OS インストール ガイド』の最新版を確認してください。表紙にある日付を確認して、お手元のマニュアルが最新版であることをご確認ください。前回『ゲスト OS インストールガイド』を公開してから、変更または更新された箇所があります。

- ESX 4.0 リリースの追加
新規サポート
 - Windows 7 Home Premium、Professional、Enterprise、Ultimate (32 ビットおよび 64 ビット)。(試験的サポート)「[Windows 7](#) (P.81)」を参照してください。

- Windows Server 2008 R2 Standard Edition、R2 Datacenter Edition、R2 Enterprise Edition、R2 Essential R2 Business Server Standard、R2 Essential Business Server Premium、R2 Small Business Server Standard、R2 Small Business Server Premium（64 ビット）。(試験的サポート)「[Windows Server 2008](#) (P.88)」を参照してください。
- Windows 98 および Windows 98 Second Edition（32 ビット）。「[Windows 98](#) (P.140)」を参照してください。
- Windows 95、Windows 95 Service Pack 1、およびこれらの OEM Service Release である OSR1、OSR2、OSR2.1、OSR2.5（32 ビット）。「[Windows 95](#) (P.143)」を参照してください。
- Windows 3.1（32 ビット）。「[MS-DOS 6.22 および Windows 3.1x](#) (P.149)」を参照してください。
- MS-DOS 6.22（16 ビット）。「[MS-DOS 6.22 および Windows 3.1x](#) (P.149)」を参照してください。
- Asianux 3.0 Server および Asianux 3.0 Server Service Pack 1（32 ビットおよび 64 ビット）。「[Asianux Server 3.0](#) (P.152)」を参照してください。
- CentOS 4.5、4.6、および 4.7（32 ビットおよび 64 ビット）。「[CentOS 4.0](#) (P.163)」を参照してください。
- Debian 5.0（32 ビットおよび 64 ビット）。「[Debian 5.0](#) (P.168)」を参照してください。
- Debian 4.0 r3、r4、r5、および r6（32 ビットおよび 64 ビット）。「[Debian 4.0](#) (P.171)」を参照してください。
- IBM OS/2 Warp 4.5.2（32 ビット）。「[IBM OS/2 Warp 4.5.2](#) (P.175)」を参照してください。
- IBM OS/2 Warp 4.0（32 ビット）。「[IBM OS/2 Warp 4.0](#) (P.178)」を参照してください。
- SCO OpenServer 5.0.6 および 5.0.7 MP5（32 ビット）。「[SUSE Linux 10.1](#) (P.413)」を参照してください。
- SCO UnixWare 7.1.1 MP5 および 7.1.4 MP4（32 ビット）。「[SCO UnixWare 7](#) (P.350)」を参照してください。
- FreeBSD 6.4（32 ビットおよび 64 ビット）。「[FreeBSD 6.4](#) (P.533)」を参照してください。
- FreeBSD 6.3（32 ビットおよび 64 ビット）。「[FreeBSD 6.3](#) (P.536)」を参照してください。

- FreeBSD 7.0 (32 ビットおよび 64 ビット)。「[FreeBSD 7.0](#) (P.530)」を参照してください。
- FreeBSD 7.1 (32 ビットおよび 64 ビット)。「[FreeBSD 7.1](#) (P.526)」を参照してください。
- Solaris 9 Update 1、Update 2、Update 3、Update 4、Update 5、Update 6、Update 7、および Update 8 (32 ビット)。(試験的サポート)「[Solaris 9 オペレーティングシステム x86 プラットフォーム版](#) (P.616)」を参照してください。
- Solaris 8 06/00、10/00、01/01、04/01、07/01、10/01、および 02/02 (32 ビット) (試験的サポート)。「[Solaris 8 オペレーティングシステム x86 プラットフォーム版](#) (P.620)」を参照してください。

アップデート版のサポート

- Windows Preinstallation Environment 2.1 (32 ビットおよび 64 ビット)。「[Windows Preinstallation Environment](#) (P.83)」を参照してください。
- Windows Server 2008 Service Pack 2 の Web Server、Enterprise、Standard、および Datacenter (32 ビットおよび 64 ビット)。「[Windows Server 2008](#) (P.88)」を参照してください。
- Windows Vista Service Pack 2 の Enterprise、Business、Home Basic、Home Premium、および Ultimate (32 ビットおよび 64 ビット)。「[Windows Vista](#) (P.96)」を参照してください。
- Windows XP Embedded Service Pack 2 (32 ビット)。「[Windows XP](#) (P.116)」を参照してください。
- Windows 2000 Professional Service Pack 3 (32 ビット)。「[Windows 2000](#) (P.125)」を参照してください。
- CentOS 5.0 および 5.1 (32 ビットおよび 64 ビット)。「[CentOS 5.0](#) (P.157)」を参照してください。

その他のサポート

- Windows Server 2008、Windows Server 2003、および Red Hat Enterprise Linux 5 での準仮想化 SCSI (pvscsi) ストレージ アダプタのサポート。
- vmxnet3 ネットワーク アダプタのサポート：Windows Server 2008、Windows Server 2008 R2、Windows Server 2003、Windows Server 2003 R2、Windows 7、Windows Vista、Windows XP、Red Hat Enterprise Linux 5、CentOS 5 SUSE Linux Enterprise Server 11、SUSE Linux Enterprise Server 10、Ubuntu 7.04、Ubuntu 7.10、Ubuntu 8.04 LTS、Ubuntu 8.10、Asianux Server 3、Debian 5.0、Debian 4.0、Solaris 10 Update 4 から Update 7。
- ホット アド メモリ、ホット アド CPU、およびホット プラグ デバイスのサポート。
- CentOS 4.5、4.6、4.7、CentOS 5.0、5.1、5.2、5.3、および SUSE Linux Enterprise Server 11 の OSP (Operating System Specific Package) のサポート。
- SUSE Linux Enterprise Server 10、SUSE Linux Enterprise Server 11、および SUSE Linux Enterprise Desktop 10 での VMI のサポート。
- IPv6 のサポート。

サポート対象ゲスト OS

次の表に、各 VMware 製品と互換性のあるゲスト OS を示します。リンクをクリックすると、各ゲスト OS のインストールに関する情報が参照できます。

注意 VMware VirtualCenter または vCenter Server を使用してゲスト OS をインストールする場合は、その仮想マシンを実行する VMware 製品 (ESX Server または VMware Server) で該当するゲスト OS がサポートされていることを確認してください。

表 1-1. VMware 製品がサポートするゲスト OS

ゲスト OS	Workstation	VMware ACE	GSX Server	ESX Server	VMware Server	VMware Fusion
Windows 7 (P.81)				4.0		
Windows Preinstallation Environment (P.83)	6.5-6.5.2			3.5 U4-4.0		
Windows Recovery Environment (P.87)	6.5-6.5.2					
Windows Server 2008 (P.88)	6.0.1-6.5.2	2.0.1-2.5.2		3.5 U2-4.0	2.0-2.0.1	2.0-2.0.4

表 1-1. VMware 製品がサポートするゲスト OS (続き)

ゲスト OS	Workstation	VMware ACE	GSX Server	ESX Server	VMware Server	VMware Fusion
Windows Vista (P.96)	6.0-6.5.2	2.0-2.5.2		3.0-4.0	2.0-2.0.1	1.0-2.0.4
Windows Server 2003 (P.104)	4.0-6.5.2	1.0-2.5.2	3.0-3.2.1	2.0-4.0	1.0-2.0.1	1.0-2.0.4
Windows XP (P.116)	4.0-6.5.2	1.0-2.5.2	3.0-3.2.1	2.0-4.0	1.0-2.0.1	1.0-2.0.4
Windows 2000 (P.125)	4.0-6.5.2	1.0-2.5.2	3.0-3.2.1	2.0-4.0	1.0-2.0.1	1.0-2.0.4
Windows NT 4.0 (P.133)	4.0-6.5.2	1.0-2.5.2	3.0-3.2.1	2.0-4.0	1.0-1.0.9	1.0-2.0.4
Windows Me (P.137)	4.0-6.5.2	1.0-2.5.2	3.0-3.2.1		1.0-1.0.9	1.0-2.0.4
Windows 98 (P.140)	4.0-6.5.2	1.0-2.5.2	3.0-3.2.1	4.0	1.0-1.0.9	1.0-2.0.4
Windows 95 (P.143)	4.0-6.5.2	1.0-2.5.2	3.0-3.2.1	4.0	1.0-1.0.9	1.0-2.0.4
MS-DOS 6.22 および Windows 3.1x (P.149)	4.0-6.5.2	1.0-2.5.2	3.0-3.2.1	4.0	1.0-1.0.9	1.0-2.0.4
Asianux Server 3.0 (P.152)	6.0,3-6.5.2			4.0	2.0.1	
CentOS 4.0 (P.163)				4.0	2.0.1	
CentOS 5.0 (P.157)	6.5-6.5.2			3.0,3-4.0	2.0.1	
Debian 5.0 (P.168)				4.0		
Debian 4.0 (P.171)				4.0		
IBM OS/2 Warp 4.5.2 (P.175)				4.0		
IBM OS/2 Warp 4.5.2 (P.175)				4.0		
Mac OS X Server 10.5 (P.181)						2.0-2.0.4
Mandriva Corporate Desktop 4 (P.185)	6.0-6.5.2	2.0-2.5.2				
Mandriva Corporate Server 4 (P.190)	5.5,3-6.5.2	2.0-2.5.2				
Mandriva Linux 2008 (P.195)	6.5-6.5.2				2.0-2.0.1	2.0-2.0.4
Mandriva Linux 2007 (P.200)	5.5,3-6.5.2	2.0-2.5.2			2.0-2.0.1	1.0-2.0.4
Mandriva Linux 2006 (P.205)	5.5,2-6.5.2	2.0-2.5.2			1.0-2.0.1	1.0-2.0.4

表 1-1. VMware 製品がサポートするゲスト OS (続き)

ゲスト OS	Workstation	VMware ACE	GSX Server	ESX Server	VMware Server	VMware Fusion
Mandrake Linux 10.1 (P.211)	5.5-6.5.2	2.0-2.5.2	3.2-3.2.1		1.0-1.0.9	
Mandrake Linux 10 (P.216)	5.0-6.5.2	2.0-2.5.2	3.2-3.2.1		1.0-1.0.9	
Mandrake Linux 9.2 (P.221)	5.0-6.5.2	2.0-2.5.2	3.0-3.2.1		1.0-1.0.9	
Mandrake Linux 9.1 (P.227)			3.1-3.2.1			
Mandrake Linux 9.0 (P.231)	4.0-6.5.2	1.0-2.5.2	3.0-3.2.1		1.0-1.0.9	
Mandrake Linux 8.2 (P.236)	4.0-6.5.2	1.0-2.5.2	3.0-3.2.1		1.0-1.0.9	
Mandrake Linux 8.0 および 8.1 (P.241)			3.0-3.2.1			
Novell Linux Desktop 9 (P.246)	5.0-6.5.2	1.0-2.5.2			1.0-1.0.9	1.0-2.0.4
Oracle Enterprise Linux 5 (P.251)	6.5-6.5.2					
Red Hat Enterprise Linux 5 (P.256)	6.0-6.5.2	2.0-2.5.2		3.0.2-4.0	2.0-2.0.1	1.0-2.0.4
Red Hat Enterprise Linux 4 (P.267)	5.0-6.5.2	1.0.1-2.5.2	3.2-3.2.1	2.5.2-4.0	1.0-2.0.1	1.0-2.0.4
Red Hat Enterprise Linux 3 (P.281)	4.5-6.5.2	1.0-2.5.2	3.0.1-3.2.1	2.0.1-4.0	1.0-1.0.9	1.0-2.0.4
Red Hat Enterprise Linux 2.1 (P.295)	4.0-6.5.2	1.0-2.5.2	3.0-3.2.1	2.0-4.0	1.0-1.0.9	1.0-2.0.4
Red Hat Linux 9.0 (P.303)	4.0.1-6.5.2	1.0-2.5.2	3.0-3.2.1	2.0-2.5.5	1.0-1.0.9	1.0-2.0.4
Red Hat Linux 8.0 (P.312)	4.0-6.5.2	1.0-2.5.2	3.0-3.2.1	2.0-2.5.5	1.0-1.0.9	
Red Hat Linux 7.3 (P.317)	4.0-6.5.2	1.0-2.5.2	3.0-3.2.1	2.0-2.5.5	1.0-1.0.9	
Red Hat Linux 7.2 (P.322)	4.0-6.5.2	1.0-2.5.2	3.0-3.2.1	2.0-2.5.5	1.0-1.0.9	
Red Hat Linux 7.1 (P.328)	4.0-6.5.2	1.0-2.5.2	3.0-3.2.1		1.0-1.0.9	
Red Hat Linux 7.0 (P.333)	4.0-6.5.2	1.0-2.5.2	3.0-3.2.1		1.0-1.0.9	1.0-2.0.4
Red Hat Linux 6.2 (P.338)			3.0-3.2.1			
Sun Java Desktop System 2 (P.342)	5.0-6.5.2	2.0-2.5.2			1.0-1.0.9	
SUSE Linux 10.1 (P.413)				4.0		
SCO UnixWare 7 (P.350)				4.0		

表 1-1. VMware 製品がサポートするゲスト OS (続き)

ゲスト OS	Workstation	VMware ACE	GSX Server	ESX Server	VMware Server	VMware Fusion
SCO OpenServer 5.0 (P.345)	6.5.2			4.0		
SUSE Linux Enterprise Desktop 10 (P.357)	6.5-6.5.2	2.5-2.5.2		3.0.1-4.0		2.0-2.0.4
SUSE Linux Enterprise Server 11 (P.364)	6.5.2			4.0		
SUSE Linux Enterprise Server 10 (P.369)	5.5.2-6.5.2	2.0-2.5.2		3.0.1-4.0	1.0-2.0.1	1.0-2.0.4
SUSE Linux Enterprise Server 9 (P.378)	5.0-6.5.2	1.0.1-2.5.2	3.2-3.2.1	2.5-4.0	1.0-2.0.1	
SUSE Linux Enterprise Server 8 (P.389)	4.0-6.5.2	1.0-2.5.2	3.0-3.2.1	2.0-4.0	1.0-1.0.9	
SUSE Linux Enterprise Server 7 (P.394)	4.0-6.5.2	1.0-2.5.2	3.0-3.2.1		1.0-1.0.9	
Open SUSE Linux 11.1 (P.398)	6.5.2					
Open SUSE Linux 10.3 (P.403)	6.0.1-6.5.2	2.0.1-2.5.2				
Open SUSE Linux 10.2 (P.408)	6.0-6.5.2	2.0-2.5.2			2.0-2.0.1	
SUSE Linux 10.1 (P.413)	5.5.2-6.5.2	2.0-2.5.2			1.0-2.0.1	1.0-2.0.4
SUSE Linux 10 (P.418)	5.5-6.5.2	2.0-2.5.2			1.0-2.0.1	
SUSE Linux 9.3 (P.423)	5.5-6.5.2	2.0-2.5.2		2.5.2-2.5.5	1.0-2.0.1	1.0-2.0.4
SUSE Linux 9.2 (P.429)	5.0-6.5.2	1.0.1-2.5.2	3.2-3.2.1	2.5.1-2.5.5	1.0-2.0.1	
SUSE Linux 9.1 (P.434)	4.5.2-6.5.2	1.0-2.5.2	3.1-3.2.1	2.5-2.5.5	1.0-2.0.1	
SUSE Linux 9.0 (P.440)	4.5-6.5.2	1.0-2.5.2	3.0-3.2.1	2.1-2.5.5	1.0-2.0.1	
SUSE Linux 8.2 (P.445)	4.0.1-6.5.2	1.0-2.5.2	3.0-3.2.1	2.0-2.5.5	1.0-1.0.9	
SUSE Linux 8.1 (P.451)	4.0-6.5.2	1.0-2.5.2	3.0-3.2.1		1.0-1.0.9	
SUSE Linux 8.0 (P.456)	4.0-6.5.2	1.0-2.5.2	3.0-3.2.1		1.0-1.0.9	
SUSE Linux 7.3 (P.461)	4.0-6.5.2	1.0-2.5.2	3.0-3.2.1		1.0-1.0.9	
Turbolinux 10 Server (P.465)	6.0.3-6.5.2	2.0.1-2.5.2				2.0-2.0.4

表 1-1. VMware 製品がサポートするゲスト OS (続き)

ゲスト OS	Workstation	VMware ACE	GSX Server	ESX Server	VMware Server	VMware Fusion
Turbolinux 10 Desktop (P.469)	5.5-6.5.2	2.0-2.5.2			1.0-1.0.9	1.0-2.0.4
Turbolinux Enterprise Server 8 (P.472)	4.0-6.5.2	1.0-2.5.2	3.0-3.2.1		1.0-1.0.9	1.0-2.0.4
Turbolinux Workstation 8 (P.476)	4.0-6.5.2	1.0-2.5.2	3.0-3.2.1		1.0-1.0.9	
Turbolinux 7.0 (P.480)	4.0-6.5.2	1.0-2.5.2	3.0-3.2.1		1.0-1.0.9	
Ubuntu 8.10 (P.484)	6.5.2			3.5 U4-4.0		2.0.2-2.0.4
Ubuntu 8.04 LTS (P.489)	6.5-6.5.2	2.5-2.5.2		3.5 U2-4.0	2.0-2.0.1	2.0-2.0.4
Ubuntu Linux 7.10 (P.496)	6.0.2-6.5.2	2.5-2.5.2		3.5 U1-4.0	2.0-2.0.1	2.0-2.0.4
Ubuntu Linux 7.04 (P.501)	6.0.1-6.5.2	2.0.1-2.5.2		3.0.2-4.0	2.0-2.0.1	2.0-2.0.4
Ubuntu Linux 6.10 (P.507)	6.0-6.5.2	2.0-2.5.2			2.0-2.0.1	1.0-2.0.4
Ubuntu Linux 6.06 (P.512)	5.5.2-6.5.2	2.0-2.5.2			1.0-1.0.9	
Ubuntu Linux 5.10 (P.517)	5.5-6.5.2	2.0-2.5.2			1.0-1.0.9	1.0-2.0.4
Ubuntu Linux 5.04 (P.522)	5.5-6.5.2	2.0-2.5.2			1.0-1.0.9	
FreeBSD 7.1 (P.526)				4.0		
FreeBSD 7.0 (P.530)				4.0		2.0-2.0.4
FreeBSD 6.4 (P.533)				4.0		
FreeBSD 6.3 (P.536)				4.0		
FreeBSD 6.2 (P.539)	6.0.1-6.5.2	2.0.1-2.5.2				
FreeBSD 6.1 (P.541)	5.5.2-6.5.2	2.0-2.5.2				1.0-2.0.4
FreeBSD 6.0 (P.543)	5.5.2-6.5.2	2.0-2.5.2			1.0-1.0.9	
FreeBSD 5.5 (P.546)	5.5-6.5.2	2.0-2.5.2			1.0-1.0.9	1.0-2.0.4
FreeBSD 5.4 (P.549)	5.5-6.5.2	2.0-2.5.2			1.0-1.0.9	
FreeBSD 5.3 (P.552)	5.5-6.5.2	2.0-2.5.2			1.0-1.0.9	
FreeBSD 5.2 (P.555)	5.0-6.5.2	2.0-2.5.2	3.1-3.2.1		1.0-1.0.9	
FreeBSD 5.1 (P.557)	5.0-6.5.2	2.0-2.5.2	3.2-3.2.1		1.0-1.0.9	
FreeBSD 5.0 (P.559)	4.5-6.5.2	1.0-2.5.2	3.0-3.2.1		1.0-1.0.9	
FreeBSD 4.11 (P.561)				2.5.4-2.5.5		
FreeBSD 4.10 (P.563)				2.5-2.5.5		

表 1-1. VMware 製品がサポートするゲスト OS (続き)

ゲスト OS	Workstation	VMware ACE	GSX Server	ESX Server	VMware Server	VMware Fusion
FreeBSD 4.9 (P.565)			3.2-3.2.1	2.5		
FreeBSD 4.4、4.5、4.6.2、4.8 (P.567)	4.0-6.5.2	1.0-2.5.2	3.0-3.2.1		1.0-1.0.9	
FreeBSD 4.0、4.1、4.2、4.3 (P.571)	4.0-6.5.2	1.0-2.5.2	3.0-3.2.1		1.0-1.0.9	
NetWare 6.5 Server (P.577)	4.5-6.5.2	1.0-2.5.2	3.0-3.2.1	2.0.1-4.0	1.0-2.0.1	1.0-2.0.4
NetWare 6.0 Server (P.585)	4.0-6.5.2	1.0-2.5.2	3.0-3.2.1	2.0.1-4.0	1.0-1.0.9	
NetWare 5.1 Server (P.592)	4.0-6.5.2	1.0-2.5.2	3.0-3.2.1	2.0.1-4.0	1.0-1.0.9	
NetWare 4.2 Server (P.600)	5.5.2-6.5.2	2.0-2.5.2	3.0-3.2.1		1.0-1.0.9	
Solaris 10 オペレーティングシステム x86 プラットフォーム版 (P.605)	5.5.3-6.5.2	1.0-2.5.2	3.1-3.2.1	3.0-4.0	1.0-2.0.1	1.0-2.0.4
Solaris 9 オペレーティングシステム x86 プラットフォーム版 (P.616)	4.5.2-6.5.2	1.0-2.5.2	3.1-3.2.1	4.0	1.0-2.0.1	
Solaris 8 オペレーティングシステム x86 プラットフォーム版 (P.620)				4.0		

ゲスト OS のサポート状況

VMware® Workstation 3.x 以前、VMware GSX Server 2.x 以前、または VMware ESX Server 1.x 以前の VMware 製品を使用している場合、各製品がサポートするゲスト OS のインストールについては、製品に付属しているユーザー マニュアルを参照してください。

本ガイドは、Workstation 4.0 以降、VMware ACE 1.0 以降、GSX Server 3.0 以降、ESX Server 2.0 以降、VMware Server 1.0 以降、および VMware Fusion 1.0 以降の製品を対象としています。

各ゲスト OS のセクションで、そのゲスト OS を仮想マシンでサポートする VMware 製品をリスト表示しています。本ガイドに記載されていないオペレーティング システムは、本ガイドが対象とする VMware 製品ではサポートされていません。

VMware ESX Server 3i バージョン 3.5 のサポート

VMware ESX Server 3i バージョン 3.5 および VMware ESX Server 3.5 がサポートするゲスト OS は同じです。VMware ESX Server 3i バージョン 3.5 と VMware ESX Server 3.5 の両方がサポートするオペレーティング システムの一覧は、「[表 1-1 VMware 製品がサポートするゲスト OS](#) (P.56)」の ESX Server 列を参照してください。

オペレーティング システムのベンダーがサポートを終了したオペレーティング システム

本書に記載されているオペレーティング システムでそのベンダーがサポートを終了したものについては、VUE は、VMware 仮想マシン上でそれらのオペレーティング システムを稼動することによって発生する問題を解決するために、必要に応じて VMware 製品に対するサポートおよびバグ フィックスを提供することがあります。オペレーティング システム自体の問題の解決、サポートおよびバグ フィックスの提供に関しては、VUE は一切責任を負いません。

ESX 4.0 で前回サポートされていたゲスト

ESX 4.0 の次のメジャー リリースでは、次のゲストのサポートは廃止される予定です。

- Ubuntu 7.10
- Ubuntu 7.04

VMware Tools のサポート

VMware Tools は、ゲスト OS のパフォーマンスを向上し、仮想マシンの管理を強化するユーティリティ スイートです。VMware Tools がなくてもゲスト OS を実行できますが、重要な機能を使用できなかったり、利便性に欠けたりします。

VMware Tools には、次のコンポーネントがあります。

- VMware Tools サービス
- VMware デバイス ドライバ
- VMware ユーザー プロセス
- VMware Tools コントロール パネル

VMware Tools は次のフォーマットで提供されます。

- **ISO (tar および rpm ファイルを含む) :** 製品とともにパッケージ化されており、VMware 製品およびインストールされているゲスト OS に応じて、さまざまな方法でインストールされます。
- **OSP (Operating System Specific Package) :** コマンド ラインからダウンロード、およびインストールされます。

VMware Tools のインストールおよびアップグレードの詳細な説明は、ヴァイエムウェアのドキュメント Web サイトで、次のマニュアルのいずれかを参照してください。

- **VMware Workstation :** 『Workstation ユーザー マニュアル』
- **VMware ESX :** 『基本システム管理ガイド』
- **VMware Server :** 『VMware Server ユーザー ガイド』

VMware Tools の ISO ファイル フォーマット

VMware Tools では、Windows、Linux、Netware、Solaris、および FreeBSD のサポート対象ゲスト OS の各タイプに対して、異なる ISO ファイルが用意されています。ISO ファイルからの VMware Tools のインストールは、VMware 製品、VMware 製品のリリース、および仮想マシンにインストールされているゲスト OS のタイプに応じて異なります。

VMware Tools Operating System Specific Package

VMware Tools は、個別にダウンロード可能な、サポート対象の Linux オペレーティングシステムおよび VMware 製品のそれぞれに固有の軽量パッケージとして使用できます。OSP (Operating System Specific Package) は、オペレーティングシステムがサポートする固有のソフトウェア管理ツールを使用して、インストール、アップグレード、および管理が簡単になるように設計されています。OSP は、VMware Tools の既存のインストール方法に代わるものです。

VMware Tools OSP のダウンロード、インストール、およびアップグレードに関する詳細な説明については、次の『VMware Tools インストール ガイド Operating System Specific Package (VMware Tools Installation Guide Operating System Specific Packages)』を参照してください。

http://www.vmware.com/pdf/osp_install_guide.pdf

VMware Tools OSP がサポートする VMware 製品

- ESX 3.5 Update 2
- ESX 3.5 Update 3
- ESX 3.5 Update 4
- ESX 4.0

VMware Tools OSP がサポートするゲスト OS

- CentOS 4.5、4.6、および 4.7
- CentOS 5、5.1、5.2、および 5.3
- Red Hat Enterprise Linux 4、Update 1、Update 2、Update 3、Update 4、Update 5、Update 6、および Update 7
- Red Hat Enterprise Linux 5、Update 1、Update 2、および Update 3
- SUSE Linux Enterprise Server 9、Service Pack 1、Service Pack 2、Service Pack 3、および Service Pack 4
- SUSE Linux Enterprise Server 10、Service Pack 1、および Service Pack 2
- SUSE Linux Enterprise Server 11
- Ubuntu 8.04、8.04.1、および 8.04.2
- Ubuntu 8.10

Linux VMware Tools の ESXi 4.0 へのサポート

Linux 用の VMware Tools には、サポート対象外ゲスト用の PBM（事前作成済みのカーネル モジュール）や ESXi 4.0 の RPM パッケージは含まれていません。ESXi 4.0 ゲストへの VMware Tools のインストールには、tar パッケージのみ使用できます。

ヴァイエムウェアの Web サイトで、サポート対象の Linux ゲスト OS、およびサポート対象外の古い Linux ゲスト OS の VMware Tools を含む Linux Tools ISO イメージを代わりにダウンロードしてください。詳細は、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/1010714>) を参照してください。

または、VMware Tools とともに配布されている **install-vmware.pl** スクリプトを使用して、サポート対象外の Linux ゲストのカーネル モジュールをコンパイルできます。

Linux ゲスト OS への VMware Tools のインストール

Workstation 5.0 以降、VMware Server、および ESX Server 3.0 以降では、X の実行中に Linux ゲスト OS に VMware Tools をインストールできます。詳細については、該当する製品のドキュメントを参照してください。

ほかの VMware 製品では、テキスト モードの画面で VMware Tools をインストールする必要があります。X ウィンドウ セッションのターミナルからはインストールできません。

最近の Linux ディストリビューションには、起動時に X サーバが稼動するように構成されているものがありますが、X サーバを中断する簡単な方法は用意されていません。この場合、テキスト モードの別のワークスペースに切り替えて、そこから VMware Tools をインストールします。

仮想マシンで Linux のワークスペースを切り替えるには、<Ctrl> + <Alt> + スペースバーを押し、<Ctrl> キーと <Alt> キーは押したままスペースバーを放し、使用するワークスペースに対応するファンクション キー（たとえば <F2> キー）を押します。ホット キーの組合せを <Ctrl> + <Alt> キー以外のものに変更した場合は、その新しい組合せをスペースバーやファンクション キーと合わせて使用します。

一部の Linux ゲスト OS で VMware Tools の vmware-user プロセスが自動的に起動しない

UNIX ゲストで VMware Tools が使用する実行ファイルのひとつに、**vmware-user** があります。このプログラムは、特にゲストをウィンドウに合わせる機能および Unity モードを実装しています。通常、VMware Tools を構成して、デスクトップ環境からログアウトしたあとに再度ログインすると、**vmware-user** は自動的に起動します。

ただし、一部の環境では、**vmware-user** プロセスを手動で起動する必要があります。
 詳細および解決策については、ナレッジ ベースの記事
<http://kb.vmware.com/kb/1008071> を参照してください。

SMP のサポートと仮想ハードウェア

仮想ハードウェアのバージョンによって、異なるレベルの SMP をサポートしています。ESX のユーザー インターフェイスでは、特定のゲストに対するデフォルト レベルの SMP サポートを一覧表示しています。これは、ゲストのサポート レベルとハードウェア バージョンによるサポート レベルの組み合わせで決まります。

ハードウェア バージョンとゲスト SMP サポートの組み合わせで、SMP のサポート レベルが決まります。たとえば、ゲストで 4 way をサポートしていて、ハードウェア バージョンで最大 8 way をサポートしている場合、SMP サポートの最大レベルは 4 way になります。ゲストがサポートするレベルを超えることはありません。

ゲストの SMP の値が記載されていない場合、サポート レベルの値は 1 となります。

表 1-2 に、各ハードウェア リリースにおける仮想 SMP 構成の最大値を示しています。

表 1-2. 仮想ハードウェアのバージョンと SMP サポート

VMware 製品	ハードウェア バージョン 7	ハードウェア バージョン 6	ハードウェア バージョン 4	ハードウェア バージョン 3
ESX 4.x	8		4	2
ESX 3.5			4	2
ESX 2.x				2
Workstation 6.5.x	2	2 (試験的サポート)	2 (試験的サポート)	1
Workstation 6.0.x		2 (試験的サポート)	2 (試験的サポート)	1
Workstation 5.5.x			2 (試験的サポート)	1
Workstation 4.0.x				1
Server 2.0.x	2	2	2	1
Server 1.0.x			2	
Fusion 2.0.x	4	2		
Fusion 1.0.x		2		
ACE 2.x		2 (試験的サポート)		1
ACE 1.x				1

ホットアド CPU、ホットアド メモリ、およびホット プラグ デバイス

ESX 4.0 では、特定のゲストでホット アド CPU、ホット アド メモリ、およびホット プラグ デバイスをサポートしています。

表 1-3. Windows ゲスト OS でのホット アド サポート

ゲスト OS	ホット アド CPU	ホット アド メモリ	ホット プラグ デバイス
Windows Server 2003			
Datacenter Edition 32 ビット		○	○
Datacenter Edition 64 ビット		○	○
Enterprise Edition 32 ビット		○	○
Enterprise Edition 64 ビット		○	○
Standard Edition 32 ビット			○
Standard Edition 64 ビット			○
Web Edition 32 ビット		○	○
SBS Standard 32 ビット			○
Windows Server 2003 SP1			
Datacenter Edition 32 ビット		○	○
Datacenter Edition 64 ビット		○	○
Enterprise Edition 32 ビット		○	○
Enterprise Edition 64 ビット		○	○
Web Edition 32 ビット		○	○
Standard Edition 32 ビット			○
Standard Edition 64 ビット			○
Web Edition 32 ビット		○	○
SBS Standard 32 ビット			○
Windows Server 2003 R2			
Datacenter Edition 32 ビット		○	○
Datacenter Edition 64 ビット		○	○
Enterprise Edition 32 ビット		○	○
Enterprise Edition 64 ビット		○	○
Standard Edition 32 ビット			○

表 1-3. Windows ゲスト OS でのホット アド サポート (続き)

ゲスト OS	ホット アド CPU	ホット アド メモリ	ホット プラグ デバイス
Standard Edition 64 ビット			○
Windows Server 2003 SP2			
Datacenter Edition 32 ビット		○	○
Datacenter Edition 64 ビット		○	○
Enterprise Edition 32 ビット		○	○
Enterprise Edition 64 ビット		○	○
Standard Edition 32 ビット			○
Standard Edition 64 ビット			○
Web Edition 32 ビット		○	○
Windows Vista			
Business 32 ビット			○
Business 64 ビット			○
Enterprise 32 ビット			○
Enterprise 64 ビット			○
Home Basic 32 ビット			○
Home Basic 64 ビット			○
Home Premium 32 ビット			○
Home Premium 64 ビット			○
Ultimate 64 ビット			○
Ultimate 32 ビット			○
Windows Vista Service Pack 1			
Business 32 ビット			○
Business 64 ビット			○
Enterprise 32 ビット			○
Enterprise 64 ビット			○
Home Basic 32 ビット			○
Home Basic 64 ビット			○
Home Premium 32 ビット			○
Home Premium 64 ビット			○

表 1-3. Windows ゲスト OS でのホット アド サポート (続き)

ゲスト OS	ホット アド CPU	ホット アド メモリ	ホット プラグ デバイス
Ultimate 32 ビット			○
Ultimate 64 ビット			○
Windows Server 2008 SP1			
Standard Edition 32 ビット			○
Standard Edition 64 ビット			○
Datacenter Edition 32 ビット		○	○
Datacenter Edition 64 ビット		○	○
Enterprise Edition 32 ビット		○	○
Enterprise Edition 64 ビット		○	○
Standard EBS Standard 64 ビット			○
Standard EBS Premium 64 ビット			○
Standard SBS Standard 64 ビット			○
Standard SBS Premium 64 ビット			○
Web Server 32 ビット			○
Web Server 64 ビット			○
Storage Server 32 ビット			○
Storage Server 64 ビット			○
Windows Server 2008 SP2			
Standard Edition 32 ビット			○
Standard Edition 64 ビット			○
Datacenter Edition 32 ビット		○	○
Datacenter Edition 64 ビット		○	○
Enterprise Edition 32 ビット		○	○
Enterprise Edition 64 ビット		○	○
EBS Standard 64 ビット			○
EBS Premium 64 ビット			○
SBS Standard 64 ビット			○
SBS Premium 64 ビット			○
Web Server 32 ビット			○

表 1-3. Windows ゲスト OS でのホット アド サポート (続き)

ゲスト OS	ホット アド CPU	ホット アド メモリ	ホット プラグ デバイス
Web Server 64 ビット			○
Storage Server 32 ビット			○
Storage Server 64 ビット			○
Windows Server 2008 R2			
Standard Edition 64 ビット			○
Datacenter Edition 64 ビット	○	○	○
Enterprise Edition 64 ビット		○	○
Windows 7			
Enterprise 32 ビット		○	○
Enterprise 64 ビット	○	○	○
Ultimate 32 ビット		○	○
Ultimate 64 ビット	○	○	○

表 1-4. Red Hat Enterprise Linux 5 ゲスト OS のホット アド サポート

ゲスト OS	ホット アド CPU	ホット アド メモリ	ホット プラグ デバイス
Red Hat Enterprise Linux 5			
RHEL 5 Advanced Platform 32 ビット			○
RHEL 5 Advanced Platform 64 ビット		○	○
RHEL 5 Desktop 32 ビット			○
RHEL 5 Desktop 64 ビット		○	○
RHEL 5 Server 32 ビット			○
RHEL 5 Server 64 ビット		○	○
RHEL 5 Desktop with Workstation 32 ビット			○
RHEL 5 Desktop with Workstation 64 ビット		○	○
Red Hat Enterprise Linux 5.1			
RHEL 5 Advanced Platform 32 ビット			○
RHEL 5 Advanced Platform 64 ビット		○	○
RHEL 5 Desktop 32 ビット			○

表 1-4. Red Hat Enterprise Linux 5 ゲスト OS のホット アド サポート （続き）

ゲスト OS	ホット アド CPU	ホット アド メモリ	ホット プラグ デバイス
RHEL 5 Desktop 64 ビット		○	○
RHEL 5 Server 32 ビット			○
RHEL 5 Server 64 ビット		○	○
RHEL 5 Desktop with Workstation 32 ビット			○
RHEL 5 Desktop with Workstation 64 ビット		○	○
Red Hat Enterprise Linux 5.2			
RHEL 5 Advanced Platform 32 ビット			○
RHEL 5 Advanced Platform 64 ビット		○	○
RHEL 5 Desktop 32 ビット			○
RHEL 5 Desktop 64 ビット		○	○
RHEL 5 Server 32 ビット			○
RHEL 5 Server 64 ビット		○	○
RHEL 5 Desktop with Workstation 32 ビット			○
RHEL 5 Desktop with Workstation 64 ビット		○	○
Red Hat Enterprise Linux 5.3			
RHEL 5 Advanced Platform 32 ビット			○
RHEL 5 Advanced Platform 64 ビット		○	○
RHEL 5 Desktop 32 ビット			○
RHEL 5 Desktop 64 ビット		○	○
RHEL 5 Server 32 ビット			○
RHEL 5 Server 64 ビット		○	○
RHEL 5 Desktop with Workstation 32 ビット			○
RHEL 5 Desktop with Workstation 64 ビット		○	○
Red Hat Enterprise Linux 5.4			
RHEL 5 Advanced Platform 32 ビット			○
RHEL 5 Advanced Platform 64 ビット		○	○
RHEL 5 Desktop 32 ビット			○
RHEL 5 Desktop 64 ビット		○	○
RHEL 5 Server 32 ビット			○

表 1-4. Red Hat Enterprise Linux 5 ゲスト OS のホット アド サポート (続き)

ゲスト OS	ホット アド CPU	ホット アド メモリ	ホット プラグ デバイス
RHEL 5 Server 64 ビット		○	○
RHEL 5 Desktop with Workstation 32 ビット			○
RHEL 5 Desktop with Workstation 64 ビット		○	○

表 1-5. Red Hat Enterprise Linux 4 ゲスト OS のホット アド サポート

ゲスト OS	ホット アド CPU	ホット アド メモリ	ホット プラグ デバイス
Red Hat Enterprise Linux 4			
RHEL 4 Advanced Server 32 ビットおよび 64 ビット			○
RHEL 4 Enterprise Server 32 ビットおよび 64 ビット			○
RHEL 4 Workstation 32 ビットおよび 64 ビット			○
Red Hat Enterprise Linux 4 Update 1			
RHEL 4 Advanced Server U1 32 ビットおよ び 64 ビット			○
RHEL 4 Enterprise Server U1 32 ビットおよ び 64 ビット			○
RHEL 4 Workstation U1 32 ビットおよび 64 ビット			○
Red Hat Enterprise Linux 4 Update 2			
RHEL 4 Advanced Server U2 32 ビットおよ び 64 ビット			○
RHEL 4 Enterprise Server U2 32 ビットおよ び 64 ビット			○
RHEL 4 Workstation U2 32 ビットおよび 64 ビット			○
Red Hat Enterprise Linux 4 Update 3			
RHEL 4 Advanced Server U3 32 ビットおよ び 64 ビット			○
RHEL 4 Enterprise Server U3 32 ビットおよ び 64 ビット			○

表 1-5. Red Hat Enterprise Linux 4 ゲスト OS のホット アド サポート (続き)

ゲスト OS	ホットアド CPU	ホットアド メモリ	ホットプラグ デバイス
RHEL 4 Workstation U3 32 ビットおよび 64 ビット			○
Red Hat Enterprise Linux 4 Update 4			
RHEL 4 Advanced Server U4 32 ビットおよ び 64 ビット			○
RHEL 4 Enterprise Server U4 32 ビットおよ び 64 ビット			○
RHEL 4 Workstation U4 32 ビットおよび 64 ビット			○
Red Hat Enterprise Linux 4 Update 5			
RHEL 4 Advanced Server U5 32 ビットおよ び 64 ビット			○
RHEL 4 Enterprise Server U5 32 ビットおよ び 64 ビット			○
RHEL 4 Workstation U5 32 ビットおよび 64 ビット			○
Red Hat Enterprise Linux 4 Update 6			
RHEL 4 Advanced Server U6 32 ビットおよ び 64 ビット			○
RHEL 4 Enterprise Server U6 32 ビットおよ び 64 ビット			○
RHEL 4 Workstation U6 32 ビットおよび 64 ビット			○
RHEL 4 Desktop U6 32 ビットおよび 64 ビット			○
Red Hat Enterprise Linux 4 Update 7			
RHEL 4 Advanced Server U7 32 ビットおよ び 64 ビット			○
RHEL 4 Enterprise Server U7 32 ビットおよ び 64 ビット			○
RHEL 4 Workstation U7 32 ビットおよび 64 ビット			○
Red Hat Enterprise Linux 4 Update 8			

表 1-5. Red Hat Enterprise Linux 4 ゲスト OS のホット アド サポート (続き)

ゲスト OS	ホットアド CPU	ホットアド メモリ	ホットプラグ デバイス
RHEL 4 Advanced Server U8 32 ビットおよび 64 ビット			○
RHEL 4 Enterprise Server U8 32 ビットおよび 64 ビット			○
RHEL 4 Workstation U8 32 ビットおよび 64 ビット			○

表 1-6. SUSE Linux Enterprise Desktop ゲスト OS のホット アド サポート

ゲスト OS	ホットアド CPU	ホットアド メモリ	ホットプラグ デバイス
SLED 9			
SLED 9 SP4 32 ビットおよび 64 ビット			○
SLED 10			
SLED 10 32 ビットおよび 64 ビット			○
SLED 10 SP 1 32 ビットおよび 64 ビット			○
SLED 10 SP2 32 ビットおよび 64 ビット			○
SLED 10 SP3 32 ビットおよび 64 ビット			○
SLED 10 SP4 32 ビットおよび 64 ビット			○
SLED 11			
SLED 11 32 ビットおよび 64 ビット			○
SLED 11 SP 1 32 ビットおよび 64 ビット			○

表 1-7. SUSE Linux Enterprise Server ゲスト OS のホット アド サポート

ゲスト OS	ホットアド CPU	ホットアド メモリ	ホットプラグ デバイス
SLES 8			
SLES 8 32 ビットおよび 64 ビット			○
SLES 8 SP 1 32 ビットおよび 64 ビット			○
SLES 8 SP 2 32 ビットおよび 64 ビット			○
SLES 8 SP 3 32 ビットおよび 64 ビット			○
SLES 8 SP 4 32 ビットおよび 64 ビット			○

表 1-7. SUSE Linux Enterprise Server ゲスト OS のホット アド サポート (続き)

ゲスト OS	ホットアド CPU	ホットアド メモリ	ホットプラグ デバイス
SLES 9			
SLES 9 32 ビットおよび 64 ビット			○
SLES 9 SP 1 32 ビットおよび 64 ビット			○
SLES 9 SP 2 32 ビットおよび 64 ビット			○
SLES 9 SP 3 32 ビットおよび 64 ビット			○
SLES 9 SP 4 32 ビットおよび 64 ビット			○
SLES 10			
SLES 10 32 ビットおよび 64 ビット		○	○
SLES 10 SP 1 32 ビットおよび 64 ビット		○	○
SLES 10 SP 2 32 ビットおよび 64 ビット		○	○
SLES 10 SP 3 32 ビットおよび 64 ビット		○	○
SLES 10 SP 4 32 ビットおよび 64 ビット		○	○
SLES 11			
SLES 11 32 ビットおよび 64 ビット			○
SLES 11 SP 1 32 ビットおよび 64 ビット			○

表 1-8. Ubuntu ゲスト OS でのホット アド サポート

ゲスト OS	ホットアド CPU	ホットアド メモリ	ホットプラグ デバイス
Ubuntu 5.04 32 ビットおよび 64 ビット			○
Ubuntu 5.10 32 ビットおよび 64 ビット			○
Ubuntu 6.06			○
Ubuntu 6.06 Desktop 32 ビットおよび 64 ビット			○
Ubuntu 6.06 Server 32 ビットおよび 64 ビット			○
Ubuntu 6.10			
Ubuntu 6.10 Desktop 32 ビットおよび 64 ビット			○

表 1-8. Ubuntu ゲスト OS でのホット アド サポート（続き）

ゲスト OS	ホット アド CPU	ホット アド メモリ	ホット プラグ デバイス
Ubuntu 6.10 Server 32 ビットおよび 64 ビット			○
Ubuntu 7.04			
Ubuntu 7.04 Desktop 32 ビットおよび 64 ビット			○
Ubuntu 7.04 Server 32 ビットおよび 64 ビット			○
Ubuntu 7.10			
Ubuntu 7.10 Desktop 32 ビットおよび 64 ビット			○
Ubuntu 7.10 JeOS 32 ビット			○
Ubuntu 7.10 Server 32 ビットおよび 64 ビット			○
Ubuntu 8.04			
Ubuntu 8.04 Desktop 32 ビットおよび 64 ビット			○
Ubuntu 8.04 JeOS 32 ビット			○
Ubuntu 8.04 Server 32 ビットおよび 64 ビット			○
Ubuntu 8.04.1			
Ubuntu 8.04.1 Desktop 32 ビットおよび 64 ビット			○
Ubuntu 8.04.1 JeOS 32 ビット			○
Ubuntu 8.04.1 Server 32 ビットおよび 64 ビット			○
Ubuntu 8.04.2			
Ubuntu 8.04.2 Desktop 32 ビットおよび 64 ビット			○
Ubuntu 8.04.2 JeOS 32 ビット			○
Ubuntu 8.04.2 Server 32 ビットおよび 64 ビット			○
Ubuntu 8.10			

表 1-8. Ubuntu ゲスト OS でのホット アド サポート（続き）

ゲスト OS	ホット アド CPU	ホット アド メモリ	ホット プラグ デバイス
Ubuntu 8.10 Desktop 32 ビットおよび 64 ビット			○
Ubuntu 8.10 Server 32 ビットおよび 64 ビット			○

64 ビット ゲスト OS の使用

64 ビット ゲスト OS の要件

64 ビット ゲスト OS をインストールして実行するには、ホスト コンピュータの CPU が 64 ビットに対応していることに加え、64 ビットのゲストをサポートする VMware 製品を実行している必要があります。詳細は、ご使用の VMware 製品のドキュメントを参照してください。

64 ビット ゲスト OS の実行

64 ビットのゲストは、32 ビットまたは 64 ビット ホスト OS を実行しているサポート対象の 64 ビット ハードウェア（Intel または AMD）上で実行できます。

32 ビットまたは 64 ビット ホスト OS を実行している、VT をサポートする 64 ビット Intel ハードウェアでは、ホスト マシンの BIOS で VT を有効にする必要があります。

注意 64 ビット ゲスト OS のハードウェア要件およびファームウェア要件の詳細については、ナレッジベースの記事 1901（<http://kb.vmware.com/kb/1901>）を参照してください。

64 ビット Linux ゲストおよび ED（Execute Disable）機能

EM64T ハードウェアで 64 ビット Linux ゲスト OS を実行する場合は、ホストの BIOS で ED（Execute Disable）機能が有効になっていることを確認してください。これにより、Linux ゲスト OS が中断されることなく確実に実行されます。

VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン

ゲスト OS のインストールを開始する前に、仮想マシンを作成し、デバイスが正しく設定されていることを確認します。たとえば、ゲスト OS のインストール時にネットワーク ソフトウェアをインストールする場合、仮想マシンのイーサネット アダプタが構成され、有効になっている必要があります。

仮想マシンの構成に使用するツールまたはインターフェイスは、ご使用の VMware 製品によって異なります。

新しい仮想マシンは、空のハードディスクを持つ物理コンピュータと考えることができます。使用するには、まず仮想ディスクのパーティショニングおよびフォーマットを実行し、オペレーティングシステムをインストールする必要があります。オペレーティングシステムのインストール プログラムが、このパーティショニングおよびフォーマットを実行することがあります。

注意 ホストシステムで稼動しているスクリーン セーバーをすべてオフにしてから、ゲスト OS のインストールを開始してください。

ゲスト OS は、基本的には物理コンピュータにインストールする場合と同じ手順で仮想マシンにインストールします。

一般的なオペレーティングシステムをインストールする基本的な手順は次のとおりです。

- 1 Workstation、VMware ACE Manager（リリース 1.x のみ）、または VMware Virtual Machine Console を起動して、仮想マシンに接続します。
- 2 仮想マシンが使用する CD-ROM ドライブまたはフロッピー ドライブに、ゲスト OS のインストール CD-ROM またはフロッピー ディスクを挿入します。

ESX Server 2.x：該当する仮想マシンを実行しているサーバのドライブに、インストール CD-ROM またはフロッピー ディスクを挿入します。管理ワークステーションのドライブは使用できません。

GSX Server：ゲスト OS にフロッピー ディスクが必要な場合は、該当する仮想マシンを実行しているサーバのドライブにフロッピー ディスクを挿入します。管理ワークステーションのフロッピー ドライブは使用できません。

注意 物理 CD-ROM から起動する代わりに、インストール CD-ROM から ISO イメージ ファイルを作成することもできます。ISO イメージ ファイルは、ホスト マシン、またはホストマシンからアクセス可能なネットワーク ドライブに格納できます。VMware 製品の構成ツールを使用して、ISO イメージ ファイルに仮想マシンの CD ドライブを接続してから、仮想マシンをパワーオンします。

このように ISO イメージ ファイルを使用すると、複数の仮想マシンに同一のオペレーティング システムをインストールする必要がある場合は特に便利です。また、一部のホスト構成では、仮想マシンがインストール CD-ROM から起動できないという問題がありますが、これを回避する方法としても有効です。

注意 ネットワーク接続を利用して、PXE サーバからゲスト OS をインストールする場合は、そのオペレーティング システムのインストール メディアは必要ありません。次の手順のように仮想マシンをパワーオンすると、仮想マシンが PXE サーバを検出します。

- 3 [パワーオン (Power On)] ボタンをクリックして仮想マシンをパワーオンします。
- 4 オペレーティング システムのベンダーの指示に従います。

物理コンピュータと同様に、実行する仮想マシンごとにオペレーティング システムのライセンスがそれぞれ必要です。

注意 最近のコンピュータに付属されている Microsoft Windows OEM ディスクには、そのコンピュータ向けにカスタマイズされ、そのハードウェア システムに固有のデバイスドライバやその他のユーティリティが含まれているものもあります。このような Windows オペレーティング システムは、物理コンピュータにはインストールできる場合でも、仮想マシンにインストールできない可能性があります。この場合は、仮想マシンにインストールする別の Windows を購入する必要があります。

試験的な機能のサポート

一部の VMware 製品リリースでは、試験的な機能を含んでいる場合があります。これらの機能は、テストや実験に使用してください。本番環境でこれらの機能の使用は避けてください。Vuiemウェアでは、試験的な機能に問題が発生した場合のフィードバックを受け付けています。Vuiemウェアの Web サイト (<http://www.vmware.com/jp/support>) に通常どおりにアクセスして、サポート リクエストを送信してください。ただし、これらの機能に関するトラブルシューティング、および回避策またはバグ フィックスの提供には責任を負いません。

仮想マシンのメモリ設定

仮想マシンにメモリ設定を構成する際は、その仮想マシンで実行するゲスト OS のドキュメントを参考にしてください。VMware 製品のユーザー インターフェイスに必要なメモリ量の一般的なガイドラインが表示されますが、インターフェイスに表示される情報が、ご使用のオペレーティング システムのドキュメントと一致しない場合は、オペレーティング システムのドキュメントの情報を優先してください。

GSX Server および VMware Server のサウンド アダプタ

GSX Server または VMware Server の仮想マシンには、サウンド アダプタはデフォルトではインストールされません。サウンド アダプタを追加するには、オペレーティング システムのインストール後に、仮想マシンの設定エディタ（[仮想マシン（VM）]-[設定（Settings）]）を使用します。GSX Server または VMware Server にある仮想マシンのサウンドの設定については、対応するサーバのドキュメントを参照してください。

ゲスト OS の実行

ゲスト OS の実行とその機能の使用については、各オペレーティング システムのベンダーが提供するドキュメントを参照してください。

Windows 7

このセクションでは、Windows 7 オペレーティングシステムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について説明します。

32 ビット版

32 ビット版の Windows 7 は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware ESX Server**：試験的サポートのみ

Enterprise：ESX 4.0

Home Premium：ESX 4.0

Ultimate：ESX 4.0

Professional：ESX 4.0

その他のサポート

- SMP：ESX 4.0 で 2 way をサポート

- vmxnet3 ネットワーク アダプタ：すべての Windows 7 リリースをサポート

64 ビット版

64 ビット版の Windows 7 は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware ESX Server**：試験的サポートのみ

Enterprise：ESX 4.0

Home Premium：ESX 4.0

Ultimate：ESX 4.0

Professional：ESX 4.0

その他のサポート

- SMP：ESX 4.0 で 2 way をサポート

- vmxnet3 ネットワーク アダプタ：すべての Windows 7 リリースをサポート

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

Windows 7 Enterprise、Home Premium、Ultimate、または Professional は、Windows 7 の各ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールできます。ご使用の VMware 製品で PXE サーバがサポートされている場合は、PXE サーバからインストールすることもできます。

仮想マシンに Windows 7 をインストールする前に、次の要件について検討してください。

- 新規仮想マシンを作成し、構成する。
- 32 ビット ゲストの場合 1GB 以上の RAM、64 ビット ゲストの場合 2GB 以上の RAM が仮想マシンにあることを確認する。
- 32 ビット版の Windows 7 の場合、仮想マシンのハード ドライブは必ず 24GB 以上に設定する。
- 64 ビット版の Windows 7 の場合、仮想マシンのハード ドライブは必ず 32GB 以上に設定する。

ゲスト OS のインストール

- 1 CD-ROM ドライブに Windows 7 の CD または DVD を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、Windows 7 のインストールを開始します。
- 3 残りの手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

SVGA ドライバ

Windows 2007 では、VMware Tools に含まれる SVGA ドライバを使用しないでください。代わりに標準の VGA ドライバを使用してください。

VMware Tools とともにインストールされる SVGA ドライバを無効にするには

[VMware Tools のカスタム インストール (VMware Tools Custom Install)] を選択し、SVGA ドライバの選択を解除します。

または、VMware Tools をインストールしたあとで、[デバイス マネージャ (Device Manager)] から SVGA ドライバを削除します。

Windows Preinstallation Environment

このセクションでは、Windows Preinstallation Environment オペレーティングシステムに関するサポート状況について記述しています。

32 ビット版

32 ビット版の Windows Preinstallation Environment は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware Workstation** : 試験的サポートのみ

Windows Preinstallation Environment 1.0 : Workstation 6.5、6.5.1、6.5.2

Windows Preinstallation Environment 1.1 : Workstation 6.5、6.5.1、6.5.2

Windows Preinstallation Environment 1.2 : Workstation 6.5、6.5.1、6.5.2

Windows Preinstallation Environment 2004 (1.5) : Workstation 6.5、6.5.1、6.5.2

Windows Preinstallation Environment 2005 (1.6) : Workstation 6.5、6.5.1、6.5.2

Windows Preinstallation Environment 2.0 : Workstation 6.5、6.5.1、6.5.2

Windows Preinstallation Environment 2.1 : Workstation 6.5、6.5.1、6.5.2

- **VMware ESX Server**

Windows Preinstallation Environment 2.0 : ESX 3.5 U4、ESX 4.0

Windows Preinstallation Environment 2.1 : ESX 4.0

64 ビット版

64 ビット版の Windows Preinstallation Environment は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware Workstation** : 試験的サポートのみ

Windows Preinstallation Environment 1.0 : Workstation 6.5、6.5.1、6.5.2

Windows Preinstallation Environment 1.1 : Workstation 6.5、6.5.1、6.5.2

Windows Preinstallation Environment 1.2 : Workstation 6.5、6.5.1、6.5.2

Windows Preinstallation Environment 2004 (1.5) : Workstation 6.5、6.5.1、6.5.2

Windows Preinstallation Environment 2005 (1.6) : Workstation 6.5、6.5.1、6.5.2

Windows Preinstallation Environment 2.0 : Workstation 6.5、6.5.1、6.5.2

Windows Preinstallation Environment 2.1 : Workstation 6.5、6.5.1、6.5.2

■ VMware ESX Server

Windows Preinstallation Environment 2.0 : ESX 3.5 U4、 ESX 4.0

Windows Preinstallation Environment 2.1 : ESX 4.0

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

Windows Preinstallation 2.0 ゲストを作成する前に、次のことを行なってください。

- 新規仮想マシンを作成し、構成する。ゲスト OS の選択で、Windows Vista を選択します。Windows PE は選択できなくなります。

Windows Preinstallation 2.1 ゲストを作成する前に、次のことを行なってください。

- 新規仮想マシンを作成し、構成する。ゲスト OS の選択で、Windows Server 2008 を選択します。Windows PE は選択できなくなります。
- Windows Server 2008 カーネルから構築した Windows AIK 1.1 (WAIK1.1) ソフトウェアを、次の Microsoft 社の Web サイトからダウンロードします。

<http://www.microsoft.com/downloads/details.aspx?familyid=94BB6E34-D890-4932-81A5-5B50C657DE08&displaylang=en>

- Windows PE 2.1 ISO イメージを作成します。

Windows PE 2.1 ISO イメージを作成するには

- 1 Windows 2008 仮想マシンを作成して、WAIK 1.1 をインストールします。
- 2 [スタート]-[すべてのプログラム]-[Microsoft Windows AIK]-[Windows PE Tools コマンド プロンプト]を選択して、Windows PE Tools コマンド プロンプトを開きます。
- 3 次のいずれかのコマンドを入力して、x86 または amd64 マシンの Windows PE ビルド環境を **winpe-x86** フォルダに作成します。

プラットフォーム	コマンド
32 ビット	<code>copype x86 C:\Winpe-x86</code>
64 ビット	<code>copype amd64 C:\Winpe-amd64</code>

- 4 次のコマンドを入力して、Windows PE 2.1 の起動可能な ISO イメージを作成します。

```
oscdimg -n -h -bc:¥winpe-x86¥etfsboot.com c:¥winpe-x86¥iso
c:¥winpe-x86¥winpe-x86.iso
```

インストールの手順

- 1 Windows PE 2.1 の ISO イメージから、仮想マシンを起動します。
- 2 起動プロセスが完了したら、コマンド プロンプトが表示されます。

Windows PE を使用して仮想マシンを準備し、Windows オペレーティング システムをインストールします。

VMware Tools

Windows Preinstallation Environment をサポートする VMware Tools のバージョンはありません。

既知の問題

VMware Tools ドライバの使用

VMware Tools は Windows PE をサポートしていませんが、カスタマイズされた ISO を作成することで、vmxnet3 (enhanced)、vmxnet3、pvscsi などの特定の VMware Tools ドライバを利用できます。

- 1 仮想マシンに Windows 2008 をインストールして、WAIK 1.1 をインストールします。
- 2 [スタート]-[すべてのプログラム]-[Microsoft Windows AIK]-[Windows PE Tools コマンド プロンプト]をクリックして、Windows PE Tools コマンド プロンプトを開きます。
- 3 次のいずれかのコマンドを入力して、Windows PE ビルド環境を **WinPE** フォルダに作成します。

プラットフォーム	コマンド
32 ビット	<code>copype x86 C:¥winpe-x86</code>
64 ビット	<code>copype amd64 C:¥winpe-amd64</code>

- 4 Windows PE コマンド プロンプト (**c:¥winpe-x86**) から、次のコマンドを入力して **mount** フォルダに **winpe.wim** をマウントします。

```
imagex /mountrw winpe.wim 1 mount
```

- 5 Windows 2008 に VMware Tools をインストールし、**C:\Program Files\VMware\VMware Tools\Drivers\vmxnet、pvscsi、および vmxnet3** のフォルダにある全ファイルを、仮想マシンの **C:\Drivers** フォルダにコピーします。

- 6 Windows PE Tools コマンド プロンプトで次のコマンドを入力して、vmxnet、vmxnet3 (enhanced)、および pvscsi ドライバを **winpe.wim** にコピーします。

```
peimg /inf=c:\drivers\*.inf c:\winpe-x86\mount\window
```

- 7 次のコマンドを入力して、**winpe.wim** への変更を保存します。

```
imagex /unmount c:\winpe-x86\mount /commit
```

- 8 次のコマンドを入力して、ISO のカスタマイズされた **winpe.wim** を使用して **boot.wim** を上書きします。

```
xcopy c:\winpe-x86\winpe.wim c:\winpe-x86\iso\sources\boot.wim /y
```

- 9 次のコマンドを入力して、カスタム ISO イメージを作成します。

```
oscdimg -n -h -bc:\winpe-x86\etfsboot.com c:\winpe-x86\iso  
c:\winpe-x86\winpe-x86.iso
```

Windows Recovery Environment

このセクションでは、Windows Recovery Environment オペレーティングシステムに関するサポート状況について記述しています。

32 ビット版

32 ビット版の Windows Recovery Environment は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware Workstation** : 試験的サポートのみ

Windows Recovery Environment : Workstation 6.5、6.5.1、6.5.2

64 ビット版

64 ビット版の Windows Recovery Environment は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware Workstation** : 試験的サポートのみ

Windows Recovery Environment : Workstation 6.5、6.5.1、6.5.2

インストール上の注意点

一般的なインストール手順については、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」を必ず読んでください。

Windows Recovery Environment に固有の手順については、付属するオペレーティングシステムのマニュアルを参照してください。

Windows Server 2008

このセクションでは、Windows Server 2008 オペレーティングシステムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について説明します。

32 ビット版

32 ビット版の Windows Server 2008 は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware Workstation**

Datacenter : Workstation 6.5、6.5.1、6.5.2

Enterprise : Workstation 6.5、6.5.1、6.5.2

Standard : Workstation 6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

- **SMP** : Workstation 6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way をサポート

試験的なサポート

Standard : Workstation 6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5

- **VMware ACE** : 試験的サポートのみ

Windows Server 2008 : ACE 2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

- **VMware Server**

Enterprise : VMware Server 2.0、2.0.1

Standard : VMware Server 2.0、2.0.1

その他のサポート

- **SMP** : VMware Server 2.0、2.0.1 で 2 way をサポート

- **VMware ESX Server**

Datacenter : ESX 3.5 U2、ESX 3.5 U3、3.5 U4、4.0

Enterprise : ESX 3.5 U2、ESX 3.5 U3、3.5 U4、4.0

Standard : ESX 3.5 U2、ESX 3.5 U3、3.5 U4、4.0

Web Server 2008 : ESX 3.5 U2、ESX 3.5 U3、3.5 U4、4.0

アップデート版のサポート

- Service Pack 2
 - **Datacenter** : ESX 3.5 U4
 - **Enterprise** : ESX 3.5 U4
 - **Standard** : ESX 3.5 U4

その他のサポート

- **SMP** : ESX 3.5 U2、ESX 3.5 U3、3.5 U4、4.0 でフル サポート
- **vmxnet3 ネットワーク アダプタ** : Windows Server 2008 のすべてのリリースをサポート
- **pvscsi ストレージ アダプタ** : Windows Server 2008 のすべてのリリースをサポート

サポートでの考慮事項

- Windows 2008 Server の Standard、Datacenter、Enterprise Edition で使用可能な Server Core ロールは、ESX でサポートされています。VMware Tools で明確にサポートされているオペレーティング システムの一部を Server Core が無効にしないかぎり、VMware Tools は使用できます。Server Core の詳細については、MSDN (Microsoft Developer Network) の Web サイトを参照してください。

[http://msdn.microsoft.com/en-us/library/ms723891\(VS.85\).aspx](http://msdn.microsoft.com/en-us/library/ms723891(VS.85).aspx)

- **VMware Fusion** : 試験的サポートのみ

Enterprise : Fusion 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

Standard : Fusion 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

その他のサポート

- **SMP** : Fusion 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4 でフル サポート

64 ビット版

64 ビット版の Windows Server 2008 は、次の VMware 製品でサポートされています。

■ VMware Workstation

Datacenter : Workstation 6.5、6.5.1、6.5.2

Enterprise : Workstation 6.5、6.5.1、6.5.2

Standard : Workstation 6.5、6.5.1、6.5.2

Small Business Server : Workstation 6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

- **SMP** : Workstation 6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way をサポート

試験的なサポート

Standard : Workstation 6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5

■ VMware ACE : 試験的サポートのみ

Windows Server 2008 : ACE 2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

■ VMware Server

Enterprise : VMware Server 2.0、2.0.1

Standard : VMware Server 2.0、2.0.1

Small Business Server 2008 Service Pack 1 : VMware Server 2.0.1

Essential Business Server 2008 Service Pack 1 : VMware Server 2.0.1

アップデート版のサポート

■ Service Pack 1

- **Small Business Server 2008** : VMware Server 2.0.1

- **Essential Business Server 2008** : VMware Server 2.0.1

その他のサポート

- **SMP** : VMware Server 2.0、2.0.1 で 2 way をサポート

■ VMware ESX Server

Datacenter : ESX 3.5 U2、ESX 3.5 U3、3.5 U4、4.0

Enterprise : ESX 3.5 U2、ESX 3.5 U3、3.5 U4、4.0

Standard : ESX 3.5 U2、ESX 3.5 U3、3.5 U4、4.0

Web Server 2008 : ESX 3.5 U2、ESX 3.5 U3、3.5 U4、4.0

Small Business Server 2008 Standard : ESX 3.5 U3、3.5 U4、4.0

Small Business Server 2008 Premium : ESX 3.5 U3、3.5 U4、4.0

Essential Business Server 2008 Standard : ESX 3.5 U3、3.5 U4、4.0

Essential Business Server 2008 Premium : ESX 3.5 U3、3.5 U4、4.0

■ Service Pack 2

■ **Datacenter** : ESX 3.5 U4

■ **Enterprise** : ESX 3.5 U4

■ **Standard** : ESX 3.5 U4

その他のサポート

■ **SMP** : ESX 3.5 U2、ESX 3.5 U3、3.5 U4、4.0 でフル サポート

■ **pvscsi ストレージ アダプタ** : Windows Server 2008 のすべてのリリースをサポート

■ **vmxnet3 ネットワーク アダプタ** : Windows 2008 のすべてのリリースをサポート

サポートでの考慮事項

■ Windows 2008 Server の Standard、Datacenter、Enterprise Edition で使用可能な Server Core ロールは、ESX でサポートされています。VMware Tools で明確にサポートされているオペレーティング システムの一部を Server Core が無効にしないかぎり、VMware Tools は使用できます。Server Core の詳細については、MSDN (Microsoft Developer Network) の Web サイトを参照してください。

[http://msdn.microsoft.com/en-us/library/ms723891\(VS.85\).aspx](http://msdn.microsoft.com/en-us/library/ms723891(VS.85).aspx)

試験的なサポート

R2 Datacenter : ESX 4.0

R2 Enterprise : ESX 4.0

R2 Standard : ESX 4.0

R2 Small Business Server 2008 Standard : ESX 4.0

R2 Small Business Server 2008 Premium : ESX 4.0

R2 Essential Business Server 2008 Standard : ESX 4.0

R2 Essential Business Server 2008 Premium : ESX 4.0

その他のサポート

- **SMP** : 4.0 でフル サポート
 - **pvscsi ストレージ アダプタ** : Windows Server 2008 R2 のすべてのリリースをサポート
 - **vmxnet3 ネットワーク アダプタ** : Windows Server 2008 R2 のすべてのリリースをサポート
 - **VMware Fusion** : 試験的サポートのみ
 - Enterprise** : Fusion 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4
- その他のサポート
- **SMP** : Fusion 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4 でフル サポート

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

Windows Server 2008 は、Windows Server 2008 ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールできます。ご使用の VMware 製品で PXE サーバがサポートされている場合は、PXE サーバからインストールすることもできます。

仮想マシンに Windows Server 2008 をインストールする前に、次の要件を満たしてください。

- 新規仮想マシンを作成し、構成する。
- 仮想マシンには必ず 512MB 以上の RAM を使用する。ホスト コンピュータに 512MB 以上の RAM が存在しない場合、次のような設定ができません。

- 32 ビット Windows Server 2008 の場合、仮想マシンのハード ドライブは必ず 16GB 以上に設定する。
- 64 ビット Windows Server 2008 の場合、仮想マシンのハード ドライブは必ず 24GB 以上に設定する。

Windows Server 2008 をインストールする前に、次のサポートの問題について検討してください。

- 32 ビット Windows Server 2008 ゲストのインストール中にインターネット接続が利用できない場合は、マルチメディア オーディオ コントローラのドライバがインストールされません。Windows デバイス マネージャから、マルチメディア オーディオ コントローラのドライバが不足していることが通知されます。必要なドライバをインストールするには、インターネット接続を構成し、Windows Server 2008 仮想マシンで Windows Update を実行します。

ゲスト OS のインストール

- 1 CD-ROM ドライブに Windows Server 2008 CD を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、Windows Server 2008 のインストールを開始します。
- 3 残りの手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

既知の問題

LSI Logic Storport Driver 1.26.05 を使用してインストールされた Windows ゲストの起動中のクラッシュ

ESX 3.5 Update 2 以前のバージョン： LSI Logic Storport Driver 1.26.05 以降のバージョンを使用してこの Windows ゲストをインストールすると、ESX Server 3.5 Update 2 以前のバージョンで起動したときにブルー スクリーンが表示されてクラッシュします。詳細については、ナレッジ ベースの記事 1006224 (<http://kb.vmware.com/kb/1006224>) を参照してください。

Microsoft Update 932596 がインストールされた Windows Server 2008（64 ビット）の不規則な再起動

Windows Server 2008（64 ビット）を実行しているコンピュータに Microsoft Update 932596 をインストールすると、そのコンピュータは不規則に再起動し、STOP エラーが発生します。この STOP エラーは、0x0000001E、0x000000D1、またはこれ以外の場合もあります。詳細については、Microsoft 社のナレッジ ベースの記事 (<http://support.microsoft.com/kb/950772>) を参照してください。

Microsoft 社のナレッジ ベースの記事には、Hotfix Request ページへのリンクがあり、この問題を修正するダウンロード ファイルを探すことができます。

<http://support.microsoft.com/hotfix/KBHotfix.aspx?kbnum=950772&kbln=en-us>

注意 Windows Server 2008 固有のホットフィックスは、Microsoft 社の Hotfix Request ページには表示されていません。しかし、Windows Vista のホットフィックス（Windows Vista All（Global）x64 sp2 Fix232207）を使用して、Windows Server 2008 のこの問題を修正できます。

VMware Tools のコントロール パネルの表示

Windows Server 2008 ゲストで VMware Tools のコントロール パネルを表示するには、管理ユーザーでログインする必要があります。

一部の VMware 製品に VMware Tools をインストールしたときに表示される警告メッセージ

Windows Server 2008 は、今までとは異なる方法でドライバをインストールします。このため、ご使用の VMware 製品によっては、VMware Tools のインストール時に複数のプロセスで警告メッセージが表示されることがあります。場合によっては、これらの警告メッセージがフォアグラウンドでは表示されず、ドライバのインストール処理が停止してしまったように見えることがあります。この場合、<Alt> + <Tab> キーを押すと、警告メッセージをフォアグラウンドで表示できます。表示されるメッセージは、次の 2 種類です。

- ドライバに、Authenticode によるデジタル署名がないことを警告するメッセージ。このメッセージが表示された場合は、[今すぐインストール（Install Now）] をクリックして VMware Tools のインストールを続行します。
- ドライバパッケージに Windows Server 2008 との互換性がないことを警告するメッセージ。このメッセージが表示された場合は、[キャンセル（Cancel）] をクリックして VMware Tools のインストールを続行します。

VMware Tools インストーラの完了前にオペレーティング システムを再起動するように促すメッセージが表示される場合もあります。この場合は、ゲスト OS を再起動しないでください。[インストール ウィザードの完了 (Installation Wizard Completed)] 画面が表示されるまで待ってから、[終了 (Finish)] をクリックします。プロンプトが表示されたら、ゲスト OS を再起動します。

Windows Vista

このセクションでは、Windows Vista オペレーティングシステムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について説明します。

32 ビット版

32 ビット版の Windows Vista は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware Workstation**

Enterprise : Workstation 6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

Business : Workstation 6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

Home Basic : Workstation 6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

Home Premium : Workstation 6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

Ultimate : Workstation 6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

アップデート版のサポート

- **Service Pack 1** : Workstation 6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

- **Service Pack 2** : Workstation 6.5.2

その他のサポート

- **SMP** : Workstation 6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way を試験的にサポート

- **Enterprise、Business、Ultimate での Visual Studio 統合型仮想デバッガのサポート** : Workstation 6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2。

Service Pack 1 : Workstation 6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

- **Enterprise、Business、Ultimate での Eclipse 統合型仮想デバッガのサポート** : Workstation 6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2。

Service Pack 1 : Workstation 6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

■ VMware ACE

Enterprise : ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

Business : ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

Home Basic : ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

Home Premium : ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

Ultimate : ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

アップデート版のサポート

■ **Service Pack 1** : ACE 2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

■ VMware Server

Business : VMware Server 2.0、2.0.1

Ultimate : VMware Server 2.0、2.0.1

アップデート版のサポート

■ **Service Pack 1** : VMware Server 2.0.1

その他のサポート

■ **SMP** : VMware Server 2.0、2.0.1 で 2 way をサポート

■ VMware ESX Server

Enterprise : ESX 3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

Business : ESX 3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

Home Basic : ESX 3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

Home Premium : ESX 3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

Ultimate : ESX 3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

アップデート版のサポート

■ **Service Pack 1** : ESX 3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

■ **Service Pack 2** : ESX 4.0

その他のサポート

■ **SMP** : ESX 3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0 でフルサポート

■ **vmxnet3 ネットワーク アダプタ** : Windows Vista のすべてのリリースをサポート

試験的なサポート

Ultimate : ESX 3.0、3.0.1、3.0.2、3.0.3

■ **VMware Fusion**

Enterprise : Fusion 1.0、1.1、1.1.1、1.1.2、1.1.3、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

Business : Fusion 1.0、1.1、1.1.1、1.1.2、1.1.3、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

Ultimate : Fusion 1.0、1.1、1.1.1、1.1.2、1.1.3、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

Home Basic : Fusion 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

Home Premium : Fusion 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

アップデート版のサポート

■ **Service Pack 1** : Fusion 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

その他のサポート

■ **SMP** : Fusion 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4 で 2 way をサポート

64 ビット版

64 ビット版の Windows Vista は、次の VMware 製品でサポートされています。

■ **VMware Workstation**

Enterprise : Workstation 6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

Business : Workstation 6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

Home Basic : Workstation 6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

Home Premium : Workstation 6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

Ultimate : Workstation 6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

アップデート版のサポート

■ **Service Pack 1** : Workstation 6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

■ **Service Pack 2** : Workstation 6.5.2

その他のサポート

- **SMP** : Workstation 6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way を試験的にサポート
- **Enterprise、Business、Ultimate での Visual Studio 統合型仮想デバッグのサポート** : Workstation 6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2。
Service Pack 1 : Workstation 6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2
- **Enterprise での Eclipse 統合型仮想デバッグのサポート** : Workstation 6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2。
Service Pack 1 : Workstation 6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

■ VMware ACE

Enterprise : ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

Business : ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

Home Basic : ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

Home Premium : ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

Ultimate : ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

アップデート版のサポート

- **Service Pack 1** : ACE 2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

■ VMware Server

Ultimate : VMware Server 2.0、2.0.1

アップデート版のサポート

- **Service Pack 1** : VMware Server 2.0.1

その他のサポート

- **SMP** : VMware Server 2.0、2.0.1 で 2 way をサポート

■ VMware ESX Server

Enterprise : ESX 3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

Business : ESX 3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

Home Basic : ESX 3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

Home Premium : ESX 3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

Ultimate : ESX 3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

アップデート版のサポート

- **Service Pack 1** : ESX 3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0
- **Service Pack 2** : ESX 4.0

その他のサポート

- **SMP** : ESX 3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0 でフル サポート
- **vmxnet3 ネットワーク アダプタ** : Windows Vista のすべてのリリースをサポート

試験的なサポート

Ultimate : ESX 3.0、3.0.1、3.0.2、3.0.3

■ VMware Fusion

Enterprise : Fusion 1.0、1.1、1.1.1、1.1.2、1.1.3、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

Business : Fusion 1.0、1.1、1.1.1、1.1.2、1.1.3、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

Ultimate : Fusion 1.0、1.1、1.1.1、1.1.2、1.1.3、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

Home Basic : Fusion 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

Home Premium : Fusion 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

アップデート版のサポート

- **Service Pack 1** : Fusion 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

その他のサポート

- **SMP** : Fusion 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4 で 2 way をサポート

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

Windows Vista Enterprise、Business、Home Basic、Home Premium、または Ultimate は、Windows Vista の各ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールできます。ご使用の VMware 製品で PXE サーバがサポートされている場合は、PXE サーバからインストールすることもできます。

注意 VMware VirtualCenter または vCenter Server を使用してゲスト OS をインストールする場合は、その仮想マシンを実行する VMware 製品（ESX Server または VMware Server）で該当するゲスト OS がサポートされていることを確認してください。

仮想マシンに Windows Vista をインストールする前に、次の要件を満たしてください。

- 新規仮想マシンを作成し、構成する。
- 仮想マシンには必ず 512MB 以上の RAM を使用する。ホスト コンピュータに 512MB 以上の RAM が存在しない場合、次のような設定ができません。
- 32 ビット版の Windows Vista の場合、仮想マシンのハード ドライブは必ず 16GB 以上に設定する。
- 64 ビット版の Windows Vista の場合、仮想マシンのハード ドライブは必ず 24GB 以上に設定する。

Windows Vista をインストールする前に、次のサポートの問題について検討してください。

- 32 ビット Windows Vista ゲストのインストール中にインターネット接続が利用できない場合は、マルチメディア オーディオ コントローラのドライバがインストールされません。Windows デバイス マネージャから、マルチメディア オーディオ コントローラのドライバが不足していることが通知されます。必要なドライバをインストールするには、インターネット接続を構成し、Windows Vista 仮想マシンで Windows Update を実行します。

ゲスト OS のインストール

- 1 CD-ROM ドライブに Windows Vista CD を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、Windows Vista のインストールを開始します。
- 3 残りの手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

注意 Windows Vista Service Pack (SP1) 仮想マシンに VMware Tools をインストールしたあと、画面解像度が自動的に 1024 x 768 ピクセルに変更されることはありません。ナレッジ ベースの記事 1004780 (<http://kb.vmware.com/kb/1004780>) を参照してください。

既知の問題

LSI Logic Storport Driver 1.26.05 を使用してインストールされた Windows ゲストの起動中のクラッシュ

ESX 3.5 Update 2 以前のバージョン： LSI Logic Storport Driver 1.26.05 以降のバージョンを使用してこの Windows ゲストをインストールすると、ESX Server 3.5 Update 2 以前のバージョンで起動したときにブルー スクリーンが表示されてクラッシュします。詳細については、ナレッジ ベースの記事 1006224 (<http://kb.vmware.com/kb/1006224>) を参照してください。

VMware Tools のコントロール パネルの表示

Windows Vista ゲストで VMware Tools のコントロール パネルを表示するには、管理 ユーザーとしてログインする必要があります。

一部の VMware 製品に VMware Tools をインストールしたときに表示される警告メッセージ

Windows Vista は、今までとは異なる方法でドライバをインストールします。このため、ご使用の VMware 製品によっては、VMware Tools のインストール時に複数のプロセスで警告メッセージが表示されることがあります。場合によっては、これらの警告メッセージがフォアグラウンドでは表示されず、ドライバのインストール処理が停止してしまったように見えることがあります。この場合、<Alt> + <Tab> キーを押すと、警告メッセージをフォアグラウンドで表示できます。表示されるメッセージは、次の 2 種類です。

- ドライバに、Authenticode によるデジタル署名がないことを警告するメッセージ。このメッセージが表示された場合は、[今すぐインストール (Install Now)] をクリックして VMware Tools のインストールを続行します。
- ドライバ パッケージに Windows Vista との互換性がないことを警告するメッセージ。このメッセージが表示された場合は、[キャンセル (Cancel)] をクリックして VMware Tools のインストールを続行します。

VMware Tools インストーラの完了前にオペレーティング システムを再起動するように促すメッセージが表示される場合もあります。この場合は、ゲスト OS を再起動しないでください。[インストール ウィザードの完了 (Installation Wizard Completed)] 画面が表示されるまで待つてから、[終了 (Finish)] をクリックします。プロンプトが表示されたら、ゲスト OS を再起動します。

一部の VMware 製品で必要なネットワーク アダプタの変更

AMD イーサネット カード ドライバは、Windows Vista には含まれていません。このセクションに記載した VMware 製品で稼動する Windows Vista ゲスト OS でネットワークを使用するには、ネットワーク アダプタを変更する必要があります。vmxnet アダプタ用のドライバは、VMware Tools に含まれています。

VMware ACE (Windows ホスト)：「メモ帳」などのテキスト エディタを使用して、Windows Vista 仮想マシンの構成ファイル (**.vmx**) に次の行を追加します。

```
Ethernet[n].virtualDev = "vmxnet"
```

[n] には、該当するイーサネット アダプタの番号を指定します。たとえば、最初のイーサネット アダプタの番号は 0 であるため、そのアダプタに対して次の行を追加します。

```
Ethernet0.virtualDev = "vmxnet"
```

仮想マシン用に構成されている各イーサネット アダプタに対して、前述の行を追加します。そのあと、VMware Tools をインストールします。vmxnet アダプタ用のドライバは、VMware Tools に含まれています。

ESX Server 3.x：VMware Tools をインストールします。ネットワーク アダプタ用の vmxnet ドライバは、VMware Tools に含まれています。VMware Tools をインストールすると、ネットワーク アダプタが自動的に vmxnet に切替わり、vmxnet ドライバがインストールされます。

または、Windows Vista をインストールする前に、ネットワーク アダプタを e1000 (Intel PRO/1000 MT Adapter) に切替えておく方法もあります。「メモ帳」などのテキスト エディタを使用して、Windows Vista 仮想マシンの構成ファイル (**.vmx**) に次の行を追加します。

```
Ethernet[n].virtualDev = "e1000"
```

[n] には、該当するイーサネット アダプタの番号を指定します。たとえば、最初のイーサネット アダプタの番号は 0 であるため、そのアダプタに対して次の行を追加します。

```
Ethernet0.virtualDev = "e1000"
```

仮想マシン用に構成されている各イーサネット アダプタに対して、前述の行を追加します。

Windows Server 2003

このセクションでは、Windows Server 2003 オペレーティングシステムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について説明します。

32 ビット版

32 ビット版の Windows Server 2003 は、次の VMware 製品でサポートされています。

■ VMware Workstation

Web Edition : Workstation 4.0、4.0.1、4.0.2、4.0.5、4.5、4.5.1、4.5.2、4.5.3、5.0、5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

Standard Edition : Workstation 4.0、4.0.1、4.0.2、4.0.5、4.5、4.5.1、4.5.2、4.5.3、5.0、5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

Enterprise Edition : Workstation 4.0、4.0.1、4.0.2、4.0.5、4.5、4.5.1、4.5.2、4.5.3、5.0、5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

Small Business Server 2003 : Workstation 4.0、4.0.1、4.0.2、4.0.5、4.5、4.5.1、4.5.2、4.5.3、5.0、5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

アップデート版のサポート

■ **Service Pack 1 :** Workstation 5.0、5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

■ **R2 :** Workstation 5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

- **SMP** : Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way を試験的にサポート
- **Web Edition、Standard Edition、Enterprise Edition、Small Business Server 2003** での **Visual Studio 統合型仮想デバッグ** のサポート : Workstation 6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2。R2 をサポート。
- **Windows Server 2003 Web Edition、Standard Edition、Enterprise Edition、Small Business Server 2003** での **Eclipse 統合型仮想デバッグ** のサポート : Workstation 6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2。R2 をサポート。

■ VMware ACE

Web Edition : ACE 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

Standard Edition : ACE 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

Enterprise Edition : ACE 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

Small Business Server 2003 : ACE 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

アップデート版のサポート

- **Service Pack 1** : ACE 1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

■ VMware GSX Server

Web Edition : GSX Server 3.0、3.1、3.2、3.2.1

Standard Edition : GSX Server 3.0、3.1、3.2、3.2.1

Enterprise Edition : GSX Server 3.0、3.1、3.2、3.2.1

Small Business Server 2003 : GSX Server 3.0、3.1、3.2、3.2.1

アップデート版のサポート

- **Service Pack 1** : GSX Server 3.2、3.2.1

■ VMware Server

Web Edition : VMware Server 1.0、 1.0.1、 1.0.2、 1.0.3、 1.0.4、 1.0.5、 1.0.6、 1.0.7、 1.0.8、 1.0.9

Standard Edition : VMware Server 1.0、 1.0.1、 1.0.2、 1.0.3、 1.0.4、 1.0.5、 1.0.6、 1.0.7、 1.0.8、 1.0.9

Enterprise Edition : VMware Server 1.0、 1.0.1、 1.0.2、 1.0.3、 1.0.4、 1.0.5、 1.0.6、 1.0.7、 1.0.8、 1.0.9

Small Business Server 2003 Standard : VMware Server 1.0、 1.0.1、 1.0.2、 1.0.3、 1.0.4、 1.0.5、 1.0.6、 1.0.7、 1.0.8、 1.0.9

Small Business Server 2003 Premium : VMware Server 1.0、 1.0.1、 1.0.2、 1.0.3、 1.0.4、 1.0.5、 1.0.6、 1.0.7、 1.0.8、 1.0.9

アップデート版のサポート

■ Service Pack 1

■ **Web Edition** : VMware Server 1.0、 1.0.1、 1.0.2、 1.0.3、 1.0.4、 1.0.5、 1.0.6、 1.0.7、 1.0.8、 1.0.9、 2.0、 2.0.1

■ **Standard Edition** : VMware Server 1.0、 1.0.1、 1.0.2、 1.0.3、 1.0.4、 1.0.5、 1.0.6、 1.0.7、 1.0.8、 1.0.9、 2.0、 2.0.1

■ **Enterprise Edition** : VMware Server 1.0、 1.0.1、 1.0.2、 1.0.3、 1.0.4、 1.0.5、 1.0.6、 1.0.7、 1.0.8、 1.0.9、 2.0、 2.0.1

■ R2

■ **Standard Edition** : VMware Server 1.0、 1.0.1、 1.0.2、 1.0.3、 1.0.4、 1.0.5、 1.0.6、 1.0.7、 1.0.8、 1.0.9、 2.0、 2.0.1

■ **Enterprise Edition** : VMware Server 1.0、 1.0.1、 1.0.2、 1.0.3、 1.0.4、 1.0.5、 1.0.6、 1.0.7、 1.0.8、 1.0.9、 2.0、 2.0.1

■ Service Pack 2

■ **Standard Edition** : VMware Server 2.0、 2.0.1

■ **Enterprise Edition** : VMware Server 2.0、 2.0.1

■ **Web Edition** : VMware Server 2.0、 2.0.1

■ **Small Business Server 2003 Standard** : VMware Server 2.0.1

■ **Small Business Server 2003 Premium** : VMware Server 2.0.1

その他のサポート

- **SMP** : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9、2.0、2.0.1 で 2 way を試験的にサポート

■ VMware ESX Server

Web Edition : ESX 2.0、2.0.1、2.1、2.1.1、2.1.2、2.5、2.5.1、2.5.2、2.5.3、2.5.4、2.5.5、3.0、3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

Standard Edition : ESX 2.0、2.0.1、2.1、2.1.1、2.1.2、2.5、2.5.1、2.5.2、2.5.3、2.5.4、2.5.5、3.0、3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

Enterprise Edition : ESX 2.0、2.0.1、2.1、2.1.1、2.1.2、2.5、2.5.1、2.5.2、2.5.3、2.5.4、2.5.5、3.0、3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

Small Business Server 2003 Premium : ESX 2.5、3.0、3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

Small Business Server 2003 Standard : ESX 2.5、3.0、3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

Datacenter Edition : ESX 3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

アップデート版のサポート

- **Service Pack 1** : ESX 2.1.2 (Upgrade Patch 4 が必要。詳細は <http://vmware.com/support/esx21/doc/esx-212-200506-patch.html> を参照)、2.5、2.5.1、2.5.2、2.5.3、2.5.4、2.5.5、3.0、3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0
- **R2** : ESX 2.5.3、2.5.4、2.5.5、3.0、3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0
- **Service Pack 2** : ESX 2.5.3、2.5.4、2.5.5、3.0、3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

その他のサポート

- **SMP** : ESX 2.0、2.0.1、2.1、2.1.1、2.1.2、2.5、2.5.1、2.5.2、2.5.3、2.5.4、2.5.5、3.0、3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0 でフルサポート
- **pvscsi ストレージ アダプタ** : Windows Server 2003 R2 リリースをすべてサポート
- **vmxnet3 ネットワーク アダプタ** : Windows Server 2003 R2 のすべてのリリースをサポート

サポートでの考慮事項

- ESX 3.0.2 で Windows Server 2003 Datacenter Edition をサポートするには、e1000 ネットワーク アダプタ ドライバを手動で構成する必要があります。ナレッジ ベースの記事 1003020 (<http://kb.vmware.com/kb/1003020>) を参照してください。

■ VMware Fusion

Enterprise Edition : Fusion 1.0、1.1、1.1.1、1.1.2、1.1.3、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

アップデート版のサポート

- **R2** : Fusion 1.0、1.1、1.1.1、1.1.2、1.1.3、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4
- **Service Pack 2** : Fusion 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

その他のサポート

- **SMP** : Fusion 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4 でフル サポート

64 ビット版

64 ビット版の Windows Server 2003 は、次の VMware 製品でサポートされています。

■ VMware Workstation

Standard x64 Edition : Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

Enterprise x64 Edition : Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

アップデート版のサポート

- **R2** : Workstation 5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

- **Standard x64 Edition、Enterprise x64 Edition** での Visual Studio 統合型仮想デバッガのサポート : Workstation 6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2
- **Standard x64 Edition、Enterprise x64 Edition** での Eclipse 統合型仮想デバッガのサポート : Workstation 6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

■ VMware ACE

Standard x64 Edition : ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

Enterprise x64 Edition : ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

■ VMware Server

Standard x64 Edition : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9、2.0、2.0.1

Enterprise x64 Edition : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9、2.0、2.0.1

アップデート版のサポート

■ **Service Pack 1** : VMware Server 2.0、2.0.1

■ **R2** : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9、2.0、2.0.1

■ **Service Pack 2** : VMware Server 2.0、2.0.1

その他のサポート

■ **SMP** : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9、2.0、2.0.1 で 2 way を試験的にサポート

■ VMware ESX Server

Standard x64 Edition : ESX 3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

Enterprise x64 Edition : ESX 3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

Datacenter x64 Edition : ESX 3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

アップデート版のサポート

- R2
 - **Standard x64 Edition** : ESX 3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0
 - **Enterprise x64 Edition** : ESX 3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0
 - **Datacenter x64 Edition** : ESX 3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0
- **Service Pack 2** : ESX 3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

その他のサポート

- **SMP** : ESX 3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0 でフル サポート
- **pvscsi ストレージ アダプタ** : Windows Server 2003 R2 のすべてのリリースをサポート
- **vmxnet3 ネットワーク アダプタ** : Windows Server 2003 R2 のすべてのリリースをサポート

サポートでの考慮事項

- ESX 3.0.2 で Windows Server 2003 Datacenter Edition をサポートするには、e1000 ネットワーク アダプタ ドライバを手動で構成する必要があります。ナレッジ ベースの記事 1003020 (<http://kb.vmware.com/kb/1003020>) を参照してください。

■ VMware Fusion

Enterprise x64 Edition : Fusion 1.0、1.1、1.1.1、1.1.2、1.1.3、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

アップデート版のサポート

- **R2** : Fusion 1.0、1.1、1.1.1、1.1.2、1.1.3、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

Windows Server 2003 Web Edition、Standard Edition、Enterprise Edition、または Windows Small Business Server 2003 は、Windows Server 2003 の各ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールできます。ご使用の VMware 製品で PXE サーバがサポートされている場合は、PXE サーバからインストールすることもできます。

Windows Server 2003 ゲストのインストール中にインターネット接続が利用できない場合は、マルチメディア オーディオ コントローラのドライバがインストールされません。Windows デバイス マネージャから、マルチメディア オーディオ コントローラのドライバが不足していることが通知されます。必要なドライバをインストールするには、インターネット接続を構成し、Windows Server 2003 仮想マシンで Windows Update を実行します。

仮想 LSI Logic SCSI アダプタを使用している場合、ゲスト OS のインストール時に、Windows Server 2003 が自動的に SCSI ドライバをインストールします。仮想 BusLogic SCSI アダプタを使用する場合、専用の SCSI ドライバが必要です。これは、VUE の Web サイトのダウンロードのセクション (www.vmware.com/jp/download) からダウンロードできます。新規インストールした Windows Server 2003 でこのドライバを使用する場合、Web サイトの指示に従ってください。旧バージョンの Windows がゲスト OS としてインストールされ、SCSI 仮想ディスクが構成されている仮想マシンを Windows Server 2003 にアップグレードする場合は、オペレーティングシステムをアップグレードする前に新しい SCSI ドライバをインストールしてください。

注意 VMware VirtualCenter または vCenter Server を使用してゲスト OS をインストールする場合は、その仮想マシンを実行する VMware 製品 (ESX Server または VMware Server) で該当するゲスト OS がサポートされていることを確認してください。

ゲスト OS のインストール

- 1 CD-ROM ドライブに Windows Server 2003 CD を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、Windows Server 2003 のインストールを開始します。
- 3 ヴィエムウェアの Web サイトからダウンロードした仮想 BusLogic SCSI ドライバを使用する場合、この時点で特別な作業を行う必要があります。Windows Server 2003 インストールのロード中に <F6> キーを押します。これで、インストールに必要な SCSI ドライバを追加で選択できるようになります。<S> キーを押して追加のドライバを指定します。該当する SCSI ドライバを指定したら、<Enter> キーを押してセットアップを続行します。
- 4 残りの手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

64 ビットのゲストに必要なサウンド ドライバ

VMware Workstation 6.x および VMware Server: 64 ビット Windows Server 2003 ゲスト OS でサウンドを使用する場合、ヴィエムウェアの Web サイト (www.vmware.com/jp/download/ws/drivers_tools.html) の VMAudio Driver の箇所からドライバをダウンロードして使用する必要があります (試験的サポート)。

既知の問題

LSI Logic Storport Driver 1.26.05 を使用してインストールされた Windows ゲストの起動中のクラッシュ

ESX 3.5 Update 2 以前のバージョン: LSI Logic Storport Driver 1.26.05 以降のバージョンを使用してこの Windows ゲストをインストールすると、ESX Server 3.5 Update 2 以前のバージョンで起動したときにブルー スクリーンが表示されてクラッシュします。詳細については、ナレッジベースの記事 1006224 (<http://kb.vmware.com/kb/1006224>) を参照してください。

Windows Server 2003 での拡張 vmxnet アダプタの有効化

Microsoft Windows Server 2003 Standard Edition (32 ビットおよび 64 ビット)、Microsoft Windows Server 2003 Web Edition、および Microsoft Windows Small Business Server 2003 が稼動している仮想マシンの構成で、拡張 vmxnet ネットワーク アダプタは選択できません。

これらのオペレーティングシステムで拡張 vmxnet ネットワーク アダプタ オプションを有効にするには、VMware のナレッジ ベースの記事
<http://kb.vmware.com/kb/1007195> にある手順に従ってください。

vmxnet3 ネットワーク アダプタのリンク スピードの誤った表示

vmxnet3 ネットワーク アダプタ (10 GBps) は、このゲスト OS ではリンク スピードを正しく表示せず、通常 1.4GBps になります。

詳細は、次の Microsoft 社の Web サイトのナレッジ ベースの記事「Windows XP と Windows Server 2003 で、10GbE ネットワーク アダプタのリンク スピードが正しく表示されない (A 10 GbE network adapter displays an incorrect link speed in Windows XP and Windows Server 2003)」を参照してください。

<http://support.microsoft.com/kb/931857/en-us>

プロダクト アクティベーション機能

Microsoft Windows Server 2003 のプロダクト アクティベーション機能は、このオペレーティングシステムがインストールされた仮想マシンの仮想ハードウェアに基づいて、数字のライセンス キーを作成します。このため、仮想マシンの構成を変更すると、オペレーティングシステムのアクティベーションを再度行う必要がある可能性があります。大幅な変更をできるだけ避けるには、次の点に注意してください。

- Windows Server 2003 のアクティベーションを行う前に、仮想マシンの最終的なメモリ サイズを設定します。約 32MB、64MB、128MB、256MB、512MB、および 1GB といった特定のしきい値を超えると、プロダクト アクティベーション機能は大幅な変更として認識します。

注意 Windows のプロダクト アクティベーション機能に報告されるメモリ サイズは、仮想マシンに実際に構成されるメモリの量より若干少なくなります。たとえば、128MB は 64MB ～ 127MB の範囲内であると認識されます。

- Windows Server 2003 のアクティベーションを行う前に、VMware Tools をインストールします。VMware Tools パッケージの SVGA ドライバがインストールされると、仮想グラフィック アダプタの機能がアクティベートされ、Windows Server 2003 がこのドライバを新しいグラフィック アダプタとして認識するようになります。
- ほかに仮想マシンの構成をいろいろ試す場合は、Windows Server 2003 をアクティベートする前に行います。オペレーティングシステムのアクティベーションには通常 14 日の猶予期間が与えられています。アクティベーションまでの猶予期間は異なることがありますので、各 EULA を参照してください。

Windows Server 2003 のプロダクト アクティベーションの詳細は、Microsoft 社の Web サイトを参照してください。

ディスプレイ ハードウェアのアクセラレーション機能

Windows Server 2003 では、ディスプレイ アダプタのハードウェア アクセラレーション機能がデフォルトで無効になっています。この機能が無効になっていると、ゲスト OS でのグラフィック パフォーマンスとマウスの応答が遅くなります。

Windows Server 2003 ゲストでハードウェア アクセラレーション機能を有効にするには、コントロール パネルを開いてから [画面のプロパティ] コントロール パネルを開き、[設定] タブの [詳細設定] をクリックします。次に [トラブルシューティング] タブで [ハードウェア アクセラレータ] スライダを [最大] までドラッグします。

ハイバネーション機能

このゲスト OS でハイバネーション機能を使用するのは困難です。ハイバネーション機能を使用せずに仮想マシンをサスペンドします。

チェック (デバッグ) ビルド

VMware GSX Server : 仮想マシンに Windows Server 2003 のチェック ビルド (デバッグビルド) をインストールして実行するには、まずその仮想マシンの構成ファイル (.vmx) を編集して、次の行を追加する必要があります。

```
uhci.forceHaltBit = TRUE
```

Windows Server 2003 SP1 での ESX Server および Microsoft Clustering Service のサポート

Windows 2003 SP1 での MSCS (Microsoft Clustering Service) のサポートについては、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/2021>) を参照してください。

PAE モードの Windows Server 2003 仮想マシンで発生する vlance イーサネット アダプタの起動エラー

VMware ESX Server または VMware Workstation: PAE モードの Windows Server 2003 仮想マシンでは、vlance イーサネット アダプタを起動することができません。AMD 社の Web サイト

(http://www.amd.com/us-en/ConnectivitySolutions/ProductInformation/0,,50_2330_6629_2452%5E2454%5E2486,00.html) から、AMD PCnet Ethernet Adapter バージョン 4.5.1 用の NDIS5 ドライバをダウンロードしてインストールすることをお勧めします。

ESX Server 仮想マシンでの PAE の無効化

ESX Server 2.5.x : ESX Server 2.5.x 仮想マシンは物理アドレス拡張 (PAE) をサポートしていますが、この機能用にパフォーマンスが最適化されているわけではありません。このため、PAE 機能が有効になっているゲスト OS では、パフォーマンスが低下する可能性があります。最高のパフォーマンスを実現するには、ゲスト OS で PAE を無効にすることをお勧めします。PAE の無効化の詳細および手順は、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/2020>) を参照してください。

ESX Server 3.x : PAE を無効にすると、最近の AMD および Intel プロセッサが提供する NX (No Execute) 機能および ED (Execute Disabled) 機能も無効になります。これらの機能は、ESX Server 3.x より前のバージョンの ESX Server ではサポートされていません。

Windows を実行する ESX Server 仮想マシンでの VMware Tools のインストール後に再起動しなかった場合のパワーオン エラー

ESX Server 2.5.x : Microsoft Windows を実行する ESX Server 2.5.x 仮想マシンに VMware Tools をインストールすると、仮想マシンを再起動するよう VMware Tools インストーラによって求められます。このときに再起動を行わずに、あとでリモートコンソールから [仮想マシンのパワーオフ (Power Off Virtual Machine)] ボタンを使用するか、ESX Server をシャット ダウンすることにより仮想マシンをパワーオフすると、その仮想マシンを次回パワーオンできなくなる可能性があります。仮想マシンをパワーオンしようとする、仮想マシンが起動できず、「**STOP 0x0000007B: INACCESSIBLE_BOOT_DEVICE**」というメッセージが表示されることがあります。この問題を回避するには、VMware Tools のインストール後に VMware Tools インストーラから指示があった時点で、必ず仮想マシンを再起動します。

Intel Woodcrest ベースのホストで、仮想マシンに 64 ビット版の Windows 2003 Enterprise Server R2 をインストールすると発生する可能性のある仮想マシンのクラッシュ

ESX Server 3.0.1、3.0.2、および 3.0.3 : Intel Woodcrest プロセッサ上で稼動する ESX Server 3.0.1、3.0.2、および 3.0.3 ホストで、仮想マシンに 64 ビット Windows 2003 Enterprise Server R2 をインストールすると、ストップ コード **STOP: 0x00000109** で、仮想マシンがクラッシュしてブルー スクリーンが表示されることがあります。この問題は、断続的に、インストール処理の約 10 パーセントで発生することがテストで判明しています。

Windows XP

このセクションでは、Windows XP オペレーティングシステムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について説明します。

32 ビット版

32 ビット版の Windows XP は、次の VMware 製品でサポートされています。

■ VMware Workstation

Professional : Workstation 4.0、4.0.1、4.0.2、4.0.5、4.5、4.5.1、4.5.2、4.5.3、5.0、5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

Home Edition : Workstation 4.0、4.0.1、4.0.2、4.0.5、4.5、4.5.1、4.5.2、4.5.3、5.0、5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

アップデート版のサポート

■ **Service Pack 1** : Workstation 4.0、4.0.1、4.0.2、4.0.5、4.5、4.5.1、4.5.2、4.5.3、5.0、5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

■ **Service Pack 2** : Workstation 4.5.2、4.5.3、5.0、5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

■ **SMP** : Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way を試験的にサポート

■ **Professional での Visual Studio 統合型仮想デバッガのサポート** : Workstation 6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

■ **Professional での Eclipse 統合型仮想デバッガのサポート** : Workstation 6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

■ VMware ACE

Professional : VMware ACE 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

Home Edition : VMware ACE 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

アップデート版のサポート

- **Service Pack 1** : VMware ACE 1.0、 1.0.1、 1.0.2、 1.0.3、 1.0.4、 1.0.5、 1.0.6、 1.0.7、 1.0.8、 2.0、 2.0.1、 2.0.2、 2.0.3、 2.0.4、 2.0.5、 2.5、 2.5.1、 2.5.2
- **Service Pack 2** : VMware ACE 1.0、 1.0.1、 1.0.2、 1.0.3、 1.0.4、 1.0.5、 1.0.6、 1.0.7、 1.0.8、 2.0、 2.0.1、 2.0.2、 2.0.3、 2.0.4、 2.0.5、 2.5、 2.5.1、 2.5.2

■ VMware GSX Server

Professional : GSX Server 3.0、 3.1、 3.2、 3.2.1

Home Edition : GSX Server 3.0、 3.1、 3.2、 3.2.1

アップデート版のサポート

- **Service Pack 1** : GSX Server 3.0、 3.1、 3.2、 3.2.1
- **Service Pack 2** : GSX Server 3.1、 3.2、 3.2.1

■ VMware Server

Professional : VMware Server 1.0、 1.0.1、 1.0.2、 1.0.3、 1.0.4、 1.0.5、 1.0.6、 1.0.7、 1.0.8、 1.0.9

アップデート版のサポート

- **Service Pack 1** : VMware Server 1.0、 1.0.1、 1.0.2、 1.0.3、 1.0.4、 1.0.5、 1.0.6、 1.0.7、 1.0.8、 1.0.9
- **Service Pack 2** : VMware Server 1.0、 1.0.1、 1.0.2、 1.0.3、 1.0.4、 1.0.5、 1.0.6、 1.0.7、 1.0.8、 1.0.9、 2.0、 2.0.1
- **Service Pack 3** : VMware Server 2.0.1

その他のサポート

- **SMP** : VMware Server 1.0、 1.0.1、 1.0.2、 1.0.3、 1.0.4、 1.0.5、 1.0.6、 1.0.7、 1.0.8、 1.0.9、 2.0、 2.0.1 で 2 way を試験的にサポート

■ VMware ESX Server

Professional、 Service Pack 1、 2、 3 : ESX 2.0、 2.0.1、 2.1、 2.1.1、 2.1.2、 2.5、 2.5.1、 2.5.2、 2.5.3、 2.5.4、 2.5.5、 3.0、 3.0.1、 3.0.2、 3.0.3、 3.5、 3.5 U1、 3.5 U2、 3.5 U3、 3.5 U4、 4.0

Embedded : ESX 3.5 U4、 4.0

アップデート版のサポート

Professional

- **Service Pack 1** : ESX 2.0、2.0.1、2.1、2.1.1、2.1.2、2.5、2.5.1、2.5.2、2.5.3、2.5.4、2.5.5、3.0、3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0
- **Service Pack 2** : ESX 2.0、2.0.1、2.1、2.1.1、2.1.2、2.5、2.5.1、2.5.2、2.5.3、2.5.4、2.5.5、3.0、3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0
- **Service Pack 3** : ESX 2.5.4、2.5.5、3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

Embedded

- **Service Pack 2** : ESX 4.0

その他のサポート

- **SMP** : ESX 3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、ESX 3.5 U4、4.0 でフル サポート
- **vmxnet3 ネットワーク アダプタ** : Windows XP のすべてのリリースをサポート

■ VMware Fusion

Professional : Fusion 1.0、1.1、1.1.1、1.1.2、1.1.3、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

Home Edition : Fusion 1.0、1.1、1.1.1、1.1.2、1.1.3、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

アップデート版のサポート

- **Service Pack 2** : Fusion 1.0、1.1、1.1.1、1.1.2、1.1.3、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4
- **Service Pack 3** : Fusion 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

その他のサポート

- **SMP** : Fusion 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4 で 2 way をサポート

64 ビット版

64 ビット版の Windows XP は、次の VMware 製品でサポートされています。

■ VMware Workstation

Professional x64 Edition : Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

- **Professional x64 Edition** での Visual Studio 統合型仮想デバッグのサポート :
Workstation 6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2
- **Professional x64 Edition** での Eclipse 統合型仮想デバッグのサポート :
Workstation 6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

■ VMware ACE

Professional x64 Edition Service Pack 2 : ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

アップデート版のサポート

- **Service Pack 2** : ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

■ VMware Server

Professional x64 Edition : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9

アップデート版のサポート

- **Service Pack 2** : VMware Server 2.0、2.0.1

その他のサポート

- **SMP** : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9、2.0、2.0.1 で 2 way を試験的にサポート

■ VMware ESX Server

Professional x64 Edition Service Pack 2 : ESX 3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

アップデート版のサポート

- **Service Pack 2** : ESX 3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

その他のサポート

- **SMP** : ESX 3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0 でフル サポート
- **vmxnet3 ネットワーク アダプタ** : Windows XP のすべてのリリースをサポート

■ VMware Fusion

Professional x64 Edition : Fusion 1.0、1.1、1.1.1、1.1.2、1.1.3、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

アップデート版のサポート

- **Service Pack 2** : Fusion 1.0、1.1、1.1.1、1.1.2、1.1.3、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

Windows XP Home Edition または Professional は、Windows XP の各ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールできます。ご使用の VMware 製品で PXE サーバがサポートされている場合は、PXE サーバからインストールすることもできます。

VMware Workstation、VMware ACE、GSX Server、ESX Server : Windows XP 仮想マシンで仮想 BusLogic SCSI アダプタを使用する場合、専用の SCSI ドライバが必要で、これは、[Vuiemuea の Web サイトのダウンロードのセクション](#) (www.vmware.com/jp/download) からダウンロードできます。新規インストールした Windows XP でこのドライバを使用する場合、Web サイトの指示に従ってください。

ESX : ESX ソフトウェアに含まれているフロッピー イメージの、仮想 BusLogic SCSI アダプタ用 vm SCSI ドライバを使用することもできます。

Windows 9x、Windows Me、Windows NT、または Windows 2000 がゲスト OS としてインストールされ、SCSI 仮想ディスクが構成されている仮想マシンを Windows XP にアップグレードする場合は、オペレーティングシステムをアップグレードする前に新しい SCSI ドライバをインストールしてください。

GSX Server または ESX Server : 仮想 LSI Logic SCSI アダプタを使用する場合、LSI Logic 社の Web サイトのダウンロード センターからドライバをダウンロードする必要があります。<http://www.lsi.com/cm/DownloadSearch.do> から、該当するゲスト OS 向けの LSI20320-R SCSI アダプタ ドライバをダウンロードしてください。このドライバのインストールの詳細は、『VMware ESX Server 管理ガイド』を参照してください。また、LSI Logic 社の Web サイトでも『LSI Logic Fusion MPT™ Driver : SYMMPI.SYS V1.xx.xx インストール ガイド (Installation Guide for the LSI Logic Fusion-MPT Driver: SYMMPI.SYS V1.xx.xx)』を提供しています。これは、www.lsi.com/files/support/ssp/fusionmpt/WinXP/symmapi_xp_12018.txt から参照することができます (本『ゲスト OS インストール ガイド』発行時現在)。

仮想マシンで Windows XP Home Edition または Professional を実行するには、このオペレーティングシステムのフルインストール用の CD が必要です。

オペレーティングシステムをインストールする前に、仮想マシンを新規作成し、構成します。

注意 VMware VirtualCenter または vCenter Server を使用してゲスト OS をインストールする場合は、その仮想マシンを実行する VMware 製品 (ESX Server または VMware Server) で該当するゲスト OS がサポートされていることを確認してください。

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブにインストール CD を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、ゲスト OS のインストールを開始します。
 ヴィエムウェアの Web サイトからダウンロードした仮想 BusLogic SCSI ドライバ、または LSI Logic 社の Web サイトからダウンロードした LSI Logic SCSI ドライバを使用する場合、この時点で特別な作業を行う必要があります。
- 3 Windows XP インストーラのロード中に <F6> キーを押します。
 これで、インストールに必要な SCSI ドライバを追加で選択できるようになります。
- 4 <S> キーを押して追加するドライバを指定し、<Enter> キーを押してセットアップを続行します。
- 5 残りの手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

64 ビットのゲストに必要なサウンド ドライバ

VMware Workstation 5.5.x および VMware Server : 64 ビットの Windows XP Professional ゲスト OS でサウンドを使用する場合、VME ウェアの Web サイト (www.vmware.com/jp/download/ws/drivers_tools.html) の VMAudio Driver の箇所からドライバをダウンロードして使用する必要があります (試験的サポート)。

既知の問題

LSI Logic Storport Driver 1.26.05 を使用してインストールされた Windows ゲストの起動中のクラッシュ

ESX 3.5 Update 2 以前のバージョン: LSI Logic Storport Driver 1.26.05 以降のバージョンを使用してこの Windows ゲストをインストールすると、ESX Server 3.5 Update 2 以前のバージョンで起動したときにブルー スクリーンが表示されてクラッシュします。詳細については、ナレッジベースの記事 1006224 (<http://kb.vmware.com/kb/1006224>) を参照してください。

vmxnet3 ネットワーク アダプタのリンク スピードの誤った表示

vmxnet3 ネットワーク アダプタ (10 Gbps) は、このゲスト OS ではリンク スピードを正しく表示せず、通常 1.4Gbps になります。

詳細は、Microsoft 社の Web サイトのナレッジベースの記事「Windows XP と Windows Server 2003 で、10GbE ネットワーク アダプタのリンク スピードが正しく表示されない (A 10 GbE network adapter displays an incorrect link speed in Windows XP and Windows Server 2003)」を参照してください。

<http://support.microsoft.com/kb/931857/en-us>

Windows XP Service Pack 3 仮想マシンで仮想パラレル ポートを介したデータ転送の失敗

VMware ESX 2.5.x: Windows XP Service Pack 3 で稼動している仮想マシンに仮想パラレル ポートを追加すると、次のようなメッセージが表示され、その仮想パラレル ポートを使用したデータ転送に失敗することがあります。

The system cannot write to the specified device.

プロダクト アクティベーション機能

Microsoft Windows XP のプロダクト アクティベーション機能は、このオペレーティング システムがインストールされた仮想マシンの仮想ハードウェアに基づいて、数字のライセンス キーを作成します。このため、仮想マシンの構成を変更すると、オペレーティング システムのアクティベーションを再度行う必要がある可能性があります。大幅な変更をできるだけ避けるには、次の点に注意してください。

- Windows XP のアクティベーションを行う前に、仮想マシンの最終的なメモリ サイズを設定します。約 32MB、64MB、128MB、256MB、512MB、および 1GB と いった特定のしきい値を超えると、プロダクト アクティベーション機能は大幅 な変更として認識します。

注意 Windows のプロダクト アクティベーション機能に報告されるメモリ サイズは、仮想マシンに実際に構成されるメモリの量より若干少なくなります。たとえば、128MB は 64MB ～ 127MB の範囲内であると認識されます。

- Windows XP のアクティベーションを行う前に、VMware Tools をインストールします。VMware Tools パッケージの SVGA ドライバがインストールされると、仮想グラフィック アダプタの機能がアクティベートされ、Windows XP がこのドライバを新しいグラフィック アダプタとして認識するようになります。
- ほかに仮想マシンの構成をいろいろ試す場合は、Windows XP をアクティベートする前に行います。オペレーティング システムのアクティベーションには 30 日の猶予期間が与えられています。

Windows XP のプロダクト アクティベーションの詳細は、Microsoft 社の Web サイトを参照してください。

インストール中の PAE メッセージ

VMware Workstation 5.0 : PAE テクノロジーを使用するホスト コンピュータで、VMware Workstation 5.0 以前のバージョンにゲスト OS をインストールする場合に、ゲスト OS が PAE を使用しようとしていることを通知するエラー メッセージが表示されることがあります。このメッセージが表示された場合は、インストール処理を中止して、影響を受ける仮想マシンで PAE を有効にします。

仮想マシンで PAE を有効にするには

仮想マシンがパワーオフされていることを確認します。

仮想マシンの構成ファイル (.vmx) に、次の行を追加します。

```
paevm="true"
```

仮想マシンをパワーオンして、ゲスト OS をインストールします。

ハイバネーション機能

このゲスト OS でハイバネーション機能を使用するのは困難です。ハイバネーション機能を使用せずに仮想マシンをサスペンドします。

チェック（デバッグ）ビルド

VMware GSX Server：仮想マシンに Windows XP のチェック（デバッグ）ビルドをインストールして実行するには、まずその仮想マシンの構成ファイル（.vmx）を編集して、次の行を追加する必要があります。

```
uhci.forceHaltBit = TRUE
```

ESX Server 仮想マシンでの PAE の無効化

ESX Server 2.5.x：ESX Server 2.5.x 仮想マシンは物理アドレス拡張（PAE）をサポートしていますが、この機能用にパフォーマンスが最適化されているわけではありません。このため、PAE 機能が有効になっているゲスト OS では、パフォーマンスが低下する可能性があります。最高のパフォーマンスを実現するには、ゲスト OS で PAE を無効にすることをお勧めします。PAE の無効化の詳細および手順は、ナレッジベースの記事（<http://kb.vmware.com/kb/2020>）を参照してください。

ESX Server 3.x：PAE を無効にすると、最近の AMD および Intel プロセッサが提供する NX（No Execute）機能および ED（Execute Disabled）機能も無効になります。これらの機能は、ESX Server 3.x より前のバージョンの ESX Server ではサポートされていません。

Windows を実行する ESX Server 仮想マシンでの VMware Tools のインストール後に再起動しなかった場合のパワーオンエラー

ESX Server 2.5.x：Microsoft Windows を実行する ESX Server 2.5.x 仮想マシンに VMware Tools をインストールすると、仮想マシンを再起動するよう VMware Tools インストーラによって求められます。このときに再起動を行わずに、あとでリモートコンソールから [仮想マシンのパワーオフ（Power Off Virtual Machine）] ボタンを使用するか、ESX Server をシャットダウンすることにより仮想マシンをパワーオフすると、その仮想マシンを次回パワーオンできなくなる可能性があります。仮想マシンをパワーオンしようとする、仮想マシンが起動することができずに、「STOP

0x0000007B: INACCESSIBLE_BOOT_DEVICE」というメッセージが表示されることがあります。この問題を回避するには、VMware Tools のインストール後に VMware Tools インストーラから指示があった時点で、必ず仮想マシンを再起動します。

Windows 2000

このセクションでは、Windows 2000 オペレーティング システムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について説明します。

32 ビット版

32 ビット版の Windows 2000 は、次の VMware 製品でサポートされています。

■ VMware Workstation

Professional : Workstation 4.0、4.0.1、4.0.2、4.0.5、4.5、4.5.1、4.5.2、4.5.3、5.0、5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

Windows 2000 Server : Workstation 4.0、4.0.1、4.0.2、4.0.5、4.5、4.5.1、4.5.2、4.5.3、5.0、5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

Advanced Server : Workstation 4.0、4.0.1、4.0.2、4.0.5、4.5、4.5.1、4.5.2、4.5.3、5.0、5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

アップデート版のサポート

■ **Service Pack 1** : Workstation 4.0、4.0.1、4.0.2、4.0.5、4.5、4.5.1、4.5.2、4.5.3、5.0、5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

■ **Service Pack 2** : Workstation 4.0、4.0.1、4.0.2、4.0.5、4.5、4.5.1、4.5.2、4.5.3、5.0、5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

■ **Service Pack 3** : Workstation 4.0、4.0.1、4.0.2、4.0.5、4.5、4.5.1、4.5.2、4.5.3、5.0、5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

■ **Service Pack 4** : Workstation 4.0、4.0.1、4.0.2、4.0.5、4.5、4.5.1、4.5.2、4.5.3、5.0、5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

- **SMP** : Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way を試験的にサポート
- **Professional、Windows 2000 Server、Windows 2000 Advanced Server での Visual Studio 統合型仮想デバッグのサポート** : Workstation 6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2
- **Professional、Windows 2000 Server、Windows 2000 Advanced Server での Eclipse 統合型仮想デバッグのサポート** : Workstation 6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

■ VMware ACE

Professional : ACE 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

Windows 2000 Server : ACE 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

Advanced Server : ACE 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

アップデート版のサポート

- **Service Pack 1** : ACE 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2
- **Service Pack 2** : ACE 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2
- **Service Pack 3** : ACE 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2
- **Service Pack 4** : ACE 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

■ VMware GSX Server

Professional : GSX Server 3.0、3.1、3.2、3.2.1

Windows 2000 Server : GSX Server 3.0、3.1、3.2、3.2.1

Advanced Server : GSX Server 3.0、3.1、3.2、3.2.1

アップデート版のサポート

- **Service Pack 1** : GSX Server 3.0、 3.1、 3.2、 3.2.1
- **Service Pack 2** : GSX Server 3.0、 3.1、 3.2、 3.2.1
- **Service Pack 3** : GSX Server 3.0、 3.1、 3.2、 3.2.1
- **Service Pack 4** : GSX Server 3.0、 3.1、 3.2、 3.2.1
- **Windows 2000 Professional Service Pack 4 のチェック ビルド** : GSX Server 3.0、 3.1、 3.2、 3.2.1

■ VMware Server

Professional : VMware Server 1.0、 1.0.1、 1.0.2、 1.0.3、 1.0.4、 1.0.5、 1.0.6、 1.0.7、 1.0.8、 1.0.9

Windows 2000 Server : VMware Server 1.0、 1.0.1、 1.0.2、 1.0.3、 1.0.4、 1.0.5、 1.0.6、 1.0.7、 1.0.8、 1.0.9

Advanced Server : VMware Server 1.0、 1.0.1、 1.0.2、 1.0.3、 1.0.4、 1.0.5、 1.0.6、 1.0.7、 1.0.8、 1.0.9

アップデート版のサポート

- **Service Pack 1** : VMware Server 1.0、 1.0.1、 1.0.2、 1.0.3、 1.0.4、 1.0.5、 1.0.6、 1.0.7、 1.0.8、 1.0.9
- **Service Pack 2** : VMware Server 1.0、 1.0.1、 1.0.2、 1.0.3、 1.0.4、 1.0.5、 1.0.6、 1.0.7、 1.0.8、 1.0.9
- **Service Pack 3**
 - **Professional** : VMware Server 1.0、 1.0.1、 1.0.2、 1.0.3、 1.0.4、 1.0.5、 1.0.6、 1.0.7、 1.0.8、 1.0.9
 - **Windows 2000 Server** : VMware Server 1.0、 1.0.1、 1.0.2、 1.0.3、 1.0.4、 1.0.5、 1.0.6、 1.0.7、 1.0.8、 1.0.9、 2.0、 2.0.1
 - **Advanced Server** : VMware Server 1.0、 1.0.1、 1.0.2、 1.0.3、 1.0.4、 1.0.5、 1.0.6、 1.0.7、 1.0.8、 1.0.9、 2.0、 2.0.1

■ Service Pack 4

- **Professional** : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9
- **Windows 2000 Server** : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9、2.0、2.0.1
- **Advanced Server** : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9、2.0、2.0.1

その他のサポート

- **SMP** : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9、2.0、2.0.1 で 2 way を試験的にサポート

■ VMware ESX Server

Professional, Service Pack 4 : ESX 2.0.2、2.1.3、2.5.1、2.5.3、3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

Windows 2000 Server Service Pack 3 または 4 : ESX 2.0、2.0.1、2.1.1、2.1.2、2.5、2.5.1、2.5.2、2.5.3、2.5.4、2.5.5、3.0、3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

Advanced Server Service Pack 3、4 : ESX 2.0、2.0.1、2.1.1、2.1.2、2.5、2.5.1、2.5.2、2.5.3、2.5.4、2.5.5、3.0、3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

アップデート版のサポート

Windows 2000 Server および Advanced Server

- **Service Pack 3** : ESX 2.0、2.0.1、2.1.1、2.1.2、2.5、2.5.1、2.5.2、2.5.3、2.5.4、2.5.5、3.0、3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0
- **Service Pack 4** : ESX 2.0、2.0.1、2.1.1、2.1.2、2.1、2.5、2.5.1、2.5.2、2.5.3、2.5.4、2.5.5、3.0、3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0
- **Service Pack 4** : Terminal Services Edition (Update Rollup 1) : ESX 2.5.4、2.5.5

Professional

- **Service Pack 3** : ESX 4.0
- **Service Pack 4** : ESX 2.0.2、2.1.3、2.5.1、2.5.3、3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0
- **Service Pack 4** : Terminal Services Edition (Update Rollup 1) : ESX 2.5.4、2.5.5

その他のサポート

- **SMP** : ESX 2.0、2.0.1、2.0.2、2.1.1、2.1.2、2.1.3、2.5、2.5.1、2.5.2、2.5.3、2.5.4、2.5.5、3.0、3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

■ VMware Fusion

Professional Service Pack 4 : Fusion 1.0、1.1、1.1.1、1.1.2、1.1.3、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

Windows 2000 Server Service Pack 4 : Fusion 1.0、1.1、1.1.1、1.1.2、1.1.3、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

Advanced Server Service Pack 4 : Fusion 1.0、1.1、1.1.1、1.1.2、1.1.3、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

アップデート版のサポート

- **Service Pack 4** : Fusion 1.0、1.1、1.1.1、1.1.2、1.1.3、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

その他のサポート

- **SMP** : Fusion 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4 で 2 way をサポート

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

サポート対象のバージョンの Windows 2000 は、Windows 2000 の各ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールできます。ご使用の VMware 製品で PXE サーバがサポートされている場合は、PXE サーバからインストールすることもできます。

ESX Server、VirtualCenter、または vCenter Server： 仮想 LSI Logic SCSI アダプタを使用する場合、LSI Logic 社の Web サイトのダウンロード センターからドライバをダウンロードする必要があります。<http://www.lsi.com/cm/DownloadSearch.do> から、該当するゲスト OS 向けの LSI20320-R SCSI アダプタ ドライバをダウンロードしてください。

オペレーティング システムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

注意 VMware VirtualCenter または vCenter Server を使用してゲスト OS をインストールする場合は、その仮想マシンを実行する VMware 製品 (ESX Server または VMware Server) で該当するゲスト OS がサポートされていることを確認してください。

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに Windows 2000 CD を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、Windows 2000 のインストールを開始します。
- 3 残りの手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

VMware Tools のインストールが完了したら、Windows 2000 の画面領域を 640 x 480 ピクセル以上に変更する必要があります。この変更を行わないと、Windows 2000 が標準 VGA ドライバを使用するので、望ましいパフォーマンスが得られません。

既知の問題

Service Pack 3 の起動エラー

Service Pack 3 がインストールされている Windows 2000 ゲストを起動しようとしても、「ログオン ユーザー インターフェイス DLL msgina.dll を読み込めませんでした」というメッセージが表示され、起動できないことがあります。

この問題は、Service Pack 4 をインストールすると解決します。ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/907>) を参照してください。

Service Pack 4 にアップグレードしない場合は、次の方法で問題を回避することができます。仮想マシンが実行中ではないことを確認してから、テキスト エディタを使用して仮想マシンの構成ファイルに次の行を追加します。

MAGICBOOT1 = 700

変数として 700 (700 マイクロ秒を表す) を使用してもゲスト OS を起動できない場合は、さらに大きな値を使用してみます。数値を 800 まで増やし、それでも起動できない場合は 900 まで増やすというように、ゲストが起動するまで数値を増やしていきます。

複数の仮想マシンを起動する場合、または並行してワークロードの大きなプログラムを実行する場合は、MAGICBOOT1 の値をさらに増やす必要がある場合があります。起動時間を短縮するには、1 から 700 の間の数値で、仮想マシンが起動できる最小の値を見つけます。

インストール中のハング アップ

VMware GSX Server : ゲスト OS のインストールがハング アップした場合、ナレッジ ベース (<http://kb.vmware.com/>) で問題の解決方法を探してください。

ESX Server 仮想マシンでの PAE の無効化

ESX Server 2.5.x : ESX Server 2.5.x 仮想マシンは物理アドレス拡張 (PAE) をサポートしていますが、この機能用にパフォーマンスが最適化されているわけではありません。このため、PAE 機能が有効になっているゲスト OS では、パフォーマンスが低下する可能性があります。最高のパフォーマンスを実現するには、ゲスト OS で PAE を無効にすることをお勧めします。PAE の無効化の詳細および手順は、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/2020>) を参照してください。

ESX Server 3.x : PAE を無効にすると、最近の AMD および Intel プロセッサが提供する NX (No Execute) 機能および ED (Execute Disabled) 機能も無効になります。これらの機能は、ESX Server 3.x より前のバージョンの ESX Server ではサポートされていません。

Windows を実行する ESX Server 仮想マシンでの VMware Tools のインストール後に再起動しなかった場合のパワーオン エラー

ESX Server 2.5.x : Microsoft Windows を実行する ESX Server 2.5.x 仮想マシンに VMware Tools をインストールすると、仮想マシンを再起動するよう VMware Tools インストーラによって求められます。このときに再起動を行わずに、あとでリモート コンソールから [仮想マシンのパワーオフ (Power Off Virtual Machine)] ボタンを使用するか、ESX Server をシャット ダウンすることにより仮想マシンをパワーオフすると、その仮想マシンを次回パワーオンできなくなる可能性があります。仮想マシンをパワーオンしようすると、仮想マシンが起動できずに、「**STOP 0x0000007B:**

INACCESSIBLE_BOOT_DEVICE」というメッセージが表示されることがあります。この問題を回避するには、VMware Tools のインストール後に VMware Tools インストーラから指示があった時点で、必ず仮想マシンを再起動します。

Windows NT 4.0

このセクションでは、Windows NT 4.0 オペレーティングシステムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について説明します。

32 ビット版

32 ビット版の Windows NT 4.0 は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware Workstation**

Windows NT 4.0 Service Pack 6a : Workstation 4.0、4.0.1、4.0.2、4.0.5、4.5、4.5.1、4.5.2、4.5.3、5.0、5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

- **VMware ACE**

Windows NT 4.0 Service Pack 6a : ACE 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

- **VMware GSX Server**

Windows NT 4.0 Service Pack 6a : 3.0、3.1、3.2、3.2.1

サポートでの考慮事項

- マルチプロセッサのホスト コンピュータ上で IDE 仮想ディスクを使用して Windows NT 仮想マシンを実行する場合、ディスクの入出力速度が予想よりも遅くなることがあります。詳細は、GSX Server のドキュメントの「マルチプロセッサ ホストでの Windows NT ゲストのディスク パフォーマンス」を参照してください。

- **VMware Server**

Windows NT 4.0 Service Pack 6a : Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9

- **VMware ESX Server**

Windows NT 4.0 Service Pack 6a : ESX 2.0、2.0.1、2.1、2.1.1、2.1.2、2.5、2.5.1、2.5.2、2.5.3、2.5.4、2.5.5、3.0、3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

- **VMware Fusion**

Windows NT 4.0 Service Pack 6a : Fusion 1.0、1.1、1.1.1、1.1.2、1.1.3、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

Windows NT 4.0 (Workstation または Server) は、標準の Windows NT の CD を使用して仮想マシンにインストールできます。ご使用の VMware 製品で PXE サーバがサポートされている場合は、PXE サーバからインストールすることもできます。

オペレーティングシステムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

注意 VMware VirtualCenter または vCenter Server を使用してゲスト OS をインストールする場合は、その仮想マシンを実行する VMware 製品 (ESX Server または VMware Server) で該当するゲスト OS がサポートされていることを確認してください。

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに Windows NT CD を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、Windows NT のインストールを開始します。
- 3 残りの手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。
- 4 仮想ディスクは、パフォーマンスを向上させるために DMA 転送をサポートしています。

この機能は、Windows NT をインストールしたあとに有効にすることができます。このオプションを有効にするには、NT Service Pack 3 または 4 の CD が必要です。仮想マシンで Windows NT を実行し、ドライブに SP3 または SP4 の CD を挿入してから、CD の **SUPPORT\UTILS\I386** フォルダから **DMACHECK.EXE** を実行します。次に、仮想ディスクに構成されている IDE コントローラ / チャネルの [有効にする (Enabled)] オプションをクリックします (仮想マシンに複数の仮想ディスクが構成されていないかぎり、通常はチャンネル 0 のみです)。

注意 CD-ROM ドライブが構成された IDE チャネルでは、DMA オプションを有効にしないでください。このような構成で DMA を有効にすると、エラーの原因になります。プライマリ IDE コントローラ (チャンネル 0) にマスタ / スレーブ方式で仮想ディスクと CD-ROM が接続されている場合、DMA を有効にするには、仮想マシンをパワーオフして、構成エディタを使用してその CD-ROM を IDE 1:0 のセカンダリ IDE コントローラ (チャンネル 1) に移動します。次に、Windows NT ゲストの仮想マシンを起動し、**DMACHECK** を実行してチャンネル 0 に対してのみ DMA を有効にします。

注意 SCSI 仮想ディスクでは、DMA は常に有効です。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

注意 Windows NT 4.0 ゲストで VMware Tools のオンライン ヘルプを表示するには、Windows NT 4.0 に Internet Explorer 4.0 以降がインストールされている必要があります。

Windows NT 4.0 ゲストに対する複数のディスクの設定

Windows NT 4.0 を実行して複数のディスクを使用する仮想マシンを設定するには、まずディスクが 1 つだけ設定された仮想マシンを作成する必要があります。そのディスクに Windows NT をインストールします。次に、ご使用の VMware 製品の構成ツールを使用してディスクを追加します。

また、Windows NT 4.0 ゲストに SCSI 仮想ディスクが設定されている場合、構成に SCSI ディスクと IDE ディスクの両方をさらに追加することはできませんので、注意してください。

Windows NT のインストール後のネットワークの有効化

Windows NT のインストール中にネットワークが無効になっている場合でも、インストール完了後に有効にすることができます。まず Windows NT をシャットダウンしてから仮想マシンをパワーオフします。次に、仮想マシンの構成にネットワーク アダプタを追加してから、次の手順で Windows NT ゲスト OS にネットワーク ドライバをインストールします。

- 1 仮想マシンをパワーオンします。
- 2 Windows NT の起動中に、CD-ROM ドライブに Windows NT 4.0 の CD を挿入します。
- 3 Windows NT にログインし、AMD PCNET ドライバをインストールします。
 - a コントロール パネルの [ネットワーク] アイコンをダブルクリックすると、[ネットワークのプロパティ] ページが表示されます。[アダプタ] タブをクリックして、[ネットワーク アダプタ] 画面に移動してください。
 - b [追加] ボタンをクリックし、一覧から [AMD PCNET Family Ethernet Adapter] を選択します。

- c Windows NT ファイルへのパスの入力を求めるメッセージが表示されます。CD 上の **¥i386** フォルダへのパス（たとえば、CD がドライブ D にある場合は **D:¥i386**）を入力します。次に、[続行] をクリックします。
- d Windows NT ファイルのパスを再度確認するメッセージが表示されるので、[続行] をクリックします。
- e デフォルトのアダプタ設定を使用します。設定を変更する必要はありません。Windows NT ファイルのパスを再度確認するメッセージが表示されます。[続行] をクリックしてドライバのインストールを完了します。

既知の問題

サービス パックを使用しないでインストールを行う場合のメモリ制限

使用する Windows NT 4.0 インストール用ディスクに少なくとも Service Pack 2 が含まれていない場合、3,444MB を超えるメモリを持つ仮想マシンにはオペレーティングシステムをインストールできません。この問題を回避するには、仮想マシンのメモリサイズを一時的に 3,444MB 以下に減らしてから Windows NT をインストールし、次に、Service Pack 6a をインストールしたあとで、メモリ サイズを適切な値に設定します。

ESX Server 仮想マシンでの PAE の無効化

ESX Server 2.5.x : ESX Server 2.5.x 仮想マシンは物理アドレス拡張（PAE）をサポートしていますが、この機能用にパフォーマンスが最適化されているわけではありません。このため、PAE 機能が有効になっているゲスト OS では、パフォーマンスが低下する可能性があります。最高のパフォーマンスを実現するには、ゲスト OS で PAE を無効にすることをお勧めします。PAE の無効化の詳細および手順は、ナレッジ ベースの記事（<http://kb.vmware.com/kb/2020>）を参照してください。

Windows を実行する ESX Server 仮想マシンでの VMware Tools のインストール後に再起動しなかった場合のパワーオン エラー

ESX Server 2.5.x : Microsoft Windows を実行する ESX Server 2.5.x 仮想マシンに VMware Tools をインストールすると、仮想マシンを再起動するよう VMware Tools インストーラによって求められます。このときに再起動を行わずに、あとでリモートコンソールから [仮想マシンのパワーオフ（Power Off Virtual Machine）] ボタンを使用するか、ESX Server をシャット ダウンすることにより仮想マシンをパワーオフすると、その仮想マシンを次回パワーオンできなくなる可能性があります。仮想マシンをパワーオンしようすると、仮想マシンが起動できずに、「**STOP 0x0000007B: INACCESSIBLE_BOOT_DEVICE**」というメッセージが表示されることがあります。この問題を回避するには、VMware Tools のインストール後に VMware Tools インストーラから指示があった時点で、必ず仮想マシンを再起動します。

Windows Me

このセクションでは、Windows Me オペレーティング システムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について説明します。

32 ビット版

32 ビット版の Windows Me は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware Workstation**

Windows Me : Workstation 4.0、4.0.1、4.0.2、4.0.5、4.5、4.5.1、4.5.2、4.5.3、5.0、5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

- **VMware ACE**

Windows Me : ACE 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

- **VMware GSX Server**

Windows Me : GSX Server 3.0、3.1、3.2、3.2.1

- **VMware Server**

Windows Me : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9

- **VMware Fusion**

Windows Me : Fusion 1.0、1.1、1.1.1、1.1.2、1.1.3、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

Windows Millennium Edition は、標準の Windows Me の CD を使用して仮想マシンにインストールできます。ご使用の VMware 製品で PXE サーバがサポートされている場合は、PXE サーバからインストールすることもできます。

オペレーティング システムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

注意 VMware VirtualCenter または vCenter Server を使用してゲスト OS をインストールする場合は、その仮想マシンを実行する VMware 製品（ESX Server または VMware Server）で該当するゲスト OS がサポートされていることを確認してください。

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに Windows Me CD を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、Windows Me のインストールを開始します。
- 3 CD-ROM からの起動を選択し、次に [CD-ROM から Windows Me セットアップを開始] を選択します。セットアッププログラムが **FDISK** を実行して再起動します。
- 4 再度 CD-ROM からの起動を選択し、[CD-ROM から Windows Me セットアップを開始] を選択します。セットアッププログラムが Windows Me のインストールを続行します。
- 5 Windows Me の残りのインストール手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

既知の問題

USB 2.0 ドライバの未サポート

Workstation 6.x : Workstation 6.x では、このゲスト OS は USB 2.0 のドライバを提供していません。そのため、オペレーティングシステムのインストール中に、USB 2.0 のデバイスドライバが見つからないことを示す警告メッセージが表示されます。この問題を解決するには、ゲストで [USB コントローラ] を無効にします。

USB 2.0 のコントローラを無効にするには

- 1 仮想マシンの設定エディタを開きます（[仮想マシン（VM）]-[設定（Settings）]）。
- 2 [設定（Settings）] を選択して、[仮想マシン設定（Virtual Machine Settings）] ダイアログ ボックスを開きます。
- 3 [ハードウェア（Hardware）] を選択して、[USB コントローラ（USB Controller）] の [USB 2.0 デバイスの高速サポートを有効にする（Enable USB 2.0）] チェック ボックスを選択解除します。

- 4 [OK] をクリックします。

Windows 98

このセクションでは、Windows 98 オペレーティングシステムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について説明します。

32 ビット版

32 ビット版の Windows 98 は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware Workstation**

Windows 98 : Workstation 4.0、4.0.1、4.0.2、4.0.5、4.5、4.5.1、4.5.2、4.5.3、5.0、5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

- **Windows 98 での Visual Studio 統合型仮想デバッグのサポート** :
Workstation 6.0、6.0.1、6.0.2

- **VMware ACE**

Windows 98 : ACE 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

- **VMware GSX Server**

Windows 98 : GSX Server 3.0、3.1、3.2、3.2.1

- **VMware Server**

Windows 98 : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9

- **ESX Server**

Windows 98 : ESX 4.0

Windows 98 Second Edition : ESX 4.0

- **VMware Fusion**

Windows 98 SE : Fusion 1.0、1.1、1.1.1、1.1.2、1.1.3、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

Windows 98 は、標準の Windows 98 の CD を使用して仮想マシンにインストールできます。ご使用の VMware 製品で PXE サーバがサポートされている場合は、PXE サーバからインストールすることもできます。

オペレーティングシステムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

注意	VMware VirtualCenter または vCenter Server を使用してゲスト OS をインストールする場合は、その仮想マシンを実行する VMware 製品 (ESX Server または VMware Server) で該当するゲスト OS がサポートされていることを確認してください。
-----------	---

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに Windows 98 CD を挿入します。

注意	一部の Windows 98 パッケージでは、フロッピー ディスクから起動するよう求められます。この場合、フロッピー ディスク ドライブに起動フロッピーを挿入し、画面の指示に従ってください。インストーラが求めたときに必ず FDISK および FORMAT を実行してください。
-----------	--

- 2 仮想マシンをパワーオンして、Windows 98 のインストールを開始します。
- 3 CD-ROM からの起動を選択し、次に [CD-ROM から Windows 98 セットアップを開始] を選択します。セットアッププログラムが **FDISK** を実行して再起動します。
- 4 再度 CD-ROM からの起動を選択し、[CD-ROM から Windows 98 セットアップを開始] を選択します。セットアッププログラムが Windows 98 のインストールを続行します。
- 5 Windows 98 の残りのインストール手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

Windows 98 のインストール後のネットワークの有効化

Windows 98 のインストール中にネットワークが無効になっている場合でも、インストール完了後に有効にすることができます。仮想マシンにネットワーク環境を設定するには、仮想マシンをパワーオフして、構成にネットワーク アダプタを追加します。仮想マシンをパワーオンすると、Windows 98 が自動的に AMD PCNET Family Ethernet Adapter (PCI-ISA) を検出し、ドライバをインストールするために Windows 98 CD-ROM を挿入するよう求めます。デフォルトで最適のイーサネット アダプタ設定が選択されるため、設定を変更する必要はありません。Windows 98 コントロールパネルのネットワーク アイコンを使用すると、ネットワーク設定を表示したり、変更したりすることができます。たとえば、Windows 98 は TCP/IP プロトコルをデフォルトではインストールしないため、追加する必要がある場合があります。

既知の問題

実在しない COM ポート

Windows 98 のインストール後、COM5 および COM6 デバイスが Windows のデバイス マネージャに表示されることがあります。これらのデバイスは実際には存在せず、IRQ などのリソースも使用していません。必要に応じて、Windows のデバイス マネージャを使用して削除できます。

USB 2.0 ドライバの未サポート

Workstation 6.x : Workstation 6.x では、このゲスト OS は USB 2.0 のドライバを提供していません。そのため、オペレーティング システムのインストール中に、USB 2.0 のデバイス ドライバが見つからないことを示す警告メッセージが表示されます。この問題を解決するには、ゲストで [USB コントローラ] を無効にします。

USB 2.0 のコントローラを無効にするには

- 1 仮想マシンの設定エディタを開きます ([仮想マシン (VM)]-[設定 (Settings)])。
- 2 [設定 (Settings)] を選択して、[仮想マシン設定 (Virtual Machine Settings)] ダイアログ ボックスを開きます。
- 3 [ハードウェア (Hardware)] を選択して、[USB コントローラ (USB Controller)] の [USB 2.0 デバイスの高速サポートを有効にする (Enable USB 2.0)] チェック ボックスを選択解除します。
- 4 [OK] をクリックします。

Windows 95

このセクションでは、Windows 95 オペレーティングシステムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について説明します。

32 ビット版

32 ビット版の Windows 95 は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware Workstation**

Windows 95 : Workstation 4.0、4.0.1、4.0.2、4.0.5、4.5、4.5.1、4.5.2、4.5.3、5.0、5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

- **VMware ACE**

Windows 95 : ACE 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

- **VMware GSX Server**

Windows 95 : GSX Server 3.0、3.1、3.2、3.2.1

- **ESX Server**

- Windows 95 Service Pack 1 : ESX 4.0

- Windows 95 OSR1 : ESX 4.0

- Windows 95 OSR2 : ESX 4.0

- Windows 95 OSR2.1 : ESX 4.0

- Windows 95 OSR2.5 : ESX 4.0

- **VMware Server**

Windows 95 : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9

- **VMware Fusion**

Windows 95 Service Pack 1 : Fusion 1.0、1.1、1.1.1、1.1.2、1.1.3、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

アップデート版のサポート

- **Service Pack 1** : Fusion 1.0、1.1、1.1.1、1.1.2、1.1.3、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

Windows 95 は、標準の Windows 95 起動フロッピーおよび CD-ROM を使用して仮想マシンにインストールできます。ご使用の VMware 製品で PXE サーバがサポートされている場合は、PXE サーバからインストールすることもできます。

注意 一部の Windows 95 ディストリビューションでは、**C:** ドライブで **FDISK** および **FORMAT** が実行されません。この場合、Windows 95 のセットアップを実行する前に、仮想ハード ディスク ドライブに対して **FDISK** および **FORMAT** を行う必要がありますので注意してください。

ここでは、仮想 IDE ハード ドライブ 1 個と仮想 IDE CD-ROM ドライブ 1 個を使用する最もシンプルな構成を使用して説明します。仮想マシンに複数の IDE ハード ドライブを構成している場合は、Windows 95 をインストールする前に、そのドライブに対しても **FDISK** および **FORMAT** を実行する必要があります。仮想マシンに複数の仮想ハード ドライブまたは仮想 CD-ROM が構成されている場合は、次の説明に使用されているデバイス文字とは異なる文字を使用する必要がある場合があります。

オペレーティング システムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

注意 VMware VirtualCenter または vCenter Server を使用してゲスト OS をインストールする場合は、その仮想マシンを実行する VMware 製品 (ESX Server または VMware Server) で該当するゲスト OS がサポートされていることを確認してください。

インストールの手順

- 1 仮想マシンが使用するフロッピー ドライブ **A:** に Windows 95 CD-ROM セットアップ起動ディスクを、CD-ROM ドライブに Windows 95 CD を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、Windows 95 のインストールを開始します。
- 3 仮想マシンの起動後に CD-ROM ドライバの選択を求められたら、一覧から最初の IDE ドライバを選択します (コンピュータが SCSI CD-ROM ドライブを使用している場合も同様に行う)。
- 4 次のコマンドで仮想ディスクのパーティショニングを行います。

A:¥> FDISK

質問に答えます。

注意 作成したプライマリパーティションのサイズが仮想ディスクよりも小さい場合は、そのパーティションに [有効] という印が付けられていることを確認してください。

- 5 Windows 95 を再起動します。マウスのカーソルが仮想マシンのウィンドウ内に表示されていない場合は、仮想マシンの画面をクリックしてから、Windows ホスト上では <Ctrl> + <Alt> + <Ins> キーを押し、Linux ホスト上では <Ctrl> + <Alt> + キーを押します。再起動時に CD-ROM ドライバの選択を求められた場合は、一覧から最初の IDE CD-ROM ドライバを選択します。

- 6 **C:** ドライブをフォーマットします。

A:¥> FORMAT C: /S

- 7 次のコマンドで Windows 95 のインストールを開始します。

A:¥> D:¥WIN95¥SETUP /IS

注意 仮想マシンに Windows 95 をインストールしているときに、インストールが中断されることがあります。これは、Windows 95 セットアッププログラムの開始直後にスキャンディスクが完了し、Windows 95 セットアッププログラムのグラフィック ユーザー インターフェイスが起動する際に、仮想マシンが MS-DOS プロンプトに戻ってしまうためです。この場合、仮想マシンを再起動して Windows 95 セットアップを再実行することをお勧めします。このとき、ドライブに対して **FDISK** および **FORMAT** を再度実行する必要はありません。この問題が繰り返し発生する場合は、VMware テクニカル サポートまでご連絡ください。

- 8 仮想マシンのイーサネット アダプタが有効になっている場合は、イーサネット ドライバを手動で追加します。Windows 95 は、コンピュータの分析段階でイーサネット ドライバを検出しません（ネットワーク アダプタ検出オプションを選択している場合も同様）。次の手順でネットワークを有効にします。
 - a Windows 95 のインストールを続行します。[Windows 95 セットアップ ウィザード/セットアップ オプション] 画面が表示されたら、デフォルト設定を [標準] から [カスタム] に変更し、[次へ] をクリックして処理を続行します。
 - b コンピュータの分析段階のあとに表示される [ネットワーク構成] 画面で、[追加] をクリックして [アダプタ コンポーネント] を選択します。次に、製造元のウィンドウから [Advanced Micro Devices] を、ネットワーク アダプタのウィンドウから [AMD PCNET Family Ethernet Adapter (PCI&ISA)] を選択します。

- c TCP/IP ネットワークが必要な場合は、[ネットワーク構成] 画面から追加します (Windows 95 セットアップのデフォルト構成では TCP/IP は有効になりません)。この作業を行わないと、Windows 95 のインストールの初期段階で、あとで必要になるファイルの一部がコピーされず、インストールが完全に実行されません。

また、Microsoft NetBEUI プロトコルがインストールされているかを必ず確認してください。Microsoft NetBEUI プロトコルは、デフォルトではインストールされない場合があります。

- 9 Windows 95 のインストールを完了します。
- 10 VMware 仮想ディスクは、パフォーマンスを向上させるために DMA 転送をサポートしています。この機能は、Windows 95 が仮想 IDE ディスクにインストールされたあとに、次の手順で有効にすることができます。
 - a [マイコンピュータ] を右クリックし、[プロパティ] を選択します。
 - b [システムのプロパティ] ダイアログ ボックスの [デバイス マネージャ] タブをクリックします。
 - c [ディスク ドライブ] のデバイスのカテゴリをダブルクリックします。
 - d [GENERIC IDE DISK TYPE01] デバイスをダブルクリックします。
 - e [設定] タブをクリックして、[DMA] チェック ボックスを選択します。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

Windows 95 のインストール後のネットワークの有効化

Windows 95 のインストール中にネットワークが無効になっている場合でも、インストール完了後に有効にすることができます。まず Windows 95 をシャットダウンしてから仮想マシンをパワーオフします。次に、仮想マシンの構成にネットワーク アダプタを追加してから、次の手順で Windows 95 ゲスト OS にネットワーク ドライバをインストールします。

- 1 仮想マシンをパワーオンします。
- 2 起動後、Windows 95 が自動的に AMD PCNET Family Ethernet Adapter (PCI&ISA) を検出し、ドライバをインストールするために Windows 95 CD-ROM を挿入するよう求めます。デフォルトで最適のイーサネット アダプタ設定が選択されるため、設定を変更する必要はありません。

- 3 コントロールパネルのネットワークアイコンをダブルクリックすると、ネットワーク設定を表示したり、変更したりすることができます。たとえば、Windows 95 は TCP/IP プロトコルをデフォルトではインストールしないため、追加する必要がある場合があります。

既知の問題

ネットワークの動作不能

Windows 95 のインストール後にゲスト OS でネットワークが動作していない場合は、次の点を確認してください。

- ご使用の VMware 製品の構成ツールを使用して仮想マシンから仮想 USB アダプタを削除するか、インストールした Windows 95 のリリースが USB をサポートしている場合は、USB ドライバが正常にインストールされていることを確認します。
- Windows 95 のデバイス マネージャを表示して、COM5 および COM6 デバイスが一覧に表示されているかを確認します。表示されている場合は、これらのデバイスを無効にするか削除します。
- ネットワークの設定時に NetBEUI が正常にインストールされたことを確認します。
- Windows 95 のプラグ アンド プレイが仮想イーサネット アダプタを正常に検出したことを確認します。正常に検出していない場合は、デバイス マネージャを使用してアダプタを削除し、[ハードウェア追加] コントロールパネルを使用して再度インストールします。

実在しない COM ポートの表示

Windows 95 のインストール後、不明な COM5 および COM6 デバイスが Windows のデバイス マネージャに表示されることがあります。これらのデバイスは実際には存在せず、IRQ などのリソースも使用していません。必要に応じて、Windows のデバイス マネージャを使用して削除できます。

USB 2.0 ドライバの未サポート

Workstation 6.x : Workstation 6.x では、このゲスト OS は USB 2.0 のドライバを提供していません。そのため、オペレーティングシステムのインストール中に、USB 2.0 のデバイス ドライバが見つからないことを示す警告メッセージが表示されます。この問題を解決するには、ゲストで [USB コントローラ] を無効にします。

USB 2.0 のコントローラを無効にするには

- 1 仮想マシンの設定エディタを開きます（[仮想マシン（VM）]-[設定（Settings）]）。
- 2 [設定（Settings）]を選択して、[仮想マシン設定（Virtual Machine Settings）]ダイアログ ボックスを開きます。
- 3 [ハードウェア（Hardware）]を選択して、[USB コントローラ（USB Controller）]の[USB 2.0 デバイスの高速サポートを有効にする（Enable USB 2.0）]チェック ボックスを選択解除します。
- 4 [OK] をクリックします。

MS-DOS 6.22 および Windows 3.1x

このセクションでは、MS-DOS 6.22 および Windows 3.1x オペレーティングシステムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について説明します。

16 ビット版 MS-DOS 6.22

16 ビット版の MS-DOS 6.22 は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **ESX Server**

MS-DOS 6.22 : ESX 4.0

32 ビット版 Windows 3.1.x

32 ビット版の Windows 3.1.x は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **ESX Server**

Windows 3.1x : ESX 4.0

32 ビット版 MS-DOS 6.22 および Windows 3.1.x

32 ビット版の MS-DOS 6.22 および Windows 3.1.x は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware Workstation**

MS-DOS 6.22 および Windows 3.1x : Workstation 4.0、4.0.1、4.0.2、4.0.5、4.5、4.5.1、4.5.2、4.5.3、5.0、5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

- **VMware ACE**

MS-DOS 6.22 および Windows 3.1x : ACE 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

- **VMware GSX Server**

MS-DOS 6.22 および Windows 3.1x : GSX Server 3.0、3.1、3.2、3.2.1

- **VMware Server**

MS-DOS 6.22 および Windows 3.1x : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9

- **VMware Fusion**

MS-DOS 6.22 および Windows 3.1x : Fusion 1.0、1.1、1.1.1、1.1.2、1.1.3、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

オペレーティングシステムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

注意 VMware VirtualCenter または vCenter Server を使用してゲスト OS をインストールする場合は、その仮想マシンを実行する VMware 製品 (ESX Server または VMware Server) で該当するゲスト OS がサポートされていることを確認してください。

MS-DOS 6.22 のインストール上の注意点

MS-DOS 6.22 は、Microsoft 社のフルバージョンの MS-DOS 6.22 インストール用フロッピー ディスクを使用して仮想マシンにインストールできます。アップグレード用のディスクを使用する場合は、アップグレードを行う前に旧バージョンの MS-DOS 6.22 をインストールする必要があります。MS-DOS 6.22 のインストールを開始するには、フロッピー ドライブに 1 枚目のフロッピー ディスクを挿入して仮想マシンをパワーオンします。そのあとは画面の指示に従ってください。

MS-DOS 6.22 のインストールが完了したら、仮想マシンに CPU アイドル プログラムをインストールすることをお勧めします。ほとんどのバージョンの MS-DOS 6.22 は、アイドル状態のときも CPU を使用します。つまり、仮想マシンで MS-DOS 6.22 が実行されている間は、MS-DOS 6.22 がアイドル状態のときも仮想マシンがホストの CPU 時間を消費します。VMware 製品では、仮想マシンがアイドル状態になったときに、ゲスト OS が Halt 命令または APM を使用して仮想マシンのスケジュールを変更するものと想定されています。

Windows 3.1x のインストール上の注意

Windows 3.1x は、標準のインストール用フロッピー ディスクを使用してインストールできます。VMware Workstation、VMware ACE、および GSX Server 仮想マシンは、Windows 3.11 (または Windows for Workgroups) のネットワーク機能をサポートしています。ネットワークを設定するときは、[Advanced Micro Devices PCNET Family (NDIS2/NDIS3)] イーサネット ドライバを選択します。

既知の問題

マウスに関する問題

ウィンドウ モードの仮想マシンで Windows 3.1x を実行すると、マウスが正常に動作しないことがあります。この問題は、フルスクリーン モードでは発生しません。

VMware Tools 未対応

MS-DOS 6.22 や Windows 3.1x ゲスト OS 向けの VMware Tools パッケージはありません。このため、Windows 3.1x のグラフィックスは VGA モードに限定されます。また、MS-DOS 6.22 または Windows 3.1x の仮想マシンからマウスを解放するためには、常に <Ctrl> + <Alt> キーの組み合わせを使用する必要があります。

Asianux Server 3.0

このセクションでは、Asianux Server 3.0 オペレーティング システムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について説明します。

32 ビット版

32 ビット版の Asianux Server 3.0 は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware Workstation**

Asianux Server 3.0 : Workstation 6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2
(Workstation 6.0.3 から 6.5.2 には PBM が含まれておらず、簡易インストールもない)

アップデート版のサポート

- **Service Pack 1** : Workstation 6.5.2

- **VMware Server**

Asianux Server 3.0 Service Pack 1 : VMware Server 2.0.1

アップデート版のサポート

- **Service Pack 1** : VMware Server 2.0.1

- **ESX Server**

Asianux Server 3.0 : ESX 4.0

アップデート版のサポート

- **Service Pack 1** : ESX 4.0

その他のサポート

- **SMP** : ESX 4.0 でフル サポート

- **vmxnet3 ネットワーク アダプタ** : Asianux Server 3.0 のすべてのリリースをサポート

64 ビット版

64 ビット版の Asianux Server 3.0 は、次の VMware 製品でサポートされています。

■ VMware Workstation

Asianux Server 3.0 : Workstation 6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2
(Workstation 6.0.3 から 6.5.2 には PBM が含まれておらず、簡易インストールもない)

アップデート版のサポート

■ Service Pack 1 : Workstation 6.5.2

■ VMware Server

Asianux Server 3.0 Service Pack 1 : VMware Server 2.0.1

アップデート版のサポート

■ Service Pack 1 : VMware Server 2.0.1

■ ESX Server

Asianux Server 3.0 : ESX 4.0

アップデート版のサポート

■ Service Pack 1 : ESX 4.0

その他のサポート

■ SMP : ESX 4.0 でフル サポート

■ vmxnet3 ネットワーク アダプタ : Asianux Server 3.0 のすべてのリリースをサポート

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

Asianux Server 3.0 は、標準の Asianux ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。ここでは、標準のディストリビューション CD を使用したインストールの手順を説明します。ただし、起動フロッピーまたはネットワークから Asianux 3.0 をインストールすることもできます。ご使用の VMware 製品で PXE サーバがサポートされている場合は、PXE サーバからインストールすることもできます。

オペレーティングシステムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに Asianux Server 3.0 CD-ROM を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、Asianux Server 3.0 のインストールを開始します。
- 3 残りの手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。次の手順では必ず指示どおりの選択を行なってください。
- 4 [Package Group Selection] 画面では、[Software Development] を選択してから個々のパッケージを選択します。[Individual Package Selection] 画面ではカーソルキーを使用して [System Environment/Kernel] まで下方向に移動し、<Enter> キーを押します。[kernel-smp] の選択が解除されていることを必ず確認してください（角括弧の中にアスタリスクが表示されないようにする）。SMP カーネルは、仮想マシンではサポートされていません。ほかの選択を変更する必要はありません。
- 5 [Automatic Partitioning] 画面で、ディスクの自動パーティショニングを許可します。Asianux のデフォルトを使用しない場合は、手動で仮想ディスクのパーティショニングを行うこともできます。

「**The partition table on device <デバイス名> was unreadable. To create new partitions it must be initialized, causing the loss of ALL DATA on the drive.**」で始まる警告が表示されることがあります。この警告が表示されても、物理コンピュータのハード ドライブに問題が発生しているわけではありません。仮想マシンの仮想ハード ドライブに対してパーティショニングおよびフォーマットを行う必要があると警告しているだけです。
- 6 [Yes] をクリックしてドライブのパーティショニングを行います。
- 7 使用中のコンピュータが DHCP に対応した LAN に接続されている場合は、[Network Configuration] 画面から [Use bootp/dhcp] オプションを選択することができます。また、ネットワーク パラメータを手動で設定することもできます。

これでゲスト OS としての Asianux Server 3.0 の基本インストールが完了です。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

VMware Tools をインストールするまでは、ゲスト OS で X サーバを起動しないでください。

IPv6

多くの Linux ディストリビューションでは、VMware Tools のインストール後に IPv6 が有効になっていると、VMware Tools を `vmware-config-tools.pl` で構成することができません。この場合、VMware Tools は該当する仮想マシン向けにネットワーク デバイスを正しく設定することができず、次のようなメッセージが表示されます。

```
Unloading pcnet32 module
unregister_netdevice: waiting for eth0 to become free
```

このメッセージは、仮想マシンを再起動するまで連続して繰り返し表示されます。Linux を実行する仮想マシンでこの問題を防ぐには、VMware Tools をインストールする前に IPv6 を無効にしておきます。

注意 VMware ESX 4.0 以降のリリースでは IPv6 がサポートされています。VMware Tools のインストール前に IPv6 を無効にする必要はありません。

Linux を実行する仮想マシンで IPv6 を無効にするには

- 1 `/etc/sysconfig/network` ファイルに `NETWORKING_IPV6=yes` という行が含まれている場合は、この行を次のように変更します。

```
NETWORKING_IPV6=no
```

- 2 `/etc/modules.conf` ファイルに、次の行を追加します。

```
alias ipv6 off
alias net-pf-10 off
```

IPv6 を無効にすると、VMware Tools を正常にインストールし、構成できます。

既知の問題

VMware Tools のインストール後における vSphere Client の [サマリ (Summary)] タブでの Asianux Server 3.0 Service Pack 1 の 32 ビット ゲストの誤った表示

Asianux Server 3 Service Pack 1 の 32 ビットのゲストに VMware Tools をインストールしたあと、vSphere Client UI の [サマリ (Summary)] タブに、Asianux Server 3 の値が 32 ビットのほかの 2.6.x Linux として表示されます。

TSC クロックソースを使用して Linux が稼動している SMP 仮想マシンでの応答の停止またはストール

このゲスト OS では、仮想マシンでの応答停止またはストールの原因となる TSC クロックソースの問題が発生する可能性があります。詳細は、ナレッジベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/1007020>) を参照してください。

適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更

このゲスト OS のデフォルトのタイムキーピング構成では、問題が発生する可能性があります。Linux でのタイムキーピングのベスト プラクティスについては、ナレッジベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/1006427>) を参照してください。

ゲストのスクリーン セーバー

XFree86 3.x X サーバを稼動する Linux ホストでは、ゲスト OS でのスクリーン セーバーの使用は避けてください。ゲストでスクリーン セーバーを使用すると、大量の処理能力が必要なため、ホストの X サーバがフリーズする可能性があります。

CentOS 5.0

このセクションでは、CentOS 5.0 オペレーティングシステムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について説明します。

32 ビット版

32 ビット版の CentOS 5.0 は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware Workstation**

CentOS 5.0 : Workstation 6.5、6.5.1、6.5.2

アップデート版のサポート

- CentOS 5.1 : Workstation 6.5、6.5.1、6.5.2

- CentOS 5.2 : Workstation 6.5、6.5.1、6.5.2

- **VMware Server**

CentOS 5.2 : VMware Server 2.0.1

- **VMware ESX Server**

CentOS 5.0 : ESX 4.0

CentOS 5.1 : ESX 4.0

CentOS 5.2 : ESX 3.0.3、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

CentOS 5.3 : ESX 3.0.3、3.5 U4、4.0

その他のサポート

- SMP : ESX 3.0.3、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0 でフル サポート

- **VMware Tools OSP (Operating System Specific Package)** : ESX 4.0 で 32 ビット CentOS 5.0、5.1、5.2、5.3 をサポート。詳細は、次の『VMware Tools インストール ガイド Operating System Specific Package (VMware Tools Installation Guide Operating System Specific Packages)』を参照してください。
http://www.vmware.com/pdf/osp_install_guide.pdf

- **vmxnet3 ネットワーク アダプタ** : Red Hat Enterprise Linux 5.0 のすべてのリリースをサポート

64 ビット版

64 ビット版の CentOS 5.0 は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware Workstation**

CentOS 5.0 : Workstation 6.5、6.5.1、6.5.2

アップデート版のサポート

- CentOS 5.1 : Workstation 6.5、6.5.1、6.5.2

- CentOS 5.2 : Workstation 6.5、6.5.1、6.5.2

- **VMware Server**

CentOS 5.2 : VMware Server 2.0.1

- **VMware ESX Server**

CentOS 5.0 : ESX 4.0

CentOS 5.1 : ESX 4.0

CentOS 5.2 : ESX 3.0.3、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

CentOS 5.3 : ESX 3.0.3、3.5 U4、4.0

CentOS 5.4 : ESX 4.0

その他のサポート

- **SMP** : ESX 3.0.3、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0 でフルサポート

- **VMware Tools OSP (Operating System Specific Package)** : ESX 4.0 で 32 ビット CentOS 5.0、5.1、5.2、5.3 をサポート。詳細は、次の『VMware Tools インストール ガイド Operating System Specific Package (VMware Tools Installation Guide Operating System Specific Packages)』を参照してください。
http://www.vmware.com/pdf/osp_install_guide.pdf

- **vmxnet3 ネットワーク アダプタ** : Red Hat Enterprise Linux 5.0 のすべてのリリースをサポート

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

CentOS 5.0 は、標準の CentOS ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。ここでは、標準のディストリビューション CD を使用したインストールの手順を説明します。ただし、起動フロッピーまたはネットワークから CentOS 5.0 をインストールすることもできます。ご使用の VMware 製品で PXE サーバがサポートされている場合は、PXE サーバからインストールすることもできます。

オペレーティング システムをインストールする前に、仮想マシンを新規作成し、構成します。

CentOS 5.0 に仮想マシンを作成します。

- ゲスト OS に Red Hat Enterprise Linux 5 または 64 ビットの Red Hat Enterprise Linux 5 を選択します。CentOS 5 はオプションには表示されません。
- 512MB 以上のメモリを持つ仮想マシンを構成します。仮想マシンのメモリが 512MB よりも少ないと、CentOS 5.0 が、一部の VMware ドライバのロード中にエラー メッセージを表示します。
- LSI Logic SCSI アダプタを使用します。CentOS 5.0 には、BusLogic SCSI アダプタのドライバが含まれていません。

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに CentOS 5.0 CD-ROM を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、CentOS 5.0 のインストールを開始します。
- 3 残りの手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。次の手順では必ず指示どおりの選択を行なってください。
- 4 インストール時に [Virtualization Option] を選択しないでください。詳細は、ナレッジ ベースの記事 9134325 (<http://kb.vmware.com/kb/9134325>) を参照してください。

- 5 [Automatic Partitioning] 画面で、ディスクの自動パーティショニングを許可します。CentOS のデフォルトを使用しない場合は、手動で仮想ディスクのパーティショニングを行うこともできます。

「**The partition table on device <デバイス名> was unreadable. To create new partitions it must be initialized, causing the loss of ALL DATA on the drive.**」で始まる警告が表示されることがあります。この警告が表示されても、物理コンピュータのハード ドライブに問題が発生しているわけではありません。仮想マシンの仮想ハード ドライブに対してパーティショニングおよびフォーマットを行う必要があると警告しているだけです。

- 6 [Yes] をクリックしてドライブのパーティショニングを行います。

これでゲスト OS としての CentOS 5.0 の基本インストールが完了です。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

VMware Tools をインストールするまでは、ゲスト OS で X サーバを起動しないでください。

IPv6

多くの Linux ディストリビューションでは、VMware Tools のインストール後に IPv6 が有効になっていると、VMware Tools を **vmware-config-tools.pl** で構成することができません。この場合、VMware Tools は該当する仮想マシン向けにネットワーク デバイスを正しく設定することができず、次のようなメッセージが表示されます。

```
Unloading pcnet32 module
unregister_netdevice: waiting for eth0 to become free
```

このメッセージは、仮想マシンを再起動するまで連続して繰り返し表示されます。Linux を実行する仮想マシンでこの問題を防ぐには、VMware Tools をインストールする前に IPv6 を無効にしておきます。

注意	VMware ESX 4.0 以降のリリースでは IPv6 がサポートされています。VMware Tools のインストール前に IPv6 を無効にする必要はありません。
-----------	---

Linux を実行する仮想マシンで IPv6 を無効にするには

- 1 `/etc/sysconfig/network` ファイルに `NETWORKING_IPV6=yes` という行が含まれている場合は、この行を次のように変更します。

```
NETWORKING_IPV6=no
```

- 2 `/etc/modprobe.conf` ファイルに、次の行を追加します。

```
alias ipv6 off
alias net-pf-10 off
```

IPv6 を無効にすると、VMware Tools を正常にインストールし、構成できます。

既知の問題

コピーした仮想マシンでネットワークを利用する際に必要な手動の変更

コピーした仮想マシン、あるいは VMware ACE パッケージの一部としてエンドユーザーにデプロイされた仮想マシンでは、ネットワークが正常に動作しない場合があります。仮想マシンをコピーする際に、そのコピーに独自の識別子を割り当てると、その仮想マシンに接続されている仮想イーサネットアダプタ用の MAC アドレスが変更されます。CentOS 5.0 ゲスト OS は、インストール時に、MAC アドレスを主要構成ファイル名の一部として使用します。このため、仮想マシンの MAC アドレスが変更されると、エラーが発生する可能性があります。この問題が発生した場合、ファイルから次の 1 行を削除して回避することができます。たとえば、**eth0** の場合、次のような変更を行います。

- 1 `/etc/sysconfig/network-scripts/ifcfg-eth0` ファイルのバックアップコピーを作成します。次にファイルをテキストエディタで開きます。
- 2 `HWAddr` で始まる行を削除します。
- 3 **eth0** を再起動します。

TSC クロックソースを使用して Linux が稼動している SMP 仮想マシンでの応答の停止またはストール

このゲスト OS では、仮想マシンでの応答停止またはストールの原因となる TSC クロックソースの問題が発生する可能性があります。詳細は、ナレッジベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/1007020>) を参照してください。

適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更

このゲスト OS のデフォルトのタイムキーピング構成では、問題が発生する可能性があります。Linux でのタイムキーピングのベストプラクティスについては、ナレッジベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/1006427>) を参照してください。

ゲストのスクリーン サーバー

XFree86 3.x X サーバを稼働する Linux ホストでは、ゲスト OS でのスクリーン サーバーの使用は避けてください。ゲストでスクリーン サーバーを使用すると、大量の処理能力が必要なため、ホストの X サーバがフリーズする可能性があります。

異なるプロセッサへの移行

Linux 仮想マシンを AMD プロセッサ上で稼働するホストと Intel プロセッサ上で稼働するホストとの間で移行することはお勧めしません。

Linux ディストリビューションの多くは、インストール時に、インストール先の特定のプロセッサに適したカーネルを選択します。また、一部のディストリビューションは、デフォルトで GENERIC カーネルをインストールしますが、ユーザーが選択してインストールできるアーキテクチャ固有のカーネルも提供しています。このようなカーネルには、そのプロセッサでのみ利用できる命令が含まれている場合があります。異なる種類のプロセッサを使用するホストでこれらの命令を実行すると、悪影響が生じる可能性があります。

このため、AMD プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンは、Intel プロセッサを使用するホストに移行しても動作しないことがあります。逆に、Intel プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンを AMD プロセッサを使用するホストに移行しても動作しない場合があります。

これは仮想マシンに限られたものではなく、物理コンピュータでも発生する問題です。たとえば、Linux がインストールされたハード ドライブを AMD マシンから Intel マシンに移動した場合、そのドライブから起動しようとする問題が発生します。

CentOS 4.0

このセクションでは、CentOS 4.0 オペレーティングシステムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について説明します。

32 ビット版

32 ビット版の CentOS 4.0 は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware Server**

CentOS 4.7 : VMware Server 2.0.1

その他のサポート

- **SMP** : VMware Server 2.0.1 でフル サポート

- **VMware ESX Server**

CentOS 4.5 : ESX 4.0

CentOS 4.6 : ESX 4.0

CentOS 4.7 : ESX 4.0

その他のサポート

- **SMP** : ESX 4.0 でフル サポート

- **VMware Tools OSP (Operating System Specific Package)** : ESX 4.0 で 32 ビット CentOS 4.0、4.5、4.6、4.7、4.8 をサポート。詳細は、次の『VMware Tools インストールガイド Operating System Specific Package (VMware Tools Installation Guide Operating System Specific Packages)』を参照してください。

http://www.vmware.com/pdf/osp_install_guide.pdf

64 ビット版

64 ビット版の CentOS 4.0 は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware Server**

CentOS 4.7 : VMware Server 2.0.1

その他のサポート

- **SMP** : VMware Server 2.0.1 でフル サポート

- **VMware ESX Server**

CentOS 4.5 : ESX 4.0

CentOS 4.6 : ESX 4.0

CentOS 4.7 : ESX 4.0

その他のサポート

- **SMP : ESX 4.0 でフル サポート**

- **VMware Tools OSP (Operating System Specific Package) : ESX 4.0 で 64 ビット CentOS 4.0、4.5、4.6、4.7、4.8 をサポート。**詳細は、次の『VMware Tools インストール ガイド Operating System Specific Package (VMware Tools Installation Guide Operating System Specific Packages)』を参照してください。

http://www.vmware.com/pdf/osp_install_guide.pdf

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

CentOS 4.0 は、標準の CentOS ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。CentOS 4.0 は、起動フロッピーまたはネットワークを使用してインストールすることもできます。ご使用の VMware 製品で PXE サーバがサポートされている場合は、PXE サーバからインストールすることもできます。

オペレーティング システムをインストールする前に、仮想マシンを新規作成し、構成します。

CentOS 4.0 に仮想マシンを作成します。

- ゲスト OS に Red Hat Enterprise Linux 4 または 64 ビットの Red Hat Enterprise Linux 4 を選択します。CentOS 4 はオプションには表示されません。
- 512MB 以上のメモリを持つ仮想マシンを構成します。仮想マシンのメモリが 512MB よりも少ないと、CentOS 4.0 が、一部の VMware ドライバのロード中にエラー メッセージを表示します。
- LSI Logic SCSI アダプタを使用します。CentOS 4.0 には、BusLogic SCSI アダプタのドライバが含まれていません。

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに CentOS 4.0 CD-ROM を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、CentOS 4.0 のインストールを開始します。
- 3 残りの手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。次の手順では必ず指示どおりの選択を行なってください。
- 4 インストール時に [Virtualization Option] を選択しないでください。詳細は、ナレッジベースの記事 9134325 (<http://kb.vmware.com/kb/9134325>) を参照してください。
- 5 [Automatic Partitioning] 画面で、ディスクの自動パーティショニングを許可します。CentOS のデフォルトを使用しない場合は、手で仮想ディスクのパーティショニングを行うこともできます。

「**The partition table on device <デバイス名> was unreadable. To create new partitions it must be initialized, causing the loss of ALL DATA on the drive.**」で始まる警告が表示されることがあります。この警告が表示されても、物理コンピュータのハードドライブに問題が発生しているわけではありません。仮想マシンの仮想ハードドライブに対してパーティショニングおよびフォーマットを行う必要があると警告しているだけです。

- 6 [Yes] をクリックしてドライブのパーティショニングを行います。

これでゲスト OS としての CentOS 4.0 の基本インストールが完了です。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

VMware Tools をインストールするまでは、ゲスト OS で X サーバを起動しないでください。

IPv6

多くの Linux ディストリビューションでは、VMware Tools のインストール後に IPv6 が有効になっていると、VMware Tools を **vmware-config-tools.pl** で構成することができません。この場合、VMware Tools は該当する仮想マシン向けにネットワークデバイスを正しく設定することができず、次のようなメッセージが表示されます。

```
Unloading pcnet32 module
unregister_netdevice: waiting for eth0 to become free
```

このメッセージは、仮想マシンを再起動するまで連続して繰り返し表示されます。
Linux を実行する仮想マシンでこの問題を防ぐには、VMware Tools をインストールする前に IPv6 を無効にしておきます。

注意 VMware ESX 4.0 以降のリリースでは IPv6 がサポートされています。VMware Tools のインストール前に IPv6 を無効にする必要はありません。

Linux を実行する仮想マシンで IPv6 を無効にするには

- 1 `/etc/sysconfig/network` ファイルに `NETWORKING_IPV6=yes` という行が含まれている場合は、この行を次のように変更します。

```
NETWORKING_IPV6=no
```

- 2 `/etc/modprobe.conf` ファイルに、次の行を追加します。

```
alias ipv6 off
alias net-pf-10 off
```

IPv6 を無効にすると、VMware Tools を正常にインストールし、構成できます。

既知の問題

コピーした仮想マシンでネットワークを利用する際に必要な手動の変更

コピーした仮想マシン、あるいは VMware ACE パッケージの一部としてエンドユーザーにデプロイされた仮想マシンでは、ネットワークが正常に動作しない場合があります。仮想マシンをコピーする際に、そのコピーに独自の識別子を割り当てると、その仮想マシンに接続されている仮想イーサネットアダプタ用の MAC アドレスが変更されます。CentOS 4.0 ゲスト OS は、インストール時に、MAC アドレスを主要構成ファイル名の一部として使用します。このため、仮想マシンの MAC アドレスが変更されると、エラーが発生する可能性があります。この問題が発生した場合、ファイルから次の 1 行を削除して回避することができます。たとえば、**eth0** の場合、次のような変更を行います。

- 1 `/etc/sysconfig/network-scripts/ifcfg-eth0` ファイルのバックアップ コピーを作成します。次にファイルをテキスト エディタで開きます。
- 2 **HWAddr** で始まる行を削除します。
- 3 **eth0** を再起動します。

TSC クロックソースを使用して Linux が稼働している SMP 仮想マシンでの応答の停止またはストール

このゲスト OS では、仮想マシンでの応答停止またはストールの原因となる TSC クロックソースの問題が発生する可能性があります。詳細は、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/1007020>) を参照してください。

適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更

このゲスト OS のデフォルトのタイムキーピング構成では、問題が発生する可能性があります。Linux でのタイムキーピングのベスト プラクティスについては、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/1006427>) を参照してください。

異なるプロセッサへの移行

Linux 仮想マシンを AMD プロセッサ上で稼働するホストと Intel プロセッサ上で稼働するホストとの間で移行することはお勧めしません。

Linux ディストリビューションの多くは、インストール時に、インストール先の特定のプロセッサに適したカーネルを選択します。また、一部のディストリビューションは、デフォルトで GENERIC カーネルをインストールしますが、ユーザーが選択してインストールできるアーキテクチャ固有のカーネルも提供しています。このようなカーネルには、そのプロセッサでのみ利用できる命令が含まれている場合があります。異なる種類のプロセッサを使用するホストでこれらの命令を実行すると、悪影響が生じる可能性があります。

このため、AMD プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンは、Intel プロセッサを使用するホストに移行しても動作しないことがあります。逆に、Intel プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンを AMD プロセッサを使用するホストに移行しても動作しない場合があります。

これは仮想マシンに限られたものではなく、物理コンピュータでも発生する問題です。たとえば、Linux がインストールされたハード ドライブを AMD マシンから Intel マシンに移動した場合、そのドライブから起動しようとする問題が発生します。

Debian 5.0

このセクションでは、Debian 5.0 オペレーティング システムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について説明します。

32 ビット版

32 ビット版の Debian 5.0 は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware ESX Server**

Debian 5.0 : ESX 4.0

その他のサポート

- **SMP** : ESX 4.0 でフル サポート
- **vmxnet3 ネットワーク アダプタ** : すべての Debian 5.0 リリースをサポート

64 ビット版

64 ビット版の Debian 4.0 は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware ESX Server**

Debian 5.0 : ESX 4.0

その他のサポート

- **SMP** : ESX 4.0 でフル サポート
- **vmxnet3 ネットワーク アダプタ** : すべての Debian 5.0 リリースをサポート

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

Debian 5.0 は、標準の Debian 5.0 ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。

オペレーティング システムをインストールする前に、仮想マシンを新規作成し、構成します。

注意 VMware 仮想マシンで BusLogic 仮想 SCSI アダプタを使用した際、Linux ゲスト OS の多くでさまざまな問題が発生しています。このゲスト OS では、LSI Logic 仮想 SCSI アダプタを使用することをお勧めします。

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに Debian 5.0 CD を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、Debian 5.0 のインストールを開始します。
- 3 残りの手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。

注意 インストール中に、メッセージ「**Configuring apt/ Scanning the mirror**」が表示されます。これは、ネットワークのスキャン中であることを示します。使用環境で HTTP プロキシを使用していると、このメッセージが 10 分以上表示されることがあります。これは、インストールが遅延していることを意味します。しばらくそのままにしておくと、ネットワークのスキャンが終了し、インストールがレジュームされます。インストールが完了したら、Debian 5.0 ユーザー インターフェイスから、[System] - [Preferences] - [Network Proxy] を選択し、[Network Proxy Preferences] ダイアログ ボックスで HTTP プロキシを設定します。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

注意 Debian 5.0 の場合、tar インストーラを使用して VMware Tools をインストールします。

tar インストーラを使用して VMware Tools をインストールするには、Debian ゲストで root を有効にする必要があります。次の手順は、VMware Tools のインストール前またはインストール中に完了できます。

Debian での root ログインを有効化するには

- 1 [System] - [Administration] - [Login] - [Window] を選択し、[Security] タブをクリックします。
- 2 [Allow local system administrator login] チェック ボックスを選択し、[Close] をクリックします。

既知の問題

TSC クロックソースを使用して Linux が稼動している SMP 仮想マシンでの応答の停止またはストール

このゲスト OS では、仮想マシンでの応答停止またはストールの原因となる TSC クロックソースの問題が発生する可能性があります。詳細は、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/1007020>) を参照してください。

適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更

このゲスト OS のデフォルトのタイムキーピング構成では、問題が発生する可能性があります。Linux でのタイムキーピングのベスト プラクティスについては、ナレッジベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/1006427>) を参照してください。

異なるプロセッサへの移行

Linux 仮想マシンを AMD プロセッサ上で稼働するホストと Intel プロセッサ上で稼働するホストとの間で移行することはお勧めしません。

Linux ディストリビューションの多くは、インストール時に、インストール先の特定のプロセッサに適したカーネルを選択します。また、一部のディストリビューションは、デフォルトで GENERIC カーネルをインストールしますが、ユーザーが選択してインストールできるアーキテクチャ固有のカーネルも提供しています。このようなカーネルには、そのプロセッサでのみ利用できる命令が含まれている場合があります。異なる種類のプロセッサを使用するホストでこれらの命令を実行すると、悪影響が生じる可能性があります。

このため、AMD プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンは、Intel プロセッサを使用するホストに移行しても動作しないことがあります。逆に、Intel プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンを AMD プロセッサを使用するホストに移行しても動作しない場合があります。

これは仮想マシンに限られたものではなく、物理コンピュータでも発生する問題です。たとえば、Linux がインストールされたハード ドライブを AMD マシンから Intel マシンに移動した場合、そのドライブから起動しようとする問題が発生します。

Debian 4.0

このセクションでは、Debian 4.0 オペレーティング システムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について説明します。

32 ビット版

32 ビット版の Debian 4.0 は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware ESX Server**

Debian 4.0 r3 : ESX 4.0

Debian 4.0 r4 : ESX 4.0

Debian 4.0 r5 : ESX 4.0

その他のサポート

- SMP : ESX 4.0 でフル サポート

- vmxnet3 ネットワーク アダプタ : すべての Debian 4.0 リリースをサポート

64 ビット版

64 ビット版の Debian 4.0 は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware ESX Server**

Debian 4.0 r3 : ESX 4.0

Debian 4.0 r4 : ESX 4.0

Debian 4.0 r5 : ESX 4.0

その他のサポート

- SMP : ESX 4.0 でフル サポート

- vmxnet3 ネットワーク アダプタ : すべての Debian 4.0 リリースをサポート

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

Debian 4.0 は、標準の Debian 4.0 ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。

オペレーティング システムをインストールする前に、仮想マシンを新規作成し、構成します。

注意 VMware 仮想マシンで BusLogic 仮想 SCSI アダプタを使用した際、Linux ゲスト OS の多くでさまざまな問題が発生しています。このゲスト OS では、LSI Logic 仮想 SCSI アダプタを使用することをお勧めします。

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに Debian 4.0 CD を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、Debian 4.0 のインストールを開始します。
- 3 残りの手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。

注意 インストール中に、メッセージ「**Configuring apt/ Scanning the mirror**」が表示されます。これは、ネットワークのスキャン中であることを示します。使用環境で HTTP プロキシを使用していると、このメッセージが 10 分以上表示されることがあります。これは、インストールが遅延していることを意味します。しばらくそのままにしておくと、ネットワークのスキャンが終了し、インストールがレジュームされます。インストールが完了したら、Debian 4.0 ユーザー インターフェイスから、[System] - [Preferences] - [Network Proxy] を選択し、[Network Proxy Preferences] ダイアログ ボックスで HTTP プロキシを設定します。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

注意 Debian 4.0 の場合、tar インストーラを使用して VMware Tools をインストールします。

tar インストーラを使用して VMware Tools をインストールするには、Debian ゲストで root を有効にする必要があります。次の手順は、VMware Tools のインストール前またはインストール中に完了できます。

Debian での root ログインを有効化するには

- 1 [System] - [Administration] - [Login] - [Window] を選択し、[Security] タブをクリックします。
- 2 [Allow local system administrator login] チェック ボックスを選択し、[Close] をクリックします。

既知の問題

Debian 4.0 の 64 ビット ゲストのインストール後に発生する X サーバの起動エラー

Debian 4.0 の 64 ビット ゲストのインストール後、X サーバの起動エラー この問題を解決するには、VMware Tools をインストールするか、`/etc/X11/xorg.conf` ファイルで Debian 4.0 のディスプレイ ドライバを `amp` から `vesa` に変更します。

VMware Tools をインストールするには

- 1 仮想マシンに root でログインします。
- 2 [VM] - [Guest] - [Install/Upgrade VMware Tools] を選択します。
- 3 CD-ROM ドライブをローカルにマウントします。
- 4 コマンドラインで、`cd /media/cdrom` と入力します。
- 5 VMware Tools tarball を展開します。

```
tar -xvzf VMwareTools-4.0.0-161959.tar.gz -C <宛先の DIR パス>
```
- 6 tarball の展開に使用したディレクトリで、VMware Tools のインストールを開始します。

```
/vmware-install.pl
```
- 7 インストールが完了したら、`/etc/init.d/gdm restart` と入力します。

TSC クロックソースを使用して Linux が稼動している SMP 仮想マシンでの応答の停止またはストール

このゲスト OS では、仮想マシンでの応答停止またはストールの原因となる TSC クロックソースの問題が発生する可能性があります。詳細は、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/1007020>) を参照してください。

適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更

このゲスト OS のデフォルトのタイムキーピング構成では、問題が発生する可能性があります。Linux でのタイムキーピングのベスト プラクティスについては、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/1006427>) を参照してください。

異なるプロセッサへの移行

Linux 仮想マシンを AMD プロセッサ上で稼働するホストと Intel プロセッサ上で稼働するホストとの間で移行することはお勧めしません。

Linux ディストリビューションの多くは、インストール時に、インストール先の特定のプロセッサに適したカーネルを選択します。また、一部のディストリビューションは、デフォルトで GENERIC カーネルをインストールしますが、ユーザーが選択してインストールできるアーキテクチャ固有のカーネルも提供しています。このようなカーネルには、そのプロセッサでのみ利用できる命令が含まれている場合があります。異なる種類のプロセッサを使用するホストでこれらの命令を実行すると、悪影響が生じる可能性があります。

このため、AMD プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンは、Intel プロセッサを使用するホストに移行しても動作しないことがあります。逆に、Intel プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンを AMD プロセッサを使用するホストに移行しても動作しない場合があります。

これは仮想マシンに限られたものではなく、物理コンピュータでも発生する問題です。たとえば、Linux がインストールされたハード ドライブを AMD マシンから Intel マシンに移動した場合、そのドライブから起動しようとすると問題が発生します。

IBM OS/2 Warp 4.5.2

このセクションでは、IBM OS/2 Warp 4.5.2 オペレーティングシステムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について説明します。

32 ビット版

32 ビット版の IBM OS/2 Warp 4.5.2 は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware ESX Server**

IBM OS/2 Warp 4.5.2 : ESX 4.0

その他のサポート

- **SMP : ESX 4.0 (4 SMP) でフルサポート**

サポートでの考慮事項

- IBM OS/2 Warp 4.5.2 をサポートする VMware Tools のバージョンはありません。

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

IBM OS/2 Warp 4.5.2 は、標準のディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。

OS/2 Warp 4.5.2 をインストールする前に、次の要件を満たしてください。

- OS の swap に 120MB 以上の領域を設定する。
- インストールには、OS/2 Warp 4.5.2 起動ディスク CD および OS/2 Warp 4.5.2 インストール CD の両方が使用できます。

インストールの手順

- 1 CD ドライブに OS/2 Warp 4.5.2 起動ディスクを挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、IBM OS/2 Warp 4.5.2 のインストールを開始します。
- 3 BIOS 設定の [Boot from CDROM Drive] が有効になっていることを確認します。
- 4 起動ディスク CD から必要なドライバをインストールしたあと、CD ドライブに OS/2 Warp 4.5.2 インストール CD を挿入します。

- 5 <F3> キーを押してコマンドライン インターフェイスを使用し、ハード ドライブをパーティショニングします。
または、<Enter> キーを押して GUI モードを選択します。
- 6 FDISK ユーティリティを使用してハード ディスク ドライブをパーティショニングします。ゲストのインストール先に適切な起動ボリュームを作成し、FDSIK 設定を保存します。
- 7 CD ドライブに OS/2 Warp 4.5.2 起動ディスクを再挿入し、ゲストを再起動します。
- 8 初期起動が完了したら、CD ドライブに OS/2 Warp 4.5.2 インストール CD を挿入します。
画面に起動ボリュームが表示されます。
- 9 ゲストのインストールに適したボリュームを選択します。
- 10 ファイル アロケーション テーブル (FAT) ファイル システムまたは高性能ファイル システム (HPFS) を使用して、ファイル システムをフォーマットします。
- 11 コンポーネント、ユーティリティ、およびその他のリソースを選択して、インストールを続行します。
- 12 インストールが完了したら、ゲストを再起動します。

起動ディスクの作成

稼働中の OS/2 Warp 4.5.2 ゲストで、CDINST ユーティリティを使用して、32 ビット OS/2 Warp 4.5.2 のインストール CD から起動ディスクを作成します。

- 1 32 ビット OS/2 Warp 4.5.2 がインストールされているシステムをパワーオンします。
- 2 CD ドライブに 32 ビット OS/2 Warp 4.5.2 インストール CD を挿入します。
- 3 **root** ディレクトリにある CDINST ユーティリティをダブル クリックします。
- 4 空のディスクを 1 つずつ挿入します。

これで、32 ビット OS/2 Warp 4.5.2 用の起動可能なディスクが作成されます。

VMware Tools

IBM OS/2 Warp 4.5.2 をサポートする VMware Tools のバージョンはありません。

既知の問題

32 ビット IBM OS/2 Warp 4.5.2 ゲストで機能しない VI Client を使用したマウス ホイールでのスクロール アップ操作不能

VI Client からアクセスしている場合、32 ビット OS/2 Warp 4.5.2 ゲストではマウスのスクロール アップ操作は機能しません。

IBM OS/2 Warp ゲストへのディスクの追加

IBM OS/2 Warp ゲストにディスクを追加する場合、次のガイドラインをお勧めします。

- 追加ディスクのサイズは 528MB 以下にする。
- 仮想ディスクは、仮想マシンですでに使用されているいずれかのものと同じ種類にする。たとえば、IBM OS/2 Warp ゲストが BusLogic ディスクにインストールされている場合、追加ディスクも BusLogic ディスクにします。LSI Logic と IDE についても同様です。

IBM OS/2 Warp 4.5.2 ゲストに CD 書き込みソフトウェアをインストールすると発生するシステムのクラッシュ

OS/2 Warp 4.5.2 に CD 書き込みソフトウェアをインストールすると、ゲストがトラップ エラーによりクラッシュする場合があります。

IBM OS/2 Warp 4.0

このセクションでは、IBM OS/2 Warp 4.0 オペレーティングシステムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について説明します。

32 ビット版

32 ビット版の IBM OS/2 Warp 4.0 は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware ESX Server**

IBM OS/2 Warp 4.0 : ESX 4.0

その他のサポート

- **SMP : ESX 4.0 (4 SMP) でフル サポート**

サポートでの考慮事項

- IBM OS/2 Warp 4.0 をサポートする VMware Tools のバージョンはありません。

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン \(P.78\)](#)」にも必ず目を通してください。

IBM OS/2 Warp 4.0 は、標準のディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。

オペレーティング システムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

OS/2 Warp 4.0 をインストールする前に、次の最小要件を満たしてください。

- OS の swap に 120MB の領域が必要。
- OS/2 Warp 4.0 起動ディスク CD および OS/2 Warp 4.0 インストール CD の両方が使用できます。

インストールの手順

- 1 ディスク ドライブに OS/2 Warp 4.0 インストール ディスクを挿入します。
- 2 BIOS 設定の [Boot from CDROM Drive] が有効になっていることを確認します。
- 3 プロンプトが表示されたら、2 番目および 3 番目のインストール ディスクを挿入します。

- 4 3 番目のディスクから必要なドライバをインストールしたあと、CD ドライブに OS/2 Warp 4.0 インストール CD を挿入します。
- 5 起動ディスク CD から必要なドライバをインストールしたあと、CD ドライブに OS/2 Warp 4.0 インストール CD を挿入します。
- 6 <F3> キーを押してコマンドライン インターフェイスを使用し、ハード ドライブをパーティショニングします。
または、<Enter> キーを押して GUI モードを選択します。
- 7 FDISK ユーティリティを使用してハード ディスク ドライブをパーティショニングします。ゲストのインストール先に適切な起動ボリュームを作成し、FDSIK 設定を保存します。
- 8 CD ドライブに 1 番目の OS/2 Warp 4.0 インストール ディスクを再挿入し、ゲストを再起動します。
- 9 初期起動中に、2 番目および 3 番目のインストール ディスクを再挿入します。
- 10 初期起動が完了したら、CD ドライブに OS/2 Warp 4.0 インストール CD を挿入します。
画面に起動ボリュームが表示されます。
- 11 ゲストのインストールに適したボリュームを選択します。
- 12 ファイル アロケーション テーブル (FAT) ファイル システムまたは高性能 ファイル システム (HPFS) を使用して、ファイル システムをフォーマットします。
- 13 コンポーネント、ユーティリティ、およびその他のリソースを選択して、インストールを続行します。
- 14 インストールが完了したら、ゲストを再起動します。

起動ディスクの作成

稼働中の OS/2 Warp 4.0 ゲストで、CDINST ユーティリティを使用して、32 ビット OS/2 Warp 4.0 のインストール CD から起動ディスクを作成します。

- 1 32 ビット OS/2 Warp 4.0 がインストールされているシステムをパワーオンします。
- 2 CD ドライブに 32 ビット OS/2 Warp 4.0 インストール CD を挿入します。
- 3 **root** ディレクトリにある CDINST ユーティリティをダブルクリックします。
- 4 3 枚の空のディスクを 1 枚ずつ挿入します。

これで、32 ビット OS/2 Warp 4.0 用の起動可能なディスクが作成されます。

VMware Tools

IBM OS/2 Warp 4.0 をサポートする VMware Tools のバージョンはありません。

既知の問題

32 ビット IBM OS/2 Warp 4.0 ゲストにおける VI Client を使用したマウス ホイールのスクロール アップ操作不能

VI Client からアクセスしている場合、32 ビット OS/2 IBM Warp 4.0 ゲストではマウスのスクロール アップ操作は機能しません。

IBM OS/2 Warp ゲストへのディスクの追加

IBM OS/2 Warp ゲストにディスクを追加する場合、次のガイドラインをお勧めします。

- 追加ディスクのサイズは 528MB 以下にする。
- 仮想ディスクは、仮想マシンですでに使用されているいずれかのものと同じ種類にする。たとえば、IBM OS/2 Warp ゲストが BusLogic ディスクにインストールされている場合、追加ディスクも BusLogic ディスクにします。LSI Logic と IDE についても同様です。

OS/2 Warp 4.0 ゲストに CD 書き込みソフトウェアをインストールすると発生するシステムのクラッシュ

OS/2 Warp 4.0 に CD 書き込みソフトウェアをインストールすると、ゲストがトラップエラーによりクラッシュする場合があります。

Mac OS X Server 10.5

このセクションでは、Mac OS X Server 10.5 オペレーティング システムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について説明します。

32 ビット版

32 ビット版の Mac OS X Server 10.5.x は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware Fusion** : 試験的サポートのみ

Mac OS X Server 10.5 : Fusion 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

Mac OS X Server 10.5.6 : Fusion 2.0.2、2.0.3、2.0.4

その他のサポート

- **SMP** : Fusion 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4 でフル サポート

64 ビット版

64 ビット版の Mac OS X Server 10.5 は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware Fusion** : 試験的サポートのみ

Mac OS X Server 10.5 : Fusion 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

Mac OS X Server 10.5.6 : Fusion 2.0.2、2.0.3、2.0.4

その他のサポート

- **SMP** : Fusion 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4 でフル サポート

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

仮想マシンを作成する前に、オペレーティング システムと、仮想マシンでのインストールに必要な製品キーを取得する必要があります。VMware Fusion は、作成した仮想マシンにインストールするオペレーティング システムには付属していません。

インストールの手順

- 1 [Virtual Machine Library] ウィンドウから [New] ボタン、または [File] - [New] を選択します。

[New Virtual Machine Assistant] が起動します。

- 2 [Introduction] パネルでは、使用している媒体（オペレーティングシステムのインストール CD、オペレーティングシステムのインストール ディスク イメージ ファイル（ISO）、既存の仮想ディスク）によって行うことが異なります。

オプション	説明
オペレーティングシステムのインストール ディスク	Mac にディスクを挿入します。VMware Fusion がディスクを検出し、インストールするオペレーティングシステムであるかどうかの確認が求められます。正しいオペレーティングシステムである場合、[Install this operating system] が選択されていることを確認して [Continue] をクリックします。 正しいオペレーティングシステムではない場合、[Install a different operating system] を選択して [Continue] をクリックします。
オペレーティングシステムのインストール ディスク イメージ ファイル	[Continue without disk] をクリックします。
既存の仮想ディスク	[Continue without disk] をクリックします。

- 3 [Installation Media] パネルで、次の 4 つのうちいずれかのオプションを選択します。

オプション	説明
Use operating system installation disk	ポップアップ メニューを使用して、オペレーティングシステムのインストール ディスクを選択します。
Use operating system installation disk image file	ポップアップ メニューを使用して、オペレーティングシステムの .iso ファイルを参照します。[Choose to identify the file] をクリックします。
Use an existing virtual disk	既存の仮想ディスクを使用する場合はこのオプションを選択します。ポップアップ メニューを使用して、既存の仮想ディスク（.vmdk） ファイルを参照します。[Choose] をクリックして、ファイルを指定します。
Create a custom virtual machine	カスタム仮想マシンを作成する場合、このオプションを選択します。たとえば、フロッピー イメージから古いバージョンのオペレーティングシステムをインストールしている場合に使用します。

- 4 [Continue] をクリックして [Operating System] パネルに移動します。
- 5 [Operating System] パネルで、新しい仮想マシンのオペレーティングシステムとバージョンが正しいことを確認するか、ポップアップ メニューから正しいものを選択します。[Continue] をクリックします。
- 6 [Finish] パネルで、次を行います。

オプション	説明
[Finish] パネルに表示された仕様に従って仮想マシンを作成する	[Finish] をクリックします。 仮想マシンを保存するフォルダを指定したら（デフォルトでは <ユーザー>/Documents/Virtual Machines フォルダ）、[Save] をクリックして仮想マシンを起動します。
仮想マシンのディスクサイズやその他の標準設定を変更する	[Customize Settings] をクリックします。新しい仮想マシンを保存します。 新しい仮想マシンを保存すると、Fusion によって [Settings] ウィンドウが表示されます。ここで、仮想マシンのディスクサイズ、プロセッサの使用率、取り外し可能デバイスなどを変更できます。 [Settings] ウィンドウを閉じると、VMware Fusion が仮想マシンを起動します。

これで、仮想マシンの基本的な設定が完了します。

次に、Mac OS X Server 10.5 ゲスト OS をインストールします。Mac OS X Server をインストールしたら VMware Tools をインストールします。

VMware Tools

Mac OS X Server 仮想マシンに VMware Tools をインストールまたはアップグレードするには、次の手順に従います。

ステップ 1 は Mac の VMware Fusion メニューで行い、残りの手順は仮想マシン内で行います。

- 1 仮想マシンをパワーオンし、[仮想マシン (Virtual Machine)] メニューから [VMware Tools をインストール (Install VMware Tools)] を選択します。

VMware Tools がすでにインストールされている場合、[仮想マシン (Virtual Machine)] メニューには [VMware Tools をインストール (Install VMware Tools)] ではなく [VMware Tools をアップグレード (Upgrade VMware Tools)] が表示されます。

- 2 ゲスト Mac OS X Server 仮想マシンのデスクトップで、[VMware Tools] CD アイコンを開きます。
- 3 [VMware Tools をインストール (Install VMware Tools)] をダブルクリックしてインストーラ アシスタントの手順に従います。実行後、[OK] をクリックします。

VMware Fusion が仮想マシンを再起動し、VMware Tools を有効化します。

既知の問題

Mac OS X ディスク ユーティリティを使用したディスク パーティション サイズの拡張

仮想マシンの作成時にディスク パーティションのサイズを拡張すると、追加領域にアクセスできなくなります。代わりに、オペレーティング システムをインストールしたあと、Mac OS X ディスク ユーティリティを使用してディスク パーティションのサイズを拡張します。

Mandriva Corporate Desktop 4

このセクションでは、Mandriva Corporate Desktop 4 オペレーティング システムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について説明します。

32 ビット版

32 ビット版の Mandriva Corporate Desktop 4 は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware Workstation**

Mandriva Corporate Desktop 4.0 : Workstation 6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

- **VMware ACE**

Mandriva Corporate Desktop 4.0 : ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

64 ビット版

64 ビット版の Mandriva Corporate Desktop 4 は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware Workstation**

Mandriva Corporate Desktop 4.0 : Workstation 6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

- **VMware ACE**

Mandriva Corporate Desktop 4.0 : ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

Mandriva Corporate Desktop 4 は、標準の Mandriva Linux ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。ここでは、標準のディストリビューション CD を使用したインストールの手順を説明します。ただし、起動フロッピーまたはネットワークから Mandriva Corporate Desktop 4 をインストールすることもできます。ご使用の VMware 製品で PXE サーバがサポートされている場合は、PXE サーバからインストールすることもできます。

オペレーティングシステムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

注意 Mandriva Corporate Desktop 4 のインストール中に、XFree86 の X サーバを選択するように求められます。いずれを選択しても問題ありませんが、選択した X サーバは実行しないでください。代わりに、Mandriva Corporate Desktop 4 のインストール完了後、ただちに VMware Tools パッケージをインストールします。これで、仮想マシン内でアクセラレータ機能付き SVGA X サーバを実行できます。

注意 VMware 仮想マシンで BusLogic 仮想 SCSI アダプタを使用した際、Linux ゲスト OS の多くでさまざまな問題が発生しています。このゲスト OS では、LSI Logic 仮想 SCSI アダプタを使用することをお勧めします。

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに Mandriva Corporate Desktop 4 CD を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、Mandriva Corporate Desktop 4 のインストールを開始します。
- 3 残りの手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。次の手順では必ず指示どおりの選択を行なってください。
- 4 テキスト モードのインストーラを使用します。オプションを選択するには起動画面で <F1> キーを押します。次に、**text** と入力してテキスト モードを選択します。
- 5 特殊な要件がないかぎり、パーティショニング時に、Mandriva Linux が自動的に領域を割り当てるようにしても問題ありません。[Use free space] を選択します。
- 6 [Summary] 画面では、グラフィカルインターフェイスを構成します。
[Graphical Interface] を選択してから [Do] をクリックし、次のように選択します。
 - ゲストで使用する解像度およびリフレッシュ レート
 - [VMware virtual video card]
 - パッケージにアップデートをインストールするかどうかについては、[No] を選択
 - 再起動時に X を起動させるかどうかについては、[No] を選択

これでゲスト OS としての Mandriva Corporate Desktop 4 の基本インストールが完了です。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

IPv6

多くの Linux ディストリビューションでは、VMware Tools のインストール後に IPv6 が有効になっていると、VMware Tools を **vmware-config-tools.pl** で構成することができません。この場合、VMware Tools は該当する仮想マシン向けにネットワーク デバイスを正しく設定することができず、次のようなメッセージが表示されます。

```
Unloading pcnet32 module
unregister_netdevice: waiting for eth0 to become free
```

このメッセージは、仮想マシンを再起動するまで連続して繰り返し表示されます。Linux を実行する仮想マシンでこの問題を防ぐには、VMware Tools をインストールする前に IPv6 を無効にしておきます。

Linux を実行する仮想マシンで IPv6 を無効にするには

- 1 `/etc/sysconfig/network` ファイルに **NETWORKING_IPV6=yes** という行が含まれている場合は、この行を次のように変更します。

```
NETWORKING_IPV6=no
```

- 2 `/etc/modules.conf` ファイルに、次の行を追加します。

```
alias ipv6 off
alias net-pf-10 off
```

IPv6 を無効にすると、VMware Tools を正常にインストールし、構成できます。

既知の問題

ゲスト OS の解像度の変更

ゲスト OS のディスプレイの解像度を変更するには、root (`-su`) の権限で VMware Tools 構成プログラム **vmware-config-tools.pl** を再実行し、このプログラムが表示するリストから希望する解像度を選択します。X 構成ファイルを直接編集して変更を行うこともできます。

ゲスト OS 内での DHCP アドレスの取得

ゲスト OS が DHCP アドレスを取得しようとすると、正常に動作せずに、リンクが壊れていることを示すエラー メッセージが表示されます。この問題を回避するには、root (**su -**) の権限で、ゲスト OS 内の次のファイルをテキスト エディタを使用して編集します。

```
/etc/sysconfig/network-scripts/ifcfg-eth<n>
/etc/sysconfig/networking/devices/ifcfg-eth<n>
```

いずれのファイルも、<n> にはイーサネット アダプタの番号（たとえば、**eth0**）を指定します。

前述の 2 個のファイルにそれぞれ次の行を追加します。

```
MII_NOT_SUPPORTED=yes
```

次に、コマンド **ifup eth<n>**（<n> にはイーサネット アダプタの番号を指定）を実行するか、ゲスト OS を再起動します。

適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更

このゲスト OS のデフォルトのタイムキーピング構成では、問題が発生する可能性があります。Linux でのタイムキーピングのベスト プラクティスについては、ナレッジベースの記事（vmware.com/kb/1006427）を参照してください。

ゲストのスクリーンセーバー

XFree86 3.x X サーバを稼働する Linux ホストでは、ゲスト OS でのスクリーンセーバーの使用は避けてください。ゲストでスクリーンセーバーを使用すると、大量の処理能力が必要なため、ホストの X サーバがフリーズする可能性があります。

異なるプロセッサへの移行

Linux 仮想マシンを AMD プロセッサ上で稼働するホストと Intel プロセッサ上で稼働するホストとの間で移行することはお勧めしません。

Linux ディストリビューションの多くは、インストール時に、インストール先の特定のプロセッサに適したカーネルを選択します。また、一部のディストリビューションは、デフォルトで GENERIC カーネルをインストールしますが、ユーザーが選択してインストールできるアーキテクチャ固有のカーネルも提供しています。このようなカーネルには、そのプロセッサでのみ利用できる命令が含まれている場合があります。異なる種類のプロセッサを使用するホストでこれらの命令を実行すると、悪影響が生じる可能性があります。

このため、AMD プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンは、Intel プロセッサを使用するホストに移行しても動作しないことがあります。逆に、Intel プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンを AMD プロセッサを使用するホストに移行しても動作しない場合があります。

これは仮想マシンに限られたものではなく、物理コンピュータでも発生する問題です。たとえば、Linux がインストールされたハード ドライブを AMD マシンから Intel マシンに移動した場合、そのドライブから起動しようとする問題が発生します。

Mandriva Corporate Server 4

このセクションでは、Mandriva Corporate Server 4 オペレーティングシステムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について説明します。

32 ビット版

32 ビット版の Mandriva Corporate Server 4 は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware Workstation**

Mandriva Corporate Server 4 : Workstation 5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

- **VMware ACE**

Mandriva Corporate Server 4 : ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

64 ビット版

64 ビット版の Mandriva Corporate Server 4 は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware Workstation**

Mandriva Corporate Server 4 : Workstation 5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

- **VMware ACE**

Mandriva Corporate Server 4 : ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

Mandriva Corporate Server 4 は、標準の Mandriva Linux ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。ここでは、標準のディストリビューション CD を使用したインストールの手順を説明します。ただし、起動フロッピーまたはネットワークから Mandriva Corporate Server 4 をインストールすることもできます。ご使用の VMware 製品で PXE サーバがサポートされている場合は、PXE サーバからインストールすることもできます。

オペレーティングシステムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

注意 Mandriva Corporate Server 4 のインストール中に、XFree86 の X サーバを選択するように求められます。いずれを選択しても問題ありませんが、選択した X サーバは実行しないでください。代わりに、Mandriva Corporate Server 4 のインストール完了後、ただちに VMware Tools パッケージをインストールします。これで、仮想マシン内でアクセラレータ機能付き SVGA X サーバを実行できます。

注意 VMware 仮想マシンで BusLogic 仮想 SCSI アダプタを使用した際、Linux ゲスト OS の多くでさまざまな問題が発生しています。このゲスト OS では、LSI Logic 仮想 SCSI アダプタを使用することをお勧めします。

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに Mandriva Corporate Server 4 CD を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、Mandriva Corporate Server 4 のインストールを開始します。
- 3 残りの手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。次の手順では必ず指示どおりの選択を行なってください。
- 4 テキスト モードのインストーラを使用します。オプションを選択するには起動画面で <F1> キーを押します。次に、**text** と入力してテキスト モードを選択します。
- 5 特殊な要件がないかぎり、パーティショニング時に、Mandriva Linux が自動的に領域を割り当てるようにしても問題ありません。[Use free space] を選択します。
- 6 [Summary] 画面では、グラフィカルインターフェイスを構成します。

[Graphical Interface] を選択してから [Do] をクリックし、次のように選択します。

- ゲストで使用する解像度およびリフレッシュ レート
- [VMware virtual video card]
- パッケージにアップデートをインストールするかどうかについては、[No] を選択
- 再起動時に X を起動させるかどうかについては、[No] を選択

これでゲスト OS としての Mandriva Corporate Server 4 の基本インストールが完了です。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

IPv6

多くの Linux ディストリビューションでは、VMware Tools のインストール後に IPv6 が有効になっていると、VMware Tools を **vmware-config-tools.pl** で構成することができません。この場合、VMware Tools は該当する仮想マシン向けにネットワーク デバイスを正しく設定することができず、次のようなメッセージが表示されます。

```
Unloading pcnet32 module
unregister_netdevice: waiting for eth0 to become free
```

このメッセージは、仮想マシンを再起動するまで連続して繰り返し表示されます。Linux を実行する仮想マシンでこの問題を防ぐには、VMware Tools をインストールする前に IPv6 を無効にしておきます。

Linux を実行する仮想マシンで IPv6 を無効にするには

- 1 `/etc/sysconfig/network` ファイルに **NETWORKING_IPV6=yes** という行が含まれている場合は、この行を次のように変更します。

```
NETWORKING_IPV6=no
```

- 2 `/etc/modules.conf` ファイルに、次の行を追加します。

```
alias ipv6 off
alias net-pf-10 off
```

IPv6 を無効にすると、VMware Tools を正常にインストールし、構成できます。

既知の問題

ゲスト OS の解像度の変更

ゲスト OS のディスプレイの解像度を変更するには、root (**-su**) の権限で VMware Tools 構成プログラム **vmware-config-tools.pl** を再実行し、このプログラムが表示するリストから希望する解像度を選択します。X 構成ファイルを直接編集して変更を行うこともできます。

ゲスト OS 内での DHCP アドレスの取得

ゲスト OS が DHCP アドレスを取得しようとすると、正常に動作せずに、リンクが壊れていることを示すエラーメッセージが表示されます。この問題を回避するには、root (`su -`) の権限で、ゲスト OS 内の次のファイルをテキスト エディタを使用して編集します。

```
/etc/sysconfig/network-scripts/ifcfg-eth<n>
/etc/sysconfig/networking/devices/ifcfg-eth<n>
```

いずれのファイルも、`<n>` にはイーサネット アダプタの番号（たとえば、`eth0`）を指定します。

前述の 2 個のファイルにそれぞれ次の行を追加します。

```
MII_NOT_SUPPORTED=yes
```

次に、コマンド `ifup eth<n>`（`<n>` にはイーサネット アダプタの番号を指定）を実行するか、ゲスト OS を再起動します。

適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更

このゲスト OS のデフォルトのタイムキーピング構成では、問題が発生する可能性があります。Linux でのタイムキーピングのベスト プラクティスについては、ナレッジベースの記事（<http://kb.vmware.com/kb/1006427>）を参照してください。

ゲストのスクリーンセーバー

XFree86 3.x X サーバを稼働する Linux ホストでは、ゲスト OS でのスクリーンセーバーの使用は避けてください。ゲストでスクリーンセーバーを使用すると、大量の処理能力が必要なため、ホストの X サーバがフリーズする可能性があります。

異なるプロセッサへの移行

Linux 仮想マシンを AMD プロセッサ上で稼働するホストと Intel プロセッサ上で稼働するホストとの間で移行することはお勧めしません。

Linux ディストリビューションの多くは、インストール時に、インストール先の特定のプロセッサに適したカーネルを選択します。また、一部のディストリビューションは、デフォルトで GENERIC カーネルをインストールしますが、ユーザーが選択してインストールできるアーキテクチャ固有のカーネルも提供しています。このようなカーネルには、そのプロセッサでのみ利用できる命令が含まれている場合があります。異なる種類のプロセッサを使用するホストでこれらの命令を実行すると、悪影響が生じる可能性があります。

このため、AMD プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンは、Intel プロセッサを使用するホストに移行しても動作しないことがあります。逆に、Intel プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンを AMD プロセッサを使用するホストに移行しても動作しない場合があります。

これは仮想マシンに限られたものではなく、物理コンピュータでも発生する問題です。たとえば、Linux がインストールされたハード ドライブを AMD マシンから Intel マシンに移動した場合、そのドライブから起動しようとする問題が発生します。

Mandriva Linux 2008

このセクションでは、Mandriva Linux 2008 オペレーティングシステムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について記述しています。

32 ビット版

32 ビット版の Mandriva Linux 2008 は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware Workstation**

Mandriva Linux 2008 : Workstation 6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

- **SMP** : Workstation 6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way をサポート

- **VMware Server**

Mandriva Linux 2008 : VMware Server 2.0、2.0.1

その他のサポート

- **SMP** : VMware Server 2.0、2.0.1 で 2 way をサポート

- **VMware Fusion**

Mandriva Linux 2008 : Fusion 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

その他のサポート

- **SMP** : Fusion 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4 で 2 way をサポート

64 ビット版

64 ビット版の Mandriva Linux 2008 は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware Workstation**

Mandriva Linux 2008 : Workstation 6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

- **SMP** : Workstation 6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way をサポート

- **VMware Server**

Mandriva Linux 2008 : VMware Server 2.0、2.0.1

その他のサポート

- **SMP** : VMware Server 2.0、2.0.1 で 2 way をサポート

■ VMware Fusion

Mandriva Linux 2008 : Fusion 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

その他のサポート

■ SMP : Fusion 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4 で 2 way をサポート

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

Mandriva Linux 2008 は、標準の Mandriva Linux ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。ここでは、標準のディストリビューション CD を使用したインストールの手順を説明します。ただし、起動フロップピーまたはネットワークから Mandriva Linux 2008 をインストールすることもできます。ご使用の VMware 製品で PXE サーバがサポートされている場合は、PXE サーバからインストールすることもできます。

オペレーティングシステムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

注意 Mandriva Linux 2008 のインストール中に、XFree86 の X サーバを選択するよう求められます。いずれを選択しても問題ありませんが、選択した X サーバは実行しないでください。代わりに、Mandriva Linux 2008 のインストール完了後、ただちに VMware Tools パッケージをインストールします。これで、仮想マシン内でアクセラレータ機能付 SVGA X サーバを実行できます。

注意 VMware 仮想マシンで BusLogic 仮想 SCSI アダプタを使用した際、Linux ゲスト OS の多くでさまざまな問題が発生しています。このゲスト OS では、LSI Logic 仮想 SCSI アダプタを使用することをお勧めします。

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに Mandriva Linux 2008 CD を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、Mandriva Linux 2008 のインストールを開始します。
- 3 残りの手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。次の手順では必ず指示どおりの選択を行ってください。

- 4 テキスト モードのインストーラを使用します。オプションを選択するには起動画面で <F1> キーを押します。次に、**text** と入力してテキスト モードを選択します。
- 5 特殊な要件がないかぎり、パーティショニング時に、Mandriva Linux が自動的に領域を割り当てるようにしても問題ありません。[Use free space] を選択します。
- 6 [Summary] 画面では、グラフィカル インターフェイスを構成します。
[Graphical Interface] を選択してから [Do] をクリックし、次のように選択します。
 - ゲストで使用する解像度およびリフレッシュ レート
 - [VMware virtual video card]
 - パッケージにアップデートをインストールするかどうかについては、[No] を選択
 - 再起動時に X を起動させるかどうかについては、[No] を選択

これでゲスト OS としての Mandriva Linux 2008 の基本インストールが完了です。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

IPv6

多くの Linux ディストリビューションでは、VMware Tools のインストール後に IPv6 が有効になっていると、VMware Tools を **vmware-config-tools.pl** で構成することができません。この場合、VMware Tools は該当する仮想マシン向けにネットワーク デバイスを正しく設定することができず、次のようなメッセージが表示されます。

Unloading pcnet32 module

unregister_netdevice: waiting for eth0 to become free

このメッセージは、仮想マシンを再起動するまで連続して繰り返し表示されます。Linux を実行する仮想マシンでこの問題を防ぐには、VMware Tools をインストールする前に IPv6 を無効にしておきます。

Linux を実行する仮想マシンで IPv6 を無効にするには

- 1 `/etc/sysconfig/network` ファイルに `NETWORKING_IPV6=yes` という行が含まれている場合は、この行を次のように変更します。

```
NETWORKING_IPV6=no
```

- 2 `/etc/modules.conf` ファイルに、次の行を追加します。

```
alias ipv6 off
alias net-pf-10 off
```

IPv6 を無効にすると、VMware Tools を正常にインストールし、構成できます。

既知の問題

ゲスト OS の解像度の変更

ゲスト OS のディスプレイの解像度を変更するには、`root (-su)` の権限で VMware Tools 構成プログラム `vmware-config-tools.pl` を再実行し、このプログラムが表示するリストから希望する解像度を選択します。X 構成ファイルを直接編集して変更を行うこともできます。

ゲスト OS 内での DHCP アドレスの取得

ゲスト OS が DHCP アドレスを取得しようとすると、正常に動作せずに、リンクが壊れていることを示すエラー メッセージが表示されます。この問題を回避するには、`root (su -)` の権限で、ゲスト OS 内の次のファイルをテキスト エディタを使用して編集します。

```
/etc/sysconfig/network-scripts/ifcfg-eth<n>
/etc/sysconfig/networking/devices/ifcfg-eth<n>
```

いずれのファイルも、`<n>` にはイーサネット アダプタの番号（たとえば、`eth0`）を指定します。

前述の 2 個のファイルにそれぞれ次の行を追加します。

```
MII_NOT_SUPPORTED=yes
```

次に、コマンド `ifup eth<n>`（`<n>` にはイーサネット アダプタの番号を指定）を実行するか、ゲスト OS を再起動します。

TSC クロックソースを使用して Linux が稼働している SMP 仮想マシンでの応答の停止またはストール

このゲスト OS では、仮想マシンでの応答停止またはストールの原因となる TSC クロックソースの問題が発生する可能性があります。詳細は、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/1007020>) を参照してください。

適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更

このゲスト OS のデフォルトのタイムキーピング構成では、問題が発生する可能性があります。Linux でのタイムキーピングのベスト プラクティスについては、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/1006427>) を参照してください。

ゲストのスクリーンセーバー

XFree86 3.x X サーバを稼働する Linux ホストでは、ゲスト OS でのスクリーンセーバーの使用は避けてください。ゲストでスクリーンセーバーを使用すると、大量の処理能力が必要なため、ホストの X サーバがフリーズする可能性があります。

異なるプロセッサへの移行

Linux 仮想マシンを AMD プロセッサ上で稼働するホストと Intel プロセッサ上で稼働するホストとの間で移行することはお勧めしません。

Linux ディストリビューションの多くは、インストール時に、インストール先の特定のプロセッサに適したカーネルを選択します。また、一部のディストリビューションは、デフォルトで GENERIC カーネルをインストールしますが、ユーザーが選択してインストールできるアーキテクチャ固有のカーネルも提供しています。このようなカーネルには、そのプロセッサでのみ利用できる命令が含まれている場合があります。異なる種類のプロセッサを使用するホストでこれらの命令を実行すると、悪影響が生じる可能性があります。

このため、AMD プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンは、Intel プロセッサを使用するホストに移行しても動作しないことがあります。逆に、Intel プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンを AMD プロセッサを使用するホストに移行しても動作しない場合があります。

これは仮想マシンに限られたものではなく、物理コンピュータでも発生する問題です。たとえば、Linux がインストールされたハード ドライブを AMD マシンから Intel マシンに移動した場合、そのドライブから起動しようとする問題が発生します。

Mandriva Linux 2007

このセクションでは、Mandriva Linux 2007 オペレーティングシステムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について記述しています。

32 ビット版

32 ビット版の Mandriva Linux 2007 は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware Workstation**

Mandriva Linux 2007 : Workstation 5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

- **VMware ACE**

Mandriva Linux 2007 : ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

- **VMware Server**

Mandriva Linux 2007 : VMware Server 2.0、2.0.1

- **VMware Fusion**

Mandriva Linux 2007 : Fusion 1.0、1.1、1.1.1、1.1.2、1.1.3、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

64 ビット版

64 ビット版の Mandriva Linux 2007 は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware Workstation**

Mandriva Linux 2007 : Workstation 5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

- **VMware ACE**

Mandriva Linux 2007 : ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

- **VMware Server**

Mandriva Linux 2007 : VMware Server 2.0、2.0.1

- **VMware Fusion**

Mandriva Linux 2007 : Fusion 1.0、1.1、1.1.1、1.1.2、1.1.3、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

Mandriva Linux 2007 は、標準の Mandriva Linux ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。ここでは、標準のディストリビューション CD を使用したインストールの手順を説明します。ただし、起動フロッピーまたはネットワークから Mandriva Linux 2007 をインストールすることもできます。ご使用の VMware 製品で PXE サーバがサポートされている場合は、PXE サーバからインストールすることもできます。

オペレーティングシステムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

注意	Mandriva Linux 2007 のインストール中に、XFree86 の X サーバを選択するよう求められます。いずれを選択しても問題ありませんが、選択した X サーバは実行しないでください。代わりに、Mandriva Linux 2007 のインストール完了後、ただちに VMware Tools パッケージをインストールします。これで、仮想マシン内でアクセラレータ機能付 SVGA X サーバを実行できます。
-----------	---

注意	VMware 仮想マシンで BusLogic 仮想 SCSI アダプタを使用した際、Linux ゲスト OS の多くでさまざまな問題が発生しています。このゲスト OS では、LSI Logic 仮想 SCSI アダプタを使用することをお勧めします。
-----------	--

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに Mandriva Linux 2007 CD を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、Mandriva Linux 2007 のインストールを開始します。
- 3 残りの手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。次の手順では必ず指示どおりの選択を行なってください。
- 4 テキスト モードのインストーラを使用します。オプションを選択するには起動画面で <F1> キーを押します。次に、**text** と入力してテキスト モードを選択します。
- 5 特殊な要件がないかぎり、パーティショニング時に、Mandriva Linux が自動的に領域を割り当てるようにしても問題ありません。[Use free space] を選択します。

- 6 [Summary] 画面では、グラフィカル インターフェイスを構成します。
[Graphical Interface] を選択してから [Do] をクリックし、次のように選択します。
 - ゲストで使用する解像度およびリフレッシュ レート
 - [VMware virtual video card]
 - パッケージにアップデートをインストールするかどうかについては、[No] を選択
 - 再起動時に X を起動させるかどうかについては、[No] を選択

これでゲスト OS としての Mandriva Linux 2007 の基本インストールが完了です。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

IPv6

多くの Linux ディストリビューションでは、VMware Tools のインストール後に IPv6 が有効になっていると、VMware Tools を **vmware-config-tools.pl** で構成することができません。この場合、VMware Tools は該当する仮想マシン向けにネットワーク デバイスを正しく設定することができず、次のようなメッセージが表示されます。

```
Unloading pcnet32 module
unregister_netdevice: waiting for eth0 to become free
```

このメッセージは、仮想マシンを再起動するまで連続して繰り返し表示されます。Linux を実行する仮想マシンでこの問題を防ぐには、VMware Tools をインストールする前に IPv6 を無効にしておきます。

Linux を実行する仮想マシンで IPv6 を無効にするには

- 1 `/etc/sysconfig/network` ファイルに **NETWORKING_IPV6=yes** という行が含まれている場合は、この行を次のように変更します。
NETWORKING_IPV6=no
- 2 `/etc/modules.conf` ファイルに、次の行を追加します。
alias ipv6 off
alias net-pf-10 off

IPv6 を無効にすると、VMware Tools を正常にインストールし、構成できます。

既知の問題

ゲスト OS の解像度の変更

ゲスト OS のディスプレイの解像度を変更するには、root (**-su**) の権限で VMware Tools 構成プログラム **vmware-config-tools.pl** を再実行し、このプログラムが表示するリストから希望する解像度を選択します。X 構成ファイルを直接編集して変更を行うこともできます。

ゲスト OS 内での DHCP アドレスの取得

ゲスト OS が DHCP アドレスを取得しようとすると、正常に動作せずに、リンクが壊れていることを示すエラー メッセージが表示されます。この問題を回避するには、root (**su -**) の権限で、ゲスト OS 内の次のファイルをテキスト エディタを使用して編集します。

```
/etc/sysconfig/network-scripts/ifcfg-eth<n>
/etc/sysconfig/networking/devices/ifcfg-eth<n>
```

いずれのファイルも、**<n>** にはイーサネット アダプタの番号（たとえば、**eth0**）を指定します。

前述の 2 個のファイルにそれぞれ次の行を追加します。

```
MII_NOT_SUPPORTED=yes
```

次に、コマンド **ifup eth<n>**（**<n>** にはイーサネット アダプタの番号を指定）を実行するか、ゲスト OS を再起動します。

適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更

このゲスト OS のデフォルトのタイムキーピング構成では、問題が発生する可能性があります。Linux でのタイムキーピングのベスト プラクティスについては、ナレッジベースの記事（<http://kb.vmware.com/kb/1006427>）を参照してください。

ゲストのスクリーン セーバー

XFree86 3.x X サーバを稼動する Linux ホストでは、ゲスト OS でのスクリーン セーバーの使用は避けてください。ゲストでスクリーン セーバーを使用すると、大量の処理能力が必要なため、ホストの X サーバがフリーズする可能性があります。

異なるプロセッサへの移行

Linux 仮想マシンを AMD プロセッサ上で稼働するホストと Intel プロセッサ上で稼働するホストとの間で移行することはお勧めしません。

Linux ディストリビューションの多くは、インストール時に、インストール先の特定のプロセッサに適したカーネルを選択します。また、一部のディストリビューションは、デフォルトで GENERIC カーネルをインストールしますが、ユーザーが選択してインストールできるアーキテクチャ固有のカーネルも提供しています。このようなカーネルには、そのプロセッサでのみ利用できる命令が含まれている場合があります。異なる種類のプロセッサを使用するホストでこれらの命令を実行すると、悪影響が生じる可能性があります。

このため、AMD プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンは、Intel プロセッサを使用するホストに移行しても動作しないことがあります。逆に、Intel プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンを AMD プロセッサを使用するホストに移行しても動作しない場合があります。

これは仮想マシンに限られたものではなく、物理コンピュータでも発生する問題です。たとえば、Linux がインストールされたハード ドライブを AMD マシンから Intel マシンに移動した場合、そのドライブから起動しようとすると問題が発生します。

Mandriva Linux 2006

このセクションでは、Mandriva Linux 2006 オペレーティングシステムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について記述しています。

32 ビット版

32 ビット版の Mandriva Linux 2006 は、次の VMware 製品でサポートされています。

■ VMware Workstation

Mandriva Linux 2006 : Workstation 5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

- **SMP** : Workstation 5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way を試験的にサポート

■ VMware ACE

Mandriva Linux 2006 : ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

■ VMware Server

Mandriva Linux 2006 : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9、2.0、2.0.1

その他のサポート

- **SMP** : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9、2.0、2.0.1 で 2 way を試験的にサポート

■ VMware Fusion

Mandriva Linux 2006 : Fusion 1.0、1.1、1.1.1、1.1.2、1.1.3、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

64 ビット版

64 ビット版の Mandriva Linux 2006 は、次の VMware 製品でサポートされています。

■ VMware Workstation

Mandriva Linux 2006 : Workstation 5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

- **SMP** : Workstation 5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way を試験的にサポート

■ VMware ACE

Mandriva Linux 2006 : ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

■ VMware Server

Mandriva Linux 2006 : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9、2.0、2.0.1

その他のサポート

- **SMP** : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9、2.0、2.0.1 で 2 way を試験的にサポート

■ VMware Fusion

Mandriva Linux 2006 : Fusion 1.0、1.1、1.1.1、1.1.2、1.1.3、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

Mandriva Linux 2006 は、標準の Mandriva Linux ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。ここでは、標準のディストリビューション CD を使用したインストールの手順を説明します。ただし、起動フロッピーまたはネットワークから Mandriva Linux 2006 をインストールすることもできます。ご使用の VMware 製品で PXE サーバがサポートされている場合は、PXE サーバからインストールすることもできます。

オペレーティングシステムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

注意 Mandriva Linux 2006 のインストール中に、XFree86 の X サーバを選択するよう求められます。いずれを選択しても問題ありませんが、選択した X サーバは実行しないでください。代わりに、Mandriva Linux 2006 のインストール完了後、ただちに VMware Tools パッケージをインストールします。これで、仮想マシン内でアクセラレータ機能付 SVGA X サーバを実行できます。

注意 VMware 仮想マシンで BusLogic 仮想 SCSI アダプタを使用した際、Linux ゲスト OS の多くでさまざまな問題が発生しています。このゲスト OS では、LSI Logic 仮想 SCSI アダプタを使用することをお勧めします。

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに Mandriva Linux 2006 CD を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、Mandriva Linux 2006 のインストールを開始します。
- 3 残りの手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。次の手順では必ず指示どおりの選択を行なってください。
- 4 テキスト モードのインストーラを使用します。オプションを選択するには起動画面で <F1> キーを押します。次に、**text** と入力してテキスト モードを選択します。
- 5 特殊な要件がないかぎり、パーティショニング時に、Mandriva Linux が自動的に領域を割り当てるようにしても問題ありません。[Use free space] を選択します。
- 6 [Summary] 画面では、グラフィカル インターフェイスを構成します。
[Graphical Interface] を選択してから [Do] をクリックし、次のように選択します。
 - ゲストで使用する解像度およびリフレッシュ レート
 - [VMware virtual video card]
 - パッケージにアップデートをインストールするかどうかについては、[No] を選択
 - 再起動時に X を起動させるかどうかについては、[No] を選択

これでゲスト OS としての Mandriva Linux 2006 の基本インストールが完了です。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

IPv6

多くの Linux ディストリビューションでは、VMware Tools のインストール後に IPv6 が有効になっていると、VMware Tools を **vmware-config-tools.pl** で構成することができません。この場合、VMware Tools は該当する仮想マシン向けにネットワーク デバイスを正しく設定することができず、次のようなメッセージが表示されます。

```
Unloading pcnet32 module
unregister_netdevice: waiting for eth0 to become free
```

このメッセージは、仮想マシンを再起動するまで連続して繰り返し表示されます。Linux を実行する仮想マシンでこの問題を防ぐには、VMware Tools をインストールする前に IPv6 を無効にしておきます。

Linux を実行する仮想マシンで IPv6 を無効にするには

- 1 `/etc/sysconfig/network` ファイルに `NETWORKING_IPV6=yes` という行が含まれている場合は、この行を次のように変更します。

```
NETWORKING_IPV6=no
```

- 2 `/etc/modules.conf` ファイルに、次の行を追加します。

```
alias ipv6 off
alias net-pf-10 off
```

IPv6 を無効にすると、VMware Tools を正常にインストールし、構成できます。

既知の問題

ゲスト OS の解像度の変更

ゲスト OS のディスプレイの解像度を変更するには、root (`-su`) の権限で VMware Tools 構成プログラム **vmware-config-tools.pl** を再実行し、このプログラムが表示するリストから希望する解像度を選択します。X 構成ファイルを直接編集して変更を行うこともできます。

ゲスト OS 内での DHCP アドレスの取得

ゲスト OS が DHCP アドレスを取得しようとする、正常に動作せずに、リンクが壊れていることを示すエラー メッセージが表示されます。この問題を回避するには、

root (`su -`) の権限で、ゲスト OS 内の次のファイルをテキスト エディタを使用して編集します。

```
/etc/sysconfig/network-scripts/ifcfg-eth<n>
/etc/sysconfig/networking/devices/ifcfg-eth<n>
```

いずれのファイルも、`<n>` にはイーサネット アダプタの番号（たとえば、`eth0`）を指定します。

前述の 2 個のファイルにそれぞれ次の行を追加します。

```
MII_NOT_SUPPORTED=yes
```

次に、コマンド `ifup eth<n>`（`<n>` にはイーサネット アダプタの番号を指定）を実行するか、ゲスト OS を再起動します。

適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更

このゲスト OS のデフォルトのタイムキーピング構成では、問題が発生する可能性があります。Linux でのタイムキーピングのベスト プラクティスについては、ナレッジベースの記事（<http://kb.vmware.com/kb/1006427>）を参照してください。

ゲストのスクリーン セーバー

XFree86 3.x X サーバを稼働する Linux ホストでは、ゲスト OS でのスクリーン セーバーの使用は避けてください。ゲストでスクリーン セーバーを使用すると、大量の処理能力が必要なため、ホストの X サーバがフリーズする可能性があります。

異なるプロセッサへの移行

Linux 仮想マシンを AMD プロセッサ上で稼働するホストと Intel プロセッサ上で稼働するホストとの間で移行することはお勧めしません。

Linux ディストリビューションの多くは、インストール時に、インストール先の特定のプロセッサに適したカーネルを選択します。また、一部のディストリビューションは、デフォルトで GENERIC カーネルをインストールしますが、ユーザーが選択してインストールできるアーキテクチャ固有のカーネルも提供しています。このようなカーネルには、そのプロセッサでのみ利用できる命令が含まれている場合があります。異なる種類のプロセッサを使用するホストでこれらの命令を実行すると、悪影響が生じる可能性があります。

このため、AMD プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンは、Intel プロセッサを使用するホストに移行しても動作しないことがあります。逆に、Intel プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンを AMD プロセッサを使用するホストに移行しても動作しない場合があります。

これは仮想マシンに限られたものではなく、物理コンピュータでも発生する問題です。たとえば、Linux がインストールされたハード ドライブを AMD マシンから Intel マシンに移動した場合、そのドライブから起動しようとする問題が発生します。

Mandrake Linux 10.1

このセクションでは、Mandrake Linux 10.1 オペレーティングシステムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について記述しています。

32 ビット版

32 ビット版の Mandrake Linux 10.1 は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware Workstation**

Mandrake Linux 10.1 : Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

- **SMP** : Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way を試験的にサポート

- **VMware ACE**

Mandrake Linux 10.1 : ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

- **VMware GSX Server**

Mandrake Linux 10.1 : GSX Server 3.2、3.2.1

- **VMware Server**

Mandrake Linux 10.1 : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9

その他のサポート

- **SMP** : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9 で 2 way を試験的にサポート

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

Mandrake Linux 10.1 は、標準の Mandrake Linux ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。ここでは、標準のディストリビューション CD を使用したインストールの手順を説明します。ただし、起動フロッピーまたはネットワークから Mandrake Linux 10.1 をインストールすることもできます。ご使用の VMware 製品で PXE サーバがサポートされている場合は、PXE サーバからインストールすることもできます。

オペレーティングシステムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

注意 Mandrake Linux 10.1 のインストール中に、XFree86 の X サーバを選択するよう求められます。いずれを選択しても問題ありませんが、選択した X サーバは実行しないでください。代わりに、Mandrake Linux 10.1 のインストール完了後、ただちに VMware Tools パッケージをインストールします。これで、仮想マシン内でアクセラレータ機能付き SVGA X サーバを実行できます。

注意 VMware 仮想マシンで BusLogic 仮想 SCSI アダプタを使用した際、Linux ゲスト OS の多くでさまざまな問題が発生しています。このゲスト OS では、LSI Logic 仮想 SCSI アダプタを使用することをお勧めします。

注意 VMware VirtualCenter または vCenter Server を使用してゲスト OS をインストールする場合は、その仮想マシンを実行する VMware 製品 (ESX Server または VMware Server) で該当するゲスト OS がサポートされていることを確認してください。

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに Mandrake Linux 10.1 CD を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、Mandrake Linux 10.1 のインストールを開始します。
- 3 残りの手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。次の手順では必ず指示どおりの選択を行なってください。
- 4 テキスト モードのインストーラを使用します。オプションを選択するには起動画面で <F1> キーを押します。次に、**text** と入力してテキスト モードを選択します。

- 5 特殊な要件がないかぎり、パーティショニング時に、Mandrake Linux が自動的に領域を割り当てるようにしても問題ありません。[Use free space] を選択します。
- 6 [Summary] 画面では、グラフィカル インターフェイスを構成します。
[Graphical Interface] を選択してから [Do] をクリックし、次のように選択します。
 - ゲストで使用する解像度およびリフレッシュ レート
 - [VMware virtual video card]
 - パッケージにアップデートをインストールするかどうかについては、[No] を選択
 - 再起動時に X を起動させるかどうかについては、[No] を選択

これでゲスト OS としての Mandrake Linux 10.1 の基本インストールが完了です。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

IPv6

多くの Linux ディストリビューションでは、VMware Tools のインストール後に IPv6 が有効になっていると、VMware Tools を **vmware-config-tools.pl** で構成することができません。この場合、VMware Tools は該当する仮想マシン向けにネットワーク デバイスを正しく設定することができず、次のようなメッセージが表示されます。

```
Unloading pcnet32 module
unregister_netdevice: waiting for eth0 to become free
```

このメッセージは、仮想マシンを再起動するまで連続して繰り返し表示されます。Linux を実行する仮想マシンでこの問題を防ぐには、VMware Tools をインストールする前に IPv6 を無効にしておきます。

Linux を実行する仮想マシンで IPv6 を無効にするには

- 1 **/etc/sysconfig/network** ファイルに **NETWORKING_IPV6=yes** という行が含まれている場合は、この行を次のように変更します。

```
NETWORKING_IPV6=no
```

- 2 **/etc/modules.conf** ファイルに、次の行を追加します。

```
alias ipv6 off
alias net-pf-10 off
```

IPv6 を無効にすると、VMware Tools を正常にインストールし、構成できます。

既知の問題

ゲスト OS の解像度の変更

ゲスト OS のディスプレイの解像度を変更するには、root (`-su`) の権限で VMware Tools 構成プログラム `vmware-config-tools.pl` を再実行し、このプログラムが表示するリストから希望する解像度を選択します。X 構成ファイルを直接編集して変更を行うこともできます。

ゲスト OS 内での DHCP アドレスの取得

ゲスト OS が DHCP アドレスを取得しようとすると、正常に動作せずに、リンクが壊れていることを示すエラー メッセージが表示されます。この問題を回避するには、root (`su -`) の権限で、ゲスト OS 内の次のファイルをテキスト エディタを使用して編集します。

```
/etc/sysconfig/network-scripts/ifcfg-eth<n>
/etc/sysconfig/networking/devices/ifcfg-eth<n>
```

いずれのファイルも、<n> にはイーサネット アダプタの番号（たとえば、`eth0`）を指定します。

前述の 2 個のファイルにそれぞれ次の行を追加します。

```
MII_NOT_SUPPORTED=yes
```

次に、コマンド `ifup eth<n>`（<n> にはイーサネット アダプタの番号を指定）を実行するか、ゲスト OS を再起動します。

適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更

このゲスト OS のデフォルトのタイムキーピング構成では、問題が発生する可能性があります。Linux でのタイムキーピングのベスト プラクティスについては、ナレッジベースの記事（<http://kb.vmware.com/kb/1006427>）を参照してください。

ゲストのスクリーン セーバー

XFree86 3.x X サーバを稼動する Linux ホストでは、ゲスト OS でのスクリーン セーバーの使用は避けてください。ゲストでスクリーン セーバーを使用すると、大量の処理能力が必要なため、ホストの X サーバがフリーズする可能性があります。

異なるプロセッサへの移行

Linux 仮想マシンを AMD プロセッサ上で稼働するホストと Intel プロセッサ上で稼働するホストとの間で移行することはお勧めしません。

Linux ディストリビューションの多くは、インストール時に、インストール先の特定のプロセッサに適したカーネルを選択します。また、一部のディストリビューションは、デフォルトで GENERIC カーネルをインストールしますが、ユーザーが選択してインストールできるアーキテクチャ固有のカーネルも提供しています。このようなカーネルには、そのプロセッサでのみ利用できる命令が含まれている場合があります。異なる種類のプロセッサを使用するホストでこれらの命令を実行すると、悪影響が生じる可能性があります。

このため、AMD プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンは、Intel プロセッサを使用するホストに移行しても動作しないことがあります。逆に、Intel プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンを AMD プロセッサを使用するホストに移行しても動作しない場合があります。

これは仮想マシンに限られたものではなく、物理コンピュータでも発生する問題です。たとえば、Linux がインストールされたハード ドライブを AMD マシンから Intel マシンに移動した場合、そのドライブから起動しようとすると問題が発生します。

表示上の問題

Mandrake Linux 10.1 のコンソールでは、表示上の問題が発生する場合があります。この問題を解決するには、**lilo.conf** ファイルにある **vga=788** 行をコメントアウトする必要があります。

- 1 コマンドラインで **root** ユーザーとしてログインします。
- 2 **etc** ディレクトリに移動します。
- 3 テキスト エディタを使用して、**lilo.conf** ファイルの **vga=788** の行をコメントアウトします。

```
label="linux"
root=/dev/sda1
initrd=/boot/initrd.img
append="acpi=ht resume=/dev/sda5 splash=silent"
vga=788
read-only
```

- 4 コマンドラインで **lilo** と入力してファイルを実行します。
- 5 ゲストを再起動します。

これで、表示上の問題はすべて解決します。

Mandrake Linux 10

このセクションでは、Mandrake Linux 10 オペレーティングシステムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について記述しています。

32 ビット版

32 ビット版の Mandrake Linux 10 は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware Workstation**

Mandrake Linux 10 : Workstation 5.0、5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

- **SMP :** Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way を試験的にサポート

- **VMware ACE**

Mandrake Linux 10 : ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

- **VMware GSX Server**

Mandrake Linux 10 : GSX Server 3.2、3.2.1

- **VMware Server**

Mandrake Linux 10 : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9

その他のサポート

- **SMP :** VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9 で 2 way を試験的にサポート

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

Mandrake Linux 10 は、標準の Mandrake Linux ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。ここでは、標準のディストリビューション CD を使用したインストールの手順を説明します。ただし、起動フロッピーまたはネットワークから Mandrake Linux 10 をインストールすることもできます。ご使用の VMware 製品で PXE サーバがサポートされている場合は、PXE サーバからインストールすることもできます。

オペレーティングシステムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

注意	Mandrake Linux 10 のインストール中に、XFree86 の X サーバを選択するよう求められます。いずれを選択しても問題ありませんが、選択した X サーバは実行しないでください。代わりに、Mandrake Linux 10 のインストール完了後、ただちに VMware Tools パッケージをインストールします。これで、仮想マシン内でアクセラレータ機能付き SVGA X サーバを実行できます。
-----------	--

注意	VMware 仮想マシンで BusLogic 仮想 SCSI アダプタを使用した際、Linux ゲスト OS の多くでさまざまな問題が発生しています。このゲスト OS では、LSI Logic 仮想 SCSI アダプタを使用することをお勧めします。
-----------	--

注意	VMware VirtualCenter または vCenter Server を使用してゲスト OS をインストールする場合は、その仮想マシンを実行する VMware 製品 (ESX Server または VMware Server) で該当するゲスト OS がサポートされていることを確認してください。
-----------	---

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに Mandrake Linux 10 CD を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、Mandrake Linux 10 のインストールを開始します。
- 3 残りの手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。次の手順では必ず指示どおりの選択を行なってください。
- 4 テキスト モードのインストーラを使用します。オプションを選択するには起動画面で <F1> キーを押します。次に、**text** と入力してテキスト モードを選択します。

- 5 特殊な要件がないかぎり、パーティショニング時に、Mandrake Linux が自動的に領域を割り当てるようにしても問題ありません。[Use free space] を選択します。
- 6 [Summary] 画面では、グラフィカル インターフェイスを構成します。
[Graphical Interface] を選択してから [Do] をクリックし、次のように選択します。
 - ゲストで使用する解像度およびリフレッシュ レート
 - [VMware virtual video card]
 - パッケージにアップデートをインストールするかどうかについては、[No] を選択
 - 再起動時に X を起動させるかどうかについては、[No] を選択

これでゲスト OS としての Mandrake Linux 10 の基本インストールが完了です。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

IPv6

多くの Linux ディストリビューションでは、VMware Tools のインストール後に IPv6 が有効になっていると、VMware Tools を **vmware-config-tools.pl** で構成することができません。この場合、VMware Tools は該当する仮想マシン向けにネットワーク デバイスを正しく設定することができず、次のようなメッセージが表示されます。

```
Unloading pcnet32 module
unregister_netdevice: waiting for eth0 to become free
```

このメッセージは、仮想マシンを再起動するまで連続して繰り返し表示されます。Linux を実行する仮想マシンでこの問題を防ぐには、VMware Tools をインストールする前に IPv6 を無効にしておきます。

Linux を実行する仮想マシンで IPv6 を無効にするには

- 1 **/etc/sysconfig/network** ファイルに **NETWORKING_IPV6=yes** という行が含まれている場合は、この行を次のように変更します。

```
NETWORKING_IPV6=no
```

- 2 **/etc/modules.conf** ファイルに、次の行を追加します。

```
alias ipv6 off
alias net-pf-10 off
```

IPv6 を無効にすると、VMware Tools を正常にインストールし、構成できます。

既知の問題

ゲスト OS の解像度の変更

ゲスト OS のディスプレイの解像度を変更するには、root (`-su`) の権限で VMware Tools 構成プログラム `vmware-config-tools.pl` を再実行し、このプログラムが表示するリストから希望する解像度を選択します。X 構成ファイルを直接編集して変更を行うこともできます。

ゲスト OS 内での DHCP アドレスの取得

ゲスト OS が DHCP アドレスを取得しようとする、正常に動作せずに、リンクが壊れていることを示すエラー メッセージが表示されます。この問題を回避するには、root (`su -`) の権限で、ゲスト OS 内の次のファイルをテキスト エディタを使用して編集します。

```
/etc/sysconfig/network-scripts/ifcfg-eth<n>
/etc/sysconfig/networking/devices/ifcfg-eth<n>
```

いずれのファイルも、`<n>` にはイーサネット アダプタの番号（たとえば、`eth0`）を指定します。

前述の 2 個のファイルにそれぞれ次の行を追加します。

```
MII_NOT_SUPPORTED=yes
```

次に、コマンド `ifup eth<n>`（`<n>` にはイーサネット アダプタの番号を指定）を実行するか、ゲスト OS を再起動します。

適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更

このゲスト OS のデフォルトのタイムキーピング構成では、問題が発生する可能性があります。Linux でのタイムキーピングのベスト プラクティスについては、ナレッジベースの記事（<http://kb.vmware.com/kb/1006427>）を参照してください。

ゲストのスクリーン セーバー

XFree86 3.x X サーバを稼動する Linux ホストでは、ゲスト OS でのスクリーン セーバーの使用は避けてください。ゲストでスクリーン セーバーを使用すると、大量の処理能力が必要なため、ホストの X サーバがフリーズする可能性があります。

異なるプロセッサへの移行

Linux 仮想マシンを AMD プロセッサ上で稼働するホストと Intel プロセッサ上で稼働するホストとの間で移行することはお勧めしません。

Linux ディストリビューションの多くは、インストール時に、インストール先の特定のプロセッサに適したカーネルを選択します。また、一部のディストリビューションは、デフォルトで GENERIC カーネルをインストールしますが、ユーザーが選択してインストールできるアーキテクチャ固有のカーネルも提供しています。このようなカーネルには、そのプロセッサでのみ利用できる命令が含まれている場合があります。異なる種類のプロセッサを使用するホストでこれらの命令を実行すると、悪影響が生じる可能性があります。

このため、AMD プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンは、Intel プロセッサを使用するホストに移行しても動作しないことがあります。逆に、Intel プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンを AMD プロセッサを使用するホストに移行しても動作しない場合があります。

これは仮想マシンに限られたものではなく、物理コンピュータでも発生する問題です。たとえば、Linux がインストールされたハード ドライブを AMD マシンから Intel マシンに移動した場合、そのドライブから起動しようとすると問題が発生します。

Mandrake Linux 9.2

このセクションでは、Mandrake Linux 9.2 オペレーティング システムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について記述しています。

32 ビット版

32 ビット版の Mandrake Linux 9.2 は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware Workstation**

Mandrake Linux 9.2 : Workstation 5.0、5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

- **SMP :** Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way を試験的にサポート

- **VMware ACE**

Mandrake Linux 9.2 : ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

- **VMware GSX Server**

Mandrake Linux 9.2 : GSX Server 3.0、3.1、3.2、3.2.1

- **VMware Server**

Mandrake Linux 9.2 : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9

その他のサポート

- **SMP :** VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9 で 2 way を試験的にサポート

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

Mandrake Linux 9.2 は、標準の Mandrake Linux ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。ここでは、標準のディストリビューション CD を使用したインストールの手順を説明します。ただし、起動フロッピーまたはネットワークから Mandrake Linux 9.2 をインストールすることもできます。ご使用の VMware 製品で PXE サーバがサポートされている場合は、PXE サーバからインストールすることもできます。

オペレーティングシステムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

注意 Mandrake Linux 9.2 のインストール中に、XFree86 の X サーバを選択するよう求められます。いずれを選択しても問題ありませんが、選択した X サーバは実行しないでください。代わりに、Mandrake Linux 9.2 のインストール完了後、ただちに VMware Tools パッケージをインストールします。これで、仮想マシン内でアクセラレータ機能付き SVGA X サーバを実行できます。

注意 VMware 仮想マシンで BusLogic 仮想 SCSI アダプタを使用した際、Linux ゲスト OS の多くでさまざまな問題が発生しています。このゲスト OS では、LSI Logic 仮想 SCSI アダプタを使用することをお勧めします。

注意 VMware VirtualCenter または vCenter Server を使用してゲスト OS をインストールする場合は、その仮想マシンを実行する VMware 製品 (ESX Server または VMware Server) で該当するゲスト OS がサポートされていることを確認してください。

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに Mandrake Linux 9.2 CD を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンします。
- 3 このオペレーティングシステムの残りのインストール手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。

次の手順は、このゲストを VMware 仮想マシンにインストールする場合に固有の手順です。

- 4 起動画面をクリックし、<F1> キーを押してテキストモードを使用してインストールします。

- 5 コマンドラインで、**text** と入力して <Enter> キーを押します。
 - 6 [DrakX Partitioning] ウィザードで、次のソリューション画面を検索し、[Use free space] を選択して [Next] を選択します。
特別なディスク要件がない場合は、Mandrake Linux に領域を割り当てます。
 - 7 [Package Group Selection] 画面まで進んだら、VMware 製品をインストールしたコンピュータのタイプを選択します。
VMware 製品をラップトップコンピュータにインストールした場合、次のように選択します。
 - a [Advanced] をクリックします。
 - b [Individual package selection] を選択してから [Next] を選択します。
 - c [numlock] までスクロールし、アスタリスクを選択解除して [Next] を選択します。
ゲストをラップトップにインストールするときに numlock を無効にしなかった場合、numlock はゲストで常にアクティブになります。<Num Lock> キーを押して無効にすることはできません。
 - 8 [Summary] 画面に進んだら、[Graphical interface] を選択して [Do] を選択します。
 - 9 グラフィカル インターフェイスで次を選択します。
 - ゲストのモニタ
 - [VMware virtual video card]
 - [XFree 4.3]
 - ゲストの解像度とリフレッシュ レート
 - 構成をテストしない場合、[No]
 - 再起動時に X を起動しない場合、[No]
 グラフィカル インターフェイスの選択が完了すると、再び [Summary] 画面が表示されます。
 - 10 [Summary] 画面で [Next] を選択します。
 - 11 パッケージのアップデートをインストールしない場合は [No] を選択します。
 - 12 ゲスト OS としての Mandrake Linux 9.2 の基本インストールを完了するには、[Reboot] を選択します。
- これでゲスト OS としての Mandrake Linux 9.2 の基本インストールが完了です。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

IPv6

多くの Linux ディストリビューションでは、VMware Tools のインストール後に IPv6 が有効になっていると、VMware Tools を `vmware-config-tools.pl` で構成することができません。この場合、VMware Tools は該当する仮想マシン向けにネットワーク デバイスを正しく設定することができず、次のようなメッセージが表示されます。

```
Unloading pcnet32 module
unregister_netdevice: waiting for eth0 to become free
```

このメッセージは、仮想マシンを再起動するまで連続して繰り返し表示されます。Linux を実行する仮想マシンでこの問題を防ぐには、VMware Tools をインストールする前に IPv6 を無効にしておきます。

Linux を実行する仮想マシンで IPv6 を無効にするには

- 1 `/etc/sysconfig/network` ファイルに `NETWORKING_IPV6=yes` という行が含まれている場合は、この行を次のように変更します。

```
NETWORKING_IPV6=no
```

- 2 `/etc/modules.conf` ファイルに、次の行を追加します。

```
alias ipv6 off
alias net-pf-10 off
```

IPv6 を無効にすると、VMware Tools を正常にインストールし、構成できます。

注意 Mandrake Linux 9.2 ゲストでは、Linux コンソールから VMware Tools をインストールしてください。VMware Tools のインストールを完了するまでは、X を起動しないでください。

注意 ゲスト OS のインストール時に（前述のインストールの手順に従う）XFree 4.3 X サーバをインストールした場合、VMware Tools のインストール スクリプトを開始すると (`vmware-tools-distrib` ディレクトリで `./vmware-install.pl` と入力)、次のメッセージが表示されます。

```
Found an installed version of the VMware SVGA driver for XFree86 4.
Some versions of this driver included with the XFree86 4 distributions
do not work properly. Would you like to install a stable (but possibly
older) version of the driver over the currently installed one?
```

仮想マシンをデュアル ブートする場合は、[Yes] を選択してドライバをインストールします。再度 [Yes] を選択すると、既存のビデオ ドライバファイルのバックアップが作成され、**XF86Config-4.dist** ファイルが **XF86Config-4.v**m にコピーされます。後者のファイルは、仮想マシンをデュアル ブートする際に使用されます。

仮想マシンをデュアル ブートしない場合は、[No] を選択して既存のドライバを残します。

注意 VMware Tools をインストールして構成すると、**lspci** の場所を入力するよう構成プログラムによって求められます。このプロンプト画面が表示されたら、次のパスを入力します。

/usr/bin/lspcidrake

既知の問題

適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更

このゲスト OS のデフォルトのタイムキーピング構成では、問題が発生する可能性があります。Linux でのタイムキーピングのベスト プラクティスについては、ナレッジベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/1006427>) を参照してください。

ゲストのスクリーン セーバー

XFree86 3.x X サーバを稼動する Linux ホストでは、ゲスト OS でのスクリーン セーバーの使用は避けてください。ゲストでスクリーン セーバーを使用すると、大量の処理能力が必要なため、ホストの X サーバがフリーズする可能性があります。

異なるプロセッサへの移行

Linux 仮想マシンを AMD プロセッサ上で稼働するホストと Intel プロセッサ上で稼働するホストとの間で移行することはお勧めしません。

Linux ディストリビューションの多くは、インストール時に、インストール先の特定のプロセッサに適したカーネルを選択します。また、一部のディストリビューションは、デフォルトで GENERIC カーネルをインストールしますが、ユーザーが選択してインストールできるアーキテクチャ固有のカーネルも提供しています。このようなカーネルには、そのプロセッサでのみ利用できる命令が含まれている場合があります。異なる種類のプロセッサを使用するホストでこれらの命令を実行すると、悪影響が生じる可能性があります。

このため、AMD プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンは、Intel プロセッサを使用するホストに移行しても動作しないことがあります。逆に、Intel プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンを AMD プロセッサを使用するホストに移行しても動作しない場合があります。

これは仮想マシンに限られたものではなく、物理コンピュータでも発生する問題です。たとえば、Linux がインストールされたハード ドライブを AMD マシンから Intel マシンに移動した場合、そのドライブから起動しようとする問題が発生します。

Mandrake Linux 9.1

このセクションでは、Mandrake Linux 9.1 オペレーティング システムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について記述しています。

32 ビット版

32 ビット版の Mandrake Linux 9.1 は、次の VMware 製品でサポートされています。

■ VMware GSX Server

Mandrake Linux 9.1 : GSX Server 3.1、3.2、3.2.1

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

Mandrake Linux 9.1 は、標準の Mandrake Linux ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。ここでは、標準のディストリビューション CD を使用したインストールの手順を説明します。ただし、起動フロッピーまたはネットワークから Mandrake Linux 9.1 をインストールすることもできます。ご使用の VMware 製品で PXE サーバがサポートされている場合は、PXE サーバからインストールすることもできます。

オペレーティング システムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

注意 Mandrake Linux 9.1 のインストール中に、XFree86 の X サーバを選択するように求められます。いずれを選択しても問題ありませんが、選択した X サーバは実行しないでください。代わりに、Mandrake Linux 9.1 のインストール完了後、ただちに VMware Tools パッケージをインストールします。これで、仮想マシン内でアクセラレータ機能付き SVGA X サーバを実行できます。

注意 VMware 仮想マシンで BusLogic 仮想 SCSI アダプタを使用した際、Linux ゲスト OS の多くでさまざまな問題が発生しています。このゲスト OS では、LSI Logic 仮想 SCSI アダプタを使用することをお勧めします。

注意 VMware VirtualCenter または vCenter Server を使用してゲスト OS をインストールする場合は、その仮想マシンを実行する VMware 製品 (ESX Server または GSX Server) で該当するゲスト OS がサポートされていることを確認してください。

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに Mandrake Linux 9.1 CD を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、Mandrake Linux 9.1 のインストールを開始します。
- 3 残りの手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。次の手順では必ず指示どおりの選択を行なってください。
- 4 テキスト モードのインストーラを使用します。オプションを選択するには起動画面で <F1> キーを押します。次に、**text** と入力してテキスト モードを選択します。
- 5 [Expert Installer] を使用します。
- 6 特殊な要件がないかぎり、パーティショニング時に、Mandrake Linux が自動的に領域を割り当てるようにしても問題ありません。[Use free space] をクリックします。
- 7 **VMware GSX Server** : ブート ローダの選択では、[LILO with text menu] を選択します。グラフィカルバージョンの LILO は仮想マシンをハング アップさせるため、使用しないでください。
- 8 カスタム ブート ディスクの作成が求められますが、作成しないでください。
- 9 インストールの最後の方で、ファイルのコピーが完了したあとに [Monitor Setup] 画面が表示されます。ゲストで使用する解像度およびリフレッシュ レートを選択します。[VMware virtual video card] を選択します。
- 10 2 つの XFree86 X サーバのいずれかをインストールするように選択できますが、ここでは [XFree 4.2.1] を選択します。このドライバは、VMware SVGA ドライバを認識します。
- 11 設定した構成をテストするかどうかについて、[No] を選択します。
- 12 再起動時に X を起動するかどうかについて、[No] を選択します。
- 13 パッケージにアップデートをインストールするかどうかについて、[No] を選択します。

これでゲスト OS としての Mandrake Linux 9.1 の基本インストールが完了です。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

IPv6

多くの Linux ディストリビューションでは、VMware Tools のインストール後に IPv6 が有効になっていると、VMware Tools を `vmware-config-tools.pl` で構成することができません。この場合、VMware Tools は該当する仮想マシン向けにネットワーク デバイスを正しく設定することができず、次のようなメッセージが表示されます。

```
Unloading pcnet32 module
unregister_netdevice: waiting for eth0 to become free
```

このメッセージは、仮想マシンを再起動するまで連続して繰り返し表示されます。Linux を実行する仮想マシンでこの問題を防ぐには、VMware Tools をインストールする前に IPv6 を無効にしておきます。

Linux を実行する仮想マシンで IPv6 を無効にするには

- 1 `/etc/sysconfig/network` ファイルに `NETWORKING_IPV6=yes` という行が含まれている場合は、この行を次のように変更します。

```
NETWORKING_IPV6=no
```

- 2 `/etc/modules.conf` ファイルに、次の行を追加します。

```
alias ipv6 off
alias net-pf-10 off
```

IPv6 を無効にすると、VMware Tools を正常にインストールし、構成できます。

注意 Mandrake Linux 9.1 ゲストでは、Linux コンソールから VMware Tools をインストールしてください。VMware Tools のインストールを完了するまでは、X を起動しないでください。

注意 ゲスト OS のインストール時に（前述のインストールの手順に従う）XFree 4.2.0 X サーバをインストールした場合、VMware Tools のインストール スクリプトを開始すると（`vmware-tools-distrib` ディレクトリで `./vmware-install.pl` と入力）、次のメッセージが表示されます。

```
Found an installed version of the VMware SVGA driver for XFree86 4.
Some versions of this driver included with the XFree86 4 distributions
do not work properly. Would you like to install a stable (but possibly
older) version of the driver over the currently installed one?
```

仮想マシンをデュアル ブートする場合は、[Yes] を選択してドライバをインストールします。再度 [Yes] を選択すると、既存のビデオ ドライバ ファイルのバックアップが作成され、`XF86Config-4.dist` ファイルが `XF86Config-4.vm` にコピーされます。後者のファイルは、仮想マシンをデュアル ブートする際に使用されます。

仮想マシンをデュアル ブートしない場合は、[No] を選択して既存のドライバを残します。

注意 VMware Tools をインストールして構成すると、**lspci** の場所を入力するよう構成プログラムによって求められます。このプロンプト画面が表示されたら、次のパスを入力します。

`/usr/bin/lspcidrake`

既知の問題

適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更

このゲスト OS のデフォルトのタイムキーピング構成では、問題が発生する可能性があります。Linux でのタイムキーピングのベスト プラクティスについては、ナレッジベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/1006427>) を参照してください。

ゲストのスクリーン セーバー

XFree86 3.x X サーバを稼働する Linux ホストでは、ゲスト OS でのスクリーン セーバーの使用は避けてください。ゲストでスクリーン セーバーを使用すると、大量の処理能力が必要なため、ホストの X サーバがフリーズする可能性があります。

異なるプロセッサへの移行

Linux 仮想マシンを AMD プロセッサ上で稼働するホストと Intel プロセッサ上で稼働するホストとの間で移行することはお勧めしません。

Linux ディストリビューションの多くは、インストール時に、インストール先の特定のプロセッサに適したカーネルを選択します。また、一部のディストリビューションは、デフォルトで GENERIC カーネルをインストールしますが、ユーザーが選択してインストールできるアーキテクチャ固有のカーネルも提供しています。このようなカーネルには、そのプロセッサでのみ利用できる命令が含まれている場合があります。異なる種類のプロセッサを使用するホストでこれらの命令を実行すると、悪影響が生じる可能性があります。

このため、AMD プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンは、Intel プロセッサを使用するホストに移行しても動作しないことがあります。逆に、Intel プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンを AMD プロセッサを使用するホストに移行しても動作しない場合があります。

これは仮想マシンに限られたものではなく、物理コンピュータでも発生する問題です。たとえば、Linux がインストールされたハード ドライブを AMD マシンから Intel マシンに移動した場合、そのドライブから起動しようとする問題が発生します。

Mandrake Linux 9.0

このセクションでは、Mandrake Linux 9.0 オペレーティング システムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について記述しています。

32 ビット版

32 ビット版の Mandrake Linux 9.0 は、次の VMware 製品でサポートされています。

■ VMware Workstation

Mandrake Linux 9.0 : Workstation 4.0、4.0.1、4.0.2、4.0.5、4.5、4.5.1、4.5.2、4.5.3、5.0、5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

- **SMP :** Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way を試験的にサポート

■ VMware ACE

Mandrake Linux 9.0 : ACE 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

■ VMware GSX Server

Mandrake Linux 9.0 : GSX Server 3.0、3.1、3.2、3.2.1

■ VMware Server

Mandrake Linux 9.0 : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9

その他のサポート

- **SMP :** VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9 で 2 way を試験的にサポート

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

Mandrake Linux 9.0 は、標準の Mandrake Linux ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。ここでは、標準のディストリビューション CD を使用したインストールの手順を説明します。ただし、起動フロッピーまたはネットワークから Mandrake Linux 9.0 をインストールすることもできます。ご使用の VMware 製品で PXE サーバがサポートされている場合は、PXE サーバからインストールすることもできます。

オペレーティングシステムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

注意 Mandrake Linux 9.0 のインストール中に、XFree86 の X サーバを選択するよう求められます。いずれを選択しても問題ありませんが、選択した X サーバは実行しないでください。代わりに、Mandrake Linux 9.0 のインストール完了後、ただちに VMware Tools パッケージをインストールします。これで、仮想マシン内でアクセラレータ機能付き SVGA X サーバを実行できます。

注意 VMware 仮想マシンで BusLogic 仮想 SCSI アダプタを使用した際、Linux ゲスト OS の多くでさまざまな問題が発生しています。このゲスト OS では、LSI Logic 仮想 SCSI アダプタを使用することをお勧めします。

注意 VMware VirtualCenter または vCenter Server を使用してゲスト OS をインストールする場合は、その仮想マシンを実行する VMware 製品 (ESX Server または VMware Server) で該当するゲスト OS がサポートされていることを確認してください。

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに Mandrake Linux 9.0 CD を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、Mandrake Linux 9.0 のインストールを開始します。
- 3 残りの手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。次の手順では必ず指示どおりの選択を行なってください。
- 4 テキスト モードのインストーラを使用します。オプションを選択するには起動画面で <F1> キーを押します。次に、**text** と入力してテキスト モードを選択します。
- 5 [Expert Installer] を使用します。

- 6 特殊な要件がないかぎり、パーティショニング時に、Mandrake Linux が自動的に領域を割り当てるようにしても問題ありません。[Use free space] をクリックします。
- 7 **VMware GSX Server** : ブート ロードの選択では、[LILO with text menu] を選択します。グラフィカルバージョンの LILO は仮想マシンをハング アップさせるため、使用しないでください。
- 8 カスタム ブート ディスクの作成が求められますが、作成しないでください。
- 9 インストールの最後の方で、ファイルのコピーが完了したあとに [Monitor Setup] 画面が表示されます。ゲストで使用する解像度およびリフレッシュ レートを選択します。[VMware virtual video card] を選択します。
- 10 2 つの XFree86 X サーバのいずれかをインストールするように選択できますが、ここでは [XFree 4.2.1] を選択します。このドライバは、VMware SVGA ドライバを認識します。
- 11 設定した構成をテストするかどうかについて、[No] を選択します。
- 12 再起動時に X を起動するかどうかについて、[No] を選択します。
- 13 パッケージにアップデートをインストールするかどうかについて、[No] を選択します。

これでゲスト OS としての Mandrake Linux 9.0 の基本インストールが完了です。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

IPv6

多くの Linux ディストリビューションでは、VMware Tools のインストール後に IPv6 が有効になっていると、VMware Tools を **vmware-config-tools.pl** で構成することができません。この場合、VMware Tools は該当する仮想マシン向けにネットワーク デバイスを正しく設定することができず、次のようなメッセージが表示されます。

```
Unloading pcnet32 module
unregister_netdevice: waiting for eth0 to become free
```

このメッセージは、仮想マシンを再起動するまで連続して繰り返し表示されます。Linux を実行する仮想マシンでこの問題を防ぐには、VMware Tools をインストールする前に IPv6 を無効にしておきます。

Linux を実行する仮想マシンで IPv6 を無効にするには

- 1 `/etc/sysconfig/network` ファイルに `NETWORKING_IPV6=yes` という行が含まれている場合は、この行を次のように変更します。

```
NETWORKING_IPV6=no
```

- 2 `/etc/modules.conf` ファイルに、次の行を追加します。

```
alias ipv6 off
alias net-pf-10 off
```

IPv6 を無効にすると、VMware Tools を正常にインストールし、構成できます。

注意 Mandrake Linux 9.0 ゲストでは、Linux コンソールから VMware Tools をインストールしてください。VMware Tools のインストールを完了するまでは、X を起動しないでください。

注意 ゲスト OS のインストール時に（前述のインストールの手順に従う）XFree 4.2.0 X サーバをインストールした場合、VMware Tools のインストール スクリプトを開始すると（`vmware-tools-distrib` ディレクトリで `./vmware-install.pl` と入力）、次のメッセージが表示されます。

```
Found an installed version of the VMware SVGA driver for XFree86 4. Some
versions of this driver included with the XFree86 4 distributions do not work
properly. Would you like to install a stable (but possibly older) version of
the driver over the currently installed one?
```

仮想マシンをデュアル ブートする場合は、[Yes] を選択してドライバをインストールします。再度 [Yes] を選択すると、既存のビデオ ドライバファイルのバックアップが作成され、`XF86Config-4.dist` ファイルが `XF86Config-4.vm` にコピーされます。後者のファイルは、仮想マシンをデュアル ブートする際に使用されます。

仮想マシンをデュアル ブートしない場合は、[No] を選択して既存のドライバを残します。

注意 VMware Tools をインストールして構成すると、`lspci` の場所を入力するよう構成プログラムによって求められます。このプロンプト画面が表示されたら、次のパスを入力します。

```
/usr/bin/lspcidrake
```

既知の問題

適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更

このゲスト OS のデフォルトのタイムキーピング構成では、問題が発生する可能性があります。Linux でのタイムキーピングのベスト プラクティスについては、ナレッジベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/1006427>) を参照してください。

ゲストのスクリーンセーバー

XFree86 3.x X サーバを稼働する Linux ホストでは、ゲスト OS でのスクリーンセーバーの使用は避けてください。ゲストでスクリーンセーバーを使用すると、大量の処理能力が必要なため、ホストの X サーバがフリーズする可能性があります。

異なるプロセッサへの移行

Linux 仮想マシンを AMD プロセッサ上で稼働するホストと Intel プロセッサ上で稼働するホストとの間で移行することはお勧めしません。

Linux ディストリビューションの多くは、インストール時に、インストール先の特定のプロセッサに適したカーネルを選択します。また、一部のディストリビューションは、デフォルトで GENERIC カーネルをインストールしますが、ユーザーが選択してインストールできるアーキテクチャ固有のカーネルも提供しています。このようなカーネルには、そのプロセッサでのみ利用できる命令が含まれている場合があります。異なる種類のプロセッサを使用するホストでこれらの命令を実行すると、悪影響が生じる可能性があります。

このため、AMD プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンは、Intel プロセッサを使用するホストに移行しても動作しないことがあります。逆に、Intel プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンを AMD プロセッサを使用するホストに移行しても動作しない場合があります。

これは仮想マシンに限られたものではなく、物理コンピュータでも発生する問題です。たとえば、Linux がインストールされたハードドライブを AMD マシンから Intel マシンに移動した場合、そのドライブから起動しようとすると問題が発生します。

Mandrake Linux 8.2

このセクションでは、Mandrake Linux 8.2 オペレーティング システムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について記述しています。

32 ビット版

32 ビット版の Mandrake Linux 8.2 は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware Workstation**

Mandrake Linux 8.2 : Workstation 4.0、4.0.1、4.0.2、4.0.5、4.5、4.5.1、4.5.2、4.5.3、5.0、5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

- **SMP :** Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way を試験的にサポート

- **VMware ACE**

Mandrake Linux 8.2 : ACE 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

- **VMware GSX Server**

Mandrake Linux 8.2 : GSX Server 3.0、3.1、3.2、3.2.1

- **VMware Server**

Mandrake Linux 8.2 : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

Mandrake Linux 8.2 は、標準の Mandrake Linux ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。ここでは、標準のディストリビューション CD を使用したインストールの手順を説明します。ただし、起動フロッピーまたはネットワークから Mandrake Linux 8.2 をインストールすることもできます。ご使用の VMware 製品で PXE サーバがサポートされている場合は、PXE サーバからインストールすることもできます。

オペレーティングシステムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

注意 Mandrake Linux 8.2 のインストール中に、XFree86 の X サーバを選択するよう求められます。いずれを選択しても問題ありませんが、選択した X サーバは実行しないでください。代わりに、Mandrake Linux 8.2 のインストール完了後、ただちに VMware Tools パッケージをインストールします。これで、仮想マシン内でアクセラレータ機能付き SVGA X サーバを実行できます。

注意 VMware 仮想マシンで BusLogic 仮想 SCSI アダプタを使用した際、Linux ゲスト OS の多くでさまざまな問題が発生しています。このゲスト OS では、LSI Logic 仮想 SCSI アダプタを使用することをお勧めします。

注意 VMware VirtualCenter または vCenter Server を使用してゲスト OS をインストールする場合は、その仮想マシンを実行する VMware 製品（ESX Server または VMware Server）で該当するゲスト OS がサポートされていることを確認してください。

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに Mandrake Linux 8.2 CD を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、Mandrake Linux 8.2 のインストールを開始します。
- 3 残りの手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。次の手順では必ず指示どおりの選択を行なってください。
- 4 [Expert Installer] を使用します。
- 5 特殊な要件がないかぎり、パーティショニング時に、Mandrake Linux が自動的に領域を割り当てるようにしても問題ありません。
- 6 ブート ロードの選択では、[LILO with text menu] を選択します。グラフィカルバージョンの LILO は仮想マシンをハングアップさせるため、使用しないでください。
- 7 カスタム ブート ディスクの作成が求められますが、作成しないでください。
- 8 2 つの XFree86 X サーバのいずれかをインストールするように選択できますが、ここでは [XFree 4.2.0] を選択します。このドライバは、VMware SVGA ドライバを認識します。
- 9 インストールの最後の方で、ファイルのコピーが完了したあとに [Monitor Setup] 画面が表示されます。ゲストで使用する解像度およびリフレッシュ レートを選択します。
- 10 設定した構成をテストするかどうかについて、[No] を選択します。

- 11 システム アップデートをインストールするかどうかについて、[No] を選択します。
- 12 再起動時に X を起動するかどうかについて、[No] を選択します。

これでゲスト OS としての Mandrake Linux 8.2 の基本インストールが完了です。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

IPv6

多くの Linux ディストリビューションでは、VMware Tools のインストール後に IPv6 が有効になっていると、VMware Tools を **vmware-config-tools.pl** で構成することができません。この場合、VMware Tools は該当する仮想マシン向けにネットワーク デバイスを正しく設定することができず、次のようなメッセージが表示されます。

```
Unloading pcnet32 module
unregister_netdevice: waiting for eth0 to become free
```

このメッセージは、仮想マシンを再起動するまで連続して繰り返し表示されます。Linux を実行する仮想マシンでこの問題を防ぐには、VMware Tools をインストールする前に IPv6 を無効にしておきます。

Linux を実行する仮想マシンで IPv6 を無効にするには

- 1 **/etc/sysconfig/network** ファイルに **NETWORKING_IPV6=yes** という行が含まれている場合は、この行を次のように変更します。

```
NETWORKING_IPV6=no
```

- 2 **/etc/modules.conf** ファイルに、次の行を追加します。

```
alias ipv6 off
alias net-pf-10 off
```

IPv6 を無効にすると、VMware Tools を正常にインストールし、構成できます。

注意 Mandrake Linux 8.2 ゲストでは、Linux コンソールから VMware Tools をインストールしてください。VMware Tools のインストールを完了するまでは、X を起動しないでください。

注意 ゲスト OS のインストール時に（前述のインストールの手順に従う）XFree 4.2.0 X サーバをインストールした場合、VMware Tools のインストール スクリプトを開始すると（`vmware-tools-distrib` ディレクトリで `./vmware-install.pl` と入力）、次のメッセージが表示されます。

Found an installed version of the VMware SVGA driver for XFree86 4. Some versions of this driver included with the XFree86 4 distributions do not work properly. Would you like to install a stable (but possibly older) version of the driver over the currently installed one?

仮想マシンをデュアル ブートする場合は、[Yes] を選択してドライバをインストールします。再度 [Yes] を選択すると、既存のビデオ ドライバファイルのバックアップが作成され、`XF86Config-4.dist` ファイルが `XF86Config-4.vm` にコピーされます。後者のファイルは、仮想マシンをデュアル ブートする際に使用されます。

仮想マシンをデュアル ブートしない場合は、[No] を選択して既存のドライバを残します。

注意 VMware Tools をインストールして構成すると、`lspci` の場所を入力するよう構成プログラムによって求められます。このプロンプト画面が表示されたら、次のパスを入力します。

`/usr/bin/lspcidrake`

既知の問題

適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更

このゲスト OS のデフォルトのタイムキーピング構成では、問題が発生する可能性があります。Linux でのタイムキーピングのベスト プラクティスについては、ナレッジベースの記事（<http://kb.vmware.com/kb/1006427>）を参照してください。

ゲストのスクリーン セーバー

XFree86 3.x X サーバを稼動する Linux ホストでは、ゲスト OS でのスクリーン セーバーの使用は避けてください。ゲストでスクリーン セーバーを使用すると、大量の処理能力が必要なため、ホストの X サーバがフリーズする可能性があります。

異なるプロセッサへの移行

Linux 仮想マシンを AMD プロセッサ上で稼働するホストと Intel プロセッサ上で稼働するホストとの間で移行することはお勧めしません。

Linux ディストリビューションの多くは、インストール時に、インストール先の特定のプロセッサに適したカーネルを選択します。また、一部のディストリビューションは、デフォルトで GENERIC カーネルをインストールしますが、ユーザーが選択してインストールできるアーキテクチャ固有のカーネルも提供しています。このようなカーネルには、そのプロセッサでのみ利用できる命令が含まれている場合があります。異なる種類のプロセッサを使用するホストでこれらの命令を実行すると、悪影響が生じる可能性があります。

このため、AMD プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンは、Intel プロセッサを使用するホストに移行しても動作しないことがあります。逆に、Intel プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンを AMD プロセッサを使用するホストに移行しても動作しない場合があります。

これは仮想マシンに限られたものではなく、物理コンピュータでも発生する問題です。たとえば、Linux がインストールされたハード ドライブを AMD マシンから Intel マシンに移動した場合、そのドライブから起動しようとすると問題が発生します。

Mandrake Linux 8.0 および 8.1

このセクションでは、Mandrake Linux 8.0 および 8.1 オペレーティング システムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について記述しています。

32 ビット版

32 ビット版の Mandrake Linux 8.0 および 8.1 は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware GSX Server**

Mandrake Linux 8.0、8.1 : GSX Server 3.0、3.1、3.2、3.2.1

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

Mandrake Linux 8.0 または 8.1 は、標準の Mandrake Linux ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。ここでは、標準のディストリビューション CD を使用したインストールの手順を説明します。ただし、起動フロッピーまたはネットワークから Mandrake Linux 8.0 または 8.1 をインストールすることもできます。ご使用の VMware 製品で PXE サーバがサポートされている場合は、PXE サーバからインストールすることもできます。

オペレーティング システムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

注意 Mandrake Linux 8.0 または 8.1 のインストール中に、XFree86 の X サーバを選択するように求められます。いずれを選択しても問題ありませんが、選択した X サーバは実行しないでください。代わりに、Mandrake Linux 8.0 または 8.1 のインストール完了後、ただちに VMware Tools パッケージをインストールし、シンボリック リンク (後述) を 1 つ作成します。これで、仮想マシン内でアクセラレータ機能付き SVGA X サーバを実行できます。

注意 VMware 仮想マシンで BusLogic 仮想 SCSI アダプタを使用した際、Linux ゲスト OS の多くでさまざまな問題が発生しています。このゲスト OS では、LSI Logic 仮想 SCSI アダプタを使用することをお勧めします。

注意 VMware VirtualCenter または vCenter Server を使用してゲスト OS をインストールする場合は、その仮想マシンを実行する VMware 製品（ESX Server または GSX Server）で該当するゲスト OS がサポートされていることを確認してください。

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに Mandrake Linux 8.0 または 8.1 CD を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、Mandrake Linux 8.0 または 8.1 のインストールを開始します。
- 3 残りの手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。次の手順では必ず指示どおりの選択を行なってください。
- 4 [Expert Installer] を使用します。
- 5 特殊な要件がないかぎり、パーティショニング時に、Mandrake Linux が自動的に領域を割り当てるようにしても問題ありません。
- 6 ブート ロードの選択では、[LILO with text menu] を選択します。グラフィカルバージョンの LILO は仮想マシンをハングアップさせるため、使用しないでください。
- 7 [Select a Graphic Card] 画面で、[Other] - [Generic VGA compatible] を選択します。
- 8 インストールの最後の方で、ファイルのコピーが完了したあとに [Monitor Setup] 画面が表示されます。[Super VGA, 800x600 @ 56 Hz] を選択します。
- 9 再起動時に X を起動するかどうかについて、[No] を選択します。

これでゲスト OS としての Mandrake Linux 8.0 または 8.1 の基本インストールが完了です。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事（<http://kb.vmware.com/kb/340>）にある該当するリンク先の説明に従ってください。

IPv6

多くの Linux ディストリビューションでは、VMware Tools のインストール後に IPv6 が有効になっていると、VMware Tools を `vmware-config-tools.pl` で構成することができません。この場合、VMware Tools は該当する仮想マシン向けにネットワーク デバイスを正しく設定することができず、次のようなメッセージが表示されます。

```
Unloading pcnet32 module
unregister_netdevice: waiting for eth0 to become free
```

このメッセージは、仮想マシンを再起動するまで連続して繰り返し表示されます。Linux を実行する仮想マシンでこの問題を防ぐには、VMware Tools をインストールする前に IPv6 を無効にしておきます。

Linux を実行する仮想マシンで IPv6 を無効にするには

- 1 `/etc/sysconfig/network` ファイルに `NETWORKING_IPV6=yes` という行が含まれている場合は、この行を次のように変更します。

```
NETWORKING_IPV6=no
```

- 2 `/etc/modules.conf` ファイルに、次の行を追加します。

```
alias ipv6 off
alias net-pf-10 off
```

IPv6 を無効にすると、VMware Tools を正常にインストールし、構成できます。

注意 Mandrake Linux 8.0 または 8.1 ゲストでは、Linux コンソールから VMware Tools をインストールしてください。VMware Tools のインストールを完了するまでは、XFree86 構成ファイルへのシンボリック リンクを設定しないでください。

XFree86 へのシンボリック リンクの設定

必ず root (`su -`) の権限でログインしてから、次の手順に従って、正しい XFree86 構成ファイルにシンボリック リンクを設定してください。

```
cd /etc
ln -s /etc/X11/XF86Config.vm XF86Config
```

`startx` コマンドを使用して、X サーバを起動します。

既知の問題

Mandrake Linux 8.0 のインストールのハング アップ

Mandrake Linux 8.0 のインストールが、**running /sbin/loader** の箇所で突然ハングアップすることがあります。これは、初期バージョンの 2.4 Linux カーネルのバグが原因です。カーネル 2.4.5 でこのバグは修正されたため、このカーネルをベースとしたディストリビューションは、問題なくインストールできます。

初期の 2.4 シリーズ カーネルに対して回避策があります。Linux カーネルのバグは CD-ROM ドライブが関連しているわけではありませんが、VMware 構成の仮想 DVD/CD-ROM ドライブの設定を変更することにより問題を回避できます。

仮想マシンをパワーオフして、仮想マシンのウィンドウを閉じます。該当する仮想マシンの構成ファイル（Windows ホストでは **.vmx** ファイル、Linux ホストでは **.cfg** ファイル）をテキスト エディタで開き、次の行を追加します。

```
cdrom.minvirtualtime=100
```

ファイルを保存します。これで、前述の手順でゲスト OS をインストールできます。前述の設定は、パフォーマンスを低下させることがあるため、ゲスト OS のインストール後に構成ファイルから削除してください。

Mandrake Linux 8.0 のシャットダウン

ゲスト OS のシャットダウン処理が、ネットワーク インターフェイスのシャットダウンの時点でハングアップすることがあります。これは、Mandrake Linux 8.0 のシャットダウン スクリプトによる **dhcpcd** の処理方法が原因です。この問題は、Mandrake Linux 8.1 ゲストでは発生しません。

適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更

このゲスト OS のデフォルトのタイムキーピング構成では、問題が発生する可能性があります。Linux でのタイムキーピングのベスト プラクティスについては、ナレッジベースの記事（<http://kb.vmware.com/kb/1006427>）を参照してください。

ゲストのスクリーン セーバー

XFree86 3.x X サーバを稼動する Linux ホストでは、ゲスト OS でのスクリーン セーバーの使用は避けてください。ゲストでスクリーン セーバーを使用すると、大量の処理能力が必要なため、ホストの X サーバがフリーズする可能性があります。

異なるプロセッサへの移行

Linux 仮想マシンを AMD プロセッサ上で稼働するホストと Intel プロセッサ上で稼働するホストとの間で移行することはお勧めしません。

Linux ディストリビューションの多くは、インストール時に、インストール先の特定のプロセッサに適したカーネルを選択します。また、一部のディストリビューションは、デフォルトで GENERIC カーネルをインストールしますが、ユーザーが選択してインストールできるアーキテクチャ固有のカーネルも提供しています。このようなカーネルには、そのプロセッサでのみ利用できる命令が含まれている場合があります。異なる種類のプロセッサを使用するホストでこれらの命令を実行すると、悪影響が生じる可能性があります。

このため、AMD プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンは、Intel プロセッサを使用するホストに移行しても動作しないことがあります。逆に、Intel プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンを AMD プロセッサを使用するホストに移行しても動作しない場合があります。

これは仮想マシンに限られたものではなく、物理コンピュータでも発生する問題です。たとえば、Linux がインストールされたハード ドライブを AMD マシンから Intel マシンに移動した場合、そのドライブから起動しようとすると問題が発生します。

Novell Linux Desktop 9

このセクションでは、Novell Linux Desktop 9 オペレーティングシステムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について記述しています。

32 ビット版

32 ビット版の Novell Linux Desktop 9 は、次の VMware 製品でサポートされています。

■ VMware Workstation

Novell Linux Desktop 9 : Workstation 5.0、5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

アップデート版のサポート

■ **Service Pack 1** : Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

■ **Service Pack 2** : Workstation 5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

■ **SMP** : Workstation 5.5、5.5.1、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way を試験的にサポート

■ VMware ACE

Novell Linux Desktop 9 : ACE 1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

■ VMware Server

Novell Linux Desktop 9 : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9

アップデート版のサポート

■ **Service Pack 2** : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9

その他のサポート

■ **SMP** : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9 で 2 way を試験的にサポート

■ VMware Fusion

Novell Linux Desktop 9 : Fusion 1.0、1.1、1.1.1、1.1.2、1.1.3、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

アップデート版のサポート

■ **Service Pack 2** : Fusion 1.0、1.1、1.1.1、1.1.2、1.1.3、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

Novell Linux Desktop 9 は、標準の Novell Linux Desktop ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。ここでは、標準のディストリビューション CD を使用したインストールの手順を説明します。ただし、起動フロッピーまたはネットワークから Novell Linux Desktop 9 をインストールすることもできます。ご使用の VMware 製品で PXE サーバがサポートされている場合は、PXE サーバからインストールすることもできます。

オペレーティングシステムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

注意 VMware 仮想マシンで BusLogic 仮想 SCSI アダプタを使用した際、Linux ゲスト OS の多くでさまざまな問題が発生しています。このゲスト OS では、LSI Logic 仮想 SCSI アダプタを使用することをお勧めします。

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに Novell Linux Desktop 9 インストール CD を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、Novell Linux Desktop 9 のインストールを開始します。
- 3 テキスト モードのインストーラを使用してインストールします。テキスト モードのインストーラを選択するには、最初のインストール画面で、<F2> キーを押してからカーソル キーを使用して [テキスト モード] を選択し、<Enter> キーを押します。
- 4 最終構成プロセスで、すべてのパッケージがインストールされたあとのインターネット接続テストは実行しないでください。
- 5 残りの手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。

- 6 この仮想マシンをコピーまたは移動する場合は、「[コピーした仮想マシンでネットワークを利用する際に必要な変更](#) (P.438)」に記載されている変更を行います。

これでゲスト OS としての Novell Linux Desktop 9 の基本インストールが完了です。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

IPv6

多くの Linux ディストリビューションでは、VMware Tools のインストール後に IPv6 が有効になっていると、VMware Tools を **vmware-config-tools.pl** で構成することができません。この場合、VMware Tools は該当する仮想マシン向けにネットワーク デバイスを正しく設定することができず、次のようなメッセージが表示されます。

```
Unloading pcnet32 module
unregister_netdevice: waiting for eth0 to become free
```

このメッセージは、仮想マシンを再起動するまで連続して繰り返し表示されます。Linux を実行する仮想マシンでこの問題を防ぐには、VMware Tools をインストールする前に IPv6 を無効にしておきます。

Linux を実行する仮想マシンで IPv6 を無効にするには

- 1 `/etc/sysconfig/network` ファイルに `NETWORKING_IPV6=yes` という行が含まれている場合は、この行を次のように変更します。

```
NETWORKING_IPV6=no
```

- 2 `/etc/modules.conf` ファイルに、次の行を追加します。

```
alias ipv6 off
alias net-pf-10 off
```

IPv6 を無効にすると、VMware Tools を正常にインストールし、構成できます。

既知の問題

コピーした仮想マシンでネットワークを利用する際に必要な変更

コピーまたはクローン作成した仮想マシン、あるいは VMware ACE パッケージの一部としてエンド ユーザーにデプロイされた仮想マシンでは、ネットワークが正常に動作しない場合があります。仮想マシンをコピーする際に、そのコピーに独自の識別子を割り当てると、その仮想マシンに接続されている仮想イーサネット アダプタ用の MAC アドレスが変更されます。Novell Linux Desktop 9 ゲスト OS は、インストール時に、主要構成ファイル名の一部として MAC アドレスを使用します。このため、仮想マシンの MAC アドレスが変更されると、ゲスト OS が仮想イーサネット アダプタにその構成ファイルに関連付けることができない可能性があります。この問題が発生した場合、ファイルをコピーするか、ファイル名を変更して回避することができます。たとえば、**eth0** の場合、次のような変更を行います。

元のファイル名

```
/etc/sysconfig/network/ifcfg-eth0-id-<MAC アドレス>
```

新しいファイル名

```
/etc/sysconfig/network/ifcfg-eth0
```

適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更

このゲスト OS のデフォルトのタイムキーピング構成では、問題が発生する可能性があります。Linux でのタイムキーピングのベスト プラクティスについては、ナレッジベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/1006427>) を参照してください。

異なるプロセッサへの移行

Linux 仮想マシンを AMD プロセッサ上で稼働するホストと Intel プロセッサ上で稼働するホストとの間で移行することはお勧めしません。

Linux ディストリビューションの多くは、インストール時に、インストール先の特定のプロセッサに適したカーネルを選択します。また、一部のディストリビューションは、デフォルトで GENERIC カーネルをインストールしますが、ユーザーが選択してインストールできるアーキテクチャ固有のカーネルも提供しています。このようなカーネルには、そのプロセッサでのみ利用できる命令が含まれている場合があります。異なる種類のプロセッサを使用するホストでこれらの命令を実行すると、悪影響が生じる可能性があります。

このため、AMD プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンは、Intel プロセッサを使用するホストに移行しても動作しないことがあります。逆に、Intel プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンを AMD プロセッサを使用するホストに移行しても動作しない場合があります。

これは仮想マシンに限られたものではなく、物理コンピュータでも発生する問題です。たとえば、Linux がインストールされたハード ドライブを AMD マシンから Intel マシンに移動した場合、そのドライブから起動しようとする問題が発生します。

Oracle Enterprise Linux 5

このセクションでは、Oracle Enterprise Linux 5 オペレーティング システムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について記述しています。

32 ビット版

32 ビット版の Oracle Enterprise Linux 5 は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware Workstation**

Oracle Enterprise Linux 5 : Workstation 6.5、6.5.1、6.5.2

アップデート版のサポート

- Oracle Enterprise Linux 5.1 : Workstation 6.5、6.5.1、6.5.2

- Oracle Enterprise Linux 5.2 : Workstation 6.5、6.5.1、6.5.2

64 ビット版

64 ビット版の Oracle Enterprise Linux 5 は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware Workstation**

Oracle Enterprise Linux 5 : Workstation 6.5、6.5.1、6.5.2

アップデート版のサポート

- Oracle Enterprise Linux 5.1 : Workstation 6.5、6.5.1、6.5.2

- Oracle Enterprise Linux 5.2 : Workstation 6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

- SMP : Workstation 6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way をサポート

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

Oracle Enterprise Linux 5 は、標準の Red Hat ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。ここでは、標準のディストリビューション CD を使用したインストールの手順を説明します。ただし、起動フロッピーまたはネットワークから Oracle Enterprise Linux 5 をインストールすることもできます。ご使用の VMware 製品で PXE サーバがサポートされている場合は、PXE サーバからインストールすることもできます。

仮想マシンを作成する際は、必ず LSI Logic SCSI アダプタを選択します。Oracle Enterprise Linux 5 には、BusLogic SCSI アダプタのドライバが含まれていません。

オペレーティングシステムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

注意 仮想マシンは、必ず 512MB 以上のメモリを構成するようにしてください。仮想マシンのメモリが 512MB よりも少ないと、Oracle Enterprise Linux 5 が、一部の VMware ドライバのロード中にエラー メッセージを表示します。

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに Oracle Enterprise Linux 5 CD-ROM を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、Oracle Enterprise Linux 5 のインストールを開始します。
- 3 残りの手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。次の手順では必ず指示どおりの選択を行なってください。
- 4 インストール時に [Virtualization Option] を選択しないでください。詳細は、ナレッジベースの記事 9134325 (<http://kb.vmware.com/kb/9134325>) を参照してください。

- 5 [Automatic Partitioning] 画面で、ディスクの自動パーティショニングを許可します。デフォルトを使用しない場合は、手動で仮想ディスクのパーティショニングを行うこともできます。

「**The partition table on device <デバイス名> was unreadable. To create new partitions it must be initialized, causing the loss of ALL DATA on the drive.**」で始まる警告が表示されることがあります。この警告が表示されても、物理コンピュータのハード ドライブに問題が発生しているわけではありません。仮想マシンの仮想ハード ドライブに対してパーティショニングおよびフォーマットを行う必要があると警告しているだけです。

- 6 [Yes] をクリックしてドライブのパーティショニングを行います。

これでゲスト OS としての Oracle Enterprise Linux 5 の基本インストールが完了です。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

VMware Tools をインストールするまでは、ゲスト OS で X サーバを起動しないでください。

IPv6

多くの Linux ディストリビューションでは、VMware Tools のインストール後に IPv6 が有効になっていると、VMware Tools を **vmware-config-tools.pl** で構成することができません。この場合、VMware Tools は該当する仮想マシン向けにネットワーク デバイスを正しく設定することができず、次のようなメッセージが表示されます。

```
Unloading pcnet32 module
unregister_netdevice: waiting for eth0 to become free
```

このメッセージは、仮想マシンを再起動するまで連続して繰り返し表示されます。Linux を実行する仮想マシンでこの問題を防ぐには、VMware Tools をインストールする前に IPv6 を無効にしておきます。

Linux を実行する仮想マシンで IPv6 を無効にするには

- 1 `/etc/sysconfig/network` ファイルに `NETWORKING_IPV6=yes` という行が含まれている場合は、この行を次のように変更します。

```
NETWORKING_IPV6=no
```

- 2 `/etc/modules.conf` ファイルに、次の行を追加します。

```
alias ipv6 off
alias net-pf-10 off
```

IPv6 を無効にすると、VMware Tools を正常にインストールし、構成できます。

既知の問題

コピーした仮想マシンでネットワークを利用する際に必要な手動の変更

コピーまたはクローン作成した仮想マシン、あるいは VMware ACE パッケージの一部としてエンド ユーザーにデプロイされた仮想マシンでは、ネットワークが正常に動作しない場合があります。仮想マシンをコピーする際に、そのコピーに独自の識別子を割り当てると、その仮想マシンに接続されている仮想イーサネット アダプタ用の MAC アドレスが変更されます。Oracle Enterprise Linux 5 ゲスト OS は、インストール時に、MAC アドレスを主要構成ファイル名の一部として使用します。このため、仮想マシンの MAC アドレスが変更されると、エラーが発生する可能性があります。この問題が発生した場合、ファイルから次の 1 行を削除して回避することができます。たとえば、`eth0` の場合、次のような変更を行います。

- 1 `/etc/sysconfig/network-scripts/ifcfg-eth0` ファイルのバックアップ コピーを作成します。次にファイルをテキスト エディタで開きます。
- 2 `HWAddr` で始まる行を削除します。
- 3 `eth0` を再起動します。

適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更

このゲスト OS のデフォルトのタイムキーピング構成では、問題が発生する可能性があります。Linux でのタイムキーピングのベスト プラクティスについては、ナレッジベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/1006427>) を参照してください。

異なるプロセッサへの移行

Linux 仮想マシンを AMD プロセッサ上で稼働するホストと Intel プロセッサ上で稼働するホストとの間で移行することはお勧めしません。

Linux ディストリビューションの多くは、インストール時に、インストール先の特定のプロセッサに適したカーネルを選択します。また、一部のディストリビューションは、デフォルトで GENERIC カーネルをインストールしますが、ユーザーが選択してインストールできるアーキテクチャ固有のカーネルも提供しています。このようなカーネルには、そのプロセッサでのみ利用できる命令が含まれている場合があります。異なる種類のプロセッサを使用するホストでこれらの命令を実行すると、悪影響が生じる可能性があります。

このため、AMD プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンは、Intel プロセッサを使用するホストに移行しても動作しないことがあります。逆に、Intel プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンを AMD プロセッサを使用するホストに移行しても動作しない場合があります。

これは仮想マシンに限られたものではなく、物理コンピュータでも発生する問題です。たとえば、Linux がインストールされたハード ドライブを AMD マシンから Intel マシンに移動した場合、そのドライブから起動しようとすると問題が発生します。

Red Hat Enterprise Linux 5

このセクションでは、Red Hat Enterprise Linux 5 オペレーティングシステムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について記述しています。

32 ビット版

32 ビット版の Red Hat Enterprise Linux 5 は、次の VMware 製品でサポートされています。

■ VMware Workstation

Advanced Platform : Workstation 6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

Desktop : Workstation 6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

Server : Workstation 6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

アップデート版のサポート

■ **Red Hat Enterprise Linux 5.1** : Workstation 6.5、6.5.1、6.5.2

■ **Red Hat Enterprise Linux 5.2** : Workstation 6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

■ **SMP** : Workstation 6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way を試験的にサポート

■ **Advanced Platform、Desktop での Eclipse 統合型仮想デバッグのサポート** : Workstation 6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

■ VMware ACE

Advanced Platform : ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

Desktop : ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

Server : ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

アップデート版のサポート

■ **Red Hat Enterprise Linux 5.1** : ACE 2.5、2.5.1、2.5.2

■ **Red Hat Enterprise Linux 5.2** : ACE 2.5、2.5.1、2.5.2

- **VMware Server**

Advanced Platform : VMware Server 2.0、 2.0.1

Desktop : VMware Server 2.0、 2.0.1

アップデート版のサポート

- **Red Hat Enterprise Linux 5.1** : VMware Server 2.0、 2.0.1

その他のサポート

- **SMP** : VMware Server 2.0、 2.0.1 で 2 way をサポート

- **VMware ESX Server**

Advanced Platform : ESX 3.0.2、 3.0.3、 3.5、 3.5 U1、 3.5 U2、 3.5 U3、 3.5 U4、 4.0

Desktop : ESX 3.0.2、 3.0.3、 3.5、 3.5 U1、 3.5 U2、 3.5 U3、 3.5 U4、 4.0

Desktop with Workstation オプション : ESX 3.5、 3.5 U1、 3.5 U2、 3.5 U3、 3.5 U4、 4.0

Server : ESX 3.0.2、 3.0.3、 3.5、 3.5 U1、 3.5 U2、 3.5 U3、 3.5 U4、 4.0

アップデート版のサポート

- **Red Hat Enterprise Linux 5.1**

- **Advanced Platform** : ESX 3.0.2 (Patch ESX-1003374 が必要。詳細は <http://kb.vmware.com/kb/1003374> を参照)、3.0.3、 3.5 U1、 3.5 U2、 3.5 U3、 3.5 U4、 4.0

- **Desktop** : ESX 3.0.2 (Patch ESX-1003374 が必要。詳細は <http://kb.vmware.com/kb/1003374> を参照)、3.0.3、 3.5 U1、 3.5 U2、 3.5 U3、 3.5 U4、 4.0

- **Server** : ESX 3.0.2 (Patch ESX-1003374 が必要。詳細は <http://kb.vmware.com/kb/1003374> を参照)、3.0.3、 3.5、 3.5 U1、 3.5 U2、 3.5 U3、 3.5 U4、 4.0

- Red Hat Enterprise Linux 5.2
 - **Advanced Platform** : ESX 3.0.2、3.0.3、3.5 (Patch ESX350-200803202-UG が必要。詳細は <http://kb.vmware.com/kb/1003696> を参照)、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0
 - **Desktop** : ESX 3.0.2、3.0.3、3.5 (Patch ESX350-200803202-UG が必要。詳細は <http://kb.vmware.com/kb/1003696> を参照)、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0
 - **Desktop with Workstation オプション** : ESX 3.5 (Patch ESX350-200803202-UG が必要。詳細は <http://kb.vmware.com/kb/1003696> を参照)、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0
 - **Server** : ESX 3.0.2、3.0.3、3.5 (Patch ESX350-200803202-UG が必要。詳細は <http://kb.vmware.com/kb/1003696> を参照)、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0
- Red Hat Enterprise Linux 5.3
 - **Advanced Platform** : ESX 3.0.2、3.0.3、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0
 - **Desktop** : ESX 3.0.2、3.0.3、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0
 - **Desktop with Workstation オプション** : ESX 3.0.2、3.0.3、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0
 - **Server** : ESX 3.0.2、3.0.3、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

その他のサポート

- **SMP** : ESX 3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0 でフルサポート
- **VMware Tools OSP (Operating System Specific Package)** : ESX Server 3.5 Update 2、3.5 Update 3、3.5 Update 4 で 32 ビット Red Hat Enterprise Linux 5、5.1、および 5.2 をサポート。また、OSP は ESX Server 3.5 Update 4 で 32 ビット Red Hat Enterprise Linux 5.3 をサポート。詳細は、次の『VMware Tools インストール ガイド Operating System Specific Package (VMware Tools Installation Guide Operating System Specific Packages)』を参照してください。
http://www.vmware.com/pdf/osp_install_guide.pdf
- **pvscsi ストレージ アダプタ** : Red Hat Enterprise Linux 5 のすべてのリリースをサポート

- **vmxnet3 ネットワーク アダプタ** : Red Hat Enterprise Linux 5 のすべてのリリースをサポート

サポートでの考慮事項

- ESX Server 3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 Update 1、3.5 Update 2、3.5 Update 3、または 3.5 Update 4 で稼動する Red Hat Enterprise Linux 5 での、読み取り専用ファイル システムの問題を回避するには、Red Hat Enterprise Linux 5.1 にアップグレードしてください。ナレッジ ベースの記事 51306 (<http://kb.vmware.com/kb/51306>) を参照してください。

■ VMware Fusion

Red Hat Enterprise Linux 5 : Fusion 1.0、1.1、1.1.1、1.1.2、1.1.3、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

アップデート版のサポート

- **Red Hat Enterprise Linux 5.2** : Fusion 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

その他のサポート

- **SMP** : Fusion 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4 でフルサポート

64 ビット版

64 ビット版の Red Hat Enterprise Linux 5 は、次の VMware 製品でサポートされています。

■ VMware Workstation

Advanced Platform : Workstation 6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

Desktop : Workstation 6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

Server : Workstation 6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

アップデート版のサポート

- **Red Hat Enterprise Linux 5.1** : Workstation 6.5、6.5.1、6.5.2
- **Red Hat Enterprise Linux 5.2** : Workstation 6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

- **SMP** : Workstation 6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way を試験的にサポート
- **Advanced Platform、Desktop での Eclipse 統合型仮想デバッガのサポート** : Workstation 6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

■ **VMware ACE**

Advanced Platform : ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

Desktop : ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

Server : ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

アップデート版のサポート

- **Red Hat Enterprise Linux 5.1** : ACE 2.5、2.5.1、2.5.2
- **Red Hat Enterprise Linux 5.2** : ACE 2.5、2.5.1、2.5.2

■ **VMware Server**

Advanced Platform : VMware Server 2.0、2.0.1

Desktop : VMware Server 2.0、2.0.1

アップデート版のサポート

- **Red Hat Enterprise Linux 5.1** : VMware Server 2.0、2.0.1

その他のサポート

- **SMP** : VMware Server 2.0、2.0.1 で 2 way をサポート

■ **VMware ESX Server**

Advanced Platform : ESX 3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

Desktop : ESX 3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

Desktop with Workstation オプション : ESX 3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

Server : ESX 3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

アップデート版のサポート

- Red Hat Enterprise Linux 5.1
 - **Advanced Platform** : ESX 3.0.2 (Patch ESX-1003374 が必要。詳細は <http://kb.vmware.com/kb/1003374> を参照)、3.0.3、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0
 - **Desktop** : ESX 3.0.2 (Patch ESX-1003374 が必要。詳細は <http://kb.vmware.com/kb/1003374> を参照)、3.0.3、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0
 - **Server** : ESX 3.0.2 (Patch ESX-1003374 が必要。詳細は <http://kb.vmware.com/kb/1003374> を参照)、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0
- Red Hat Enterprise Linux 5.2
 - **Advanced Platform** : ESX 3.0.2、3.0.3、3.5 (Patch ESX350-200803202-UG が必要。詳細は <http://kb.vmware.com/kb/1003696> を参照)、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0
 - **Desktop** : ESX 3.0.2、3.0.3、3.5 (Patch ESX350-200803202-UG が必要。詳細は <http://kb.vmware.com/kb/1003696> を参照)、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0
 - **Desktop with Workstation オプション** : ESX 3.5 (Patch ESX350-200803202-UG が必要。詳細は <http://kb.vmware.com/kb/1003696> を参照)、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0
 - **Server** : ESX 3.0.2、3.0.3、3.5 (Patch ESX350-200803202-UG が必要。詳細は <http://kb.vmware.com/kb/1003696> を参照)、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0
- Red Hat Enterprise Linux 5.3
 - **Advanced Platform** : ESX 3.0.2、3.0.3、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0
 - **Desktop** : ESX 3.0.2、3.0.3、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0
 - **Desktop with Workstation オプション** : ESX 3.0.2、3.0.3、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0
 - **Server** : ESX 3.0.2、3.0.3、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

その他のサポート

- **SMP** : ESX 3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0 でフル サポート
- **VMware Tools OSP (Operating System Specific Package)** : ESX Server 3.5 Update 2、3.5 Update 3、および 3.5 Update 4 で 64 ビット Red Hat Enterprise Linux 5、5.1、および 5.2 をサポート。また、OSP は ESX Server 3.5 Update 4 で 32 ビット Red Hat Enterprise Linux 5.3 をサポート。詳細は、次の『VMware Tools インストール ガイド Operating System Specific Package (VMware Tools Installation Guide Operating System Specific Packages)』を参照してください。
http://www.vmware.com/pdf/osp_install_guide.pdf
- **vmxnet3 ネットワーク アダプタ** : Red Hat Enterprise Linux 5 のすべてのリリースをサポート

サポートでの考慮事項

- ESX Server 3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 Update 1、3.5 Update 2、3.5 Update 3、または 3.5 Update 4 で稼動する Red Hat Enterprise Linux 5 での、読み取り専用ファイル システムの問題を回避するには、Red Hat Enterprise Linux 5.1 にアップグレードしてください。ナレッジ ベースの記事 51306 (<http://kb.vmware.com/kb/51306>) を参照してください。
- **VMware Fusion**

Red Hat Enterprise Linux 5 : Fusion 1.0、1.1、1.1.1、1.1.2、1.1.3、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

アップデート版のサポート

- **Red Hat Enterprise Linux 5.2** : Fusion 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

その他のサポート

- **SMP** : Fusion 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4 でフル サポート

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

Red Hat Enterprise Linux 5 は、標準の Red Hat ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。ここでは、標準のディストリビューション CD を使用したインストールの手順を説明します。ただし、起動フロッピーまたはネットワークから Red Hat Enterprise Linux 5 をインストールすることもできます。ご使用の VMware 製品で PXE サーバがサポートされている場合は、PXE サーバからインストールすることもできます。

仮想マシンを作成する際は、必ず LSI Logic SCSI アダプタを選択します。Red Hat Enterprise Linux 5 には、BusLogic SCSI アダプタのドライバが含まれていません。オペレーティングシステムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

注意	仮想マシンは、必ず 512MB 以上のメモリを構成するようにしてください。仮想マシンのメモリが 512MB よりも少ないと、Red Hat Enterprise Linux が、一部の VMware ドライバのロード中にエラー メッセージを表示します。
-----------	--

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに Red Hat Enterprise Linux 5 CD-ROM を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、Red Hat Enterprise Linux 5 のインストールを開始します。
- 3 残りの手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。次の手順では必ず指示どおりの選択を行なってください。
- 4 インストール時に [Virtualization Option] を選択しないでください。詳細は、ナレッジベースの記事 9134325 (<http://kb.vmware.com/kb/9134325>) を参照してください。
- 5 [Automatic Partitioning] 画面で、ディスクの自動パーティショニングを許可します。Red Hat のデフォルトを使用しない場合は、手動で仮想ディスクのパーティショニングを行うこともできます。

「**The partition table on device <デバイス名> was unreadable. To create new partitions it must be initialized, causing the loss of ALL DATA on the drive.**」で始まる警告が表示されることがあります。この警告が表示されても、物理コンピュータのハード ドライブに問題が発生しているわけではありません。仮想マシンの仮想ハード ドライブに対してパーティショニングおよびフォーマットを行う必要があると警告しているだけです。

6 [Yes] をクリックしてドライブのパーティショニングを行います。

これでゲスト OS としての Red Hat Enterprise Linux 5 の基本インストールが完了です。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

VMware Tools をインストールするまでは、ゲスト OS で X サーバを起動しないでください。

IPv6

多くの Linux ディストリビューションでは、VMware Tools のインストール後に IPv6 が有効になっていると、VMware Tools を `vmware-config-tools.pl` で構成することができません。この場合、VMware Tools は該当する仮想マシン向けにネットワーク デバイスを正しく設定することができず、次のようなメッセージが表示されます。

```
Unloading pcnet32 module
unregister_netdevice: waiting for eth0 to become free
```

このメッセージは、仮想マシンを再起動するまで連続して繰り返し表示されます。Linux を実行する仮想マシンでこの問題を防ぐには、VMware Tools をインストールする前に IPv6 を無効にしておきます。

注意 VMware ESX 4.0 以降のリリースでは IPv6 がサポートされています。VMware Tools のインストール前に IPv6 を無効にする必要はありません。

Linux を実行する仮想マシンで IPv6 を無効にするには

- 1 `/etc/sysconfig/network` ファイルに `NETWORKING_IPV6=yes` という行が含まれている場合は、この行を次のように変更します。

```
NETWORKING_IPV6=no
```

- 2 `/etc/modprobe.conf` ファイルに、次の行を追加します。

```
alias ipv6 off
alias net-pf-10 off
```

IPv6 を無効にすると、VMware Tools を正常にインストールし、構成できます。

既知の問題

SELinux の Enforcing モードがオンになっている一部の Linux ゲストでの VMware Tools のアンインストール時における読み取り専用のファイル システム

ESX 3.5 Update 3 または Update 4： この問題は、ESX 3.5 Update 3 に含まれていたバージョンの VMware Tools をアンインストールした場合、および Linux ディストリビューションの SELinux（Security-Enhanced Linux）の Enforcing モードが有効になっている場合（Red Hat Enterprise Linux 5.2 など）にのみ発生します。詳細は、ナレッジベースの記事（<http://kb.vmware.com/kb/1008090>）を参照してください。

インストール中の PAE メッセージ

VMware Workstation 5.x および 6.x： PAE テクノロジーを使用するホスト コンピュータで、VMware Workstation 5.0 以前のバージョンにゲスト OS をインストールする場合に、ゲスト OS が PAE を使用しようとしていることを示すエラーメッセージが表示されることがあります。このメッセージが表示された場合は、インストール処理を中止して、影響を受ける仮想マシンで PAE を有効にします。

仮想マシンで PAE を有効にするには

- 1 仮想マシンがパワーオフされていることを確認します。
- 2 仮想マシンの構成ファイル（.vmx）に、次の行を追加します。
`paevm="true"`
- 3 仮想マシンをパワーオンして、ゲスト OS をインストールします。

コピーした仮想マシンでネットワークを利用する際に必要な手動の変更

コピーまたはクローン作成した仮想マシン、あるいは VMware ACE パッケージの一部としてエンド ユーザーにデプロイされた仮想マシンでは、ネットワークが正常に動作しない場合があります。仮想マシンをコピーする際に、そのコピーに独自の識別子を割り当てると、その仮想マシンに接続されている仮想イーサネット アダプタ用の MAC アドレスが変更されます。Red Hat Enterprise Linux 5 ゲスト OS は、インストール時に、MAC アドレスを主要構成ファイル名の一部として使用します。このため、仮想マシンの MAC アドレスが変更されると、エラーが発生する可能性があります。この問題が発生した場合、ファイルから次の 1 行を削除して回避することができません。たとえば、`eth0` の場合、次のような変更を行います。

- 1 `/etc/sysconfig/network-scripts/ifcfg-eth0` ファイルのバックアップ コピーを作成します。次にファイルをテキスト エディタで開きます。
- 2 `HWAddr` で始まる行を削除します。
- 3 `eth0` を再起動します。

TSC クロックソースを使用して Linux が稼働している SMP 仮想マシンでの応答の停止またはストール

このゲスト OS では、仮想マシンでの応答停止またはストールの原因となる TSC クロックソースの問題が発生する可能性があります。詳細は、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/1007020>) を参照してください。

適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更

このゲスト OS のデフォルトのタイムキーピング構成では、問題が発生する可能性があります。Linux でのタイムキーピングのベスト プラクティスについては、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/1006427>) を参照してください。

異なるプロセッサへの移行

Linux 仮想マシンを AMD プロセッサ上で稼働するホストと Intel プロセッサ上で稼働するホストとの間で移行することはお勧めしません。

Linux ディストリビューションの多くは、インストール時に、インストール先の特定のプロセッサに適したカーネルを選択します。また、一部のディストリビューションは、デフォルトで GENERIC カーネルをインストールしますが、ユーザーが選択してインストールできるアーキテクチャ固有のカーネルも提供しています。このようなカーネルには、そのプロセッサでのみ利用できる命令が含まれている場合があります。異なる種類のプロセッサを使用するホストでこれらの命令を実行すると、悪影響が生じる可能性があります。

このため、AMD プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンは、Intel プロセッサを使用するホストに移行しても動作しないことがあります。逆に、Intel プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンを AMD プロセッサを使用するホストに移行しても動作しない場合があります。

これは仮想マシンに限られたものではなく、物理コンピュータでも発生する問題です。たとえば、Linux がインストールされたハード ドライブを AMD マシンから Intel マシンに移動した場合、そのドライブから起動しようとする問題が発生します。

Red Hat Enterprise Linux 4

このセクションでは、Red Hat Enterprise Linux 4 オペレーティングシステムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について記述しています。

32 ビット版

32 ビット版の Red Hat Enterprise Linux 4 は、次の VMware 製品でサポートされています。

■ VMware Workstation

Advanced Server (AS) : Workstation 5.0、5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

Enterprise Server (ES) : Workstation 5.0、5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

Workstation (WS) : Workstation 5.0、5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

アップデート版のサポート

- **Update 1 :** Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2
- **Update 2 :** Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2
- **Update 3 :** Workstation 5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2
- **Update 4 :** Workstation 5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2
- **Update 5 :** Workstation 6.0.1
- **Update 6 :** Workstation 6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2
- **Update 7 :** Workstation 6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

- **SMP** : Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way を試験的にサポート
- **Advanced Server (AS)、Enterprise Server (ES)、Workstation (WS) での Eclipse 統合型仮想デバッガのサポート** : Workstation 6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 (Workstation 6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 の Update 6 では Eclipse 統合型仮想デバッガをサポートしない)

サポートでの考慮事項

- Red Hat Enterprise Linux 4 の hugemem カーネルはサポートされていません。ナレッジ ベースの記事 8964517 (<http://kb.vmware.com/kb/8964517>) を参照してください。

■ VMware ACE

Advanced Server (AS) : ACE 1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

Enterprise Server (ES) : ACE 1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

Workstation (WS) : ACE 1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

アップデート版のサポート

- **Update 7** : ACE 2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

サポートでの考慮事項

- Red Hat Enterprise Linux 4 の hugemem カーネルはサポートされていません。ナレッジ ベースの記事 8964517 (<http://kb.vmware.com/kb/8964517>) を参照してください。

■ VMware GSX Server

Advanced Server (AS) : GSX Server 3.2、3.2.1

Enterprise Server (ES) : GSX Server 3.2、3.2.1

Workstation (WS) : GSX Server 3.2、3.2.1

サポートでの考慮事項

- Red Hat Enterprise Linux 4 の hugemem カーネルはサポートされていません。ナレッジ ベースの記事 8964517 (<http://kb.vmware.com/kb/8964517>) を参照してください。

■ VMware Server

Advanced Server (AS) : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9

Enterprise Server (ES) : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9

Workstation (WS) : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9

アップデート版のサポート

- **Update 1 :** VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9
- **Update 2 :** VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9
- **Update 3 :** VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9
- **Update 4 :** VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9 で試験的にサポート
- **Update 5 :** VMware Server 2.0、2.0.1

その他のサポート

- **SMP :** VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9、2.0、2.0.1 で 2 way を試験的にサポート

サポートでの考慮事項

- Red Hat Enterprise Linux 4 の hugemem カーネルはサポートされていません。ナレッジ ベースの記事 8964517 (<http://kb.vmware.com/kb/8964517>) を参照してください。

■ VMware ESX Server

Advanced Server (AS) : ESX 2.5.2、 2.5.3、 2.5.4、 2.5.5、 3.0、 3.0.1、 3.0.2、 3.0.3、 3.5、 3.5 U1、 3.5 U2、 3.5 U3、 3.5 U4、 4.0

Enterprise Server (ES) : ESX 2.5.2、 2.5.3、 2.5.4、 2.5.5、 3.0、 3.0.1、 3.0.2、 3.0.3、 3.5、 3.5 U1、 3.5 U2、 3.5 U3、 3.5 U4、 4.0

Workstation (WS) : ESX 2.5.2、 2.5.3、 2.5.4、 2.5.5、 3.0、 3.0.1、 3.0.2、 3.0.3、 3.5、 3.5 U1、 3.5 U2、 3.5 U3、 3.5 U4、 4.0

アップデート版のサポート

■ **Update 1 :** ESX 3.0.2、 3.0.3、 3.5、 3.5 U1、 3.5 U2、 3.5 U3、 3.5 U4、 4.0

■ **Update 2 :** ESX 2.5.2、 2.5.3、 2.5.4、 2.5.5、 3.0、 3.0.1、 3.0.2、 3.0.3、 3.5、 3.5 U1、 3.5 U2、 3.5 U3、 3.5 U4、 4.0

■ **Update 3 :** ESX 2.5.3 (Upgrade Patch 3 が必要。詳細は <http://vmware.com/support/esx25/doc/esx-253-200607-patch.html> を参照)、 2.5.4、 2.5.5、 3.0、 3.0.1、 3.0.2、 3.0.3、 3.5、 3.5 U1、 3.5 U2、 3.5 U3、 3.5 U4、 4.0

■ **Update 4 :** ESX 2.5.3 (Upgrade Patch 3 が必要。詳細は <http://vmware.com/support/esx25/doc/esx-253-200607-patch.html> を参照)、 2.5.4、 2.5.5、 3.0、 3.0.1、 3.0.2、 3.0.3、 3.5、 3.5 U1、 3.5 U2、 3.5 U3、 3.5 U4、 4.0

■ **Update 5 :** ESX 2.5.4、 2.5.5、 3.0、 3.0.1、 3.0.2、 3.0.3、 3.5、 3.5 U1、 3.5 U2、 3.5 U3、 3.5 U4、 4.0

■ **Update 6 :** ESX 2.5.4、 2.5.5、 3.0.1、 3.0.2、 3.0.3、 3.5 U1、 3.5 U2、 3.5 U3、 3.5 U4、 4.0

■ **Update 7 :** ESX 2.5.4、 2.5.5、 3.0.1、 3.0.2、 3.0.3、 3.5 U2、 3.5 U3、 3.5 U4、 4.0

その他のサポート

■ **SMP :** ESX 3.0、 3.0.1、 3.0.2、 3.0.3、 3.5、 3.5 U1、 3.5 U2、 3.5 U3、 3.5 U4、 4.0 でフルサポート

■ **VMware Tools OSP (Operating System Specific Package) :** ESX Server 3.5 Update 2、 3.5 Update 3、 および 3.5 Update 4 で 32 ビットの Red Hat Enterprise Linux 4 および Update 1、 2、 3、 4、 5、 6、 7 をサポート。詳細は、次の『VMware Tools インストール ガイド Operating System Specific Package (VMware Tools Installation Guide Operating System Specific Packages)』を参照してください。

http://www.vmware.com/pdf/osp_install_guide.pdf

サポートでの考慮事項

- Red Hat Enterprise Linux 4 の hugemem カーネルはサポートされていません。ナレッジ ベースの記事 8964517 (<http://kb.vmware.com/kb/8964517>) を参照してください。
- SCSI アダプタのサポート
 - **Red Hat Enterprise Linux 4 Update 1、2、3、4、5** : ESX Server 2.5.2、2.5.3、2.5.4、2.5.5 は Red Hat Enterprise Linux 4 Update 1、2、3、4、5 で BusLogic SCSI アダプタのみをサポートします。
 - **Red Hat Enterprise Linux 4 Update 6 および Update 7** : ESX Server 2.5.2、2.5.3、2.5.4、2.5.5 は Red Hat Enterprise Linux 4 Update 6 および Update 7 で、LSI Logic アダプタと BusLogic SCSI アダプタの両方をサポートします。
 - ヴィエムウェアは BusLogic SCSI アダプタをサポートするため、個別のドライバを用意しています。BusLogic 用ドライバのダウンロードとインストールの手順については、www.vmware.com/download/esx/drivers_tools.html を参照してください。
 - Red Hat Enterprise Linux 4 では、VMware ESX Server 3.0、3.0.1、3.0.2、および 3.0.3 は、LSI Logic SCSI アダプタのみをサポートしています。
 - ESX Server 3.0、3.0.1、3.0.3、3.5、3.5 Update 1、3.5 Update 2、3.5 Update 3、3.5 Update 4 で稼動する Red Hat Enterprise Linux 4 Update 3 または Update 4 での、読み取り専用ファイルシステムの問題を回避するには、Red Hat Enterprise Linux 4 Update 5 にアップグレードしてください。詳細はナレッジ ベースの記事 51306 (<http://kb.vmware.com/kb/51306>) を参照してください。

■ VMware Fusion

Red Hat Enterprise Linux 4 Update 4 : Fusion 1.0、1.1、1.1.1、1.1.2、1.1.3、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

アップデート版のサポート

- **Update 4** : Fusion 1.0、1.1、1.1.1、1.1.2、1.1.3、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4
- **Update 6** : Fusion 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

その他のサポート

- **SMP** : Fusion 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4 で 2 way をサポート

サポートでの考慮事項

- Red Hat Enterprise Linux 4 の hugemem カーネルはサポートされていません。ナレッジ ベースの記事 8964517 (<http://kb.vmware.com/kb/8964517>) を参照してください。

64 ビット版

64 ビット版の Red Hat Enterprise Linux 4 は、次の VMware 製品でサポートされています。

■ VMware Workstation

Advanced Server (AS) : Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

Enterprise Server (ES) : Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

Workstation (WS) : Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

アップデート版のサポート

- **Update 1 :** Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2
- **Update 2 :** Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2
- **Update 3 :** Workstation 5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2
- **Update 4 :** Workstation 5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2
- **Update 5 :** Workstation 6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2
- **Update 6 :** Workstation 6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2
- **Update 6 :** Workstation 6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

- **SMP** : Workstation 5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way を試験的にサポート
- **Advanced Server (AS)、Enterprise Server (ES)、Workstation (WS) での Eclipse 統合型仮想デバッガのサポート** : Workstation 6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 (Workstation 6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 の Update 6 では Eclipse 統合型仮想デバッガをサポートしない)

サポートでの考慮事項

- Red Hat Enterprise Linux 4 の hugemem カーネルはサポートされていません。ナレッジ ベースの記事 8964517 (<http://kb.vmware.com/kb/8964517>) を参照してください。

■ VMware ACE

Advanced Server (AS) : ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

Enterprise Server (ES) : ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5.1、2.5.2

Workstation (WS) : ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

サポートでの考慮事項

- Red Hat Enterprise Linux 4 の hugemem カーネルはサポートされていません。ナレッジ ベースの記事 8964517 (<http://kb.vmware.com/kb/8964517>) を参照してください。

■ VMware Server

Advanced Server (AS) : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9

Enterprise Server (ES) : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9

Workstation (WS) : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9

アップデート版のサポート

- **Update 3** : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9
- **Update 4** : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9 で試験的にサポート
- **Update 5** : VMware Server 2.0、2.0.1

その他のサポート

- **SMP** : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9、2.0、2.0.1 で 2 way を試験的にサポート

サポートでの考慮事項

- Red Hat Enterprise Linux 4 の hugemem カーネルはサポートされていません。ナレッジ ベースの記事 8964517 (<http://kb.vmware.com/kb/8964517>) を参照してください。

■ VMware ESX Server

Advanced Server (AS) : ESX 3.0、3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

Enterprise Server (ES) : ESX 3.0、3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

Workstation (WS) : ESX 3.0、3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

アップデート版のサポート

- **Update 1** : ESX 3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0
- **Update 2** : ESX 3.0 (試験的サポート)、3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0
- **Update 3** : ESX 3.0 (試験的サポート)、3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0
- **Update 4** : ESX 3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0
- **Update 5** : ESX 3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0
- **Update 6** : ESX 3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0
- **Update 7** : ESX 3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

その他のサポート

- **SMP** : ESX 3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0 でフル サポート
- **VMware Tools OSP (Operating System Specific Package)** : ESX Server 3.5 Update 2、3.5 Update 3、および 3.5 Update 4 で 64 ビット Red Hat Enterprise Linux 4、および Update 1、2、3、4、5、6、7 をサポート。詳細は、次の『VMware Tools インストール ガイド Operating System Specific Package (VMware Tools Installation Guide Operating System Specific Packages)』を参照してください。
http://www.vmware.com/pdf/osp_install_guide.pdf

サポートでの考慮事項

- Red Hat Enterprise Linux 4 の hugemem カーネルはサポートされていません。ナレッジ ベースの記事 8964517 (<http://kb.vmware.com/kb/8964517>) を参照してください。
- Red Hat Enterprise Linux 4 では、VMware ESX Server 3.0、3.0.1、3.0.2、および 3.0.3 は、LSI Logic SCSI アダプタのみをサポートしています。
- ESX Server 3.0、3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 Update 1、3.5 Update 2、3.5 Update 3、および 3.5 Update 4 で稼動する Red Hat Enterprise Linux 4 Update 3 または Update 4 での、読み取り専用ファイル システムの問題を回避するには、Red Hat Enterprise Linux 4 Update 5 にアップグレードしてください。ナレッジ ベースの記事 51306 (<http://kb.vmware.com/kb/51306>) を参照してください。
- **VMware Fusion**

Red Hat Enterprise Linux 4 Update 4 : Fusion 1.0、1.1、1.1.1、1.1.2、1.1.3、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

アップデート版のサポート

- **Update 4** : Fusion 1.0、1.1、1.1.1、1.1.2、1.1.3、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4
- **Update 6** : Fusion 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

その他のサポート

- **SMP** : Fusion 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4 で 2 way をサポート

サポートでの考慮事項

- Red Hat Enterprise Linux 4 の hugemem カーネルはサポートされていません。ナレッジ ベースの記事 8964517 (<http://kb.vmware.com/kb/8964517>) を参照してください。

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

Red Hat Enterprise Linux 4 は、標準の Red Hat ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。ここでは、標準のディストリビューション CD を使用したインストールの手順を説明します。ただし、起動フロッピーまたはネットワークから Red Hat Enterprise Linux 4 をインストールすることもできます。ご使用の VMware 製品で PXE サーバがサポートされている場合は、PXE サーバからインストールすることもできます。

オペレーティング システムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

VMware Workstation、VMware ACE、または VMware GSX Server： 仮想マシンを作成する際は、必ず LSI Logic SCSI アダプタを選択します。Red Hat Enterprise Linux 4 には、BusLogic SCSI アダプタのドライバが含まれていません。

注意 仮想マシンは、必ず 256MB 以上のメモリを構成するようにしてください。仮想マシンのメモリが 256MB よりも少ないと、Red Hat Enterprise Linux が、一部の VMware ドライバのロード中にエラー メッセージを表示します。

注意 VMware VirtualCenter または vCenter Server を使用してゲスト OS をインストールする場合は、その仮想マシンを実行する VMware 製品 (ESX Server または VMware Server) で該当するゲスト OS がサポートされていることを確認してください。

インストールの手順

注意 次の[ステップ 4](#)の注記によく目を通して、不適切なカーネルをインストールしないように注意してください。

- 1 CD-ROM ドライブに Red Hat Enterprise Linux 4 CD-ROM を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、Red Hat Enterprise Linux 4 のインストールを開始します。

- 3 残りの手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。次の手順では必ず指示どおりの選択を行なってください。
- 4 **VMware GSX Server** : [Package Group Selection] 画面では、[Software Development] を選択してから個々のパッケージを選択します。[Individual Package Selection] 画面ではカーソル キーを使用して [System Environment/Kernel] まで下方方向に移動し、<Enter> キーを押します。[kernel-smp] の選択が解除されていることを必ず確認してください（角括弧の中にアスタリスクが表示されないようにする）。SMP カーネルは、GSX Server 仮想マシンではサポートされていません。ほかの選択を変更する必要はありません。
- 5 [Automatic Partitioning] 画面で、ディスクの自動パーティショニングを許可します。Red Hat のデフォルトを使用しない場合は、手動で仮想ディスクのパーティショニングを行うこともできます。
- 6 「**The partition table on device <デバイス名> was unreadable. To create new partitions it must be initialized, causing the loss of ALL DATA on the drive.**」で始まる警告が表示されることがあります。この警告が表示されても、物理コンピュータのハード ドライブに問題が発生しているわけではありません。仮想マシンの仮想ハード ドライブに対してパーティショニングおよびフォーマットを行う必要があると警告しているだけです。
[Yes] をクリックしてドライブのパーティショニングを行います。
- 7 **VMware GSX Server**: 使用中のコンピュータが DHCP に対応した LAN に接続されている場合は、[Network Configuration] 画面から [Use bootp/dhcp] オプションを選択することができます。また、ネットワーク パラメータを手動で設定することもできます。

VMware ESX Server : vlmance ネットワーク アダプタを使用している仮想マシンで、使用中のコンピュータが DHCP に対応した LAN に接続されている場合は、[Network Configuration] 画面から [Use bootp/dhcp] オプションを選択することができます。また、ネットワーク パラメータを手動で設定することもできます。仮想マシンで vmxnet ネットワーク アダプタを使用している場合は、ゲスト OS のインストール完了後に、Red Hat Enterprise Linux 4 のネットワーク構成ツールを使用してネットワーク接続を構成します。

これでゲスト OS としての Red Hat Enterprise Linux 4 の基本インストールが完了です。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

VMware Tools をインストールするまでは、ゲスト OS で X サーバを起動しないでください。

IPv6

多くの Linux ディストリビューションでは、VMware Tools のインストール後に IPv6 が有効になっていると、VMware Tools を `vmware-config-tools.pl` で構成することができません。この場合、VMware Tools は該当する仮想マシン向けにネットワークデバイスを正しく設定することができず、次のようなメッセージが表示されます。

```
Unloading pcnet32 module
unregister_netdevice: waiting for eth0 to become free
```

このメッセージは、仮想マシンを再起動するまで連続して繰り返し表示されます。Linux を実行する仮想マシンでこの問題を防ぐには、VMware Tools をインストールする前に IPv6 を無効にしておきます。

注意 VMware ESX 4.0 以降のリリースでは IPv6 がサポートされています。VMware Tools のインストール前に IPv6 を無効にする必要はありません。

Linux を実行する仮想マシンで IPv6 を無効にするには

- 1 `/etc/sysconfig/network` ファイルに `NETWORKING_IPV6=yes` という行が含まれている場合は、この行を次のように変更します。

```
NETWORKING_IPV6=no
```

- 2 `/etc/modprobe.conf` ファイルに、次の行を追加します。

```
alias ipv6 off
alias net-pf-10 off
```

IPv6 を無効にすると、VMware Tools を正常にインストールし、構成できます。

既知の問題

インストール中の PAE メッセージ

VMware Workstation 5.0 : PAE テクノロジーを使用するホスト コンピュータで、VMware Workstation 5.0 以前のバージョンにゲスト OS をインストールする場合に、ゲスト OS が PAE を使用しようとしていることを通知するエラー メッセージが表示されることがあります。このメッセージが表示された場合は、インストール処理を中止して、影響を受ける仮想マシンで PAE を有効にします。

仮想マシンで PAE を有効にするには

- 1 仮想マシンがパワーオフされていることを確認します。
- 2 仮想マシンの構成ファイル（.vmx）に、次の行を追加します。
`paevm="true"`
- 3 仮想マシンをパワーオンして、ゲスト OS をインストールします。

ESX Server 仮想マシンでの PAE の無効化

ESX Server 2.5.x：ESX Server 2.5.x 仮想マシンは物理アドレス拡張（PAE）をサポートしていますが、この機能用にパフォーマンスが最適化されているわけではありません。このため、PAE 機能が有効になっているゲスト OS では、パフォーマンスが低下する可能性があります。最高のパフォーマンスを実現するには、ゲスト OS で PAE を無効にすることをお勧めします。PAE の無効化の詳細および手順は、ナレッジ ベースの記事（<http://kb.vmware.com/kb/2020>）を参照してください。

ESX Server 3.x：PAE を無効にすると、最近の AMD および Intel プロセッサが提供する NX（No Execute）機能および ED（Execute Disabled）機能も無効になります。これらの機能は、ESX Server 3.x より前のバージョンの ESX Server ではサポートされていません。

コピーした仮想マシンでネットワークを利用する際に必要な手動の変更

コピーまたはクローン作成した仮想マシン、あるいは VMware ACE パッケージの一部としてエンド ユーザーにデプロイされた仮想マシンでは、ネットワークが正常に動作しない場合があります。仮想マシンをコピーする際に、そのコピーに独自の識別子を割り当てると、その仮想マシンに接続されている仮想イーサネット アダプタ用の MAC アドレスが変更されます。Red Hat Enterprise Linux 4 ゲスト OS は、インストール時に、MAC アドレスを主要構成ファイル名の一部として使用します。このため、仮想マシンの MAC アドレスが変更されると、エラーが発生する可能性があります。この問題が発生した場合、ファイルから次の 1 行を削除して回避することができます。たとえば、`eth0` の場合、次のような変更を行います。

- 1 `/etc/sysconfig/network-scripts/ifcfg-eth0` ファイルのバックアップ コピーを作成します。次にファイルをテキスト エディタで開きます。
- 2 `HWAddr` で始まる行を削除します。
- 3 `eth0` を再起動します。

適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更

このゲスト OS のデフォルトのタイムキーピング構成では、問題が発生する可能性があります。Linux でのタイムキーピングのベスト プラクティスについては、ナレッジ ベースの記事（<http://kb.vmware.com/kb/1006427>）を参照してください。

ゲストのスクリーンセーバー

VMware GSX Server：XFree86 3.x X サーバを稼働する Linux ホストでは、ゲスト OS でのスクリーンセーバーの使用は避けてください。ゲストでスクリーンセーバーを使用すると、大量の処理能力が必要なため、ホストの X サーバがフリーズする可能性があります。

異なるプロセッサへの移行

Linux 仮想マシンを AMD プロセッサ上で稼働するホストと Intel プロセッサ上で稼働するホストとの間で移行することはお勧めしません。

Linux ディストリビューションの多くは、インストール時に、インストール先の特定のプロセッサに適したカーネルを選択します。また、一部のディストリビューションは、デフォルトで GENERIC カーネルをインストールしますが、ユーザーが選択してインストールできるアーキテクチャ固有のカーネルも提供しています。このようなカーネルには、そのプロセッサでのみ利用できる命令が含まれている場合があります。異なる種類のプロセッサを使用するホストでこれらの命令を実行すると、悪影響が生じる可能性があります。

このため、AMD プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンは、Intel プロセッサを使用するホストに移行しても動作しないことがあります。逆に、Intel プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンを AMD プロセッサを使用するホストに移行しても動作しない場合があります。

これは仮想マシンに限られたものではなく、物理コンピュータでも発生する問題です。たとえば、Linux がインストールされたハードドライブを AMD マシンから Intel マシンに移動した場合、そのドライブから起動しようとする問題が発生します。

Virtual Infrastructure Client で正しくオペレーティングシステムの種類が表示されない Red Hat Enterprise Linux 4 Update 2 および Update 3 ゲスト

ESX Server 3.x：VMware Tools が作動している状態で Red Hat Enterprise Linux 4（AS、ES、WS）Update 3 ゲストの ESX 3.x 仮想マシンを使用すると、Virtual Infrastructure Client にゲスト OS の種類として Red Hat Enterprise Linux 3 が表示されます。VMware Tools が作動している状態で Red Hat Enterprise Linux 4（AS、ES、WS）Update 2 ゲストの ESX 3.x 仮想マシンを使用すると、Virtual Infrastructure Client にゲスト OS の種類として Red Hat Enterprise Linux 2 が表示されます。これは単に表示上の誤りです。仮想マシンの操作に影響することはありません。

Red Hat Enterprise Linux 3

このセクションでは、Red Hat Enterprise Linux 3 オペレーティングシステムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について記述しています。

32 ビット版

32 ビット版の Red Hat Enterprise Linux 3 は、次の VMware 製品でサポートされています。

■ VMware Workstation

Advanced Server (AS) : Workstation 4.5、4.5.1、4.5.2、4.5.3、5.0、5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

Enterprise Server (ES) : Workstation 4.5、4.5.1、4.5.2、4.5.3、5.0、5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

Workstation (WS) : Workstation 4.5、4.5.1、4.5.2、4.5.3、5.0、5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

アップデート版のサポート

■ **Update 4 :** Workstation 5.0、5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

■ **Update 5 :** Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

■ **Update 6 :** Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

■ **Update 7 :** Workstation 5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

■ **Update 8 :** Workstation 5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

■ **SMP :** Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way を試験的にサポート

サポートでの考慮事項

- Red Hat Enterprise Linux 3 の hugemem カーネルはサポートされていません。
ナレッジ ベースの記事 8964517 (<http://kb.vmware.com/kb/8964517>) を参照してください。

■ VMware ACE

Advanced Server (AS) : ACE 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

Enterprise Server (ES) : ACE 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

Workstation (WS) : ACE 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

アップデート版のサポート

- **Update 3 :** ACE 1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2
- **Update 4 :** ACE 1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

■ VMware GSX Server

Advanced Server (AS) : GSX Server 3.0、3.1、3.2、3.2.1

Enterprise Server (ES) : GSX Server 3.0、3.1、3.2、3.2.1

Workstation (WS) : GSX Server 3.0、3.1、3.2、3.2.1

アップデート版のサポート

- **Update 4 :** GSX Server 3.2、3.2.1

サポートでの考慮事項

- Red Hat Enterprise Linux 3 の hugemem カーネルはサポートされていません。
ナレッジ ベースの記事 8964517 (<http://kb.vmware.com/kb/8964517>) を参照してください。

■ VMware Server

Red Hat Enterprise Linux 3 : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9

アップデート版のサポート

- **Update 1** : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9
- **Update 2** : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9
- **Update 3** : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9
- **Update 4** : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9
- **Update 5** : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9
- **Update 6** : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9
- **Update 7** : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9
- **Update 8** : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9 で試験的にサポート

その他のサポート

- **SMP** : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9 で 2 way を試験的にサポート

サポートでの考慮事項

- Red Hat Enterprise Linux 3 の hugemem カーネルはサポートされていません。ナレッジベースの記事 8964517 (<http://kb.vmware.com/kb/8964517>) を参照してください。

■ VMware ESX Server

Advanced Server (AS) : ESX 2.0.1、2.1、2.1.1、2.1.2、2.5、2.5.1、2.5.2、2.5.3、2.5.4、2.5.5、3.0、3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

Enterprise Server (ES) : ESX 2.0.1、2.1、2.1.1、2.1.2、2.5、2.5.1、2.5.2、2.5.3、2.5.4、2.5.5、3.0、3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

Workstation (WS) : ESX 2.0.1、2.1、2.1.1、2.1.2、2.5、2.5.1、2.5.2、2.5.3、2.5.4、2.5.5、3.0、3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

アップデート版のサポート

- **Update 1** : ESX 2.1、 2.1.1、 2.1.2、 2.5、 2.5.1、 2.5.2、 2.5.3、 2.5.4、 2.5.5、 3.0、 3.0.1、 3.0.2、 3.0.3、 3.5、 3.5 U1、 3.5 U2、 3.5 U3、 3.5 U4、 4.0
- **Update 2** : ESX 2.1 (Virtual SMP 対応)、 2.5.3、 2.5.4、 2.5.5、 3.0.1、 3.0.2、 3.0.3、 3.5、 3.5 U1、 3.5 U2、 3.5 U3、 3.5 U4、 4.0
- **Update 3** : ESX 2.5、 2.5.1、 2.5.2、 2.5.3、 2.5.4、 2.5.5、 3.0.1、 3.0.2、 3.0.3、 3.5、 3.5 U1、 3.5 U2、 3.5 U3、 3.5 U4、 4.0
- **Update 4** : ESX 2.5、 2.5.1、 2.5.2、 2.5.3、 2.5.4、 2.5.5、 3.0、 3.0.1、 3.0.2、 3.0.3、 3.5、 3.5 U1、 3.5 U2、 3.5 U3、 3.5 U4、 4.0
- **Update 5** : ESX 2.5.2、 2.5.3、 2.5.4、 2.5.5、 3.0、 3.0.1、 3.0.2、 3.0.3、 3.5、 3.5 U1、 3.5 U2、 3.5 U3、 3.5 U4、 4.0
- **Update 6** : ESX 2.5.3、 2.5.4、 2.5.5、 3.0、 3.0.1、 3.0.2、 3.0.3、 3.5、 3.5 U1、 3.5 U2、 3.5 U3、 3.5 U4、 4.0
- **Update 7** : ESX 2.5.3、 2.5.4、 2.5.5、 3.0、 3.0.1、 3.0.2、 3.0.3、 3.5、 3.5 U1、 3.5 U2、 3.5 U3、 3.5 U4、 4.0
- **Update 8** : ESX 2.5.3 (Upgrade Patch 3 が必要。詳細は <http://vmware.com/support/esx25/doc/esx-253-200607-patch.html> を参照)、 2.5.4、 2.5.5、 3.0、 3.0.1、 3.0.2、 3.0.3、 3.5、 3.5 U1、 3.5 U2、 3.5 U3、 3.5 U4、 4.0
- **Update 9** : ESX 2.5.4、 2.5.5、 3.0、 3.0.1、 3.0.2、 3.0.3、 3.5、 3.5 U1、 3.5 U2、 3.5 U3、 3.5 U4、 4.0

その他のサポート

- **SMP** : ESX 3.0、 3.0.1、 3.0.2、 3.0.3、 3.5、 3.5 U1、 3.5 U2、 3.5 U3、 3.5 U4、 4.0 でフル サポート

サポートでの考慮事項

- Red Hat Enterprise Linux 3 の hugemem カーネルはサポートされていません。ナレッジ ベースの記事 8964517 (<http://kb.vmware.com/kb/8964517>) を参照してください。
- **VMware Fusion**
Red Hat Enterprise Linux Update 8 : Fusion 1.0、 1.1、 1.1.1、 1.1.2、 1.1.3、 2.0、 2.0.1、 2.0.2、 2.0.3、 2.0.4

アップデート版のサポート

- **Update 8** : Fusion 1.0、1.1、1.1.1、1.1.2、1.1.3、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4
- **Update 9** : Fusion 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

その他のサポート

- **SMP** : Fusion 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4 で 2 way をサポート

64 ビット版

(Update が一切適用されていない) 64 ビット版の Red Hat Enterprise Linux 3 ゲストおよび Red Hat Enterprise Linux 3 Update 1 では、VMware 仮想ハードウェア上で 4GB より大きなメモリはサポートされていません。

64 ビット版の Red Hat Enterprise Linux 3 は、次の VMware 製品でサポートされています。

■ VMware Workstation

Advanced Server (AS) : Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

Enterprise Server (ES) : Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

Workstation (WS) : Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

アップデート版のサポート

- **Update 4** : Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2
- **Update 5** : Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2
- **Update 6** : Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2
- **Update 7** : Workstation 5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2
- **Update 8** : Workstation 5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

- **SMP** : Workstation 5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way を試験的にサポート

サポートでの考慮事項

- Red Hat Enterprise Linux 3 の hugemem カーネルはサポートされていません。ナレッジ ベースの記事 8964517 (<http://kb.vmware.com/kb/8964517>) を参照してください。

■ VMware ACE

Advanced Server (AS) : ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

Enterprise Server (ES) : ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

Workstation (WS) : ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

アップデート版のサポート

- **Update 3** : ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2
- **Update 4** : ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

サポートでの考慮事項

- Red Hat Enterprise Linux 3 の hugemem カーネルはサポートされていません。ナレッジ ベースの記事 8964517 (<http://kb.vmware.com/kb/8964517>) を参照してください。

■ VMware Server

Red Hat Enterprise Linux 3 : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9

アップデート版のサポート

- **Update 6** : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9
- **Update 7** : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9
- **Update 8** : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9 で試験的にサポート

その他のサポート

- **SMP** : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9 で 2 way を試験的にサポート

サポートでの考慮事項

- Red Hat Enterprise Linux 3 の hugemem カーネルはサポートされていません。ナレッジ ベースの記事 8964517 (<http://kb.vmware.com/kb/8964517>) を参照してください。

■ VMware ESX Server

Advanced Server (AS) : ESX 3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

Enterprise Server (ES) : ESX 3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

Workstation (WS) : ESX 3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

アップデート版のサポート

- **Update 1** : ESX 3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0
- **Update 2** : ESX 3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0
- **Update 3** : ESX 3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0
- **Update 4** : ESX 3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0
- **Update 5** : ESX 3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0
- **Update 6** : ESX 3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0
- **Update 7** : ESX 3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0
- **Update 8** : ESX 3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0
- **Update 9** : ESX 3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

その他のサポート

- **SMP** : ESX 3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0 でフルサポート

サポートでの考慮事項

- Red Hat Enterprise Linux 3 の hugemem カーネルはサポートされていません。ナレッジ ベースの記事 8964517 (<http://kb.vmware.com/kb/8964517>) を参照してください。

■ VMware Fusion

Red Hat Enterprise Linux 3 Update 8 : Fusion 1.0、1.1、1.1.1、1.1.2、1.1.3、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

アップデート版のサポート

- **Update 8 :** Fusion 1.0、1.1、1.1.1、1.1.2、1.1.3、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4
- **Update 9 :** Fusion 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

その他のサポート

- **SMP :** Fusion 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4 で 2 way をサポート

サポートでの考慮事項

- Red Hat Enterprise Linux 3 の hugemem カーネルはサポートされていません。ナレッジ ベースの記事 8964517 (<http://kb.vmware.com/kb/8964517>) を参照してください。

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

Red Hat Enterprise Linux 3 は、標準の Red Hat ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。ここでは、標準のディストリビューション CD を使用したインストールの手順を説明します。ただし、起動フロッピーまたはネットワークから Red Hat Enterprise Linux 3 をインストールすることもできます。ご使用の VMware 製品で PXE サーバがサポートされている場合は、PXE サーバからインストールすることもできます。

オペレーティングシステムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

注意 仮想マシンは、必ず 256MB 以上のメモリを構成するようにしてください。仮想マシンのメモリが 256MB よりも少ないと、Red Hat Enterprise Linux が、一部の VMware ドライバのロード中にエラー メッセージを表示します。

注意 VMware 仮想マシンで BusLogic 仮想 SCSI アダプタを使用した際、Linux ゲスト OS の多くでさまざまな問題が発生しています。このゲスト OS では、LSI Logic 仮想 SCSI アダプタを使用することをお勧めします。

注意 VMware VirtualCenter または vCenter Server を使用してゲスト OS をインストールする場合は、その仮想マシンを実行する VMware 製品（ESX Server または VMware Server）で該当するゲスト OS がサポートされていることを確認してください。

インストールの手順

注意 次の[ステップ 6](#)の注記によく目を通して、不適切なカーネルをインストールしないように注意してください。

- 1 CD-ROM ドライブに Red Hat Enterprise Linux 3 CD-ROM を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、Red Hat Enterprise Linux 3 のインストールを開始します。

Red Hat Enterprise Linux 3 のインストールには、テキスト モードのインストーラを使用します。これは、インストーラの最初の起動時に選択できます。Red Hat Enterprise Linux 3 CD ブート プロンプトに、次のような選択肢が表示されます。

```
To install or upgrade Red Hat Linux ... in graphical mode ...
To install or upgrade ... in text mode, type: text <ENTER>...
...
Use the function keys listed below ...
```

テキスト モードのインストーラを選択するには、**text** と入力してから <Enter> キーを押します。

- 3 残りの手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。次の手順では必ず指示どおりの選択を行なってください。
- 4 言語およびキーボードを選択します。次に、[Installation Type] 画面で、インストールの種類として [Advanced Server] または [Custom] のいずれかを選択します。
- 5 [Mouse Selection] 画面で、[Generic - 3 Button Mouse (PS/2)] を選択してから [Emulate 3 Buttons] オプションを選択すれば、仮想マシンが 3 ボタン マウスをサポートするようになります。ホイール マウスを使用している場合は、[Generic Wheel Mouse (PS/2)] を選択することもできます。

- 6 **VMware GSX Server のみ** : [Package Group Selection] 画面では、[Software Development] を選択してから個々のパッケージを選択します。[Individual Package Selection] 画面ではカーソル キーを使用して [System Environment/Kernel] まで下方方向に移動し、<Enter> キーを押します。
[kernel-smp] の選択が解除されていることを必ず確認してください（角括弧の中にアスタリスクが表示されないようにする）。SMP カーネルは、GSX Server 仮想マシンではサポートされていません。ほかの選択を変更する必要はありません。
- 7 [Automatic Partitioning] 画面で、ディスクの自動パーティショニングを許可します。Red Hat のデフォルトを使用しない場合は、手動で仮想ディスクのパーティショニングを行うこともできます。
- 8 次のような警告が表示されることがあります。

The partition table on device sda was unreadable. To create new partitions, it must be initialized, causing the loss of ALL DATA on the drive.
Would you like to initialize this drive?

この警告が表示されても、物理コンピュータのハード ドライブに問題が発生しているわけではありません。仮想マシンの仮想ハード ドライブに対してパーティショニングおよびフォーマットを行う必要があると警告しているだけです。[Yes] ボタンを選択してから <Enter> キーを押します。該当する仮想ディスクが SCSI ディスクの場合、警告メッセージ文にはデバイス名として **sda** が表示されます。仮想ディスクが IDE ドライブの場合、代わりにデバイス名 **hda** が表示されます。

- 9 **VMware GSX Server**: 使用中のコンピュータが DHCP に対応した LAN に接続されている場合は、[Network Configuration] 画面から [Use bootp/dhcp] オプションを選択することができます。また、ネットワーク パラメータを手動で設定することもできます。

VMware ESX Server、VMware VirtualCenter、または vCenter Server : vlance ネットワーク アダプタを使用している仮想マシンで、使用中のコンピュータが DHCP に対応した LAN に接続されている場合は、[Network Configuration] 画面から [Use bootp/dhcp] オプションを選択することができます。また、ネットワーク パラメータを手動で設定することもできます。仮想マシンで vmxnet ネットワーク アダプタを使用している場合は、ゲスト OS のインストール完了後に、Red Hat Enterprise Linux 3 のネットワーク構成ツールを使用してネットワーク接続を構成します。

これでゲスト OS としての Red Hat Enterprise Linux 3 の基本インストールが完了です。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

VMware Tools をインストールするまでは、ゲスト OS で X サーバを起動しないでください。

IPv6

多くの Linux ディストリビューションでは、VMware Tools のインストール後に IPv6 が有効になっていると、VMware Tools を **vmware-config-tools.pl** で構成することができません。この場合、VMware Tools は該当する仮想マシン向けにネットワーク デバイスを正しく設定することができず、次のようなメッセージが表示されます。

```
Unloading pcnet32 module
unregister_netdevice: waiting for eth0 to become free
```

このメッセージは、仮想マシンを再起動するまで連続して繰り返し表示されます。Linux を実行する仮想マシンでこの問題を防ぐには、VMware Tools をインストールする前に IPv6 を無効にしておきます。

注意 VMware ESX 4.0 以降のリリースでは IPv6 がサポートされています。VMware Tools のインストール前に IPv6 を無効にする必要はありません。

Linux を実行する仮想マシンで IPv6 を無効にするには

- 1 `/etc/sysconfig/network` ファイルに `NETWORKING_IPV6=yes` という行が含まれている場合は、この行を次のように変更します。

```
NETWORKING_IPV6=no
```

- 2 `/etc/modules.conf` ファイルに、次の行を追加します。

```
alias ipv6 off
alias net-pf-10 off
```

IPv6 を無効にすると、VMware Tools を正常にインストールし、構成できます。

既知の問題

インストール中の PAE メッセージ

VMware Workstation 5.0 : PAE テクノロジーを使用するホスト コンピュータで、VMware Workstation 5.0 以前のバージョンにゲスト OS をインストールする場合に、ゲスト OS が PAE を使用しようとしていることを通知するエラー メッセージが表示さ

れることがあります。このメッセージが表示された場合は、インストール処理を中止して、影響を受ける仮想マシンで PAE を有効にします。

仮想マシンで PAE を有効にするには

- 1 仮想マシンがパワーオフされていることを確認します。
- 2 仮想マシンの構成ファイル（.vmx）に、次の行を追加します。
`paevm="true"`
- 3 仮想マシンをパワーオンして、ゲスト OS をインストールします。

ESX Server 仮想マシンでの PAE の無効化

ESX Server 2.5.x : ESX Server 2.5.x 仮想マシンは物理アドレス拡張（PAE）をサポートしていますが、この機能用にパフォーマンスが最適化されているわけではありません。このため、PAE 機能が有効になっているゲスト OS では、パフォーマンスが低下する可能性があります。最高のパフォーマンスを実現するには、ゲスト OS で PAE を無効にすることをお勧めします。PAE の無効化の詳細および手順は、ナレッジベースの記事（<http://kb.vmware.com/kb/2020>）を参照してください。

ESX Server 3.x : PAE を無効にすると、最近の AMD および Intel プロセッサが提供する NX（No Execute）機能および ED（Execute Disabled）機能も無効になります。これらの機能は、ESX Server 3.x より前のバージョンの ESX Server ではサポートされていません。

適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更

このゲスト OS のデフォルトのタイムキーピング構成では、問題が発生する可能性があります。Linux でのタイムキーピングのベストプラクティスについては、ナレッジベースの記事（<http://kb.vmware.com/kb/1006427>）を参照してください。

ゲストのスクリーンセーバー

VMware GSX Server : XFree86 3.x X サーバを稼動する Linux ホストでは、ゲスト OS でのスクリーンセーバーの使用は避けてください。ゲストでスクリーンセーバーを使用すると、大量の処理能力が必要なため、ホストの X サーバがフリーズする可能性があります。

異なるプロセッサへの移行

Linux 仮想マシンを AMD プロセッサ上で稼働するホストと Intel プロセッサ上で稼働するホストとの間で移行することはお勧めしません。

Linux ディストリビューションの多くは、インストール時に、インストール先の特定のプロセッサに適したカーネルを選択します。また、一部のディストリビューションは、デフォルトで GENERIC カーネルをインストールしますが、ユーザーが選択してインストールできるアーキテクチャ固有のカーネルも提供しています。このようなカーネルには、そのプロセッサでのみ利用できる命令が含まれている場合があります。異なる種類のプロセッサを使用するホストでこれらの命令を実行すると、悪影響が生じる可能性があります。

このため、AMD プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンは、Intel プロセッサを使用するホストに移行しても動作しないことがあります。逆に、Intel プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンを AMD プロセッサを使用するホストに移行しても動作しない場合があります。

これは仮想マシンに限られたものではなく、物理コンピュータでも発生する問題です。たとえば、Linux がインストールされたハード ドライブを AMD マシンから Intel マシンに移動した場合、そのドライブから起動しようとすると問題が発生します。

4GB を超えるメモリが構成されているユニプロセッサ仮想マシンへのインストール

VMware ESX Server 3.x : ご使用の仮想マシンが 4GB を超える RAM を持つユニプロセッサシステムとして構成されている場合、Red Hat Enterprise Linux 3 をインストールすると、巨大メモリ カーネルのインストールエラーが発生することがあります。その結果、ゲスト OS が 4GB のメモリしか認識なくなります。この問題を回避するには、問題の仮想マシンを再起動して、RPM インストーラを使用して巨大メモリカーネルを手動でインストールします。

「汚染された (Tainted)」ドライバに関するメッセージ

VMware ESX Server、VMware VirtualCenter、または vCenter Server : Red Hat Enterprise Linux 3 Update 6 以降では、**vmxnet** ネットワーク ドライバのロード時に、ドライバが汚染されていることが通知されます。この警告が表示されても、ドライバに問題が発生しているわけではありません。単に、それが私有ドライバであり、GNU 一般公衆利用許諾契約書 (General Public License) のライセンス承認を受けていないことを意味します。

画面色深度がデフォルトで 24 に設定されている場合に、仮想マシンで発生する X ウィンドウ システムの起動エラー

ESX Server 3.x : Red Hat Enterprise Linux 3 または Red Hat Enterprise Linux 3 Update 7 を実行中の仮想マシンで画面色深度のデフォルト設定として **24** を選択している場合、X ウィンドウ システムを (**startx** コマンドで) 起動しようとすると、「**No screens found**」というエラー メッセージが表示されます。この問題は、次のいずれかの方法で回避することができます。

- VMware Tools をインストールする
- **/etc/X11/XF86config** ファイルを手作業で編集し、画面色深度のデフォルトを **8** に設定する

Red Hat Enterprise Linux 2.1

このセクションでは、Red Hat Enterprise Linux 2.1 オペレーティングシステムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について記述しています。

32 ビット版

32 ビット版の Red Hat Enterprise Linux 2.1 は、次の VMware 製品でサポートされています。

■ VMware Workstation

Advanced Server (AS) : Workstation 4.0、4.0.1、4.0.2、4.0.5、4.5、4.5.1、4.5.2、4.5.3、5.0、5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

Enterprise Server (ES) : Workstation 4.0、4.0.1、4.0.2、4.0.5、4.5、4.5.1、4.5.2、4.5.3、5.0、5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

Workstation (WS) : Workstation 4.0、4.0.1、4.0.2、4.0.5、4.5、4.5.1、4.5.2、4.5.3、5.0、5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

アップデート版のサポート

■ **Update 6 :** Workstation 5.0、5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

■ **Update 7 :** Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

■ **SMP :** Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way を試験的にサポート

■ VMware ACE

Advanced Server (AS) : ACE 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

Enterprise Server (ES) : ACE 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

Workstation (WS) : ACE 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

アップデート版のサポート

- **Update 6** : ACE 1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

■ **VMware GSX Server**

Advanced Server (AS) : GSX Server 3.0、3.1、3.2、3.2.1

Enterprise Server (ES) : GSX Server 3.0、3.1、3.2、3.2.1

Workstation (WS) : GSX Server 3.0、3.1、3.2、3.2.1

アップデート版のサポート

- **Update 6** : GSX Server 3.2、3.2.1

■ **VMware Server**

Red Hat Enterprise Linux 2.1 : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9

その他のサポート

- **SMP** : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9 で 2 way を試験的にサポート

■ **VMware ESX Server**

Advanced Server (AS) : ESX 2.0、2.0.1、2.1、2.1.1、2.1.2、2.5、2.5.1、2.5.2、2.5.3、2.5.4、2.5.5、3.0、3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

Enterprise Server (ES) : ESX 2.0、2.0.1、2.1、2.1.1、2.1.2、2.5、2.5.1、2.5.2、2.5.3、2.5.4、2.5.5、3.0、3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

Workstation (WS) : ESX 2.0、2.0.1、2.1、2.1.1、2.1.2、2.5、2.5.1、2.5.2、2.5.3、2.5.4、2.5.5、3.0、3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

アップデート版のサポート

- **Update 6** : ESX 2.5、2.5.1、2.5.2、2.5.3、2.5.4、2.5.5、3.0、3.0.1、3.0.2、3.0.3
- **Update 7** : ESX 2.5.2、2.5.3、2.5.4、2.5.5、3.0、3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

その他のサポート

- **SMP** : ESX 2.0、2.0.1、2.1、2.1.1、2.1.2、2.5、2.5.1、2.5.2、2.5.3、2.5.4、2.5.5、3.0、3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0 でフル サポート
- **VMware Fusion**
 - Advanced Server (AS)** : Fusion 1.0、1.1、1.1.1、1.1.2、1.1.3、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4
 - Enterprise Server (ES)** : Fusion 1.0、1.1、1.1.1、1.1.2、1.1.3、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4
 - Workstation (WS)** : Fusion 1.0、1.1、1.1.1、1.1.2、1.1.3、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

Red Hat Enterprise Linux 2.1 は、標準の Red Hat ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。ここでは、標準のディストリビューション CD を使用したインストールの手順を説明します。ただし、起動フロップピーまたはネットワークから Red Hat Enterprise Linux 2.1 をインストールすることもできます。ご使用の VMware 製品で PXE サーバがサポートされている場合は、PXE サーバからインストールすることもできます。

オペレーティング システムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

VMware ESX Server で稼動する Red Hat Enterprise Linux 2.1 WS: ESX Server の仮想マシンに Red Hat Enterprise Linux 2.1 WS をインストールする際は、Update 6 以降を使用します。これにより、ネットワークと SCSI アダプタの競合だけでなく、Red Hat Enterprise Linux 2.1 WS ゲスト OS でのインストールの問題も解消されます。

Update 6 以降をインストールしない場合は、ネットワークおよび SCSI アダプタに次のいずれかの構成を使用します。

- **vlance ネットワーク アダプタ** : LSI Logic SCSI アダプタを使用。
- **vmxnet ネットワーク アダプタ** : LSI Logic SCSI アダプタまたは BusLogic アダプタを使用。

注意 Red Hat Enterprise Linux 2.1 のセットアップ時に X サーバがインストールされますが、これは実行しないでください。代わりに、Red Hat Enterprise Linux 2.1 のインストール完了後、ただちに VMware Tools パッケージをインストールします。これで、仮想マシン内でアクセラレータ機能付き SVGA X サーバを実行できます。

注意 VMware 仮想マシンで BusLogic 仮想 SCSI アダプタを使用した際、Linux ゲスト OS の多くでさまざまな問題が発生しています。このゲスト OS では、LSI Logic 仮想 SCSI アダプタを使用することをお勧めします。

注意 VMware VirtualCenter または vCenter Server を使用してゲスト OS をインストールする場合は、その仮想マシンを実行する VMware 製品（ESX Server または VMware Server）で該当するゲスト OS がサポートされていることを確認してください。

インストールの手順

注意 VMware ESX Server を使用してマルチプロセッサの仮想マシンを実行している場合を除き、次の [ステップ 6](#) の注記によく目を通して、不適切なカーネルをインストールしないように注意してください。

- 1 CD-ROM ドライブに Red Hat Enterprise Linux 2.1 CD-ROM を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、Red Hat Enterprise Linux 2.1 のインストールを開始します。

Red Hat Enterprise Linux 2.1 のインストールには、テキストモードのインストーラを使用します。これは、インストーラの最初の起動時に選択できます。Red Hat Enterprise Linux 2.1 CD ブート プロンプトに、次のような選択肢が表示されます。

```
To install or upgrade Red Hat Linux ... in graphical mode ...
To install or upgrade ... in text mode, type: text <ENTER>...
...
Use the function keys listed below ...
```

テキストモードのインストーラを選択するには、**text** と入力してから <Enter> キーを押します。

- 3 残りの手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。次の手順では必ず指示どおりの選択を行なってください。
- 4 言語およびキーボードを選択します。次に、[Installation Type] 画面で、インストールの種類として [Advanced Server] または [Custom] のいずれかを選択します。

- 5 [Mouse Selection] 画面で、[Generic - 3 Button Mouse (PS/2)] を選択してから [Emulate 3 Buttons] オプションを選択すれば、仮想マシンが 3 ボタン マウスをサポートするようになります。ホイール マウスを使用している場合は、[Generic Wheel Mouse (PS/2)] を選択することもできます。

- 6 **VMware GSX Server のみ**：[Package Group Selection] 画面では、[Software Development] を選択してから個々のパッケージを選択します。[Individual Package Selection] 画面ではカーソル キーを使用して [System Environment/Kernel] まで下方向に移動し、<Enter> キーを押します。[kernel-smp] の選択が解除されていることを必ず確認してください（角括弧の中にアスタリスクが表示されないようにする）。SMP カーネルは、GSX Server 仮想マシンではサポートされていません。ほかの選択を変更する必要はありません。

VMware ESX Server、VirtualCenter、または vCenter Server（Virtual SMP が構成されていない ESX Server マシンにインストールする場合）：[Individual Package Selection] 画面ではカーソル キーを使用して [System Environment/Kernel] まで下方向に移動し、<Enter> キーを押します。次のカーネルの選択が解除されていることを必ず確認してください（角括弧の中にアスタリスクが表示されないようにする）。

- kernel-enterprise
- kernel-smp
- kernel-summit

VMware ESX Server、VirtualCenter、または vCenter Server（Virtual SMP が構成されている ESX Server マシンにインストールする場合）：[Individual Package Selection] 画面ではカーソル キーを使用して [System Environment/Kernel] まで下方向に移動し、<Enter> キーを押します。

- マルチプロセッサ仮想マシンをインストールする場合は、[kernel-smp] を選択する必要があります。
- ユニプロセッサ仮想マシンをインストールする場合は、次のカーネルを選択解除します。kernel-enterprise、kernel-smp、および kernel-summit。

VMware ESX Server を使って Red Hat Enterprise Linux 2.1 仮想マシンでユニプロセッサおよびマルチプロセッサのカーネルを使用する際の詳細は、www.vmware.com/support/esx21/doc/releasenotes_esx213.html のリリースノートを参照してください。

- 7 [Automatic Partitioning] 画面で、ディスクの自動パーティショニングを許可します。Red Hat のデフォルトを使用しない場合は、手動で仮想ディスクのパーティショニングを行うこともできます。

- 8 次のような警告が表示されることがあります。

The partition table on device sda was unreadable. To create new partitions, it must be initialized, causing the loss of ALL DATA on the drive.

Would you like to initialize this drive?

この警告が表示されても、物理コンピュータのハード ドライブに問題が発生しているわけではありません。仮想マシンの仮想ハード ドライブに対してパーティショニングおよびフォーマットを行う必要があると警告しているだけです。[Yes] ボタンを選択してから <Enter> キーを押します。該当する仮想ディスクが SCSI ディスクの場合、警告メッセージ文にはデバイス名として **sda** が表示されます。仮想ディスクが IDE ドライブの場合、代わりにデバイス名 **hda** が表示されます。

- 9 使用中のコンピュータが DHCP に対応した LAN に接続されている場合は、[Network Configuration] 画面から [Use bootp/dhcp] オプションを選択することができます。また、ネットワーク パラメータを手動で設定することもできます。
- 10 [Video Card Configuration] 画面で、[Generic SVGA] を選択します。

これでゲスト OS としての Red Hat Enterprise Linux 2.1 の基本インストールが完了です。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

VMware Tools をインストールするまでは、ゲスト OS で X サーバを起動しないでください。

IPv6

多くの Linux ディストリビューションでは、VMware Tools のインストール後に IPv6 が有効になっていると、VMware Tools を **vmware-config-tools.pl** で構成することができません。この場合、VMware Tools は該当する仮想マシン向けにネットワーク デバイスを正しく設定することができず、次のようなメッセージが表示されます。

Unloading pcnet32 module

unregister_netdevice: waiting for eth0 to become free

このメッセージは、仮想マシンを再起動するまで連続して繰り返し表示されます。Linux を実行する仮想マシンでこの問題を防ぐには、VMware Tools をインストールする前に IPv6 を無効にしておきます。

注意 VMware ESX 4.0 以降のリリースでは IPv6 がサポートされています。VMware Tools のインストール前に IPv6 を無効にする必要はありません。

Linux を実行する仮想マシンで IPv6 を無効にするには

- 1 `/etc/sysconfig/network` ファイルに `NETWORKING_IPV6=yes` という行が含まれている場合は、この行を次のように変更します。

```
NETWORKING_IPV6=no
```

- 2 `/etc/modules.conf` ファイルに、次の行を追加します。

```
alias ipv6 off
alias net-pf-10 off
```

IPv6 を無効にすると、VMware Tools を正常にインストールし、構成できます。

既知の問題

マウスの正常な操作不能

ESX 3.0.2 または 3.0.3 で、1 つまたは複数の仮想プロセッサを使用する仮想マシン内の Red Hat Enterprise Linux WS 2.1 Update 6 ゲスト OS に VMware Tools をインストールすると、マウスが正常に機能しません。VMware のマウスは、4.2 以前のバージョンの X サーバを実行する Linux ゲスト OS ではサポートされていません。

適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更

このゲスト OS のデフォルトのタイムキーピング構成では、問題が発生する可能性があります。Linux でのタイムキーピングのベスト プラクティスについては、ナレッジベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/1006427>) を参照してください。

ゲストのスクリーン セーバー

VMware GSX Server: XFree86 3.x X サーバを稼動する Linux ホストでは、ゲスト OS でのスクリーン セーバーの使用は避けてください。ゲストでスクリーン セーバーを使用すると、大量の処理能力が必要なため、ホストの X サーバがフリーズする可能性があります。

異なるプロセッサへの移行

Linux 仮想マシンを AMD プロセッサ上で稼働するホストと Intel プロセッサ上で稼働するホストとの間で移行することはお勧めしません。

Linux ディストリビューションの多くは、インストール時に、インストール先の特定のプロセッサに適したカーネルを選択します。また、一部のディストリビューションは、デフォルトで GENERIC カーネルをインストールしますが、ユーザーが選択してインストールできるアーキテクチャ固有のカーネルも提供しています。このようなカーネルには、そのプロセッサでのみ利用できる命令が含まれている場合があります。異なる種類のプロセッサを使用するホストでこれらの命令を実行すると、悪影響が生じる可能性があります。

このため、AMD プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンは、Intel プロセッサを使用するホストに移行しても動作しないことがあります。逆に、Intel プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンを AMD プロセッサを使用するホストに移行しても動作しない場合があります。

これは仮想マシンに限られたものではなく、物理コンピュータでも発生する問題です。たとえば、Linux がインストールされたハード ドライブを AMD マシンから Intel マシンに移動した場合、そのドライブから起動しようとすると問題が発生します。

ESX Server 仮想マシンでの PAE の無効化

ESX Server 2.5.x : ESX Server 2.5.x 仮想マシンは物理アドレス拡張 (PAE) をサポートしていますが、この機能用にパフォーマンスが最適化されているわけではありません。このため、PAE 機能が有効になっているゲスト OS では、パフォーマンスが低下する可能性があります。最高のパフォーマンスを実現するには、ゲスト OS で PAE を無効にすることをお勧めします。PAE の無効化の詳細および手順は、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/2020>) を参照してください。

ESX Server 3.x : PAE を無効にすると、最近の AMD および Intel プロセッサが提供する NX (No Execute) 機能および ED (Execute Disabled) 機能も無効になります。これらの機能は、ESX Server 3.x より前のバージョンの ESX Server ではサポートされていません。

Red Hat Linux 9.0

このセクションでは、Red Hat Linux 9.0 オペレーティングシステムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について記述しています。

32 ビット版

32 ビット版の Red Hat Linux 9.0 は、次の VMware 製品でサポートされています。

■ VMware Workstation

Red Hat Linux 9.0 : Workstation 4.0.1、4.0.2、4.0.5、4.5、4.5.1、4.5.2、4.5.3、5.0、5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

■ **SMP** : Workstation 5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way を試験的にサポート

■ **Red Hat Linux 9.0 での Eclipse 統合型仮想デバッグのサポート** : Workstation 6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

■ VMware ACE

Red Hat Linux 9.0 : ACE 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

■ VMware GSX Server

Red Hat Linux 9.0 : GSX Server 3.0、3.1、3.2、3.2.1

■ VMware Server

Red Hat Linux 9.0 : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9

その他のサポート

■ **SMP** : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9 で 2 way を試験的にサポート

■ VMware ESX Server

Red Hat Linux 9.0 : ESX 2.0、2.0.1、2.1.1、2.1.2、2.1、2.5、2.5.1、2.5.2、2.5.3、2.5.4、2.5.5

その他のサポート

- **SMP** : ESX 2.0、2.0.1、2.1.1、2.1.2、2.1、2.5、2.5.1、2.5.2、2.5.3、2.5.4、2.5.5 でフル サポート

- **VMware Fusion**

Red Hat Linux 9.0 : Fusion 1.0、1.1、1.1.1、1.1.2、1.1.3、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

Red Hat Linux 9.0 は、標準の Red Hat ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。ここでは、標準のディストリビューション CD を使用したインストールの手順を説明します。ただし、起動フロッピーまたはネットワークから Red Hat Linux 9.0 をインストールすることもできます。ご使用の VMware 製品で PXE サーバがサポートされている場合は、PXE サーバからインストールすることもできます。

オペレーティング システムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

注意	Red Hat Linux 9.0 のセットアップ時に X サーバがインストールされますが、これは実行しないでください。代わりに、Red Hat Linux 9.0 のインストール完了後、ただちに VMware Tools パッケージをインストールします。これで、仮想マシン内でアクセラレータ機能付き SVGA X サーバを実行できます。
注意	VMware 仮想マシンで BusLogic 仮想 SCSI アダプタを使用した際、Linux ゲスト OS の多くでさまざまな問題が発生しています。このゲスト OS では、LSI Logic 仮想 SCSI アダプタを使用することをお勧めします。
注意	VMware VirtualCenter または vCenter Server を使用してゲスト OS をインストールする場合は、その仮想マシンを実行する VMware 製品 (ESX Server または VMware Server) で該当するゲスト OS がサポートされていることを確認してください。

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに Red Hat Linux 9.0 CD-ROM を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、Red Hat Linux 9.0 のインストールを開始します。

Red Hat Linux 9.0 のインストールには、テキスト モードのインストーラを使用します。これは、インストーラの最初の起動時に選択できます。Red Hat Linux 9.0 CD ブート プロンプトに、次のような選択肢が表示されます。

```
To install or upgrade Red Hat Linux ... in graphical mode ...
To install or upgrade ... in text mode, type: linux text <ENTER>.
Use the function keys listed below ...
```

テキスト モードのインストーラを選択するには、**linux text** と入力してから <Enter> キーを押します。

注意 グラフィカル インストーラを使用しようとしても起動できないため、代わりにテキスト モードのインストーラが起動します。

- 3 残りの手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。次の手順では必ず指示どおりの選択を行なってください。
- 4 言語およびキーボードを選択します。
- 5 [Mouse Selection] 画面で、[Generic - 3 Button Mouse (PS/2)] を選択してから [Emulate 3 Buttons] オプションを選択すれば、仮想マシンが 3 ボタン マウスをサポートするようになります。ホイール マウスを使用している場合は、[Generic Wheel Mouse (PS/2)] を選択することもできます。
- 6 [Installation Type] 画面で、インストールの種類として [Server] か [Workstation] のいずれかを選択します。
- 7 [Automatic Partitioning] 画面で、ディスクの自動パーティショニングを許可します。Red Hat のデフォルトを使用しない場合は、手動で仮想ディスクのパーティショニングを行うこともできます。

- 8 次のような警告が表示されることがあります。

Bad partition table. The partition table on device sda is corrupted. To create new partitions, it must be initialized, causing the loss of ALL DATA on the drive.

この警告が表示されても、物理コンピュータのハードドライブに問題が発生しているわけではありません。仮想マシンの仮想ハードドライブに対してパーティショニングおよびフォーマットを行う必要があると警告しているだけです。[Initialize] ボタンを選択してから <Enter> キーを押します。該当する仮想ディスクが SCSI ディスクの場合、警告メッセージ文にはデバイス名として **sda** が表示されます。仮想ディスクが IDE ドライブの場合、代わりにデバイス名 **hda** が表示されます。

- 9 使用中のコンピュータが DHCP に対応した LAN に接続されている場合は、[Network Configuration] 画面から [Use bootp/dhcp] オプションを選択することができます。また、ネットワーク パラメータを手動で設定することもできます。
- 10 [Video Card Configuration] 画面で、[Skip X Configuration] を選択します。
- これでゲスト OS としての Red Hat Linux 9.0 の基本インストールが完了です。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

VMware Tools をインストールするまでは、ゲスト OS で X サーバを起動しないでください。

IPv6

多くの Linux ディストリビューションでは、VMware Tools のインストール後に IPv6 が有効になっていると、VMware Tools を **vmware-config-tools.pl** で構成することができません。この場合、VMware Tools は該当する仮想マシン向けにネットワーク デバイスを正しく設定することができず、次のようなメッセージが表示されます。

Unloading pcnet32 module
unregister_netdevice: waiting for eth0 to become free

このメッセージは、仮想マシンを再起動するまで連続して繰り返し表示されます。Linux を実行する仮想マシンでこの問題を防ぐには、VMware Tools をインストールする前に IPv6 を無効にしておきます。

注意 VMware ESX 4.0 以降のリリースでは IPv6 がサポートされています。VMware Tools のインストール前に IPv6 を無効にする必要はありません。

Linux を実行する仮想マシンで IPv6 を無効にするには

- 1 `/etc/sysconfig/network` ファイルに `NETWORKING_IPV6=yes` という行が含まれている場合は、この行を次のように変更します。

```
NETWORKING_IPV6=no
```

- 2 `/etc/modules.conf` ファイルに、次の行を追加します。

```
alias ipv6 off
alias net-pf-10 off
```

IPv6 を無効にすると、VMware Tools を正常にインストールし、構成できます。

注意 VMware Tools のインストール中に、ゲスト OS のディスプレイに使用する解像度を指定するように求められますが、解像度は必ず 1152 x 864 以下に設定してください。これより高い解像度に設定すると、ゲスト OS によってデフォルトの解像度（800 x 600）に切り替えられます。

既知の問題**インストーラに 2 枚目のインストール CD の読み取りを強制**

VMware Workstation、VMware ACE、または VMware GSX Server：仮想マシンの CD ドライブがデフォルトを使用してセットアップされている場合、Red Hat インストーラが 2 枚目のインストール CD を正常に読み取ることができない場合があります。

実際に表示されるエラー メッセージは、インストールするパッケージによって異なります。多くの場合、インストーラが最初に 2 枚目の CD から読み取ろうとするパッケージは XPDF パッケージです。この場合、エラー メッセージは `xpdf- <バージョン番号>` に関する問題を通知します。

インストーラが 2 枚目のインストール CD を正常に読み取るには

- 1 インストーラが 2 枚目の CD を要求したときに、ドライブから 1 枚目の CD を取り出して、ドライブを空のままにしておきます。
- 2 インストーラに処理を続行させます。CD ドライブのトレイが閉じ、そのあと CD が見つからないことを示すエラー メッセージが表示されます。
- 3 2 枚目の CD を挿入し、インストーラに処理を続行させます。2 枚目の CD が正常に読み取られ、インストールが問題なく続行されます。

適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更

このゲスト OS のデフォルトのタイムキーピング構成では、問題が発生する可能性があります。Linux でのタイムキーピングのベスト プラクティスについては、ナレッジベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/1006427>) を参照してください。

ゲストのスクリーン セーバー

VMware Workstation または VMware GSX Server : XFree86 3.x X サーバを稼動する Linux ホストでは、ゲスト OS でのスクリーン セーバーの使用は避けてください。ゲストでスクリーン セーバーを使用すると、大量の処理能力が必要なため、ホストの X サーバがフリーズする可能性があります。

INIT エラーまたはパフォーマンスの低下

VMware GSX Server : Red Hat Linux 9.0 ゲスト OS のインストール時にゲストのパフォーマンスが遅くなったり、最初にゲストを起動しようすると **INIT** エラーが表示されたりすることがあります。この問題を回避してよりスムーズにゲストをインストールするには、インストール開始時に Linux カーネルを起動する際、**nosysinfo** オプションを使用します。ゲストの **boot:** プロンプトに **text nosysinfo** と入力します。

ゲスト OS のインストール後も仮想マシンの実行速度が遅かったり、依然として **INIT** エラーが表示されたりする場合は、ゲスト OS の起動時に常に前述のオプションが使用されるようにブート ロードを修正することができます。ご使用のブート ロード (GRUB または LILO) に応じて、次のいずれかの処理を実行します。

GRUB ブート ロードを変更するには

- 1 テキスト エディタで、**/etc/grub.conf** を編集します。
- 2 ファイルの中から次のセクションを見つけます。このとき、次の例で使用されている 2.4.20-8 カーネルの代わりに別のカーネルが記載されていることがあります。


```
title Red Hat Linux (2.4.20-8)
root (hd0,0)
kernel /vmlinuz-2.4.20-8 ro root=LABEL=/
initrd ....
```
- 3 **kernel /vmlinuz-2.4.20-8 ro root=LABEL=/** 行の最後に、**nosysinfo** と追加します。
- 4 ファイルを保存して閉じます。これでゲストを起動できます。
- 5 ゲスト OS を再起動します。

注意 どの構成ファイルを変更するかが不明な場合は、前述の 4 行をコピーしたあと、タイトルを **Red Hat Linux** から **RH Linux Guest** に変更し、新しく作成したこのセクションの **kernel** で始まる行の最後に **nosysinfo** と追加してください。このようにすると、起動時に **RH Linux Guest** を使用して最適なパフォーマンスで起動するか、**Red Hat Linux** を使用してオリジナルの設定で起動するかを選択できます。

LILO ブート ロードを変更するには

- 1 テキスト エディタで、`/etc/lilo.conf` を編集します。
- 2 次の行を見つけます。
`append="....."`
- 3 見つけた行に、次のように **nosysinfo** を追加します。
`append="..... nosysinfo"`
- 4 `/etc/lilo.conf` ファイルに `append=` で始まる行が見つからない場合は、`/etc/lilo.conf` のはじめの方にある、
最初の `image=` または `other=` 指示文の前に次の行を追加します。
`append="nosysinfo"`
- 5 ファイルを保存して閉じます。
- 6 **lilo** コマンドを再実行して、変更を反映させます。
- 7 ゲスト OS を再起動します。

異なるプロセッサへの移行

Linux 仮想マシンを AMD プロセッサ上で稼働するホストと Intel プロセッサ上で稼働するホストとの間で移行することはお勧めしません。

Linux ディストリビューションの多くは、インストール時に、インストール先の特定のプロセッサに適したカーネルを選択します。また、一部のディストリビューションは、デフォルトで **GENERIC** カーネルをインストールしますが、ユーザーが選択してインストールできるアーキテクチャ固有のカーネルも提供しています。このようなカーネルには、そのプロセッサでのみ利用できる命令が含まれている場合があります。異なる種類のプロセッサを使用するホストでこれらの命令を実行すると、悪影響が生じる可能性があります。

このため、AMD プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンは、Intel プロセッサを使用するホストに移行しても動作しないことがあります。逆に、Intel プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンを AMD プロセッサを使用するホストに移行しても動作しない場合があります。

これは仮想マシンに限られたものではなく、物理コンピュータでも発生する問題です。たとえば、Linux がインストールされたハード ドライブを AMD マシンから Intel マシンに移動した場合、そのドライブから起動しようとすると問題が発生します。

Red Hat Linux 9.0 仮想マシンでの DHCP アドレスの取得

Red Hat Linux 9.0 ゲスト OS が DHCP アドレスを取得しようとすると、正常に動作せずに、リンクが壊れていることを示すエラー メッセージが表示される場合があります。ESX Server では、ネットワーク接続に **vlnace** ドライバを使用している場合にのみ、この問題が発生します。

この問題を回避するには、root (**su -**) の権限で、ゲスト OS 内の次のファイルをテキスト エディタを使用して編集します。次のいずれかのファイルしか存在しない場合は、そのファイルだけ変更します。

```
/etc/sysconfig/network-scripts/ifcfg-eth<n>
/etc/sysconfig/networking/devices/ifcfg-eth<n>
```

いずれのファイルも、<n> にはイーサネット アダプタの番号（たとえば、**eth0**）を指定します。

各ファイルに、次のセクションを追加します。

```
check_link_down () {
return 1;
}
```

次に、コマンド **ifup eth[n]**（[n] にはイーサネット アダプタの番号を指定）を実行するか、ゲスト OS を再起動します。

「汚染された (Tainted)」ドライバに関するメッセージ

VMware ESX Server、VMware VirtualCenter、または vCenter Server：Red Hat Linux 9.0 ゲスト OS では、**vmxnet** ネットワーク ドライバのロード時に、ドライバが汚染されていることが通知されます。この警告が表示されても、ドライバに問題が発生しているわけではありません。単に、それが私有ドライバであり、GNU 一般公衆利用許諾契約書（General Public License）のライセンス承認を受けていないことを意味します。

ESX Server 仮想マシンでの PAE の無効化

ESX Server 2.5.x : ESX Server 2.5.x 仮想マシンは物理アドレス拡張 (PAE) をサポートしていますが、この機能用にパフォーマンスが最適化されているわけではありません。このため、PAE 機能が有効になっているゲスト OS では、パフォーマンスが低下する可能性があります。最高のパフォーマンスを実現するには、ゲスト OS で PAE を無効にすることをお勧めします。PAE の無効化の詳細および手順は、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/2020>) を参照してください。

Red Hat Linux 8.0

このセクションでは、Red Hat Linux 8.0 オペレーティングシステムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について記述しています。

32 ビット版

32 ビット版の Red Hat Linux 8.0 は、次の VMware 製品でサポートされています。

■ VMware Workstation

Red Hat Linux 8.0 : Workstation 4.0、4.0.1、4.0.2、4.0.5、4.5、4.5.1、4.5.2、4.5.3、5.0、5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

- **SMP** : Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way を試験的にサポート

- **Red Hat Linux 8.0 での Eclipse 統合型仮想デバッグのサポート** : Workstation 6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

■ VMware ACE

Red Hat Linux 8.0 : ACE 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

■ VMware GSX Server

Red Hat Linux 8.0 : GSX Server 3.0、3.1、3.2、3.2.1

■ VMware Server

Red Hat Linux 8.0 : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9

その他のサポート

- **SMP** : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9 で 2 way を試験的にサポート

■ VMware ESX Server

Red Hat Linux 8.0 : ESX 2.0、2.0.1、2.1、2.1.1、2.1.2、2.5、2.5.1、2.5.2、2.5.3、2.5.4、2.5.5

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

Red Hat Linux 8.0 は、標準の Red Hat ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。ここでは、標準のディストリビューション CD を使用したインストールの手順を説明します。ただし、起動フロッピーまたはネットワークから Red Hat Linux 8.0 をインストールすることもできます。ご使用の VMware 製品で PXE サーバがサポートされている場合は、PXE サーバからインストールすることもできます。

オペレーティングシステムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

注意 Red Hat Linux 8.0 のセットアップ時に X サーバがインストールされますが、これは実行しないでください。代わりに、Red Hat Linux 8.0 のインストール完了後、ただちに VMware Tools パッケージをインストールします。これで、仮想マシン内でアクセラレータ機能付き SVGA X サーバを実行できます。

注意 VMware 仮想マシンで BusLogic 仮想 SCSI アダプタを使用した際、Linux ゲスト OS の多くでさまざまな問題が発生しています。このゲスト OS では、LSI Logic 仮想 SCSI アダプタを使用することをお勧めします。

注意 VMware VirtualCenter または vCenter Server を使用してゲスト OS をインストールする場合は、その仮想マシンを実行する VMware 製品 (ESX Server または VMware Server) で該当するゲスト OS がサポートされていることを確認してください。

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに Red Hat Linux 8.0 CD-ROM を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、Red Hat Linux 8.0 のインストールを開始します。

Red Hat Linux 8.0 のインストールには、テキスト モードのインストーラを使用します。これは、インストーラの最初の起動時に選択できます。Red Hat Linux 8.0 CD ブート プロンプトに、次のような選択肢が表示されます。

```
To install or upgrade Red Hat Linux ... in graphical mode ...
To install or upgrade ... in text mode, type: linux text <ENTER>.
Use the function keys listed below ...
```

テキスト モードのインストーラを選択するには、**linux text** と入力してから <Enter> キーを押します。

注意 グラフィカル インストーラを使用しようとしても起動できないため、代わりにテキスト モードのインストーラが起動します。

- 3 残りの手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。次の手順では必ず指示どおりの選択を行なってください。
- 4 言語およびキーボードを選択します。次に、[Installation Type] 画面で、インストールの種類として [Server] または [Workstation] のいずれかを選択します。
- 5 [Mouse Selection] 画面で、[Generic 3 Button Mouse (PS/2)] を選択してから [Emulate 3 Buttons] オプションを選択すれば、仮想マシンが 3 ボタン マウスをサポートするようになります。ホイール マウスを使用している場合は、[Generic Wheel Mouse (PS/2)] を選択することもできます。
- 6 次のような警告が表示されることがあります。

Bad partition table. The partition table on device sda is corrupted. To create new partitions, it must be initialized, causing the loss of ALL DATA on the drive.

この警告が表示されても、物理コンピュータのハード ドライブに問題が発生しているわけではありません。仮想マシンの仮想ハード ドライブに対してパーティショニングおよびフォーマットを行う必要があると警告しているだけです。[Initialize] ボタンを選択してから <Enter> キーを押します。該当する仮想ディスクが SCSI ディスクの場合、警告メッセージ文にはデバイス名として **sda** が表示されます。仮想ディスクが IDE ドライブの場合、代わりにデバイス名 **hda** が表示されます。

- 7 [Automatic Partitioning] 画面で、ディスクの自動パーティショニングを許可します。Red Hat のデフォルトを使用しない場合は、手動で仮想ディスクのパーティショニングを行うこともできます。
- 8 使用中のコンピュータが DHCP に対応した LAN に接続されている場合は、[Network Configuration] 画面から [Use bootp/dhcp] オプションを選択することができます。また、ネットワーク パラメータを手動で設定することもできます。
- 9 [Video Card Configuration] 画面で、[Skip X Configuration] を選択します。

これでゲスト OS としての Red Hat Linux 8.0 の基本インストールが完了です。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

VMware Tools をインストールするまでは、ゲスト OS で X サーバを起動しないでください。

IPv6

多くの Linux ディストリビューションでは、VMware Tools のインストール後に IPv6 が有効になっていると、VMware Tools を `vmware-config-tools.pl` で構成することができません。この場合、VMware Tools は該当する仮想マシン向けにネットワーク デバイスを正しく設定することができず、次のようなメッセージが表示されます。

```
Unloading pcnet32 module
unregister_netdevice: waiting for eth0 to become free
```

このメッセージは、仮想マシンを再起動するまで連続して繰り返し表示されます。Linux を実行する仮想マシンでこの問題を防ぐには、VMware Tools をインストールする前に IPv6 を無効にしておきます。

注意 VMware ESX 4.0 以降のリリースでは IPv6 がサポートされています。VMware Tools のインストール前に IPv6 を無効にする必要はありません。

Linux を実行する仮想マシンで IPv6 を無効にするには

- 1 `/etc/sysconfig/network` ファイルに `NETWORKING_IPV6=yes` という行が含まれている場合は、この行を次のように変更します。

```
NETWORKING_IPV6=no
```

- 2 `/etc/modules.conf` ファイルに、次の行を追加します。

```
alias ipv6 off
alias net-pf-10 off
```

IPv6 を無効にすると、VMware Tools を正常にインストールし、構成できます。

既知の問題

適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更

このゲスト OS のデフォルトのタイムキーピング構成では、問題が発生する可能性があります。Linux でのタイムキーピングのベスト プラクティスについては、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/1006427>) を参照してください。

ゲストのスクリーン セーバー

VMware Workstation または VMware GSX Server : XFree86 3.x X サーバを稼働する Linux ホストでは、ゲスト OS でのスクリーン セーバーの使用は避けてください。ゲストでスクリーン セーバーを使用すると、大量の処理能力が必要なため、ホストの X サーバがフリーズする可能性があります。

異なるプロセッサへの移行

Linux 仮想マシンを AMD プロセッサ上で稼働するホストと Intel プロセッサ上で稼働するホストとの間で移行することはお勧めしません。

Linux ディストリビューションの多くは、インストール時に、インストール先の特定プロセッサに最も適したカーネルを選択します。また、一部のディストリビューションは、デフォルトで GENERIC カーネルをインストールしますが、ユーザーが選択してインストールできるアーキテクチャ固有のカーネルも提供しています。このようなカーネルには、そのプロセッサでのみ利用できる命令が含まれている場合があります。異なる種類のプロセッサを使用するホストでこれらの命令を実行すると、悪影響が生じる可能性があります。

このため、AMD プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンは、Intel プロセッサを使用するホストに移行しても動作しないことがあります。逆に、Intel プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンを AMD プロセッサを使用するホストに移行しても動作しない場合があります。

これは仮想マシンに限られたものではなく、物理コンピュータでも発生する問題です。たとえば、Linux がインストールされたハード ドライブを AMD マシンから Intel マシンに移動した場合、そのドライブから起動しようとする問題が発生します。

「汚染された (Tainted)」ドライバに関するメッセージ

VMware ESX Server、VMware VirtualCenter、または vCenter Server : Red Hat Linux 8.0 ゲスト OS では、**vmxnet** ネットワーク ドライバのロード時に、ドライバが汚染されていることが通知されます。この警告が表示されても、ドライバに問題が発生しているわけではありません。単に、それが私有ドライバであり、GNU 一般公衆利用許諾契約書 (General Public License) のライセンス承認を受けていないことを意味します。

ESX Server 仮想マシンでの PAE の無効化

ESX Server 2.5.x : ESX Server 2.5.x 仮想マシンは物理アドレス拡張 (PAE) をサポートしていますが、この機能用にパフォーマンスが最適化されているわけではありません。このため、PAE 機能が有効になっているゲスト OS では、パフォーマンスが低下する可能性があります。最高のパフォーマンスを実現するには、ゲスト OS で PAE を無効にすることをお勧めします。PAE の無効化の詳細および手順は、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/2020>) を参照してください。

Red Hat Linux 7.3

このセクションでは、Red Hat Linux 7.3 オペレーティングシステムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について記述しています。

32 ビット版

32 ビット版の Red Hat Linux 7.3 は、次の VMware 製品でサポートされています。

■ VMware Workstation

Red Hat Linux 7.3 : Workstation 4.0、4.0.1、4.0.2、4.0.5、4.5、4.5.1、4.5.2、4.5.3、5.0、5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

- **SMP** : Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way を試験的にサポート

■ VMware ACE

Red Hat Linux 7.3 : ACE 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

■ VMware GSX Server

Red Hat Linux 7.3 : GSX Server 3.0、3.1、3.2、3.2.1

■ VMware Server

Red Hat Linux 7.3 : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9

その他のサポート

- **SMP** : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9 で 2 way を試験的にサポート

■ VMware ESX Server

Red Hat Linux 7.3 : ESX 2.0、2.0.1、2.1、2.1.1、2.1.2、2.5、2.5.1、2.5.2、2.5.3、2.5.4、2.5.5

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

Red Hat Linux 7.3 は、標準の Red Hat ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。ここでは、標準のディストリビューション CD を使用したインストールの手順を説明します。ただし、起動フロッピーまたはネットワークから Red Hat Linux 7.3 をインストールすることもできます。ご使用の VMware 製品で PXE サーバがサポートされている場合は、PXE サーバからインストールすることもできます。

オペレーティングシステムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

注意 Red Hat Linux 7.3 のセットアップ時に X サーバがインストールされますが、これは実行しないでください。代わりに、Red Hat Linux 7.3 のインストール完了後、ただちに VMware Tools パッケージをインストールします。これで、仮想マシン内でアクセラレータ機能付き SVGA X サーバを実行できます。

注意 VMware 仮想マシンで BusLogic 仮想 SCSI アダプタを使用した際、Linux ゲスト OS の多くでさまざまな問題が発生しています。このゲスト OS では、LSI Logic 仮想 SCSI アダプタを使用することをお勧めします。

注意 VMware VirtualCenter または vCenter Server を使用してゲスト OS をインストールする場合は、その仮想マシンを実行する VMware 製品 (ESX Server または VMware Server) で該当するゲスト OS がサポートされていることを確認してください。

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに Red Hat Linux 7.3 CD-ROM を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、Red Hat Linux 7.3 のインストールを開始します。

Red Hat Linux 7.3 のインストールには、テキスト モードのインストーラを使用します。これは、インストーラの最初の起動時に選択できます。Red Hat Linux 7.3 CD ブート プロンプトに、次のような選択肢が表示されます。

```
To install or upgrade a system ... in graphical mode ...
To install or upgrade a system ... in text mode, type: text <ENTER>.
To enable expert mode, ...
Use the function keys listed below ...
```

テキスト モードのインストーラを選択するには、**text** と入力してから <Enter> キーを押します。

- 3 残りの手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。次の手順では必ず指示どおりの選択を行なってください。
- 4 [Mouse Selection] 画面で、[Generic - 3 Button Mouse (PS/2)] を選択してから [Emulate 3 Buttons] オプションを選択すれば、仮想マシンが 3 ボタン マウスをサポートするようになります。
- 5 言語およびキーボードを選択します。次に、[Installation Type] 画面で、インストールの種類として [Server] または [Workstation] のいずれかを選択します。
- 6 次のような警告が表示されることがあります。

Bad partition table. The partition table on device sda is corrupted. To create new partitions, it must be initialized, causing the loss of ALL DATA on the drive.

この警告が表示されても、物理コンピュータのハード ドライブに問題が発生しているわけではありません。仮想マシンの仮想ハード ドライブに対してパーティショニングおよびフォーマットを行う必要があると警告しているだけです。[Initialize] ボタンを選択してから <Enter> キーを押します。該当する仮想ディスクが SCSI ディスクの場合、警告メッセージ文にはデバイス名として **sda** が表示されます。仮想ディスクが IDE ドライブの場合、代わりにデバイス名 **hda** が表示されます。

- 7 [Automatic Partitioning] 画面で、ディスクの自動パーティショニングを許可します。
- 8 使用中のコンピュータが DHCP に対応した LAN に接続されている場合は、[Network Configuration] 画面から [Use bootp/dhcp] オプションを選択することができます。また、ネットワーク パラメータを手動で設定することもできます。
- 9 [Video Card Selection] 画面で、任意のカードを一覧から選択します。
- 10 [Video Card Configuration] 画面で、[Skip X Configuration] を選択します。

これでゲスト OS としての Red Hat Linux 7.3 の基本インストールが完了です。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

VMware Tools をインストールするまでは、ゲスト OS で X サーバを起動しないでください。

IPv6

多くの Linux ディストリビューションでは、VMware Tools のインストール後に IPv6 が有効になっていると、VMware Tools を `vmware-config-tools.pl` で構成することができません。この場合、VMware Tools は該当する仮想マシン向けにネットワーク デバイスを正しく設定することができず、次のようなメッセージが表示されます。

```
Unloading pcnet32 module
unregister_netdevice: waiting for eth0 to become free
```

このメッセージは、仮想マシンを再起動するまで連続して繰り返し表示されます。Linux を実行する仮想マシンでこの問題を防ぐには、VMware Tools をインストールする前に IPv6 を無効にしておきます。

注意 VMware ESX 4.0 以降のリリースでは IPv6 がサポートされています。VMware Tools のインストール前に IPv6 を無効にする必要はありません。

Linux を実行する仮想マシンで IPv6 を無効にするには

- 1 `/etc/sysconfig/network` ファイルに `NETWORKING_IPV6=yes` という行が含まれている場合は、この行を次のように変更します。

```
NETWORKING_IPV6=no
```

- 2 `/etc/modules.conf` ファイルに、次の行を追加します。

```
alias ipv6 off
alias net-pf-10 off
```

IPv6 を無効にすると、VMware Tools を正常にインストールし、構成できます。

注意 VMware Tools のインストールを開始すると (`vmware-tools-distrib` ディレクトリで `./vmware-install.pl` と入力)、次のメッセージが表示されます。

```
Found an installed version of the VMware SVGA driver for XFree86 4. Some
versions of this driver included with the XFree86 4 distributions do not work
properly. Would you like to install a stable (but possibly older) version of
the driver over the currently installed one?
```

仮想マシンをデュアル ブートする場合は、[Yes] を選択してドライバをインストールします。再度 [Yes] を選択すると、既存のビデオ ドライバ ファイルのバックアップが作成され、`XF86Config-4.dist` ファイルが `XF86Config-4.vm` にコピーされます。後者のファイルは、仮想マシンをデュアル ブートする際に使用されます。

仮想マシンをデュアル ブートしない場合は、[No] を選択して既存のドライバを残します。

既知の問題

適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更

このゲスト OS のデフォルトのタイムキーピング構成では、問題が発生する可能性があります。Linux でのタイムキーピングのベスト プラクティスについては、ナレッジベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/1006427>) を参照してください。

ゲストのスクリーン セーバー

VMware Workstation または VMware GSX Server : XFree86 3.x X サーバを稼働する Linux ホストでは、ゲスト OS でのスクリーン セーバーの使用は避けてください。ゲストでスクリーン セーバーを使用すると、大量の処理能力が必要なため、ホストの X サーバがフリーズする可能性があります。

異なるプロセッサへの移行

Linux 仮想マシンを AMD プロセッサ上で稼働するホストと Intel プロセッサ上で稼働するホストとの間で移行することはお勧めしません。

Linux ディストリビューションの多くは、インストール時に、インストール先の特定のプロセッサに適したカーネルを選択します。また、一部のディストリビューションは、デフォルトで GENERIC カーネルをインストールしますが、ユーザーが選択してインストールできるアーキテクチャ固有のカーネルも提供しています。このようなカーネルには、そのプロセッサでのみ利用できる命令が含まれている場合があります。異なる種類のプロセッサを使用するホストでこれらの命令を実行すると、悪影響が生じる可能性があります。

このため、AMD プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンは、Intel プロセッサを使用するホストに移行しても動作しないことがあります。逆に、Intel プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンを AMD プロセッサを使用するホストに移行しても動作しない場合があります。

これは仮想マシンに限られたものではなく、物理コンピュータでも発生する問題です。たとえば、Linux がインストールされたハード ドライブを AMD マシンから Intel マシンに移動した場合、そのドライブから起動しようとする問題が発生します。

ESX Server 仮想マシンでの PAE の無効化

ESX Server 2.5.x : ESX Server 2.5.x 仮想マシンは物理アドレス拡張 (PAE) をサポートしていますが、この機能用にパフォーマンスが最適化されているわけではありません。このため、PAE 機能が有効になっているゲスト OS では、パフォーマンスが低下する可能性があります。最高のパフォーマンスを実現するには、ゲスト OS で PAE を無効にすることをお勧めします。PAE の無効化の詳細および手順は、ナレッジベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/2020>) を参照してください。

Red Hat Linux 7.2

このセクションでは、Red Hat Linux 7.2 オペレーティングシステムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について記述しています。

32 ビット版

32 ビット版の Red Hat Linux 7.2 は、次の VMware 製品でサポートされています。

■ VMware Workstation

Red Hat Linux 7.2 : Workstation 4.0、4.0.1、4.0.2、4.0.5、4.5、4.5.1、4.5.2、4.5.3、5.0、5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

- **SMP** : Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way を試験的にサポート

■ VMware ACE

Red Hat Linux 7.2 : ACE 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

■ VMware GSX Server

Red Hat Linux 7.2 : GSX Server 3.0、3.1、3.2、3.2.1

■ VMware Server

Red Hat Linux 7.2 : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9

その他のサポート

- **SMP** : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9 で 2 way を試験的にサポート

■ VMware ESX Server

Red Hat Linux 7.2 : ESX 2.0、2.0.1、2.1、2.1.1、2.1.2、2.5、2.5.1、2.5.2、2.5.3、2.5.4、2.5.5

その他のサポート

- **SMP** : ESX 2.0、2.0.1、2.1、2.1.1、2.1.2、2.5、2.5.1、2.5.2、2.5.3、2.5.4、2.5.5 でフルサポート

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

Red Hat Linux 7.2 は、標準の Red Hat ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。ここでは、標準のディストリビューション CD を使用したインストールの手順を説明します。ただし、起動フロッピーまたはネットワークから Red Hat Linux 7.2 をインストールすることもできます。ご使用の VMware 製品で PXE サーバがサポートされている場合は、PXE サーバからインストールすることもできます。

オペレーティングシステムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

注意 Red Hat Linux 7.2 のセットアップ時に X サーバがインストールされますが、これは実行しないでください。代わりに、Red Hat Linux 7.2 のインストール完了後、ただちに VMware Tools パッケージをインストールします。これで、仮想マシン内でアクセラレータ機能付き SVGA X サーバを実行できます。

注意 VMware 仮想マシンで BusLogic 仮想 SCSI アダプタを使用した際、Linux ゲスト OS の多くでさまざまな問題が発生しています。このゲスト OS では、LSI Logic 仮想 SCSI アダプタを使用することをお勧めします。

注意 VMware VirtualCenter または vCenter Server を使用してゲスト OS をインストールする場合は、その仮想マシンを実行する VMware 製品 (ESX Server または VMware Server) で該当するゲスト OS がサポートされていることを確認してください。

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに Red Hat Linux 7.2 CD-ROM を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、Red Hat Linux 7.2 のインストールを開始します。

Red Hat Linux 7.2 のインストールには、テキスト モードのインストーラを使用します。これは、インストーラの最初の起動時に選択できます。Red Hat Linux 7.2 CD ブート プロンプトに、次のような選択肢が表示されます。

```
To install or upgrade a system ... in graphical mode ...
To install or upgrade a system ... in text mode, type: text <ENTER>.
To enable expert mode, ...
Use the function keys listed below ...
```

テキスト モードのインストーラを選択するには、**text** と入力してから <Enter> キーを押します。

- 3 残りの手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。次の手順では必ず指示どおりの選択を行なってください。
- 4 言語およびキーボードを選択します。次に、[Installation Type] 画面で、インストールの種類として [Server] または [Workstation] のいずれかを選択します。

次のような警告が表示されます。

Bad partition table. The partition table on device sda is corrupted. To create new partitions, it must be initialized, causing the loss of ALL DATA on the drive.

この警告が表示されても、物理コンピュータのハード ドライブに問題が発生しているわけではありません。仮想マシンの仮想ハード ドライブに対してパーティショニングおよびフォーマットを行う必要があると警告しているだけです。[Initialize] ボタンをクリックしてから <Enter> キーを押します。該当する仮想ディスクが SCSI ディスクの場合、警告メッセージ文にはデバイス名として **sda** が表示されます。仮想ディスクが IDE ドライブの場合、代わりにデバイス名 **hda** が表示されます。

- 5 [Automatic Partitioning] 画面で、ディスクの自動パーティショニングを許可します。
- 6 使用中のコンピュータが DHCP に対応した LAN に接続されている場合は、[Network Configuration] 画面から [Use bootp/dhcp] オプションを選択することができます。また、ネットワーク パラメータを手動で設定することもできます。
- 7 [Mouse Selection] 画面で、[Generic - 3 Button Mouse (PS/2)] を選択してから [Emulate 3 Buttons] オプションを選択すれば、仮想マシンが 3 ボタン マウスをサポートするようになります。
- 8 [Video Card Selection] 画面で、デフォルト値を使用します。
- 9 X サーバの構成は、デフォルト値を使用してできるだけ素早く処理を終わらせても問題ありません。ここでインストールされる X サーバは、仮想マシンに VMware Tools をインストールした時点で、ゲスト OS に適した X サーバに置き換えられます。
- 10 [Starting X] 画面に進んだら、[Skip] ボタンをクリックして構成のテストを省略します。

これでゲスト OS としての Red Hat Linux 7.2 の基本インストールが完了です。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

VMware Tools のインストールを完了するまでは、X を起動しないでください。

IPv6

多くの Linux ディストリビューションでは、VMware Tools のインストール後に IPv6 が有効になっていると、VMware Tools を **vmware-config-tools.pl** で構成することができません。この場合、VMware Tools は該当する仮想マシン向けにネットワーク デバイスを正しく設定することができず、次のようなメッセージが表示されます。

```
Unloading pcnet32 module
unregister_netdevice: waiting for eth0 to become free
```

このメッセージは、仮想マシンを再起動するまで連続して繰り返し表示されます。Linux を実行する仮想マシンでこの問題を防ぐには、VMware Tools をインストールする前に IPv6 を無効にしておきます。

注意 VMware ESX 4.0 以降のリリースでは IPv6 がサポートされています。VMware Tools のインストール前に IPv6 を無効にする必要はありません。

Linux を実行する仮想マシンで IPv6 を無効にするには

- 1 `/etc/sysconfig/network` ファイルに **NETWORKING_IPV6=yes** という行が含まれている場合は、この行を次のように変更します。

```
NETWORKING_IPV6=no
```

- 2 `/etc/modules.conf` ファイルに、次の行を追加します。

```
alias ipv6 off
alias net-pf-10 off
```

IPv6 を無効にすると、VMware Tools を正常にインストールし、構成できます。

既知の問題

インストール中のハング アップ

インストール中に、**running /sbin/loader** の箇所で突然ハング アップすることがあります。これは、初期バージョンの 2.4 Linux カーネルのバグが原因です。カーネル 2.4.5 でこのバグは修正されたため、このカーネルをベースとしたディストリビューションは、問題なくインストールできます。

初期の 2.4 シリーズ カーネルに対して回避策があります。Linux カーネルのバグは CD-ROM ドライブが関連しているわけではありませんが、VMware 構成の仮想 DVD/CD-ROM ドライブの設定を変更することにより問題を回避できます。

仮想マシンをパワーオフして、仮想マシンのウィンドウを閉じます。仮想マシンの構成ファイル（**.vmx** または **.cfg**）をテキスト エディタで開き、次の行を追加します。

```
cdrom.minvirtualtime=100
```

ファイルを保存します。これで、前述の手順でゲスト OS をインストールできます。前述の設定は、パフォーマンスを低下させることがあるため、ゲスト OS のインストール後に構成ファイルから削除してください。

適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更

このゲスト OS のデフォルトのタイムキーピング構成では、問題が発生する可能性があります。Linux でのタイムキーピングのベスト プラクティスについては、ナレッジベースの記事（<http://kb.vmware.com/kb/1006427>）を参照してください。

ゲストのスクリーン セーバー

VMware Workstation または VMware GSX Server : XFree86 3.x X サーバを稼動する Linux ホストでは、ゲスト OS でのスクリーン セーバーの使用は避けてください。ゲストでスクリーン セーバーを使用すると、大量の処理能力が必要なため、ホストの X サーバがフリーズする可能性があります。

異なるプロセッサへの移行

Linux 仮想マシンを AMD プロセッサ上で稼働するホストと Intel プロセッサ上で稼働するホストとの間で移行することはお勧めしません。

Linux ディストリビューションの多くは、インストール時に、インストール先の特定のプロセッサに適したカーネルを選択します。また、一部のディストリビューションは、デフォルトで GENERIC カーネルをインストールしますが、ユーザーが選択してインストールできるアーキテクチャ固有のカーネルも提供しています。このようなカーネルには、そのプロセッサでのみ利用できる命令が含まれている場合があります。異なる種類のプロセッサを使用するホストでこれらの命令を実行すると、悪影響が生じる可能性があります。

このため、AMD プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンは、Intel プロセッサを使用するホストに移行しても動作しないことがあります。逆に、Intel プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンを AMD プロセッサを使用するホストに移行しても動作しない場合があります。

これは仮想マシンに限られたものではなく、物理コンピュータでも発生する問題です。たとえば、Linux がインストールされたハード ドライブを AMD マシンから Intel マシンに移動した場合、そのドライブから起動しようとすると問題が発生します。

ESX Server 仮想マシンでの PAE の無効化

ESX Server 2.5.x : ESX Server 2.5.x 仮想マシンは物理アドレス拡張 (PAE) をサポートしていますが、この機能用にパフォーマンスが最適化されているわけではありません。このため、PAE 機能が有効になっているゲスト OS では、パフォーマンスが低下する可能性があります。最高のパフォーマンスを実現するには、ゲスト OS で PAE を無効にすることをお勧めします。PAE の無効化の詳細および手順は、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/2020>) を参照してください。

Red Hat Linux 7.1

このセクションでは、Red Hat Linux 7.1 オペレーティングシステムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について記述しています。

32 ビット版

32 ビット版の Red Hat Linux 7.1 は、次の VMware 製品でサポートされています。

■ VMware Workstation

Red Hat Linux 7.1 : Workstation 4.0、4.0.1、4.0.2、4.0.5、4.5、4.5.1、4.5.2、4.5.3、5.0、5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

- **SMP** : Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way を試験的にサポート

■ VMware ACE

Red Hat Linux 7.1 : ACE 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

■ VMware GSX Server

Red Hat Linux 7.1 : GSX Server 3.0、3.1、3.2、3.2.1

■ VMware Server

Red Hat Linux 7.1 : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9

その他のサポート

- **SMP** : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9 で 2 way を試験的にサポート

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

Red Hat Linux 7.1 は、標準の Red Hat ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。ここでは、標準のディストリビューション CD を使用したインストールの手順を説明します。ただし、起動フロッピーまたはネットワークから Red Hat Linux 7.1 をインストールすることもできます。ご使用の VMware 製品で PXE サーバがサポートされている場合は、PXE サーバからインストールすることもできます。

オペレーティングシステムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

注意 Red Hat Linux 7.1 のセットアップ時に X サーバがインストールされますが、これは実行しないでください。代わりに、Red Hat Linux 7.1 のインストール完了後、ただちに VMware Tools パッケージをインストールします。これで、仮想マシン内でアクセラレータ機能付き SVGA X サーバを実行できます。

注意 VMware 仮想マシンで BusLogic 仮想 SCSI アダプタを使用した際、Linux ゲスト OS の多くでさまざまな問題が発生しています。このゲスト OS では、LSI Logic 仮想 SCSI アダプタを使用することをお勧めします。

注意 VMware VirtualCenter または vCenter Server を使用してゲスト OS をインストールする場合は、その仮想マシンを実行する VMware 製品 (ESX Server または VMware Server) で該当するゲスト OS がサポートされていることを確認してください。

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに Red Hat Linux 7.1 CD-ROM を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、Red Hat Linux 7.1 のインストールを開始します。

Red Hat Linux 7.1 のインストールには、テキスト モードのインストーラを使用します。これは、インストーラの最初の起動時に選択できます。Red Hat Linux 7.1 CD ブート プロンプトに、次のような選択肢が表示されます。

```
To install or upgrade a system ... in graphical mode ...
To install or upgrade a system ... in text mode, type: text <ENTER>.
To enable expert mode, ...
Use the function keys listed below ...
```

テキスト モードのインストーラを選択するには、**text** と入力してから <Enter> キーを押します。

- 3 残りの手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。次の手順では必ず指示どおりの選択を行なってください。
- 4 言語およびキーボードを選択します。次に、[Installation Type] 画面で、インストールの種類として [Server] または [Workstation] のいずれかを選択します。

次のような警告が表示されます。

Bad partition table. The partition table on device sda is corrupted. To create new partitions, it must be initialized, causing the loss of ALL DATA on the drive.

この警告が表示されても、物理コンピュータのハード ドライブに問題が発生しているわけではありません。仮想マシンの仮想ハード ドライブに対してパーティショニングおよびフォーマットを行う必要があると警告しているだけです。[Initialize] ボタンをクリックしてから <Enter> キーを押します。該当する仮想ディスクが SCSI ディスクの場合、警告メッセージ文にはデバイス名として **sda** が表示されます。仮想ディスクが IDE ドライブの場合、代わりにデバイス名 **hda** が表示されます。

- 5 [Automatic Partitioning] 画面で、ディスクの自動パーティショニングを許可します。
- 6 使用中のコンピュータが DHCP に対応した LAN に接続されている場合は、[Network Configuration] 画面から [Use bootp/dhcp] オプションを選択することができます。また、ネットワーク パラメータを手動で設定することもできます。
- 7 [Mouse Selection] 画面で、[Generic - 3 Button Mouse (PS/2)] を選択してから [Emulate 3 Buttons] オプションを選択すれば、仮想マシンが 3 ボタン マウスをサポートするようになります。
- 8 [Video Card Selection] 画面で、デフォルト値を使用します。
- 9 X サーバの構成は、デフォルト値を使用してできるだけ素早く処理を終わらせても問題ありません。ここでインストールされる X サーバは、仮想マシンに VMware Tools をインストールした時点で、ゲスト OS に適した X サーバに置き換えられます。
- 10 [Starting X] 画面に進んだら、[Skip] ボタンをクリックして構成のテストを省略します。

これでゲスト OS としての Red Hat Linux 7.1 の基本インストールが完了です。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

VMware Tools のインストールを完了するまでは、X を起動しないでください。

多くの Linux ディストリビューションでは、VMware Tools のインストール後に IPv6 が有効になっていると、VMware Tools を `vmware-config-tools.pl` で構成することができません。この場合、VMware Tools は該当する仮想マシン向けにネットワーク デバイスを正しく設定することができず、次のようなメッセージが表示されます。

```
Unloading pcnet32 module
unregister_netdevice: waiting for eth0 to become free
```

このメッセージは、仮想マシンを再起動するまで連続して繰り返し表示されます。Linux を実行する仮想マシンでこの問題を防ぐには、VMware Tools をインストールする前に IPv6 を無効にしておきます。

Linux を実行する仮想マシンで IPv6 を無効にするには

- 1 `/etc/sysconfig/network` ファイルに `NETWORKING_IPV6=yes` という行が含まれている場合は、この行を次のように変更します。

```
NETWORKING_IPV6=no
```

- 2 `/etc/modules.conf` ファイルに、次の行を追加します。

```
alias ipv6 off
alias net-pf-10 off
```

IPv6 を無効にすると、VMware Tools を正常にインストールし、構成できます。

既知の問題

インストール中のハング アップ

インストール中に、`running /sbin/loader` の箇所で突然ハング アップすることがあります。これは、初期バージョンの 2.4 Linux カーネルのバグが原因です。カーネル 2.4.5 でこのバグは修正されたため、このカーネルをベースとしたディストリビューションは、問題なくインストールできます。

初期の 2.4 シリーズ カーネルに対して回避策があります。Linux カーネルのバグは CD-ROM ドライブが関連しているわけではありませんが、VMware 構成の仮想 DVD/CD-ROM ドライブの設定を変更することにより問題を回避できます。

仮想マシンをパワーオフして、仮想マシンのウィンドウを閉じます。該当する仮想マシンの構成ファイル（Windows ホストでは **.vmx** ファイル、Linux ホストでは **.cfg** ファイル）をテキスト エディタで開き、次の行を追加します。

```
cdrom.minvirtualtime=100
```

ファイルを保存します。これで、前述の手順でゲスト OS をインストールできます。前述の設定は、パフォーマンスを低下させることがあるため、ゲスト OS のインストール後に構成ファイルから削除してください。

適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更

このゲスト OS のデフォルトのタイムキーピング構成では、問題が発生する可能性があります。Linux でのタイムキーピングのベスト プラクティスについては、ナレッジベースの記事（<http://kb.vmware.com/kb/1006427>）を参照してください。

ゲストのスクリーンセーバー

XFree86 3.x X サーバを稼動する Linux ホストでは、ゲスト OS でのスクリーンセーバーの使用は避けてください。ゲストでスクリーンセーバーを使用すると、大量の処理能力が必要なため、ホストの X サーバがフリーズする可能性があります。

異なるプロセッサへの移行

Linux 仮想マシンを AMD プロセッサ上で稼働するホストと Intel プロセッサ上で稼働するホストとの間で移行することはお勧めしません。

Linux ディストリビューションの多くは、インストール時に、インストール先の特定のプロセッサに適したカーネルを選択します。また、一部のディストリビューションは、デフォルトで GENERIC カーネルをインストールしますが、ユーザーが選択してインストールできるアーキテクチャ固有のカーネルも提供しています。このようなカーネルには、そのプロセッサでのみ利用できる命令が含まれている場合があります。異なる種類のプロセッサを使用するホストでこれらの命令を実行すると、悪影響が生じる可能性があります。

このため、AMD プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンは、Intel プロセッサを使用するホストに移行しても動作しないことがあります。逆に、Intel プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンを AMD プロセッサを使用するホストに移行しても動作しない場合があります。

これは仮想マシンに限られたものではなく、物理コンピュータでも発生する問題です。たとえば、Linux がインストールされたハード ドライブを AMD マシンから Intel マシンに移動した場合、そのドライブから起動しようとする問題が発生します。

Red Hat Linux 7.0

このセクションでは、Red Hat Linux 7.0 オペレーティングシステムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について記述しています。

32 ビット版

32 ビット版の Red Hat Linux 7.0 は、次の VMware 製品でサポートされています。

■ VMware Workstation

Red Hat Linux 7.0 : Workstation 4.0、4.0.1、4.0.2、4.0.5、4.5、4.5.1、4.5.2、4.5.3、5.0、5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

- **SMP** : Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way を試験的にサポート

■ VMware ACE

Red Hat Linux 7.0 : ACE 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

■ VMware GSX Server

Red Hat Linux 7.0 : GSX Server 3.0、3.1、3.2、3.2.1

■ VMware Server

Red Hat Linux 7.0 : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9

その他のサポート

- **SMP** : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9 で 2 way を試験的にサポート

■ VMware Fusion

Red Hat Linux 7.0 : Fusion 1.0、1.1、1.1.1、1.1.2、1.1.3、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

Red Hat Linux 7.0 は、標準の Red Hat ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。ここでは、標準のディストリビューション CD を使用したインストールの手順を説明します。ただし、起動フロッピーまたはネットワークから Red Hat Linux 7.0 をインストールすることもできます。ご使用の VMware 製品で PXE サーバがサポートされている場合は、PXE サーバからインストールすることもできます。

オペレーティング システムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

-
- | | |
|-----------|--|
| 注意 | テキスト モードで Red Hat Linux 7.0 をインストールすると、標準の XFree86 v. 4 サーバ (VMware SVGA または標準 VGA を未サポート) がインストールされます。この X サーバは実行しないでください。代わりに、Red Hat Linux 7.0 のインストール完了後、ただちに VMware Tools パッケージをインストールします。これで、仮想マシン内でアクセラレータ機能付き SVGA X サーバを実行できます。 |
|-----------|--|
-
- | | |
|-----------|--|
| 注意 | VMware 仮想マシンで BusLogic 仮想 SCSI アダプタを使用した際、Linux ゲスト OS の多くでさまざまな問題が発生しています。このゲスト OS では、LSI Logic 仮想 SCSI アダプタを使用することをお勧めします。 |
|-----------|--|
-
- | | |
|-----------|---|
| 注意 | VMware VirtualCenter または vCenter Server を使用してゲスト OS をインストールする場合は、その仮想マシンを実行する VMware 製品 (ESX Server または VMware Server) で該当するゲスト OS がサポートされていることを確認してください。 |
|-----------|---|
-

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに Red Hat Linux 7.0 CD を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、Red Hat Linux 7.0 のインストールを開始します。
インストールは、テキスト モードのインストーラを使用することをお勧めします。Red Hat 7.0 CD ブート プロンプトに、次のような選択肢が表示されます。
To install or upgrade a system ... in graphical mode ...
To install or upgrade a system ... in text mode, type: text <ENTER>.
To enable expert mode, ...
Use the function keys listed below ...
テキスト モードのインストーラを選択するには、**text** と入力してから <Enter> キーを押します。
- 3 残りの手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。次の手順では必ず指示どおりの選択を行なってください。
- 4 [Video Card Selection] 画面で、[Generic VGA compatible] を選択し、[OK] をクリックします。
- 5 インストールの最後の方で、ファイルのコピーが完了したあとに [Monitor Setup] 画面が表示されます。[Generic Standard VGA, 640x480 @ 60 Hz] を選択し、[OK] をクリックします。
- 6 [Video Memory] 画面で、[256Kb] を選択し、[OK] をクリックします。
- 7 [Clockchip Configuration] 画面で、デフォルトの [No Clockchip Setting (recommended)] (このオプションを推奨) を選択し、[OK] をクリックします。
- 8 [Probe for Clocks] 画面で、[Skip] をクリックします。
- 9 [Select Video Modes] 画面で、何も選択せず、[OK] をクリックします。
- 10 [Starting X] 画面で、[Skip] をクリックします。

注意 これは最も重要なプロセスです。[OK] をクリックすると、XFree86 バージョン 4 サーバを実行しますが、最終的には実行に失敗し、インストーラが中断します。

これでゲスト OS としての Red Hat Linux 7.0 の基本インストールが完了です。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

注意 Red Hat Linux 7.0 ゲストでは、Linux コンソールから VMware Tools をインストールしてください。VMware Tools のインストールを完了するまでは、X を起動しないでください。

多くの Linux ディストリビューションでは、VMware Tools のインストール後に IPv6 が有効になっていると、VMware Tools を `vmware-config-tools.pl` で構成することができません。この場合、VMware Tools は該当する仮想マシン向けにネットワーク デバイスを正しく設定することができず、次のようなメッセージが表示されます。

```
Unloading pcnet32 module
unregister_netdevice: waiting for eth0 to become free
```

このメッセージは、仮想マシンを再起動するまで連続して繰り返し表示されます。Linux を実行する仮想マシンでこの問題を防ぐには、VMware Tools をインストールする前に IPv6 を無効にしておきます。

Linux を実行する仮想マシンで IPv6 を無効にするには

- 1 `/etc/sysconfig/network` ファイルに `NETWORKING_IPV6=yes` という行が含まれている場合は、この行を次のように変更します。

```
NETWORKING_IPV6=no
```

- 2 `/etc/modules.conf` ファイルに、次の行を追加します。

```
alias ipv6 off
alias net-pf-10 off
```

IPv6 を無効にすると、VMware Tools を正常にインストールし、構成できます。

既知の問題

適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更

このゲスト OS のデフォルトのタイムキーピング構成では、問題が発生する可能性があります。Linux でのタイムキーピングのベスト プラクティスについては、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/1006427>) を参照してください。

ゲストのスクリーン サーバー

XFree86 3.x X サーバを稼働する Linux ホストでは、ゲスト OS でのスクリーン サーバーの使用は避けてください。ゲストでスクリーン サーバーを使用すると、大量の処理能力が必要なため、ホストの X サーバがフリーズする可能性があります。

異なるプロセッサへの移行

Linux 仮想マシンを AMD プロセッサ上で稼働するホストと Intel プロセッサ上で稼働するホストとの間で移行することはお勧めしません。

Linux ディストリビューションの多くは、インストール時に、インストール先の特定のプロセッサに適したカーネルを選択します。また、一部のディストリビューションは、デフォルトで GENERIC カーネルをインストールしますが、ユーザーが選択してインストールできるアーキテクチャ固有のカーネルも提供しています。このようなカーネルには、そのプロセッサでのみ利用できる命令が含まれている場合があります。異なる種類のプロセッサを使用するホストでこれらの命令を実行すると、悪影響が生じる可能性があります。

このため、AMD プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンは、Intel プロセッサを使用するホストに移行しても動作しないことがあります。逆に、Intel プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンを AMD プロセッサを使用するホストに移行しても動作しない場合があります。

これは仮想マシンに限られたものではなく、物理コンピュータでも発生する問題です。たとえば、Linux がインストールされたハード ドライブを AMD マシンから Intel マシンに移動した場合、そのドライブから起動しようとする問題が発生します。

Red Hat Linux 6.2

このセクションでは、Red Hat Linux 6.2 オペレーティングシステムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について記述しています。

32 ビット版

32 ビット版の Red Hat Linux 6.2 は、次の VMware 製品でサポートされています。

■ VMware GSX Server

Red Hat Linux 6.2 : GSX Server 3.0、3.1、3.2、3.2.1

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

Red Hat Linux 6.2 は、標準の Red Hat ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。ここでは、標準のディストリビューション CD を使用したインストールの手順を説明します。ただし、起動フロッピーまたはネットワークから Red Hat Linux 6.2 をインストールすることもできます。

オペレーティングシステムをインストールする前に、新規仮想マシン ウィザード (Windows ホストの場合) または構成ウィザード (Linux ホストの場合) を使用して、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。



要注意

Red Hat Linux 6.2 は Intel コア プロセッサ上で稼動します。ただし、限定詞の付いていない Xeon ブランドまたは Xeon-MP ブランドの Xeon プロセッサ上では稼動しません (Pentium III Xeon プロセッサでは稼動します)。

注意

グラフィック モードのインストーラを使用して、Red Hat 6.2 をインストールした場合の VGA パフォーマンスを考慮すると、テキスト モードのインストーラを使用してインストールすることを強く推奨します。Red Hat 6.0.1 または 6.2 CD ブート プロンプトに、次のような選択肢が表示されます。

```
To install or upgrade a system ... in graphical mode ...
To install or upgrade a system ... in text mode, type: text <ENTER>.
To enable expert mode, ...
Use the function keys listed below ...
```

テキスト モードのインストーラを選択するには、**text** と入力してから <Enter> キーを押します。

注意 Red Hat Linux 6.x をインストールすると、標準の VGA16 X サーバ（VMware X サーバを未サポート）がインストールされます。仮想マシン内でアクセラレータ機能付き SVGA X サーバを実行するには、Red Hat Linux 6.x のインストール完了後、ただちに VMware Tools パッケージをインストールします。

注意 VMware 仮想マシンで BusLogic 仮想 SCSI アダプタを使用した際、Linux ゲスト OS の多くでさまざまな問題が発生しています。このゲスト OS では、LSI Logic 仮想 SCSI アダプタを使用することをお勧めします。

注意 VMware VirtualCenter または vCenter Server を使用してゲスト OS をインストールする場合は、その仮想マシンを実行する VMware 製品（ESX Server または GSX Server）で該当するゲスト OS がサポートされていることを確認してください。

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに Red Hat Linux 6.2 インストール CD を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、Red Hat Linux 6.2 のインストールを開始します。

インストールは、テキスト モードのインストーラを使用することをお勧めします。Red Hat 6.2 CD ブート プロンプトに、次のような選択肢が表示されます。

```
To install or upgrade a system ... in graphical mode ...
To install or upgrade a system ... in text mode, type: text <ENTER>.
To enable expert mode, ...
Use the function keys listed below ...
```

テキスト モードのインストーラを選択するには、**text** と入力してから <Enter> キーを押します。

- 3 残りの手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。

注意 仮想マシンのイーサネット アダプタが有効になっている場合、インストール プログラムが AMD PC/Net 32 ドライバを自動的に検出してロードします（ドライバのロードに、コマンドラインのパラメータの指定は不必要）。

注意 Red Hat Linux 6.2 でテキスト モードのインストーラを使用すると、[Hostname Configuration] 画面が表示されます。ホストオンリー ネットワークを使用する仮想マシンに、DHCP を使用してこのゲストをインストールする場合、ホスト名は指定しないでください。単に [OK] をクリックして処理を続行します。ここでホスト名を指定すると、あとでインストーラ中にエラーが発生します。次の画面（[Network Configuration] 画面）で、[OK] を選択してデフォルトの [Use bootp/dhcp] を使用します。

- 4 Linux のインストール時に、標準の VGA16 X サーバを選択します。
- 5 [Choose a Card] 画面で、リストから [Generic VGA compatible/Generic VGA] カードを選択します。
- 6 [Monitor Setup] 画面で、リストから [Generic Monitor] を選択します。
- 7 [Screen Configuration] ダイアログ ボックスで、[Probe] ボタンを選択します。
- 8 [Starting X] ダイアログ ボックスで、[OK] を選択します。Linux のインストール完了後に VMware Tools をインストールすると、一般的な X サーバの代わりに VMware Tools が提供するアクセラレータ機能付き X サーバがインストールされます。
- 9 Red Hat Linux 6.2 の残りのインストール手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。

この時点で、Red Hat 6.2 が起動し、ログイン画面が表示されます。

これでゲスト OS としての Red Hat Linux 7.0 の基本インストールが完了です。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

多くの Linux ディストリビューションでは、VMware Tools のインストール後に IPv6 が有効になっていると、VMware Tools を **vmware-config-tools.pl** で構成することができません。この場合、VMware Tools は該当する仮想マシン向けにネットワーク デバイスを正しく設定することができず、次のようなメッセージが表示されます。

```
Unloading pcnet32 module
unregister_netdevice: waiting for eth0 to become free
```

このメッセージは、仮想マシンを再起動するまで連続して繰り返し表示されます。Linux を実行する仮想マシンでこの問題を防ぐには、VMware Tools をインストールする前に IPv6 を無効にしておきます。

Linux を実行する仮想マシンで IPv6 を無効にするには

- 1 `/etc/sysconfig/network` ファイルに **NETWORKING_IPV6=yes** という行が含まれている場合は、この行を次のように変更します。
NETWORKING_IPV6=no
- 2 `/etc/modules.conf` ファイルに、次の行を追加します。
alias ipv6 off
alias net-pf-10 off

IPv6 を無効にすると、VMware Tools を正常にインストールし、構成できます。

既知の問題

適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更

このゲスト OS のデフォルトのタイムキーピング構成では、問題が発生する可能性があります。Linux でのタイムキーピングのベスト プラクティスについては、ナレッジベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/1006427>) を参照してください。

ゲストのスクリーンセーバー

XFree86 3.x X サーバを稼働する Linux ホストでは、ゲスト OS でのスクリーンセーバーの使用は避けてください。ゲストでスクリーンセーバーを使用すると、大量の処理能力が必要なため、ホストの X サーバがフリーズする可能性があります。

異なるプロセッサへの移行

Linux 仮想マシンを AMD プロセッサ上で稼働するホストと Intel プロセッサ上で稼働するホストとの間で移行することはお勧めしません。

Linux ディストリビューションの多くは、インストール時に、インストール先の特定のプロセッサに適したカーネルを選択します。また、一部のディストリビューションは、デフォルトで GENERIC カーネルをインストールしますが、ユーザーが選択してインストールできるアーキテクチャ固有のカーネルも提供しています。このようなカーネルには、そのプロセッサでのみ利用できる命令が含まれている場合があります。異なる種類のプロセッサを使用するホストでこれらの命令を実行すると、悪影響が生じる可能性があります。

このため、AMD プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンは、Intel プロセッサを使用するホストに移行しても動作しないことがあります。逆に、Intel プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンを AMD プロセッサを使用するホストに移行しても動作しない場合があります。

これは仮想マシンに限られたものではなく、物理コンピュータでも発生する問題です。たとえば、Linux がインストールされたハードドライブを AMD マシンから Intel マシンに移動した場合、そのドライブから起動しようとする問題が発生します。

Sun Java Desktop System 2

このセクションでは、Sun Java Desktop System 2 オペレーティングシステムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について説明します。

32 ビット版

32 ビット版の Sun Java Desktop System 2 は、次の VMware 製品でサポートされています。

■ VMware Workstation

Sun Java Desktop System 2 : Workstation 5.0、5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

- SMP : Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way を試験的にサポート

■ VMware ACE

Sun Java Desktop System 2 : ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

■ VMware Server

Sun Java Desktop System 2 : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9

その他のサポート

- SMP : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9 で 2 way を試験的にサポート

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

Sun Java Desktop System 2 は、標準の Sun Java Desktop System ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。ここでは、標準のディストリビューション CD を使用したインストールの手順を説明します。ただし、起動フロッピーまたはネットワークから Sun Java Desktop System 2 をインストールすることもできます。ご使用の VMware 製品で PXE サーバがサポートされている場合は、PXE サーバからインストールすることもできます。

オペレーティングシステムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに Sun Java Desktop System 2 インストール CD を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、Sun Java Desktop System 2 のインストールを開始します。
- 3 残りの手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。

これでゲスト OS としての Sun Java Desktop System 2 の基本インストールが完了です。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

既知の問題

ゲスト OS の解像度の変更

ゲスト OS のディスプレイの解像度を変更するには、root (`-su`) の権限で VMware Tools 構成プログラム `vmware-config-tools.pl` を再実行し、このプログラムが表示するリストから希望する解像度を選択します。X 構成ファイルを直接編集して変更を行うこともできます。

ゲスト OS のインストール時に発生する可能性のある仮想マシンのハングアップ

一部のホストシステムでは、Sun Java Desktop System 2 インストーラが、仮想ハードウェアの ACPI 機能と互換性のないカーネルを使用しようとしています。この問題を回避するには、仮想マシンの構成ファイルをテキスト エディタで開き、次の行を追加します。

```
acpi.present = FALSE
```

これで、ゲスト OS として Sun Java Desktop System 2 をインストールして実行できます。

ゲストのスクリーンセーバー

XFree86 3.x X サーバを稼動する Linux ホストでは、ゲスト OS でのスクリーンセーバーの使用は避けてください。ゲストでスクリーンセーバーを使用すると、大量の処理能力が必要なため、ホストの X サーバがフリーズする可能性があります。

SCO OpenServer 5.0

このセクションでは、SCO OpenServer 5.0 オペレーティング システムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について説明します。

32 ビット版

32 ビット版の SCO OpenServer 5.0 は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware ESX Server**

SCO OpenServer 5.0.6 : ESX 4.0

SCO OpenServer 5.0.7-MP5 : ESX 4.0

その他のサポート

- **SMP : ESX 4.0 でフル サポート**

サポートでの考慮事項

- SCO OpenServer 5.0 をサポートしている VMware Tools のバージョンはありません。

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

標準のディストリビューション CD、起動フロッピー、ネットワーク方式を使用して、SCO OpenServer 5.0 を仮想マシンにインストールできます。ご使用の VMware 製品で PXE サーバがサポートされている場合は、PXE サーバからインストールすることもできます。

オペレーティング システムをインストールする前に、仮想マシンを新規作成し、構成します。

仮想ディスクの推奨

- **最小値** : OpenServer 5.0 のルート ディスクに 1.5GiB
- **IDE 仮想ディスク** : パフォーマンスと信頼性を向上させるための SCO BTLD (wd 起動時読み込み可能ドライバ)
ドライブ サイズの特殊な考慮事項
 - **biosgeom 起動文字列** : 1 ~ 64GiB の SCSI ドライブで必要 (ほかのドライブ サイズにも悪影響を及ぼさない)。

- **OpenServer 5.0.7** : 128GiB (137GB) 以上の IDE ディスクには wd BTLD が必要。
- **OpenServer 5.0.6** : 128 GiB 以上の IDE ディスクでは使用できない。

サポート対象の仮想ディスク

- **BusLogic SCSI** : SCO blc BTLD 3.05.1 以降が必要。
- **LSI SCSI** : SCO lsil BTLD 1.03.28 以降が必要。
- **LSI SAS** : LSI Logic lsil BTLD 1.04.09 以降が必要。
- **IDE** : 128GiB 以上の SCO wd BTLD 5.07 が必要。

ダウンロード可能ドライバ

ベースの SCO OpenServer 5.0 ディストリビューションには、適切な NIC ドライバおよび HBA ドライバが含まれていないため、インターネット経由でダウンロードする必要があります。

注意	ESX が認識できるようにするため、フロッピー イメージの名前を変更して .flp 拡張子をつける必要があります。
-----------	--

- SCO Intel PRO/1000 ネットワーク アダプタ ドライバ (eeG ドライバを検索)。
<ftp://ftp.sco.com/pub/openserver5/drivers/>
- SCO IDE BTLD (次の SCO FTP Web サイトに存在)
ftp://ftp.sco.com/pub/openserver5/507/drivers/wd_3.0/
- SCO BusLogic BTLD 3.05.1 (次の SCO FTP Web サイトに存在)
ftp://ftp.sco.com/pub/openserver5/507/drivers/blc_3.05.1/
- SCO LSI Logic BTLD 1.03.28 (次の SCO FTP Web サイトに存在)
ftp://ftp.sco.com/pub/openserver5/507/drivers/lstil_1.03.28/
- LSI Logic LSISAS BTLD 1.04.09 (次の LSI Logic Web サイトに存在)
http://www.lsi.com/DistributionSystem/AssetDocument/files/support/ssp/fusionmpt/SCO/SCO_op5_mpt_lsil_10409.zip
http://www.lsi.com/DistributionSystem/AssetDocument/files/support/ssp/fusionmpt/sas/linux/scounix_10409.txt

注意 LSI Web サイト上のフロッピー イメージの場所は固定ではありません。ここで示したアドレスでフロッピー イメージが見つからなかった場合は、LSI 社の担当者にご連絡ください。

インストールの手順

SCO OpenServer 5.0.6 と 5.0.7-MP5 とでは、インストールの手順に若干の違いがあります。次の手順でその違いについて記載しています。

- 1 CD-ROM ドライブに、SCO-OSR506-InstallCD (5.0.6 用) または SCO-OSR507-InstallCD (5.0.7 用) を挿入します。あるいは、フロッピー ドライブに、SCO-OSR506-BootDisk (5.0.6 用) または SCO-OSR507-BootDisk (5.0.7 用) を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、SCO OpenServer 5.0.6 または 5.0.7 のインストールを開始します。
- 3 次の起動文字列のうち、いずれか 1 つを入力して適切な SCSI ドライバをインストールします。
 - 128GB 未満の IDE ディスク
必要な起動文字列はありません。<Enter> キーを押します。
 - 128GB 未満、または 128GB より大きな IDE ディスク (5.0.7 のみ)
restart link="wd"
ドライバを置き換えるように求められた場合、「r」を入力します。
 - Buslogic
restart link="blc" biosgeom
ドライバを置き換えるように求められた場合、「r」を入力します。
 - LSI Logic SCSI または SAS
restart link="lsil" biosgeom
- 4 プロンプトが表示されたら、適切なインストール ディスクを挿入します。
- 5 使用許諾契約書に目を通し、同意します。
- 6 CD-ROM の種類 (IDE) と、コントローラおよびドライブ構成はデフォルトを使用します。

Open Server 5.0 のインストールで、ドライブの種類とその構成のデフォルトが確認されます。
- 7 プロンプトに従ってインストールを続行します。

- 8 不良ブロックのスキャンをオフにします。IDE ディスクの場合、デフォルトでオンになっています。
不良ブロックのスキャンは、仮想ディスクでは必要ありません。
- 9 マウスの選択では、<h> キーを押して High Resolution Keyboard Mouse を指定します。
- 10 残りのインストール手順に従って、インストールを完了します。

Maintenance Pack 5 のインストール

Open Server 5.0.7 をインストールしたあと、Maintenance Pack 5（MP5）をインストールします。

- 1 OpenServer 5.0.7 ゲストをパワーオンします。
- 2 インストール中に **biosgeom** を使用した場合は、**defbootstr biosgeom** コマンドを使用してゲストを起動します。
- 3 CD-ROM ドライブに SCO-OSR507-SuppCD5 CD を挿入します。
- 4 Software Manager を使用して MP5 をインストールします。

これで、ゲスト OS としての OpenServer 5.0 の基本インストールが完了です。

VMware Tools

SCO OpenServer をサポートしている VMware Tools のバージョンはありません。

既知の問題

X ウィンドウ システムの機能停止

仮想マシンの Open Server 5.0.7 で X ウィンドウを使用するには、MP5 をインストールする必要があります。Open Server 5.0.6 でこの問題を解決するためには、5.0.7 MP5 にアップグレードしてください。

Open Server 5.0.6 および 5.0.7 MP5 でのマウスの機能停止

SCO OpenServer 5.0.7 でマウスを操作するには、マウスを手動でアクティベートする必要があります。**/etc/conf/pack.d/cn/space.h** ファイルで、**i8042_trust_ints** の値を **1** に変更します。次回カーネルを再接続および再起動すると、マウスがアクティベートされます。Open Server 5.0.6 の場合、5.0.7 MP5 にアップデートすると問題が解決します。

ネットワーク アダプタおよびプロトコルの構成

SCO Open Server 5.0 には適切な SCSI ドライバが含まれていません。Intel Pro/1000 ネットワーク アダプタ ドライバをインストールして使用する必要があります。

ネットワーク アダプタおよびプロトコルを構成するには

- 1 SCO FTP Web サイトから Intel PRO/1000 ネットワーク アダプタ ドライバをダウンロードします。
- 2 SCO の手順に従ってドライバをインストールします。
- 3 [Network Manager] をクリックします。
- 4 [Hardware] - [New LAN Adapter] を選択します。
- 5 INTEL PRO/1000 を選択します。
- 6 AMD PCnet-PCI を選択するように求められた場合は、フレキシブル ネットワーク コントローラではなく E1000 を使用して仮想マシンを再構成します。

OpenServer pnt ドライバはサポートされていません。このドライバでフレキシブル ネットワーク コントローラを操作するとパフォーマンスが低下し、またこのドライバは十分にテストされていないためです。
- 7 ネットワークを固定アドレスまたは DHCP で構成します。
- 8 [Network Manager] を終了します。
- 9 プロンプトが表示されたら、オペレーティングシステムのカーネルへ再びリンクし、デフォルトで新しいカーネルを起動してカーネル環境を再構築します。
- 10 DHCP を使用している場合は、**/etc/dhcpc.conf** ファイルに **param_req:subnet_mask** を追加します。これを行わないと、OpenServer 5 DHCP クライアントが間違ったネットマスクを選択する場合があります。
- 11 仮想マシンを再起動してネットワークのアクティベーションを行います。

SCO UnixWare 7

このセクションでは、SCO UnixWare 7 オペレーティング システムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について説明します。

32 ビット版

32 ビット版の SCO UnixWare 7 は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware ESX Server**

SCO UnixWare 7.1.1-MP5 : ESX 4.0

SCO UnixWare 7.1.4-MP4 : ESX 4.0

その他のサポート

- **SMP : ESX 4.0 でフル サポート**

サポートでの考慮事項

- SCO UnixWare 7 は、CPU 仮想化ハードウェアがない場合には実行速度が極めて遅くなります。ネイティブ パフォーマンスに近づけるためには、ネスト ページ テーブルをホストがサポートしている必要があります。これは、AMD Barcelona およびそれ以降の RVI (Rapid Virtualization Indexing) 機能を持つ CPU、ならびに Intel Nehalem およびそれ以降の EPT (Extended Page Tables) 機能を持つ CPU で見られます。

- SCO UnixWare をサポートしている VMware Tools のバージョンはありません。

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

標準のディストリビューション CD、起動フロッピー、ネットワーク方式を使用して、SCO UnixWare 7 を仮想マシンにインストールできます。ご使用の VMware 製品で PXE サーバがサポートされている場合は、PXE サーバからインストールすることもできます。

オペレーティング システムをインストールする前に、仮想マシンを新規作成し、構成します。

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに SCO UnixWare 7.1.1 または 7.1.4 の起動 CD を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、SCO UnixWare 7 のインストールを開始します。
- 3 SCSI アダプタに LSILOGIC/ LSI SAS を選択した場合は、[Install HBA disk] を選択します。
- 4 HBA ディスクを挿入します。

これでゲスト OS としての SCO UnixWare 7 の基本インストールが完了です。

SCO UnixWare メンテナンス パックのインストール

ゲスト OS のインストール後、SCO の指示に従って UnixWare 7.1.1 Maintenance Pack 5 (MP5) または UnixWare 7.1.4 Maintenance Pack 4 (MP4) をインストールします。

注意 カーネルパニックを回避するため、UnixWare 7.1.1 でネットワーク構成を行う前に MP5 をインストールします。

Maintenance Pack は、それぞれ次の場所にあります。

- **UnixWare 7.1.1 MP5** : <ftp://ftp.sco.com/pub/unixware7/uw711pk>
- **UnixWare 7.1.4 MP4** : <ftp://ftp.sco.com/pub/unixware7/714/mp/uw714mp4/>

ゲストで 1 つ以上の仮想 CPU を使用している場合、OSMP (OS Multiprocessor Support) パッケージをインストールします。OSMP は自動的にインストールされません。追加の CPU ごとに、SCO CPU ライセンスが必要です。たとえば、仮想 CPU を 4 つ使用している場合、オペレーティングシステム ライセンス 1 つと CPU ライセンス 3 つが必要です。

SMP のインストールと構成

SCO のマニュアルに従って、OSMP と必要なライセンスをインストールします。

VMware Tools

SCO UnixWare をサポートしている VMware Tools のバージョンはありません。

既知の問題

ネットワークの構成時に発生する SCO UnixWare 7.1.1 のカーネル パニック

インストール中またはインストールの完了後にネットワーク構成を行う場合、**igmp_input()** 関数で、SCO UnixWare 7.1.1 のカーネルがパニックになります。この問題を解決するには、SCO UnixWare 7.1.1 Maintenance Pack 5 をインストールしてください。

SUSE Linux Enterprise Desktop 11

このセクションでは、SUSE Linux Enterprise Desktop 11 オペレーティング システムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について記述しています。

32 ビット版

32 ビット版の SUSE Linux Enterprise Desktop 11 は、次の VMware 製品でサポートされています。

■ VMware Workstation

SUSE Linux Enterprise Desktop 11 : Workstation 6.5.2 (事前作成済みのカーネル モジュール (PBM) を含まない。詳細は、<http://kb.vmware.com/kb/1009129> を参照)

■ VMware ESX Server

SUSE Linux Enterprise Desktop 11 : ESX 3.5 U4 (事前作成済みのカーネル モジュール (PBM) を含まない。詳細は、<http://kb.vmware.com/kb/1009129> を参照)、4.0

その他のサポート

- SMP : 3.5 U4、4.0 でフル サポート
- VMI : ESX 4.0 で SUSE Linux Enterprise Desktop 11 をサポート

64 ビット版

64 ビット版の SUSE Linux Enterprise Desktop 11 は、次の VMware 製品でサポートされています。

■ VMware Workstation

SUSE Linux Enterprise Desktop 11 : Workstation 6.5.2 (事前作成済みのカーネル モジュール (PBM) を含まない。詳細は、<http://kb.vmware.com/kb/1009129> を参照)

■ VMware ESX Server

SUSE Linux Enterprise Desktop 11 : ESX 3.5 U4 (事前作成済みのカーネル モジュール (PBM) を含まない。詳細は、<http://kb.vmware.com/kb/1009129> を参照)、4.0

その他のサポート

- SMP : ESX 3.5 U4、4.0 でフル サポート

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

SUSE Linux Enterprise Desktop 11 は、標準の SUSE ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。ここでは、標準のディストリビューション CD を使用したインストールの手順を説明します。ただし、起動フロッピーまたはネットワークから SUSE Linux Enterprise Desktop 11 をインストールすることもできます。ご使用の VMware 製品で PXE サーバがサポートされている場合は、PXE サーバからインストールすることもできます。

オペレーティング システムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

注意 このゲスト OS では、LSI Logic 仮想 SCSI アダプタを使用することをお勧めします。

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに SUSE Linux Enterprise Desktop 11 インストール CD を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、SUSE Linux Enterprise Desktop 11 のインストールを開始します。
- 3 残りの手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。

これでゲスト OS としての SUSE Linux Enterprise Desktop 11 の基本インストールが完了です。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

IPv6

多くの Linux ディストリビューションでは、VMware Tools のインストール後に IPv6 が有効になっていると、VMware Tools を **vmware-config-tools.pl** で構成することができません。この場合、VMware Tools は該当する仮想マシン向けにネットワーク デバイスを正しく設定することができず、次のようなメッセージが表示されます。

```
Unloading pcnet32 module
unregister_netdevice: waiting for eth0 to become free
```

このメッセージは、仮想マシンを再起動するまで連続して繰り返し表示されます。Linux を実行する仮想マシンでこの問題を防ぐには、VMware Tools をインストールする前に IPv6 を無効にしておきます。

注意 VMware ESX 4.0 以降のリリースでは IPv6 がサポートされています。VMware Tools のインストール前に IPv6 を無効にする必要はありません。

Linux を実行する仮想マシンで IPv6 を無効にするには

- 1 `/etc/sysconfig/network` ファイルに `NETWORKING_IPV6=yes` という行が含まれている場合は、この行を次のように変更します。

```
NETWORKING_IPV6=no
```

- 2 `/etc/modules.conf` ファイルに、次の行を追加します。

```
alias ipv6 off
alias net-pf-10 off
```

IPv6 を無効にすると、VMware Tools を正常にインストールし、構成できます。

既知の問題

4 ビット カラーの使用不可

SUSE Linux Enterprise Desktop 11 ゲスト OS の画面解像度を変更する場合、必ずカラービット深度も 16 色（4 ビット）より大きく設定します。16 色（4 ビット）の設定を使用すると、X サーバで致命的なエラーが発生する可能性があります。

コピーした仮想マシンでネットワークを利用する際に必要な手動の変更

コピーまたはクローン作成した仮想マシン、あるいは VMware ACE パッケージの一部としてエンドユーザーにデプロイされた仮想マシンでは、ネットワークが正常に動作しない場合があります。仮想マシンをコピーする際に、そのコピーに独自の識別子を割り当てると、その仮想マシンに接続されている仮想イーサネットアダプタ用の MAC アドレスが変更されます。SUSE Linux Enterprise Desktop 11 ゲスト OS は、インストール時に、主要構成ファイル名の一部として MAC アドレスを使用します。このため、仮想マシンの MAC アドレスが変更されると、ゲスト OS が仮想イーサネットアダプタにその構成ファイルを関連付けることができない可能性があります。この問題が発生した場合、ファイルをコピーするか、ファイル名を変更して回避することができます。たとえば、`eth0` の場合、次のような変更を行います。

元のファイル名

```
/etc/sysconfig/network/ifcfg-eth0-id-<MAC アドレス>
```

新しいファイル名

`/etc/sysconfig/network/ifcfg-eth0`

適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更

このゲスト OS のデフォルトのタイムキーピング構成では、問題が発生する可能性があります。Linux でのタイムキーピングのベスト プラクティスについては、ナレッジベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/1006427>) を参照してください。

異なるプロセッサへの移行

Linux 仮想マシンを AMD プロセッサ上で稼働するホストと Intel プロセッサ上で稼働するホストとの間で移行することはお勧めしません。

Linux ディストリビューションの多くは、インストール時に、インストール先の特定のプロセッサに適したカーネルを選択します。また、一部のディストリビューションは、デフォルトで GENERIC カーネルをインストールしますが、ユーザーが選択してインストールできるアーキテクチャ固有のカーネルも提供しています。このようなカーネルには、そのプロセッサでのみ利用できる命令が含まれている場合があります。異なる種類のプロセッサを使用するホストでこれらの命令を実行すると、悪影響が生じる可能性があります。

このため、AMD プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンは、Intel プロセッサを使用するホストに移行しても動作しないことがあります。逆に、Intel プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンを AMD プロセッサを使用するホストに移行しても動作しない場合があります。

これは仮想マシンに限られたものではなく、物理コンピュータでも発生する問題です。たとえば、Linux がインストールされたハード ドライブを AMD マシンから Intel マシンに移動した場合、そのドライブから起動しようとする問題が発生します。

SUSE Linux Enterprise Desktop 10

このセクションでは、SUSE Linux Enterprise Desktop 10 オペレーティング システムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について記述しています。

32 ビット版

32 ビット版の SUSE Linux Enterprise Desktop 10 は、次の VMware 製品でサポートされています。

■ VMware Workstation

SUSE Linux Enterprise Desktop 10 : Workstation 6.5、6.5.1、6.5.2

アップデート版のサポート

■ Service Pack 1 : Workstation 6.5、6.5.1、6.5.2

■ Service Pack 2 : Workstation 6.5、6.5.1、6.5.2

■ VMware ACE

SUSE Linux Enterprise Desktop 10 : ACE 2.5、2.5.1、2.5.2

アップデート版のサポート

■ Service Pack 1 : ACE 2.5、2.5.1、2.5.2

■ Service Pack 2 : ACE 2.5、2.5.1、2.5.2

■ VMware ESX Server

SUSE Linux Enterprise Desktop 10 : ESX 3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

アップデート版のサポート

■ Service Pack 1 : ESX 3.0.1 (Patch ESX-1002082 が必要。詳細は <http://kb.vmware.com/kb/1002082> を参照)、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

■ Service Pack 2 : ESX 3.0.1 (Patch ESX-1005100 が必要。詳細は <http://kb.vmware.com/kb/1005100> を参照)、3.0.2 (Patch ESX-1005107 が必要。詳細は <http://kb.vmware.com/kb/1005107> を参照)、3.0.3、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

その他のサポート

- **SMP** : ESX 3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0 でフル サポート
- **VMI** : ESX 3.5 U2、ESX 3.5 U3、および 3.5 U4 で SUSE Linux Enterprise Desktop 10 Service Pack 2 をサポート。ESX 4.0 で SUSE Linux Enterprise Desktop 10 および Service Pack 1 をサポート

サポートでの考慮事項

- SUSE Linux Enterprise Desktop 10 Service Pack 2 では、VMware Virtual Machine Interface (VMI) に対応したカーネルが提供されています。このカーネルにより、仮想マシンで準仮想サポートを有効にすると、ゲスト OS のパフォーマンスが向上します。一般的な準仮想化の詳細は、次のヴィエムウェアの Web サイトを参照してください。
<http://www.vmware.com/interfaces/paravirtualization.html>
- ESX 3.5 Update 2、ESX 3.5 Update 3、または ESX 3.5 Update 4 で 32 ビット SUSE Linux Enterprise Desktop 10 Service Pack 2 の VMI サポートを有効にする手順については、ナレッジ ベースの記事 1005701 (<http://kb.vmware.com/kb/1005701>) を参照してください。
- ESX Server 3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 Update 1、3.5 Update 2、ESX 3.5 Update 3、または ESX 3.5 Update 4 で稼動する SUSE Linux Enterprise Desktop 10 での、読み取り専用ファイル システムの問題を回避するには、Service Pack 1 にアップグレードしてください。詳細は、ナレッジ ベースの記事 51306 (<http://kb.vmware.com/kb/51306>) を参照してください。

■ VMware Fusion

SUSE Linux Enterprise Desktop 10 Service Pack 2 : Fusion 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

アップデート版のサポート

- **Service Pack 2** : Fusion 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

その他のサポート

- **SMP** : Fusion 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4 で 2 way をサポート

64 ビット版

64 ビット版の SUSE Linux Enterprise Desktop 10 は、次の VMware 製品でサポートされています。

■ VMware Workstation

SUSE Linux Enterprise Desktop 10 : Workstation 6.5、6.5.1、6.5.2

アップデート版のサポート

■ Service Pack 1 : Workstation 6.5、6.5.1、6.5.2

■ Service Pack 2 : Workstation 6.5、6.5.1、6.5.2

■ VMware ACE

SUSE Linux Enterprise Desktop 10 : ACE 2.5、2.5.1、2.5.2

アップデート版のサポート

■ Service Pack 1 : ACE 2.5、2.5.1、2.5.2

■ Service Pack 2 : ACE 2.5、2.5.1、2.5.2

■ VMware ESX Server

SUSE Linux Enterprise Desktop 10 : ESX 3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

アップデート版のサポート

■ Service Pack 1 : ESX 3.0.1 (Patch ESX-1002082 が必要。詳細は <http://kb.vmware.com/kb/1002082> を参照)、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

■ Service Pack 2 : ESX 3.0.1 (Patch ESX-1005100 が必要。詳細は <http://kb.vmware.com/kb/1005100> を参照)、ESX 3.0.2 (Patch ESX-1005107 が必要。詳細は <http://kb.vmware.com/kb/1005107> を参照)、3.0.3、ESX 3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

その他のサポート

■ SMP : ESX 3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0 でフルサポート

サポートでの考慮事項

- ESX Server 3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 Update 1、3.5 Update 2、3.5 Update 3、または 3.5 Update 4 で稼動する SUSE Linux Enterprise Desktop 10 での、読み取り専用ファイル システムの問題を回避するには、Service Pack 1 にアップグレードしてください。詳細は、ナレッジ ベースの記事 51306 (<http://kb.vmware.com/kb/51306>) を参照してください。

■ VMware Fusion

SUSE Linux Enterprise Desktop 10 Service Pack 2 : Fusion 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

アップデート版のサポート

- Service Pack 2 : Fusion 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

その他のサポート

- SMP : Fusion 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4 で 2 way をサポート

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

SUSE Linux Enterprise Desktop 10 は、標準の SUSE ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。ここでは、標準のディストリビューション CD を使用したインストールの手順を説明します。ただし、起動フロッピーまたはネットワークから SUSE Linux Enterprise Desktop 10 をインストールすることもできます。ご使用の VMware 製品で PXE サーバがサポートされている場合は、PXE サーバからインストールすることもできます。

オペレーティング システムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

注意	このゲスト OS では、LSI Logic 仮想 SCSI アダプタを使用することをお勧めします。
-----------	---

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに SUSE Linux Enterprise Desktop 10 インストール CD を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、SUSE Linux Enterprise Desktop 10 のインストールを開始します。

- 3 テキスト モードのインストーラを使用してインストールします。テキスト モードのインストーラを選択するには、最初のインストール画面で、カーソル キーを使用して [Installation] を選択します。次に、<F2> キーを押してからカーソル キーを使用して [テキスト モード] を選択し、<Enter> キーを押します。
- 4 [Installation Settings] 画面では、[Change] メニューから [Booting] を選択します。
- 5 [Boot Loader Setup] 画面が表示されます。[Boot Loader Type] をデフォルトの [GRUB] ではなく、[LILO] に設定します。
- 6 一部の設定が失われる可能性があることを示す警告が表示され、次に実行する処理を選択するように求められます。[Convert current configuration] を選択し、処理を続行します。
- 7 [Finish] を選択し、[Installation Settings] 画面に戻ります。
- 8 残りの手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。

これでゲスト OS としての SUSE Linux Enterprise Desktop 10 の基本インストールが完了です。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

IPv6

多くの Linux ディストリビューションでは、VMware Tools のインストール後に IPv6 が有効になっていると、VMware Tools を **vmware-config-tools.pl** で構成することができません。この場合、VMware Tools は該当する仮想マシン向けにネットワーク デバイスを正しく設定することができず、次のようなメッセージが表示されます。

```
Unloading pcnet32 module
unregister_netdevice: waiting for eth0 to become free
```

このメッセージは、仮想マシンを再起動するまで連続して繰り返し表示されます。Linux を実行する仮想マシンでこの問題を防ぐには、VMware Tools をインストールする前に IPv6 を無効にしておきます。

注意 VMware ESX 4.0 以降のリリースでは IPv6 がサポートされています。VMware Tools のインストール前に IPv6 を無効にする必要はありません。

Linux を実行する仮想マシンで IPv6 を無効にするには

- 1 `/etc/sysconfig/network` ファイルに `NETWORKING_IPV6=yes` という行が含まれている場合は、この行を次のように変更します。

```
NETWORKING_IPV6=no
```

- 2 `/etc/modules.conf` ファイルに、次の行を追加します。

```
alias ipv6 off
alias net-pf-10 off
```

IPv6 を無効にすると、VMware Tools を正常にインストールし、構成できます。

既知の問題

4 ビット カラーの使用不可

SUSE Linux Enterprise Desktop 10 ゲスト OS の画面解像度を変更する場合、必ずカラービット深度も 16 色（4 ビット）より大きく設定します。16 色（4 ビット）の設定を使用すると、X サーバで致命的なエラーが発生する可能性があります。

コピーした仮想マシンでネットワークを利用する際に必要な手動の変更

コピーまたはクローン作成した仮想マシン、あるいは VMware ACE パッケージの一部としてエンドユーザーにデプロイされた仮想マシンでは、ネットワークが正常に動作しない場合があります。仮想マシンをコピーする際に、そのコピーに独自の識別子を割り当てると、その仮想マシンに接続されている仮想イーサネットアダプタ用の MAC アドレスが変更されます。SUSE Linux Enterprise Desktop 10 ゲスト OS は、インストール時に、主要構成ファイル名の一部として MAC アドレスを使用します。このため、仮想マシンの MAC アドレスが変更されると、ゲスト OS が仮想イーサネットアダプタにその構成ファイルを関連付けることができない可能性があります。この問題が発生した場合、ファイルをコピーするか、ファイル名を変更して回避することができます。たとえば、`eth0` の場合、次のような変更を行います。

元のファイル名

```
/etc/sysconfig/network/ifcfg-eth0-id-<MAC アドレス>
```

新しいファイル名

```
/etc/sysconfig/network/ifcfg-eth0
```

適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更

このゲスト OS のデフォルトのタイムキーピング構成では、問題が発生する可能性があります。Linux でのタイムキーピングのベストプラクティスについては、ナレッジベースの記事（<http://kb.vmware.com/kb/1006427>）を参照してください。

異なるプロセッサへの移行

Linux 仮想マシンを AMD プロセッサ上で稼働するホストと Intel プロセッサ上で稼働するホストとの間で移行することはお勧めしません。

Linux ディストリビューションの多くは、インストール時に、インストール先の特定のプロセッサに適したカーネルを選択します。また、一部のディストリビューションは、デフォルトで GENERIC カーネルをインストールしますが、ユーザーが選択してインストールできるアーキテクチャ固有のカーネルも提供しています。このようなカーネルには、そのプロセッサでのみ利用できる命令が含まれている場合があります。異なる種類のプロセッサを使用するホストでこれらの命令を実行すると、悪影響が生じる可能性があります。

このため、AMD プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンは、Intel プロセッサを使用するホストに移行しても動作しないことがあります。逆に、Intel プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンを AMD プロセッサを使用するホストに移行しても動作しない場合があります。

これは仮想マシンに限られたものではなく、物理コンピュータでも発生する問題です。たとえば、Linux がインストールされたハード ドライブを AMD マシンから Intel マシンに移動した場合、そのドライブから起動しようとすると問題が発生します。

SUSE Linux Enterprise Server 11

このセクションでは、SUSE Linux Enterprise Server 11 オペレーティングシステムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について記述しています。

32 ビット版

32 ビット版の SUSE Linux Enterprise Server 11 は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware Workstation**

SUSE Linux Enterprise Server 11 : Workstation 6.5.2（事前作成済みのカーネル モジュール（PBM）を含まない。詳細は、<http://kb.vmware.com/kb/1009129> を参照）

- **VMware ESX Server**

SUSE Linux Enterprise Server 11 : ESX 3.5 U4（事前作成済みのカーネル モジュール（PBM）を含まない。詳細は、<http://kb.vmware.com/kb/1009129> を参照）、4.0

その他のサポート

- **SMP** : ESX 3.5 U4、4.0 でフルサポート

- **VMware Tools OSP (Operating System Specific Package)** : ESX 4.0 で 32 ビットの SUSE Linux Enterprise Server 11 をサポート。詳細は、次の『VMware Tools インストール ガイド Operating System Specific Package（VMware Tools Installation Guide Operating System Specific Packages）』を参照してください。
http://www.vmware.com/pdf/osp_install_guide.pdf

- **vmxnet3 network adapter** : すべての SUSE Linux Enterprise Server 11 リリースをサポート

64 ビット版

64 ビット版の SUSE Linux Enterprise Server 11 は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware Workstation**

SUSE Linux Enterprise Server 11 : Workstation 6.5.2（事前作成済みのカーネル モジュール（PBM）を含まない。詳細は、<http://kb.vmware.com/kb/1009129> を参照）

■ VMware ESX Server

SUSE Linux Enterprise Server 11 : ESX 3.5 U4 (事前作成済みのカーネル モジュール (PBM) を含まない。詳細は、<http://kb.vmware.com/kb/1009129> を参照)、4.0
その他のサポート

■ **SMP** : ESX 3.5 U4、4.0 でフル サポート

■ **VMware Tools OSP (Operating System Specific Package)** : ESX 4.0 で 32 ビットの SUSE Linux Enterprise Server 11 をサポート。詳細は、次の『VMware Tools インストール ガイド Operating System Specific Package (VMware Tools Installation Guide Operating System Specific Packages)』を参照してください。
http://www.vmware.com/pdf/osp_install_guide.pdf

■ **vmxnet3 network adapter** : SUSE Linux Enterprise Server 11 のすべてのリリースをサポート

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

SUSE Linux Enterprise Server 11 は、標準の SUSE ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。ここでは、標準のディストリビューション CD を使用したインストールの手順を説明します。ただし、起動フロッピーまたはネットワークから SUSE Linux Enterprise Server 11 をインストールすることもできます。ご使用の VMware 製品で PXE サーバがサポートされている場合は、PXE サーバからインストールすることもできます。

オペレーティング システムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

注意 このゲスト OS では、LSI Logic 仮想 SCSI アダプタを使用することをお勧めします。

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに SUSE Linux Enterprise Server 11 インストール CD を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、SUSE Linux Enterprise Server 11 のインストールを開始します。
- 3 残りの手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。

これでゲスト OS としての SUSE Linux Enterprise Server 11 の基本インストールが完了です。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

IPv6

多くの Linux ディストリビューションでは、VMware Tools のインストール後に IPv6 が有効になっていると、VMware Tools を **vmware-config-tools.pl** で構成することができません。この場合、VMware Tools は該当する仮想マシン向けにネットワーク デバイスを正しく設定することができず、次のようなメッセージが表示されます。

```
Unloading pcnet32 module
unregister_netdevice: waiting for eth0 to become free
```

このメッセージは、仮想マシンを再起動するまで連続して繰り返し表示されます。Linux を実行する仮想マシンでこの問題を防ぐには、VMware Tools をインストールする前に IPv6 を無効にしておきます。

注意 VMware ESX 4.0 以降のリリースでは IPv6 がサポートされています。VMware Tools のインストール前に IPv6 を無効にする必要はありません。

Linux を実行する仮想マシンで IPv6 を無効にするには

- 1 `/etc/sysconfig/network` ファイルに `NETWORKING_IPV6=yes` という行が含まれている場合は、この行を次のように変更します。

```
NETWORKING_IPV6=no
```

- 2 `/etc/modprobe.conf` ファイルに、次の行を追加します。

```
alias ipv6 off
alias net-pf-10 off
```

IPv6 を無効にすると、VMware Tools を正常にインストールし、構成できます。

既知の問題

4 ビット カラーの使用不可

SUSE Linux Enterprise Server 11 ゲスト OS の画面解像度を変更する場合、必ずカラー ビット深度も 16 色（4 ビット）より大きく設定します。16 色（4 ビット）の設定を使用すると、X サーバで致命的なエラーが発生する可能性があります。

コピーした仮想マシンでネットワークを利用する際に必要な手動の変更

コピーまたはクローン作成した仮想マシン、あるいは VMware ACE パッケージの一部としてエンド ユーザーにデプロイされた仮想マシンでは、ネットワークが正常に動作しない場合があります。仮想マシンをコピーする際に、そのコピーに独自の識別子を割り当てると、その仮想マシンに接続されている仮想イーサネット アダプタ用の MAC アドレスが変更されます。SUSE Linux Enterprise Server 11 ゲスト OS は、インストール時に、主要構成ファイル名の一部として MAC アドレスを使用します。このため、仮想マシンの MAC アドレスが変更されると、ゲスト OS が仮想イーサネット アダプタにその構成ファイルに関連付けることができない可能性があります。この問題が発生した場合、ファイルをコピーするか、ファイル名を変更して回避することができます。たとえば、**eth0** の場合、次のような変更を行います。

元のファイル名

`/etc/sysconfig/network/ifcfg-eth0-id-<MAC アドレス>`

新しいファイル名

`/etc/sysconfig/network/ifcfg-eth0`

適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更

このゲスト OS のデフォルトのタイムキーピング構成では、問題が発生する可能性があります。Linux でのタイムキーピングのベスト プラクティスについては、ナレッジベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/1006427>) を参照してください。

異なるプロセッサへの移行

Linux 仮想マシンを AMD プロセッサ上で稼働するホストと Intel プロセッサ上で稼働するホストとの間で移行することはお勧めしません。

Linux ディストリビューションの多くは、インストール時に、インストール先の特定のプロセッサに適したカーネルを選択します。また、一部のディストリビューションは、デフォルトで GENERIC カーネルをインストールしますが、ユーザーが選択してインストールできるアーキテクチャ固有のカーネルも提供しています。このようなカーネルには、そのプロセッサでのみ利用できる命令が含まれている場合があります。異なる種類のプロセッサを使用するホストでこれらの命令を実行すると、悪影響が生じる可能性があります。

このため、AMD プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンは、Intel プロセッサを使用するホストに移行しても動作しないことがあります。逆に、Intel プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンを AMD プロセッサを使用するホストに移行しても動作しない場合があります。

これは仮想マシンに限られたものではなく、物理コンピュータでも発生する問題です。たとえば、Linux がインストールされたハード ドライブを AMD マシンから Intel マシンに移動した場合、そのドライブから起動しようとする問題が発生します。

SUSE Linux Enterprise Server 10

このセクションでは、SUSE Linux Enterprise Server 10 オペレーティングシステムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について記述しています。

32 ビット版

32 ビット版の SUSE Linux Enterprise Server 10 は、次の VMware 製品でサポートされています。

■ VMware Workstation

SUSE Linux Enterprise Server 10 : Workstation 5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

アップデート版のサポート

- Service Pack 1 : Workstation 6.0.1、6.0.2 で試験的にサポート。Workstation 6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 でフルサポート

- Service Pack 2 : Workstation 6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

- SUSE Linux Enterprise Server 10 での Eclipse 統合型仮想デバッグのサポート : Workstation 6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

■ VMware ACE

SUSE Linux Enterprise Server 10 : ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

アップデート版のサポート

- Service Pack 1 : ACE 2.0.1、2.0.2 で試験的にサポート。ACE 2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2 でフルサポート

- Service Pack 2 : ACE 2.5、2.5.1、2.5.2

■ VMware Server

SUSE Linux Enterprise Server 10 : VMware Server 2.0、2.0.1

アップデート版のサポート

- Service Pack 1 : VMware Server 2.0、2.0.1

試験的なサポート

SUSE Linux Enterprise Server 10 : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9

■ VMware ESX Server

SUSE Linux Enterprise Server 10 : ESX 3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

アップデート版のサポート

- **Service Pack 1** : ESX 3.0.1 (Patch ESX-1002082 が必要。詳細は <http://kb.vmware.com/kb/1002082> を参照)、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0
- **Service Pack 2** : ESX 3.0.1 (Patch ESX-1005100 が必要。詳細は <http://kb.vmware.com/kb/1005100> を参照)、3.0.2 (Patch ESX-1005107 が必要。詳細は <http://kb.vmware.com/kb/1005107> を参照)、3.0.3、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

その他のサポート

- **SMP** : ESX 3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0 でフルサポート
- **VMI** : ESX 3.5 U2、ESX 3.5 U3、3.5 U4 で SUSE Linux Enterprise Server 10 Service Pack 2 をサポート。ESX 4.0 で SUSE Linux Enterprise Server 10 および Service Pack 1 をサポート
- **Novell Open Enterprise Server Support Pack 1** : ESX 3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0
- **Novell Open Enterprise Server Support Pack 2** : ESX 3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0
- **Novell Open Enterprise Server 2** : ESX 3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0
- **Novell Open Enterprise Server 2 Support Pack 1** : ESX 3.0.2、3.0.3、3.5 U3、3.5 U4、4.0
- **VMware Tools OSP (Operating System Specific Package)** : ESX Server 3.5 Update 2、3.5 Update 3、3.5 Update 4 で 32 ビットの SUSE Linux Enterprise Server 10 と Service Packs 1 および 2 をサポート。詳細は、次の『VMware Tools インストール ガイド Operating System Specific Package (VMware Tools Installation Guide Operating System Specific Packages)』を参照してください。
http://www.vmware.com/pdf/osp_install_guide.pdf
- **vmxnet3 network adapter** : SUSE Linux Enterprise Server 10 のすべてのリリースをサポート

サポートでの考慮事項

- SUSE Linux Enterprise Server 10 Service Pack 2 では、VMware Virtual Machine Interface (VMI) に対応したカーネルが提供されています。このカーネルにより、仮想マシンで準仮想サポートを有効にすると、ゲスト OS のパフォーマンスが向上します。一般的な準仮想化の詳細は、次のヴァイエムウェアの Web サイトを参照してください。
<http://www.vmware.com/interfaces/paravirtualization.html>.
- ESX 3.5 Update 2、ESX 3.5 Update 3、または ESX 3.5 Update 4 で 32 ビットの SUSE Linux Enterprise Server 10 Service Pack 2 の VMI サポートを有効にする手順については、ナレッジベースの記事 1005701 (<http://kb.vmware.com/kb/1005701>) を参照してください。
- ESX Server 3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 Update 1、3.5 Update 2、3.5 Update 3、または 3.5 Update 4 で稼動する SUSE Linux Enterprise Server 10 での、読み取り専用ファイルシステムの問題を回避するには、Service Pack 1 にアップグレードしてください。詳細は、ナレッジベースの記事 51306 (<http://kb.vmware.com/kb/51306>) を参照してください。

■ VMware Fusion

SUSE Linux Enterprise Server 10 : Fusion 1.0、1.1、1.1.1、1.1.2、1.1.3、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

アップデート版のサポート

- **Service Pack 2** : Fusion 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

その他のサポート

- **SMP** : Fusion 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4 で 2 way をサポート

64 ビット版

64 ビット版の SUSE Linux Enterprise Server 10 は、次の VMware 製品でサポートされています。

■ VMware Workstation

SUSE Linux Enterprise Server 10 : Workstation 5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

アップデート版のサポート

- **Service Pack 1** : Workstation 6.0.1 で試験的にサポート
- **Service Pack 2** : Workstation 6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

- **SUSE Linux Enterprise Server 10 での Eclipse 統合型仮想デバッグのサポート**
ト : Workstation 6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

- **VMware ACE**

SUSE Linux Enterprise Server 10 : ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

アップデート版のサポート

- **Service Pack 2** : ACE 2.5、2.5.1、2.5.2

- **VMware Server**

SUSE Linux Enterprise Server 10 : VMware Server 2.0、2.0.1

アップデート版のサポート

- **Service Pack 1** : VMware Server 2.0、2.0.1

試験的なサポート

SUSE Linux Enterprise Server 10 : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9

- **VMware ESX Server**

SUSE Linux Enterprise Server 10 : ESX 3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

アップデート版のサポート

- **Service Pack 1** : ESX 3.0.1 (Patch ESX-1002082 が必要。詳細は <http://kb.vmware.com/kb/1002082> を参照)、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0
- **Service Pack 2** : ESX 3.0.1 (Patch ESX-1005100 が必要。詳細は <http://kb.vmware.com/kb/1005100> を参照)、ESX 3.0.2 (Patch ESX-1005107 が必要。詳細は <http://kb.vmware.com/kb/1005107> を参照)、3.0.3、ESX 3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

その他のサポート

- **SMP** : ESX 3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0 でフル サポート
- **Novell Open Enterprise Server 2** : ESX 3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0
- **Novell Open Enterprise Server 2 Support Pack 1** : ESX 3.0.2、3.0.3、3.5 U3、3.5 U4、4.0
- **VMware Tools OSP (Operating System Specific Package)** : ESX Server 3.5 Update 2、3.5 Update 3、3.5 Update 4 で 64 ビットの SUSE Linux Enterprise Server 10 と Service Packs 1 および 2 をサポート。詳細は、次の『VMware Tools インストール ガイド Operating System Specific Package (VMware Tools Installation Guide Operating System Specific Packages)』を参照してください。
http://www.vmware.com/pdf/osp_install_guide.pdf
- **vmxnet3 network adapter**: SUSE Linux Enterprise Server 10 のすべてのリリースをサポート

サポートでの考慮事項

- ESX Server 3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 Update 1、3.5 Update 2、3.5 Update 3、または ESX 3.5 Update 4 で稼動する SUSE Linux Enterprise Server 10 での、読み取り専用ファイル システムの問題を回避するには、Service Pack 1 にアップグレードしてください。詳細は、ナレッジ ベースの記事 51306 (<http://kb.vmware.com/kb/51306>) を参照してください。
- **VMware Fusion**
SUSE Linux Enterprise Server 10 : Fusion 1.0、1.1、1.1.1、1.1.2、1.1.3、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4
アップデート版のサポート
 - **Service Pack 2** : Fusion 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4
- **SMP** : Fusion 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4 で 2 way をサポート

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

SUSE Linux Enterprise Server 10 は、標準の SUSE ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。ここでは、標準のディストリビューション CD を使用したインストールの手順を説明します。ただし、起動フロッピーまたはネットワークから SUSE Linux Enterprise Server 10 をインストールすることもできます。ご使用の VMware 製品で PXE サーバがサポートされている場合は、PXE サーバからインストールすることもできます。

オペレーティングシステムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

注意 ESX Server 上に Novell Open Enterprise Server がある SUSE Linux Enterprise Server 10 に仮想マシンを作成する場合、ゲスト OS に [Linux] を選択し、バージョンに [Open Enterprise Server] を選択します。

注意 このゲスト OS では、LSI Logic 仮想 SCSI アダプタを使用することをお勧めします。

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに SUSE Linux Enterprise Server 10 インストール CD を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、SUSE Linux Enterprise Server 10 のインストールを開始します。
- 3 テキスト モードのインストーラを使用してインストールします。テキスト モードのインストーラを選択するには、最初のインストール画面でカーソル キーを使用して [Installation] を選択します。起動オプションとして **textmode=1** と入力し、<Enter> キーを押します。
- 4 [Installation Settings] 画面では、[Change] メニューから [Booting] を選択します。
- 5 [Boot Loader Setup] 画面が表示されます。[Boot Loader Type] をデフォルトの [GRUB] ではなく、[LILO] に設定します。
- 6 一部の設定が失われる可能性があることを示す警告が表示され、次に実行する処理を選択するように求められます。[Convert current configuration] を選択し、処理を続行します。
- 7 [Finish] を選択し、[Installation Settings] 画面に戻ります。
- 8 残りの手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。

これでゲスト OS としての SUSE Linux Enterprise Server 10 の基本インストールが完了です。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

IPv6

多くの Linux ディストリビューションでは、VMware Tools のインストール後に IPv6 が有効になっていると、VMware Tools を **vmware-config-tools.pl** で構成することができません。この場合、VMware Tools は該当する仮想マシン向けにネットワーク デバイスを正しく設定することができず、次のようなメッセージが表示されます。

```
Unloading pcnet32 module
unregister_netdevice: waiting for eth0 to become free
```

このメッセージは、仮想マシンを再起動するまで連続して繰り返し表示されます。Linux を実行する仮想マシンでこの問題を防ぐには、VMware Tools をインストールする前に IPv6 を無効にしておきます。

注意 VMware ESX 4.0 以降のリリースでは IPv6 がサポートされています。VMware Tools のインストール前に IPv6 を無効にする必要はありません。

Linux を実行する仮想マシンで IPv6 を無効にするには

- 1 `/etc/sysconfig/network` ファイルに **NETWORKING_IPV6=yes** という行が含まれている場合は、この行を次のように変更します。

```
NETWORKING_IPV6=no
```

- 2 `/etc/modprobe.conf` ファイルに、次の行を追加します。

```
alias ipv6 off
alias net-pf-10 off
```

IPv6 を無効にすると、VMware Tools を正常にインストールし、構成できます。

既知の問題

4 ビット カラーの使用不可

SUSE Linux Enterprise Server 10 ゲスト OS の画面解像度を変更する場合、必ずカラー ビット深度も 16 色（4 ビット）より大きく設定します。16 色（4 ビット）の設定を使用すると、X サーバで致命的なエラーが発生する可能性があります。

コピーした仮想マシンでネットワークを利用する際に必要な変更

コピーまたはクローン作成した仮想マシン、あるいは VMware ACE パッケージの一部としてエンド ユーザーにデプロイされた仮想マシンでは、ネットワークが正常に動作しない場合があります。仮想マシンをコピーする際に、そのコピーに独自の識別子を割り当てると、その仮想マシンに接続されている仮想イーサネット アダプタ用の MAC アドレスが変更されます。SUSE Linux Enterprise Server 10 ゲスト OS は、インストール時に、主要構成ファイル名の一部として MAC アドレスを使用します。このため、仮想マシンの MAC アドレスが変更されると、ゲスト OS が仮想イーサネット アダプタにその構成ファイルに関連付けることができない可能性があります。この問題が発生した場合、ファイルをコピーするか、ファイル名を変更して回避することができます。たとえば、**eth0** の場合、次のような変更を行います。

元のファイル名

/etc/sysconfig/network/ifcfg-eth0-id-<MAC アドレス>

新しいファイル名

/etc/sysconfig/network/ifcfg-eth0

適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更

このゲスト OS のデフォルトのタイムキーピング構成では、問題が発生する可能性があります。Linux でのタイムキーピングのベスト プラクティスについては、ナレッジベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/1006427>) を参照してください。

異なるプロセッサへの移行

Linux 仮想マシンを AMD プロセッサ上で稼働するホストと Intel プロセッサ上で稼働するホストとの間で移行することはお勧めしません。

Linux ディストリビューションの多くは、インストール時に、インストール先の特定のプロセッサに適したカーネルを選択します。また、一部のディストリビューションは、デフォルトで GENERIC カーネルをインストールしますが、ユーザーが選択してインストールできるアーキテクチャ固有のカーネルも提供しています。このようなカーネルには、そのプロセッサでのみ利用できる命令が含まれている場合があります。異なる種類のプロセッサを使用するホストでこれらの命令を実行すると、悪影響が生じる可能性があります。

このため、AMD プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンは、Intel プロセッサを使用するホストに移行しても動作しないことがあります。逆に、Intel プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンを AMD プロセッサを使用するホストに移行しても動作しない場合があります。

これは仮想マシンに限られたものではなく、物理コンピュータでも発生する問題です。たとえば、Linux がインストールされたハード ドライブを AMD マシンから Intel マシンに移動した場合、そのドライブから起動しようとする問題が発生します。

SUSE Linux Enterprise Server 9

このセクションでは、SUSE Linux Enterprise Server 9 オペレーティングシステムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について記述しています。

32 ビット版

32 ビット版の SUSE Linux Enterprise Server 9 は、次の VMware 製品でサポートされています。

■ VMware Workstation

SUSE Linux Enterprise Server 9 : Workstation 5.0、5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

アップデート版のサポート

- **Service Pack 1** : Workstation 5.0、5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2
- **Service Pack 2** : Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2
- **Service Pack 3** : Workstation 5.5、5.5.1 で試験的にサポート。Workstation 5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 でフルサポート
- **Service Pack 4** : Workstation 6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で試験的にサポート

その他のサポート

- **SMP** : Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way を試験的にサポート
- **Novell Open Enterprise Server** : Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

■ VMware ACE

SUSE Linux Enterprise Server 9 : ACE 1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

アップデート版のサポート

- **Service Pack 1** : ACE 1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2
- **Service Pack 2** : ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2
- **Service Pack 3** : ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2
- **Service Pack 4 Beta** : ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2 で試験的にサポート

■ VMware GSX Server

SUSE Linux Enterprise Server 9 : GSX Server 3.2、3.2.1

アップデート版のサポート

- **Service Pack 1** : GSX Server 3.2、3.2.1

■ VMware Server

SUSE Linux Enterprise Server 9 : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9

アップデート版のサポート

- **Service Pack 1** : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9、2.0、2.0.1
- **Service Pack 2** : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9、2.0、2.0.1
- **Service Pack 3** : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9、2.0、2.0.1
- **Service Pack 4** : VMware Server 2.0、2.0.1

その他のサポート

- **SMP** : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9、2.0、2.0.1 で 2 way を試験的にサポート

■ VMware ESX Server

SUSE Linux Enterprise Server 9 : 2.5、2.5.1、2.5.2、2.5.3、2.5.4、2.5.5、3.0、3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

アップデート版のサポート

- **Service Pack 1** : ESX 2.5、2.5.1、2.5.2、2.5.3、2.5.4、2.5.5、3.0、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0
- **Service Pack 2** : ESX 2.5.2、2.5.3、2.5.4、2.5.5、3.0、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0
- **Service Pack 3** : ESX 2.5.3、2.5.4、2.5.5、3.0、3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0
- **Service Pack 4** : ESX 2.5.4、2.5.5、3.0.1、3.0.2 (Patch ESX-1002431 が必要。詳細は <http://kb.vmware.com/kb/1002431> を参照)、3.0.3、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

その他のサポート

- **SMP** : ESX 2.5、2.5.1、2.5.2、2.5.3、2.5.4、2.5.5、3.0、3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0
- **Novell Open Enterprise Server Support Pack 1** : ESX 3.0、3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0
- **Novell Open Enterprise Server Support Pack 2** : ESX 3.0、3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0
- **VMware Tools OSP (Operating System Specific Package)** : ESX Server 3.5 Update 2、3.5 Update 3、3.5 Update 4 で 32 ビット版の SUSE Linux Enterprise Server 9 および Service Packs 1、2、3、4 をサポート。詳細は、次の『VMware Tools インストール ガイド Operating System Specific Package (VMware Tools Installation Guide Operating System Specific Packages)』を参照してください。
http://www.vmware.com/pdf/osp_install_guide.pdf

サポートでの考慮事項

- AMD Opteron プロセッサを使用するホスト マシンに関しては、「[AMD Opteron プロセッサを使用するホストで SMP モード時に発生する SLES 9 SP3 ゲストのモニタ パニック \(P.387\)](#)」を参照してください。

- ESX Server 3.0、3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 Update 1、3.5 Update 2、3.5 Update 3、または 3.5 Update 4 で稼動する SUSE Linux Enterprise 9 Service Pack 3 での、読み取り専用ファイル システムの問題を回避するには、Service Pack 3 Maintenance Release Build 2.6.5-7.286 または Service Pack 4 にアップグレードしてください。詳細は、ナレッジ ベースの記事 51306 (<http://kb.vmware.com/kb/51306>) を参照してください。
- **VMware Fusion**
 SUSE Linux Enterprise Server 9 : Fusion 1.0、1.1、1.1.1、1.1.2、1.1.3、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4
 アップデート版のサポート
 - **Service Pack 3** : Fusion 1.0、1.1、1.1.1、1.1.2、1.1.3、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

64 ビット版

64 ビット版の SUSE Linux Enterprise Server 9 は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware Workstation**
 SUSE Linux Enterprise Server 9 : Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2
 アップデート版のサポート
 - **Service Pack 1** : Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2
 - **Service Pack 2** : Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2
 - **Service Pack 3** : Workstation 5.5、5.5.1 で試験的にサポート。Workstation 5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 でフルサポート
 - **Service Pack 4** : Workstation 6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で試験的にサポート
 その他のサポート
 - **SMP** : Workstation 5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way を試験的にサポート

■ VMware ACE

SUSE Linux Enterprise Server 9 : ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

アップデート版のサポート

- **Service Pack 1** : ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2
- **Service Pack 2** : ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2
- **Service Pack 3** : ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2
- **Service Pack 4 Beta** : ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2 で試験的にサポート

■ VMware Server

SUSE Linux Enterprise Server 9 : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9

アップデート版のサポート

- **Service Pack 1** : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9、2.0、2.0.1
- **Service Pack 2** : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9、2.0、2.0.1
- **Service Pack 3** : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9、2.0、2.0.1
- **Service Pack 4** : VMware Server 2.0、2.0.1

その他のサポート

- **SMP** : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9、2.0、2.0.1 で 2 way を試験的にサポート

■ VMware ESX Server

SUSE Linux Enterprise Server 9 : ESX 3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

アップデート版のサポート

- **Service Pack 1** : ESX 3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0
- **Service Pack 2** : ESX 3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

- **Service Pack 3** : ESX 3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0
- **Service Pack 4** : ESX 3.0.1、3.0.2、3.0.3 (Patch ESX-1002431 が必要。詳細は <http://kb.vmware.com/kb/1002431> を参照)、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

その他のサポート

- **SMP** : ESX 3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0 でフル サポート
- **VMware Tools OSP (Operating System Specific Package)** : ESX Server 3.5 Update 2、3.5 Update 3、3.5 Update 4 で 64 ビット版の SUSE Linux Enterprise Server 9 および Service Packs 1、2、3、4 をサポート。詳細は、次の『VMware Tools インストール ガイド Operating System Specific Package (VMware Tools Installation Guide Operating System Specific Packages)』を参照してください。
http://www.vmware.com/pdf/osp_install_guide.pdf

サポートでの考慮事項

- ESX Server 3.0、3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 Update 1、3.5 Update 2、3.5 Update 3、または 3.5 Update 4 で稼動する SUSE Linux Enterprise 9 Service Pack 3 での、読み取り専用ファイル システムの問題を回避するには、Service Pack 3 Maintenance Release Build 2.6.5-7.286 または Service Pack 4 にアップグレードしてください。詳細は、ナレッジ ベースの記事 51306 (<http://kb.vmware.com/kb/51306>) を参照してください。
- ESX Server 2.5.x 上の SLES 9 仮想マシンでは、BusLogic 仮想 SCSI アダプタのみがサポートされています。ESX Server 3.x 上の SLES 9 仮想マシンでは、LSI Logic 仮想 SCSI アダプタがサポートされています。ESX Server 3.x 上にある、4GB を超えるメモリが構成された SLES 9 仮想マシンでは、LSI Logic 仮想 SCSI アダプタのみがサポートされています。
- **VMware Fusion**
 - SUSE Linux Enterprise Server 9** : Fusion 1.0、1.1、1.1.1、1.1.2、1.1.3、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4
 - アップデート版のサポート
 - **Service Pack 3** : Fusion 1.0、1.1、1.1.1、1.1.2、1.1.3、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

SLES 9 (SUSE Linux Enterprise Server 9) は、標準の SUSE ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。ここでは、標準のディストリビューション CD を使用したインストールの手順を説明します。ただし、起動フロッピーまたはネットワークから SLES 9 をインストールすることもできます。ご使用の VMware 製品で PXE サーバがサポートされている場合は、PXE サーバからインストールすることもできます。

オペレーティングシステムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

注意 ESX Server 上の SUSE Linux Enterprise Server 9 に仮想マシンを作成する場合、ゲスト OS に [Linux] を選択し、バージョンに [Open Enterprise Server] を選択します。

注意 VMware 仮想マシンで BusLogic 仮想 SCSI アダプタを使用した際、Linux ゲスト OS の多くでさまざまな問題が発生しています。ESX Server 2.5.x を使用している場合を除き、このゲスト OS では、LSI Logic 仮想 SCSI アダプタを使用することをお勧めします。

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに SLES 9 インストール CD を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、SLES 9 のインストールを開始します。
- 3 テキスト モードのインストーラを使用してインストールします。テキスト モードのインストーラを選択するには、最初のインストール画面でカーソル キーを使用して [Installation] を選択します。起動オプションとして **textmode=1** と入力し、<Enter> キーを押します。
- 4 [Installation Settings] 画面では、[Change] メニューから [Booting] を選択します。
- 5 [Boot Loader Setup] 画面が表示されます。[Boot Loader Type] をデフォルトの [GRUB] ではなく、[LILO] に設定します。
- 6 一部の設定が失われる可能性があることを示す警告が表示され、次に実行する処理を選択するように求められます。[Convert current configuration] を選択し、処理を続行します。
- 7 [Finish] を選択し、[Installation Settings] 画面に戻ります。
- 8 残りの手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。

これでゲスト OS としての SLES 9 の基本インストールが完了です。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

IPv6

多くの Linux ディストリビューションでは、VMware Tools のインストール後に IPv6 が有効になっていると、VMware Tools を **vmware-config-tools.pl** で構成することができません。この場合、VMware Tools は該当する仮想マシン向けにネットワーク デバイスを正しく設定することができず、次のようなメッセージが表示されます。

```
Unloading pcnet32 module
unregister_netdevice: waiting for eth0 to become free
```

このメッセージは、仮想マシンを再起動するまで連続して繰り返し表示されます。Linux を実行する仮想マシンでこの問題を防ぐには、VMware Tools をインストールする前に IPv6 を無効にしておきます。

注意 VMware ESX 4.0 以降のリリースでは IPv6 がサポートされています。VMware Tools のインストール前に IPv6 を無効にする必要はありません。

Linux を実行する仮想マシンで IPv6 を無効にするには

- 1 `/etc/sysconfig/network` ファイルに **NETWORKING_IPV6=yes** という行が含まれている場合は、この行を次のように変更します。

```
NETWORKING_IPV6=no
```

- 2 `/etc/modprobe.conf` ファイルに、次の行を追加します。

```
alias ipv6 off
alias net-pf-10 off
```

IPv6 を無効にすると、VMware Tools を正常にインストールし、構成できます。

既知の問題

Intel EM64T ハードウェア上での 64 ビットの SLES 9 SP 1 による自動初期化

SUSE Linux Enterprise Server 9 Service Pack 1 の 64 ビットの仮想マシンは、Intel EM64T ハードウェア上で自動的に初期化する場合があります。初期化処理が行われた場合、ED (Execute Disable) 機能がホストの BIOS で無効になっていないかを確認します。すべての 64 ビットの Linux カーネルが適切に機能するためには、ED (Execute Disable) 機能が有効になっている必要があります。

4 ビット カラーの使用不可

SLES 9 ゲスト OS の画面解像度を変更する場合、必ずカラー ビット深度も 16 色 (4 ビット) より大きく設定します。16 色 (4 ビット) の設定を使用すると、X サーバで致命的なエラーが発生する可能性があります。

コピーした仮想マシンでネットワークを利用する際に必要な手動の変更

コピーまたはクローン作成した仮想マシン、あるいは VMware ACE パッケージの一部としてエンド ユーザーにデプロイされた仮想マシンでは、ネットワークが正常に動作しない場合があります。仮想マシンをコピーする際に、そのコピーに独自の識別子を割り当てると、その仮想マシンに接続されている仮想イーサネット アダプタ用の MAC アドレスが変更されます。SUSE Linux Enterprise Server 9 ゲスト OS は、インストール時に、主要構成ファイル名の一部として MAC アドレスを使用します。このため、仮想マシンの MAC アドレスが変更されると、ゲスト OS が仮想イーサネット アダプタにその構成ファイルに関連付けることができない可能性があります。この問題が発生した場合、ファイルをコピーするか、ファイル名を変更して回避することができます。たとえば、**eth0** の場合、次のような変更を行います。

元のファイル名

`/etc/sysconfig/network/ifcfg-eth0-id-<MAC アドレス>`

新しいファイル名

`/etc/sysconfig/network/ifcfg-eth0`

適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更

このゲスト OS のデフォルトのタイムキーピング構成では、問題が発生する可能性があります。Linux でのタイムキーピングのベスト プラクティスについては、ナレッジベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/1006427>) を参照してください。

ゲストのスクリーン セーバー

VMware Workstation または VMware GSX Server：XFree86 3.x X サーバを稼動する Linux ホストでは、ゲスト OS でのスクリーン セーバーの使用は避けてください。ゲストでスクリーン セーバーを使用すると、大量の処理能力が必要なため、ホストの X サーバがフリーズする可能性があります。

AMD Opteron プロセッサを使用するホストで SMP モード時に発生する SLES 9 SP3 ゲストのモニタ パニック

VMware Workstation 5.0 または VMware ESX Server 2.x.x：AMD Opteron プロセッサを使用するホスト マシンでは、仮想マシンが SMP モード（つまり、複数の仮想プロセッサを使用）で SUSE Linux Enterprise Server 9 SP3 を実行すると、起動に失敗し、モニタ エラー BUG F(140):1913 bugNr-18415 が発生します。このエラーは、AMD プラットフォーム上のゲスト カーネルが実行する特定の CPU 命令が原因で発生します。

この問題を回避するには、仮想マシンが 1 個の仮想プロセッサのみを使用するように設定します。詳細は、ご使用の VMware 製品のドキュメントを参照してください。

この問題は、Workstation 5.5.x および ESX Server 3.x で修正されています。

ESX Server 仮想マシンでの PAE の無効化

ESX Server 2.5.x：ESX Server 2.5.x 仮想マシンは物理アドレス拡張（PAE）をサポートしていますが、この機能用にパフォーマンスが最適化されているわけではありません。このため、PAE 機能が有効になっているゲスト OS では、パフォーマンスが低下する可能性があります。最高のパフォーマンスを実現するには、ゲスト OS で PAE を無効にすることをお勧めします。PAE の無効化の詳細および手順は、ナレッジ ベースの記事（kb.vmware.com/kb/2020）を参照してください。

ESX Server 3.x：PAE を無効にすると、最近の AMD および Intel プロセッサが提供する NX（No Execute）機能および ED（Execute Disabled）機能も無効になります。これらの機能は、ESX Server 3.x より前のバージョンの ESX Server ではサポートされていません。

異なるプロセッサへの移行

Linux 仮想マシンを AMD プロセッサ上で稼働するホストと Intel プロセッサ上で稼働するホストとの間で移行することはお勧めしません。

Linux ディストリビューションの多くは、インストール時に、インストール先の特定のプロセッサに適したカーネルを選択します。また、一部のディストリビューションは、デフォルトで GENERIC カーネルをインストールしますが、ユーザーが選択してインストールできるアーキテクチャ固有のカーネルも提供しています。このようなカーネルには、そのプロセッサでのみ利用できる命令が含まれている場合があります。異なる種類のプロセッサを使用するホストでこれらの命令を実行すると、悪影響が生じる可能性があります。

このため、AMD プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンは、Intel プロセッサを使用するホストに移行しても動作しないことがあります。逆に、Intel プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンを AMD プロセッサを使用するホストに移行しても動作しない場合があります。

これは仮想マシンに限られたものではなく、物理コンピュータでも発生する問題です。たとえば、Linux がインストールされたハード ドライブを AMD マシンから Intel マシンに移動した場合、そのドライブから起動しようとする問題が発生します。

SUSE Linux Enterprise Server 8

このセクションでは、SUSE Linux Enterprise Server 8 オペレーティング システムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について記述しています。

32 ビット版

32 ビット版の SUSE Linux Enterprise Server 8 は、次の VMware 製品でサポートされています。

■ VMware Workstation

SUSE Linux Enterprise Server 8 : Workstation 4.0、4.0.1、4.0.2、4.0.5、4.5、4.5.1、4.5.2、4.5.3、5.0、5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

- SMP : Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way を試験的にサポート

■ VMware ACE

SUSE Linux Enterprise Server 8 : ACE 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

■ VMware GSX Server

SUSE Linux Enterprise Server 8 : GSX Server 3.0、3.1、3.2、3.2.1

アップデート版のサポート

- Service Pack 3 : GSX Server 3.2、3.2.1

■ VMware Server

SUSE Linux Enterprise Server 8 : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9

その他のサポート

- SMP : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9 で 2 way を試験的にサポート

■ VMware ESX Server

SUSE Linux Enterprise Server 8 : ESX 2.0、2.0.1、2.1、2.1.1、2.1.2、2.5、2.5.1、2.5.2、2.5.3、2.5.4、2.5.5、3.0、3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

アップデート版のサポート

■ **Service Pack 3** : ESX 2.1、2.1.1、2.1.2、2.5、2.5.1、2.5.2、2.5.3、2.5.4、2.5.5、3.0、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

■ **Service Pack 4** : ESX 2.1、2.1.1、2.1.2、2.5、2.5.1、2.5.2、2.5.3、2.5.4、2.5.5、3.0、3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

その他のサポート

■ **SMP** : ESX 2.0、2.0.1、2.1、2.1.1、2.1.2、2.5、2.5.1、2.5.2、2.5.3、2.5.4、2.5.5、3.0、3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0 でフルサポート

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

SLES 8 (SUSE Linux Enterprise Server 8) は、標準の SUSE ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。ここでは、標準のディストリビューション CD を使用したインストールの手順を説明します。ただし、起動フロッピーまたはネットワークから SLES 8 をインストールすることもできます。ご使用の VMware 製品で PXE サーバがサポートされている場合は、PXE サーバからインストールすることもできます。

オペレーティングシステムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

注意	VMware 仮想マシンで BusLogic 仮想 SCSI アダプタを使用した際、Linux ゲスト OS の多くでさまざまな問題が発生しています。ESX Server 2.5.x を使用している場合を除き、このゲスト OS では、LSI Logic 仮想 SCSI アダプタを使用することをお勧めします。
-----------	--

注意	VMware VirtualCenter または vCenter Server を使用してゲスト OS をインストールする場合は、その仮想マシンを実行する VMware 製品 (ESX Server または VMware Server) で該当するゲスト OS がサポートされていることを確認してください。
-----------	---

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに SLES 8 インストール CD を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、SLES 8 のインストールを開始します。
- 3 次の手順で説明している選択画面が表示されるまで、物理マシンの場合と同じように、画面の指示に従ってインストールを実行します。
- 4 インストールの途中でインストーラが仮想マシンを再起動します。[LILO] 画面で、デフォルト値の `linux` を使用して起動処理を続行します。
- 5 [Desktop Settings] 画面で、[640x480 256 colors] を選択します。
- 6 SLES 8 の残りのインストール手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。

これでゲスト OS としての SLES 8 の基本インストールが完了です。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

IPv6

多くの Linux ディストリビューションでは、VMware Tools のインストール後に IPv6 が有効になっていると、VMware Tools を `vmware-config-tools.pl` で構成することができません。この場合、VMware Tools は該当する仮想マシン向けにネットワーク デバイスを正しく設定することができず、次のようなメッセージが表示されます。

```
Unloading pcnet32 module
unregister_netdevice: waiting for eth0 to become free
```

このメッセージは、仮想マシンを再起動するまで連続して繰り返し表示されます。Linux を実行する仮想マシンでこの問題を防ぐには、VMware Tools をインストールする前に IPv6 を無効にしておきます。

注意	VMware ESX 4.0 以降のリリースでは IPv6 がサポートされています。VMware Tools のインストール前に IPv6 を無効にする必要はありません。
-----------	---

Linux を実行する仮想マシンで IPv6 を無効にするには

- 1 /etc/sysconfig/network ファイルに NETWORKING_IPV6=yes という行が含まれている場合は、この行を次のように変更します。

```
NETWORKING_IPV6=no
```

- 2 /etc/modules.conf ファイルに、次の行を追加します。

```
alias ipv6 off
alias net-pf-10 off
```

IPv6 を無効にすると、VMware Tools を正常にインストールし、構成できます。

既知の問題

ESX Server 仮想マシンでの PAE の無効化

ESX Server 2.5.x : ESX Server 2.5.x 仮想マシンは物理アドレス拡張 (PAE) をサポートしていますが、この機能用にパフォーマンスが最適化されているわけではありません。このため、PAE 機能が有効になっているゲスト OS では、パフォーマンスが低下する可能性があります。最高のパフォーマンスを実現するには、ゲスト OS で PAE を無効にすることをお勧めします。PAE の無効化の詳細および手順は、ナレッジベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/2020>) を参照してください。

ESX Server 3.x : PAE を無効にすると、最近の AMD および Intel プロセッサが提供する NX (No Execute) 機能および ED (Execute Disabled) 機能も無効になります。これらの機能は、ESX Server 3.x より前のバージョンの ESX Server ではサポートされていません。

適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更

このゲスト OS のデフォルトのタイムキーピング構成では、問題が発生する可能性があります。Linux でのタイムキーピングのベスト プラクティスについては、ナレッジベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/1006427>) を参照してください。

ゲストのスクリーンセーバー

VMware Workstation または VMware GSX Server : XFree86 3.x X サーバを稼動する Linux ホストでは、ゲスト OS でのスクリーンセーバーの使用は避けてください。ゲストでスクリーンセーバーを使用すると、大量の処理能力が必要なため、ホストの X サーバがフリーズする可能性があります。

異なるプロセッサへの移行

Linux 仮想マシンを AMD プロセッサ上で稼働するホストと Intel プロセッサ上で稼働するホストとの間で移行することはお勧めしません。

Linux ディストリビューションの多くは、インストール時に、インストール先の特定プロセッサに最も適したカーネルを選択します。また、一部のディストリビューションは、デフォルトで GENERIC カーネルをインストールしますが、ユーザーが選択してインストールできるアーキテクチャ固有のカーネルも提供しています。このようなカーネルには、そのプロセッサでのみ利用できる命令が含まれている場合があります。異なる種類のプロセッサを使用するホストでこれらの命令を実行すると、悪影響が生じる可能性があります。

このため、AMD プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンは、Intel プロセッサを使用するホストに移行しても動作しないことがあります。逆に、Intel プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンを AMD プロセッサを使用するホストに移行しても動作しない場合があります。

これは仮想マシンに限られたものではなく、物理コンピュータでも発生する問題です。たとえば、Linux がインストールされたハード ドライブを AMD マシンから Intel マシンに移動した場合、そのドライブから起動しようとすると問題が発生します。

SUSE Linux Enterprise Server 7

このセクションでは、SUSE Linux Enterprise Server 7 オペレーティングシステムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について記述しています。

32 ビット版

32 ビット版の SUSE Linux Enterprise Server 7 は、次の VMware 製品でサポートされています。

■ VMware Workstation

SUSE Linux Enterprise Server 7 : Workstation 4.0、4.0.1、4.0.2、4.0.5、4.5、4.5.1、4.5.2、4.5.3、5.0、5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

- SMP : Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way を試験的にサポート

■ VMware ACE

SUSE Linux Enterprise Server 7 : ACE 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

アップデート版のサポート

- Service Pack 2 : ACE 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

■ VMware GSX Server

SUSE Linux Enterprise Server 7 : GSX Server 3.0、3.1、3.2、3.2.1

アップデート版のサポート

- Service Pack 2 : GSX Server 3.2、3.2.1

■ VMware Server

SUSE Linux Enterprise Server 7 : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9

その他のサポート

- SMP : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9 で 2 way を試験的にサポート

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

SLES 7 (SUSE Linux Enterprise Server 7) は、標準の SUSE ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。ここでは、標準のディストリビューション CD を使用したインストールの手順を説明します。ただし、起動フロッピーまたはネットワークから SLES 7 をインストールすることもできます。ご使用の VMware 製品で PXE サーバがサポートされている場合は、PXE サーバからインストールすることもできます。

オペレーティングシステムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

注意	SLES 7 をインストールすると、標準の 16 色 VGA の X サーバがインストールされます。仮想マシン内でアクセラレータ機能付き SVGA X サーバを実行するには、SLES 7 のインストール完了後、ただちに VMware Tools パッケージをインストールします。
-----------	---

注意	VMware VirtualCenter または vCenter Server を使用してゲスト OS をインストールする場合は、その仮想マシンを実行する VMware 製品 (ESX Server または VMware Server) で該当するゲスト OS がサポートされていることを確認してください。
-----------	---

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに SLES 7 インストール CD を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、SLES 7 のインストールを開始します。
- 3 次の手順で説明している選択画面が表示されるまで、物理マシンの場合と同じように、画面の指示に従ってインストールを実行します。
- 4 インストールの途中でインストーラが仮想マシンを再起動します。[LILO] 画面で、デフォルト値の linux を使用して起動処理を続行します。
- 5 [Desktop Settings] 画面で、[640x480 256 colors] を選択します。
- 6 SLES 7 の残りのインストール手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。

これでゲスト OS としての SLES 7 の基本インストールが完了です。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

多くの Linux ディストリビューションでは、VMware Tools のインストール後に IPv6 が有効になっていると、VMware Tools を **vmware-config-tools.pl** で構成することができません。この場合、VMware Tools は該当する仮想マシン向けにネットワーク デバイスを正しく設定することができず、次のようなメッセージが表示されます。

```
Unloading pcnet32 module
unregister_netdevice: waiting for eth0 to become free
```

このメッセージは、仮想マシンを再起動するまで連続して繰り返し表示されます。Linux を実行する仮想マシンでこの問題を防ぐには、VMware Tools をインストールする前に IPv6 を無効にしておきます。

Linux を実行する仮想マシンで IPv6 を無効にするには

- 1 `/etc/sysconfig/network` ファイルに `NETWORKING_IPV6=yes` という行が含まれている場合は、この行を次のように変更します。

```
NETWORKING_IPV6=no
```

- 2 `/etc/modules.conf` ファイルに、次の行を追加します。

```
alias ipv6 off
alias net-pf-10 off
```

IPv6 を無効にすると、VMware Tools を正常にインストールし、構成できます。

既知の問題

適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更

このゲスト OS のデフォルトのタイムキーピング構成では、問題が発生する可能性があります。Linux でのタイムキーピングのベスト プラクティスについては、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/1006427>) を参照してください。

ゲストのスクリーンセーバー

XFree86 3.x X サーバを稼動する Linux ホストでは、ゲスト OS でのスクリーンセーバーの使用は避けてください。ゲストでスクリーンセーバーを使用すると、大量の処理能力が必要なため、ホストの X サーバがフリーズする可能性があります。

異なるプロセッサへの移行

Linux 仮想マシンを AMD プロセッサ上で稼働するホストと Intel プロセッサ上で稼働するホストとの間で移行することはお勧めしません。

Linux ディストリビューションの多くは、インストール時に、インストール先の特定のプロセッサに適したカーネルを選択します。また、一部のディストリビューションは、デフォルトで GENERIC カーネルをインストールしますが、ユーザーが選択してインストールできるアーキテクチャ固有のカーネルも提供しています。このようなカーネルには、そのプロセッサでのみ利用できる命令が含まれている場合があります。異なる種類のプロセッサを使用するホストでこれらの命令を実行すると、悪影響が生じる可能性があります。

このため、AMD プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンは、Intel プロセッサを使用するホストに移行しても動作しないことがあります。逆に、Intel プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンを AMD プロセッサを使用するホストに移行しても動作しない場合があります。

これは仮想マシンに限られたものではなく、物理コンピュータでも発生する問題です。たとえば、Linux がインストールされたハード ドライブを AMD マシンから Intel マシンに移動した場合、そのドライブから起動しようとすると問題が発生します。

Open SUSE Linux 11.1

このセクションでは、Open SUSE Linux 11.1 オペレーティングシステムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について記述しています。

32 ビット版

32 ビット版の Open SUSE Linux 11.1 は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware Workstation**

Open SUSE Linux 11.1 : Workstation 6.5.2

その他のサポート

- **SMP** : Workstation 6.5.2 で 2 way を試験的にサポート

64 ビット版

64 ビット版の Open SUSE Linux 11.1 は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware Workstation**

Open SUSE Linux 11.1 : Workstation 6.5.2

その他のサポート

- **SMP** : Workstation 6.5.2 で 2 way を試験的にサポート

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

Open SUSE Linux 11.1 は、標準の SUSE Linux ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。ここでは、標準のディストリビューション CD を使用したインストールの手順を説明します。ただし、起動フロッピーまたはネットワークから Open SUSE Linux 11.1 をインストールすることもできます。ご使用の VMware 製品で PXE サーバがサポートされている場合は、PXE サーバからインストールすることもできます。

オペレーティングシステムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

注意 VMware 仮想マシンで BusLogic 仮想 SCSI アダプタを使用した際、Linux ゲスト OS の多くでさまざまな問題が発生しています。このゲスト OS では、LSI Logic 仮想 SCSI アダプタを使用することをお勧めします。

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに Open SUSE Linux 11.1 インストール CD を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、Open SUSE Linux 11.1 のインストールを開始します。
- 3 テキスト モードのインストーラを使用してインストールします。テキスト モードのインストーラを選択するには、最初のインストール画面で、<F3> キーを押して起動オプションを表示します。次に、<F3> キーを再度押してからカーソルキーを使用して [テキスト モード] を選択し、<Enter> キーを押します。
- 4 VMware Tools のインストーラが SUSE Linux 11 向けのモジュールをコンパイルできるように、gcc とカーネル ソースを必ずインストールします。

[Installation Settings] 画面で、[Change] を選択してから [Software] を選択します。次に、[Filter] メニューから [RPM Groups] を選択します。[Development] グループを選択し、<Enter> キーを押すとリストが表示されます。[gcc]、[gcc-c++]、および [kernel-source] をリストで反転表示させてからスペースバーを押してこれらの項目を追加します。
- 5 最終構成プロセスで、すべてのパッケージがインストールされたあと [Test Internet Connection] 画面が表示されますが、ここではインターネット接続テストは実行しないでください。
- 6 残りの手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。

これでゲスト OS としての Open SUSE Linux 11.1 の基本インストールが完了です。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

注意 初期 X ディスプレイが使用できない場合は、「[Linux ゲスト OS への VMware Tools のインストール](#) (P.65)」の手順に従って、テキストモードのコンソールから VMware Tools をインストールする必要があります。

多くの Linux ディストリビューションでは、VMware Tools のインストール後に IPv6 が有効になっていると、VMware Tools を **vmware-config-tools.pl** で構成することができません。この場合、VMware Tools は該当する仮想マシン向けにネットワーク デバイスを正しく設定することができず、次のようなメッセージが表示されます。

```
Unloading pcnet32 module
unregister_netdevice: waiting for eth0 to become free
```

このメッセージは、仮想マシンを再起動するまで連続して繰り返し表示されます。Linux を実行する仮想マシンでこの問題を防ぐには、VMware Tools をインストールする前に IPv6 を無効にしておきます。

Linux を実行する仮想マシンで IPv6 を無効にするには

- 1 `/etc/sysconfig/network` ファイルに `NETWORKING_IPV6=yes` という行が含まれている場合は、この行を次のように変更します。

```
NETWORKING_IPV6=no
```

- 2 `/etc/modules.conf` ファイルに、次の行を追加します。

```
alias ipv6 off
alias net-pf-10 off
```

IPv6 を無効にすると、VMware Tools を正常にインストールし、構成できます。

OpenSUSE 11.1 に含まれる Open VMware Tools をアンインストールするには

OpenSUSE 11.1 オペレーティングシステムには Open VMware Tools (`open-vm-tools`) が含まれています。Open SUSE 11.1 をインストールすると、Open VMware Tools もインストールされます。Workstation 6.5.2 に付属の、最新バージョンの VMware Tools をインストールして使用するには、最初に `open-vm-tools` をアンインストールする必要があります。

事前インストールされている open-vm-tools を探すには

- 1 X ターミナルで、root (`su`) ユーザーで次のコマンドを実行します。

```
rpm -qa | grep vm
```

open-vm-tools をアンインストールするには

- 1 X ターミナルで、root (`su`) ユーザーで次のコマンドをこの順番で実行します。

```
rpm -e open-vm-tools-gui-2008.09.03-5.45
rpm -e open-vm-tools-2008.09.03-5.45
rpm -e vmware-kmp-default-2008.09.03_2.6.27.7_9.1-5.45
```

- 2 OpenSUSE 11.1 ゲストを再起動します。
- 3 Workstation 6.5.2 に付属の VMware Tools をインストールします。

既知の問題

コピーした仮想マシンでネットワークを利用する際に必要な手動の変更

コピーまたはクローン作成した仮想マシン、あるいは VMware ACE パッケージの一部としてエンド ユーザーにデプロイされた仮想マシンでは、ネットワークが正常に動作しない場合があります。仮想マシンをコピーする際に、そのコピーに独自の識別子を割り当てると、その仮想マシンに接続されている仮想イーサネット アダプタ用の MAC アドレスが変更されます。Open SUSE Linux 11.1 ゲスト OS は、インストール時に、主要構成ファイル名の一部として MAC アドレスを使用します。このため、仮想マシンの MAC アドレスが変更されると、ゲスト OS が仮想イーサネット アダプタにその構成ファイルに関連付けることができない可能性があります。この問題が発生した場合、ファイルをコピーするか、ファイル名を変更して回避することができます。たとえば、**eth0** の場合、次のような変更を行います。

元のファイル名

```
/etc/sysconfig/network/ifcfg-eth0-id-<MAC アドレス>
```

新しいファイル名

```
/etc/sysconfig/network/ifcfg-eth0
```

TSC クロックソースを使用して Linux が稼動している SMP 仮想マシンでの応答の停止またはストール

このゲスト OS では、仮想マシンでの応答停止またはストールの原因となる TSC クロックソースの問題が発生する可能性があります。詳細は、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/1007020>) を参照してください。

適切なタイムキープング動作に必要な構成の変更

このゲスト OS のデフォルトのタイムキープング構成では、問題が発生する可能性があります。Linux でのタイムキープングのベスト プラクティスについては、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/1006427>) を参照してください。

異なるプロセッサへの移行

Linux 仮想マシンを AMD プロセッサ上で稼働するホストと Intel プロセッサ上で稼働するホストとの間で移行することはお勧めしません。

Linux ディストリビューションの多くは、インストール時に、インストール先の特定のプロセッサに適したカーネルを選択します。また、一部のディストリビューションは、デフォルトで GENERIC カーネルをインストールしますが、ユーザーが選択してインストールできるアーキテクチャ固有のカーネルも提供しています。このようなカーネルには、そのプロセッサでのみ利用できる命令が含まれている場合があります。異なる種類のプロセッサを使用するホストでこれらの命令を実行すると、悪影響が生じる可能性があります。

このため、AMD プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンは、Intel プロセッサを使用するホストに移行しても動作しないことがあります。逆に、Intel プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンを AMD プロセッサを使用するホストに移行しても動作しない場合があります。

これは仮想マシンに限られたものではなく、物理コンピュータでも発生する問題です。たとえば、Linux がインストールされたハード ドライブを AMD マシンから Intel マシンに移動した場合、そのドライブから起動しようとすると問題が発生します。

Open SUSE Linux 10.3

このセクションでは、Open SUSE Linux 10.3 オペレーティングシステムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について記述しています。

32 ビット版

32 ビット版の Open SUSE Linux 10.3 は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware Workstation**

Open SUSE Linux 10.3 : Workstation 6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

- **SMP** : Workstation 6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way を試験的にサポート

- **VMware ACE**

Open SUSE Linux 10.3 : ACE 2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

64 ビット版

64 ビット版の Open SUSE Linux 10.3 は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware Workstation**

Open SUSE Linux 10.3 : Workstation 6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

- **SMP** : Workstation 6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way を試験的にサポート

- **VMware ACE**

Open SUSE Linux 10.3 : ACE 2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

Open SUSE Linux 10.3 は、標準の SUSE Linux ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。ここでは、標準のディストリビューション CD を使用したインストールの手順を説明します。ただし、起動フロッピーまたはネットワークから Open SUSE Linux 10.3 をインストールすることもできます。ご使用の VMware 製品で PXE サーバがサポートされている場合は、PXE サーバからインストールすることもできます。

オペレーティングシステムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

注意 VMware 仮想マシンで BusLogic 仮想 SCSI アダプタを使用した際、Linux ゲスト OS の多くでさまざまな問題が発生しています。このゲスト OS では、LSI Logic 仮想 SCSI アダプタを使用することをお勧めします。

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに Open SUSE Linux 10.3 インストール CD を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、Open SUSE Linux 10.3 のインストールを開始します。
- 3 テキスト モードのインストーラを使用してインストールします。テキスト モードのインストーラを選択するには、最初のインストール画面で、<F3> キーを押して起動オプションを表示します。次に、<F3> キーを再度押してからカーソルキーを使用して [テキスト モード] を選択し、<Enter> キーを押します。
- 4 VMware Tools のインストーラが SUSE Linux 10 向けのモジュールをコンパイルできるように、gcc とカーネルソースを必ずインストールします。

[Installation Settings] 画面で、[Change] を選択してから [Software] を選択します。次に、[Filter] メニューから [RPM Groups] を選択します。[Development] グループを選択し、<Enter> キーを押すとリストが表示されます。[gcc]、[gcc-c++]、および [kernel-source] をリストで反転表示させてからスペースバーを押してこれらの項目を追加します。
- 5 最終構成プロセスで、すべてのパッケージがインストールされたあと [Test Internet Connection] 画面が表示されますが、ここではインターネット接続テストは実行しないでください。

6 残りの手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。

これでゲスト OS としての Open SUSE Linux 10.3 の基本インストールが完了です。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

注意 初期 X ディスプレイが使用できない場合は、「[Linux ゲスト OS への VMware Tools のインストール](#) (P.65)」の手順に従って、テキストモードのコンソールから VMware Tools をインストールする必要があります。

多くの Linux ディストリビューションでは、VMware Tools のインストール後に IPv6 が有効になっていると、VMware Tools を `vmware-config-tools.pl` で構成することができません。この場合、VMware Tools は該当する仮想マシン向けにネットワーク デバイスを正しく設定することができず、次のようなメッセージが表示されます。

```
Unloading pcnet32 module
unregister_netdevice: waiting for eth0 to become free
```

このメッセージは、仮想マシンを再起動するまで連続して繰り返し表示されます。Linux を実行する仮想マシンでこの問題を防ぐには、VMware Tools をインストールする前に IPv6 を無効にしておきます。

Linux を実行する仮想マシンで IPv6 を無効にするには

- 1 `/etc/sysconfig/network` ファイルに `NETWORKING_IPV6=yes` という行が含まれている場合は、この行を次のように変更します。

```
NETWORKING_IPV6=no
```

- 2 `/etc/modules.conf` ファイルに、次の行を追加します。

```
alias ipv6 off
alias net-pf-10 off
```

IPv6 を無効にすると、VMware Tools を正常にインストールし、構成できます。

既知の問題

コピーした仮想マシンでネットワークを利用する際に必要な変更

コピーまたはクローン作成した仮想マシン、あるいは VMware ACE パッケージの一部としてエンド ユーザーにデプロイされた仮想マシンでは、ネットワークが正常に動作しない場合があります。仮想マシンをコピーする際に、そのコピーに独自の識別子を割り当てると、その仮想マシンに接続されている仮想イーサネット アダプタ用の MAC アドレスが変更されます。Open SUSE Linux 10.3 ゲスト OS は、インストール時に、主要構成ファイル名の一部として MAC アドレスを使用します。このため、仮想マシンの MAC アドレスが変更されると、ゲスト OS が仮想イーサネット アダプタにその構成ファイルに関連付けることができない可能性があります。この問題が発生した場合、ファイルをコピーするか、ファイル名を変更して回避することができます。たとえば、**eth0** の場合、次のような変更を行います。

元のファイル名

`/etc/sysconfig/network/ifcfg-eth0-id-<MAC アドレス>`

新しいファイル名

`/etc/sysconfig/network/ifcfg-eth0`

TSC クロックソースを使用して Linux が稼動している SMP 仮想マシンでの応答の停止またはストール

このゲスト OS では、仮想マシンでの応答停止またはストールの原因となる TSC クロックソースの問題が発生する可能性があります。詳細は、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/1007020>) を参照してください。

適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更

このゲスト OS のデフォルトのタイムキーピング構成では、問題が発生する可能性があります。Linux でのタイムキーピングのベスト プラクティスについては、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/1006427>) を参照してください。

異なるプロセッサへの移行

Linux 仮想マシンを AMD プロセッサ上で稼働するホストと Intel プロセッサ上で稼働するホストとの間で移行することはお勧めしません。

Linux ディストリビューションの多くは、インストール時に、インストール先の特定のプロセッサに適したカーネルを選択します。また、一部のディストリビューションは、デフォルトで GENERIC カーネルをインストールしますが、ユーザーが選択してインストールできるアーキテクチャ固有のカーネルも提供しています。このようなカーネルには、そのプロセッサでのみ利用できる命令が含まれている場合があります。異なる種類のプロセッサを使用するホストでこれらの命令を実行すると、悪影響が生じる可能性があります。

このため、AMD プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンは、Intel プロセッサを使用するホストに移行しても動作しないことがあります。逆に、Intel プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンを AMD プロセッサを使用するホストに移行しても動作しない場合があります。

これは仮想マシンに限られたものではなく、物理コンピュータでも発生する問題です。たとえば、Linux がインストールされたハード ドライブを AMD マシンから Intel マシンに移動した場合、そのドライブから起動しようとすると問題が発生します。

Open SUSE Linux 10.2

このセクションでは、Open SUSE Linux 10.2 オペレーティングシステムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について記述しています。

32 ビット版

32 ビット版の SCO OpenServer 5 は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware Workstation** : 試験的サポートのみ

Open SUSE Linux 10.2 : Workstation 6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

- **SMP** : Workstation 6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way をサポート

- **VMware ACE** : 試験的サポートのみ

Open SUSE Linux 10.2 : ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

- **VMware Server**

Open SUSE Linux 10.2 : VMware Server 2.0、2.0.1

その他のサポート

- **SMP** : VMware Server 2.0、2.0.1 で 2 way をサポート

64 ビット版

64 ビット版の Open SUSE Linux Server 10.2 は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware Workstation** : 試験的サポートのみ

Open SUSE Linux 10.2 : Workstation 6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

- **SMP** : Workstation 6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way をサポート

■ **VMware ACE**：試験的サポートのみ

Open SUSE Linux 10.2：ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

■ **VMware Server**

Open SUSE Linux 10.2：VMware Server 2.0、2.0.1

その他のサポート

- **SMP**：VMware Server 2.0、2.0.1 で 2 way をサポート

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

Open SUSE Linux 10.2 は、標準の SUSE Linux ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。ここでは、標準のディストリビューション CD を使用したインストールの手順を説明します。ただし、起動フロッピーまたはネットワークから Open SUSE Linux 10.2 をインストールすることもできます。ご使用の VMware 製品で PXE サーバがサポートされている場合は、PXE サーバからインストールすることもできます。

オペレーティング システムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

注意	VMware 仮想マシンで BusLogic 仮想 SCSI アダプタを使用した際、Linux ゲスト OS の多くでさまざまな問題が発生しています。このゲスト OS では、LSI Logic 仮想 SCSI アダプタを使用することをお勧めします。
-----------	--

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに Open SUSE Linux 10.2 インストール CD を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、Open SUSE Linux 10.2 のインストールを開始します。
- 3 テキスト モードのインストーラを使用してインストールします。テキスト モードのインストーラを選択するには、最初のインストール画面で、<F3> キーを押して起動オプションを表示します。次に、<F3> キーを再度押してからカーソルキーを使用して [テキスト モード] を選択し、<Enter> キーを押します。

- 4 VMware Tools のインストーラが SUSE Linux 10 向けのモジュールをコンパイルできるように、gcc とカーネル ソースを必ずインストールします。

[Installation Settings] 画面で、[Change] を選択してから [Software] を選択します。次に、[Filter] メニューから [RPM Groups] を選択します。[Development] グループを選択し、<Enter> キーを押すとリストが表示されます。[gcc]、[gcc-c++]、および [kernel-source] をリストで反転表示させてからスペースバーを押してこれらの項目を追加します。

- 5 最終構成プロセスで、すべてのパッケージがインストールされたあと [Test Internet Connection] 画面が表示されますが、ここではインターネット接続テストは実行しないでください。

- 6 残りの手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。

これでゲスト OS としての Open SUSE Linux 10.2 の基本インストールが完了です。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

注意 初期 X ディスプレイが使用できない場合は、「[Linux ゲスト OS への VMware Tools のインストール](#) (P.65)」の手順に従って、テキストモードのコンソールから VMware Tools をインストールする必要があります。

多くの Linux ディストリビューションでは、VMware Tools のインストール後に IPv6 が有効になっていると、VMware Tools を `vmware-config-tools.pl` で構成することができません。この場合、VMware Tools は該当する仮想マシン向けにネットワーク デバイスを正しく設定することができず、次のようなメッセージが表示されます。

```
Unloading pcnet32 module
unregister_netdevice: waiting for eth0 to become free
```

このメッセージは、仮想マシンを再起動するまで連続して繰り返し表示されます。Linux を実行する仮想マシンでこの問題を防ぐには、VMware Tools をインストールする前に IPv6 を無効にしておきます。

Linux を実行する仮想マシンで IPv6 を無効にするには

- 1 `/etc/sysconfig/network` ファイルに `NETWORKING_IPV6=yes` という行が含まれている場合は、この行を次のように変更します。

```
NETWORKING_IPV6=no
```

- 2 `/etc/modules.conf` ファイルに、次の行を追加します。

```
alias ipv6 off
alias net-pf-10 off
```

IPv6 を無効にすると、VMware Tools を正常にインストールし、構成できます。

既知の問題**コピーした仮想マシンでネットワークを利用する際に必要な手動の変更**

コピーまたはクローン作成した仮想マシン、あるいは VMware ACE パッケージの一部としてエンド ユーザーにデプロイされた仮想マシンでは、ネットワークが正常に動作しない場合があります。仮想マシンをコピーする際に、そのコピーに独自の識別子を割り当てると、その仮想マシンに接続されている仮想イーサネット アダプタ用の MAC アドレスが変更されます。Open SUSE Linux 10.2 ゲスト OS は、インストール時に、主要構成ファイル名の一部として MAC アドレスを使用します。このため、仮想マシンの MAC アドレスが変更されると、ゲスト OS が仮想イーサネット アダプタにその構成ファイルに関連付けることができない可能性があります。この問題が発生した場合、ファイルをコピーするか、ファイル名を変更して回避することができます。たとえば、`eth0` の場合、次のような変更を行います。

元のファイル名

```
/etc/sysconfig/network/ifcfg-eth0-id-<MAC アドレス>
```

新しいファイル名

```
/etc/sysconfig/network/ifcfg-eth0
```

TSC クロックソースを使用して Linux が稼動している SMP 仮想マシンでの応答の停止またはストール

このゲスト OS では、仮想マシンでの応答停止またはストールの原因となる TSC クロックソースの問題が発生する可能性があります。詳細は、ナレッジベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/1007020>) を参照してください。

適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更

このゲスト OS のデフォルトのタイムキーピング構成では、問題が発生する可能性があります。Linux でのタイムキーピングのベスト プラクティスについては、ナレッジベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/1006427>) を参照してください。

異なるプロセッサへの移行

Linux 仮想マシンを AMD プロセッサ上で稼働するホストと Intel プロセッサ上で稼働するホストとの間で移行することはお勧めしません。

Linux ディストリビューションの多くは、インストール時に、インストール先の特定のプロセッサに適したカーネルを選択します。また、一部のディストリビューションは、デフォルトで GENERIC カーネルをインストールしますが、ユーザーが選択してインストールできるアーキテクチャ固有のカーネルも提供しています。このようなカーネルには、そのプロセッサでのみ利用できる命令が含まれている場合があります。異なる種類のプロセッサを使用するホストでこれらの命令を実行すると、悪影響が生じる可能性があります。

このため、AMD プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンは、Intel プロセッサを使用するホストに移行しても動作しないことがあります。逆に、Intel プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンを AMD プロセッサを使用するホストに移行しても動作しない場合があります。

これは仮想マシンに限られたものではなく、物理コンピュータでも発生する問題です。たとえば、Linux がインストールされたハード ドライブを AMD マシンから Intel マシンに移動した場合、そのドライブから起動しようとする問題が発生します。

SUSE Linux 10.1

このセクションでは、SUSE Linux 10.1 オペレーティングシステムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について記述しています。

32 ビット版

32 ビット版の SUSE Linux 10.1 は、次の VMware 製品でサポートされています。

■ VMware Workstation

SUSE Linux 10.1 : Workstation 5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

- SMP : Workstation 5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way を試験的にサポート

■ VMware ACE

SUSE Linux 10.1 : ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

■ VMware Server

SUSE Linux 10.1 : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9、2.0、2.0.1

その他のサポート

- SMP : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9、2.0、2.0.1 で 2 way を試験的にサポート

■ VMware Fusion

SUSE Linux 10.1 : Fusion 1.0、1.1、1.1.1、1.1.2、1.1.3、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

64 ビット版

64 ビット版の SUSE Linux 10.1 は、次の VMware 製品でサポートされています。

■ VMware Workstation

SUSE Linux 10.1 : Workstation 5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

- SMP : Workstation 5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way を試験的にサポート

■ VMware ACE

SUSE Linux 10.1 : ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

■ VMware Server

SUSE Linux 10.1 : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9、2.0、2.0.1

その他のサポート

- SMP : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9、2.0、2.0.1 で 2 way を試験的にサポート

■ VMware Fusion

SUSE Linux 10.1 : Fusion 1.0、1.1、1.1.1、1.1.2、1.1.3、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

SUSE Linux 10.1 は、標準の SUSE Linux ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。ここでは、標準のディストリビューション CD を使用したインストールの手順を説明します。ただし、起動フロッピーまたはネットワークから SUSE Linux 10.1 をインストールすることもできます。ご使用の VMware 製品で PXE サーバがサポートされている場合は、PXE サーバからインストールすることもできます。

オペレーティング システムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

注意 VMware 仮想マシンで BusLogic 仮想 SCSI アダプタを使用した際、Linux ゲスト OS の多くでさまざまな問題が発生しています。このゲスト OS では、LSI Logic 仮想 SCSI アダプタを使用することをお勧めします。

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに SUSE Linux 10.1 インストール CD を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、SUSE Linux 10.1 のインストールを開始します。
- 3 テキスト モードのインストーラを使用してインストールします。テキスト モードのインストーラを選択するには、最初のインストール画面で、<F3> キーを押して起動オプションを表示します。次に、<F3> キーを再度押してからカーソルキーを使用して [テキスト モード] を選択し、<Enter> キーを押します。
- 4 VMware Tools のインストーラが SUSE Linux 10 向けのモジュールをコンパイルできるように、gcc とカーネル ソースを必ずインストールします。

[Installation Settings] 画面で、[Change] を選択してから [Software] を選択します。次に、[Filter] メニューから [RPM Groups] を選択します。[Development] グループを選択し、<Enter> キーを押すとリストが表示されます。[gcc]、[gcc-c++]、および [kernel-source] をリストで反転表示させてからスペースバーを押してこれらの項目を追加します。
- 5 最終構成プロセスで、すべてのパッケージがインストールされたあと [Test Internet Connection] 画面が表示されますが、ここではインターネット接続テストは実行しないでください。
- 6 残りの手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。

これでゲスト OS としての SUSE Linux 10.1 の基本インストールが完了です。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

注意 初期 X ディスプレイが使用できない場合は、「[Linux ゲスト OS への VMware Tools のインストール](#) (P.65)」の手順に従って、テキストモードのコンソールから VMware Tools をインストールする必要があります。

多くの Linux ディストリビューションでは、VMware Tools のインストール後に IPv6 が有効になっていると、VMware Tools を **vmware-config-tools.pl** で構成することができません。この場合、VMware Tools は該当する仮想マシン向けにネットワーク デバイスを正しく設定することができず、次のようなメッセージが表示されます。

```
Unloading pcnet32 module
unregister_netdevice: waiting for eth0 to become free
```

このメッセージは、仮想マシンを再起動するまで連続して繰り返し表示されます。Linux を実行する仮想マシンでこの問題を防ぐには、VMware Tools をインストールする前に IPv6 を無効にしておきます。

Linux を実行する仮想マシンで IPv6 を無効にするには

- 1 `/etc/sysconfig/network` ファイルに `NETWORKING_IPV6=yes` という行が含まれている場合は、この行を次のように変更します。

```
NETWORKING_IPV6=no
```

- 2 `/etc/modules.conf` ファイルに、次の行を追加します。

```
alias ipv6 off
alias net-pf-10 off
```

IPv6 を無効にすると、VMware Tools を正常にインストールし、構成できます。

既知の問題

コピーした仮想マシンでネットワークを利用する際に必要な変更

コピーまたはクローン作成した仮想マシン、あるいは VMware ACE パッケージの一部としてエンド ユーザーにデプロイされた仮想マシンでは、ネットワークが正常に動作しない場合があります。仮想マシンをコピーする際に、そのコピーに独自の識別子を割り当てると、その仮想マシンに接続されている仮想イーサネット アダプタ用の MAC アドレスが変更されます。SUSE Linux 10.1 ゲスト OS は、インストール時に、主要構成ファイル名の一部として MAC アドレスを使用します。このため、仮想マシンの MAC アドレスが変更されると、ゲスト OS が仮想イーサネット アダプタにその構成ファイルを関連付けることができない可能性があります。この問題が発生した場合、ファイルをコピーするか、ファイル名を変更して回避することができます。たとえば、**eth0** の場合、次のような変更を行います。

元のファイル名

```
/etc/sysconfig/network/ifcfg-eth0-id-<MAC アドレス>
```

新しいファイル名

```
/etc/sysconfig/network/ifcfg-eth0
```


適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更

このゲスト OS のデフォルトのタイムキーピング構成では、問題が発生する可能性があります。Linux でのタイムキーピングのベスト プラクティスについては、ナレッジベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/1006427>) を参照してください。

異なるプロセッサへの移行

Linux 仮想マシンを AMD プロセッサ上で稼働するホストと Intel プロセッサ上で稼働するホストとの間で移行することはお勧めしません。

Linux ディストリビューションの多くは、インストール時に、インストール先の特定のプロセッサに適したカーネルを選択します。また、一部のディストリビューションは、デフォルトで GENERIC カーネルをインストールしますが、ユーザーが選択してインストールできるアーキテクチャ固有のカーネルも提供しています。このようなカーネルには、そのプロセッサでのみ利用できる命令が含まれている場合があります。異なる種類のプロセッサを使用するホストでこれらの命令を実行すると、悪影響が生じる可能性があります。

このため、AMD プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンは、Intel プロセッサを使用するホストに移行しても動作しないことがあります。逆に、Intel プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンを AMD プロセッサを使用するホストに移行しても動作しない場合があります。

これは仮想マシンに限られたものではなく、物理コンピュータでも発生する問題です。たとえば、Linux がインストールされたハード ドライブを AMD マシンから Intel マシンに移動した場合、そのドライブから起動しようとする問題が発生します。

SUSE Linux 10

このセクションでは、SUSE Linux 10 オペレーティングシステムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について記述しています。

32 ビット版

32 ビット版の SUSE Linux 10 は、次の VMware 製品でサポートされています。

■ VMware Workstation

SUSE Linux 10 : Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

■ SMP : Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way を試験的にサポート

■ SUSE Linux 10 での Eclipse 統合型仮想デバッガのサポート : Workstation 6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

■ VMware ACE

SUSE Linux 10 : ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

■ VMware Server

SUSE Linux 10 : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9、2.0、2.0.1

その他のサポート

■ SMP : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9、2.0、2.0.1 で 2 way を試験的にサポート

64 ビット版

64 ビット版の SUSE Linux 10 は、次の VMware 製品でサポートされています。

■ VMware Workstation

SUSE Linux 10 : Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

- **SMP :** Workstation 5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way を試験的にサポート
- **SUSE Linux 10 での Eclipse 統合型仮想デバッグのサポート :** Workstation 6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

■ VMware ACE

SUSE Linux 10 : ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

■ VMware Server

SUSE Linux 10 : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9、2.0、2.0.1

その他のサポート

- **SMP :** VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9、2.0、2.0.1 で 2 way を試験的にサポート

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

SUSE Linux 10 は、標準の SUSE Linux ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。ここでは、標準のディストリビューション CD を使用したインストールの手順を説明します。ただし、起動フロッピーまたはネットワークから SUSE Linux 10 をインストールすることもできます。ご使用の VMware 製品で PXE サーバがサポートされている場合は、PXE サーバからインストールすることもできます。

オペレーティングシステムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

注意 VMware 仮想マシンで BusLogic 仮想 SCSI アダプタを使用した際、Linux ゲスト OS の多くでさまざまな問題が発生しています。このゲスト OS では、LSI Logic 仮想 SCSI アダプタを使用することをお勧めします。

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに SUSE Linux 10 インストール CD を挿入します。
 - 2 仮想マシンをパワーオンして、SUSE Linux 10 のインストールを開始します。
 - 3 テキスト モードのインストーラを使用してインストールします。テキスト モードのインストーラを選択するには、最初のインストール画面で、<F3> キーを押して起動オプションを表示します。次に、<F3> キーを再度押してからカーソルキーを使用して [テキスト モード] を選択し、<Enter> キーを押します。
 - 4 VMware Tools のインストーラが SUSE Linux 10 向けのモジュールをコンパイルできるように、gcc とカーネルソースを必ずインストールします。

[Installation Settings] 画面で、[Change] を選択してから [Software] を選択します。次に、[Filter] メニューから [RPM Groups] を選択します。[Development] グループを選択し、<Enter> キーを押すとリストが表示されます。[gcc]、[gcc-c++]、および [kernel-source] をリストで反転表示させてからスペースバーを押してこれらの項目を追加します。
 - 5 最終構成プロセスで、すべてのパッケージがインストールされたあと [Test Internet Connection] 画面が表示されますが、ここではインターネット接続テストは実行しないでください。
 - 6 残りの手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。
- これでゲスト OS としての SUSE Linux 10 の基本インストールが完了です。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

注意 初期 X ディスプレイが使用できない場合は、「[Linux ゲスト OS への VMware Tools のインストール](#) (P.65)」の手順に従って、テキストモードのコンソールから VMware Tools をインストールする必要があります。

多くの Linux ディストリビューションでは、VMware Tools のインストール後に IPv6 が有効になっていると、VMware Tools を `vmware-config-tools.pl` で構成することができません。この場合、VMware Tools は該当する仮想マシン向けにネットワークデバイスを正しく設定することができず、次のようなメッセージが表示されます。

```
Unloading pcnet32 module
unregister_netdevice: waiting for eth0 to become free
```

このメッセージは、仮想マシンを再起動するまで連続して繰り返し表示されます。Linux を実行する仮想マシンでこの問題を防ぐには、VMware Tools をインストールする前に IPv6 を無効にしておきます。

Linux を実行する仮想マシンで IPv6 を無効にするには

- 1 `/etc/sysconfig/network` ファイルに `NETWORKING_IPV6=yes` という行が含まれている場合は、この行を次のように変更します。

```
NETWORKING_IPV6=no
```

- 2 `/etc/modules.conf` ファイルに、次の行を追加します。

```
alias ipv6 off
alias net-pf-10 off
```

IPv6 を無効にすると、VMware Tools を正常にインストールし、構成できます。

既知の問題

コピーした仮想マシンでネットワークを利用する際に必要な変更

コピーまたはクローン作成した仮想マシン、あるいは VMware ACE パッケージの一部としてエンド ユーザーにデプロイされた仮想マシンでは、ネットワークが正常に動作しない場合があります。仮想マシンをコピーする際に、そのコピーに独自の識別子を割り当てると、その仮想マシンに接続されている仮想イーサネット アダプタ用の MAC アドレスが変更されます。SUSE Linux 10 ゲスト OS は、インストール時に、主要構成ファイル名の一部として MAC アドレスを使用します。このため、仮想マシンの MAC アドレスが変更されると、ゲスト OS が仮想イーサネット アダプタにその構成ファイルを関連付けることができない可能性があります。この問題が発生した場合、ファイルをコピーするか、ファイル名を変更して回避することができます。たとえば、`eth0` の場合、次のような変更を行います。

元のファイル名

```
/etc/sysconfig/network/ifcfg-eth0-id-<MAC アドレス>
```

新しいファイル名

```
/etc/sysconfig/network/ifcfg-eth0
```

適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更

このゲスト OS のデフォルトのタイムキーピング構成では、問題が発生する可能性があります。Linux でのタイムキーピングのベスト プラクティスについては、ナレッジベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/1006427>) を参照してください。

異なるプロセッサへの移行

Linux 仮想マシンを AMD プロセッサ上で稼働するホストと Intel プロセッサ上で稼働するホストとの間で移行することはお勧めしません。

Linux ディストリビューションの多くは、インストール時に、インストール先の特定のプロセッサに適したカーネルを選択します。また、一部のディストリビューションは、デフォルトで GENERIC カーネルをインストールしますが、ユーザーが選択してインストールできるアーキテクチャ固有のカーネルも提供しています。このようなカーネルには、そのプロセッサでのみ利用できる命令が含まれている場合があります。異なる種類のプロセッサを使用するホストでこれらの命令を実行すると、悪影響が生じる可能性があります。

このため、AMD プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンは、Intel プロセッサを使用するホストに移行しても動作しないことがあります。逆に、Intel プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンを AMD プロセッサを使用するホストに移行しても動作しない場合があります。

これは仮想マシンに限られたものではなく、物理コンピュータでも発生する問題です。たとえば、Linux がインストールされたハード ドライブを AMD マシンから Intel マシンに移動した場合、そのドライブから起動しようとする問題が発生します。

SUSE Linux 9.3

このセクションでは、SUSE Linux 9.3 オペレーティングシステムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について記述しています。

32 ビット版

32 ビット版の SUSE Linux 9.3 は、次の VMware 製品でサポートされています。

■ VMware Workstation

SUSE Linux 9.3 : Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

- SMP : Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way を試験的にサポート

■ VMware ACE

SUSE Linux 9.3 : ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

■ VMware Server

SUSE Linux 9.3 : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9、2.0、2.0.1

その他のサポート

- SMP : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9、2.0、2.0.1 で 2 way を試験的にサポート

■ VMware ESX Server

SUSE Linux 9.3 : ESX 2.5.2、2.5.3、2.5.4、2.5.5

その他のサポート

- SMP : ESX 2.5.2、2.5.3、2.5.4、2.5.5 でフル サポート

サポートでの考慮事項

- ESX Server 2.5.x 上の SUSE Linux 9.3 仮想マシンでは、BusLogic 仮想 SCSI アダプタのみがサポートされています。

■ VMware Fusion

SUSE Linux 9.3 : Fusion 1.0、1.1、1.1.1、1.1.2、1.1.3、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

64 ビット版

64 ビット版の SUSE Linux 9.3 は、次の VMware 製品でサポートされています。

■ VMware Workstation

SUSE Linux 9.3 : Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

- **SMP** : Workstation 5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way を試験的にサポート

■ VMware ACE

SUSE Linux 9.3 : ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

■ VMware Server

SUSE Linux 9.3 : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9、2.0、2.0.1

その他のサポート

- **SMP** : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9、2.0、2.0.1 で 2 way を試験的にサポート

■ VMware Fusion

SUSE Linux 9.3 : Fusion 1.0、1.1、1.1.1、1.1.2、1.1.3、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

SUSE Linux 9.3 は、標準の SUSE Linux ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。ここでは、標準のディストリビューション CD を使用したインストールの手順を説明します。ただし、起動フロッピーまたはネットワークから SUSE Linux 9.3 をインストールすることもできます。ご使用の VMware 製品で PXE サーバがサポートされている場合は、PXE サーバからインストールすることもできます。

オペレーティング システムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

注意 VMware 仮想マシンで BusLogic 仮想 SCSI アダプタを使用した際、Linux ゲスト OS の多くでさまざまな問題が発生しています。このゲスト OS では、LSI Logic 仮想 SCSI アダプタを使用することをお勧めします。

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに SUSE Linux 9.3 インストール CD を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、SUSE Linux 9.3 のインストールを開始します。
- 3 テキスト モードのインストーラを使用してインストールします。テキスト モードのインストーラを選択するには、最初のインストール画面で、<F2> キーを押してからカーソル キーを使用して [テキスト モード] を選択し、<Enter> キーを押します。
- 4 最終構成プロセスで、すべてのパッケージがインストールされたあとのインターネット接続テストは実行しないでください。
- 5 残りの手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。
- 6 この仮想マシンをコピーまたは移動する場合は、「[コピーした仮想マシンでネットワークを利用する際に必要な変更](#) (P.438)」に記載されている変更を行います。

これでゲスト OS としての SUSE Linux 9.3 の基本インストールが完了です。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

IPv6

多くの Linux ディストリビューションでは、VMware Tools のインストール後に IPv6 が有効になっていると、VMware Tools を **vmware-config-tools.pl** で構成することができません。この場合、VMware Tools は該当する仮想マシン向けにネットワーク デバイスを正しく設定することができず、次のようなメッセージが表示されます。

```
Unloading pcnet32 module
unregister_netdevice: waiting for eth0 to become free
```

このメッセージは、仮想マシンを再起動するまで連続して繰り返し表示されます。Linux を実行する仮想マシンでこの問題を防ぐには、VMware Tools をインストールする前に IPv6 を無効にしておきます。

注意 VMware ESX 4.0 以降のリリースでは IPv6 がサポートされています。VMware Tools のインストール前に IPv6 を無効にする必要はありません。

Linux を実行する仮想マシンで IPv6 を無効にするには

- 1 `/etc/sysconfig/network` ファイルに `NETWORKING_IPV6=yes` という行が含まれている場合は、この行を次のように変更します。

```
NETWORKING_IPV6=no
```

- 2 `/etc/modules.conf` ファイルに、次の行を追加します。

```
alias ipv6 off
alias net-pf-10 off
```

IPv6 を無効にすると、VMware Tools を正常にインストールし、構成できます。

既知の問題

64 ビット ホストに SUSE Linux 9.3 をインストールする際のアーキテクチャの選択

SUSE Linux 9.3 オペレーティングシステムでは、32 ビットおよび 64 ビットの両方のアーキテクチャ用のカーネルが提供されています。64 ビットのホストに SUSE Linux 9.3 ゲスト OS をインストールする際に、<F6> キーを押して、ゲストのアーキテクチャを選択します。

32 ビットの仮想マシンをすでに作成し、32 ビット モードで SUSE Linux 9.3 をインストールする場合は、32 ビットのアーキテクチャを選択することが重要です。32 ビットを選択しないと、SUSE Linux 9.3 がホストのアーキテクチャ（この場合 64 ビット）を検出し、デフォルトでこれに対応するカーネルをインストールします。その結果、ゲスト OS が正常にインストールされず、仮想マシンに組み込まれた 32 ビット版の VMware Tools が機能しません。

問題を解決するには

- 1 仮想マシンを作成します。
- 2 仮想マシンをパワーオフし、仮想マシンのウィンドウを閉じてから、SUSE Linux 9.3 ゲストをインストールします。
- 3 仮想マシンの構成ファイル（`.vmx`）をテキスト エディタで開き、次の行を追加します。

```
monitor_control.disable_longmode=1
```

- 4 ファイルを保存します。

4 ビット カラーの使用不可

SUSE Linux 9.3 ゲスト OS の画面解像度を変更する場合、必ずカラー ビット深度も 16 色（4 ビット）より大きく設定します。16 色（4 ビット）の設定を使用すると、X サーバで致命的なエラーが発生する可能性があります。

コピーした仮想マシンでネットワークを利用する際に必要な変更

コピーまたはクローン作成した仮想マシン、あるいは VMware ACE パッケージの一部としてエンド ユーザーにデプロイされた仮想マシンでは、ネットワークが正常に動作しない場合があります。仮想マシンをコピーする際に、そのコピーに独自の識別子を割り当てると、その仮想マシンに接続されている仮想イーサネット アダプタ用の MAC アドレスが変更されます。SUSE Linux 9.3 ゲスト OS は、インストール時に、主要構成ファイル名の一部として MAC アドレスを使用します。このため、仮想マシンの MAC アドレスが変更されると、ゲスト OS が仮想イーサネット アダプタにその構成ファイルを関連付けることができない可能性があります。この問題が発生した場合、ファイルをコピーするか、ファイル名を変更して回避することができます。たとえば、**eth0** の場合、次のような変更を行います。

元のファイル名

`/etc/sysconfig/network/ifcfg-eth0-id-<MAC アドレス>`

新しいファイル名

`/etc/sysconfig/network/ifcfg-eth0`

ESX Server 仮想マシンでの PAE の無効化

ESX Server 2.5.x : ESX Server 2.5.x 仮想マシンは物理アドレス拡張（PAE）をサポートしていますが、この機能用にパフォーマンスが最適化されているわけではありません。このため、PAE 機能が有効になっているゲスト OS では、パフォーマンスが低下する可能性があります。最高のパフォーマンスを実現するには、ゲスト OS で PAE を無効にすることをお勧めします。PAE の無効化の詳細および手順は、ナレッジ ベースの記事（kb.vmware.com/kb/2020）を参照してください。

適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更

このゲスト OS のデフォルトのタイムキーピング構成では、問題が発生する可能性があります。Linux でのタイムキーピングのベスト プラクティスについては、ナレッジ ベースの記事（<http://kb.vmware.com/kb/1006427>）を参照してください。

ゲストのスクリーン セーバー

VMware Workstation : XFree86 3.x X サーバを稼働する Linux ホストでは、ゲスト OS でのスクリーン セーバーの使用は避けてください。ゲストでスクリーン セーバーを使用すると、大量の処理能力が必要なため、ホストの X サーバがフリーズする可能性があります。

異なるプロセッサへの移行

Linux 仮想マシンを AMD プロセッサ上で稼働するホストと Intel プロセッサ上で稼働するホストとの間で移行することはお勧めしません。

Linux ディストリビューションの多くは、インストール時に、インストール先の特定のプロセッサに適したカーネルを選択します。また、一部のディストリビューションは、デフォルトで GENERIC カーネルをインストールしますが、ユーザーが選択してインストールできるアーキテクチャ固有のカーネルも提供しています。このようなカーネルには、そのプロセッサでのみ利用できる命令が含まれている場合があります。異なる種類のプロセッサを使用するホストでこれらの命令を実行すると、悪影響が生じる可能性があります。

このため、AMD プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンは、Intel プロセッサを使用するホストに移行しても動作しないことがあります。逆に、Intel プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンを AMD プロセッサを使用するホストに移行しても動作しない場合があります。

これは仮想マシンに限られたものではなく、物理コンピュータでも発生する問題です。たとえば、Linux がインストールされたハード ドライブを AMD マシンから Intel マシンに移動した場合、そのドライブから起動しようとする問題が発生します。

SUSE Linux 9.2

このセクションでは、SUSE Linux 9.2 オペレーティングシステムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について記述しています。

32 ビット版

32 ビット版の SUSE Linux 9.2 は、次の VMware 製品でサポートされています。

■ VMware Workstation

SUSE Linux 9.2 : Workstation 5.0、5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

- **SMP** : Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way を試験的にサポート

■ VMware ACE

SUSE Linux 9.2 : ACE 1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

■ VMware GSX Server

SUSE Linux 9.2 : GSX Server 3.2、3.2.1

■ VMware Server

SUSE Linux 9.2 : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9、2.0、2.0.1

その他のサポート

- **SMP** : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9、2.0、2.0.1 で 2 way を試験的にサポート

■ VMware ESX Server

SUSE Linux 9.2 : ESX 2.5.1、2.5.2、2.5.3、2.5.4、2.5.5

サポートでの考慮事項

- ESX Server 2.5.x 上の SUSE Linux 9.2 仮想マシンでは、BusLogic 仮想 SCSI アダプタのみがサポートされています。

64 ビット版

64 ビット版の SUSE Linux 9.2 は、次の VMware 製品でサポートされています。

■ VMware Workstation

SUSE Linux 9.2 : Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

- SMP : Workstation 5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way を試験的にサポート

■ VMware ACE

SUSE Linux 9.2 : ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

■ VMware Server

SUSE Linux 9.2 : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9、2.0、2.0.1

その他のサポート

- SMP : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9、2.0、2.0.1 で 2 way を試験的にサポート

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

SUSE Linux 9.2 は、標準の SUSE Linux ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。ここでは、標準のディストリビューション CD を使用したインストールの手順を説明します。ただし、起動フロッピーまたはネットワークから SUSE Linux 9.2 をインストールすることもできます。ご使用の VMware 製品で PXE サーバがサポートされている場合は、PXE サーバからインストールすることもできます。

オペレーティング システムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

注意 VMware 仮想マシンで BusLogic 仮想 SCSI アダプタを使用した際、Linux ゲスト OS の多くでさまざまな問題が発生しています。ESX Server 2.5.x を使用している場合を除き、このゲスト OS では、LSI Logic 仮想 SCSI アダプタを使用することをお勧めします。

注意 VMware VirtualCenter または vCenter Server を使用してゲスト OS をインストールする場合は、その仮想マシンを実行する VMware 製品（ESX Server または VMware Server）で該当するゲスト OS がサポートされていることを確認してください。

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに SUSE Linux 9.2 インストール CD を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、SUSE Linux 9.2 のインストールを開始します。
- 3 テキスト モードのインストーラを使用してインストールします。テキスト モードのインストーラを選択するには、最初のインストール画面で、<F2> キーを押してからカーソル キーを使用して [テキスト モード] を選択し、<Enter> キーを押します。
- 4 最終構成プロセスで、すべてのパッケージがインストールされたあとのインターネット接続テストは実行しないでください。
- 5 残りの手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。
- 6 この仮想マシンをコピーまたは移動する場合は、「[コピーした仮想マシンでネットワークを利用する際に必要な変更](#)（P.427）」に記載されている変更を行います。

これでゲスト OS としての SUSE Linux 9.2 の基本インストールが完了です。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事（<http://kb.vmware.com/kb/340>）にある該当するリンク先の説明に従ってください。

IPv6

多くの Linux ディストリビューションでは、VMware Tools のインストール後に IPv6 が有効になっていると、VMware Tools を **vmware-config-tools.pl** で構成することができません。この場合、VMware Tools は該当する仮想マシン向けにネットワーク デバイスを正しく設定することができず、次のようなメッセージが表示されます。

```
Unloading pcnet32 module
unregister_netdevice: waiting for eth0 to become free
```

このメッセージは、仮想マシンを再起動するまで連続して繰り返し表示されます。Linux を実行する仮想マシンでこの問題を防ぐには、VMware Tools をインストールする前に IPv6 を無効にしておきます。

注意 VMware ESX 4.0 以降のリリースでは IPv6 がサポートされています。VMware Tools のインストール前に IPv6 を無効にする必要はありません。

Linux を実行する仮想マシンで IPv6 を無効にするには

- 1 `/etc/sysconfig/network` ファイルに `NETWORKING_IPV6=yes` という行が含まれている場合は、この行を次のように変更します。

```
NETWORKING_IPV6=no
```

- 2 `/etc/modules.conf` ファイルに、次の行を追加します。

```
alias ipv6 off
alias net-pf-10 off
```

IPv6 を無効にすると、VMware Tools を正常にインストールし、構成できます。

既知の問題

4 ビット カラーの使用不可

SUSE Linux 9.2 ゲスト OS の画面解像度を変更する場合、必ずカラー ビット深度も 16 色（4 ビット）より大きく設定します。16 色（4 ビット）の設定を使用すると、X サーバで致命的なエラーが発生する可能性があります。

コピーした仮想マシンでネットワークを利用する際に必要な変更

コピーまたはクローン作成した仮想マシン、あるいは VMware ACE パッケージの一部としてエンド ユーザーにデプロイされた仮想マシンでは、ネットワークが正常に動作しない場合があります。仮想マシンをコピーする際に、そのコピーに独自の識別子を割り当てると、その仮想マシンに接続されている仮想イーサネット アダプタ用の MAC アドレスが変更されます。SUSE Linux 9.2 ゲスト OS は、インストール時に、主要構成ファイル名の一部として MAC アドレスを使用します。このため、仮想マシンの MAC アドレスが変更されると、ゲスト OS が仮想イーサネット アダプタにその構成ファイルを関連付けることができない可能性があります。この問題が発生した場合、ファイルをコピーするか、ファイル名を変更して回避することができます。たとえば、`eth0` の場合、次のような変更を行います。

元のファイル名

```
/etc/sysconfig/network/ifcfg-eth0-id-<MAC アドレス>
```

新しいファイル名

```
/etc/sysconfig/network/ifcfg-eth0
```


ESX Server 仮想マシンでの PAE の無効化

ESX Server 2.5.x : ESX Server 2.5.x 仮想マシンは物理アドレス拡張 (PAE) をサポートしていますが、この機能用にパフォーマンスが最適化されているわけではありません。このため、PAE 機能が有効になっているゲスト OS では、パフォーマンスが低下する可能性があります。最高のパフォーマンスを実現するには、ゲスト OS で PAE を無効にすることをお勧めします。PAE の無効化の詳細および手順は、ナレッジ ベースの記事 (kb.vmware.com/kb/2020) を参照してください。

適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更

このゲスト OS のデフォルトのタイムキーピング構成では、問題が発生する可能性があります。Linux でのタイムキーピングのベスト プラクティスについては、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/1006427>) を参照してください。

ゲストのスクリーン セーバー

VMware Workstation または VMware GSX Server : XFree86 3.x X サーバを稼働する Linux ホストでは、ゲスト OS でのスクリーン セーバーの使用は避けてください。ゲストでスクリーン セーバーを使用すると、大量の処理能力が必要なため、ホストの X サーバがフリーズする可能性があります。

異なるプロセッサへの移行

Linux 仮想マシンを AMD プロセッサ上で稼働するホストと Intel プロセッサ上で稼働するホストとの間で移行することはお勧めしません。

Linux ディストリビューションの多くは、インストール時に、インストール先の特定のプロセッサに適したカーネルを選択します。また、一部のディストリビューションは、デフォルトで GENERIC カーネルをインストールしますが、ユーザーが選択してインストールできるアーキテクチャ固有のカーネルも提供しています。このようなカーネルには、そのプロセッサでのみ利用できる命令が含まれている場合があります。異なる種類のプロセッサを使用するホストでこれらの命令を実行すると、悪影響が生じる可能性があります。

このため、AMD プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンは、Intel プロセッサを使用するホストに移行しても動作しないことがあります。逆に、Intel プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンを AMD プロセッサを使用するホストに移行しても動作しない場合があります。

これは仮想マシンに限られたものではなく、物理コンピュータでも発生する問題です。たとえば、Linux がインストールされたハード ドライブを AMD マシンから Intel マシンに移動した場合、そのドライブから起動しようとすると問題が発生します。

SUSE Linux 9.1

このセクションでは、SUSE Linux 9.1 オペレーティングシステムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について記述しています。

32 ビット版

32 ビット版の SUSE Linux 9.1 は、次の VMware 製品でサポートされています。

■ VMware Workstation

SUSE Linux 9.1 : Workstation 4.5.2、4.5.3、5.0、5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

- SMP : Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way を試験的にサポート

■ VMware ACE

SUSE Linux 9.1 : ACE 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

■ VMware GSX Server

SUSE Linux 9.1 : GSX Server 3.1、3.2、3.2.1

■ VMware Server

SUSE Linux 9.1 : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9、2.0、2.0.1

その他のサポート

- SMP : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9、2.0、2.0.1 で 2 way を試験的にサポート

■ VMware ESX Server

SUSE Linux 9.1 : ESX 2.5、2.5.1、2.5.2、2.5.3、2.5.4、2.5.5

その他のサポート

- SMP : ESX 2.5、2.5.1、2.5.2、2.5.3、2.5.4、2.5.5 でフル サポート

サポートでの考慮事項

- ESX Server 2.5.x 上の SUSE Linux 9.1 仮想マシンでは、BusLogic 仮想 SCSI アダプタのみがサポートされています。

64 ビット版

64 ビット版の SUSE Linux 9.1 は、次の VMware 製品でサポートされています。

■ VMware Workstation

SUSE Linux 9.1 : Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

- **SMP** : Workstation 5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way を試験的にサポート

■ VMware ACE

SUSE Linux 9.1 : ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

■ VMware Server

SUSE Linux 9.1 : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9、2.0、2.0.1

その他のサポート

- **SMP** : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9、2.0、2.0.1 で 2 way を試験的にサポート

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

SUSE Linux 9.1 は、標準の SUSE Linux ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。ここでは、標準のディストリビューション CD を使用したインストールの手順を説明します。ただし、起動フロッピーまたはネットワークから SUSE Linux 9.1 をインストールすることもできます。ご使用の VMware 製品で PXE サーバがサポートされている場合は、PXE サーバからインストールすることもできます。

オペレーティングシステムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

注意 VMware 仮想マシンで BusLogic 仮想 SCSI アダプタを使用した際、Linux ゲスト OS の多くでさまざまな問題が発生しています。ESX Server 2.5.x を使用している場合を除き、このゲスト OS では、LSI Logic 仮想 SCSI アダプタを使用することをお勧めします。

注意 VMware VirtualCenter または vCenter Server を使用してゲスト OS をインストールする場合は、その仮想マシンを実行する VMware 製品（ESX Server または VMware Server）で該当するゲスト OS がサポートされていることを確認してください。

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに SUSE Linux 9.1 インストール CD を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、SUSE Linux 9.1 のインストールを開始します。
- 3 テキスト モードのインストーラを使用してインストールします。テキスト モードのインストーラを選択するには、最初のインストール画面で、<F2> キーを押してからカーソル キーを使用して [テキスト モード] を選択し、<Enter> キーを押します。
- 4 残りの手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。
- 5 この仮想マシンをコピーまたは移動する場合は、「[コピーした仮想マシンでネットワークを利用する際に必要な変更](#) (P.432)」に記載されている変更を行います。

これでゲスト OS としての SUSE Linux 9.1 の基本インストールが完了です。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

IPv6

多くの Linux ディストリビューションでは、VMware Tools のインストール後に IPv6 が有効になっていると、VMware Tools を **vmware-config-tools.pl** で構成することができません。この場合、VMware Tools は該当する仮想マシン向けにネットワーク デバイスを正しく設定することができず、次のようなメッセージが表示されます。

```
Unloading pcnet32 module
unregister_netdevice: waiting for eth0 to become free
```

このメッセージは、仮想マシンを再起動するまで連続して繰り返し表示されます。Linux を実行する仮想マシンでこの問題を防ぐには、VMware Tools をインストールする前に IPv6 を無効にしておきます。

注意 VMware ESX 4.0 以降のリリースでは IPv6 がサポートされています。VMware Tools のインストール前に IPv6 を無効にする必要はありません。

Linux を実行する仮想マシンで IPv6 を無効にするには

- 1 `/etc/sysconfig/network` ファイルに `NETWORKING_IPV6=yes` という行が含まれている場合は、この行を次のように変更します。

```
NETWORKING_IPV6=no
```

- 2 `/etc/modules.conf` ファイルに、次の行を追加します。

```
alias ipv6 off
alias net-pf-10 off
```

IPv6 を無効にすると、VMware Tools を正常にインストールし、構成できます。

既知の問題

ゲスト OS のインストール時に発生する可能性のある仮想マシンのハングアップ

一部のホストシステムでは、SUSE Linux 9.1 インストーラが、仮想ハードウェアの ACPI 機能と互換性のないカーネルを使用しようとします。この問題を回避するには、仮想マシンの構成ファイルをテキスト エディタで開き、次の行を追加します。

```
acpi.present = FALSE
```

これで、ゲスト OS として SUSE Linux 9.1 をインストールして実行できます。

DVD からのインストールが中断してエラー メッセージが表示される

DVD からインストールを行うと、[Installation Settings] の [Software] 項目で次のエラー メッセージが表示され、インストールが中断することがあります。

```
No base selection available. ERROR: No proposal.
```

SUSE のこの問題は、物理マシンおよび仮想マシンの両方で発生します。仮想マシンでこの問題を回避するには、インストールの開始時にブート プロンプトに次の行を入力します。

```
linux cdromdevice=/dev/hdc
```

ご使用の CD-ROM デバイスが 2 番目の IDE チャンネルにあるマスタ デバイスではない場合、`/dev/hdc` を正しいデバイス名に置き換えます。これで、インストールが正常に実行されます。

4 ビット カラーの使用不可

SUSE Linux 9.1 ゲスト OS の画面解像度を変更する場合、必ずカラー ビット深度も 16 色（4 ビット）より大きく設定します。16 色（4 ビット）の設定を使用すると、X サーバで致命的なエラーが発生する可能性があります。

コピーした仮想マシンでネットワークを利用する際に必要な変更

コピーまたはクローン作成した仮想マシン、あるいは VMware ACE パッケージの一部としてエンド ユーザーにデプロイされた仮想マシンでは、ネットワークが正常に動作しない場合があります。仮想マシンをコピーする際に、そのコピーに独自の識別子を割り当てると、その仮想マシンに接続されている仮想イーサネット アダプタ用の MAC アドレスが変更されます。SUSE Linux 9.1 ゲスト OS は、インストール時に、主要構成ファイル名の一部として MAC アドレスを使用します。このため、仮想マシンの MAC アドレスが変更されると、ゲスト OS が仮想イーサネット アダプタにその構成ファイルを関連付けることができない可能性があります。この問題が発生した場合、ファイルをコピーするか、ファイル名を変更して回避することができます。たとえば、`eth0` の場合、次のような変更を行います。

元のファイル名

`/etc/sysconfig/network/ifcfg-eth0-id-<MAC アドレス>`

新しいファイル名

`/etc/sysconfig/network/ifcfg-eth0`

ESX Server 仮想マシンでの PAE の無効化

ESX Server 2.5.x : ESX Server 2.5.x 仮想マシンは物理アドレス拡張（PAE）をサポートしていますが、この機能用にパフォーマンスが最適化されているわけではありません。このため、PAE 機能が有効になっているゲスト OS では、パフォーマンスが低下する可能性があります。最高のパフォーマンスを実現するには、ゲスト OS で PAE を無効にすることをお勧めします。PAE の無効化の詳細および手順は、ナレッジ ベースの記事（kb.vmware.com/kb/2020）を参照してください。

適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更

このゲスト OS のデフォルトのタイムキーピング構成では、問題が発生する可能性があります。Linux でのタイムキーピングのベスト プラクティスについては、ナレッジ ベースの記事（<http://kb.vmware.com/kb/1006427>）を参照してください。

ゲストのスクリーン サーバー

VMware Workstation または VMware GSX Server： XFree86 3.x X サーバを稼働する Linux ホストでは、ゲスト OS でのスクリーン サーバーの使用は避けてください。ゲストでスクリーン サーバーを使用すると、大量の処理能力が必要なため、ホストの X サーバがフリーズする可能性があります。

異なるプロセッサへの移行

Linux 仮想マシンを AMD プロセッサ上で稼働するホストと Intel プロセッサ上で稼働するホストとの間で移行することはお勧めしません。

Linux ディストリビューションの多くは、インストール時に、インストール先の特定のプロセッサに適したカーネルを選択します。また、一部のディストリビューションは、デフォルトで GENERIC カーネルをインストールしますが、ユーザーが選択してインストールできるアーキテクチャ固有のカーネルも提供しています。このようなカーネルには、そのプロセッサでのみ利用できる命令が含まれている場合があります。異なる種類のプロセッサを使用するホストでこれらの命令を実行すると、悪影響が生じる可能性があります。

このため、AMD プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンは、Intel プロセッサを使用するホストに移行しても動作しないことがあります。逆に、Intel プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンを AMD プロセッサを使用するホストに移行しても動作しない場合があります。

これは仮想マシンに限られたものではなく、物理コンピュータでも発生する問題です。たとえば、Linux がインストールされたハード ドライブを AMD マシンから Intel マシンに移動した場合、そのドライブから起動しようとする問題が発生します。

SUSE Linux 9.0

このセクションでは、SUSE Linux 9.0 オペレーティングシステムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について記述しています。

32 ビット版

32 ビット版の SUSE Linux 9.0 は、次の VMware 製品でサポートされています。

■ VMware Workstation

SUSE Linux 9.0 : Workstation 4.5、4.5.1、4.5.2、4.5.3、5.0、5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

- SMP : Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way を試験的にサポート

■ VMware ACE

SUSE Linux 9.0 : ACE 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

■ VMware GSX Server

SUSE Linux 9.0 : GSX Server 3.0、3.1、3.2、3.2.1

■ VMware Server

SUSE Linux 9.0 : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9、2.0、2.0.1

その他のサポート

- SMP : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9、2.0、2.0.1 で 2 way を試験的にサポート

■ VMware ESX Server

SUSE Linux 9.0 : ESX 2.0、2.0.1、2.1.1、2.1.2、2.1、2.5、2.5.1、2.5.2、2.5.3、2.5.4、2.5.5

その他のサポート

- SMP : ESX 2.1、2.1.1、2.1.2、2.5、2.5.1、2.5.2、2.5.3、2.5.4、2.5.5 でフルサポート

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

SUSE Linux 9.0 は、標準の SUSE Linux ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。ここでは、標準のディストリビューション CD を使用したインストールの手順を説明します。ただし、起動フロッピーまたはネットワークから SUSE Linux 9.0 をインストールすることもできます。ご使用の VMware 製品で PXE サーバがサポートされている場合は、PXE サーバからインストールすることもできます。

オペレーティングシステムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

注意	VMware 仮想マシンで BusLogic 仮想 SCSI アダプタを使用した際、Linux ゲスト OS の多くでさまざまな問題が発生しています。このゲスト OS では、LSI Logic 仮想 SCSI アダプタを使用することをお勧めします。
-----------	--

注意	VMware VirtualCenter または vCenter Server を使用してゲスト OS をインストールする場合は、その仮想マシンを実行する VMware 製品（ESX Server または VMware Server）で該当するゲスト OS がサポートされていることを確認してください。
-----------	---

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに SUSE Linux 9.0 インストール CD を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、SUSE Linux 9.0 のインストールを開始します。
- 3 テキスト モードのインストーラを使用してインストールします。テキスト モードのインストーラを選択するには、最初のインストール画面で、<F2> キーを押してからカーソル キーを使用して [テキスト モード] を選択し、<Enter> キーを押します。
- 4 残りの手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。

これでゲスト OS としての SUSE Linux 9.0 の基本インストールが完了です。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

VMware Tools をインストールし、SaX2 コンフィグレーション ユーティリティを実行するまでは、ゲスト OS で X サーバを起動しないでください。「[X サーバを起動する前に](#)」を参照してください。

IPv6

多くの Linux ディストリビューションでは、VMware Tools のインストール後に IPv6 が有効になっていると、VMware Tools を `vmware-config-tools.pl` で構成することができません。この場合、VMware Tools は該当する仮想マシン向けにネットワーク デバイスを正しく設定することができず、次のようなメッセージが表示されます。

```
Unloading pcnet32 module
unregister_netdevice: waiting for eth0 to become free
```

このメッセージは、仮想マシンを再起動するまで連続して繰り返し表示されます。Linux を実行する仮想マシンでこの問題を防ぐには、VMware Tools をインストールする前に IPv6 を無効にしておきます。

注意 VMware ESX 4.0 以降のリリースでは IPv6 がサポートされています。VMware Tools のインストール前に IPv6 を無効にする必要はありません。

Linux を実行する仮想マシンで IPv6 を無効にするには

- 1 `/etc/sysconfig/network` ファイルに `NETWORKING_IPV6=yes` という行が含まれている場合は、この行を次のように変更します。

```
NETWORKING_IPV6=no
```

- 2 `/etc/modules.conf` ファイルに、次の行を追加します。

```
alias ipv6 off
alias net-pf-10 off
```

IPv6 を無効にすると、VMware Tools を正常にインストールし、構成できます。

X サーバを起動する前に

VMware Tools をインストールしたあと、X サーバを起動する前に、root ユーザーの権限で `SaX2` コンフィグレーションユーティリティを実行して X サーバを構成します。コマンドプロンプトで `SaX2` と入力し、ウィザードを使用して X サーバを構成します。VMware Virtual Machine Console を使用してこの仮想マシンに接続する場合は、色の解像度を 65536（16 ビット）以下に設定します。

`SaX2` を実行したあと、GRUB が表示する任意の選択肢を使用して SUSE Linux 8.2 仮想マシンを起動できます。

既知の問題

ゲスト OS のインストール時に発生する可能性のある仮想マシンのハングアップ

一部のホストシステムでは、SUSE Linux 9.0 インストーラが、仮想ハードウェアの ACPI 機能と互換性のないカーネルを使用しようとします。この問題を回避するには、仮想マシンの構成ファイルをテキストエディタで開き、次の行を追加します。

```
acpi.present = FALSE
```

これで、ゲスト OS として SUSE Linux 9.0 をインストールして実行できます。

DVD からのインストールの中断によるエラーメッセージの表示

DVD からインストールを行うと、[Installation Settings] の [Software] 項目で次のエラーメッセージが表示され、インストールが中断することがあります。

```
No base selection available. ERROR: No proposal.
```

SUSE のこの問題は、物理マシンおよび仮想マシンの両方で発生します。仮想マシンでこの問題を回避するには、インストールの開始時にブートプロンプトに次の行を入力します。

```
linux cdromdevice=/dev/hdc
```

ご使用の CD-ROM デバイスが 2 番目の IDE チャンネルにあるマスタ デバイスではない場合、`/dev/hdc` を正しいデバイス名に置き換えます。

これで、インストールが正常に実行されます。

4 ビット カラーの使用不可

SUSE Linux 9.0 ゲスト OS の画面解像度を変更する場合、必ずカラービット深度も 16 色（4 ビット）より大きく設定します。16 色（4 ビット）の設定を使用すると、X サーバで致命的なエラーが発生する可能性があります。

ESX Server 仮想マシンでの PAE の無効化

ESX Server 2.5.x : ESX Server 2.5.x 仮想マシンは物理アドレス拡張 (PAE) をサポートしていますが、この機能用にパフォーマンスが最適化されているわけではありません。このため、PAE 機能が有効になっているゲスト OS では、パフォーマンスが低下する可能性があります。最高のパフォーマンスを実現するには、ゲスト OS で PAE を無効にすることをお勧めします。PAE の無効化の詳細および手順は、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/2020>) を参照してください。

適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更

このゲスト OS のデフォルトのタイムキーピング構成では、問題が発生する可能性があります。Linux でのタイムキーピングのベスト プラクティスについては、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/1006427>) を参照してください。

ゲストのスクリーン セーバー

VMware Workstation または VMware GSX Server : XFree86 3.x X サーバを稼働する Linux ホストでは、ゲスト OS でのスクリーン セーバーの使用は避けてください。ゲストでスクリーン セーバーを使用すると、大量の処理能力が必要なため、ホストの X サーバがフリーズする可能性があります。

異なるプロセッサへの移行

Linux 仮想マシンを AMD プロセッサ上で稼働するホストと Intel プロセッサ上で稼働するホストとの間で移行することはお勧めしません。

Linux ディストリビューションの多くは、インストール時に、インストール先の特定のプロセッサに適したカーネルを選択します。また、一部のディストリビューションは、デフォルトで GENERIC カーネルをインストールしますが、ユーザーが選択してインストールできるアーキテクチャ固有のカーネルも提供しています。このようなカーネルには、そのプロセッサでのみ利用できる命令が含まれている場合があります。異なる種類のプロセッサを使用するホストでこれらの命令を実行すると、悪影響が生じる可能性があります。

このため、AMD プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンは、Intel プロセッサを使用するホストに移行しても動作しないことがあります。逆に、Intel プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンを AMD プロセッサを使用するホストに移行しても動作しない場合があります。

これは仮想マシンに限られたものではなく、物理コンピュータでも発生する問題です。たとえば、Linux がインストールされたハード ドライブを AMD マシンから Intel マシンに移動した場合、そのドライブから起動しようとすると問題が発生します。

SUSE Linux 8.2

このセクションでは、SUSE Linux 8.2 オペレーティングシステムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について記述しています。

32 ビット版

32 ビット版の SUSE Linux 8.2 は、次の VMware 製品でサポートされています。

■ VMware Workstation

SUSE Linux 8.2 : Workstation 4.0.1、4.0.2、4.0.5、4.5、4.5.1、4.5.2、4.5.3、5.0、5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

- SMP : Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way を試験的にサポート

■ VMware ACE

SUSE Linux 8.2 : ACE 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

■ VMware GSX Server

SUSE Linux 8.2 : GSX Server 3.0、3.1、3.2、3.2.1

■ VMware Server

SUSE Linux 8.2 : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9

その他のサポート

- SMP : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9 で 2 way を試験的にサポート

■ VMware ESX Server

SUSE Linux 8.2 : ESX 2.0、2.0.1、2.1、2.1.1、2.1.2、2.5、2.5.1、2.5.2、2.5.3、2.5.4、2.5.5

その他のサポート

- SMP : ESX 2.0、2.0.1、2.1、2.1.1、2.1.2 でフルサポート

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

SUSE Linux 8.2 は、標準の SUSE ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。ここでは、標準のディストリビューション CD を使用したインストールの手順を説明します。ただし、起動フロッピーまたはネットワークから SUSE Linux 8.2 をインストールすることもできます。ご使用の VMware 製品で PXE サーバがサポートされている場合は、PXE サーバからインストールすることもできます。

オペレーティングシステムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

注意 SUSE Linux 8.2 をインストールしても X サーバはインストールされません。仮想マシン内でアクセラレータ機能付き SVGA X サーバを実行するには、SUSE Linux 8.2 のインストール完了後、ただちに VMware Tools パッケージをインストールします。

注意 VMware 仮想マシンで BusLogic 仮想 SCSI アダプタを使用した際、Linux ゲスト OS の多くでさまざまな問題が発生しています。このゲスト OS では、LSI Logic 仮想 SCSI アダプタを使用することをお勧めします。

注意 VMware VirtualCenter または vCenter Server を使用してゲスト OS をインストールする場合は、その仮想マシンを実行する VMware 製品 (ESX Server または VMware Server) で該当するゲスト OS がサポートされていることを確認してください。

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに SUSE Linux 8.2 インストール CD を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、SUSE Linux 8.2 のインストールを開始します。
- 3 次の手順で説明している選択画面が表示されるまで、物理マシンの場合と同じように、画面の指示に従ってインストールを実行します。
- 4 テキスト モードのインストーラを使用してインストールします。テキスト モードのインストーラを選択するには、最初のインストール画面で、<F2> キーを押してから **linux** と入力し、<Enter> キーを押します。
- 5 X サーバをインストールするよう求められますが、インストールしないでください。[Configure Monitor] 画面で、[Text Mode Only] を選択します。[Accept] をクリックしてインストールを完了します。

これでゲスト OS としての SUSE Linux 8.2 の基本インストールが完了です。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

IPv6

多くの Linux ディストリビューションでは、VMware Tools のインストール後に IPv6 が有効になっていると、VMware Tools を **vmware-config-tools.pl** で構成することができません。この場合、VMware Tools は該当する仮想マシン向けにネットワーク デバイスを正しく設定することができず、次のようなメッセージが表示されます。

```
Unloading pcnet32 module
unregister_netdevice: waiting for eth0 to become free
```

このメッセージは、仮想マシンを再起動するまで連続して繰り返し表示されます。Linux を実行する仮想マシンでこの問題を防ぐには、VMware Tools をインストールする前に IPv6 を無効にしておきます。

注意 VMware ESX 4.0 以降のリリースでは IPv6 がサポートされています。VMware Tools のインストール前に IPv6 を無効にする必要はありません。

Linux を実行する仮想マシンで IPv6 を無効にするには

- 1 `/etc/sysconfig/network` ファイルに **NETWORKING_IPV6=yes** という行が含まれている場合は、この行を次のように変更します。

```
NETWORKING_IPV6=no
```

- 2 `/etc/modules.conf` ファイルに、次の行を追加します。

```
alias ipv6 off
alias net-pf-10 off
```

IPv6 を無効にすると、VMware Tools を正常にインストールし、構成できます。

VMware Tools をインストールし、SaX2 コンフィグレーション ユーティリティを実行するまでは、ゲスト OS で X サーバを起動しないでください。「[X サーバを起動する前に](#)」を参照してください。

注意 VMware Tools のインストールを開始すると (`vmware-tools-distrib` ディレクトリで `/vmware-install.pl` と入力)、次のメッセージが表示されます。

Found an installed version of the VMware SVGA driver for XFree86 4. Some versions of this driver included with the XFree86 4 distributions do not work properly. Would you like to install a stable (but possibly older) version of the driver over the currently installed one?

仮想マシンをデュアル ブートする場合は、[Yes] を選択してドライバをインストールします。再度 [Yes] を選択すると、既存のビデオ ドライバファイルのバックアップが作成され、`XF86Config-4.dist` ファイルが `XF86Config-4.vi` にコピーされます。後者のファイルは、仮想マシンをデュアル ブートする際に使用されます。

仮想マシンをデュアル ブートしない場合は、[No] を選択して既存のドライバを残します。

X サーバを起動する前に

VMware Tools をインストールしたあと、X サーバを起動する前に、root ユーザーの権限で `SaX2` コンフィグレーションユーティリティを実行して X サーバを構成します。コマンド プロンプトで `SaX2` と入力し、ウィザードを使用して X サーバを構成します。VMware Virtual Machine Console を使用してこの仮想マシンに接続する場合は、色の解像度を 65536 (16 ビット) 以下に設定します。

`SaX2` を実行したあと、GRUB が表示する任意の選択肢を使用して SUSE Linux 8.2 仮想マシンを起動できます。

既知の問題

ゲスト OS のインストール時に発生する可能性のある仮想マシンのハングアップ

一部のホストシステムでは、SUSE Linux 8.2 インストーラが、仮想ハードウェアの ACPI 機能と互換性のないカーネルを使用しようとします。この問題を回避するには、仮想マシンの構成ファイルをテキスト エディタで開き、次の行を追加します。

```
acpi.present = FALSE
```

これで、ゲスト OS として SUSE Linux 8.2 をインストールして実行できます。

DVD からのインストールの中断によるエラー メッセージの表示

DVD からインストールを行うと、[Installation Settings] の [Software] 項目で次のエラー メッセージが表示され、インストールが中断することがあります。

```
No base selection available. ERROR: No proposal.
```


SUSE のこの問題は、物理マシンおよび仮想マシンの両方で発生します。仮想マシンでこの問題を回避するには、インストールの開始時にブート プロンプトに次の行を入力します。

```
linux cdromdevice=/dev/hdc
```

ご使用の CD-ROM デバイスが 2 番目の IDE チャンネルにあるマスタ デバイスではない場合、`/dev/hdc` を正しいデバイス名に置き換えます。

これで、インストールが正常に実行されます。

ESX Server 仮想マシンでの PAE の無効化

ESX Server 2.5.x : ESX Server 2.5.x 仮想マシンは物理アドレス拡張 (PAE) をサポートしていますが、この機能用にパフォーマンスが最適化されているわけではありません。このため、PAE 機能が有効になっているゲスト OS では、パフォーマンスが低下する可能性があります。最高のパフォーマンスを実現するには、ゲスト OS で PAE を無効にすることをお勧めします。PAE の無効化の詳細および手順は、ナレッジ ベースの記事 (kb.vmware.com/kb/2020) を参照してください。

適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更

このゲスト OS のデフォルトのタイムキーピング構成では、問題が発生する可能性があります。Linux でのタイムキーピングのベスト プラクティスについては、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/1006427>) を参照してください。

ゲストのスクリーン セーバー

VMware Workstation または VMware GSX Server : XFree86 3.x X サーバを稼働する Linux ホストでは、ゲスト OS でのスクリーン セーバーの使用は避けてください。ゲストでスクリーン セーバーを使用すると、大量の処理能力が必要なため、ホストの X サーバがフリーズする可能性があります。

異なるプロセッサへの移行

Linux 仮想マシンを AMD プロセッサ上で稼働するホストと Intel プロセッサ上で稼働するホストとの間で移行することはお勧めしません。

Linux ディストリビューションの多くは、インストール時に、インストール先の特定のプロセッサに適したカーネルを選択します。また、一部のディストリビューションは、デフォルトで GENERIC カーネルをインストールしますが、ユーザーが選択してインストールできるアーキテクチャ固有のカーネルも提供しています。このようなカーネルには、そのプロセッサでのみ利用できる命令が含まれている場合があります。異なる種類のプロセッサを使用するホストでこれらの命令を実行すると、悪影響が生じる可能性があります。

このため、AMD プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンは、Intel プロセッサを使用するホストに移行しても動作しないことがあります。逆に、Intel プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンを AMD プロセッサを使用するホストに移行しても動作しない場合があります。

これは仮想マシンに限られたものではなく、物理コンピュータでも発生する問題です。たとえば、Linux がインストールされたハード ドライブを AMD マシンから Intel マシンに移動した場合、そのドライブから起動しようとする問題が発生します。

SUSE Linux 8.1

このセクションでは、SUSE Linux 8.1 オペレーティングシステムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について記述しています。

32 ビット版

32 ビット版の SUSE Linux 8.1 は、次の VMware 製品でサポートされています。

■ VMware Workstation

SUSE Linux 8.1 : Workstation 4.0、4.0.1、4.0.2、4.0.5、4.5、4.5.1、4.5.2、4.5.3、5.0、5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

- SMP : Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way を試験的にサポート

■ VMware ACE

SUSE Linux 8.1 : ACE 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

■ VMware GSX Server

SUSE Linux 8.1 : GSX Server 3.0、3.1、3.2、3.2.1

■ VMware Server

SUSE Linux 8.1 : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9

その他のサポート

- SMP : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9 で 2 way を試験的にサポート

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

SUSE Linux 8.1 は、標準の SUSE ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。ここでは、標準のディストリビューション CD を使用したインストールの手順を説明します。ただし、起動フロッピーまたはネットワークから SUSE Linux 8.1 をインストールすることもできます。ご使用の VMware 製品で PXE サーバがサポートされている場合は、PXE サーバからインストールすることもできます。

オペレーティングシステムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

注意 SUSE Linux 8.1 をインストールしても X サーバはインストールされません。仮想マシン内でアクセラレータ機能付き SVGA X サーバを実行するには、SUSE Linux 8.1 のインストール完了後、ただちに VMware Tools パッケージをインストールします。

注意 VMware 仮想マシンで BusLogic 仮想 SCSI アダプタを使用した際、Linux ゲスト OS の多くでさまざまな問題が発生しています。このゲスト OS では、LSI Logic 仮想 SCSI アダプタを使用することをお勧めします。

注意 VMware VirtualCenter または vCenter Server を使用してゲスト OS をインストールする場合は、その仮想マシンを実行する VMware 製品 (ESX Server または VMware Server) で該当するゲスト OS がサポートされていることを確認してください。

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに SUSE Linux 8.1 インストール CD を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、SUSE Linux 8.1 のインストールを開始します。
- 3 次の手順で説明している選択画面が表示されるまで、物理マシンの場合と同じように、画面の指示に従ってインストールを実行します。
- 4 テキスト モードのインストーラを使用してインストールします。テキスト モードのインストーラを選択するには、最初のインストール画面で、<F2> キーを押してから <Enter> キーを押します。
- 5 X サーバをインストールするよう求められますが、インストールしないでください。[Configure Monitor] 画面で、[Text Mode Only] を選択します。[Accept] をクリックしてインストールを完了します。

これでゲスト OS としての SUSE Linux 8.1 の基本インストールが完了です。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

多くの Linux ディストリビューションでは、VMware Tools のインストール後に IPv6 が有効になっていると、VMware Tools を `vmware-config-tools.pl` で構成することができません。この場合、VMware Tools は該当する仮想マシン向けにネットワーク デバイスを正しく設定することができず、次のようなメッセージが表示されます。

```
Unloading pcnet32 module
unregister_netdevice: waiting for eth0 to become free
```

このメッセージは、仮想マシンを再起動するまで連続して繰り返し表示されます。Linux を実行する仮想マシンでこの問題を防ぐには、VMware Tools をインストールする前に IPv6 を無効にしておきます。

Linux を実行する仮想マシンで IPv6 を無効にするには

- 1 `/etc/sysconfig/network` ファイルに `NETWORKING_IPV6=yes` という行が含まれている場合は、この行を次のように変更します。

```
NETWORKING_IPV6=no
```

- 2 `/etc/modules.conf` ファイルに、次の行を追加します。

```
alias ipv6 off
alias net-pf-10 off
```

IPv6 を無効にすると、VMware Tools を正常にインストールし、構成できます。

VMware Tools をインストールし、SaX2 コンフィグレーション ユーティリティを実行するまでは、ゲスト OS で X サーバを起動しないでください。「[X サーバを起動する前に](#)」を参照してください。

注意 VMware Tools のインストールを開始すると (`vmware-tools-distrib` ディレクトリで `./vmware-install.pl` と入力)、次のメッセージが表示されます。

```
Found an installed version of the VMware SVGA driver for XFree86 4. Some
versions of this driver included with the XFree86 4 distributions do not work
properly. Would you like to install a stable (but possibly older) version of
the driver over the currently installed one?
```

仮想マシンをデュアル ブートする場合は、[Yes] を選択してドライバをインストールします。再度 [Yes] を選択すると、既存のビデオ ドライバファイルのバックアップが作成され、**XF86Config-4.dist** ファイルが **XF86Config-4.vm** にコピーされます。後者のファイルは、仮想マシンをデュアル ブートする際に使用されます。

仮想マシンをデュアル ブートしない場合は、[No] を選択して既存のドライバを残します。

X サーバを起動する前に

VMware Tools をインストールしたあと、X サーバを起動する前に、root ユーザーの権限で **SaX2** コンフィグレーション ユーティリティを実行して X サーバを構成します。コマンド プロンプトで **SaX2** と入力し、ウィザードを使用して X サーバを構成します。VMware Virtual Machine Console を使用してこの仮想マシンに接続する場合は、色の解像度を 65536 （16 ビット）以下に設定します。

SaX2 を実行したあと、GRUB が表示する任意の選択肢を使用して SUSE Linux 8.1 仮想マシンを起動できます。

既知の問題

ゲスト OS のインストール時に発生する可能性のある仮想マシンのハングアップ

一部のホストシステムでは、SUSE Linux 8.1 インストーラが、仮想ハードウェアの ACPI 機能と互換性のないカーネルを使用しようとします。この問題を回避するには、仮想マシンの構成ファイルをテキスト エディタで開き、次の行を追加します。

```
acpi.present = FALSE
```

これで、ゲスト OS として SUSE Linux 8.1 をインストールして実行できます。

適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更

このゲスト OS のデフォルトのタイムキーピング構成では、問題が発生する可能性があります。Linux でのタイムキーピングのベスト プラクティスについては、ナレッジベースの記事（<http://kb.vmware.com/kb/1006427>）を参照してください。

ゲストのスクリーンセーバー

XFree86 3.x X サーバを稼動する Linux ホストでは、ゲスト OS でのスクリーンセーバーの使用は避けてください。ゲストでスクリーンセーバーを使用すると、大量の処理能力が必要なため、ホストの X サーバがフリーズする可能性があります。

異なるプロセッサへの移行

Linux 仮想マシンを AMD プロセッサ上で稼働するホストと Intel プロセッサ上で稼働するホストとの間で移行することはお勧めしません。

Linux ディストリビューションの多くは、インストール時に、インストール先の特定のプロセッサに適したカーネルを選択します。また、一部のディストリビューションは、デフォルトで GENERIC カーネルをインストールしますが、ユーザーが選択してインストールできるアーキテクチャ固有のカーネルも提供しています。このようなカーネルには、そのプロセッサでのみ利用できる命令が含まれている場合があります。異なる種類のプロセッサを使用するホストでこれらの命令を実行すると、悪影響が生じる可能性があります。

このため、AMD プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンは、Intel プロセッサを使用するホストに移行しても動作しないことがあります。逆に、Intel プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンを AMD プロセッサを使用するホストに移行しても動作しない場合があります。

これは仮想マシンに限られたものではなく、物理コンピュータでも発生する問題です。たとえば、Linux がインストールされたハード ドライブを AMD マシンから Intel マシンに移動した場合、そのドライブから起動しようとすると問題が発生します。

SUSE Linux 8.0

このセクションでは、SUSE Linux 8.0 オペレーティングシステムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について記述しています。

32 ビット版

32 ビット版の SUSE Linux 8.0 は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware Workstation**

SUSE Linux 8.0 : Workstation 4.0、4.0.1、4.0.2、4.0.5、4.5、4.5.1、4.5.2、4.5.3、5.0、5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

- **SMP** : Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way を試験的にサポート

- **VMware ACE**

SUSE Linux 8.0 : ACE 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

- **VMware GSX Server**

SUSE Linux 8.0 : GSX Server 3.0、3.1、3.2、3.2.1

- **VMware Server**

SUSE Linux 8.0 : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9

その他のサポート

- **SMP** : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9 で 2 way を試験的にサポート

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

SUSE Linux 8.0 は、標準の SUSE ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。ここでは、標準のディストリビューション CD を使用したインストールの手順を説明します。ただし、起動フロッピーまたはネットワークから SUSE Linux 8.0 をインストールすることもできます。ご使用の VMware 製品で PXE サーバがサポートされている場合は、PXE サーバからインストールすることもできます。

オペレーティングシステムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

注意 SUSE Linux 8.0 をインストールしても X サーバはインストールされません。仮想マシン内でアクセラレータ機能付き SVGA X サーバを実行するには、SUSE Linux 8.0 のインストール完了後、ただちに VMware Tools パッケージをインストールします。

注意 VMware 仮想マシンで BusLogic 仮想 SCSI アダプタを使用した際、Linux ゲスト OS の多くでさまざまな問題が発生しています。このゲスト OS では、LSI Logic 仮想 SCSI アダプタを使用することをお勧めします。

注意 VMware VirtualCenter または vCenter Server を使用してゲスト OS をインストールする場合は、その仮想マシンを実行する VMware 製品 (ESX Server または VMware Server) で該当するゲスト OS がサポートされていることを確認してください。

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに SUSE Linux 8.0 インストール CD を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、SUSE Linux 8.0 のインストールを開始します。
- 3 次の手順で説明している選択画面が表示されるまで、物理マシンの場合と同じように、画面の指示に従ってインストールを実行します。
- 4 テキスト モードのインストーラを使用してインストールします。
- 5 X サーバをインストールするよう求められますが、インストールしないでください。[Configure Monitor] 画面で、[No X11] を選択します。設定を確認します。
[Continue] をクリックしてインストールを完了します。

これでゲスト OS としての SUSE Linux 8.0 の基本インストールが完了です。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

多くの Linux ディストリビューションでは、VMware Tools のインストール後に IPv6 が有効になっていると、VMware Tools を **vmware-config-tools.pl** で構成することができません。この場合、VMware Tools は該当する仮想マシン向けにネットワーク デバイスを正しく設定することができず、次のようなメッセージが表示されます。

```
Unloading pcnet32 module
unregister_netdevice: waiting for eth0 to become free
```

このメッセージは、仮想マシンを再起動するまで連続して繰り返し表示されます。Linux を実行する仮想マシンでこの問題を防ぐには、VMware Tools をインストールする前に IPv6 を無効にしておきます。

Linux を実行する仮想マシンで IPv6 を無効にするには

- 1 `/etc/sysconfig/network` ファイルに `NETWORKING_IPV6=yes` という行が含まれている場合は、この行を次のように変更します。

```
NETWORKING_IPV6=no
```

- 2 `/etc/modules.conf` ファイルに、次の行を追加します。

```
alias ipv6 off
alias net-pf-10 off
```

IPv6 を無効にすると、VMware Tools を正常にインストールし、構成できます。

VMware Tools をインストールするまでは、ゲスト OS で X サーバを起動しないでください。

注意 VMware Tools のインストールを開始すると (**vmware-tools-distrib** ディレクトリで **./vmware-install.pl** と入力)、次のメッセージが表示されます。

```
Found an installed version of the VMware SVGA driver for XFree86 4. Some
versions of this driver included with the XFree86 4 distributions do not work
properly. Would you like to install a stable (but possibly older) version of
the driver over the currently installed one?
```

仮想マシンをデュアル ブートする場合は、[Yes] を選択してドライバをインストールします。再度 [Yes] を選択すると、既存のビデオ ドライバ ファイルのバックアップが作成され、**XF86Config-4.dist** ファイルが **XF86Config-4.vm** にコピーされます。後者のファイルは、仮想マシンをデュアル ブートする際に使用されます。

仮想マシンをデュアル ブートしない場合は、[No] を選択して既存のドライバを残します。

X サーバを起動する前に

VMware Tools をインストールしたあと、X サーバを起動する前に、root ユーザーの権限で `SaX2` コンフィグレーション ユーティリティを実行して X サーバを構成します。コマンド プロンプトで `SaX2` と入力し、ウィザードを使用して X サーバを構成します。

`SaX2` を実行したあと、LILO が表示する任意の選択肢を使用して SUSE 8.0 仮想マシンを起動できます。

既知の問題

適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更

このゲスト OS のデフォルトのタイムキーピング構成では、問題が発生する可能性があります。Linux でのタイムキーピングのベスト プラクティスについては、ナレッジベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/1006427>) を参照してください。

ゲストのスクリーンセーバー

XFree86 3.x X サーバを稼働する Linux ホストでは、ゲスト OS でのスクリーンセーバーの使用は避けてください。ゲストでスクリーンセーバーを使用すると、大量の処理能力が必要なため、ホストの X サーバがフリーズする可能性があります。

異なるプロセッサへの移行

Linux 仮想マシンを AMD プロセッサ上で稼働するホストと Intel プロセッサ上で稼働するホストとの間で移行することはお勧めしません。

Linux ディストリビューションの多くは、インストール時に、インストール先の特定のプロセッサに適したカーネルを選択します。また、一部のディストリビューションは、デフォルトで GENERIC カーネルをインストールしますが、ユーザーが選択してインストールできるアーキテクチャ固有のカーネルも提供しています。このようなカーネルには、そのプロセッサでのみ利用できる命令が含まれている場合があります。異なる種類のプロセッサを使用するホストでこれらの命令を実行すると、悪影響が生じる可能性があります。

このため、AMD プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンは、Intel プロセッサを使用するホストに移行しても動作しないことがあります。逆に、Intel プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンを AMD プロセッサを使用するホストに移行しても動作しない場合があります。

これは仮想マシンに限られたものではなく、物理コンピュータでも発生する問題です。たとえば、Linux がインストールされたハード ドライブを AMD マシンから Intel マシンに移動した場合、そのドライブから起動しようとする問題が発生します。

SUSE Linux 7.3

このセクションでは、SUSE Linux 7.3 オペレーティングシステムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について記述しています。

32 ビット版

32 ビット版の SUSE Linux 7.3 は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware Workstation**

SUSE Linux 7.3 : Workstation 4.0、4.0.1、4.0.2、4.0.5、4.5、4.5.1、4.5.2、4.5.3、5.0、5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

- **SMP** : Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way を試験的にサポート

- **VMware ACE**

SUSE Linux 7.3 : ACE 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

- **VMware GSX Server**

SUSE Linux 7.3 : GSX Server 3.0、3.1、3.2、3.2.1

- **VMware Server**

SUSE Linux 7.3 : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9

その他のサポート

- **SMP** : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9 で 2 way を試験的にサポート

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

SUSE Linux 7.3 は、標準の SUSE ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。ここでは、標準のディストリビューション CD を使用したインストールの手順を説明します。ただし、起動フロッピーまたはネットワークから SUSE Linux 7.3 をインストールすることもできます。ご使用の VMware 製品で PXE サーバがサポートされている場合は、PXE サーバからインストールすることもできます。

オペレーティングシステムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

注意 SUSE Linux 7.3 をインストールしても X サーバはインストールされません。仮想マシン内でアクセラレータ機能付き SVGA X サーバを実行するには、SUSE Linux 7.3 のインストール完了後、ただちに VMware Tools パッケージをインストールします。

注意 VMware 仮想マシンで BusLogic 仮想 SCSI アダプタを使用した際、Linux ゲスト OS の多くでさまざまな問題が発生しています。このゲスト OS では、LSI Logic 仮想 SCSI アダプタを使用することをお勧めします。

注意 VMware VirtualCenter または vCenter Server を使用してゲスト OS をインストールする場合は、その仮想マシンを実行する VMware 製品 (ESX Server または VMware Server) で該当するゲスト OS がサポートされていることを確認してください。

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに SUSE Linux 7.3 インストール CD を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、SUSE Linux 7.3 のインストールを開始します。
- 3 次の手順で説明している選択画面が表示されるまで、物理マシンの場合と同じように、画面の指示に従ってインストールを実行します。
- 4 テキスト モードのインストーラを使用してインストールします。
- 5 X サーバをインストールするよう求められますが、インストールしないでください。[Configure Monitor] 画面で、[No X11] を選択します。設定を確認します。[Continue] をクリックしてインストールを完了します。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

VMware Tools をインストールしたあと、LILO が表示する任意の選択肢を使用して SUSE 7.3 仮想マシンを起動できます。

多くの Linux ディストリビューションでは、VMware Tools のインストール後に IPv6 が有効になっていると、VMware Tools を `vmware-config-tools.pl` で構成することができません。この場合、VMware Tools は該当する仮想マシン向けにネットワーク デバイスを正しく設定することができず、次のようなメッセージが表示されます。

```
Unloading pcnet32 module
unregister_netdevice: waiting for eth0 to become free
```

このメッセージは、仮想マシンを再起動するまで連続して繰り返し表示されます。Linux を実行する仮想マシンでこの問題を防ぐには、VMware Tools をインストールする前に IPv6 を無効にしておきます。

Linux を実行する仮想マシンで IPv6 を無効にするには

- 1 `/etc/sysconfig/network` ファイルに `NETWORKING_IPV6=yes` という行が含まれている場合は、この行を次のように変更します。

```
NETWORKING_IPV6=no
```

- 2 `/etc/modules.conf` ファイルに、次の行を追加します。

```
alias ipv6 off
alias net-pf-10 off
```

IPv6 を無効にすると、VMware Tools を正常にインストールし、構成できます。

既知の問題

適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更

このゲスト OS のデフォルトのタイムキーピング構成では、問題が発生する可能性があります。Linux でのタイムキーピングのベスト プラクティスについては、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/1006427>) を参照してください。

ゲストのスクリーンセーバー

XFree86 3.x X サーバを稼動する Linux ホストでは、ゲスト OS でのスクリーンセーバーの使用は避けてください。ゲストでスクリーンセーバーを使用すると、大量の処理能力が必要なため、ホストの X サーバがフリーズする可能性があります。

異なるプロセッサへの移行

Linux 仮想マシンを AMD プロセッサ上で稼働するホストと Intel プロセッサ上で稼働するホストとの間で移行することはお勧めしません。

Linux ディストリビューションの多くは、インストール時に、インストール先の特定のプロセッサに適したカーネルを選択します。また、一部のディストリビューションは、デフォルトで GENERIC カーネルをインストールしますが、ユーザーが選択してインストールできるアーキテクチャ固有のカーネルも提供しています。このようなカーネルには、そのプロセッサでのみ利用できる命令が含まれている場合があります。異なる種類のプロセッサを使用するホストでこれらの命令を実行すると、悪影響が生じる可能性があります。

このため、AMD プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンは、Intel プロセッサを使用するホストに移行しても動作しないことがあります。逆に、Intel プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンを AMD プロセッサを使用するホストに移行しても動作しない場合があります。

これは仮想マシンに限られたものではなく、物理コンピュータでも発生する問題です。たとえば、Linux がインストールされたハード ドライブを AMD マシンから Intel マシンに移動した場合、そのドライブから起動しようとすると問題が発生します。

Turbolinux 10 Server

このセクションでは、Turbolinux 10 Server オペレーティングシステムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について説明します。

32 ビット版

32 ビット版の Turbolinux 10 Server は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware Workstation**

Turbolinux 10 Server : Workstation 6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

- **VMware ACE : 試験的サポートのみ**

Turbolinux 10 Server : ACE 2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

64 ビット版

64 ビット版の Turbolinux 10 Server は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware Workstation**

Turbolinux 10 Server : Workstation 6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

- **VMware ACE : 試験的サポートのみ**

Turbolinux 10 Server : ACE 2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

- **VMware Fusion**

Turbolinux 10 Server : Fusion 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

その他のサポート

- **SMP** : Fusion 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4 で 2 way をサポート

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

Turbolinux 10 Server は、標準の Turbolinux ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。ここでは、標準のディストリビューション CD を使用したインストールの手順を説明します。ただし、起動フロッピーまたはネットワークから Turbolinux 10 Server をインストールすることもできます。ご使用の VMware 製品で PXE サーバがサポートされている場合は、PXE サーバからインストールすることもできます。

オペレーティングシステムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

注意 VMware 仮想マシンで BusLogic 仮想 SCSI アダプタを使用した際、Linux ゲスト OS の多くでさまざまな問題が発生しています。このゲスト OS では、LSI Logic 仮想 SCSI アダプタを使用することをお勧めします。

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに Turbolinux 10 Server インストール CD を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、Turbolinux 10 Server のインストールを開始します。
- 3 残りの手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

多くの Linux ディストリビューションでは、VMware Tools のインストール後に IPv6 が有効になっていると、VMware Tools を **vmware-config-tools.pl** で構成することができません。この場合、VMware Tools は該当する仮想マシン向けにネットワークデバイスを正しく設定することができず、次のようなメッセージが表示されます。

```
Unloading pcnet32 module
unregister_netdevice: waiting for eth0 to become free
```

このメッセージは、仮想マシンを再起動するまで連続して繰り返し表示されます。Linux を実行する仮想マシンでこの問題を防ぐには、VMware Tools をインストールする前に IPv6 を無効にしておきます。

Linux を実行する仮想マシンで IPv6 を無効にするには

- 1 **/etc/sysconfig/network** ファイルに **NETWORKING_IPV6=yes** という行が含まれている場合は、この行を次のように変更します。

```
NETWORKING_IPV6=no
```

- 2 **/etc/modules.conf** ファイルに、次の行を追加します。

```
alias ipv6 off
alias net-pf-10 off
```

IPv6 を無効にすると、VMware Tools を正常にインストールし、構成できます。

既知の問題

Turbolinux 10 Server のインストールの最後での黒い画面表示

Workstation 6.5.x : TurboLinux 10 Server では、XGA (Extended Graphics Array) から VGA (Video Graphics Array) への切り替えに問題があるため、VMware Workstation でのインストール時に画面が黒くなります。この問題は、Turbolinux 10 Server オペレーティングシステムをインストールする最後のプロセスで発生します。インストールウィザードで [Finish] をクリックしたあと、画面が黒くなり、システムが再起動しなくなります。この問題を解決するには、ゲスト OS を手動で再起動します。

適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更

このゲスト OS のデフォルトのタイムキーピング構成では、問題が発生する可能性があります。Linux でのタイムキーピングのベスト プラクティスについては、ナレッジベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/1006427>) を参照してください。

ゲストのスクリーンセーバー

XFree86 3.x X サーバを稼働する Linux ホストでは、ゲスト OS でのスクリーンセーバーの使用は避けてください。ゲストでスクリーンセーバーを使用すると、大量の処理能力が必要なため、ホストの X サーバがフリーズする可能性があります。

異なるプロセッサへの移行

Linux 仮想マシンを AMD プロセッサ上で稼働するホストと Intel プロセッサ上で稼働するホストとの間で移行することはお勧めしません。

Linux ディストリビューションの多くは、インストール時に、インストール先の特定のプロセッサに適したカーネルを選択します。また、一部のディストリビューションは、デフォルトで GENERIC カーネルをインストールしますが、ユーザーが選択してインストールできるアーキテクチャ固有のカーネルも提供しています。このようなカーネルには、そのプロセッサでのみ利用できる命令が含まれている場合があります。異なる種類のプロセッサを使用するホストでこれらの命令を実行すると、悪影響が生じる可能性があります。

このため、AMD プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンは、Intel プロセッサを使用するホストに移行しても動作しないことがあります。逆に、Intel プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンを AMD プロセッサを使用するホストに移行しても動作しない場合があります。

これは仮想マシンに限られたものではなく、物理コンピュータでも発生する問題です。たとえば、Linux がインストールされたハードドライブを AMD マシンから Intel マシンに移動した場合、そのドライブから起動しようとする問題が発生します。

X から VGA への切り替えに関する問題

TurboLinux 10 Server では、X から VGA に切り替えると画面が黒くなるなどの問題が発生します。この問題は、Turbolinux 10 Server オペレーティングシステムをインストールする最後のプロセスで発生します。インストール ウィザードで [Finish] をクリックしたあと、画面が黒くなり、システムが再起動しなくなります。

回避策：<Enter> キーを押して再起動を続行します。

Turbolinux 10 Desktop

このセクションでは、Turbolinux 10 Desktop オペレーティング システムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について説明します。

32 ビット版

32 ビット版の Turbolinux 10 Desktop は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware Workstation**

Turbolinux 10 Desktop : Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

- **VMware ACE**

Turbolinux 10 Desktop : ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

- **VMware Server**

Turbolinux 10 Desktop : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9、2.0、2.0.1

- **VMware Fusion**

Turbolinux 10 Desktop : Fusion 1.0、1.1、1.1.1、1.1.2、1.1.3、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

Turbolinux 10 Desktop は、標準の Turbolinux ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。ここでは、標準のディストリビューション CD を使用したインストールの手順を説明します。ただし、起動フロッピーまたはネットワークから Turbolinux 10 Desktop をインストールすることもできます。ご使用の VMware 製品で PXE サーバがサポートされている場合は、PXE サーバからインストールすることもできます。

オペレーティング システムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

注意 VMware 仮想マシンで BusLogic 仮想 SCSI アダプタを使用した際、Linux ゲスト OS の多くでさまざまな問題が発生しています。このゲスト OS では、LSI Logic 仮想 SCSI アダプタを使用することをお勧めします。

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに Turbolinux 10 Desktop インストール CD を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、Turbolinux 10 Desktop のインストールを開始します。
- 3 残りの手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

多くの Linux ディストリビューションでは、VMware Tools のインストール後に IPv6 が有効になっていると、VMware Tools を **vmware-config-tools.pl** で構成することができません。この場合、VMware Tools は該当する仮想マシン向けにネットワークデバイスを正しく設定することができず、次のようなメッセージが表示されます。

```
Unloading pcnet32 module
unregister_netdevice: waiting for eth0 to become free
```

このメッセージは、仮想マシンを再起動するまで連続して繰り返し表示されます。Linux を実行する仮想マシンでこの問題を防ぐには、VMware Tools をインストールする前に IPv6 を無効にしておきます。

Linux を実行する仮想マシンで IPv6 を無効にするには

- 1 `/etc/sysconfig/network` ファイルに `NETWORKING_IPV6=yes` という行が含まれている場合は、この行を次のように変更します。

```
NETWORKING_IPV6=no
```

- 2 `/etc/modules.conf` ファイルに、次の行を追加します。

```
alias ipv6 off
alias net-pf-10 off
```

IPv6 を無効にすると、VMware Tools を正常にインストールし、構成できます。

既知の問題

適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更

このゲスト OS のデフォルトのタイムキーピング構成では、問題が発生する可能性があります。Linux でのタイムキーピングのベスト プラクティスについては、ナレッジベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/1006427>) を参照してください。

ゲストのスクリーンセーバー

XFree86 3.x X サーバを稼働する Linux ホストでは、ゲスト OS でのスクリーンセーバーの使用は避けてください。ゲストでスクリーンセーバーを使用すると、大量の処理能力が必要なため、ホストの X サーバがフリーズする可能性があります。

異なるプロセッサへの移行

Linux 仮想マシンを AMD プロセッサ上で稼働するホストと Intel プロセッサ上で稼働するホストとの間で移行することはお勧めしません。

Linux ディストリビューションの多くは、インストール時に、インストール先の特定のプロセッサに適したカーネルを選択します。また、一部のディストリビューションは、デフォルトで GENERIC カーネルをインストールしますが、ユーザーが選択してインストールできるアーキテクチャ固有のカーネルも提供しています。このようなカーネルには、そのプロセッサでのみ利用できる命令が含まれている場合があります。異なる種類のプロセッサを使用するホストでこれらの命令を実行すると、悪影響が生じる可能性があります。

このため、AMD プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンは、Intel プロセッサを使用するホストに移行しても動作しないことがあります。逆に、Intel プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンを AMD プロセッサを使用するホストに移行しても動作しない場合があります。

これは仮想マシンに限られたものではなく、物理コンピュータでも発生する問題です。たとえば、Linux がインストールされたハードドライブを AMD マシンから Intel マシンに移動した場合、そのドライブから起動しようとすると問題が発生します。

Turbolinux Enterprise Server 8

このセクションでは、Turbolinux Enterprise Server 8 オペレーティングシステムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について説明します。

32 ビット版

32 ビット版の Turbolinux Enterprise Server 8 は、次の VMware 製品でサポートされています。

■ VMware Workstation

Turbolinux Enterprise Server 8 : Workstation 4.0、4.0.1、4.0.2、4.0.5、4.5、4.5.1、4.5.2、4.5.3、5.0、5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

- **SMP :** Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way を試験的にサポート

■ VMware ACE

Turbolinux Enterprise Server 8 : ACE 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

■ VMware GSX Server

Turbolinux Enterprise Server 8 : GSX Server 3.0、3.1、3.2、3.2.1

■ VMware Server

Turbolinux Enterprise Server 8 : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9

その他のサポート

- **SMP :** VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9 で 2 way を試験的にサポート

■ VMware Fusion

Turbolinux Enterprise Server 8 : Fusion 1.0、1.1、1.1.1、1.1.2、1.1.3、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

TLES 8 (Turbolinux Enterprise Server 8) は、標準の Turbolinux ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。ここでは、標準のディストリビューション CD を使用したインストールの手順を説明します。ただし、起動フロッピーまたはネットワークから TLES 8 をインストールすることもできます。ご使用の VMware 製品で PXE サーバがサポートされている場合は、PXE サーバからインストールすることもできます。

オペレーティングシステムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。



要注意

TLES 8 をインストールしても X サーバはインストールされません。仮想マシン内でアクセラレータ機能付き SVGA X サーバを実行するには、TLES 8 のインストール完了後、ただちに VMware Tools パッケージをインストールします。

注意

VMware 仮想マシンで BusLogic 仮想 SCSI アダプタを使用した際、Linux ゲスト OS の多くでさまざまな問題が発生しています。このゲスト OS では、LSI Logic 仮想 SCSI アダプタを使用することをお勧めします。

注意

VMware VirtualCenter または vCenter Server を使用してゲスト OS をインストールする場合は、その仮想マシンを実行する VMware 製品 (ESX Server または VMware Server) で該当するゲスト OS がサポートされていることを確認してください。

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに TLES 8 インストール CD を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、TLES 8 のインストールを開始します。
- 3 次の手順で説明している選択画面が表示されるまで、物理マシンの場合と同じように、画面の指示に従ってインストールを実行します。
- 4 テキスト モードのインストーラを使用してインストールします。テキスト モードのインストーラを選択するには、最初のインストール画面で、<F2> キーを押してから <Enter> キーを押します。
- 5 X サーバをインストールするよう求められますが、インストールしないでください。[Desktop Settings] 画面で、[Text Mode Only] を選択します。[Accept] をクリックしてインストールを完了します。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

多くの Linux ディストリビューションでは、VMware Tools のインストール後に IPv6 が有効になっていると、VMware Tools を **vmware-config-tools.pl** で構成することができません。この場合、VMware Tools は該当する仮想マシン向けにネットワーク デバイスを正しく設定することができず、次のようなメッセージが表示されます。

```
Unloading pcnet32 module
unregister_netdevice: waiting for eth0 to become free
```

このメッセージは、仮想マシンを再起動するまで連続して繰り返し表示されます。Linux を実行する仮想マシンでこの問題を防ぐには、VMware Tools をインストールする前に IPv6 を無効にしておきます。

Linux を実行する仮想マシンで IPv6 を無効にするには

- 1 `/etc/sysconfig/network` ファイルに `NETWORKING_IPV6=yes` という行が含まれている場合は、この行を次のように変更します。

```
NETWORKING_IPV6=no
```

- 2 `/etc/modules.conf` ファイルに、次の行を追加します。

```
alias ipv6 off
alias net-pf-10 off
```

IPv6 を無効にすると、VMware Tools を正常にインストールし、構成できます。

VMware Tools をインストールし、SaX2 コンフィグレーション ユーティリティを実行するまでは、ゲスト OS で X サーバを起動しないでください。「[X サーバを起動する前に](#)」を参照してください。

X サーバを起動する前に

VMware Tools をインストールしたあと、X サーバを起動する前に、root ユーザーの権限で SaX2 コンフィグレーション ユーティリティを実行して X サーバを構成します。コマンド プロンプトで **SaX2** と入力し、ウィザードを使用して X サーバを構成します。

GSX Server : VMware Virtual Machine Console を使用してこの仮想マシンに接続する場合は、色の解像度を 65536 (16 ビット) 以下に設定します。

SaX2 を実行したあと、GRUB が表示する任意の選択肢を使用して TLES 8 仮想マシンを起動できます。

既知の問題

適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更

このゲスト OS のデフォルトのタイムキーピング構成では、問題が発生する可能性があります。Linux でのタイムキーピングのベスト プラクティスについては、ナレッジベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/1006427>) を参照してください。

ゲストのスクリーンセーバー

XFree86 3.x X サーバを稼働する Linux ホストでは、ゲスト OS でのスクリーンセーバーの使用は避けてください。ゲストでスクリーンセーバーを使用すると、大量の処理能力が必要なため、ホストの X サーバがフリーズする可能性があります。

異なるプロセッサへの移行

Linux 仮想マシンを AMD プロセッサ上で稼働するホストと Intel プロセッサ上で稼働するホストとの間で移行することはお勧めしません。

Linux ディストリビューションの多くは、インストール時に、インストール先の特定のプロセッサに適したカーネルを選択します。また、一部のディストリビューションは、デフォルトで GENERIC カーネルをインストールしますが、ユーザーが選択してインストールできるアーキテクチャ固有のカーネルも提供しています。このようなカーネルには、そのプロセッサでのみ利用できる命令が含まれている場合があります。異なる種類のプロセッサを使用するホストでこれらの命令を実行すると、悪影響が生じる可能性があります。

このため、AMD プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンは、Intel プロセッサを使用するホストに移行しても動作しないことがあります。逆に、Intel プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンを AMD プロセッサを使用するホストに移行しても動作しない場合があります。

これは仮想マシンに限られたものではなく、物理コンピュータでも発生する問題です。たとえば、Linux がインストールされたハードドライブを AMD マシンから Intel マシンに移動した場合、そのドライブから起動しようとする問題が発生します。

Turbolinux Workstation 8

このセクションでは、Turbolinux Workstation 8 オペレーティングシステムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について説明します。

32 ビット版

32 ビット版の Turbolinux Workstation 8 は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware Workstation**

Turbolinux Workstation 8 : Workstation 4.0、4.0.1、4.0.2、4.0.5、4.5、4.5.1、4.5.2、4.5.3、5.0、5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

- **VMware ACE**

Turbolinux Workstation 8 : ACE 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

- **VMware GSX Server**

Turbolinux Workstation 8 : GSX Server 3.0、3.1、3.2、3.2.1

- **VMware Server**

Turbolinux Workstation 8 : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

Turbolinux Workstation 8 は、標準の Turbolinux ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。ここでは、標準のディストリビューション CD を使用したインストールの手順を説明します。ただし、起動フロップピーまたはネットワークから Turbolinux Workstation 8 をインストールすることもできます。ご使用の VMware 製品で PXE サーバがサポートされている場合は、PXE サーバからインストールすることもできます。

オペレーティングシステムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。



要注意

Turbolinux Workstation 8 をインストールしても X サーバはインストールされません。仮想マシン内でアクセラレータ機能付き SVGA X サーバを実行するには、Turbolinux Workstation 8 のインストール完了後、ただちに VMware Tools パッケージをインストールします。

注意

VMware 仮想マシンで BusLogic 仮想 SCSI アダプタを使用した際、Linux ゲスト OS の多くでさまざまな問題が発生しています。このゲスト OS では、LSI Logic 仮想 SCSI アダプタを使用することをお勧めします。

注意

VMware VirtualCenter または vCenter Server を使用してゲスト OS をインストールする場合は、その仮想マシンを実行する VMware 製品（ESX Server または VMware Server）で該当するゲスト OS がサポートされていることを確認してください。

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに Turbolinux Workstation 8 インストール CD を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、Turbolinux Workstation 8 のインストールを開始します。
- 3 次の手順で説明している選択画面が表示されるまで、物理マシンの場合と同じように、画面の指示に従ってインストールを実行します。
- 4 テキスト モードのインストーラを使用してインストールします。テキスト モードのインストーラを選択するには、最初のインストール画面で、<F2> キーを押してから <Enter> キーを押します。
- 5 X サーバをインストールするよう求められますが、インストールしないでください。[Desktop Settings] 画面で、[Text Mode Only] を選択します。[Accept] をクリックしてインストールを完了します。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

多くの Linux ディストリビューションでは、VMware Tools のインストール後に IPv6 が有効になっていると、VMware Tools を **vmware-config-tools.pl** で構成することができません。この場合、VMware Tools は該当する仮想マシン向けにネットワーク デバイスを正しく設定することができず、次のようなメッセージが表示されます。

```
Unloading pcnet32 module
unregister_netdevice: waiting for eth0 to become free
```

このメッセージは、仮想マシンを再起動するまで連続して繰り返し表示されます。Linux を実行する仮想マシンでこの問題を防ぐには、VMware Tools をインストールする前に IPv6 を無効にしておきます。

Linux を実行する仮想マシンで IPv6 を無効にするには

- 1 `/etc/sysconfig/network` ファイルに `NETWORKING_IPV6=yes` という行が含まれている場合は、この行を次のように変更します。

```
NETWORKING_IPV6=no
```

- 2 `/etc/modules.conf` ファイルに、次の行を追加します。

```
alias ipv6 off
alias net-pf-10 off
```

IPv6 を無効にすると、VMware Tools を正常にインストールし、構成できます。

VMware Tools をインストールし、SaX2 コンフィグレーション ユーティリティを実行するまでは、ゲスト OS で X サーバを起動しないでください。「[X サーバを起動する前に](#)」を参照してください。

X サーバを起動する前に

VMware Tools をインストールしたあと、X サーバを起動する前に、root ユーザーの権限で SaX2 コンフィグレーション ユーティリティを実行して X サーバを構成します。コマンド プロンプトで **SaX2** と入力し、ウィザードを使用して X サーバを構成します。

GSX Server : VMware Virtual Machine Console を使用してこの仮想マシンに接続する場合は、色の解像度を 65536 (16 ビット) 以下に設定します。

SaX2 を実行したあと、GRUB が表示する任意の選択肢を使用して Turbolinux Workstation 8 仮想マシンを起動できます。

既知の問題

適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更

このゲスト OS のデフォルトのタイムキーピング構成では、問題が発生する可能性があります。Linux でのタイムキーピングのベスト プラクティスについては、ナレッジベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/1006427>) を参照してください。

ゲストのスクリーン セーバー

XFree86 3.x X サーバを稼動する Linux ホストでは、ゲスト OS でのスクリーン セーバーの使用は避けてください。ゲストでスクリーン セーバーを使用すると、大量の処理能力が必要なため、ホストの X サーバがフリーズする可能性があります。

異なるプロセッサへの移行

Linux 仮想マシンを AMD プロセッサ上で稼働するホストと Intel プロセッサ上で稼働するホストとの間で移行することはお勧めしません。

Linux ディストリビューションの多くは、インストール時に、インストール先の特定のプロセッサに適したカーネルを選択します。また、一部のディストリビューションは、デフォルトで GENERIC カーネルをインストールしますが、ユーザーが選択してインストールできるアーキテクチャ固有のカーネルも提供しています。このようなカーネルには、そのプロセッサでのみ利用できる命令が含まれている場合があります。異なる種類のプロセッサを使用するホストでこれらの命令を実行すると、悪影響が生じる可能性があります。

このため、AMD プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンは、Intel プロセッサを使用するホストに移行しても動作しないことがあります。逆に、Intel プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンを AMD プロセッサを使用するホストに移行しても動作しない場合があります。

これは仮想マシンに限られたものではなく、物理コンピュータでも発生する問題です。たとえば、Linux がインストールされたハード ドライブを AMD マシンから Intel マシンに移動した場合、そのドライブから起動しようとすると問題が発生します。

Turbolinux 7.0

このセクションでは、Turbolinux 7.0 オペレーティングシステムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について説明します。

32 ビット版

32 ビット版の Turbolinux 7 は、次の VMware 製品でサポートされています。

■ VMware Workstation

Turbolinux 7.0 : Workstation 4.0、4.0.1、4.0.2、4.0.5、4.5、4.5.1、4.5.2、4.5.3、5.0、5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

- **SMP :** Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way を試験的にサポート

■ VMware ACE

Turbolinux 7.0 : ACE 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

■ VMware GSX Server

Turbolinux 7.0 : GSX Server 3.0、3.1、3.2、3.2.1

■ VMware Server

Turbolinux 7.0 : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9

その他のサポート

- **SMP :** VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9 で 2 way を試験的にサポート

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

Turbolinux 7.0 は、標準の Turbolinux 7.0 ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。ここでは、標準のディストリビューション CD を使用したインストールの手順を説明します。ただし、起動フロッピーまたはネットワークから Turbolinux 7.0 をインストールすることもできます。ご使用の VMware 製品で PXE サーバがサポートされている場合は、PXE サーバからインストールすることもできます。

オペレーティングシステムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

注意	Turbolinux 7.0 をインストールすると、標準の VGA16 X サーバ (VMware ディスプレイアダプタを未サポート) がインストールされます。仮想マシン内でアクセラレータ機能付き SVGA X サーバを実行するには、Turbolinux 7.0 のインストール完了後、X サーバを起動する前に、ただちに VMware Tools パッケージをインストールします。
注意	VMware 仮想マシンで BusLogic 仮想 SCSI アダプタを使用した際、Linux ゲスト OS の多くでさまざまな問題が発生しています。このゲスト OS では、LSI Logic 仮想 SCSI アダプタを使用することをお勧めします。
注意	VMware VirtualCenter または vCenter Server を使用してゲスト OS をインストールする場合は、その仮想マシンを実行する VMware 製品 (ESX Server または VMware Server) で該当するゲスト OS がサポートされていることを確認してください。

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに Turbolinux 7.0 CD No. 1 を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、Turbolinux 7.0 のインストールを開始します。
- 3 次の手順で説明している選択画面が表示されるまで、物理マシンの場合と同じように、画面の指示に従ってインストールを実行します。
- 4 [Configure Monitor] 画面で、デフォルト値を使用して X サーバを構成します。ゲスト OS をインストールしたあと、VMware Tools のインストール時に別の X サーバがインストールされますが、ここで一度 X サーバを構成しておく必要があります。
- 5 Turbolinux 7.0 の残りのインストール手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。

この時点で、Turbolinux 7.0 が起動し、ログイン画面が表示されます。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

多くの Linux ディストリビューションでは、VMware Tools のインストール後に IPv6 が有効になっていると、VMware Tools を **vmware-config-tools.pl** で構成することができません。この場合、VMware Tools は該当する仮想マシン向けにネットワーク デバイスを正しく設定することができず、次のようなメッセージが表示されます。

```
Unloading pcnet32 module
unregister_netdevice: waiting for eth0 to become free
```

このメッセージは、仮想マシンを再起動するまで連続して繰り返し表示されます。Linux を実行する仮想マシンでこの問題を防ぐには、VMware Tools をインストールする前に IPv6 を無効にしておきます。

Linux を実行する仮想マシンで IPv6 を無効にするには

- 1 `/etc/sysconfig/network` ファイルに `NETWORKING_IPV6=yes` という行が含まれている場合は、この行を次のように変更します。

```
NETWORKING_IPV6=no
```

- 2 `/etc/modules.conf` ファイルに、次の行を追加します。

```
alias ipv6 off
alias net-pf-10 off
```

IPv6 を無効にすると、VMware Tools を正常にインストールし、構成できます。

VMware Tools をインストールするまでは、ゲスト OS で X サーバを起動しないでください。

VMware GSX Server : Turbolinux 7.0 ゲスト OS でスクリプトのテストを行う場合は、Turbolinux ゲスト OS をアップデートする必要があります。これは、Turbolinux の既知の問題です。

`ftp://ftp.turbolinux.com/pub/TurboLinux/TurboLinux/ia32/Workstation/7/updates/RPMS/updates-7.0.0-18.i586.rpm` でアップデートを入手してください。ゲスト OS でのスクリプトの実行の詳細は、GSX Server ドキュメントの「仮想マシンの電源操作時にスクリプトを実行」を参照してください。

既知の問題

適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更

このゲスト OS のデフォルトのタイムキーピング構成では、問題が発生する可能性があります。Linux でのタイムキーピングのベスト プラクティスについては、ナレッジベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/1006427>) を参照してください。

ゲストのスクリーンセーバー

XFree86 3.x X サーバを稼働する Linux ホストでは、ゲスト OS でのスクリーンセーバーの使用は避けてください。ゲストでスクリーンセーバーを使用すると、大量の処理能力が必要なため、ホストの X サーバがフリーズする可能性があります。

異なるプロセッサへの移行

Linux 仮想マシンを AMD プロセッサ上で稼働するホストと Intel プロセッサ上で稼働するホストとの間で移行することはお勧めしません。

Linux ディストリビューションの多くは、インストール時に、インストール先の特定のプロセッサに適したカーネルを選択します。また、一部のディストリビューションは、デフォルトで GENERIC カーネルをインストールしますが、ユーザーが選択してインストールできるアーキテクチャ固有のカーネルも提供しています。このようなカーネルには、そのプロセッサでのみ利用できる命令が含まれている場合があります。異なる種類のプロセッサを使用するホストでこれらの命令を実行すると、悪影響が生じる可能性があります。

このため、AMD プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンは、Intel プロセッサを使用するホストに移行しても動作しないことがあります。逆に、Intel プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンを AMD プロセッサを使用するホストに移行しても動作しない場合があります。

これは仮想マシンに限られたものではなく、物理コンピュータでも発生する問題です。たとえば、Linux がインストールされたハードドライブを AMD マシンから Intel マシンに移動した場合、そのドライブから起動しようとすると問題が発生します。

Ubuntu 8.10

このセクションでは、Ubuntu 8.10 オペレーティングシステムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について説明します。

32 ビット版

32 ビット版の Ubuntu 8.10 は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware Workstation**

Desktop Edition : Workstation 6.5.2

Server Edition : Workstation 6.5.2

- **VMware ESX Server**

Desktop Edition : ESX 3.5 U4、ESX 4.0

Server Edition : ESX 3.5 U4、ESX 4.0

その他のサポート

- **SMP** : ESX 3.5 U4、ESX 4.0 でフル サポート

- **VMware Tools OSP (Operating System Specific Package)** : ESX Server 3.5 Update 4 で 32 ビットの Ubuntu 8.10 をサポート。詳細については、『VMware Tools インストール ガイド Operating System Specific Package (VMware Tools Installation Guide Operating System Specific Packages)』を参照してください。
http://www.vmware.com/pdf/osp_install_guide.pdf

- **vmxnet3 ネットワーク アダプタ** : すべての Ubuntu Linux 8.10 リリースをサポート

- **VMware Fusion**

Desktop Edition : Fusion 2.0.2, 2.0.3, 2.0.4

その他のサポート

- **SMP** : Fusion 2.0.2、2.0.3、2.0.4 でフル サポート

64 ビット版

64 ビット版の Ubuntu 8.10 は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware Workstation**

Desktop Edition : Workstation 6.5.2

Server Edition : Workstation 6.5.2

- **VMware ESX Server**

Desktop Edition : ESX 3.5 U4、 ESX 4.0

Server Edition : ESX 3.5 U4、 ESX 4.0

その他のサポート

- **SMP** : ESX 3.5 U4、 ESX 4.0 でフル サポート

- **VMware Tools OSP (Operating System Specific Package)** : ESX Server 3.5 Update 4 で 64 ビットの Ubuntu をサポート。詳細については、『VMware Tools インストール ガイド Operating System Specific Package (VMware Tools Installation Guide Operating System Specific Packages)』を参照してください。

http://www.vmware.com/pdf/osp_install_guide.pdf

- **vmxnet3 ネットワーク アダプタ** : すべての Ubuntu Linux 8.10 リリースをサポート

- **VMware Fusion**

Desktop Edition : Fusion 2.0.2、 2.0.3、 2.0.4

その他のサポート

- **SMP** : Fusion 2.0.2、 2.0.3、 2.0.4 でフル サポート

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

Ubuntu 8.10 は、標準の Ubuntu 8.10 ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。

オペレーティング システムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

注意 VMware 仮想マシンで BusLogic 仮想 SCSI アダプタを使用した際、Linux ゲスト OS の多くでさまざまな問題が発生しています。このゲスト OS では、LSI Logic 仮想 SCSI アダプタを使用することをお勧めします。

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに Ubuntu 8.10 CD を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、Ubuntu 8.10 のインストールを開始します。
- 3 Ubuntu 8.10 インストーラが、仮想ディスクに必要なファイルをコピーしたあとインストール CD をイジェクトし、コンピュータが再起動されることを示すメッセージを表示します。仮想マシンが正常に再起動しない場合は、[Reset] ボタンをクリックして再起動します。
- 4 残りの手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。

注意 インストール中に、メッセージ「**Configuring apt/ Scanning the mirror**」が表示されます。これは、ネットワークのスキャン中であることを示します。使用環境で HTTP プロキシを使用していると、このメッセージが 10 分以上表示されることがあります。これは、インストールが遅延していることを意味します。しばらくそのままにしておくと、ネットワークのスキャンが終了し、インストールがレジュームされます。インストールが完了したら、Ubuntu 8.10 ユーザー インターフェイスから、[System] - [Preferences] - [Network Proxy] を選択し、[Network Proxy Preferences] ダイアログ ボックスで HTTP プロキシを設定します。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

注意 Ubuntu 8.10 の場合、tar インストーラを使用して VMware Tools をインストールします。

tar インストーラを使用して VMware Tools をインストールするには、Ubuntu ゲストで root を有効にする必要があります。次の手順は、VMware Tools のインストール前またはインストール中に完了できます。

Ubuntu を実行する仮想マシンで root を有効にするには

Ubuntu Desktop Edition

- 1 [System] - [Administration] - [Login] - [Window] を選択し、[Security] タブをクリックします。
- 2 [Allow local system administrator login] チェック ボックスを選択し、[Close] をクリックします。
- 3 [System] - [Administration] - [Users and Groups] を選択し、[Unlock] をクリックします。
- 4 [Authenticate] ウィンドウでパスワードを入力し、[Authenticate] をクリックします。
- 5 root を選択して [Properties] をクリックし、[Set password by hand] で root パスワードを設定します。

IPv6

IPv6 はブリッジ ネットワークに対応していますが、IPv6 ネットワークが無効になっている場合、多くの Ubuntu ディストリビューションは起動時間が短縮されます。IPv6 プロトコルが有効で、仮想マシンが IPv6 プロトコルを使用して通信できない場合、インストール後に **vmware-config-tools.pl** を使用して VMware Tools を正しく構成できない場合があります。

Ubuntu の一部のバージョンを実行する仮想マシンでこの問題を防ぐには、VMware Tools をインストールする前に IPv6 を無効にしておきます。

注意 VMware ESX 4.0 以降のリリースでは IPv6 がサポートされています。VMware Tools のインストール前に IPv6 を無効にする必要はありません。

Ubuntu を実行する仮想マシンで IPv6 を無効にするには

- 1 root またはスーパーユーザーとしてログオンします。
- 2 **/etc/modprobe.d/aliases** ファイルで次の行を変更します。
alias net-pf-10 ipv6
 これを次に変更します。
alias net-pf-10 off
- 3 ファイルを保存し、システムを再起動します。

IPv6 を無効にすると、VMware Tools を正常にインストールし、構成できます。

既知の問題

32 ビットの Ubuntu ゲストに VMware Tools をインストールしたあとのネットワークアダプタ エラー メッセージ

このゲストの 32 ビット バージョンをインストールしたあとに、エラー メッセージ [2355.842517] <unknown>: hw csun failure が表示された場合は、ネットワーク アダプタを変更する必要がある可能性があります。詳細は、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/1008972>) を参照してください。

TSC クロックソースを使用して Linux が稼働している SMP 仮想マシンでの応答の停止またはストール

このゲスト OS では、仮想マシンでの応答停止またはストールの原因となる TSC クロックソースの問題が発生する可能性があります。詳細は、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/1007020>) を参照してください。

適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更

このゲスト OS のデフォルトのタイムキーピング構成では、問題が発生する可能性があります。Linux でのタイムキーピングのベスト プラクティスについては、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/1006427>) を参照してください。

異なるプロセッサへの移行

Linux 仮想マシンを AMD プロセッサ上で稼働するホストと Intel プロセッサ上で稼働するホストとの間で移行することはお勧めしません。

Linux ディストリビューションの多くは、インストール時に、インストール先の特定のプロセッサに適したカーネルを選択します。また、一部のディストリビューションは、デフォルトで GENERIC カーネルをインストールしますが、ユーザーが選択してインストールできるアーキテクチャ固有のカーネルも提供しています。このようなカーネルには、そのプロセッサでのみ利用できる命令が含まれている場合があります。異なる種類のプロセッサを使用するホストでこれらの命令を実行すると、悪影響が生じる可能性があります。

このため、AMD プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンは、Intel プロセッサを使用するホストに移行しても動作しないことがあります。逆に、Intel プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンを AMD プロセッサを使用するホストに移行しても動作しない場合があります。

これは仮想マシンに限られたものではなく、物理コンピュータでも発生する問題です。たとえば、Linux がインストールされたハード ドライブを AMD マシンから Intel マシンに移動した場合、そのドライブから起動しようとする問題が発生します。

Ubuntu 8.04 LTS

このセクションでは、Ubuntu 8.04 LTS オペレーティング システムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について説明します。

32 ビット版

32 ビット版の Ubuntu 8.04 LTS は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware Workstation**

Server Edition : Workstation 6.5、6.5.1、6.5.2

Desktop Edition : Workstation 6.5、6.5.1、6.5.2

アップデート版のサポート

- **Ubuntu 8.04.1 LTS** : Workstation 6.5、6.5.1、6.5.2 で試験的にサポート

- **Ubuntu 8.04.2 LTS** : Workstation 6.5.2

- **VMware ACE**

Server Edition : ACE 2.5、2.5.1、2.5.2

Desktop Edition : ACE 2.5、2.5.1、2.5.2

- **VMware Server**

Server Edition : VMware Server 2.0、2.0.1

Desktop Edition : VMware Server 2.0、2.0.1

- **VMware ESX Server**

Server Edition : ESX 3.0.3 (Patch ESX303-200808405-BG が必要。詳細は <http://kb.vmware.com/kb/1006036> を参照)、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

Desktop Edition : ESX 3.0.3 (Patch ESX303-200808405-BG が必要。詳細は <http://kb.vmware.com/kb/1006036> を参照)、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

Server Edition JeOS : ESX 3.0.3 (Patch ESX303-200808405-BG が必要。詳細は <http://kb.vmware.com/kb/1006036> を参照)、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

アップデート版のサポート

- **Ubuntu 8.04.1 LTS** : ESX 3.0.3 (Patch ESX303-200808405-BG が必要。詳細は <http://kb.vmware.com/kb/1006036> を参照)、3.5 U3、3.5 U4、4.0
- **Ubuntu 8.04.2 LTS** : ESX 3.0.3 (事前作成済みのカーネル モジュールのサポートにはパッチ ESX303-200905401-SG が必要)、3.5 U3 (事前作成済みのカーネル モジュールは含まず。詳細は <http://kb.vmware.com/kb/1008973> を参照)、3.5 U4 (事前作成済みのカーネル モジュールのサポートを含む)

その他のサポート

- **SMP** : ESX 3.0.3、ESX 3.5 U2、ESX 3.5 U3、3.5 U4、4.0 でフル サポート
- **VMI** : ESX 3.5 U2、ESX 3.5 U3、3.5 U4、4.0 でフル サポート
- **VMware Tools OSP (Operating System Specific Package)** : ESX Server 3.5 Update 2、3.5 Update 3、および 3.5 Update 4 で 32 ビットの Ubuntu 8.04 LTS および 8.04.1 をサポート。また、OSP は ESX Server 3.5 Update 4 で 32 ビットの Ubuntu 8.04.2 をサポート。詳細は、次の『VMware Tools インストール ガイド Operating System Specific Package (VMware Tools Installation Guide Operating System Specific Packages)』を参照してください。
http://www.vmware.com/pdf/osp_install_guide.pdf
- **vmxnet3 ネットワーク アダプタ** : すべての Ubuntu 8.04 LTS リリースをサポート

サポートでの考慮事項

- Ubuntu 8.04 では、VMware Virtual Machine Interface (VMI) に対応したカーネルが提供されています。このカーネルにより、仮想マシンで準仮想サポートを有効にすると、ゲスト OS のパフォーマンスが向上します。一般的な準仮想化の詳細は、次のバイエムウェアの Web サイトを参照してください。
<http://www.vmware.com/interfaces/paravirtualization.html>

■ VMware Fusion

Ubuntu 8.0.4 : Fusion 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

アップデート版のサポート

- **Ubuntu 8.04.1 LTS** : Fusion 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

その他のサポート

- **SMP** : Fusion 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4 でフル サポート

64 ビット版

64 ビット版の Ubuntu 8.04 LTS は、次の VMware 製品でサポートされています。

■ VMware Workstation

Server Edition : Workstation 6.5、6.5.1、6.5.2

Desktop Edition : Workstation 6.5、6.5.1、6.5.2

アップデート版のサポート

■ Ubuntu 8.04.1 LTS : Workstation 6.5、6.5.1、6.5.2 で試験的にサポート

Ubuntu 8.04.2 LTS : Workstation 6.5.2

■ VMware ACE

Server Edition : ACE 2.5、2.5.1、2.5.2

Desktop Edition : ACE 2.5、2.5.1、2.5.2

■ VMware Server

Server Edition : VMware Server 2.0、2.0.1

Desktop Edition : VMware Server 2.0、2.0.1

■ VMware ESX Server

Server Edition : ESX 3.0.3 (Patch ESX303-200808405-BG が必要。詳細は <http://kb.vmware.com/kb/1006036> を参照)、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

Desktop Edition : ESX 3.0.3 (Patch ESX303-200808405-BG が必要。詳細は <http://kb.vmware.com/kb/1006036> を参照)、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

アップデート版のサポート

■ Ubuntu 8.04.1 LTS : ESX 3.0.3 (Patch ESX303-200808405-BG が必要。詳細は <http://kb.vmware.com/kb/1006036> を参照)、3.5 U3、3.5 U4、4.0

■ Ubuntu 8.04.2 LTS : ESX 3.0.3 (事前作成済みのカーネル モジュールのサポートにはパッチ ESX303-200905401-SG が必要)、3.5 U3 (事前作成済みのカーネル モジュールは含まず。詳細は <http://kb.vmware.com/kb/1008973> を参照)、3.5 U4 (事前作成済みのカーネル モジュールのサポートを含む)

その他のサポート

- **SMP** : ESX 3.0.3、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0 でフル サポート
- **VMware Tools OSP (Operating System Specific Package)** : ESX Server 3.5 Update 2、3.5 Update 3、および 3.5 Update 4 で 64 ビットの Ubuntu 8.04 LTS および 8.04.1 をサポート。また、OSP は ESX Server 3.5 Update 4 で 32 ビットの Ubuntu 8.04.2 をサポート。詳細は、次の『VMware Tools インストール ガイド Operating System Specific Package (VMware Tools Installation Guide Operating System Specific Packages)』を参照してください。
http://www.vmware.com/pdf/osp_install_guide.pdf
- **vmxnet3 ネットワーク アダプタ** : すべての Ubuntu 8.04 LTS リリースをサポート
- **VMware Fusion**
Ubuntu 8.04.1 LTS : Fusion 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

その他のサポート

- **SMP** : Fusion 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4 でフル サポート

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

Ubuntu 8.04 LTS は、標準の Ubuntu 8.04 LTS ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。

オペレーティング システムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

注意 VMware 仮想マシンで BusLogic 仮想 SCSI アダプタを使用した際、Linux ゲスト OS の多くでさまざまな問題が発生しています。このゲスト OS では、LSI Logic 仮想 SCSI アダプタを使用することをお勧めします。

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに Ubuntu 8.04 LTS CD を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、Ubuntu 8.04 LTS のインストールを開始します。

- 3 Ubuntu 8.04 LTS インストーラが、仮想ディスクに必要なファイルをコピーしたあとインストール CD をイジェクトし、コンピュータが再起動されることを示すメッセージを表示します。仮想マシンが正常に再起動しない場合は、[Reset] ボタンをクリックして再起動します。
- 4 残りの手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。

注意 インストール中に、メッセージ「**Configuring apt/ Scanning the mirror**」が表示されます。これは、ネットワークのスキャン中であることを示します。使用環境で HTTP プロキシを使用していると、このメッセージが 10 分以上表示されることがあります。これは、インストールが遅延していることを意味します。しばらくそのままにしておくと、ネットワークのスキャンが終了し、インストールがレジュームされます。インストールが完了したら、Ubuntu 8.04 LTS ユーザー インターフェイスから、[System] - [Preferences] - [Network Proxy] を選択し、[Network Proxy Preferences] ダイアログボックスで HTTP プロキシを設定します。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

注意 Ubuntu 8.04 LTS、8.04.1、および 8.04.2 の場合、tar インストーラまたは適切な OSP を使用して VMware Tools をインストールできます。VMware Tools OSP のダウンロード、インストール、およびアップグレードに関する詳細な説明については、次の『VMware Tools インストール ガイド Operating System Specific Package (VMware Tools Installation Guide Operating System Specific Packages)』を参照してください。
http://www.vmware.com/pdf/osp_install_guide.pdf

tar インストーラを使用して VMware Tools をインストールするには、Ubuntu ゲストで root を有効にする必要があります。次の手順は、VMware Tools のインストール前またはインストール中に完了できます。

Ubuntu を実行する仮想マシンで root を有効にするには

Ubuntu Server Edition

- 1 ターミナル ウィンドウを開きます。
- 2 通常ユーザーとしてログインします。
- 3 **sudo passwd root** と入力し、root パスワードを設定します。

Ubuntu Desktop Edition

- 1 [System] - [Administration] - [Login] - [Window] を選択し、[Security] タブをクリックします。
- 2 [Allow local system administrator login] チェック ボックスを選択し、[Close] をクリックします。
- 3 [System] - [Administration] - [Users and Groups] を選択し、[Unlock] をクリックします。
- 4 [Authenticate] ウィンドウでパスワードを入力し、[Authenticate] をクリックします。
- 5 root を選択して [Properties] をクリックし、[Set password by hand] で root パスワードを設定します。

IPv6

IPv6 はブリッジ ネットワークに対応していますが、IPv6 ネットワークが無効になっている場合、多くの Ubuntu ディストリビューションは起動時間が短縮されます。IPv6 プロトコルが有効で、仮想マシンが IPv6 プロトコルを使用して通信できない場合、インストール後に **vmware-config-tools.pl** を使用して VMware Tools を正しく構成できない場合があります。

Ubuntu の一部のバージョンを実行する仮想マシンでこの問題を防ぐには、VMware Tools をインストールする前に IPv6 を無効にしておきます。

注意 VMware ESX 4.0 以降のリリースでは IPv6 がサポートされています。VMware Tools のインストール前に IPv6 を無効にする必要はありません。

Ubuntu を実行する仮想マシンで IPv6 を無効にするには

- 1 root またはスーパーユーザーとしてログオンします。
- 2 **/etc/modprobe.d/aliases** ファイルで次の行を変更します。
alias net-pf-10 ipv6
 これを次に変更します。
alias net-pf-10 off
- 3 ファイルを保存し、システムを再起動します。

IPv6 を無効にすると、VMware Tools を正常にインストールし、構成できます。

既知の問題

32 ビット版の Ubuntu ゲストに VMware Tools をインストールしたあとのネットワークアダプタ エラー メッセージ

このゲストの 32 ビット バージョンをインストールしたあとに、エラー メッセージ [2355.842517] <unknown>: hw csum failure が表示された場合は、ネットワーク アダプタを変更する必要がある可能性があります。詳細は、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/1008972>) を参照してください。

TSC クロックソースを使用して Linux が稼働している SMP 仮想マシンでの応答の停止またはストール

このゲスト OS では、仮想マシンでの応答停止またはストールの原因となる TSC クロックソースの問題が発生する可能性があります。詳細は、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/1007020>) を参照してください。

適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更

このゲスト OS のデフォルトのタイムキーピング構成では、問題が発生する可能性があります。Linux でのタイムキーピングのベスト プラクティスについては、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/1006427>) を参照してください。

異なるプロセッサへの移行

Linux 仮想マシンを AMD プロセッサ上で稼働するホストと Intel プロセッサ上で稼働するホストとの間で移行することはお勧めしません。

Linux ディストリビューションの多くは、インストール時に、インストール先の特定のプロセッサに適したカーネルを選択します。また、一部のディストリビューションは、デフォルトで GENERIC カーネルをインストールしますが、ユーザーが選択してインストールできるアーキテクチャ固有のカーネルも提供しています。このようなカーネルには、そのプロセッサでのみ利用できる命令が含まれている場合があります。異なる種類のプロセッサを使用するホストでこれらの命令を実行すると、悪影響が生じる可能性があります。

このため、AMD プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンは、Intel プロセッサを使用するホストに移行しても動作しないことがあります。逆に、Intel プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンを AMD プロセッサを使用するホストに移行しても動作しない場合があります。

これは仮想マシンに限られたものではなく、物理コンピュータでも発生する問題です。たとえば、Linux がインストールされたハード ドライブを AMD マシンから Intel マシンに移動した場合、そのドライブから起動しようとする問題が発生します。

Ubuntu Linux 7.10

このセクションでは、Ubuntu Linux 7.10 オペレーティングシステムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について記述しています。

32 ビット版

32 ビット版の Ubuntu Linux 7.10 は、次の VMware 製品でサポートされています。

■ VMware Workstation

Ubuntu Linux 7.10 : Workstation 6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

■ VMI : Workstation 6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で試験的にサポート

■ vmxnet3 ネットワーク アダプタ : すべての Ubuntu Linux 7.10 リリースをサポート

サポートでの考慮事項

■ Ubuntu Linux 7.10 では、VMware Virtual Machine Interface (VMI) に対応したカーネルが提供されています。このカーネルにより、仮想マシンで準仮想サポートを有効にすると、ゲスト OS のパフォーマンスが向上します。一般的な準仮想化の詳細は、次のバイエムウェアの Web サイトを参照してください。

<http://www.vmware.com/interfaces/paravirtualization.html>

■ VMware Server

Server Edition : VMware Server 2.0、2.0.1

Desktop Edition : VMware Server 2.0、2.0.1

■ VMware ESX Server

Server Edition : ESX 3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

Desktop Edition : ESX 3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

その他のサポート

■ SMP : ESX 3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0 でフル サポート

■ VMI : ESX 3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0 でフル サポート

サポートでの考慮事項

- Ubuntu Linux 7.10 では、VMware Virtual Machine Interface (VMI) に対応したカーネルが提供されています。このカーネルにより、仮想マシンで準仮想サポートを有効にすると、ゲスト OS のパフォーマンスが向上します。一般的な準仮想化の詳細は、次のヴィエムウェアの Web サイトを参照してください。
<http://www.vmware.com/interfaces/paravirtualization.html>

64 ビット版

64 ビット版の Ubuntu Linux 7.10 は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware Workstation**

Ubuntu Linux 7.10 : Workstation 6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

- **VMware Server**

Server Edition : VMware Server 2.0、2.0.1

Desktop Edition : VMware Server 2.0、2.0.1

- **VMware ESX Server**

Server Edition : ESX 3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

Desktop Edition : ESX 3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

その他のサポート

- **SMP** : ESX 3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0 でフル サポート
- **vmxnet3 ネットワーク アダプタ** : すべての Ubuntu Linux 7.10 リリースをサポート

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

Ubuntu Linux 7.10 は、標準の Ubuntu Linux ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。

オペレーティング システムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

注意 VMware 仮想マシンで BusLogic 仮想 SCSI アダプタを使用した際、Linux ゲスト OS の多くでさまざまな問題が発生しています。このゲスト OS では、LSI Logic 仮想 SCSI アダプタを使用することをお勧めします。

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに Ubuntu Linux CD を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、Ubuntu Linux のインストールを開始します。
- 3 Ubuntu Linux インストーラが、仮想ディスクに必要なファイルをコピーしたあとインストール CD をイジェクトし、コンピュータが再起動されることを示すメッセージを表示します。仮想マシンが正常に再起動しない場合は、[Reset] ボタンをクリックして再起動します。
- 4 残りの手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。

注意 インストール中に、メッセージ「**Configuring apt/ Scanning the mirror**」が表示されます。これは、ネットワークのスキャン中であることを示します。使用環境で HTTP プロキシを使用していると、このメッセージが 10 分以上表示されることがあります。これは、インストールが遅延していることを意味します。しばらくそのままにしておくと、ネットワークのスキャンが終了し、インストールがレジュームされます。インストールが完了したら、Ubuntu Linux ユーザー インターフェイスから、[System] - [Preferences] - [Network Proxy] を選択し、[Network Proxy Preferences] ダイアログ ボックスで HTTP プロキシを設定します。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

注意 tar インストーラを使用して、Ubuntu Linux に VMware Tools をインストールする必要があります。

tar インストーラを使用して VMware Tools をインストールするには、Ubuntu ゲストで root を有効にする必要があります。次の手順は、VMware Tools のインストール前またはインストール中に完了できます。

Ubuntu Linux を実行する仮想マシンで root を有効にするには

Ubuntu Server Edition

- 1 ターミナルウィンドウを開きます。
- 2 通常ユーザーとしてログインします。

- 3 **sudo passwd root** と入力し、root パスワードを設定します。

Ubuntu Desktop Edition

- 1 [System] - [Administration] - [Login] - [Window] を選択し、[Security] タブをクリックします。
- 2 [Allow local system administrator login] チェック ボックスを選択し、[Close] をクリックします。
- 3 [System] - [Administration] - [Users and Groups] を選択し、[Unlock] をクリックします。
- 4 [Authenticate] ウィンドウでパスワードを入力し、[Authenticate] をクリックします。
- 5 root を選択して [Properties] をクリックし、[Set password by hand] で root パスワードを設定します。

IPv6

IPv6 はブリッジ ネットワークに対応していますが、IPv6 ネットワークが無効になっている場合、多くの Ubuntu Linux ディストリビューションは起動時間が短縮されます。IPv6 プロトコルが有効で、仮想マシンが IPv6 プロトコルを使用して通信できない場合、インストール後に **vmware-config-tools.pl** を使用して VMware Tools を正しく構成できない場合があります。

Ubuntu Linux の一部のバージョンを実行する仮想マシンでこの問題を防ぐには、VMware Tools をインストールする前に IPv6 を無効にしておきます。

注意 VMware ESX 4.0 以降のリリースでは IPv6 がサポートされています。VMware Tools のインストール前に IPv6 を無効にする必要はありません。

Ubuntu Linux を実行する仮想マシンで IPv6 を無効にするには

- 1 root またはスーパーユーザーとしてログオンします。
- 2 **/etc/modprobe.d/aliases** ファイルで次の行を変更します。
alias net-pf-10 ipv6
これを次に変更します。
alias net-pf-10 off
- 3 ファイルを保存し、システムを再起動します。

IPv6 を無効にすると、VMware Tools を正常にインストールし、構成できます。

既知の問題

32 ビット版の Ubuntu ゲストに VMware Tools をインストールしたあとのネットワークアダプタ エラー メッセージ

このゲストの 32 ビット バージョンをインストールしたあとに、エラー メッセージ [2355.842517] <unknown>: hw csun failure が表示された場合は、ネットワーク アダプタを変更する必要がある可能性があります。詳細は、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/1008972>) を参照してください。

TSC クロックソースを使用して Linux が稼働している SMP 仮想マシンでの応答の停止またはストール

このゲスト OS では、仮想マシンでの応答停止またはストールの原因となる TSC クロックソースの問題が発生する可能性があります。詳細は、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/1007020>) を参照してください。

適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更

このゲスト OS のデフォルトのタイムキーピング構成では、問題が発生する可能性があります。Linux でのタイムキーピングのベスト プラクティスについては、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/1006427>) を参照してください。

異なるプロセッサへの移行

Linux 仮想マシンを AMD プロセッサ上で稼働するホストと Intel プロセッサ上で稼働するホストとの間で移行することはお勧めしません。

Linux ディストリビューションの多くは、インストール時に、インストール先の特定のプロセッサに適したカーネルを選択します。また、一部のディストリビューションは、デフォルトで GENERIC カーネルをインストールしますが、ユーザーが選択してインストールできるアーキテクチャ固有のカーネルも提供しています。このようなカーネルには、そのプロセッサでのみ利用できる命令が含まれている場合があります。異なる種類のプロセッサを使用するホストでこれらの命令を実行すると、悪影響が生じる可能性があります。

このため、AMD プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンは、Intel プロセッサを使用するホストに移行しても動作しないことがあります。逆に、Intel プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンを AMD プロセッサを使用するホストに移行しても動作しない場合があります。

これは仮想マシンに限られたものではなく、物理コンピュータでも発生する問題です。たとえば、Linux がインストールされたハード ドライブを AMD マシンから Intel マシンに移動した場合、そのドライブから起動しようとする問題が発生します。

Ubuntu Linux 7.04

このセクションでは、Ubuntu Linux 7.04 オペレーティングシステムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について記述しています。

32 ビット版

32 ビット版の Ubuntu Linux 7.04 は、次の VMware 製品でサポートされています。

■ VMware Workstation

Ubuntu Linux 7.04 : Workstation 6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

- **SMP** : Workstation 6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way を試験的にサポート

- **VMI** : Workstation 6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 を試験的にサポート

サポートでの考慮事項

- Ubuntu Linux 7.04 では、VMware Virtual Machine Interface (VMI) に対応したカーネルが提供されています。このカーネルにより、仮想マシンで準仮想サポートを有効にすると、ゲスト OS のパフォーマンスが向上します。一般的な準仮想化の詳細は、次のヴァイエムウェアの Web サイトを参照してください。

<http://www.vmware.com/interfaces/paravirtualization.html>

■ VMware ACE

Ubuntu Linux 7.04 : ACE 2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

■ VMware Server

Server Edition : VMware Server 2.0、2.0.1

Desktop Edition : VMware Server 2.0、2.0.1

その他のサポート

- **SMP** : VMware Server 2.0、2.0.1 で 2 way をサポート

■ VMware ESX Server

Server Edition : ESX 3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

Desktop Edition : ESX 3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

その他のサポート

- **SMP** : ESX 3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0 でフル サポート
- **vmxnet3 ネットワーク アダプタ** : すべての Ubuntu Linux 7.04 リリースをサポート

サポートでの考慮事項

- ESX Server 3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 Update 1、3.5 Update 2、3.5 Update 3、または 3.5 Update 4 で稼動する Ubuntu Linux 7.04 での、読み取り専用ファイル システムの問題を回避するには、Ubuntu Linux 7.10 にアップグレードしてください。ナレッジ ベースの記事 51306 (<http://kb.vmware.com/kb/51306>) を参照してください。
- **VMware Fusion**
Ubuntu Linux 7.04 : Fusion 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

64 ビット版

64 ビット版の Ubuntu Linux 7.04 は、次の VMware 製品でサポートされています。

■ VMware Workstation

Ubuntu Linux 7.04 : Workstation 6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

- **SMP** : Workstation 6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way を試験的にサポート
- **VMware ACE**
Ubuntu Linux 7.04 : ACE 2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2
- **VMware Server**
Server Edition : VMware Server 2.0、2.0.1
Desktop Edition : VMware Server 2.0、2.0.1
その他のサポート
 - **SMP** : VMware Server 2.0、2.0.1 で 2 way をサポート

■ VMware ESX Server

Server Edition : 3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

Desktop Edition : 3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

その他のサポート

- **SMP** : ESX 3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0 でフルサポート
- **vmxnet3 ネットワーク アダプタ** : すべての Ubuntu Linux 7.04 リリースをサポート

サポートでの考慮事項

- ESX Server 3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 Update 1、3.5 Update 2、3.5 Update 3、または 3.5 Update 4 で稼動する Ubuntu Linux 7.04 での、読み取り専用ファイルシステムの問題を回避するには、Ubuntu Linux 7.10 にアップグレードしてください。ナレッジ ベースの記事 51306 (<http://kb.vmware.com/kb/51306>) を参照してください。

■ VMware Fusion

Ubuntu Linux 7.04 : Fusion 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

Ubuntu Linux 7.04 は、標準の Ubuntu Linux ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。

オペレーティング システムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

注意 VMware 仮想マシンで BusLogic 仮想 SCSI アダプタを使用した際、Linux ゲスト OS の多くでさまざまな問題が発生しています。このゲスト OS では、LSI Logic 仮想 SCSI アダプタを使用することをお勧めします。

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに Ubuntu Linux CD を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、Ubuntu Linux のインストールを開始します。

- 3 Ubuntu Linux インストーラが、仮想ディスクに必要なファイルをコピーしたあとインストール CD をイジェクトし、コンピュータが再起動されることを示すメッセージを表示します。仮想マシンが正常に再起動しない場合は、[Reset] ボタンをクリックして再起動します。
- 4 残りの手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。

注意 インストール中に、メッセージ「**Configuring apt/ Scanning the mirror**」が表示されます。これは、ネットワークのスキャン中であることを示します。使用環境で HTTP プロキシを使用していると、このメッセージが 10 分以上表示されることがあります。これは、インストールが遅延していることを意味します。しばらくそのままにしておくと、ネットワークのスキャンが終了し、インストールがレジュームされます。インストールが完了したら、Ubuntu Linux ユーザー インターフェイスから、[System] - [Preferences] - [Network Proxy] を選択し、[Network Proxy Preferences] ダイアログ ボックスで HTTP プロキシを設定します。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

注意 tar インストーラを使用して、Ubuntu Linux に VMware Tools をインストールする必要があります。

tar インストーラを使用して VMware Tools をインストールするには、Ubuntu ゲストで root を有効にする必要があります。次の手順は、VMware Tools のインストール前またはインストール中に完了できます。

Ubuntu Server Edition

- 1 ターミナル ウィンドウを開きます。
- 2 通常ユーザーとしてログインします。
- 3 **sudo passwd root** と入力し、root パスワードを設定します。

Ubuntu Desktop Edition

- 1 [System] - [Administration] - [Login] - [Window] を選択し、[Security] タブをクリックします。
- 2 [Allow local system administrator login] チェック ボックスを選択し、[Close] をクリックします。
- 3 [System] - [Administration] - [Users and Groups] を選択し、[Unlock] をクリックします。

- 4 [Authenticate] ウィンドウでパスワードを入力し、[Authenticate] をクリックします。
- 5 root を選択して [Properties] をクリックし、[Set password by hand] で root パスワードを設定します。

IPv6

IPv6 はブリッジ ネットワークに対応していますが、IPv6 ネットワークが無効になっている場合、多くの Ubuntu Linux ディストリビューションは起動時間が短縮されます。IPv6 プロトコルが有効で、仮想マシンが IPv6 プロトコルを使用して通信できない場合、インストール後に **vmware-config-tools.pl** を使用して VMware Tools を正しく構成できない場合があります。

Ubuntu Linux の一部のバージョンを実行する仮想マシンでこの問題を防ぐには、VMware Tools をインストールする前に IPv6 を無効にしておきます。

注意 VMware ESX 4.0 以降のリリースでは IPv6 がサポートされています。VMware Tools のインストール前に IPv6 を無効にする必要はありません。

Ubuntu Linux を実行する仮想マシンで IPv6 を無効にするには

- 1 root またはスーパーユーザーとしてログオンします。
- 2 **/etc/modprobe.d/aliases** ファイルで次の行を変更します。

```
alias net-pf-10 ipv6
```

これを次に変更します。

```
alias net-pf-10 off
```

- 3 ファイルを保存し、システムを再起動します。

IPv6 を無効にすると、VMware Tools を正常にインストールし、構成できます。

既知の問題

32 ビット版の Ubuntu ゲストに VMware Tools をインストールしたあとのネットワークアダプタ エラー メッセージ

このゲストの 32 ビット版をインストールしたあとに、エラー メッセージ [2355.842517] <unknown>: hw csุม failure が表示された場合は、ネットワーク アダプタを変更する必要がある可能性があります。詳細は、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/1008972>) を参照してください。

TSC クロックソースを使用して Linux が稼働している SMP 仮想マシンでの応答の停止またはストール

このゲスト OS では、仮想マシンでの応答停止またはストールの原因となる TSC クロックソースの問題が発生する可能性があります。詳細は、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/1007020>) を参照してください。

適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更

このゲスト OS のデフォルトのタイムキーピング構成では、問題が発生する可能性があります。Linux でのタイムキーピングのベスト プラクティスについては、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/1006427>) を参照してください。

異なるプロセッサへの移行

Linux 仮想マシンを AMD プロセッサ上で稼働するホストと Intel プロセッサ上で稼働するホストとの間で移行することはお勧めしません。

Linux ディストリビューションの多くは、インストール時に、インストール先の特定のプロセッサに適したカーネルを選択します。また、一部のディストリビューションは、デフォルトで GENERIC カーネルをインストールしますが、ユーザーが選択してインストールできるアーキテクチャ固有のカーネルも提供しています。このようなカーネルには、そのプロセッサでのみ利用できる命令が含まれている場合があります。異なる種類のプロセッサを使用するホストでこれらの命令を実行すると、悪影響が生じる可能性があります。

このため、AMD プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンは、Intel プロセッサを使用するホストに移行しても動作しないことがあります。逆に、Intel プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンを AMD プロセッサを使用するホストに移行しても動作しない場合があります。

これは仮想マシンに限られたものではなく、物理コンピュータでも発生する問題です。たとえば、Linux がインストールされたハード ドライブを AMD マシンから Intel マシンに移動した場合、そのドライブから起動しようとする問題が発生します。

Ubuntu Linux 6.10

このセクションでは、Ubuntu Linux 6.10 オペレーティングシステムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について記述しています。

32 ビット版

32 ビット版の Ubuntu Linux 6.10 は、次の VMware 製品でサポートされています。

■ VMware Workstation

Ubuntu Linux 6.10 : Workstation 6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

- SMP : Workstation 6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way を試験的にサポート

- Ubuntu Linux 6.10 での Eclipse 統合型仮想デバッグのサポート : Workstation 6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

試験的なサポート

Ubuntu Linux 7.04 : Workstation 5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7

その他のサポート

- SMP : Workstation 5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7 で 2 way をサポート

■ VMware ACE

Ubuntu Linux 6.10 : ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

■ VMware Server

Server Edition : VMware Server 2.0、2.0.1

Desktop Edition : VMware Server 2.0、2.0.1

その他のサポート

- SMP : VMware Server 2.0、2.0.1 で 2 way をサポート

■ VMware Fusion

Ubuntu Linux 6.10 : Fusion 1.0、1.1、1.1.1、1.1.2、1.1.3、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

64 ビット版

64 ビット版の Ubuntu Linux 6.10 は、次の VMware 製品でサポートされています。

■ VMware Workstation

Ubuntu Linux 6.10 : Workstation 6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

■ SMP : Workstation 6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way を試験的にサポート

■ Ubuntu Linux 6.10 での Eclipse 統合型仮想デバッグのサポート : Workstation 6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

試験的なサポート

Ubuntu Linux 7.04 : Workstation 5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7

その他のサポート

■ SMP : Workstation 5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7 で 2 way をサポート

■ VMware ACE

Ubuntu Linux 6.10 : ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

■ VMware Server

Server Edition : VMware Server 2.0、2.0.1

Desktop Edition : VMware Server 2.0、2.0.1

その他のサポート

■ SMP : VMware Server 2.0、2.0.1 で 2 way をサポート

■ VMware Fusion

Ubuntu Linux 6.10 : Fusion 1.0、1.1、1.1.1、1.1.2、1.1.3、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

Ubuntu Linux 6.10 は、標準の Ubuntu Linux ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。

オペレーティングシステムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

注意 VMware 仮想マシンで BusLogic 仮想 SCSI アダプタを使用した際、Linux ゲスト OS の多くでさまざまな問題が発生しています。このゲスト OS では、LSI Logic 仮想 SCSI アダプタを使用することをお勧めします。

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに Ubuntu Linux CD を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、Ubuntu Linux のインストールを開始します。
- 3 Ubuntu Linux インストーラが、仮想ディスクに必要なファイルをコピーしたあとインストール CD をイジェクトし、コンピュータが再起動されることを示すメッセージを表示します。仮想マシンが正常に再起動しない場合は、[Reset] ボタンをクリックして再起動します。
- 4 残りの手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

注意 tar インストーラを使用して、Ubuntu Linux に VMware Tools をインストールする必要があります。

tar インストーラを使用して VMware Tools をインストールするには、Ubuntu ゲストで root を有効にする必要があります。次の手順は、VMware Tools のインストール前またはインストール中に完了できます。

Ubuntu Server Edition

- 1 ターミナルウィンドウを開きます。
- 2 通常ユーザーとしてログインします。

- 3 **sudo passwd root** と入力し、root パスワードを設定します。

Ubuntu Desktop Edition

- 1 [System] - [Administration] - [Login] - [Window] を選択し、[Security] タブをクリックします。
- 2 [Allow local system administrator login] チェック ボックスを選択し、[Close] をクリックします。
- 3 [System] - [Administration] - [Users and Groups] を選択し、[Unlock] をクリックします。
- 4 [Authenticate] ウィンドウでパスワードを入力し、[Authenticate] をクリックします。
- 5 root を選択して [Properties] をクリックし、[Set password by hand] で root パスワードを設定します。

IPv6

IPv6 はブリッジ ネットワークに対応していますが、IPv6 ネットワークが無効になっている場合、多くの Ubuntu Linux ディストリビューションは起動時間が短縮されます。IPv6 プロトコルが有効で、仮想マシンが IPv6 プロトコルを使用して通信できない場合、インストール後に **vmware-config-tools.pl** を使用して VMware Tools を正しく構成できない場合があります。

Ubuntu Linux の一部のバージョンを実行する仮想マシンでこの問題を防ぐには、VMware Tools をインストールする前に IPv6 を無効にしておきます。

Ubuntu Linux を実行する仮想マシンで IPv6 を無効にするには

- 1 root またはスーパーユーザーとしてログオンします。
- 2 **/etc/modprobe.d/aliases** ファイルで次の行を変更します。

```
alias net-pf-10 ipv6
```

これを次に変更します。

```
alias net-pf-10 off
```

- 3 ファイルを保存し、システムを再起動します。

IPv6 を無効にすると、VMware Tools を正常にインストールし、構成できます。

既知の問題

適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更

このゲスト OS のデフォルトのタイムキーピング構成では、問題が発生する可能性があります。Linux でのタイムキーピングのベスト プラクティスについては、ナレッジベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/1006427>) を参照してください。

異なるプロセッサへの移行

Linux 仮想マシンを AMD プロセッサ上で稼働するホストと Intel プロセッサ上で稼働するホストとの間で移行することはお勧めしません。

Linux ディストリビューションの多くは、インストール時に、インストール先の特定のプロセッサに適したカーネルを選択します。また、一部のディストリビューションは、デフォルトで GENERIC カーネルをインストールしますが、ユーザーが選択してインストールできるアーキテクチャ固有のカーネルも提供しています。このようなカーネルには、そのプロセッサでのみ利用できる命令が含まれている場合があります。異なる種類のプロセッサを使用するホストでこれらの命令を実行すると、悪影響が生じる可能性があります。

このため、AMD プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンは、Intel プロセッサを使用するホストに移行しても動作しないことがあります。逆に、Intel プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンを AMD プロセッサを使用するホストに移行しても動作しない場合があります。

これは仮想マシンに限られたものではなく、物理コンピュータでも発生する問題です。たとえば、Linux がインストールされたハード ドライブを AMD マシンから Intel マシンに移動した場合、そのドライブから起動しようとする問題が発生します。

Ubuntu Linux 6.06

このセクションでは、Ubuntu Linux 6.06 オペレーティングシステムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について記述しています。

32 ビット版

32 ビット版の Ubuntu Linux 6.06 は、次の VMware 製品でサポートされています。

■ VMware Workstation

Ubuntu Linux 6.06 : Workstation 5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

- **SMP** : Workstation 5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way を試験的にサポート

- **Ubuntu Linux 6.06 での Eclipse 統合型仮想デバッグのサポート** : Workstation 6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

■ VMware ACE

Ubuntu Linux 6.06 : ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

■ VMware Server

Server Edition : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9

Desktop Edition : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9

その他のサポート

- **SMP** : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9 で 2 way を試験的にサポート

64 ビット版

64 ビット版の Ubuntu Linux 6.06 は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware Workstation**：試験的サポートのみ

Ubuntu Linux 6.06：Workstation 5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

- **SMP**：Workstation 5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way をサポート

- **Ubuntu Linux 6.06 での Eclipse 統合型仮想デバッグのサポート**：Workstation 6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

- **VMware ACE**：試験的サポートのみ

Ubuntu Linux 6.06：ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

- **VMware Server**：試験的サポートのみ

Server Edition：VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9

Desktop Edition：VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9

その他のサポート

- **SMP**：VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9 で 2 way をサポート

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

Ubuntu Linux 6.06 は、標準の Ubuntu Linux ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。

オペレーティング システムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

注意 VMware 仮想マシンで BusLogic 仮想 SCSI アダプタを使用した際、Linux ゲスト OS の多くでさまざまな問題が発生しています。このゲスト OS では、LSI Logic 仮想 SCSI アダプタを使用することをお勧めします。

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに Ubuntu Linux CD を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、Ubuntu Linux のインストールを開始します。
- 3 Ubuntu Linux インストーラが、仮想ディスクに必要なファイルをコピーしたあとインストール CD をイジェクトし、コンピュータが再起動されることを示すメッセージを表示します。仮想マシンが正常に再起動しない場合は、[Reset] ボタンをクリックして再起動します。
- 4 残りの手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

注意 tar インストーラを使用して、Ubuntu Linux に VMware Tools をインストールする必要があります。

tar インストーラを使用して VMware Tools をインストールするには、Ubuntu ゲストで root を有効にする必要があります。次の手順は、VMware Tools のインストール前またはインストール中に完了できます。

Ubuntu Server Edition

- 1 ターミナル ウィンドウを開きます。
- 2 通常ユーザーとしてログインします。
- 3 **sudo passwd root** と入力し、root パスワードを設定します。

Ubuntu Desktop Edition

- 1 [System] - [Administration] - [Login] - [Window] を選択し、[Security] タブをクリックします。
- 2 [Allow local system administrator login] チェック ボックスを選択し、[Close] をクリックします。
- 3 [System] - [Administration] - [Users and Groups] を選択し、[Unlock] をクリックします。
- 4 [Authenticate] ウィンドウでパスワードを入力し、[Authenticate] をクリックします。

- 5 root を選択して [Properties] をクリックし、[Set password by hand] で root パスワードを設定します。

IPv6

IPv6 はブリッジ ネットワークに対応していますが、IPv6 ネットワークが無効になっている場合、多くの Ubuntu Linux ディストリビューションは起動時間が短縮されません。IPv6 プロトコルが有効で、仮想マシンが IPv6 プロトコルを使用して通信できない場合、インストール後に **vmware-config-tools.pl** を使用して VMware Tools を正しく構成できない場合があります。

Ubuntu Linux の一部のバージョンを実行する仮想マシンでこの問題を防ぐには、VMware Tools をインストールする前に IPv6 を無効にしておきます。

Ubuntu Linux を実行する仮想マシンで IPv6 を無効にするには

- 1 root またはスーパーユーザーとしてログオンします。
- 2 **/etc/modprobe.d/aliases** ファイルで次の行を変更します。

```
alias net-pf-10 ipv6
```

これを次に変更します。

```
alias net-pf-10 off
```

- 3 ファイルを保存し、システムを再起動します。

IPv6 を無効にすると、VMware Tools を正常にインストールし、構成できます。

既知の問題

適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更

このゲスト OS のデフォルトのタイムキーピング構成では、問題が発生する可能性があります。Linux でのタイムキーピングのベスト プラクティスについては、ナレッジベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/1006427>) を参照してください。

異なるプロセッサへの移行

Linux 仮想マシンを AMD プロセッサ上で稼働するホストと Intel プロセッサ上で稼働するホストとの間で移行することはお勧めしません。

Linux ディストリビューションの多くは、インストール時に、インストール先の特定のプロセッサに適したカーネルを選択します。また、一部のディストリビューションは、デフォルトで GENERIC カーネルをインストールしますが、ユーザーが選択してインストールできるアーキテクチャ固有のカーネルも提供しています。このようなカーネルには、そのプロセッサでのみ利用できる命令が含まれている場合があります。異なる種類のプロセッサを使用するホストでこれらの命令を実行すると、悪影響が生じる可能性があります。

このため、AMD プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンは、Intel プロセッサを使用するホストに移行しても動作しないことがあります。逆に、Intel プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンを AMD プロセッサを使用するホストに移行しても動作しない場合があります。

これは仮想マシンに限られたものではなく、物理コンピュータでも発生する問題です。たとえば、Linux がインストールされたハード ドライブを AMD マシンから Intel マシンに移動した場合、そのドライブから起動しようとすると問題が発生します。

Ubuntu Linux 5.10

このセクションでは、Ubuntu Linux 5.10 オペレーティングシステムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について記述しています。

32 ビット版

32 ビット版の Ubuntu Linux 5.10 は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware Workstation**

Ubuntu Linux 5.10 : Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

- **SMP** : Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way を試験的にサポート

- **VMware ACE**

Ubuntu Linux 5.10 : ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

- **VMware Server**

Ubuntu Linux 5.10 : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9

その他のサポート

- **SMP** : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9 で 2 way を試験的にサポート

- **VMware Fusion**

Ubuntu Linux 5.10 : Fusion 1.0、1.1、1.1.1、1.1.2、1.1.3、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

64 ビット版

64 ビット版の Ubuntu Linux 5.10 は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware Workstation** : 試験的サポートのみ

Ubuntu Linux 5.10 : Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

- **SMP** : Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way をサポート

- **VMware ACE** : 試験的サポートのみ

Ubuntu Linux 5.10 : ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

- **VMware Server** : 試験的サポートのみ

Ubuntu Linux 5.10 : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9

その他のサポート

- **SMP** : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9 で 2 way をサポート

- **VMware Fusion** : 試験的サポートのみ

Ubuntu Linux 5.10 : Fusion 1.0、1.1、1.1.1、1.1.2、1.1.3、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

Ubuntu Linux 5.10 は、標準の Ubuntu Linux ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。

オペレーティング システムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

注意 VMware 仮想マシンで BusLogic 仮想 SCSI アダプタを使用した際、Linux ゲスト OS の多くでさまざまな問題が発生しています。このゲスト OS では、LSI Logic 仮想 SCSI アダプタを使用することをお勧めします。

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに Ubuntu Linux CD を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、Ubuntu Linux のインストールを開始します。
- 3 Ubuntu Linux インストーラが、仮想ディスクに必要なファイルをコピーしたあとインストール CD をイジェクトし、コンピュータが再起動されることを示すメッセージを表示します。仮想マシンが正常に再起動しない場合は、[Reset] ボタンをクリックして再起動します。
- 4 残りの手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

注意 tar インストーラを使用して、Ubuntu Linux に VMware Tools をインストールする必要があります。

tar インストーラを使用して VMware Tools をインストールするには、Ubuntu ゲストで root を有効にする必要があります。

Ubuntu Server Edition

- 1 ターミナル ウィンドウを開きます。
- 2 通常ユーザーとしてログインします。
- 3 **sudo passwd root** と入力し、root パスワードを設定します。

Ubuntu Desktop Edition

- 1 [System] - [Administration] - [Login] - [Window] を選択し、[Security] タブをクリックします。
- 2 [Allow local system administrator login] チェック ボックスを選択し、[Close] をクリックします。
- 3 [System] - [Administration] - [Users and Groups] を選択し、[Unlock] をクリックします。
- 4 [Authenticate] ウィンドウでパスワードを入力し、[Authenticate] をクリックします。
- 5 root を選択して [Properties] をクリックし、[Set password by hand] で root パスワードを設定します。

IPv6

IPv6 はブリッジ ネットワークに対応していますが、IPv6 ネットワークが無効になっている場合、多くの Ubuntu Linux ディストリビューションは起動時間が短縮されます。IPv6 プロトコルが有効で、仮想マシンが IPv6 プロトコルを使用して通信できない場合、インストール後に **vmware-config-tools.pl** を使用して VMware Tools を正しく構成できない場合があります。

Ubuntu Linux の一部のバージョンを実行する仮想マシンでこの問題を防ぐには、VMware Tools をインストールする前に IPv6 を無効にしておきます。

Ubuntu Linux を実行する仮想マシンで IPv6 を無効にするには

- 1 root またはスーパーユーザーとしてログオンします。
- 2 **/etc/modprobe.d/aliases** ファイルで次の行を変更します。

```
alias net-pf-10 ipv6
```

これを次に変更します。

```
alias net-pf-10 off
```

- 3 ファイルを保存し、システムを再起動します。

IPv6 を無効にすると、VMware Tools を正常にインストールし、構成できます。

VMware Tools と 64 ビット版の Ubuntu Linux 5.10

仮想マシンで X サーバが正常に機能するために必要なドライバが、64 ビット版の Ubuntu Linux 5.10 で不足しています。VMware Tools をインストールすると、このドライバはインストールされます。VMware Tools を 64 ビット版の Ubuntu Linux 5.10 にインストールする方法は、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/1900>) を参照してください。

既知の問題

適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更

このゲスト OS のデフォルトのタイムキーピング構成では、問題が発生する可能性があります。Linux でのタイムキーピングのベスト プラクティスについては、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/1006427>) を参照してください。

異なるプロセッサへの移行

Linux 仮想マシンを AMD プロセッサ上で稼働するホストと Intel プロセッサ上で稼働するホストとの間で移行することはお勧めしません。

Linux ディストリビューションの多くは、インストール時に、インストール先の特定のプロセッサに適したカーネルを選択します。また、一部のディストリビューションは、デフォルトで GENERIC カーネルをインストールしますが、ユーザーが選択してインストールできるアーキテクチャ固有のカーネルも提供しています。このようなカーネルには、そのプロセッサでのみ利用できる命令が含まれている場合があります。異なる種類のプロセッサを使用するホストでこれらの命令を実行すると、悪影響が生じる可能性があります。

このため、AMD プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンは、Intel プロセッサを使用するホストに移行しても動作しないことがあります。逆に、Intel プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンを AMD プロセッサを使用するホストに移行しても動作しない場合があります。

これは仮想マシンに限られたものではなく、物理コンピュータでも発生する問題です。たとえば、Linux がインストールされたハード ドライブを AMD マシンから Intel マシンに移動した場合、そのドライブから起動しようとすると問題が発生します。

Ubuntu Linux 5.04

このセクションでは、Ubuntu Linux 5.04 オペレーティングシステムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について記述しています。

32 ビット版

32 ビット版の Ubuntu Linux 5.04 は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware Workstation**

Ubuntu Linux 5.04 : Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

- **SMP** : Workstation 5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way を試験的にサポート

- **VMware ACE**

Ubuntu Linux 5.04 : ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

- **VMware Server**

Ubuntu Linux 5.04 : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9

その他のサポート

- **SMP** : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9 で 2 way を試験的にサポート

64 ビット版

64 ビット版の Ubuntu Linux 5.04 は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware Workstation : 試験的サポートのみ**

Ubuntu Linux 5.04 : Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

- **SMP** : Workstation 5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way をサポート

■ **VMware ACE**：試験的サポートのみ

Ubuntu Linux 5.04：ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

■ **VMware Server**：試験的サポートのみ

Ubuntu Linux 5.04：VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9

その他のサポート

- **SMP**：VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9 で 2 way をサポート

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

Ubuntu Linux 5.04 は、標準の Ubuntu Linux ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。

オペレーティング システムをインストールする前に、仮想マシンを新規作成し、構成します。

注意 VMware 仮想マシンで BusLogic 仮想 SCSI アダプタを使用した際、Linux ゲスト OS の多くでさまざまな問題が発生しています。このゲスト OS では、LSI Logic 仮想 SCSI アダプタを使用することをお勧めします。

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに Ubuntu Linux CD を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、Ubuntu Linux のインストールを開始します。
- 3 インターネット接続でプロキシ サーバを使用するネットワーク上にホスト コンピュータがある場合、次のように、ブート プロンプトにプロキシ サーバ名およびポートに関する情報を入力します。

linux http_proxy=http://<プロキシ サーバ>:<ポート番号>

- 4 残りの手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。
- これで、通常の **su -** コマンド、および前述の手順で作成した root パスワードを使用して、いつでも root ユーザーになることができます。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

注意 tar インストーラを使用して、Ubuntu Linux に VMware Tools をインストールする必要があります。

tar インストーラを使用して VMware Tools をインストールするには、Ubuntu ゲストで root を有効にする必要があります。

Ubuntu Server Edition

- 1 ターミナルウィンドウを開きます。
- 2 通常ユーザーとしてログインします。
- 3 **sudo passwd root** と入力し、root パスワードを設定します。

Ubuntu Desktop Edition

- 1 [System] - [Administration] - [Login] - [Window] を選択し、[Security] タブをクリックします。
- 2 [Allow local system administrator login] チェック ボックスを選択し、[Close] をクリックします。
- 3 [System] - [Administration] - [Users and Groups] を選択し、[Unlock] をクリックします。
- 4 [Authenticate] ウィンドウでパスワードを入力し、[Authenticate] をクリックします。
- 5 root を選択して [Properties] をクリックし、[Set password by hand] で root パスワードを設定します。

IPv6

IPv6 はブリッジ ネットワークに対応していますが、IPv6 ネットワークが無効になっている場合、多くの Ubuntu Linux ディストリビューションは起動時間が短縮されます。IPv6 プロトコルが有効で、仮想マシンが IPv6 プロトコルを使用して通信できない場合、インストール後に **vmware-config-tools.pl** を使用して VMware Tools を正しく構成できない場合があります。

Ubuntu Linux の一部のバージョンを実行する仮想マシンでこの問題を防ぐには、VMware Tools をインストールする前に IPv6 を無効にしておきます。

Ubuntu Linux を実行する仮想マシンで IPv6 を無効にするには

- 1 root またはスーパーユーザーとしてログオンします。
 - 2 `/etc/modprobe.d/aliases` ファイルで次の行を変更します。
`alias net-pf-10 ipv6`
これを次に変更します。
`alias net-pf-10 off`
 - 3 ファイルを保存し、システムを再起動します。
- IPv6 を無効にすると、VMware Tools を正常にインストールし、構成できます。

既知の問題

適切なタイムキーピング動作に必要な構成の変更

このゲスト OS のデフォルトのタイムキーピング構成では、問題が発生する可能性があります。Linux でのタイムキーピングのベスト プラクティスについては、ナレッジベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/1006427>) を参照してください。

異なるプロセッサへの移行

Linux 仮想マシンを AMD プロセッサ上で稼働するホストと Intel プロセッサ上で稼働するホストとの間で移行することはお勧めしません。

Linux ディストリビューションの多くは、インストール時に、インストール先の特定のプロセッサに適したカーネルを選択します。また、一部のディストリビューションは、デフォルトで GENERIC カーネルをインストールしますが、ユーザーが選択してインストールできるアーキテクチャ固有のカーネルも提供しています。このようなカーネルには、そのプロセッサでのみ利用できる命令が含まれている場合があります。異なる種類のプロセッサを使用するホストでこれらの命令を実行すると、悪影響が生じる可能性があります。

このため、AMD プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンは、Intel プロセッサを使用するホストに移行しても動作しないことがあります。逆に、Intel プロセッサを使用するホストで作成された Linux 仮想マシンを AMD プロセッサを使用するホストに移行しても動作しない場合があります。

これは仮想マシンに限られたものではなく、物理コンピュータでも発生する問題です。たとえば、Linux がインストールされたハード ドライブを AMD マシンから Intel マシンに移動した場合、そのドライブから起動しようとすると問題が発生します。

FreeBSD 7.1

このセクションでは、FreeBSD 7.1 オペレーティング システムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について説明します。

32 ビット版

32 ビット版の FreeBSD 7.1 は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware ESX Server**

FreeBSD 7.1 : ESX 4.0

その他のサポート

- **SMP : ESX 4.0 でフル サポート**

64 ビット版

64 ビット版の FreeBSD 7.1 は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware ESX Server**

FreeBSD 7.1 : ESX 4.0

その他のサポート

- **SMP : ESX 4.0 でフル サポート**

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

DVD または CD から FreeBSD 7.1 をインストールできます。

次の FreeBSD Web サイトから ISO イメージをダウンロードしてください。

http://www.freebsd.org/doc/en_US.ISO8859-1/books/handbook/mirrors-ftp.html

ISO イメージは、`/ISO-IMAGES/7.1` ディレクトリに格納されています。

- **32 ビット** : <ftp://ftp5.FreeBSD.org/pub/FreeBSD/releases/i386/ISO-IMAGES/7.1>
 - **7.1-RELEASE-i386-bootonly.iso**
 - **7.1-RELEASE-i386-disc1.iso**
 - **7.1-RELEASE-i386-disc2.iso**

- 7.1-RELEASE-i386-dvd1.iso.gz
- 64 ビット : <ftp://ftp5.FreeBSD.org/pub/FreeBSD/releases/amd64/ISO-IMAGES/7.1>
- 7.1-RELEASE-amd64-bootonly.iso
- 7.1-RELEASE-amd64-disc1.iso
- 7.1-RELEASE-amd64-disc2.iso
- 7.1-RELEASE-amd64-disc3.iso
- 7.1-RELEASE-amd64-dvd1.iso.gz

disc1.iso ファイルには、FreeBSD のインストールに必要なものがすべて含まれています。**disc2.iso** ファイルには、頻繁に使用されるポート群が含まれています。

FreeBSD インストール CD-ROM の **bootonly.iso** は、**sysinstall** アプリケーションを実行します。はじめてハード ドライブに FreeBSD 7.1 をインストールする場合は、**sysinstall** アプリケーションが必要です。

オペレーティング システムをインストールする前に、仮想マシンを新規作成し、構成します。

注意 VMware 仮想マシンで BusLogic 仮想 SCSI アダプタを使用した際、FreeBSD ゲスト OS の多くでさまざまな問題が発生しています。このゲスト OS では、LSI Logic 仮想 SCSI アダプタを使用することをお勧めします。

インストールの手順

FreeBSD 7.1 をインストールするには

- 1 32 ビット版の FreeBSD 7.1 または 64 ビット版の FreeBSD の CD または DVD を CD-ROM ドライブに挿入します。
- 2 ゲストをパワーオンします。
- 3 **sysinstall** ユーティリティを使用し、インストール方法を標準、カスタム、または高速から選択します。
- 4 **sysinstall** ユーティリティを使用して、パーティションを作成します。
Disklabel を使用すると、自動的にパーティションが作成され、デフォルトのサイズが割り当てられます。
- 5 変更を許可します。
- 6 たとえば X カーネル開発者や通常ユーザーなど、ディストリビューションを選択します。

- 7 メディアに CD または DVD を選択します。
- 8 CD を選択した場合、プロンプトが表示されたら適切な CD を挿入します (DVD を選択した場合、インストール処理では DVD は求められません)。
- 9 ゲストのシステム デバイスやコンポーネントなどを構成します。
- 10 インストールが完了したら、ゲストを再起動します。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

既知の問題

奇数の仮想 CPU での FreeBSD 7.1 ゲストの停止

仮想 CPU の数が 2 のべき乗でない場合、root ファイルシステムをマウントする前に、FreeBSD 7.1 ゲストは停止します。これは、FreeBSD ULE スケジューラのバグによるものです。このバグは、FreeBSD 7.2 で修正されました。

4 つの仮想 CPU がある 64 ビット版の FreeBSD 7.1 ゲストでの長時間のインストールおよび再起動

64 ビット版の FreeBSD 7.1 ゲストが 4 つ以上の CPU で構成されている場合、インストールおよび再起動には時間がかかります。

大容量メモリを持つ FreeBSD 7.1 ゲストでのスプラッシュ画面表示後のストール

32GB RAM などの大容量メモリの FreeBSD 7.1 ゲストをパワーオンすると、スプラッシュ画面が表示されたあとにゲストが停止する場合があります。この停止は、8 分間続く場合があります。

FreeBSD 7.1 ゲストの画面解像度の変更不可

FreeBSD 7.1 ゲストの画面解像度を変更できない場合は、VMware Tools をインストールしてこの問題を解決してください。

FreeBSD 7.1 ゲストでのサスペンド電源イベントのカスタム スクリプトの実行不能

サスペンド電源イベントの `VMware-toolbox` カスタム スクリプトは機能しません。

32 ビット版の FreeBSD 7.1 ゲストでの VI Client を使用したマウス ホイールでのスクロール アップ操作不能

VI Client からアクセスしている場合、32 ビット版の FreeBSD 7.1 ゲストではマウスのスクロール アップ操作は機能しません。ただし、VNC ソフトウェアから VI Client にアクセスしている場合は、スクロール アップ操作は機能します。

64 ビット版の FreeBSD ゲスト起動時の /etc/vmware-tools/locations ファイルの増大

64 ビット版の FreeBSD ゲストを再起動するたびに、
/etc/vmware-tools/locations ファイルに次の文字列が追加されます。

```
remove_file /etc/vmware-tools/icu  
file /etc/vmware-tools/icu
```

そのため、再起動のたびにファイルが大きくなります。

サウンド

FreeBSD でのサウンド サポートは現時点では検証していません。

FreeBSD 7.0

このセクションでは、FreeBSD 7.0 オペレーティング システムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について説明します。

32 ビット版

32 ビット版の FreeBSD 7.0 は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **ESX Server**

FreeBSD 7.0 : ESX 4.0

その他のサポート

- **SMP** : ESX 4.0 でフル サポート

- **VMware Fusion**

FreeBSD 7.0 : Fusion 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

その他のサポート

- **SMP** : Fusion 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4 で 2 way をサポート

64 ビット版

64 ビット版の FreeBSD 7.0 は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **ESX Server**

FreeBSD 7.0 : ESX 4.0

その他のサポート

- **SMP** : ESX 4.0 でフル サポート

- **VMware Fusion**

FreeBSD 7.0 : Fusion 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

その他のサポート

- **SMP** : Fusion 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4 で 2 way をサポート

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションにも必ず目を通してください。

FreeBSD 7.0 は、標準の FreeBSD ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。

オペレーティングシステムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

注意 VMware 仮想マシンで BusLogic 仮想 SCSI アダプタを使用した際、FreeBSD ゲスト OS の多くでさまざまな問題が発生しています。このゲスト OS では、LSI Logic 仮想 SCSI アダプタを使用することをお勧めします。

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに FreeBSD CD を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、FreeBSD のインストールを開始します。
- 3 残りの手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

既知の問題

64 ビット版の FreeBSD ゲストの起動時の /etc/vmware-tools/locations ファイルの増大

64 ビット版の FreeBSD ゲストを再起動するたびに、
/etc/vmware-tools/locations ファイルに次の文字列が追加されます。

```
remove_file /etc/vmware-tools/icu  
file /etc/vmware-tools/icu
```

そのため、再起動のたびにファイルが大きくなります。

サウンド

FreeBSD でのサウンドサポートは現時点では検証していません。

ゲストのスクリーン サーバー

XFree86 3.x X サーバを稼動する FreeBSD ホストでは、ゲスト OS でのスクリーン サーバーの使用は避けてください。ゲストでスクリーン サーバーを使用すると、大量の処理能力が必要なため、ホストの X サーバがフリーズする可能性があります。

FreeBSD 6.4

このセクションでは、FreeBSD 6.4 オペレーティングシステムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について説明します。

32 ビット版

32 ビット版の FreeBSD 6.4 は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware ESX Server**

FreeBSD 6.4 : ESX 4.0

その他のサポート

- **SMP : ESX 4.0 でフル サポート**

64 ビット版

64 ビット版の FreeBSD 6.4 は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware ESX Server**

FreeBSD 6.4 : ESX 4.0

その他のサポート

- **SMP : ESX 4.0 でフル サポート**

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

DVD または CD から FreeBSD 6.4 をインストールできます。

次の FreeBSD Web サイトから ISO イメージをダウンロードしてください。

http://www.freebsd.org/doc/en_US.ISO8859-1/books/handbook/mirrors-ftp.html

ISO イメージは、/ISO-IMAGES/6.4 ディレクトリに格納されています。

- **32 ビット** : <ftp://ftp5.FreeBSD.org/pub/FreeBSD/releases/i386/ISO-IMAGES/6.4>
 - **6.4-RELEASE-i386-bootonly.iso**
 - **6.4-RELEASE-i386-disc1.iso**
 - **6.4-RELEASE-i386-disc2.iso**

- 6.4-RELEASE-i386-disc3.iso
- 6.4-RELEASE-i386-dvd1.iso.gz
- 64 ビット : <ftp://ftp5.FreeBSD.org/pub/FreeBSD/releases/amd64/ISO-IMAGES/6.4>
- 6.4-RELEASE-amd64-bootonly.iso
- 6.4-RELEASE-amd64-disc1.iso
- 6.4-RELEASE-amd64-disc2.iso
- 6.4-RELEASE-amd64-disc3.iso
- 6.4-RELEASE-amd64-dvd1.iso.gz

disc1.iso ファイルには、ベースとなる FreeBSD 6.4 オペレーティングシステムといくつかの事前作成済みパッケージが含まれています。**disc2.iso** および **disc3.iso** ファイルには、事前作成済みの別のパッケージが含まれています。dvd1.iso.gz ファイルは DVD サイズであり、CD-ROM ディスクにあるものがすべて含まれています。

FreeBSD インストール CD-ROM の **bootonly.iso** は、**sysinstall** アプリケーションを実行します。はじめてハード ドライブに FreeBSD をインストールする場合は、**sysinstall** アプリケーションが必要です。

オペレーティング システムをインストールする前に、仮想マシンを新規作成し、構成します。

注意 VMware 仮想マシンで BusLogic 仮想 SCSI アダプタを使用した際、FreeBSD ゲスト OS の多くでさまざまな問題が発生しています。このゲスト OS では、LSI Logic 仮想 SCSI アダプタを使用することをお勧めします。

インストールの手順

FreeBSD 6.4 をインストールするには

- 1 32 ビットの FreeBSD 6.4 または 64 ビットの FreeBSD 6.4 の CD または DVD を CD-ROM ドライブに挿入します。
- 2 ゲストをパワーオンします。
- 3 **sysinstall** ユーティリティを使用し、インストール方法を標準、カスタム、または高速から選択します。
- 4 **sysinstall** ユーティリティを使用して、パーティションを作成します。
Disklabel を使用すると、自動的にパーティションが作成され、デフォルトのサイズが割り当てられます。
- 5 変更を許可します。

- 6 たとえば X カーネル開発者や通常ユーザーなど、ディストリビューションを選択します。
- 7 メディアに CD または DVD を選択します。
- 8 CD を選択した場合、プロンプトが表示されたら適切な CD を挿入します (DVD を選択した場合、ゲストは追加の DVD を求めません)。
- 9 ゲストのシステム デバイスやコンポーネントなどを構成します。
- 10 インストールが完了したら、ゲストを再起動します。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

既知の問題

FreeBSD 6.4 ゲストでのサスペンド電源イベントのカスタム スクリプトの実行不能

サスペンド電源イベントの `VMware-toolbox` カスタム スクリプトは機能しません。

32 ビットの FreeBSD 6.4 ゲストでの VI Client を使用したマウス ホイールでのスクロール アップ操作不能

VI Client からアクセスしている場合、32 ビットの FreeBSD 6.4 ゲストではマウスのスクロール アップ操作は機能しません。ただし、VNC ソフトウェアから VI Client にアクセスしている場合は、スクロール アップ操作は機能します。

64 ビット版の FreeBSD ゲスト起動時の `/etc/vmware-tools/locations` ファイルの増大

64 ビット版の FreeBSD ゲストを再起動するたびに、`/etc/vmware-tools/locations` ファイルに次の文字列が追加されます。

```
remove_file /etc/vmware-tools/icu
file /etc/vmware-tools/icu
```

そのため、再起動のたびにファイルが大きくなります。

サウンド

FreeBSD でのサウンド サポートは現時点では検証していません。

FreeBSD 6.3

このセクションでは、FreeBSD 6.3 オペレーティング システムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について説明します。

32 ビット版

32 ビット版の FreeBSD 6.3 は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware ESX Server**

FreeBSD 6.3 : ESX 4.0

その他のサポート

- **SMP : ESX 4.0 でフル サポート**

64 ビット版

64 ビット版の FreeBSD 6.3 は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware ESX Server**

FreeBSD 6.3 : ESX 4.0

その他のサポート

- **SMP : ESX 4.0 でフル サポート**

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

DVD または CD から FreeBSD 6.4 をインストールできます。

次の FreeBSD Web サイトから ISO イメージをダウンロードしてください。

http://www.freebsd.org/doc/en_US.ISO8859-1/books/handbook/mirrors-ftp.html

ISO イメージは、/ISO-IMAGES/6.3 ディレクトリに格納されています。

- **32 ビット** : <ftp://ftp5.FreeBSD.org/pub/FreeBSD/releases/i386/ISO-IMAGES/6.3>
 - **6.3-RELEASE-i386-bootonly.iso**
 - **6.3-RELEASE-i386-disc1.iso**
 - **6.3-RELEASE-i386-disc2.iso**

- 6.3-RELEASE-i386-disc3.iso
- 6.3-RELEASE-i386-dvd1.iso.gz
- 64 ビット : <ftp://ftp5.FreeBSD.org/pub/FreeBSD/releases/amd64/ISO-IMAGES/6.3>
- 6.3-RELEASE-amd64-bootonly.iso
- 6.3-RELEASE-amd64-disc1.iso
- 6.3-RELEASE-amd64-disc2.iso
- 6.3-RELEASE-amd64-disc3.iso
- 6.3-RELEASE-amd64-dvd1.iso.gz

disc1.iso ファイルには、ベースとなる FreeBSD 6.3 オペレーティングシステムといくつかの事前作成済みパッケージが含まれています。**disc2.iso** および **disc3.iso** ファイルには、事前作成済みの別のパッケージが含まれています。dvd1.iso.gz ファイルは DVD サイズであり、CD-ROM ディスクにあるものがすべて含まれています。

FreeBSD インストール CD-ROM の **bootonly.iso** は、**sysinstall** アプリケーションを実行します。はじめてハード ドライブに FreeBSD をインストールする場合は、**sysinstall** アプリケーションが必要です。

オペレーティング システムをインストールする前に、仮想マシンを新規作成し、構成します。

注意 VMware 仮想マシンで BusLogic 仮想 SCSI アダプタを使用した際、FreeBSD ゲスト OS の多くでさまざまな問題が発生しています。このゲスト OS では、LSI Logic 仮想 SCSI アダプタを使用することをお勧めします。

インストールの手順

FreeBSD 6.3 をインストールするには

- 1 32 ビットの FreeBSD 6.3 または 64 ビットの FreeBSD 6.3 の CD または DVD を CD-ROM ドライブに挿入します。
- 2 ゲストをパワーオンします。
- 3 **sysinstall** ユーティリティを使用し、インストール方法を標準、カスタム、または高速から選択します。
- 4 **sysinstall** ユーティリティを使用して、パーティションを作成します。
Disklabel を使用すると、自動的にパーティションが作成され、デフォルトのサイズが割り当てられます。
- 5 変更を許可します。

- たとえば X カーネル開発者や通常ユーザーなど、ディストリビューションを選択します。
- メディアに CD または DVD を選択します。
- CD を選択した場合、プロンプトが表示されたら適切な CD を挿入します (DVD を選択した場合、ゲストは追加の DVD を求めません)。
- ゲストのシステム デバイスやコンポーネントなどを構成します。
- インストールが完了したら、ゲストを再起動します。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

既知の問題

FreeBSD 6.3 ゲストでのサスペンド電源イベントのカスタム スクリプトの実行不能

サスペンド電源イベントの `VMware-toolbox` カスタム スクリプトは機能しません。

32 ビットの FreeBSD 6.3 ゲストでの VI Client を使用したマウス ホイールでのスクロール アップ操作不能

VI Client からアクセスしている場合、32 ビット版の FreeBSD 6.3 ゲストではマウスのスクロール アップ操作は機能しません。ただし、VNC ソフトウェアから VI Client にアクセスしている場合は、スクロール アップ操作は機能します。

64 ビット版の FreeBSD ゲスト起動時の `/etc/vmware-tools/locations` ファイルの増大

64 ビット版の FreeBSD ゲストを再起動するたびに、`/etc/vmware-tools/locations` ファイルに次の文字列が追加されます。

```
remove_file /etc/vmware-tools/icu
file /etc/vmware-tools/icu
```

そのため、再起動のたびにファイルが大きくなります。

サウンド

FreeBSD でのサウンド サポートは現時点では検証していません。

FreeBSD 6.2

このセクションでは、FreeBSD 6.2 オペレーティング システムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について説明します。

32 ビット版

32 ビット版の FreeBSD 6.2 は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware Workstation**

FreeBSD 6.2 : Workstation 6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

- **SMP** : Workstation 6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way を試験的にサポート

- **VMware ACE**

FreeBSD 6.2 : ACE 2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

64 ビット版

64 ビット版の FreeBSD 6.2 は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware Workstation**

FreeBSD 6.2 : Workstation 6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

- **SMP** : Workstation 6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way を試験的にサポート

- **VMware ACE**

FreeBSD 6.2 : ACE 2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

FreeBSD 6.2 は、標準の FreeBSD ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。

オペレーティング システムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

注意 VMware 仮想マシンで BusLogic 仮想 SCSI アダプタを使用した際、FreeBSD ゲスト OS の多くでさまざまな問題が発生しています。このゲスト OS では、LSI Logic 仮想 SCSI アダプタを使用することをお勧めします。

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに FreeBSD CD を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、FreeBSD のインストールを開始します。
- 3 残りの手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

既知の問題

64 ビット版の FreeBSD ゲスト起動時の /etc/vmware-tools/locations ファイルの増大

64 ビット版の FreeBSD ゲストを再起動するたびに、
/etc/vmware-tools/locations ファイルに次の文字列が追加されます。

```
remove_file /etc/vmware-tools/icu  
file /etc/vmware-tools/icu
```

そのため、再起動のたびにファイルが大きくなります。

サウンド

FreeBSD でのサウンドサポートは現時点では検証していません。

ゲストのスクリーンセーバー

XFree86 3.x X サーバを稼動する FreeBSD ホストでは、ゲスト OS でのスクリーンセーバーの使用は避けてください。ゲストでスクリーンセーバーを使用すると、大量の処理能力が必要なため、ホストの X サーバがフリーズする可能性があります。

FreeBSD 6.1

このセクションでは、FreeBSD 6.1 オペレーティングシステムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について説明します。

32 ビット版

32 ビット版の FreeBSD 6.1 は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware Workstation** : 試験的サポートのみ

FreeBSD 6.1 : Workstation 5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

- **SMP** : Workstation 5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way をサポート

- **VMware ACE** : 試験的サポートのみ

FreeBSD 6.1 : ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

- **VMware Fusion**

FreeBSD 6.1 : Fusion 1.0、1.1、1.1.1、1.1.2、1.1.3、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

64 ビット版

64 ビット版の FreeBSD 6.1 は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware Fusion**

FreeBSD 6.1 : Fusion 1.0、1.1、1.1.1、1.1.2、1.1.3、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

FreeBSD 6.1 は、標準の FreeBSD ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。

オペレーティングシステムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

注意 VMware 仮想マシンで BusLogic 仮想 SCSI アダプタを使用した際、FreeBSD ゲスト OS の多くでさまざまな問題が発生しています。このゲスト OS では、LSI Logic 仮想 SCSI アダプタを使用することをお勧めします。

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに FreeBSD CD を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、FreeBSD のインストールを開始します。
- 3 残りの手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

既知の問題

64 ビットの FreeBSD ゲスト起動時の /etc/vmware-tools/locations ファイルの増大

64 ビット版の FreeBSD ゲストを再起動するたびに、
/etc/vmware-tools/locations ファイルに次の文字列が追加されます。

```
remove_file /etc/vmware-tools/icu
file /etc/vmware-tools/icu
```

そのため、再起動のたびにファイルが大きくなります。

サウンド

FreeBSD でのサウンドサポートは現時点では検証していません。

ゲストのスクリーンセーバー

XFree86 3.x X サーバを稼動する FreeBSD ホストでは、ゲスト OS でのスクリーンセーバーの使用は避けてください。ゲストでスクリーンセーバーを使用すると、大量の処理能力が必要なため、ホストの X サーバがフリーズする可能性があります。

FreeBSD 6.0

このセクションでは、FreeBSD 6.0 オペレーティング システムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について説明します。

32 ビット版

32 ビット版の FreeBSD 6.0 は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware Workstation** : 試験的サポートのみ

FreeBSD 6.0 : Workstation 5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

- **SMP** : Workstation 5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way をサポート

- **VMware ACE** : 試験的サポートのみ

FreeBSD 6.0 : ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

- **VMware Server** : 試験的サポートのみ

FreeBSD 6.0 : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9

その他のサポート

- **SMP** : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9 で 2 way をサポート

64 ビット版

64 ビット版の FreeBSD 6.0 は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware Server** : 試験的サポートのみ

FreeBSD 6.0 : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9

その他のサポート

- **SMP** : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9 で 2 way をサポート

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

FreeBSD 6.0.1 は、標準の FreeBSD ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。

オペレーティングシステムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

注意 VMware 仮想マシンで BusLogic 仮想 SCSI アダプタを使用した際、FreeBSD ゲスト OS の多くでさまざまな問題が発生しています。このゲスト OS では、LSI Logic 仮想 SCSI アダプタを使用することをお勧めします。

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに FreeBSD CD を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、FreeBSD のインストールを開始します。
- 3 残りの手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

既知の問題

64 ビット版の FreeBSD ゲスト起動時の /etc/vmware-tools/locations ファイルの増大

64 ビット版の FreeBSD ゲストを再起動するたびに、
/etc/vmware-tools/locations ファイルに次の文字列が追加されます。

```
remove_file /etc/vmware-tools/icu  
file /etc/vmware-tools/icu
```

そのため、再起動のたびにファイルが大きくなります。

サウンド

FreeBSD でのサウンドサポートは現時点では検証していません。

ゲストのスクリーン サーバー

XFree86 3.x X サーバを稼動する FreeBSD ホストでは、ゲスト OS でのスクリーン サーバーの使用は避けてください。ゲストでスクリーン サーバーを使用すると、大量の処理能力が必要なため、ホストの X サーバがフリーズする可能性があります。

FreeBSD 5.5

このセクションでは、FreeBSD 5.5 オペレーティングシステムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について説明します。

32 ビット版

32 ビット版の FreeBSD 5.5 は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware Workstation**

FreeBSD 5.5 : Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

- **SMP** : Workstation 5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way を試験的にサポート

- **VMware ACE**

FreeBSD 5.5 : ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

- **VMware Server**

FreeBSD 5.5 : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9

その他のサポート

- **SMP** : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9 で 2 way を試験的にサポート

- **VMware Fusion**

FreeBSD 5.5 : Fusion 1.0、1.1、1.1.1、1.1.2、1.1.3、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

64 ビット版

64 ビット版の FreeBSD 5.5 は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware Workstation**

FreeBSD 5.5 : Workstation 5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

- **VMware ACE**

FreeBSD 5.5 : ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

■ VMware Server

FreeBSD 5.5 : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9

その他のサポート

■ SMP : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9 で 2 way を試験的にサポート

■ VMware Fusion

FreeBSD 5.5 : Fusion 1.0、1.1、1.1.1、1.1.2、1.1.3、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

FreeBSD 5.5 は、標準の FreeBSD ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。

オペレーティング システムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

注意 VMware 仮想マシンで BusLogic 仮想 SCSI アダプタを使用した際、FreeBSD ゲスト OS の多くでさまざまな問題が発生しています。このゲスト OS では、LSI Logic 仮想 SCSI アダプタを使用することをお勧めします。

注意 VMware VirtualCenter または vCenter Server を使用してゲスト OS をインストールする場合は、その仮想マシンを実行する VMware 製品 (ESX Server または VMware Server) で該当するゲスト OS がサポートされていることを確認してください。

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに FreeBSD CD を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、FreeBSD のインストールを開始します。
- 3 残りの手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

既知の問題

64 ビット版の FreeBSD ゲスト起動時の `/etc/vmware-tools/locations` ファイルの増大

64 ビット版の FreeBSD ゲストを再起動するたびに、`/etc/vmware-tools/locations` ファイルに次の文字列が追加されます。

```
remove_file /etc/vmware-tools/icu  
file /etc/vmware-tools/icu
```

そのため、再起動のたびにファイルが大きくなります。

サウンド

FreeBSD でのサウンド サポートは現時点では検証していません。

ゲストのスクリーン セーバー

XFree86 3.x X サーバを稼動する FreeBSD ホストでは、ゲスト OS でのスクリーン セーバーの使用は避けてください。ゲストでスクリーン セーバーを使用すると、大量の処理能力が必要なため、ホストの X サーバがフリーズする可能性があります。

FreeBSD 5.4

このセクションでは、FreeBSD 5.4 オペレーティングシステムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について説明します。

32 ビット版

32 ビット版の FreeBSD 5.4 は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware Workstation**

FreeBSD 5.4 : Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

- **SMP** : Workstation 5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way を試験的にサポート

- **VMware ACE**

FreeBSD 5.4 : ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

- **VMware Server**

FreeBSD 5.4 : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9

その他のサポート

- **SMP** : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9 で 2 way を試験的にサポート

64 ビット版

64 ビット版の FreeBSD 5.4 は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware Workstation**

FreeBSD 5.4 : Workstation 5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

- **VMware ACE**

FreeBSD 5.4 : ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

■ VMware Server

FreeBSD 5.4 : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9

その他のサポート

- **SMP** : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9 で 2 way を試験的にサポート

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

FreeBSD 5.4 は、標準の FreeBSD ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。

オペレーティングシステムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

注意	VMware 仮想マシンで BusLogic 仮想 SCSI アダプタを使用した際、FreeBSD ゲスト OS の多くでさまざまな問題が発生しています。このゲスト OS では、LSI Logic 仮想 SCSI アダプタを使用することをお勧めします。
-----------	--

注意	VMware VirtualCenter または vCenter Server を使用してゲスト OS をインストールする場合は、その仮想マシンを実行する VMware 製品 (ESX Server または VMware Server) で該当するゲスト OS がサポートされていることを確認してください。
-----------	---

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに FreeBSD CD を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、FreeBSD のインストールを開始します。
- 3 残りの手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

既知の問題

64 ビット版の FreeBSD ゲスト起動時の `/etc/vmware-tools/locations` ファイルの増大

64 ビット版の FreeBSD ゲストを再起動するたびに、`/etc/vmware-tools/locations` ファイルに次の文字列が追加されます。

```
remove_file /etc/vmware-tools/icu  
file /etc/vmware-tools/icu
```

そのため、再起動のたびにファイルが大きくなります。

サウンド

FreeBSD でのサウンド サポートは現時点では検証していません。

ゲストのスクリーン セーバー

XFree86 3.x X サーバを稼動する FreeBSD ホストでは、ゲスト OS でのスクリーン セーバーの使用は避けてください。ゲストでスクリーン セーバーを使用すると、大量の処理能力が必要なため、ホストの X サーバがフリーズする可能性があります。

FreeBSD 5.3

このセクションでは、FreeBSD 5.3 オペレーティングシステムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について説明します。

32 ビット版

32 ビット版の FreeBSD 5.3 は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware Workstation**

FreeBSD 5.3 : Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

- **SMP** : Workstation 5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way を試験的にサポート

- **VMware ACE**

FreeBSD 5.3 : ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

- **VMware Server**

FreeBSD 5.3 : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9

その他のサポート

- **SMP** : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9 で 2 way を試験的にサポート

64 ビット版

64 ビット版の FreeBSD 5.3 は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware Workstation**

FreeBSD 5.3 : Workstation 5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

- **SMP** : Workstation 5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way を試験的にサポート

■ VMware ACE

FreeBSD 5.3 : ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

■ VMware Server

FreeBSD 5.3 : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9

その他のサポート

- SMP : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9 で 2 way を試験的にサポート

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

FreeBSD 5.3 は、標準の FreeBSD ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。

オペレーティング システムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

注意 VMware 仮想マシンで BusLogic 仮想 SCSI アダプタを使用した際、FreeBSD ゲスト OS の多くでさまざまな問題が発生しています。このゲスト OS では、LSI Logic 仮想 SCSI アダプタを使用することをお勧めします。

注意 VMware VirtualCenter または vCenter Server を使用してゲスト OS をインストールする場合は、その仮想マシンを実行する VMware 製品 (ESX Server または VMware Server) で該当するゲスト OS がサポートされていることを確認してください。

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに FreeBSD CD を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、FreeBSD のインストールを開始します。
- 3 残りの手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

既知の問題

64 ビット版の FreeBSD ゲスト起動時の `/etc/vmware-tools/locations` ファイルの増大

64 ビット版の FreeBSD ゲストを再起動するたびに、`/etc/vmware-tools/locations` ファイルに次の文字列が追加されます。

```
remove_file /etc/vmware-tools/icu  
file /etc/vmware-tools/icu
```

そのため、再起動のたびにファイルが大きくなります。

サウンド

FreeBSD でのサウンド サポートは現時点では検証していません。

ゲストのスクリーン セーバー

XFree86 3.x X サーバを稼動する FreeBSD ホストでは、ゲスト OS でのスクリーン セーバーの使用は避けてください。ゲストでスクリーン セーバーを使用すると、大量の処理能力が必要なため、ホストの X サーバがフリーズする可能性があります。

FreeBSD 5.2

このセクションでは、FreeBSD 5.2 オペレーティング システムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について説明します。

32 ビット版

32 ビット版の FreeBSD 5.2 は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware Workstation**

FreeBSD 5.2 : Workstation 5.0、5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

- **SMP** : Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way を試験的にサポート

- **VMware ACE**

FreeBSD 5.2 : ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

- **VMware GSX Server**

FreeBSD 5.2 : GSX Server 3.1、3.2、3.2.1

- **VMware Server**

FreeBSD 5.2 : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9

その他のサポート

- **SMP** : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9 で 2 way を試験的にサポート

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

FreeBSD 5.2 は、標準の FreeBSD ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。

オペレーティング システムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

注意 VMware 仮想マシンで BusLogic 仮想 SCSI アダプタを使用した際、FreeBSD ゲスト OS の多くでさまざまな問題が発生しています。このゲスト OS では、LSI Logic 仮想 SCSI アダプタを使用することをお勧めします。

注意 VMware VirtualCenter または vCenter Server を使用してゲスト OS をインストールする場合は、その仮想マシンを実行する VMware 製品（ESX Server または VMware Server）で該当するゲスト OS がサポートされていることを確認してください。

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに FreeBSD CD を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、FreeBSD のインストールを開始します。
- 3 残りの手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

既知の問題

64 ビット版の FreeBSD ゲスト起動時の /etc/vmware-tools/locations ファイルの増大

64 ビット版の FreeBSD ゲストを再起動するたびに、`/etc/vmware-tools/locations` ファイルに次の文字列が追加されます。

```
remove_file /etc/vmware-tools/icu
file /etc/vmware-tools/icu
```

そのため、再起動のたびにファイルが大きくなります。

サウンド

FreeBSD でのサウンドサポートは現時点では検証していません。

ゲストのスクリーン セーバー

XFree86 3.x X サーバを稼動する FreeBSD ホストでは、ゲスト OS でのスクリーン セーバーの使用は避けてください。ゲストでスクリーン セーバーを使用すると、大量の処理能力が必要なため、ホストの X サーバがフリーズする可能性があります。

FreeBSD 5.1

このセクションでは、FreeBSD 5.1 オペレーティングシステムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について説明します。

32 ビット版

32 ビット版の FreeBSD 5.1 は、次の VMware 製品でサポートされています。

■ VMware Workstation

FreeBSD 5.1 : Workstation 5.0、5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

- SMP : Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way を試験的にサポート

■ VMware ACE

FreeBSD 5.1 : ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

■ VMware GSX Server

FreeBSD 5.1 : GSX Server 3.2、3.2.1

■ VMware Server

FreeBSD 5.1 : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9

その他のサポート

- SMP : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9 で 2 way を試験的にサポート

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

FreeBSD 5.1 は、標準の FreeBSD ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。

オペレーティングシステムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

注意 VMware 仮想マシンで BusLogic 仮想 SCSI アダプタを使用した際、FreeBSD ゲスト OS の多くでさまざまな問題が発生しています。このゲスト OS では、LSI Logic 仮想 SCSI アダプタを使用することをお勧めします。

注意 VMware VirtualCenter または vCenter Server を使用してゲスト OS をインストールする場合は、その仮想マシンを実行する VMware 製品（ESX Server または VMware Server）で該当するゲスト OS がサポートされていることを確認してください。

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに FreeBSD CD を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、FreeBSD のインストールを開始します。
- 3 残りの手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

既知の問題

64 ビット版の FreeBSD ゲスト起動時の /etc/vmware-tools/locations ファイルの増大

64 ビット版の FreeBSD ゲストを再起動するたびに、`/etc/vmware-tools/locations` ファイルに次の文字列が追加されます。

```
remove_file /etc/vmware-tools/icu
file /etc/vmware-tools/icu
```

そのため、再起動のたびにファイルが大きくなります。

サウンド

FreeBSD でのサウンドサポートは現時点では検証していません。

ゲストのスクリーン セーバー

XFree86 3.x X サーバを稼動する FreeBSD ホストでは、ゲスト OS でのスクリーン セーバーの使用は避けてください。ゲストでスクリーン セーバーを使用すると、大量の処理能力が必要なため、ホストの X サーバがフリーズする可能性があります。

FreeBSD 5.0

このセクションでは、FreeBSD 5.0 オペレーティング システムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について説明します。

32 ビット版

32 ビット版の FreeBSD 5.0 は、次の VMware 製品でサポートされています。

■ VMware Workstation

FreeBSD 5.0 : Workstation 4.5、4.5.1、4.5.2、4.5.3、5.0、5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

- **SMP** : Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way を試験的にサポート

■ VMware ACE

FreeBSD 5.0 : ACE 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

■ VMware GSX Server

FreeBSD 5.0 : GSX Server 3.0、3.1、3.2、3.2.1

■ VMware Server

FreeBSD 5.0 : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9

その他のサポート

- **SMP** : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9 で 2 way を試験的にサポート

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

FreeBSD 5.0 は、標準の FreeBSD ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。

オペレーティングシステムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

注意 VMware 仮想マシンで BusLogic 仮想 SCSI アダプタを使用した際、FreeBSD ゲスト OS の多くでさまざまな問題が発生しています。このゲスト OS では、LSI Logic 仮想 SCSI アダプタを使用することをお勧めします。

注意 VMware VirtualCenter または vCenter Server を使用してゲスト OS をインストールする場合は、その仮想マシンを実行する VMware 製品（ESX Server または VMware Server）で該当するゲスト OS がサポートされていることを確認してください。

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに FreeBSD CD を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、FreeBSD のインストールを開始します。
- 3 残りの手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

既知の問題

64 ビット版の FreeBSD ゲスト起動時の /etc/vmware-tools/locations ファイルの増大

64 ビット版の FreeBSD ゲストを再起動するたびに、
/etc/vmware-tools/locations ファイルに次の文字列が追加されます。

```
remove_file /etc/vmware-tools/icu
file /etc/vmware-tools/icu
```

そのため、再起動のたびにファイルが大きくなります。

サウンド

FreeBSD でのサウンドサポートは現時点では検証していません。

ゲストのスクリーンセーバー

XFree86 3.x X サーバを稼動する FreeBSD ホストでは、ゲスト OS でのスクリーンセーバーの使用は避けてください。ゲストでスクリーンセーバーを使用すると、大量の処理能力が必要なため、ホストの X サーバがフリーズする可能性があります。

FreeBSD 4.11

このセクションでは、FreeBSD 4.11 オペレーティングシステムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について説明します。

32 ビット版

32 ビット版の FreeBSD 4.11 は、次の VMware 製品でサポートされています。

■ VMware ESX Server

FreeBSD 4.11 : ESX 2.5.4、2.5.5

サポートでの考慮事項

- このゲスト OS を使用する ESX Server 仮想マシンは、vmx イーサネット アダプタを使用するように構成することをお勧めします。詳細は、製品ドキュメントを参照してください。

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

FreeBSD 4.11 は、標準の FreeBSD ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。

オペレーティングシステムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

注意	VMware 仮想マシンで BusLogic 仮想 SCSI アダプタを使用した際、FreeBSD ゲスト OS の多くでさまざまな問題が発生しています。このゲスト OS では、LSI Logic 仮想 SCSI アダプタを使用することをお勧めします。
-----------	--

注意	VMware VirtualCenter または vCenter Server を使用してゲスト OS をインストールする場合は、その仮想マシンを実行する VMware 製品 (ESX Server または VMware Server) で該当するゲスト OS がサポートされていることを確認してください。
-----------	---

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに FreeBSD CD を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、FreeBSD のインストールを開始します。
- 3 [FreeBSD Disklabel Editor] では、インストーラのデフォルトのオプションである **A** パーティショニングを使用しないでください。オプション **C** を使用してマウントを作成します。VMware Tools をインストールするには、インストーラがデフォルトで割り当てる容量以上の空き容量が **/usr** が必要です。パーティショニング スキームでは、必ず 4,000,000 ブロック以上が **/usr** に割り当てられるようにします。
- 4 残りの手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

既知の問題

64 ビット版の FreeBSD ゲスト起動時の /etc/vmware-tools/locations ファイルの増大

64 ビット版の FreeBSD ゲストを再起動するたびに、
/etc/vmware-tools/locations ファイルに次の文字列が追加されます。

```
remove_file /etc/vmware-tools/icu  
file /etc/vmware-tools/icu
```

そのため、再起動のたびにファイルが大きくなります。

サウンド

FreeBSD でのサウンドサポートは現時点では検証していません。

ゲストのスクリーン セーバー

XFree86 3.x X サーバを稼動する FreeBSD ホストでは、ゲスト OS でのスクリーン セーバーの使用は避けてください。ゲストでスクリーン セーバーを使用すると、大量の処理能力が必要なため、ホストの X サーバがフリーズする可能性があります。

FreeBSD 4.10

このセクションでは、FreeBSD 4.10 オペレーティングシステムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について説明します。

32 ビット版

32 ビット版の FreeBSD 4.10 は、次の VMware 製品でサポートされています。

■ VMware ESX Server

FreeBSD 4.10 : ESX 2.5、2.5.1、2.5.2、2.5.3、2.5.4、2.5.5

サポートでの考慮事項

- このゲスト OS を使用する ESX Server 仮想マシンは、vmx イーサネット アダプタを使用するように構成することをお勧めします。詳細は、製品ドキュメントを参照してください。

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

FreeBSD 4.10 は、標準の FreeBSD ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。

オペレーティングシステムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

注意	VMware 仮想マシンで BusLogic 仮想 SCSI アダプタを使用した際、FreeBSD ゲスト OS の多くでさまざまな問題が発生しています。このゲスト OS では、LSI Logic 仮想 SCSI アダプタを使用することをお勧めします。
-----------	--

注意	VMware VirtualCenter または vCenter Server を使用してゲスト OS をインストールする場合は、その仮想マシンを実行する VMware 製品 (ESX Server または VMware Server) で該当するゲスト OS がサポートされていることを確認してください。
-----------	---

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに FreeBSD CD を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、FreeBSD のインストールを開始します。
- 3 [FreeBSD Disklabel Editor] では、インストーラのデフォルトのオプションである **A** パーティショニングを使用しないでください。オプション **C** を使用してマウントを作成します。VMware Tools をインストールするには、インストーラがデフォルトで割り当てる容量以上の空き容量が **/usr** が必要です。パーティショニング スキームでは、必ず 4,000,000 ブロック以上が **/usr** に割り当てられるようにします。
- 4 残りの手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

既知の問題

64 ビットの FreeBSD ゲスト起動時の /etc/vmware-tools/locations ファイルの増大

64 ビット版の FreeBSD ゲストを再起動するたびに、**/etc/vmware-tools/locations** ファイルに次の文字列が追加されます。

```
remove_file /etc/vmware-tools/icu
file /etc/vmware-tools/icu
```

そのため、再起動のたびにファイルが大きくなります。

サウンド

FreeBSD でのサウンドサポートは現時点では検証していません。

ゲストのスクリーン セーバー

XFree86 3.x X サーバを稼動する FreeBSD ホストでは、ゲスト OS でのスクリーン セーバーの使用は避けてください。ゲストでスクリーン セーバーを使用すると、大量の処理能力が必要なため、ホストの X サーバがフリーズする可能性があります。

FreeBSD 4.9

このセクションでは、FreeBSD 4.9 オペレーティング システムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について説明します。

32 ビット版

32 ビット版の FreeBSD 4.9 は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware GSX Server**

FreeBSD 4.9 : GSX Server 3.2、3.2.1

- **VMware ESX Server**

FreeBSD 4.9 : ESX 2.5

サポートでの考慮事項

- このゲスト OS を使用する ESX Server 仮想マシンは、vmx イーサネット アダプタを使用するように構成することをお勧めします。詳細は、製品ドキュメントを参照してください。

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

FreeBSD 4.9 は、標準の FreeBSD ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。

オペレーティング システムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

注意	VMware 仮想マシンで BusLogic 仮想 SCSI アダプタを使用した際、FreeBSD ゲスト OS の多くでさまざまな問題が発生しています。このゲスト OS では、LSI Logic 仮想 SCSI アダプタを使用することをお勧めします。
-----------	--

注意	VMware VirtualCenter または vCenter Server を使用してゲスト OS をインストールする場合は、その仮想マシンを実行する VMware 製品 (ESX Server または GSX Server) で該当するゲスト OS がサポートされていることを確認してください。
-----------	--

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに FreeBSD CD を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、FreeBSD のインストールを開始します。
- 3 [FreeBSD Disklabel Editor] では、インストーラのデフォルトのオプションである **A** パーティショニングを使用しないでください。オプション **C** を使用してマウントを作成します。VMware Tools をインストールするには、インストーラがデフォルトで割り当てる容量以上の空き容量が **/usr** が必要です。パーティショニング スキームでは、必ず 4,000,000 ブロック以上が **/usr** に割り当てられるようにします。
- 4 残りの手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

既知の問題

64 ビット版の FreeBSD ゲスト起動時の /etc/vmware-tools/locations ファイルの増大

64 ビット版の FreeBSD ゲストを再起動するたびに、
/etc/vmware-tools/locations ファイルに次の文字列が追加されます。

```
remove_file /etc/vmware-tools/icu  
file /etc/vmware-tools/icu
```

そのため、再起動のたびにファイルが大きくなります。

サウンド

FreeBSD でのサウンドサポートは現時点では検証していません。

ゲストのスクリーン セーバー

XFree86 3.x X サーバを稼動する FreeBSD ホストでは、ゲスト OS でのスクリーン セーバーの使用は避けてください。ゲストでスクリーン セーバーを使用すると、大量の処理能力が必要なため、ホストの X サーバがフリーズする可能性があります。

FreeBSD 4.4、4.5、4.6.2、4.8

このセクションでは、FreeBSD 4.4、4.5、4.6.2、および 4.8 オペレーティングシステムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について説明します。

32 ビット版

32 ビット版の FreeBSD 4.4、4.5、4.6.2、および 4.8 は、次の VMware 製品でサポートされています。

■ VMware Workstation

FreeBSD 4.4、4.5、4.6.2、4.8 : Workstation 4.0、4.0.1、4.0.2、4.0.5、4.5、4.5.1、4.5.2、4.5.3、5.0、5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

- **SMP** : Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way を試験的にサポート

■ VMware ACE

FreeBSD 4.4、4.5、4.6.2、4.8 : ACE 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

■ VMware GSX Server

FreeBSD 4.4、4.5、4.6.2、4.8 : GSX Server 3.0、3.1、3.2、3.2.1

■ VMware Server

FreeBSD 4.4、4.5、4.6.2、4.8 : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9

その他のサポート

- **SMP** : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9 で 2 way を試験的にサポート

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

FreeBSD 4.4、4.5、4.6.2、または 4.8 は、標準の FreeBSD ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。

注意 FreeBSD 4.6 はサポートされていません。代わりに FreeBSD 4.6.2 を使用してください。これにより、仮想マシンに FreeBSD 4.6 をインストールする際に発生する問題が解決します。

オペレーティングシステムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

注意 VMware 仮想マシンで BusLogic 仮想 SCSI アダプタを使用した際、FreeBSD ゲスト OS の多くでさまざまな問題が発生しています。このゲスト OS では、LSI Logic 仮想 SCSI アダプタを使用することをお勧めします。

注意 VMware VirtualCenter または vCenter Server を使用してゲスト OS をインストールする場合は、その仮想マシンを実行する VMware 製品 (ESX Server または VMware Server) で該当するゲスト OS がサポートされていることを確認してください。

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに FreeBSD CD を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、FreeBSD のインストールを開始します。
- 3 残りの手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

多くの FreeBSD ディストリビューションでは、VMware Tools のインストール後に IPv6 が有効になっていると、VMware Tools を **vmware-config-tools.pl** で構成することができません。この場合、VMware Tools は該当する仮想マシン向けにネットワーク デバイスを正しく設定することができず、次のようなメッセージが表示されます。

```
Unloading pcnet32 module
unregister_netdevice: waiting for eth0 to become free
```


このメッセージは、仮想マシンを再起動するまで連続して繰り返し表示されます。FreeBSD を実行する仮想マシンでこの問題を防ぐには、VMware Tools をインストールする前に IPv6 を無効にしておきます。

FreeBSD を実行する仮想マシンで IPv6 を無効にするには

- 1 `/etc/sysconfig/network` ファイルに `NETWORKING_IPV6=yes` という行が含まれている場合は、この行を次のように変更します。

```
NETWORKING_IPV6=no
```

- 2 `/etc/modules.conf` ファイルに、次の行を追加します。

```
alias ipv6 off
alias net-pf-10 off
```

IPv6 を無効にすると、VMware Tools を正常にインストールし、構成できます。

既知の問題

64 ビット版の FreeBSD ゲスト起動時の `/etc/vmware-tools/locations` ファイルの増大

64 ビット版の FreeBSD ゲストを再起動するたびに、`/etc/vmware-tools/locations` ファイルに次の文字列が追加されます。

```
remove_file /etc/vmware-tools/icu
file /etc/vmware-tools/icu
```

そのため、再起動のたびにファイルが大きくなります。

サウンド

FreeBSD でのサウンド サポートは現時点では検証していません。

ゲストのスクリーン セーバー

XFree86 3.x X サーバを稼動する FreeBSD ホストでは、ゲスト OS でのスクリーン セーバーの使用は避けてください。ゲストでスクリーン セーバーを使用すると、大量の処理能力が必要なため、ホストの X サーバがフリーズする可能性があります。

異なるプロセッサへの移行

FreeBSD 仮想マシンを AMD プロセッサ上で稼働するホストと Intel プロセッサ上で稼働するホストとの間で移行することはお勧めしません。

FreeBSD ディストリビューションの多くは、インストール時に、インストール先の特定のプロセッサに最も適したカーネルを選択します。また、一部のディストリビューションは、デフォルトで GENERIC カーネルをインストールしますが、ユーザーが選択してインストールできるアーキテクチャ固有のカーネルも提供しています。このようなカーネルには、そのプロセッサでのみ利用できる命令が含まれている場合があります。異なる種類のプロセッサを使用するホストでこれらの命令を実行すると、悪影響が生じる可能性があります。

このため、AMD プロセッサを使用するホストで作成された FreeBSD 仮想マシンは、Intel プロセッサを使用するホストに移行しても動作しないことがあります。逆に、Intel プロセッサを使用するホストで作成された FreeBSD 仮想マシンを AMD プロセッサを使用するホストに移行しても動作しない場合があります。

これは仮想マシンに限られたものではなく、物理コンピュータでも発生する問題です。たとえば、FreeBSD がインストールされたハード ドライブを AMD マシンから Intel マシンに移動した場合、そのドライブから起動しようとすると問題が発生します。

FreeBSD 4.0、4.1、4.2、4.3

このセクションでは、FreeBSD 4.0、4.1、4.2、および 4.3 オペレーティングシステムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について説明します。

32 ビット版

32 ビット版の FreeBSD 4.0、4.1、4.2、および 4.3 は、次の VMware 製品でサポートされています。

■ VMware Workstation

FreeBSD 4.0、4.1、4.2、4.3 : Workstation 4.0、4.0.1、4.0.2、4.0.5、4.5、4.5.1、4.5.2、4.5.3、5.0、5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

- SMP : Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way を試験的にサポート

■ VMware ACE

FreeBSD 4.0、4.1、4.2、4.3 : ACE 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

■ VMware GSX Server

FreeBSD 4.0、4.1、4.2、4.3 : GSX Server 3.0、3.1、3.2、3.2.1

■ VMware Server

FreeBSD 4.0、4.1、4.2、4.3 : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9

その他のサポート

- SMP : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9 で 2 way を試験的にサポート

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

FreeBSD 4.0、4.1、4.2、または 4.3 は、標準の FreeBSD ディストリビューション CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。

オペレーティングシステムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

注意 仮想マシンに仮想 IDE ディスクを構成している場合は、物理マシンと同じ手順でインストールを行います。仮想マシンに 2GB 以上の SCSI 仮想ディスクが構成されている場合は、「[FreeBSD の SCSI 仮想ディスク用のディスク ジオメトリの設定](#) (P.573)」を参照してください。

注意 VMware 仮想マシンで BusLogic 仮想 SCSI アダプタを使用した際、FreeBSD ゲスト OS の多くでさまざまな問題が発生しています。このゲスト OS では、LSI Logic 仮想 SCSI アダプタを使用することをお勧めします。

注意 VMware VirtualCenter または vCenter Server を使用してゲスト OS をインストールする場合は、その仮想マシンを実行する VMware 製品（ESX Server または VMware Server）で該当するゲスト OS がサポートされていることを確認してください。

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに FreeBSD CD を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、FreeBSD のインストールを開始します。
- 3 残りの手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。

VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

多くの Linux ディストリビューションでは、VMware Tools のインストール後に IPv6 が有効になっていると、VMware Tools を **vmware-config-tools.pl** で構成することができません。この場合、VMware Tools は該当する仮想マシン向けにネットワーク デバイスを正しく設定することができず、次のようなメッセージが表示されます。

```
Unloading pcnet32 module
unregister_netdevice: waiting for eth0 to become free
```

このメッセージは、仮想マシンを再起動するまで連続して繰り返し表示されます。FreeBSD を実行する仮想マシンでこの問題を防ぐには、VMware Tools をインストールする前に IPv6 を無効にしておきます。

FreeBSD を実行する仮想マシンで IPv6 を無効にするには

- 1 `/etc/sysconfig/network` ファイルに `NETWORKING_IPV6=yes` という行が含まれている場合は、この行を次のように変更します。

```
NETWORKING_IPV6=no
```

- 2 `/etc/modules.conf` ファイルに、次の行を追加します。

```
alias ipv6 off
alias net-pf-10 off
```

IPv6 を無効にすると、VMware Tools を正常にインストールし、構成できます。

既知の問題**64 ビット版の FreeBSD ゲスト起動時の `/etc/vmware-tools/locations` ファイルの増大**

64 ビット版の FreeBSD ゲストを再起動するたびに、`/etc/vmware-tools/locations` ファイルに次の文字列が追加されます。

```
remove_file /etc/vmware-tools/icu
file /etc/vmware-tools/icu
```

そのため、再起動のたびにファイルが大きくなります。

FreeBSD の SCSI 仮想ディスク用のディスク ジオメトリの設定

FreeBSD 4.0、4.1、4.2、または 4.3 を 2GB 以上の SCSI 仮想ディスクにゲスト OS としてインストールする場合、このセクションの特別な手順を実行しないかぎり、ゲスト OS は起動しません。

これは、ゲスト OS をインストールする際、FreeBSD が仮想ディスクのジオメトリを正しく検出しないためです。このため、FreeBSD は、仮想ディスク上の誤った場所にブート ロードをインストールします。FreeBSD の起動時に、FreeBSD ブート ロードが重要なデータを BIOS に求めますが、このデータは仮想ディスクの別のセクションに存在することになります。その結果、FreeBSD が起動しません。

この問題は、FreeBSD 4.4 で修正されました。これ以降のバージョンでは、あらゆるサイズの SCSI 仮想ディスクで正常に起動します。

仮想マシンで FreeBSD 4.0、4.1、4.2、または 4.3 を使用するには、次の 2 つの処理のいずれかを実行します。

- 仮想マシンで IDE 仮想ディスクを代わりに使用する。この場合、構成エディタを使用して IDE 仮想ディスクを仮想マシンに追加する必要があります。
- FreeBSD をインストールする際に、手動でディスク ジオメトリを設定する。手順は次のとおりです。

手動でディスク ジオメトリを設定するには

- 1 [FDISK Partition Editor] 画面が表示される前に、FreeBSD はディスク ジオメトリを誤って計算します（下図参照）。

```

Disk name: 100 FDISK Partition Editor
DISK Geometry: 2055 cyls/64 heads/32 sectors = 4208640 sectors (2055MB)
Offset      Size(ST)      End      Name  PType  Desc Subtype  Flags
-----
0  4208630  4208629  -    6  unused  0

The following commands are supported (in upper or lower case):
a = Use Entire Disk    G = set Drive Geometry    C = Create Slice
d = Delete Slice      Z = Toggle Size Units    S = Set Bootable
t = Change Type        U = Undo All Changes    Q = Finish

Use F1 or ? to get more help, arrow keys to select.

```

- 2 ディスク ジオメトリを設定します。<G> キーを押して [Set Drive Geometry] オプションを選択します。2055/64/32 のような数字がダイアログ ボックスに表示されます。これは誤ったジオメトリのシリンダー数、ヘッド数、およびヘッドごとのセクタ数を表したものです。

```

Disk name: 100 FDISK Partition Editor
DISK Geometry: 2055 cyls/64 heads/32 sectors = 4208640 sectors (2055MB)
Offset      Size(ST)      End      Name  PType  Desc Subtype  Flags
-----
0  4208630  4208629  -    6  unused  0

The following commands are supported (in upper or lower case):
a = Use Entire Disk    G = set Drive Geometry    C = Create Slice
d = Delete Slice      Z = Toggle Size Units    S = Set Bootable
t = Change Type        U = Undo All Changes    Q = Finish

Use F1 or ? to get more help, arrow keys to select.

```

Warning Required

Please specify the new geometry in cyl/hd/sect format.
Don't forget to use the two slash (/) separator characters!
It's not possible to parse the field without them.

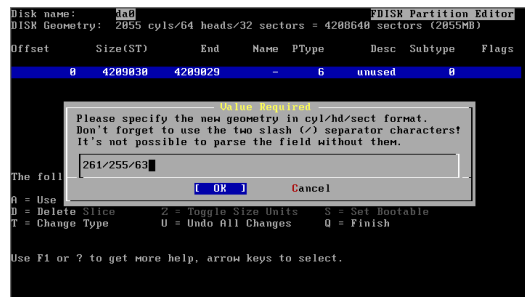
2055/64/32

[OK] Cancel

- 正しいジオメトリを計算するには、まずシリンダ数、ヘッド数、およびヘッドごとのセクタ数をすべて乗算し、セクタ数の総計を算出します。次に、そのセクタ数を、正しいヘッド数とヘッドごとのセクタ数とを乗算した値で除算します。

前図の仮想ディスクは、2055 シリンダ、64 ヘッド、32 セクタで構成された 2055MB のディスクです（この数字は誤ったジオメトリを表す）。この 3 つの数字を乗算すると（ $2055 \times 64 \times 32 =$ ）4,208,640 セクタになります。

仮想マシンが使用する BusLogic 互換の仮想 SCSI アダプタ用の正しいジオメトリを特定するには、4,208,640 セクタを、実際のヘッド数とヘッドごとのセクタ数とを乗算した値（255 ヘッド \times 63 セクタ）で除算してシリンダ数を算出します。この結果、実際のシリンダ数は 261 になります（ $4208640 / (255 \times 63) = 261$ 、端数切捨て）。



- ここまで計算したら、正しいジオメトリ（261 シリンダ、255 ヘッド、ヘッドごとに 63 セクタ）として、ダイアログ ボックスに **261/255/63** と入力します。
[OK] をクリックし、FreeBSD のインストールを続行します。

サウンド

FreeBSD でのサウンド サポートは現時点では検証していません。

ゲストのスクリーンセーバー

XFree86 3.x X サーバを稼動する FreeBSD ホストでは、ゲスト OS でのスクリーンセーバーの使用は避けてください。ゲストでスクリーンセーバーを使用すると、大量の処理能力が必要なため、ホストの X サーバがフリーズする可能性があります。

異なるプロセッサへの移行

FreeBSD 仮想マシンを AMD プロセッサ上で稼働するホストと Intel プロセッサ上で稼働するホストとの間で移行することはお勧めしません。

FreeBSD ディストリビューションの多くは、インストール時に、インストール先の特定のプロセッサに最も適したカーネルを選択します。また、一部のディストリビューションは、デフォルトで GENERIC カーネルをインストールしますが、ユーザーが選択してインストールできるアーキテクチャ固有のカーネルも提供しています。このようなカーネルには、そのプロセッサでのみ利用できる命令が含まれている場合があります。異なる種類のプロセッサを使用するホストでこれらの命令を実行すると、悪影響が生じる可能性があります。

このため、AMD プロセッサを使用するホストで作成された FreeBSD 仮想マシンは、Intel プロセッサを使用するホストに移行しても動作しないことがあります。逆に、Intel プロセッサを使用するホストで作成された FreeBSD 仮想マシンを AMD プロセッサを使用するホストに移行しても動作しない場合があります。

これは仮想マシンに限られたものではなく、物理コンピュータでも発生する問題です。たとえば、FreeBSD がインストールされたハード ドライブを AMD マシンから Intel マシンに移動した場合、そのドライブから起動しようとすると問題が発生します。

NetWare 6.5 Server

このセクションでは、NetWare 6.5 Server オペレーティングシステムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について説明します。

32 ビット版

32 ビット版の NetWare 6.5 Server は、次の VMware 製品でサポートされています。

■ VMware Workstation

NetWare 6.5 Server Support Pack 1 : Workstation 4.5、4.5.1、4.5.2、4.5.3

NetWare 6.5 Server Support Pack 3 : Workstation 5.0、5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

NetWare 6.5 Server Support Pack 5 : Workstation 6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

アップデート版のサポート

■ **Support Pack 1** : Workstation 4.5、4.5.1、4.5.2、4.5.3

■ **Support Pack 3** : Workstation 5.0、5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

■ **Support Pack 5** : Workstation 6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

■ **SMP** : Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way を試験的にサポート

■ **Novell Open Enterprise Server** : Workstation 5.0、5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

■ **VMware ACE**

NetWare 6.5 Server Support Pack 1 : ACE 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

アップデート版のサポート

- **Support Pack 1** : ACE 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

■ **VMware GSX Server**

NetWare 6.5 Server Support Pack 1 : GSX Server 3.0、3.1、3.2、3.2.1

アップデート版のサポート

- **Support Pack 1** : GSX Server 3.0、3.1、3.2、3.2.1

■ **VMware Server**

NetWare 6.5 Server Support Pack 3 : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9

アップデート版のサポート

- **Support Pack 3** : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9

- **Support Pack 6** : VMware Server 2.0、2.0.1

その他のサポート

- **SMP** : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9、2.0、2.0.1 で 2 way を試験的にサポート
- **Novell Open Enterprise Server** : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9、2.0、2.0.1
- **Novell Open Enterprise Server Support Pack 1** : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9、2.0、2.0.1
- **Novell Open Enterprise Server Support Pack 2** : VMware Server 2.0、2.0.1

■ VMware ESX Server

NetWare 6.5 Server : ESX 2.0.1、2.1、2.1.1、2.1.2、2.5、2.5.1、2.5.2、2.5.3、2.5.4、2.5.5、3.0、3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

アップデート版のサポート

- **Support Pack 2** : ESX 2.5、2.5.1、2.5.2、2.5.3、2.5.4、2.5.5、3.0
- **Support Pack 3** : ESX 3.0
- **Support Pack 4 (a)** : ESX 2.5.3 (Upgrade Patch 1 が必要。詳細は <http://vmware.com/support/esx25/doc/esx-253-200605-patch.html> を参照)、2.5.4、2.5.5、3.0、3.0.1、3.0.2、3.0.3
- **Support Pack 5** : ESX 2.5.3 (Upgrade Patch 1 が必要。詳細は <http://vmware.com/support/esx25/doc/esx-253-200605-patch.html> を参照)、2.5.4、2.5.5、3.0、3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0
- **Support Pack 6** : ESX 2.5.3 (Upgrade Patch 8 が必要。詳細は <http://vmware.com/support/esx25/doc/esx-253-200702-patch.html> を参照) ESX 2.5.4、2.5.5 (Upgrade Patch 5 が必要。詳細は <http://vmware.com/support/esx25/doc/esx-253-200611-patch.html> を参照)、ESX 3.0 (Patch ESX-6530518 が必要。詳細は <http://kb.vmware.com/kb/6530518> を参照)、ESX 3.0.1 (Patch ESX-1271657 が必要。詳細は <http://kb.vmware.com/kb/1271657> を参照)、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0
- **Support Pack 7** : ESX 2.5.4、2.5.5、3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0
- **Support Pack 8** : ESX 2.5.5、3.0.2、3.0.3、3.5 U3、3.5 U4、4.0

その他のサポート

- **Novell Open Enterprise Server Support Pack 1** : ESX 2.5.2、2.5.3、2.5.4、2.5.5、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0
- **Novell Open Enterprise Server Support Pack 2** : ESX 2.5.4、2.5.5、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0
- **Novell Open Enterprise Server 2** : ESX 3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0
- **Novell Open Enterprise Server 2 Support Pack 1** : ESX 3.0.2、3.0.3、3.5 U3、3.5 U4、4.0

■ VMware Fusion

NetWare 6.5 Server : Fusion 1.0、1.1、1.1.1、1.1.2、1.1.3、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

アップデート版のサポート

■ **Support Pack 5** : Fusion 1.0、1.1、1.1.1、1.1.2、1.1.3、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

■ **Support Pack 7** : Fusion 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

オペレーティング システムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

注意 ESX Server 上の Novell Open Enterprise Server を搭載した NetWare 6.5 に仮想マシンを作成する場合、ゲスト OS に [Novell NetWare] を選択し、バージョンに [Novell NetWare 6.x] を選択します。

NetWare 6.5 は、標準の Novell NetWare 6.5 Operating System and Product CD-ROM を使用して仮想マシンにインストールできます。

次の点に注意してください。

- NetWare 6.5 は、512MB 以上のメモリで構成されたコンピュータにインストールすることをお勧めします。
- **Support Pack 1 が適用されていないゲスト** : Novell テクニカル情報 (support.novell.com/cgi-bin/search/searchtid.cgi?/2967370.htm) に必ず目を通してください。このドキュメントには、SP1 が適用されていない NetWare 6.5 Server をゲスト OS としてインストールする際に使用する NetWare パッチのダウンロードおよびインストールに必要な手順が記載されています。
- NetWare 6.5 ゲストをインストールする仮想マシンを構成する際は、仮想 LSI Logic SCSI アダプタを使用してください。NetWare 6.5 には、仮想 BusLogic SCSI アダプタのドライバが含まれていません。

注意 VMware VirtualCenter または vCenter Server を使用してゲスト OS をインストールする場合は、その仮想マシンを実行する VMware 製品 (ESX Server または VMware Server) で該当するゲスト OS がサポートされていることを確認してください。

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに Novell NetWare 6.5 Product CD を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、NetWare 6.5 のインストールを開始します。
- 3 使用許諾契約書に目を通し、同意します。

注意 使用許諾契約書の前に選択画面がいくつか表示されます。NetWare のインストール、CD-ROM ドライブの種類、フロッピー ドライブの復元方法、および実行モードは、デフォルト値を使用して処理を続行してください。

- 4 選択画面が表示されたら、[IDE CD-ROM] を選択します。
- 5 新しいブート パーティションを作成します。ゲスト OS が再起動します。インストールを続行します。
- 6 **VMware ESX Server** : [ステップ 7](#) に進みます。

VMware Workstation、VMware ACE、および VMware GSX Server : 次のいずれかの処理を実行して、IP ネットワークを構成します。

- 仮想マシンでブリッジ ネットワークを使用する場合は、その IP アドレスを入力します。

NetWare が LAN ドライバをロード (`pcntnw.lan` を使用) しようとする、自身の IP アドレス宛てにブロードキャストしてしまうため、処理が中断されます。このため、IP ネットワークが動作しなくなります。

この問題を回避するには、System Console を開いて (<Ctrl> + <Esc> キーを押す) 次を入力します。

set allow ip address duplicates=on

<Alt> + <Esc> キーを押してインストール モードに戻ります。

- 仮想マシンでホストオンリー ネットワークを使用する場合は、そのホストマシンの IP アドレスを調べます。

Windows ホストの場合、コマンド プロンプトで次のように入力します。

ipconfig /all

Linux ホストの場合、コマンド プロンプトで次のように入力します。

ifconfig

ホストの VMnet1 の IP アドレスを記録し、その最後のオクテットが、ホストの IP アドレスの最後のオクテットより大きくなるように変更します。

たとえば、ホストの IP アドレスが 192.168.160.1 の場合、仮想マシンの IP アドレスは 192.168.160.### となり、この ### には、1 より大きく 128 未満の任意の数字を設定します。

サブネット マスクには、**255.255.255.0** と入力します。

ルータ ゲートウェイには、ホストの IP アドレス（この例では 192.168.160.1）を入力します。

- 仮想マシンでネットワーク アドレス変換（NAT）を使用する場合は、そのホスト マシンの IP アドレスを調べます。

Windows ホストの場合、コマンド プロンプトで次のように入力します。

ipconfig /all

Linux ホストの場合、コマンド プロンプトで次のように入力します。

ifconfig

ホストの VMnet8 の IP アドレスを記録し、その最後のオクテットが、ホストの IP アドレスの最後のオクテットより大きくなるように変更します。

たとえば、ホストの IP アドレスが 192.168.160.1 の場合、仮想マシンの IP アドレスは 192.168.160.### となり、この ### には、2 より大きく 128 未満の任意の数字を設定します。

サブネット マスクには、**255.255.255.0** と入力します。

ルータ ゲートウェイには、NAT サービスの IP アドレス（この例では 192.168.160.2）を入力します。

NAT では、ホスト上で次の 2 つの IP アドレスが使用されます。

- VMnet8 用のインターフェイスに割り当てられる IP アドレス（**ipconfig** 出力に表示され、最後のオクテットが「.1」）
- NAT デバイス自体が使用する IP アドレス（最後のオクテットが常に「.2」）

7 画面の指示に従ってインストールを完了します。

インストールの完了後、VMware Tools をインストールします。これをインストールすると、CPU アイドル プログラムがインストールされ、ロードされます。

NetWare 6.5 Server ゲスト OS 向け VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

VMware Tools をインストールすると、CPU アイドル プログラムもインストールされ、ロードされます。NetWare サーバは、オペレーティング システムがアイドル状態になった場合でも CPU を使用します。このため、NetWare サーバソフトウェアがアイドル状態であるかビジー状態であるかに関わらず、仮想マシンはホストから CPU 時間を消費します。不必要な遅延を避けるため、VMware Tools のインストール後は、インストールされた NetWare CPU アイドル プログラムを常にロードしておくことをお勧めします。

既知の問題

再起動後のキーボードおよびマウス コントロールの回復

ゲスト OS を再起動すると、キーボードやマウスのコントロールが回復するまでに最大 6 分かかることがあります。

テキスト モードでの検索

テキスト モードの使用時にファイルシステムを検索する場合、カーソル キーおよび <Insert> キーを使用してディレクトリを移動できないことがあります。この問題を回避するには、<Num Lock> キーを押して Num Lock をオフにしてから、数字キーを使用します。

非パススルーの RAW デバイス マッピングを使用するゲストでのイーサネット ドライバの選択後に発生する NetWare 6.5 Server SP3 および SP5 のインストールのハング アップ

非パススルーの RAW デバイス マッピング (RDM) を使用するゲストに NetWare Server 6.5 SP3 または SP5 をインストールすると、イーサネット ドライバの選択後にインストールがハング アップすることがあります。NetWare Server 6.5 SP3 および SP5 では、パススルー RDM を使用することをお勧めします。

以前インストールした Windows NT RDM ゲストと同じ LUN を使用する RDM 仮想マシンとしてインストールするとアクセス不可能になる Netware サーバのゲスト

RAW デバイス マッピング (RDM) 仮想マシンに Novell Netware Server をインストールする際、以前同じホスト上の RDM 仮想マシンに Windows NT をインストールするときに使用した論理ユニット番号 (LUN) を使用すると、前回の Windows NT のインストール時に作成された既存の FAT16 パーティションでインストールが行われます。最後の再起動までインストールは正常に行われますが、この段階で Windows NT のマスター ブート レコード (MBR) がロードされるため、デバイス アクセス エラーが発生してクラッシュし、ブルー スクリーンが表示されます。NetWare がインストールされている場合でも、NetWare オペレーティング システムにアクセスできません。

この問題を回避するには、NetWare 仮想マシンをインストールする前に LUN のフォーマットを行います。これで、古い FAT16 パーティションのフォーマットが行われ、NetWare が正常に再起動します。

NetWare 6.0 Server

このセクションでは、NetWare 6.0 Server オペレーティングシステムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について説明します。

32 ビット版

32 ビット版の NetWare 6.0 Server は、次の VMware 製品でサポートされています。

■ VMware Workstation

NetWare 6.0 Server Support Pack 3 : Workstation 4.0、4.0.1、4.0.2、4.0.5、4.5、4.5.1、4.5.2、4.5.3

NetWare 6.0 Server Support Pack 4 : Workstation 5.0、5.5、5.5.1

NetWare 6.0 Server Support Pack 5 : Workstation 5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

アップデート版のサポート

■ **Support Pack 3** : Workstation 4.0、4.0.1、4.0.2、4.0.5、4.5、4.5.1、4.5.2、4.5.3

■ **Support Pack 4** : Workstation 5.0、5.5、5.5.1

■ **Support Pack 5** : Workstation 5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

■ **SMP** : Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way を試験的にサポート

■ VMware ACE

NetWare 6.0 Server Support Pack 3 : ACE 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

アップデート版のサポート

■ **Support Pack 3** : ACE 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

- **VMware GSX Server**

NetWare 6.0 Server Support Pack 3 : GSX Server 3.0、3.1、3.2、3.2.1

アップデート版のサポート

- **Support Pack 3** : GSX Server 3.0、3.1、3.2、3.2.1

- **VMware Server**

NetWare 6.0 Server Support Pack 5 : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9

アップデート版のサポート

- **Support Pack 5** : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9

その他のサポート

- **SMP** : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9 で 2 way を試験的にサポート

- **VMware ESX Server**

NetWare 6.0 Server : ESX 2.0.1、2.1、2.1.1、2.1.2、2.5、2.5.1、2.5.2、2.5.3、2.5.4、2.5.5、3.0、3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

アップデート版のサポート

- **Support Pack 3** : ESX 2.1.1、2.1.2、2.5、2.5.1、2.5.2、2.5.3、2.5.4、2.5.5

- **Support Pack 5** : ESX 2.5、2.5.1、2.5.2、2.5.3、2.5.4、2.5.5、3.0、3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

Novell Open Enterprise Server Support Pack 1 : ESX 2.5.2、2.5.3、2.5.4、2.5.5、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

Novell Open Enterprise Server Support Pack 2 : ESX 2.5.4、2.5.5、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

アップデート版のサポート

- **Support Pack 1** : ESX 2.5.2、2.5.3、2.5.4、2.5.5、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

- **Support Pack 2** : ESX 2.5.4、2.5.5、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

NetWare 6.0 は、標準の Novell NetWare 6.0 の CD-ROM を使用して仮想マシンにインストールできます。

次の点に注意してください。

- NetWare 6 は、256MB 以上のメモリで構成されたコンピュータにインストールすることをお勧めします。
- NetWare のインストール中に、インストール CD からの起動を 2 回行う必要があります。1 回目は仮想マシンのディスク ドライブをフォーマットするため、2 回目は CD からファイルをインストールするためです。

再起動中に、「**Operating System not found**」というメッセージが表示され、さらに「**No bootable CD, floppy or hard disk was detected**」というメッセージのダイアログ ボックスが表示されます。

2 回目に CD から起動するには、起動の順番を変更する必要があります。

仮想マシンの起動中に仮想マシンのウィンドウ内をクリックします。VMware のロゴが表示されたら <Esc> キーを押します。カーソルキーを使用して、ブートデバイスとして CD ドライブを選択し、<Enter> キーを押します。

- NetWare 6.0 ゲストをインストールする仮想マシンを構成する際は、仮想 LSI Logic SCSI アダプタを使用してください。NetWare 6.0 には、仮想 BusLogic SCSI アダプタのドライバが含まれていません。

注意 VMware VirtualCenter または vCenter Server を使用してゲスト OS をインストールする場合は、その仮想マシンを実行する VMware 製品 (ESX Server または VMware Server) で該当するゲスト OS がサポートされていることを確認してください。

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに Novell NetWare 6.0 CD を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、NetWare 6.0 のインストールを開始します。
- 3 使用許諾契約書に目を通し、同意します。
- 4 選択画面が表示されたら、[IDE CD-ROM] を選択します。
- 5 新しいブート パーティションを作成します。ゲスト OS が再起動します。
- 6 次のいずれかの処理を実行して、IP ネットワークを構成します。

- 仮想マシンでブリッジ ネットワークを使用する場合は、その IP アドレスを入力します。

NetWare が LAN ドライバをロード (`pcntnw.lan` を使用) しようとする、自身の IP アドレス宛てにブロードキャストしてしまうため、処理が中断されます。このため、IP ネットワークが動作しなくなります。

この問題を回避するには、System Console を開いて (<Ctrl> + <Esc> キーを押す) 次を入力します。

set allow ip address duplicates=on

<Alt> + <Esc> キーを押してインストール モードに戻ります。

- 仮想マシンでホストオンリー ネットワークを使用する場合は、そのホストマシンの IP アドレスを調べます。

Windows ホストの場合、コマンド プロンプトで次のように入力します。

ipconfig /all

Linux ホストの場合、コマンド プロンプトで次のように入力します。

ifconfig

ホストの VMnet1 の IP アドレスを記録し、その最後のオクテットが、ホストの IP アドレスの最後のオクテットより大きくなるように変更します。

たとえば、ホストの IP アドレスが 192.168.160.1 の場合、仮想マシンの IP アドレスは 192.168.160.### となり、この ### には、1 より大きく 128 未満の任意の数字を設定します。

サブネット マスクには、**255.255.255.0** と入力します。

ルータ ゲートウェイには、ホストの IP アドレス (この例では 192.168.160.1) を入力します。

- 仮想マシンでネットワーク アドレス変換 (NAT) を使用する場合は、そのホスト マシンの IP アドレスを調べます。

Windows ホストの場合、コマンド プロンプトで次のように入力します。

ipconfig /all

Linux ホストの場合、コマンド プロンプトで次のように入力します。

ifconfig

ホストの VMnet8 の IP アドレスを記録し、その最後のオクテットが、ホストの IP アドレスの最後のオクテットより大きくなるように変更します。

たとえば、ホストの IP アドレスが 192.168.160.1 の場合、仮想マシンの IP アドレスは 192.168.160.### となり、この ### には、2 より大きく 128 未満の任意の数字を設定します。

サブネット マスクには、**255.255.255.0** と入力します。

ルータ ゲートウェイには、NAT サービスの IP アドレス（この例では 192.168.160.2）を入力します。

NAT では、ホスト上で次の 2 つの IP アドレスが使用されます。

- VMnet8 用のインターフェイスに割り当てられる IP アドレスは、**ipconfig** 出力に表示され、最後のオクテットが 1 です。
- NAT デバイス自体が使用する IP アドレスは、最後のオクテットが常に 2 です。

7 インストールを完了します。

インストールの完了後、VMware Tools をインストールします。これをインストールすると、CPU アイドル プログラムがインストールされ、ロードされます。

NetWare 6.0 Server ゲスト OS 向け VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

VMware Tools をインストールすると、CPU アイドル プログラムもインストールされ、ロードされます。NetWare サーバは、オペレーティング システムがアイドル状態になった場合でも CPU を使用します。このため、NetWare サーバソフトウェアがアイドル状態であるかビジー状態であるかに関わらず、仮想マシンはホストから CPU 時間を消費します。不必要な遅延を避けるため、VMware Tools のインストール後は、インストールされた NetWare CPU アイドル プログラムを常にロードしておくことをお勧めします。

既知の問題

VMware Tools の ISO ファイルの切断

VMware Tools のインストール中に仮想マシンが再起動します。そのあとに仮想マシンが VMware Tools の ISO イメージをリリースしたことを必ず確認してください。[Edit] - [Removable Devices] - [CD-ROM] を選択します。CD-ROM の構成に VMware Tools の ISO イメージが表示されている場合は、[Use physical drive] に戻します。

はじめてのインストールでの中断

ゲスト OS のインストール中に **JVM.NLM** モジュールで **ABEND** エラーが発生した場合、オペレーティング システムを再度インストールしてください。これはサードパーティ側の問題でめったに発生しません。また、発生するのはインストール中に限られます。インストールを一度完了すると、この問題が再度発生することはありません。

マウスのポインタの有効化

仮想マシンがマウスで正常に操作できない場合、仮想マシンで参照されていない Java クラスが原因である可能性があります。NetWare 6.0 ゲスト OS で **sys:¥java¥nwgfx¥xinitrc** ファイルを確認してください。

マウス ポインタで操作するには

- 1 仮想マシンで System Console に切り替え、次のように入力します。

```
load edit
```

- 2 <Insert> キーを押し、**sys:¥java¥nwgfx¥xinitrc** ファイルを検索します。

- 3 ファイル内で、次の行を検索します。

```
java -classpath $JAVA_HOME¥classes¥VMWtool.jar;$CLASSPATH VMWTool -iw
```

- 4 前述の行が存在しない場合、これをファイルに追加します。<Esc> キーを押します。ファイルを保存します。

- 5 ゲスト OS を再起動します。System Console で、次を入力します。

```
restart server
```

これで、仮想マシンでマウスで操作できるようになります。

カーソル キーによるファイル システムの検索不可

テキスト モードの使用時にファイル システムを検索する場合、カーソル キーおよび <Insert> キーを使用してディレクトリを移動できないことがあります。この問題を回避するには、<Num Lock> キーを押して Num Lock をオフにしてから、数字キーを使用します。

スタック ダンプが有効なメモリ制限を超えると発生する NetWare 6.0 Server SP5 のクラッシュ

ESX Server 3.x : NetWare 6.0 Server SP5 を実行する仮想マシンは、スタック ダンプが有効なメモリ制限を超えるとクラッシュします。この問題が発生すると、次のいずれかのエラー メッセージが表示されます。

「Problem executing SYMCJIT.NLM」または
cdbl gremlin process crashed due to invalid opcode

この問題は、非パススルーの RAW デバイス マッピング (RDM) を使用するゲストで頻繁に発生しています。この問題を回避するには、NetWare 6.0 Server SP5 を再度インストールします。

以前インストールした Windows NT RDM ゲストと同じ LUN を使用する RDM 仮想マシンとしてインストールするとアクセス不可能になる Netware サーバのゲスト

RAW デバイス マッピング (RDM) 仮想マシンに Novell Netware Server をインストールする際、以前同じホスト上の RDM 仮想マシンに Windows NT をインストールするときに使用した論理ユニット番号 (LUN) を使用すると、前回の Windows NT のインストール時に作成された既存の FAT16 パーティションでインストールが行われます。最後の再起動までインストールは正常に行われますが、この段階で Windows NT のマスター ブート レコード (MBR) がロードされるため、デバイス アクセス エラーが発生してクラッシュし、ブルー スクリーンが表示されます。NetWare がインストールされている場合でも、NetWare オペレーティング システムにアクセスできません。

この問題を回避するには、NetWare 仮想マシンをインストールする前に LUN のフォーマットを行います。これで、古い FAT16 パーティションのフォーマットが行われ、NetWare が正常に再起動します。

NetWare 5.1 Server

このセクションでは、NetWare 5.1 Server オペレーティングシステムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について説明します。

32 ビット版

32 ビット版の NetWare 5.1 Server は、次の VMware 製品でサポートされています。

■ VMware Workstation

NetWare 5.1 Server Support Pack 6 : Workstation 4.0、4.0.1、4.0.2、4.0.5、4.5、4.5.1、4.5.2、4.5.3

NetWare 5.1 Server Support Pack 8 : Workstation 5.0、5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

アップデート版のサポート

■ **Support Pack 6** : Workstation 4.0、4.0.1、4.0.2、4.0.5、4.5、4.5.1、4.5.2、4.5.3

■ **Support Pack 8** : Workstation 5.0、5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

■ **SMP** : Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way を試験的にサポート

■ VMware ACE

NetWare 5.1 Server Support Pack 3 : ACE 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

アップデート版のサポート

■ **Support Pack 3** : ACE 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

■ VMware GSX Server

NetWare 5.1 Server Support Pack 6 : GSX Server 3.0、3.1、3.2、3.2.1

アップデート版のサポート

■ **Support Pack 6** : GSX Server 3.0、3.1、3.2、3.2.1

■ VMware Server

NetWare 5.1 Server Support Pack 8 : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9

アップデート版のサポート

- **Support Pack 8** : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9

その他のサポート

- **SMP** : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9 で 2 way を試験的にサポート

■ VMware ESX

NetWare 5.1 Server : ESX 2.0.1、2.1、2.5、2.5.1、2.5.2、2.5.3、2.5.4、2.5.5、3.0、3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

アップデート版のサポート

- **Support Pack 7** : ESX 2.5、2.5.1、2.5.2、2.5.3、2.5.4、2.5.5、3.0、3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0
- **Support Pack 8** : ESX 3.0、3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

Novell Open Enterprise Server Support Pack 1 : ESX 2.5.2、2.5.3、2.5.4、2.5.5、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

Novell Open Enterprise Server Support Pack 2 : ESX 2.5.4、2.5.5、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

アップデート版のサポート

- **Support Pack 1** : ESX 2.5.2、2.5.3、2.5.4、2.5.5、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0
- **Support Pack 2** : ESX 2.5.4、2.5.5、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

NetWare 5.1 は、標準の Novell NetWare 5.1 の CD-ROM を使用して仮想マシンにインストールできます。

次の点に注意してください。

- NetWare 5.1 は、256MB 以上のメモリで構成されたコンピュータにインストールすることをお勧めします。
- SCSI をサポートするには、「[LSI Logic SCSI ドライバの更新](#) (P.596)」の手順に従って最新の LSI Logic ドライバをダウンロードする必要があります。

NetWare 5.1 ゲストをインストールする仮想マシンを構成する際は、仮想 LSI Logic SCSI アダプタを使用してください。NetWare 5.1 Support Pack 6 には、仮想 BusLogic SCSI アダプタのドライバが含まれていません。

- NetWare のインストール中に、インストール CD からの起動を 2 回行う必要があります。1 回目は仮想マシンのディスク ドライブをフォーマットするため、2 回目は CD からファイルをインストールするためです。

再起動中に、「**Operating System not found**」というメッセージが表示され、さらに「**No bootable CD, floppy or hard disk was detected**」というメッセージのダイアログ ボックスが表示されます。

2 回目に CD から起動するには、起動の順番を変更する必要があります。

仮想マシンの起動中に仮想マシンのウィンドウ内をクリックします。VMware のロゴが表示されたら <Esc> キーを押します。カーソル キーを使用して、ブート デバイスとして CD ドライブを選択し、<Enter> キーを押します。

注意 VMware VirtualCenter または vCenter Server を使用してゲスト OS をインストールする場合は、その仮想マシンを実行する VMware 製品 (ESX Server または VMware Server) で該当するゲスト OS がサポートされていることを確認してください。

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに Novell NetWare 5.1 CD を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、NetWare 5.1 のインストールを開始します。
- 3 使用許諾契約書に目を通し、同意します。
- 4 新しいブート パーティションを作成します。ゲスト OS が再起動します。インストールを続行します。
- 5 **VMware ESX Server** : [ステップ 6](#) に進みます。

VMware Workstation、VMware ACE、および VMware GSX Server : 次のいずれかの処理を実行して、IP ネットワークを構成します。

- 仮想マシンでブリッジ ネットワークを使用する場合は、その IP アドレスを入力します。

NetWare が LAN ドライバをロード (`pcntnw.lan` を使用) しようとする、自身の IP アドレス宛てにブロードキャストしてしまうため、処理が中断されます。このため、IP ネットワークが動作しなくなります。

この問題を回避するには、System Console を開いて (<Ctrl> + <Esc> キーを押す) 次を入力します。

set allow ip address duplicates=on

<Alt> + <Esc> キーを押してインストール モードに戻ります。

- 仮想マシンでホストオンリー ネットワークを使用する場合は、そのホストマシンの IP アドレスを調べます。

Windows ホストの場合、コマンド プロンプトで次のように入力します。

ipconfig /all

Linux ホストの場合、コマンド プロンプトで次のように入力します。

ifconfig

ホストの VMnet1 の IP アドレスを記録し、その最後のオクテットが、ホストの IP アドレスの最後のオクテットより大きくなるように変更します。

たとえば、ホストの IP アドレスが 192.168.160.1 の場合、仮想マシンの IP アドレスは 192.168.160.### となり、この ### には、1 より大きく 128 未満の任意の数字を設定します。

サブネット マスクには、**255.255.255.0** と入力します。

ルータ ゲートウェイには、ホストの IP アドレス (この例では 192.168.160.1) を入力します。

- 仮想マシンでネットワーク アドレス変換 (NAT) を使用する場合は、そのホスト マシンの IP アドレスを調べます。

Windows ホストの場合、コマンド プロンプトで次のように入力します。

ipconfig /all

Linux ホストの場合、コマンド プロンプトで次のように入力します。

ifconfig

ホストの VMnet8 の IP アドレスを記録し、その最後のオクテットが、ホストの IP アドレスの最後のオクテットより大きくなるように変更します。

たとえば、ホストの IP アドレスが 192.168.160.1 の場合、仮想マシンの IP アドレスは 192.168.160.### となり、この ### には、2 より大きく 128 未満の任意の数字を設定します。

サブネット マスクには、**255.255.255.0** と入力します。

ルータ ゲートウェイには、NAT サービスの IP アドレス（この例では 192.168.160.2）を入力します。

NAT では、ホスト上で次の 2 つの IP アドレスが使用されます。

- VMnet8 用のインターフェイスに割り当てられる IP アドレスは、**ipconfig** 出力に表示され、最後のオクテットが 1 です。
- NAT デバイス自体が使用する IP アドレスは、最後のオクテットが常に 2 です。

6 画面の指示に従ってインストールを完了します。

インストールの完了後、VMware Tools をインストールします。これをインストールすると、CPU アイドル プログラムがインストールされ、ロードされます。

NetWare 5.1 Server ゲスト OS 向け VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

VMware Tools をインストールすると、CPU アイドル プログラムもインストールされ、ロードされます。NetWare サーバは、オペレーティングシステムがアイドル状態になった場合でも CPU を使用します。このため、NetWare サーバソフトウェアがアイドル状態であるかビジー状態であるかに関わらず、仮想マシンはホストから CPU 時間を消費します。不必要な遅延を避けるため、VMware Tools のインストール後は、インストールされた NetWare CPU アイドル プログラムを常にロードしておくことをお勧めします。

既知の問題

LSI Logic SCSI ドライバの更新

NetWare 5.1 Support Pack 6 を実行する場合、最新の LSI Logic SCSI ドライバをインストールする必要があります。ドライバのダウンロードおよびインストールについては、次の URL を参照してください。 <http://kb.vmware.com/kb/1181>

VMware Tools の ISO ファイルの切断

VMware Tools のインストール中に仮想マシンが再起動します。そのあとに仮想マシンが VMware Tools の ISO イメージをリリースしたことを必ず確認してください。[Edit] - [Removable Devices] - [CD-ROM] を選択します。CD-ROM の構成に VMware Tools の ISO イメージが表示されている場合は、[Use physical drive] に戻します。

Pentium 4 ホスト上でのページ違反

Intel Pentium 4 ホストにゲスト OS をインストールするときに、ページ違反のエラーが発生することがあります。このエラーが発生した場合は、ホストマシンに NetWare 5.1 パッチを適用する必要があります。詳細は、次の URL を参照してください。

support.novell.com/cgi-bin/search/searchtid.cgi?/2958220.htm

CD-ROM をボリュームとしてマウント不可

NetWare 5.1 に Support Pack 6 を適用せずに実行すると、CD-ROM をボリュームとしてマウントできません。

サポート パックをインストールして CD-ROM をマウントするには、次のいずれかを行います。

- プライマリ ハード ドライブを IDE 0:0 に、CD-ROM ドライブを IDE 0:1 に設定する。
- NetWare 5.1 パッケージに付属されているインストール CD-ROM の **Drivers¥Storage** ディレクトリから、オリジナルのドライバファイル (**IDEATA.DDI** および **IDEATA.HAM**) を **c:¥nwserver** ディレクトリにコピーする。

注意 CD-ROM をマウントできないと、仮想マシンに VMware Tools をインストールできません。

詳細は、support.novell.com/cgi-bin/search/searchtid.cgi?/10058758.htm を参照してください。

同一ネットワークでの複数の仮想ネットワーク アダプタの使用

複数の仮想ネットワーク アダプタを同一のネットワークに接続して使用すると、System Console にエラー メッセージが表示されます。

次のようなエラー メッセージが表示されます。

```
Router configuration error detected
Router at node 000C29D02242 claims network 511F827 should be 2010F5EA
Router configuration error detected
Router at node 000C29D0224C claims network 2010F5EA should be 511F827
```

このエラーが発生した場合は、仮想マシンをネットワークから完全に切断し、ネットワーク管理者に正しいネットワーク番号に修正するよう依頼してください。

マウスのポインタの有効化

仮想マシンがマウスで正常に操作できない場合、仮想マシンで参照されていない Java クラスが原因である可能性があります。NetWare 5.1 ゲスト OS で `sys:¥java¥nwgfx¥` にある `xinitrc` ファイルを確認してください。

マウス ポインタで操作するには

- 1 仮想マシンで System Console に切り替え、次のように入力します。

```
load edit
```

- 2 <Insert> キーを押し、`sys:¥java¥nwgfx¥xinitrc` ファイルを検索します。

- 3 ファイル内で、次の行を検索します。

```
java -classpath $JAVA_HOME¥classes¥VMWtool.jar;$CLASSPATH VMWTool -iw
```

- 4 前述の行が存在しない場合、これをファイルに追加します。<Esc> キーを押します。ファイルを保存します。

- 5 ゲスト OS を再起動します。System Console で、次を入力します。

```
restart server
```

これで、仮想マシンでマウスで操作することができるようになります。

カーソル キーによるファイル システムの検索不可

テキスト モードの使用時にファイル システムを検索する場合、カーソル キーおよび <Insert> キーを使用してディレクトリを移動できないことがあります。この問題を回避するには、<Num Lock> キーを押して Num Lock をオフにしてから、数字キーを使用します。

以前インストールした Windows NT RDM ゲストと同じ LUN を使用する RDM 仮想マシンとしてインストールするとアクセス不可能になる Netware サーバのゲスト

RAW デバイス マッピング (RDM) 仮想マシンに Novell Netware Server をインストールする際、以前同じホスト上の RDM 仮想マシンに Windows NT をインストールするときに使用した論理ユニット番号 (LUN) を使用すると、前回の Windows NT のインストール時に作成された既存の FAT16 パーティションでインストールが行われます。最後の再起動までインストールは正常に行われますが、この段階で Windows NT のマスター ブート レコード (MBR) がロードされるため、デバイス アクセス エラーが発生してクラッシュし、ブルー スクリーンが表示されます。NetWare がインストールされている場合でも、NetWare オペレーティング システムにアクセスできません。

この問題を回避するには、NetWare 仮想マシンをインストールする前に LUN のフォーマットを行います。これで、古い FAT16 パーティションのフォーマットが行われ、NetWare が正常に再起動します。

NetWare 4.2 Server

このセクションでは、NetWare 4.2 Server オペレーティングシステムに関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について説明します。

32 ビット版

32 ビット版の NetWare 4.2 Server は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware Workstation**

NetWare 4.2 Server : Workstation 5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

- **VMware ACE**

NetWare 4.2 Server : ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

- **VMware GSX Server**

NetWare 4.2 Server Support Pack 9 : GSX Server 3.0、3.1、3.2、3.2.1

アップデート版のサポート

- **Support Pack 9 : GSX Server 3.0、3.1、3.2、3.2.1**

- **VMware Server**

NetWare 4.2 Server : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

NetWare 4.2 は、標準の Novell NetWare 4.2 のインストール CD を使用して仮想マシンにインストールできます。NetWare 4.2 は、256MB 以上のメモリで構成されたホストにインストールすることをお勧めします。

注意 VMware VirtualCenter または vCenter Server を使用してゲスト OS をインストールする場合は、その仮想マシンを実行する VMware 製品 (ESX Server または VMware Server) で該当するゲスト OS がサポートされていることを確認してください。

NetWare 仮想マシンの作成および構成

- Linux ホストでこの仮想マシンを作成した場合、その仮想マシンの構成ファイル (`<netware>.cfg`) をテキスト エディタで開き、次の行を追加します。

`gui.iconLEDS = false`

これにより、コンソール ウィンドウ内の LED アイコンがすべて削除され、ホストが 8 ビット / 256 色モードの時に仮想マシンをパワーオンしても、仮想マシンの画面が正常に表示されます。
- ゲスト OS および VMware Tools (CPU アイドル プログラムを含む) をインストールします。詳細は、次の説明を参照してください。

ゲスト OS のインストール

- このガイドラインの手順に従って、小さいパーティション (50MB FAT16) で MS-DOS 5.0 以降をインストールすることをお勧めします。仮想ディスクの残りの空き容量は、NetWare パーティションに使用します。仮想マシンでほとんど NetWare を実行する場合でも、CPU アイドル プログラムをインストールしておくことが最善です。
- MS-DOS 向けの CD-ROM ドライバまたは CD-ROM ソフトウェアをインストールします。MS-DOS 仮想マシンが CD-ROM ドライブにアクセスできるように設定できない場合は、`mtmcdai.sys` ドライバを使用できます。これは、www.mitsumi.com からダウンロードできます。[Drivers and Manuals] で、`ide158.exe` を見つけます。

- 3 MS-DOS 起動フロッピー上に (**mscdex.exe** ファイルとともに) 存在する **config.sys** および **autoexec.bat** ファイルを次のように変更します。MS-DOS ブート パーティションを使用している場合は、適切なドライブ レターに変更します。

```
config.sys
device=himem.sys /testmem:off
device=NEC_IDE.SYS /D:MSCD001
files=12
buffers=15
stacks=9,256
lastdrive=z

autoexec.bat
@ECHO OFF
set EXPAND=YES
SET DIRCMD=/O:N
cls
set temp=c:¥
set tmp=c:¥
path=c:¥

IF "%config%"=="NOCD" GOTO QUIT
a:¥NWCDEX.EXE /D:mscd001
```

:QUIT

CD-ROM ソフトウェアを構成したあと、仮想マシンがホストシステムの CD-ROM ドライブから CD を読み取ることができるかを確認します。

- 4 仮想マシンが実行中でない場合は、パワーオンしてから MS-DOS が起動処理を完了するまで待ちます
- 5 GSX Server ホストの CD-ROM ドライブに NetWare 4.2 CD を挿入します。
- 6 仮想マシンの MS-DOS プロンプトで、次のコマンドを入力して **fdisk** を実行し、NetWare 用のパーティションを作成します。

A:¥>fdisk

- 7 パーティションを作成したら、仮想マシンを再起動します。<Ctrl> + <Alt> + <Insert> キーを押します。
- 8 次のコマンドを入力して、**C:** ドライブをフォーマットします。

```
format c: /s /x
```

- 9 次のコマンドを入力して、フロッピーから C: ドライブに次のファイルをコピーします。

Copy autoexec.bat c:

Copy config.sys c:

Copy himem.sys c:

Copy nwcde.exe c:

Copy nec_ide.sys c:

- 10 フロッピー ドライブではなく、ハード ドライブ上の CD-ROM ディレクトリを参照するように **autoexec.bat** ファイルを変更します。

- a **autoexec.bat** を変更するには、**C:** プロンプトに次のように入力します。

a:edit autoexec.bat

- b 次の行を

a:¥NWCDEX.EXE /D:mscd001

次のように変更します。

c:¥NWCDEX.EXE /D:mscd001

- c 変更を保存します。

cd d:

- 11 **INSTALL.BAT** を実行して NetWare サーバのインストールを開始します。ソフトウェアは、物理マシンの場合と同じ手順で仮想マシンにインストールします。
- 12 仮想マシンにネットワーク（ブリッジ、ホストオンリー、NAT、またはカスタム）が構成されている場合、インストール プログラムが PCI イーサネット アダプタを検知し、利用可能なドライバのリストを表示します。ただし、この時点では、LAN ドライバを選択したり、ロードしたりしないでください。<F3> キーを押すと、LAN ドライバがない場合でもインストールを続行できます。

注意 インストールが完了したら、適切な LAN ドライバをロードしてバインドできます。NetWare 4.2 のインストール中に LAN ドライバを選択したりロードしたりすると、インストール処理がハングアップすることがあります。

- 13 画面の指示に従って NetWare 4.2 のインストールを完了します。

サーバをシャットダウンしてから、**exit** と入力して MS-DOS プロンプトに戻ります。

インストールの完了後、VMware Tools をインストールします。これをインストールすると、CPU アイドル プログラムがインストールされ、ロードされます。

NetWare 4.2 Server ゲスト OS 向け VMware Tools

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールします。NetWare 4.2 仮想マシンでは、VMware Tools の CPU アイドル プログラムを利用できるため、ゲスト OS からホストにハートビートが送信されます。また、VMware Tools によって仮想マシンが正常にパワーオンまたはパワーオフできるようになります。詳細は、各 VMware 製品のマニュアルを参照するか、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) にある該当するリンク先の説明に従ってください。

VMware Tools をインストールすると、CPU アイドル プログラムもインストールされ、ロードされます。NetWare サーバは、オペレーティング システムがアイドル状態になった場合でも CPU を使用します。このため、NetWare サーバソフトウェアがアイドル状態であるかビジー状態であるかに関わらず、仮想マシンはホストから CPU 時間を消費します。不必要な遅延を避けるため、VMware Tools のインストール後は、インストールされた NetWare CPU アイドル プログラムを常にロードしておくことをお勧めします。

既知の問題

以前インストールした Windows NT RDM ゲストと同じ LUN を使用する RDM 仮想マシンとしてインストールするとアクセス不可能になる Netware サーバのゲスト

RAW デバイス マッピング (RDM) 仮想マシンに Novell Netware Server をインストールする際、以前同じホスト上の RDM 仮想マシンに Windows NT をインストールするときに使用した論理ユニット番号 (LUN) を使用すると、前回の Windows NT のインストール時に作成された既存の FAT16 パーティションでインストールが行われます。最後の再起動までインストールは正常に行われますが、この段階で Windows NT のマスター ブート レコード (MBR) がロードされるため、デバイス アクセス エラーが発生してクラッシュし、ブルー スクリーンが表示されます。NetWare がインストールされている場合でも、NetWare オペレーティング システムにアクセスできません。

この問題を回避するには、NetWare 仮想マシンをインストールする前に LUN のフォーマットを行います。これで、古い FAT16 パーティションのフォーマットが行われ、NetWare が正常に再起動します。

Solaris 10 オペレーティングシステム x86 プラットフォーム版

このセクションでは、Solaris 10 オペレーティングシステム x86 プラットフォーム版に関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について説明します。

32 ビット版

32 ビット版の Solaris 10 オペレーティングシステム x86 プラットフォーム版は、次の VMware 製品でサポートされています。

■ VMware Workstation

Solaris 10 オペレーティングシステム x86 プラットフォーム版 : Workstation 5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

アップデート版のサポート

- **Solaris 10 1/06 (Update 1)** : Workstation 5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2
- **Solaris 10 6/06 (Update 2)** : Workstation 5.5.3 で試験的にサポート
- **Solaris 10 11/06 (Update 3)** : Workstation 6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で試験的にサポート
- **Solaris 10 5/08 (Update 5)** : Workstation 6.5、6.5.1、6.5.2
- **Solaris 10 10/08 (Update 6)** : Workstation 6.5.2 (Workstation 6.5.2 は PBM に含まれておらず、簡易インストールもない)

その他のサポート

- **SMP** : Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way を試験的にサポート

■ VMware ACE

Solaris 10 オペレーティングシステム x86 プラットフォーム版 : ACE 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

アップデート版のサポート

- **Solaris 10 5/08 (Update 5)** : ACE 2.5、2.5.1、2.5.2

- **VMware GSX Server** : 試験的サポートのみ

Solaris 10 オペレーティングシステム x86 プラットフォーム版 : GSX Server 3.1、3.2、3.2.1

- **VMware Server**

Solaris 10 オペレーティングシステム x86 プラットフォーム版 : VMware Server 2.0、2.0.1

アップデート版のサポート

- **Solaris 10 11/06 (Update 3)** : VMware Server 2.0、2.0.1

- **Solaris 10 8/07 (Update 4)** : VMware Server 2.0、2.0.1

その他のサポート

- **SMP** : VMware Server 2.0、2.0.1 で 2 way をサポート

試験的なサポート

Solaris 10 オペレーティングシステム x86 プラットフォーム版 : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9

アップデート版のサポート

- **Solaris 10 1/06 (Update 1)** : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9

- **Solaris 10 6/06 (Update 2)** : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9

その他のサポート

- **SMP** : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9 で 2 way をサポート

- **VMware ESX Server**

Solaris 10 オペレーティングシステム x86 プラットフォーム版 : ESX 3.0、3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

アップデート版のサポート

- **Solaris 10 11/06 (Update 1)** : ESX 3.0、3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0
- **Solaris 10 6/06 (Update 2)** : ESX 3.0、3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0
- **Solaris 10 11/06 (Update 3)** : ESX 3.0、3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0
- **Solaris 10 8/07 (Update 4)** : ESX 3.0.1、3.0.2、3.0.3 (Patch ESX303-200808405-BG が必要。詳細は <http://kb.vmware.com/kb/1006036> を参照)、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0
- **Solaris 10 05/08 (Update 5)** : ESX 3.0.1 (Patch ESX-1005108 が必要。詳細は <http://kb.vmware.com/kb/1005108> を参照)、3.0.2 (Patch ESX-1005110 が必要。詳細は <http://kb.vmware.com/kb/1005110> を参照)、3.0.3 (Patch ESX303-200808405-BG が必要。詳細は <http://kb.vmware.com/kb/1006036> を参照)、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0
- **Solaris 10 10/08 (Update 6)** : ESX 3.0.2、3.0.3、3.5 U3、3.5 U4、4.0

その他のサポート

- **SMP** : ESX 3.0、3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0 でフルサポート
- **vmxnet3 ネットワーク アダプタ** : すべての Solaris 10 リリースをサポート

■ VMware Fusion

Solaris 10 オペレーティングシステム x86 プラットフォーム版 : Fusion 1.0、1.1、1.1.1、1.1.2、1.1.3、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

アップデート版のサポート

- **Solaris 10 11/06 (Update 3)** : Fusion 1.0、1.1、1.1.1、1.1.2、1.1.3、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4
- **Solaris 10 05/08 (Update 5)** : Fusion 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

64 ビット版

64 ビット版の Solaris 10 オペレーティング システム x86 プラットフォーム版は、次の VMware 製品でサポートされています。

■ VMware Workstation

Solaris 10 オペレーティング システム x86 プラットフォーム版：Workstation 5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

アップデート版のサポート

- **Solaris 10 1/06 (Update 1)：**Workstation 5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2
- **Solaris 10 6/06 (Update 2)：**Workstation 5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2
- **Solaris 10 11/06 (Update 3)：**Workstation 6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で試験的にサポート
- **Solaris 10 5/08 (Update 5)：**Workstation 6.5、6.5.1、6.5.2
- **Solaris 10 10/08 (Update 6)：**Workstation 6.5.2 (Workstation 6.5.2 は PBM に含まれておらず、簡易インストールもない)

その他のサポート

- **SMP：**Workstation 5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way を試験的にサポート

■ VMware ACE

Solaris 10 オペレーティング システム x86 プラットフォーム版：ACE 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

アップデート版のサポート

- **Solaris 10 5/08 (Update 5)：**ACE 2.5、2.5.1、2.5.2

■ VMware Server

Solaris 10 オペレーティングシステム x86 プラットフォーム版：VMware Server 2.0、2.0.1

アップデート版のサポート

- Solaris 10 11/06 (Update 3)：VMware Server 2.0、2.0.1

- Solaris 10 8/07 (Update 4)：VMware Server 2.0、2.0.1

その他のサポート

- SMP：VMware Server 2.0、2.0.1 で 2 way をサポート

試験的なサポート

Solaris 10 オペレーティングシステム x86 プラットフォーム版：VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9

アップデート版のサポート

- Solaris 10 6/06 (Update 2)：VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9

その他のサポート

- SMP：VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9 で 2 way をサポート

■ VMware ESX Server

Solaris 10 オペレーティングシステム x86 プラットフォーム版：ESX 3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

アップデート版のサポート

- Solaris 10 1/06 (Update 1)：ESX 3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

- Solaris 10 6/06 (Update 2)：ESX 3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

- Solaris 10 11/06 (Update 3)：ESX 3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

- Solaris 10 8/07 (Update 4)：ESX 3.0.1、3.0.2、3.0.3 (Patch ESX303-200808405-BG が必要。詳細は <http://kb.vmware.com/kb/1006036> を参照)、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0

- **Solaris 10 05/08 (Update 5)** : ESX 3.0.1 (Patch ESX-1005108 が必要。詳細は <http://kb.vmware.com/kb/1005108> を参照)、3.0.2 (Patch ESX-1005110 が必要。詳細は <http://kb.vmware.com/kb/1005110> を参照)、3.0.3 (Patch ESX303-200808405-BG が必要。詳細は <http://kb.vmware.com/kb/1006036> を参照)、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0
- **Solaris 10 10/08 (Update 6)** : ESX 3.0.2、3.0.3、3.5 U3、3.5 U4、4.0 でサポート

その他のサポート

- **SMP** : ESX 3.0.1、3.0.2、3.0.3、3.5、3.5 U1、3.5 U2、3.5 U3、3.5 U4、4.0 でフルサポート
- **vmxnet3 ネットワーク アダプタ** : すべての Solaris 10 リリースをサポート

■ VMware Fusion

Solaris 10 オペレーティングシステム x86 プラットフォーム版 : Fusion 1.0、1.1、1.1.1、1.1.2、1.1.3、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

アップデート版のサポート

- **Solaris 10 11/06 (Update 3)** : Fusion 1.0、1.1、1.1.1、1.1.2、1.1.3、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4
- **Solaris 10 05/08 (Update 5)** : Fusion 2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

VMware 製品は x86 プラットフォーム版のみをサポートしています。VMware 仮想マシンに SPARC プラットフォーム版をインストールすることはできません。

Solaris 10 オペレーティングシステムは、標準の x86 版 Solaris 10 インストールメディアを使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。ここでは、CD セットまたは DVD を使用したインストールの手順を説明します。ご使用の VMware 製品で PXE サーバがサポートされている場合は、PXE サーバからインストールすることもできます。

オペレーティングシステムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

Solaris 10 のメモリ要件

VMware Server または ESX Server : Solaris 10 をスムーズにインストールするには、以前のバージョンの Solaris よりも多くのメモリが必要です。x86 搭載システムのメモリ要件は次のとおりです。

- Solaris 10 1/06 リリース以降は、512MB のメモリが推奨されています。最小要件は 256MB です。
- Solaris 10 3/05 リリースでは、256MB のメモリが推奨されています。最小要件は 128MB です。

仮想マシンのゲスト OS を Solaris 10 1/06 リリース以降にアップグレードする前に、仮想マシンの RAM を 256MB 以上に増やします。詳細は、VMware 製品のドキュメントを参照してください。詳細は、Sun 社の Web サイト (<http://docs.sun.com/app/docs/doc/817-0544/6mgbagb0v?a=view>) の「System Requirements and Recommendations for Solaris 10 Installation」を参照してください。

注意 VMware VirtualCenter または vCenter Server を使用してゲスト OS をインストールする場合は、その仮想マシンを実行する VMware 製品（ESX Server または VMware Server）で該当するゲスト OS がサポートされていることを確認してください。

インストールの手順

- 1 DVD または CD-ROM ドライブに、Solaris 10 オペレーティングシステム x86 プラットフォーム版 DVD または Solaris 10 ソフトウェア 1 CD を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、Solaris 10 のインストールを開始します。
- 3 残りの手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。

これでゲスト OS としての Solaris 10 の基本インストールが完了です。

VMware Tools（ESX Server 3.x のみ）

ゲスト OS には必ず VMware Tools をインストールし、仮想マシンを再起動する必要があります。VMware Tools のインストールに関する詳細は、「[既知の問題](#)」を参照してください。ナレッジベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/340>) の適切なリンクに従って、Solaris 10 に適した VMware Tools 情報の場所を確認してください。

注意 Solaris 10 1/06 よりも前の Solaris 10 では、VMware Tools のサポートは試験的なものです。

既知の問題

Solaris 10 および Solaris10 Update 1 上で通知される障害

ESX 3.0.1 : ゲスト カーネルからの障害の通知については、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/3605018>) を参照してください。

ESX Server 3.x ネットワーク アダプタ ドライバでの 32 ビットおよび 64 ビットの Solaris 10 ゲストのサポート

32 ビットの Solaris 10 ゲストは、フレキシブル ネットワーク アダプタ ドライバをサポートしています。ゲストに VMware Tools がインストールされている場合は、アダプタ ドライバは vmxnet として認識されます。ゲストに VMware Tools がインストールされていない場合は、アダプタ ドライバは pcn として認識されます。

仮想マシンに Solaris 10 をインストールすると、pcn ドライバが表示されます。VMware Tools をインストールし、仮想マシンを再起動して、デフォルトのドライバである pcn を vmxnet に必ず切り替えてください。

64 ビットの Solaris 10 ゲストは、e1000 ネットワーク アダプタ ドライバのみサポートしています。

64 ビット ホストでの Solaris 10 の 32 ビット モードでの使用

64 ビット ホストで Solaris 10 をゲスト OS としてインストールまたは実行すると、Solaris 10 が自動的に 64 ビット モードでインストールまたは起動しようとします。64 ビット ホストで強制的に 32 ビット モードを使用して Solaris 10 を起動するには、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/2074>) を参照してください。64 ビット ホストで強制的に 32 ビット モードとして Solaris 10 をインストールするには、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/1975>) を参照してください。

インストール後の小さすぎる画面表示

Solaris 10 ゲスト OS は、インストール後、640 x 480 の画面解像度で起動します。VMware Tools をインストールすると、画面は自動的に適切な解像度に調整されます。

VMware Tools は、現時点では ESX Server 3.x でのみサポートされています。Solaris 向けの VMware Tools をサポートしていないほかの VMware 製品を使用している場合は、Xsun X サーバに切り替え、1024 x 768 表示 (256 色) を使用できます。

表示を変更するには

- 1 root としてログインし、コマンド プロンプトで、次のコマンドを入力してキーボード、ディスプレイ、マウスの構成プログラムを実行します。

```
kdmconfig
```

- 2 カーソル キーとスペースバーを使用して [Xsun] を選択し、<F2> キーを押して処理を続行します。
- 3 構成プログラムが仮想マシンの構成を検出し、次のリストのような結果を表示します。

```
Video Device:  VMWare Inc vmware0405
Video Driver:   XF86-VMWARE
Resolution/colors: 1024X768 256 colors @70 hz
Monitor type:   Multifrequency 56 khz
```

<F3> キーを押してこの構成を使用します。

- 4 このログイン セッションを終了します。次回、CDE または Java Desktop System が起動すると、Xsun が 1024 x 768 の解像度で表示されるようになります。

インストール中の PAE メッセージ

VMware Workstation 5.0 : PAE テクノロジーを使用するホスト コンピュータで、VMware Workstation 5.0 以前のバージョンにゲスト OS をインストールする場合に、ゲスト OS が PAE を使用しようとしていることを通知するエラー メッセージが表示されることがあります。このメッセージが表示された場合は、インストール処理を中止して、影響を受ける仮想マシンで PAE を有効にします。

仮想マシンで PAE を有効にするには

- 1 仮想マシンがパワーオフされていることを確認します。
- 2 仮想マシンの構成ファイル (.vmx) に、次の行を追加します。
`paevm="true"`
- 3 仮想マシンをパワーオンして、ゲスト OS をインストールします。

ハイパースレッドを使用するホスト上の、4 個の仮想プロセッサが構成された ESX Server 3.x 仮想マシンで発生するパフォーマンスの問題

ESX Server 3.x : CPU ハイパースレッドを使用する ESX Server 3.x ホストでは、4 個の仮想プロセッサが構成された Solaris 10 1/06 (Update 1) 仮想マシンのパフォーマンス (インストールにかかる時間およびディスクへの書込み時間) が大幅に低下します。4 個の仮想プロセッサが構成された Solaris 10 1/06 (Update 1) 仮想マシンへのパフォーマンスの影響を最低限に抑えるには、ホスト マシンに 2 個のハイパースレッドされたプロセッサではなく、4 個の物理プロセッサを使用することをお勧めします。

中断すると応答しなくなる Solaris 10 ゲスト

ESX Server 3.x : Solaris 10 仮想マシンを中断すると、応答しなくなる可能性があります。これは、中断している間に、ゲストが VGA スクリーン モードに切り替えることができず、SVGA スクリーン モードのままになるためです。仮想マシンの応答がないままの場合は、仮想マシンをパワーオフしてから再度起動すると、この問題を回避できます。

Virtual SMP を使用する Solaris 10 1/06 (Update 1) および Solaris 10 6/06 (Update 2) ゲストでパワーオン時に発生するハングアップ

Virtual SMP を使用し、2 個または 4 個の仮想プロセッサが構成された Solaris 10 1/06 (Update 1) または Solaris 10 6/06 (Update 2) の仮想マシンは、パワーオン時にハングアップすることがまれにあります。この問題が発生した場合は、仮想マシンを再起動します。データを損失することなく、問題が解決します。

Solaris 10 ゲストで CD-ROM としてマウントされた ISO イメージのイジェクト不可

CDE および Java Desktop 環境では、CD-ROM デバイスとして ISO イメージをマウントすると、File Manager (CDE) や Nautilus (Java Desktop) プログラムで CD-ROM の内容を確認できます。このようなプログラムを使用してデバイスをイジェクトしようとすると、エラーが発生します。CDE では、File Manager プログラム メニューに [Eject] オプションが含まれていますが、このオプションをクリックしても、CD-ROM はイジェクトされません。Java Desktop では、(デスクトップ上の) CD-ROM アイコンを右クリックしてから [Eject] をクリックしても、CD-ROM はイジェクトされません。

Intel Pentium M ベース システム Merom、Woodcrest、および Conroe で発生する、64 ビット版の Solaris 10 1/06 (Update 1) および Solaris 10 6/06 (Update 2) のトリプル フォルトのエラー

この問題は、仮想マシン固有のものではなく、Intel Pentium M ベースの Merom、Woodcrest、および Conroe システム上で直接 Solaris 10 1/06 (Update 1) または Solaris 10 6/06 (Update 2) を実行しようとした場合にも発生します。今後の Solaris 10 のアップデートで、Sun 社によってこの問題は修正される見込みです。現時点では、この問題に対処するためのパッチ Kernel Update 118855-19 が Sun 社から提供されています。インストールした Solaris によっては、このパッチとともにパッチ 121264-01、118844-30、118344-13、117435-02、または 119255-27 のいずれか、あるいはすべてが必要になる場合があります。Solaris のパッチのダウンロードおよびインストールについては、Sun 社の Web サイト (<http://docs.sun.com/app/docs/doc/816-4552/6maoo30pu?a=view>) の「Adding a Solaris Patch」(本書発行時)を参照してください。

注意 Kernel Update 118855-19 を適用するには、32 ビット モードで仮想マシンを起動する必要があります。64 ビットのホスト マシン上の Solaris 10 仮想マシンを 32 ビット モードで強制的に起動する方法は、ナレッジ ベースの記事 (<http://kb.vmware.com/kb/2074>) を参照してください。

Solaris 9 オペレーティングシステム x86 プラットフォーム版

このセクションでは、Solaris 9 オペレーティングシステム x86 プラットフォーム版に関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について説明します。

32 ビット版

32 ビット版の Solaris 9 オペレーティングシステム x86 プラットフォーム版は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **VMware Workstation** : 試験的サポートのみ

Solaris 9 オペレーティングシステム x86 プラットフォーム版 : Workstation 4.5.2、4.5.3、5.0、5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2

その他のサポート

- **SMP** : Workstation 5.5、5.5.1、5.5.2、5.5.3、5.5.4、5.5.5、5.5.6、5.5.7、5.5.8、5.5.9、6.0、6.0.1、6.0.2、6.0.3、6.0.4、6.0.5、6.5、6.5.1、6.5.2 で 2 way をサポート

- **VMware ACE** : 試験的サポートのみ

Solaris 9 オペレーティングシステム x86 プラットフォーム版 : ACE 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、2.0、2.0.1、2.0.2、2.0.3、2.0.4、2.0.5、2.5、2.5.1、2.5.2

- **VMware GSX Server** : 試験的サポートのみ

Solaris 9 オペレーティングシステム x86 プラットフォーム版 : GSX Server 3.1、3.2、3.2.1

- **VMware Server**

Solaris 9 オペレーティングシステム x86 プラットフォーム版 : VMware Server 2.0、2.0.1

その他のサポート

- **SMP** : VMware Server 2.0、2.0.1 で 2 way をサポート

試験的なサポート

Solaris 9 オペレーティングシステム x86 プラットフォーム版 : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9

その他のサポート

- **SMP** : VMware Server 1.0、1.0.1、1.0.2、1.0.3、1.0.4、1.0.5、1.0.6、1.0.7、1.0.8、1.0.9 で 2 way をサポート
- **ESX Server** : 試験的サポートのみ

Solaris 9 オペレーティング システム x86 プラットフォーム版 : ESX 4.0

アップデート版のサポート

- Solaris 9 09/02 (Update 1) : ESX 4.0
- Solaris 9 12/02 (Update 2) : ESX 4.0
- Solaris 9 04/03 (Update 3) : ESX 4.0
- Solaris 9 08/03 (Update 4) : ESX 4.0
- Solaris 9 12/03 (Update 5) : ESX 4.0
- Solaris 9 04/04 (Update 6) : ESX 4.0
- Solaris 9 09/04 (Update 7) : ESX 4.0
- Solaris 9 09/05 (Update 8) : ESX 4.0

その他のサポート

- **SMP** : ESX 4.0 で 2 way をサポート

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

VMware 製品は x86 プラットフォーム版のみをサポートしています。VMware 仮想マシンに SPARC プラットフォーム版をインストールすることはできません。

Solaris 9 オペレーティングシステムは、標準の Solaris x86 プラットフォーム版インストール CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。ここでは、CD を使用したインストールの手順を説明します。ご使用の VMware 製品で PXE サーバがサポートされている場合は、PXE サーバからインストールすることもできます。

オペレーティングシステムをインストールする前に、新しく仮想マシンを作成し、構成を済ませておきます。

注意 仮想マシンで SCSI ハード ディスクを使用する場合、仮想マシンが LSI Logic アダプタを使用するように構成し、Solaris 9 9/04 以降のリリースを使用してください。Solaris 9 9/04 以降のリリースには、LSI Logic ドライバが含まれています。それ以前のリリースの Solaris 9 を使用する仮想マシンに SCSI ハード ディスクを構成する場合は、LSI Logic ドライバを入手し、インストール時のアップデートとしてインストールする必要があります。ドライバをダウンロードするには、LSI Logic 社のダウンロードのページ (www.lsi.com/support/download_center/) で [Select a Specific Product] ドロップダウン リストから [LSI53C1030] を選択してください。

注意 VMware VirtualCenter または vCenter Server を使用してゲスト OS をインストールする場合は、その仮想マシンを実行する VMware 製品（ESX Server または VMware Server）で該当するゲスト OS がサポートされていることを確認してください。

インストールの手順

- 1 CD-ROM ドライブに Solaris x86 プラットフォーム版インストール CD を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、Solaris 9 のインストールを開始します。
- 3 ほとんどの場合、インストール手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。ただし、次の手順では、仮想マシン用に特別の選択をする必要があります。特に、KDM X サーバの構成はインストール処理がほとんど終了する時点まで待った方が便利です。
- 4 [Boot Solaris] 画面が表示されたら、<F4> キーを押して [Boot Tasks] 画面を表示します。
- 5 [Boot Tasks] 画面で、カーソル キーを使用して [View/Edit Property Settings] まで移動し、<Enter> キーを押してその項目を選択してから、<F2> キーを押します。
- 6 [View/Edit Property Settings] 画面で、カーソル キーを使用して [ata-dma-enabled] まで移動し、<Enter> キーを押してその項目を選択してから、<F3> キーを押して値を変更します。
- 7 [Specify Value] プロンプトで **1** と入力してから <Enter> キーを押し、DMA を有効にします。
- 8 [View/Edit Property Settings] 画面に戻ったら、<F2> キーを押します。次に [Boot Tasks] 画面で <F3> キーを押します。
- 9 CD-ROM セットからインストールしている場合は、[CD] を選択して、通常のインストールを続行します。
- 10 [kdmconfig - Introduction] 画面が表示されたら <F4> キーを押して、この時点での X サーバの構成を省略します。

注意 現段階および次の段階では、X サーバの構成を行わないでください。ソフトウェアがすべてインストールされた時点で 3 回目のタイミングが訪れますので、その時点まで X サーバの構成を待ってください。

- 11 最初に再起動を行なったあと、Solaris ソフトウェアをインストールする前に、[kdmconfig - Introduction] 画面が再度表示されます。ここでも、<F4> キーを押して、この時点での X サーバの構成を省略します。
- 12 ソフトウェアをすべてインストールして再起動を行うと、[kdmconfig - Introduction] 画面が再度表示されます。今回は、<F2> キーを押して構成処理を続行します。
- 13 <F2> キーを押してビデオ デバイスおよびモニタを構成します。
- 14 <Enter> キーを押して [16 color Standard VGA 640x480 (256K)] を選択してから、<F2> キーを押して処理を続行します。
- 15 カーソル キーを使用して [Multifrequency 100KHz (up to 1600x1200 @ 80Hz)] に移動し、<Enter> キーを押してその項目を選択してから、<F2> キーを押して処理を続行します。
- 16 デフォルトのスクリーン サイズ (17 インチ) をそのまま使用し、<F2> キーを押して処理を続行します。
- 17 デフォルトの [No changes needed Test/Save and Exit] をそのまま使用し、<F2> キーを押して処理を続行します。
- 18 <F4> キーを押してテストを省略します。
- 19 残りの手順は、通常のインストールと同じです。

これでゲスト OS としての Solaris 9 の基本インストールが完了です。

VMware Tools

Solaris 9 をサポートしている VMware Tools のバージョンはありません。

Solaris 8 オペレーティングシステム x86 プラットフォーム版

このセクションでは、Solaris 8 オペレーティングシステム x86 プラットフォーム版に関するサポート状況、インストール手順、および既知の問題について説明します。

32 ビット版

32 ビット版の Solaris 8 オペレーティングシステム x86 プラットフォーム版は、次の VMware 製品でサポートされています。

- **ESX Server**：試験的サポートのみ

- **Solaris 8 x86 プラットフォーム版**：ESX 4.0

アップデート版のサポート

- Solaris 8 06/00：ESX 4.0
 - Solaris 8 10/00：ESX 4.0
 - Solaris 8 01/01：ESX 4.0
 - Solaris 8 04/01：ESX 4.0
 - Solaris 8 07/01：ESX 4.0
 - Solaris 8 10/01：ESX 4.0
 - Solaris 8 02/02：ESX 4.0

サポートでの考慮事項

- Solaris 8 をサポートしている VMware Tools のバージョンはありません。
 - Solaris 8 は、最大 32GB の RAM をサポートしています。
 - Solaris 8 は、Bus Logic SCSI ストレージ アダプタをサポートしていません。
 - Solaris 8 のデフォルトのストレージ アダプタは IDE ですが、代わりに LSI/LSISAS を使用します。
 - Solaris 8 は、e1000 および Pcnnet ネットワーク アダプタをサポートしていません。

インストール上の注意点

特定のゲスト OS のインストールについて記載されているこのセクションだけでなく、「[VMware 製品すべてに共通する一般的なガイドライン](#) (P.78)」にも必ず目を通してください。

VMware 製品は x86 プラットフォーム版のみをサポートしています。VMware 仮想マシンに SPARC プラットフォーム版をインストールすることはできません。

Solaris 8 x86 は、標準の Solaris x86 プラットフォーム版インストール CD を使用して仮想マシンにインストールするのが最も簡単な方法です。ご使用の VMware 製品で PXE サーバがサポートされている場合は、PXE サーバからインストールすることもできます。

オペレーティングシステムをインストールする前に、仮想マシンを新規作成し、構成します。

注意 VMware VirtualCenter または vCenter Server を使用してゲスト OS をインストールする場合は、その仮想マシンを実行する VMware 製品 (ESX Server) で該当するゲスト OS がサポートされていることを確認してください。

Solaris 8 インストール CD には、Solaris 8 SCSI (LSI/LSISAS) ドライバは含まれていません。仮想マシンにゲスト OS をインストールするときに LSI/LSISAS ドライバを選択する場合、Solaris 8 のインストール中にドライバをインストールしていないと、SCSI ハードディスクを検出しません。結果として、ITU (Install Time Update) ドライバディスクを作成する必要があります。

SCSI ハードドライブを使用する場合は、「[インストールの手順](#) (P.621)」を参照してください。

注意 IDE コントローラを選択する場合は、「[インストールの手順](#) (P.618)」の手順に従って Solaris 8 をインストールします。SCSI コントローラを選択する場合は、「[インストールの手順](#) (P.621)」の手順で Solaris 8 をインストールします。

インストールの手順

ほとんどの場合、インストール手順は、物理マシンでインストールを行う場合と同じです。

- 1 CD-ROM ドライブに Solaris x86 プラットフォーム版インストール CD を挿入します。
- 2 仮想マシンをパワーオンして、Solaris 8 のインストールを開始します。
- 3 [Boot Solaris] 画面が表示されたら、<F4> キーを押します。

- 4 [Boot Tasks] 画面で、カーソル キーを使用して [View/Edit Property Settings] を選択し、<Enter> キーを押してその項目を選択してから、<F2> キーを押して処理を続行します。
- 5 [Specify Value] プロンプトで 1 と入力してから <Enter> キーを押し、DMA を有効にします。
- 6 [View/Edit Property Settings] 画面で <F2> キーを押し、[Boot Tasks] 画面で <F3> キーを押します。
- 7 CD-ROM セットからインストールする場合は、[Boot Solaris] 画面で CD を選択し、インストールを続行します。

X サーバを構成するには

最初の 2 回のタイミングでは、KDM X サーバの構成を省略します。ソフトウェアがすべてインストールされた時点で 3 回目のタイミングが訪れますので、その時点まで X サーバの構成を待ってください。

- 1 インストール中に [kdmconfig- Introduction] 画面が表示されたら <F4> キーを押し、X サーバの構成を省略してインストールを続行します。
ソフトウェアのインストールが完了すると、X Server を構成するための root パスワードが求められます ([Windows System Configuration])。
- 2 root パスワードを入力すると、[kdmconfig Mismatch Detected] 画面が表示されます。<F2> キーを押して構成します。
- 3 デフォルトのオプション ([Change Video Device/Monitor]) を選択し、<F2> キーを押して処理を続行します。
- 4 <Enter> キーを押して [16 color Standard VGA 640x480 (256K)] を選択してから、<F2> キーを押して処理を続行します。
- 5 カーソル キーを使用して [Multifrequency 100KHz (up to 1600x1200 @ 80Hz)] を選択します。<Enter> キーを押し、<F2> キーを押して処理を続行します。
- 6 デフォルトのスクリーン サイズ (17 インチ) をそのまま使用し、<F2> キーを押して処理を続行します。
- 7 デフォルトのオプション (640x480) をそのまま使用し、[Virtual Screen Resolution Selection] 画面で <F2> キーを押します。
- 8 デフォルトの [No changes needed Test/Save and Exit] をそのまま使用し、<F2> キーを押して処理を続行します。
- 9 <F4> キーを押してテストを省略します。
- 10 プロンプトに従ってインストールを完了します。

これで、Solaris 8 ゲスト OS および KDM X サーバの基本的なインストールが完了です。

SCSI ドライバの追加

SCSI ドライバを追加するには、Solaris 8 ドライバでドライバディスクを作成します。ドライバをインストールすると、インストール中にドライバが SCSI ハード ドライブを検出します。

次の LSI Web サイトから、Solaris 8 の SCSI ドライバをダウンロードしてください。

http://www.lsi.com/DistributionSystem/AssetDocument/itmpt_x86_5.07.04.zip

Solaris 8 を使用した ITU ドライバ ディスクの作成

zip ファイル内の既存の dd イメージ `itmpt-x86-50704-itu-s9.dd` ファイルを使用して、ドライバディスクを作成します。

次のコマンドを入力して、ドライバディスクを作成します。

```
dd if=itmpt-x86-50704-itu-s9.dd of=/vol/dev/aliases/floppy0 bs=32768
```

注意 Windows を使用してディスクを作成する場合は、`itmpt_x86_5.07.04.txt` zip ファイル内の説明を参照してください。

SCSI ハード ドライブの検出

ここでの説明は、SCSI および LSI/LSI SAS の両方に対応しています。

- 1 インストールを開始する場合は、[Solaris Device Configuration Assistant] 画面で <F4> キーを押し、ドライバを追加します。
- 2 ITU ディスクを挿入し（フロッピー ドライブを仮想マシンの A: に接続）、<F2> キーを押して処理を続行します。
ディスクが仮想マシンにソフトウェアをロードします。
- 3 [Continue Supplement Driver Installation] 画面でディスクを切断し、<F4> キーを押します。
- 4 [Identified Device Drivers] 画面で <F2> キーを押し、インストールを続行します。
「[インストールの手順](#) (P.621)」の「手順 3」に従い、残りのインストール処理を行います。

VMware Tools

Solaris 8 をサポートしている VMware Tools のバージョンはありません。

インデックス

数字

4GB を超えるメモリが構成されている
ユニプロセッサ、Red Hat
Enterprise Linux 3 の
インストール 293

4 ビット カラー、使用不可

SUSE Linux 9.0 ゲスト 443

SUSE Linux 9.1 438

SUSE Linux 9.2 432

SUSE Linux 9.3 427

SUSE Linux Enterprise
Desktop 10 362

SUSE Linux Enterprise
Desktop 11 355

SUSE Linux Enterprise Server 10 375

SUSE Linux Enterprise Server 11 366

SUSE Linux Enterprise Server 9 386

64 ビット版

Asianux 3.0 153

CentOS 5 158

Debian 4.0 171

Debian 5.0 168

FreeBSD 5.3 552

FreeBSD 5.4 549

FreeBSD 5.5 546

FreeBSD 6.0 543

FreeBSD 6.1 541

FreeBSD 6.2 539

FreeBSD 6.3 536

FreeBSD 6.4 533

FreeBSD 7.0 530

FreeBSD 7.1 526

Mac OS X Server 10.5 181

Mandriva Corporate Desktop 4 185

Mandriva Corporate Server 4 190

Mandriva Linux 2006 206

Mandriva Linux 2007 200

Mandriva Linux 2008 195

Open SUSE Linux 10.2 408

Open SUSE Linux 10.3 403

Open SUSE Linux 11.1 398

Oracle Enterprise Linux 5 251

Red Hat Enterprise Linux 3 285

Red Hat Enterprise Linux 4 272

Red Hat Enterprise Linux 5 259

Solaris 10 608

SUSE Linux 10 419

SUSE Linux 10.1 414

SUSE Linux 9.1 435

SUSE Linux 9.2 430

SUSE Linux 9.3 424

SUSE Linux Enterprise
Desktop 10 359

SUSE Linux Enterprise
Desktop 11 353

SUSE Linux Enterprise Server 10 371

SUSE Linux Enterprise Server 11 364

SUSE Linux Enterprise Server 9 381

Ubuntu 8.04 LTS 491

Ubuntu 8.10 485

Ubuntu Linux 5.04 522

- Ubuntu Linux 5.10 518
- Ubuntu Linux 6.06 513
- Ubuntu Linux 6.10 508
- Ubuntu Linux 7.04 502
- Ubuntu Linux 7.10 497
- Windows 7 81
- Windows Preinstallation Environment 83
- Windows Recovery Environment 87
- Windows Server 2003 108
- Windows Server 2008 90
- Windows Vista 98
- Windows XP 119
- 64 ビット版、ゲスト要件 77

A

- AMD Opteron プロセッサを使用するホストでの SMP モード時のモニタ パニック、SUSE Linux Enterprise Server 9 387
- Asianux 3.0
 - 64 ビット版 153
 - TSC クロックソースのパフォーマンス 155
 - ゲスト OS のインストール 152
 - スクリーン セーバー、実行 156
 - タイムキーピング構成 156

C

- CD-ROM、NetWare 5.1 Server ゲストにボリュームとしてマウント不可 597
- CD 書き込みソフトウェアによるクラッシュ
 - IBM OS/2 Warp 4.0 ゲスト 180
 - IBM OS/2 Warp 4.5.2 ゲスト 177
- CentOS 4
 - TSC クロックソースのパフォーマンス 167

- ゲスト OS のインストール 163
- 異なる種類のプロセッサへの移行の回避 167
- コピーした仮想マシン、ネットワークの使用 166
- スクリーン セーバー、実行 167
- タイムキーピング構成 167

CentOS 5

- 64 ビット版 158
- TSC クロックソースのパフォーマンス 161
- ゲスト OS のインストール 157
- 異なる種類のプロセッサへの移行の回避 162
- コピーした仮想マシン、ネットワークの使用 161
- スクリーン セーバー、実行 162
- タイムキーピング構成 161

COM ポート

- Windows 95 ゲスト 147
- Windows 98 ゲスト 142

CPU アイドル プログラム

- MS-DOS 6.22 150
- NetWare 4.2 Server 604
- NetWare 5.1 Server 596
- NetWare 6.0 Server 589
- NetWare 6.5 Server 583

D

Debian 4.0

- 64 ビット ゲストでの X サーバの起動エラー 173
- 64 ビット版 171
- root、有効にして VMware Tools をインストール 172
- TSC クロックソースのパフォーマンス 173
- ゲスト OS のインストール 171

- 異なる種類のプロセッサへの移行の回避 174
- タイムキーピング構成 173
- Debian 4.0 の 64 ビット ゲストでの X サーバの起動エラー 173
- Debian 5.0
 - 64 ビット版 168
 - root、有効にして VMware Tools をインストール 169
 - TSC クロックソースのパフォーマンス 169
 - ゲスト OS のインストール 168
 - 異なる種類のプロセッサへの移行の回避 170
 - タイムキーピング構成 170
- DHCP アドレス、Red Hat Linux 9.0 ゲストでの取得 310
- DHCP エラー
 - Mandrake Linux 10 219
 - Mandrake Linux 10.1 214
 - Mandriva Corporate Desktop 4 188
 - Mandriva Corporate Server 4 193
 - Mandriva Linux 2006 208
 - Mandriva Linux 2007 203
 - Mandriva Linux 2008 198
- DMA
 - Windows 95 ゲストでの有効化 146
 - Windows NT ゲストでの有効化 134
- E**
 - ESX Server 3 でのハイパースレッドのパフォーマンス、Solaris 10 Update 1 613
- F**
 - FreeBSD 4.0、4.1、4.2、4.3
 - ゲスト OS のインストール 571
 - 異なる種類のプロセッサへの移行の回避 576
 - 再起動ごとの locations ファイルの増大 573
 - スクリーン セーバー、実行 575
 - 未検証のサウンド 575
 - FreeBSD 4.0、4.1、4.2、4.3 ゲストの SCSI 仮想ディスク 573
 - FreeBSD 4.0、4.1、4.2、4.3 ゲストの ディスク ジオメトリ 573
 - FreeBSD 4.10
 - ゲスト OS のインストール 563
 - 再起動ごとの locations ファイルの増大 564
 - スクリーン セーバー、実行 564
 - 未検証のサウンド 564
 - FreeBSD 4.11
 - ゲスト OS のインストール 561
 - 再起動ごとの locations ファイルの増大 562
 - スクリーン セーバー、実行 562
 - 未検証のサウンド 562
 - FreeBSD 4.4、4.5、4.6.2、4.8
 - ゲスト OS のインストール 567
 - 異なる種類のプロセッサへの移行の回避 570
 - 再起動ごとの locations ファイルの増大 569
 - スクリーン セーバー、実行 569
 - 未検証のサウンド 569
 - FreeBSD 4.9
 - ゲスト OS のインストール 565
 - 再起動ごとの locations ファイルの増大 566
 - スクリーン セーバー、実行 566
 - 未検証のサウンド 566
 - FreeBSD 5.0
 - ゲスト OS のインストール 559
 - 再起動ごとの locations ファイルの増大 548, 560

スクリーン セーバー、実行 560	増大 544
未検証のサウンド 560	スクリーン セーバー、実行 545
FreeBSD 5.1	未検証のサウンド 544
ゲスト OS のインストール 557	FreeBSD 6.1
再起動ごとの locations ファイルの増大 558	64 ビット版 541
スクリーン セーバー、実行 558	ゲスト OS のインストール 541
未検証のサウンド 558	再起動ごとの locations ファイルの増大 542
FreeBSD 5.2	スクリーン セーバー、実行 542
ゲスト OS のインストール 555	未検証のサウンド 542
再起動ごとの locations ファイルの増大 556	FreeBSD 6.2
スクリーン セーバー、実行 556	64 ビット版 539
未検証のサウンド 556	ゲスト OS のインストール 539
FreeBSD 5.3	再起動ごとの locations ファイルの増大 540
64 ビット版 552	スクリーン セーバー、実行 530, 539, 540
ゲスト OS のインストール 552	未検証のサウンド 529, 540
再起動ごとの locations ファイルの増大 554	FreeBSD 6.3
スクリーン セーバー、実行 554	64 ビット版 536
未検証のサウンド 554	ISO イメージ 536
FreeBSD 5.4	ゲスト OS のインストール 536
64 ビット版 549	再起動ごとの locations ファイルの増大 538
ゲスト OS のインストール 549	サスペンド電源イベントのスクリプトの実行不能 538
再起動ごとの locations ファイルの増大 551	マウスのスクロール アップ操作不能 538
スクリーン セーバー、実行 551	未検証のサウンド 538
未検証のサウンド 551	FreeBSD 6.4
FreeBSD 5.5	64 ビット版 533
64 ビット版 546	ゲスト OS のインストール 533
ゲスト OS のインストール 546	再起動ごとの locations ファイルの増大 535
スクリーン セーバー、実行 548	サスペンド電源イベントのスクリプトの実行不能 535
未検証のサウンド 548	マウスのスクロール アップ操作不能 535
FreeBSD 6.0	
64 ビット版 543	
ゲスト OS のインストール 543	
再起動ごとの locations ファイルの	

- 未検証のサウンド 535
- FreeBSD 7.0
 - 64 ビット版 530
 - ゲスト OS のインストール 530
 - 再起動ごとの locations ファイルの増大 531
 - スクリーン セーバー、実行 532
 - 未検証のサウンド 531
- FreeBSD 7.1
 - 4 つの仮想 CPU での長時間のインストールおよび再起動 528
 - 64 ビット版 526
 - VMware Tools のインストールなしでの画面解像度の変更不可 528
 - 奇数の仮想 CPU での停止 528
 - ゲスト OS のインストール 526
 - 再起動ごとの locations ファイルの増大 529
 - サスペンド電源イベントのスクリプトの実行不能 528
 - 大容量メモリでのストール 528
 - マウスのスクロール アップ操作不能 529
- G**
- GSX Server および VMware Server のサウンド アダプタ 80
- GSX Server のサウンド アダプタ 80
- H**
- http 209
- I**
- IBM OS/2 Warp 4.0
 - CD 書き込みソフトウェアによるシステムのクラッシュ 180
 - VI Client を使用したマウスのスクロール アップ操作不能 180
- 起動ディスクの作成 179
- ゲスト OS のインストール 178
- ディスクの追加 180
- IBM OS/2 Warp 4.5.2
 - CD 書き込みソフトウェアによるシステムのクラッシュ 177
 - 起動ディスクの作成 176
 - ゲスト OS のインストール 175
 - ディスクの追加 177
- IBM OS/2 Warp 4.5.2
 - VI Client を使用したマウスのスクロール アップ操作不能 177
- INIT エラー、Red Hat Linux 9.0 でのパフォーマンスの低下 308
- Intel EM64T ハードウェア、SUSE Linux Enterprise Server 9 ゲストの自動初期化 386
- Intel EM64T ハードウェア上での自動初期化 386
- Intel Woodcrest ホストと 64 ビット Windows Server 2003 R2 ゲストのクラッシュ 115
- IPv6、VMware Tools での無効化
 - Asianux 3.0 ゲスト 155
 - CentOS 4 ゲスト 165
 - CentOS 5 ゲスト 160
 - FreeBSD 4.0、4.1、4.2、4.3 ゲスト 572
 - FreeBSD 4.4、4.5、4.6.2、4.8 ゲスト 568
 - Mandrake Linux 10.1 ゲスト 213
 - Mandrake Linux 10 ゲスト 218
 - Mandrake Linux 8.0 または 8.1 ゲスト 243
 - Mandrake Linux 8.2 ゲスト 238
 - Mandrake Linux 9.0 ゲスト 233
 - Mandrake Linux 9.1 ゲスト 229
 - Mandrake Linux 9.2 ゲスト 224

Mandriva Corporate Desktop 4 ゲスト 187	ゲスト 361
Mandriva Corporate Server 4 ゲスト 192	SUSE Linux Enterprise Desktop 11 ゲスト 354
Mandriva Linux 2006 ゲスト 208	SUSE Linux Enterprise Server 10 ゲスト 375
Mandriva Linux 2007 ゲスト 202	SUSE Linux Enterprise Server 11 ゲスト 366
Mandriva Linux 2008 ゲスト 197	SUSE Linux Enterprise Server 7 ゲスト 396
Novell Linux Desktop 9 ゲスト 248	SUSE Linux Enterprise Server 8 ゲスト 391
Open SUSE Linux 10.2 ゲスト 410	SUSE Linux Enterprise Server 9 ゲスト 385
Open SUSE Linux 10.3 ゲスト 405	Turbolinux 10 Desktop ゲスト 470
Open SUSE Linux 11.1 ゲスト 399	Turbolinux 7.0 ゲスト 482
Oracle Enterprise Linux 5 ゲスト 253	Turbolinux Enterprise Server 8 ゲスト 474
Red Hat Enterprise Linux 2.1 ゲスト 300	Turbolinux Workstation 8 ゲスト 477
Red Hat Enterprise Linux 3 ゲスト 291	Ubuntu 5.04 ゲスト 524
Red Hat Enterprise Linux 4 ゲスト 278	Ubuntu 5.10 ゲスト 520
Red Hat Enterprise Linux 5 ゲスト 264	Ubuntu 6.06 ゲスト 515
Red Hat Linux 6.2 ゲスト 340	Ubuntu 6.10 ゲスト 510
Red Hat Linux 7.1 ゲスト 331	Ubuntu 7.04 ゲスト 505
Red Hat Linux 7.2 ゲスト 325	Ubuntu 7.10 ゲスト 499
Red Hat Linux 7.3 ゲスト 320	Ubuntu 8.04 LTS ゲスト 494
Red Hat Linux 7 ゲスト 336	Ubuntu 8.10 ゲスト 487
Red Hat Linux 8.0 ゲスト 315	ISO イメージ
Red Hat Linux 9.0 ゲスト 306	FreeBSD 6.3 536
SUSE Linux 10.1 ゲスト 416	Solaris 10 のイジェクト不可 614
SUSE Linux 10 ゲスト 421	Windows PE 2.1 用に作成 84
SUSE Linux 7.3 ゲスト 463	ゲスト OS のインストール 78
SUSE Linux 8.0 ゲスト 458	ISO ファイル フォーマット 63
SUSE Linux 8.1 ゲスト 453	
SUSE Linux 8.2 ゲスト 447	L
SUSE Linux 9.0 ゲスト 442	Linux ゲストでのワークスペースの切り 替え 65
SUSE Linux 9.1 ゲスト 436	Linux ゲストへの VMware Tools のインス トール 65
SUSE Linux 9.3 ゲスト 425	
SUSE Linux Enterprise Desktop 10	

LSI Logic SCSI アダプタ、Solaris 9 618
 LUN、Windows NT RDM との共有インストール時の問題
 NetWare 4.2 Server 604
 NetWare 5.1 Server 598
 NetWare 6.0 Server 591

M

Mac OS X Server 10.5
 64 ビット版 181
 ゲスト OS のインストール 181
 ディスク パーティション、サイズ
 の拡張 184
 Mandrake Linux 10
 DHCP エラー 219
 X サーバのインストール 217
 ゲスト OS のインストール 216
 異なる種類のプロセッサへの移行の
 回避 220
 スクリーン セーバー、実行 219
 タイムキーピング構成 219
 ディスプレイの解像度の変更 219
 Mandrake Linux 10.1
 DHCP エラー 214
 X サーバのインストール 212
 ゲスト OS のインストール 211
 異なる種類のプロセッサへの移行の
 回避 215
 スクリーン セーバー、実行 214
 タイムキーピング構成 214
 ディスプレイの解像度の変更 214
 Mandrake Linux 8.0 および 8.1
 異なる種類のプロセッサへの移行の
 回避 245
 スクリーン セーバー、実行 244
 タイムキーピング構成 244
 Mandrake Linux 8.0 または 8.1
 インストール中のハング

 アップ 244
 ゲスト OS のインストール 241
 シャットダウン 244
 Mandrake Linux 8.2
 X サーバのインストール 237
 ゲスト OS のインストール 236
 異なる種類のプロセッサへの移行の
 回避 240
 スクリーン セーバー、実行 239
 タイムキーピング構成 239
 Mandrake Linux 9.0
 X サーバのインストール 232
 ゲスト OS のインストール 231
 異なる種類のプロセッサへの移行の
 回避 235
 スクリーン セーバー、実行 235
 タイムキーピング構成 235
 Mandrake Linux 9.1
 X サーバのインストール 227
 ゲスト OS のインストール 227
 異なる種類のプロセッサへの移行の
 回避 230
 スクリーン セーバー、実行 230
 タイムキーピング構成 230
 Mandrake Linux 9.2
 ゲスト OS のインストール 221
 異なる種類のプロセッサへの移行の
 回避 225
 スクリーン セーバー、実行 225
 タイムキーピング構成 225
 Mandriva Corporate Desktop 4
 64 ビット版 185
 X サーバのインストール 186
 ゲスト OS のインストール 185
 異なる種類のプロセッサへの移行の
 回避 188
 スクリーン セーバー、実行 188

- タイムキーピング構成 188
- ディスプレイの解像度の変更 187
- Mandriva Corporate Server 4
 - 64 ビット版 190
 - DHCP エラー 193
 - X サーバのインストール 191
 - ゲスト OS のインストール 190
 - 異なる種類のプロセッサへの移行の回避 193
 - スクリーン セーバー、実行 193
 - タイムキーピング構成 193
 - ディスプレイの解像度の変更 192
- Mandriva Linux 2006
 - 64 ビット版 206
 - DHCP エラー 208
 - X サーバのインストール 207
 - ゲスト OS のインストール 205, 206
 - 異なる種類のプロセッサへの移行の回避 209
 - スクリーン セーバー、実行 209
 - タイムキーピング構成 209
 - ディスプレイの解像度の変更 208
- Mandriva Linux 2007
 - 64 ビット版 200
 - X サーバのインストール 201
 - ゲスト OS のインストール 200
 - 異なる種類のプロセッサへの移行の回避 204
 - スクリーン セーバー、実行 203
 - タイムキーピング構成 203
 - ディスプレイの解像度の変更 203
- Mandriva Linux 2008
 - 64 ビット版 195
 - DHCP エラー 198
 - TSC クロックソースのパフォーマンス 199
 - X サーバのインストール 196

- ゲスト OS のインストール 195
- 異なる種類のプロセッサへの移行の回避 199
- スクリーン セーバー、実行 199
- タイムキーピング構成 199
- ディスプレイの解像度の変更 198
- Microsoft Windows Clustering Service および ESX Server 114
- Microsoft Windows OEM ディスク、ゲスト OS のインストール 79
- MSCS
 - Microsoft Windows Clustering Service を参照
- MS-DOS 6.22
 - VMware Tools 未対応 151
 - ゲスト OS のインストール 149
 - 推奨される CPU アイドルプログラム 150

N

- NetWare 4.2 Server
 - 共有 LUN を使用する RDM としてインストール 604
 - ゲスト OS のインストール 600
 - 推奨される CPU アイドルプログラム 604
- NetWare 5.1 Server
 - CD-ROM、ボリュームとしてマウント不可 597
 - LSI Logic SCSI ドライバ 596
 - Pentium 4 ホスト上でのページ違反 597
 - VMware Tools の ISO ファイルの切断 596
 - カーソル キー、ファイル システムの検索不可 598
 - 共有 LUN を使用する RDM としてインストール 598
 - ゲスト OS のインストール 592

- 推奨される CPU アイドル プログラム 596
 - 同一ネットワークでの複数のネットワーク アダプタ 597
 - マウス ポインタ、有効化 598
 - NetWare 6.0 Server
 - VMware Tools の ISO ファイルの切断 590
 - カーソル キーによるファイル システムの検索不可 591
 - 共有 LUN を使用する RDM としてインストール 591
 - ゲスト OS のインストール 585
 - 推奨される CPU アイドル プログラム 589
 - スタック ダンプのメモリ制限超過時のクラッシュ 591
 - はじめてのインストールでのエラー 590
 - マウス ポインタ、有効化 590
 - NetWare 6.0 Server ゲストでのスタック ダンプのメモリ制限 591
 - NetWare 6.5 Server
 - RDM 仮想マシン 584
 - SP3 および SP5 でのハング アップ 583
 - ゲスト OS のインストール 577
 - 再起動後のキーボードおよびマウス コントロールの回復 583
 - 推奨される CPU アイドル プログラム 583
 - テキスト モードでの検索 583
 - NetWare 6.5 Server での RDM 仮想マシン 584
 - Novell Linux Desktop 9
 - ゲスト OS のインストール 246
 - 異なる種類のプロセッサへの移行の回避 249
 - コピーした仮想マシンでのネットワーク 249
 - ワーク 249
 - タイムキーピング構成 249
- ## O
- OEM ディスク、Microsoft Windows 79
 - Open SUSE Linux 10.1
 - TSC クロックソースのパフォーマンス 413
 - Open SUSE Linux 10.2
 - 64 ビット版 408
 - 異なる種類のプロセッサへの移行の回避 412
 - コピーした仮想マシンでのネットワーク 411
 - タイムキーピング構成 412
 - Open SUSE Linux 10.2
 - TSC クロックソースのパフォーマンス 411
 - Open SUSE Linux 10.3
 - 64 ビット版 403
 - TSC クロックソースのパフォーマンス 406
 - ゲスト OS のインストール 403
 - 異なる種類のプロセッサへの移行の回避 407
 - コピーした仮想マシンでのネットワーク 406
 - タイムキーピング構成 406
 - Open SUSE Linux 11.1
 - 64 ビット版 398
 - ゲスト OS のインストール 398
 - 異なる種類のプロセッサへの移行の回避 402
 - コピーした仮想マシンでのネットワーク 401
 - Operating System Specific Package、VMware Tools 64
 - Oracle Enterprise Linux 5
 - 64 ビット版 251

ゲスト OS のインストール 251
異なる種類のプロセッサへの移行の
回避 255
コピーした仮想マシンでのネット
ワーク 254
タイムキーピング構成 254
OSMP、SCO UnixWare 7 ゲスト用にイン
ストールおよび構成 351
OSP
Operating System Specific Package
を参照

P

PAE、ESX Server 仮想マシンでの無効化
Red Hat Enterprise Linux 2.1 302
Red Hat Enterprise Linux 3 292
Red Hat Enterprise Linux 4 279
Red Hat Linux 7.2 327
Red Hat Linux 7.3 321
Red Hat Linux 8.0 316
Red Hat Linux 9.0 311
SUSE Linux 8.2 449
SUSE Linux 9.0 444
SUSE Linux 9.1 438
SUSE Linux 9.2 433
SUSE Linux 9.3 427
SUSE Linux Enterprise Server 8 392
SUSE Linux Enterprise Server 9 387
Windows 2000 131
Windows NT 136
Windows Server 2003 115
Windows XP 124
Pentium 4 ホスト上でのページ違反エ
ラー、NetWare 5.1 Server 597

R

Red Hat Enterprise Linux 2.1
PAE、ESX Server 仮想マシンでの

無効化 302
WS UP6、マウスの正常な操作
不能 301
X サーバのインストール 298
ゲスト OS のインストール 295
異なる種類のプロセッサへの移行の
回避 302
スクリーン セーバー、実行 301
タイムキーピング構成 301
不適切なカーネルのインストールを
回避 298

Red Hat Enterprise Linux 3

4GB を超えるメモリが構成されてい
るユニプロセッサへのイン
ストール 293

64 ビット版 285

PAE、ESX Server 仮想マシンでの
無効化 292

X ウィンドウ システムの起動
エラー 294

インストール中に表示される PAE
メッセージ 291

「汚染された (Tainted)」ドライバ
に関するメッセージ 293

ゲスト OS のインストール 281

異なる種類のプロセッサへの移行の
回避 293

スクリーン セーバー、実行 292

タイムキーピング構成 292

Red Hat Enterprise Linux 4

64 ビット版 272

PAE、ESX Server 仮想マシンでの
無効化 279

VirtualCenter Client で正しくオペ
レーティング システムの
種類が表示されない
ゲスト 280

インストール中に表示される PAE
メッセージ 278

- ゲスト OS のインストール 267
- 異なる種類のプロセッサへの移行の回避 280
- コピーした仮想マシンでのネットワーク 279
- スクリーン セーバー、実行 280
- タイムキーピング構成 279
- Red Hat Enterprise Linux 5
 - 64 ビット版 259
 - TSC クロックソースのパフォーマンス 266
 - VMware Tools のアンインストール時における特定のインスタンスでの読み取り専用のファイルシステム 265
 - インストール中に表示される PAE メッセージ 265
 - ゲスト OS のインストール 256
 - 異なる種類のプロセッサへの移行の回避 266
 - コピーした仮想マシンでのネットワーク 265
 - タイムキーピング構成 266
- Red Hat Enterprise Linux 5.2 での VMware Tools のアンインストール時における特定のインスタンスでの読み取り専用のファイルシステム 265
- Red Hat Linux 6.2
 - ゲスト OS のインストール 338
 - 異なる種類のプロセッサへの移行の回避 341
 - スクリーン セーバー、実行 341
 - タイムキーピング構成 341
- Red Hat Linux 7.0
 - X サーバのインストール 334
 - ゲスト OS のインストール 333
 - 異なる種類のプロセッサへの移行の回避 337
 - スクリーン セーバー、実行 337
 - タイムキーピング構成 336
- Red Hat Linux 7.1
 - X サーバのインストール 329
 - インストール中のハング アップの解決 331
 - ゲスト OS のインストール 328
 - 異なる種類のプロセッサへの移行の回避 332
 - スクリーン セーバー、実行 332
 - タイムキーピング構成 332
- Red Hat Linux 7.2
 - PAE、ESX Server 仮想マシンでの無効化 327
 - X サーバのインストール 323
 - インストール中のハング アップの解決 326
 - ゲスト OS のインストール 322
 - 異なる種類のプロセッサへの移行の回避 327
 - スクリーン セーバー、実行 326
 - タイムキーピング構成 326
- Red Hat Linux 7.3
 - PAE、ESX Server 仮想マシンでの無効化 321
 - X サーバのインストール 318
 - ゲスト OS のインストール 317
 - 異なる種類のプロセッサへの移行の回避 321
 - スクリーン セーバー、実行 321
 - タイムキーピング構成 321
- Red Hat Linux 8.0
 - PAE、ESX Server 仮想マシンでの無効化 316
 - X サーバのインストール 313
 - 「汚染された (Tainted)」ドライバに関するメッセージ 316
 - ゲスト OS のインストール 312

- 異なる種類のプロセッサへの移行の回避 316
- スクリーン セーバー、実行 316
- タイムキーピング構成 315
- Red Hat Linux 9.0
 - 2 枚目のインストール CD の読み取り 307
 - DHCP を使用した IP アドレスの取得 310
 - INIT エラー、パフォーマンスの低下 308
 - PAE、ESX Server 仮想マシンでの無効化 311
- X サーバのインストール 304
- 「汚染された (Tainted)」ドライバに関するメッセージ 310
- ゲスト OS のインストール 303
- 異なる種類のプロセッサへの移行の回避 309
- スクリーン セーバー、実行 308
- タイムキーピング構成 308
- Red Hat Linux 9.0 ゲストの IP アドレス 310
- root、有効にして VMware Tools をインストール
- Debian 4.0 172
- Debian 5.0 169
- Ubuntu 8.04 LTS 493
- Ubuntu 8.10 487
- Ubuntu Linux 5.04 524
- Ubuntu Linux 5.10 519
- Ubuntu Linux 6.06 514
- Ubuntu Linux 6.10 509
- Ubuntu Linux 7.04 504
- Ubuntu Linux 7.10 498

S

SCO OpenServer 5.0

- X ウィンドウ システムの機能停止 348
- 仮想ディスクの推奨 345
- ゲスト OS のインストール 345
- サポート対象の SCSI 仮想ディスク 346
- ドライバのダウンロード 346
- ドライブ サイズ 345
- ネットワーク アダプタ プロトコルの構成 349
- マウスの機能停止 348
- SCO OpenServer 5.0 ゲストでのマウスの機能停止 348
- SCO OpenServer 5.0 での X ウィンドウ システムの機能停止 348
- SCO OpenServer 5.0 のドライブ サイズ 345
- SCO OpenServer 5.0 用のドライバのダウンロード 346
- SCO UnixWare 7
 - OSMP のインストールと構成 351
 - ゲスト OS のインストール 350
 - ネットワークの構成時に発生する 7.1.1 のカーネルパニック 352
 - メンテナンス パックのインストール 351
 - メンテナンス パックのダウンロード 351
- SCO UnixWare 7 ゲスト用のメンテナンス パックをダウンロード 351
- SCSI 仮想ディスク、SCO OpenServer 5.0 ゲストでサポート 346
- SCSI ドライバのサポート、Windows XP ゲスト 120
- SCSI ハード ドライブ、Solaris 8 の検出 623
- Server Core、64 ビット Windows 2008 Server 89, 91
- Solaris 10

- 64 ビット版 608
- 64 ビット ホストでの 32 ビット
モード 612
- CD-ROM ISO イメージのイジェクト
不可 614
- ESX Server 3.x ネットワーク
アダプタ ドライバの
サポート 612
- ESX Server 3 でのハイパースレッド
のパフォーマンス 613
- Pentium M ベース システムでの
Update 1 および 2 のエ
ラー 614
- Virtual SMP でパワーオン時に発生す
るハングアップ 614
- インストール中に表示される PAE
メッセージ 613
- ゲスト OS のインストール 605
- サポート対象のネットワーク アダ
プタ ドライバ 612
- 小さい画面表示 612
- 中断すると応答しなくなる可能性の
ある Update 1 ゲスト 614
- メモリ要件 611
- Solaris 8
 - SCSI ハード ドライブの検出 623
 - ゲスト OS のインストール 620
- Solaris 9
 - SCSI ハード ディスク、LSI Logic
アダプタを使用 618
 - ゲスト OS のインストール 616
- Solaris 9 をサポートする SCSI 618
- Sun Java Desktop System 2
 - インストール中のハング
アップ 344
 - ゲスト OS のインストール 342
 - スクリーン セーバー、実行 344
 - ディスプレイの解像度の変更 343
- SUSE Linux 10
 - 64 ビット版 419
 - ゲスト OS のインストール 418
 - 異なる種類のプロセッサへの移行の
回避 422
 - コピーした仮想マシンでのネット
ワーク 421
 - タイムキーピング構成 422
- SUSE Linux 10.1
 - 64 ビット版 414
 - ゲスト OS のインストール 413
 - 異なる種類のプロセッサへの移行の
回避 417
 - コピーした仮想マシンでのネット
ワーク 416
 - タイムキーピング構成 417
- SUSE Linux 7.3
 - X サーバのインストール 462
 - ゲスト OS のインストール 461
 - 異なる種類のプロセッサへの移行の
回避 464
 - スクリーン セーバー、実行 463
 - タイムキーピング構成 463
- SUSE Linux 8.0
 - X サーバのインストール 457
 - ゲスト OS のインストール 456
 - 異なる種類のプロセッサへの移行の
回避 459
 - スクリーン セーバー、実行 459
 - タイムキーピング構成 459
- SUSE Linux 8.1
 - X サーバのインストール 452
 - インストール中のハング
アップ 454
 - ゲスト OS のインストール 451
 - 異なる種類のプロセッサへの移行の
回避 455
 - スクリーン セーバー、実行 454
 - タイムキーピング構成 454

SUSE Linux 8.2

DVD からのインストールの中断によるエラー メッセージの表示 448

PAE、ESX Server 仮想マシンでの無効化 449

X サーバのインストール 446

インストール中のハングアップ 448

ゲスト OS のインストール 445

異なる種類のプロセッサへの移行の回避 449

スクリーン セーバー、実行 449

タイムキーピング構成 449

SUSE Linux 9.0

4 ビット カラー、使用不可 443

DVD からのインストールの中断によるエラー メッセージの表示 443

PAE、ESX Server 仮想マシンでの無効化 444

インストール中のハングアップ 443

ゲスト OS のインストール 440

異なる種類のプロセッサへの移行の回避 444

スクリーン セーバー、実行 444

タイムキーピング構成 444

SUSE Linux 9.1

4 ビット カラー、使用不可 438

64 ビット版 435

DVD からのインストールの中断によるエラー メッセージの表示 437

PAE、ESX Server 仮想マシンでの無効化 438

インストール中のハングアップ 437

ゲスト OS のインストール 434

異なる種類のプロセッサへの移行の回避 439

コピーした仮想マシンでのネットワーク 438

スクリーン セーバー、実行 439

タイムキーピング構成 438

SUSE Linux 9.2

4 ビット カラー、使用不可 432

64 ビット版 430

PAE、ESX Server 仮想マシンでの無効化 433

ゲスト OS のインストール 429

異なる種類のプロセッサへの移行の回避 433

コピーした仮想マシンでのネットワーク 432

スクリーン セーバー、実行 433

タイムキーピング構成 433

SUSE Linux 9.3

4 ビット カラー、使用不可 427

64 ビット版 424

64 ビット ホストでのアーキテクチャの選択 426

PAE、ESX Server 仮想マシンでの無効化 427

ゲスト OS のインストール 423

異なる種類のプロセッサへの移行の回避 428

コピーした仮想マシンでのネットワーク 427

スクリーン セーバー、実行 428

タイムキーピング構成 427

SUSE Linux Enterprise Desktop 10

4 ビット カラー、使用不可 362

64 ビット版 359

ゲスト OS のインストール 357

異なる種類のプロセッサへの移行の回避 363

- コピーした仮想マシンでのネットワーク 362
- タイムキーピング構成 362
- SUSE Linux Enterprise Desktop 11
 - 4 ビット カラー、使用不可 355
 - 64 ビット版 353
 - カーネル モジュール、事前作成済みのサポート 353
 - ゲスト OS のインストール 345
 - 異なる種類のプロセッサへの移行の回避 356
 - コピーした仮想マシンでのネットワーク 355
 - タイムキーピング構成 356
- SUSE Linux Enterprise Server 10
 - 4 ビット カラー、使用不可 375
 - 64 ビット版 371
 - ゲスト OS のインストール 369
 - 異なる種類のプロセッサへの移行の回避 376
 - コピーした仮想マシンでのネットワーク 376
 - タイムキーピング構成 376
- SUSE Linux Enterprise Server 11
 - 4 ビット カラー、使用不可 366
 - 64 ビット版 364
 - カーネル モジュール、事前作成済みのサポート 364
 - ゲスト OS のインストール 364
 - 異なる種類のプロセッサへの移行の回避 367
 - コピーした仮想マシンでのネットワーク 367
 - タイムキーピング構成 367
- SUSE Linux Enterprise Server 7
 - X サーバのインストール 395
 - ゲスト OS のインストール 394
 - 異なる種類のプロセッサへの移行の回避 397
- スクリーン サーバー、実行 396
- タイムキーピング構成 396
- SUSE Linux Enterprise Server 8
 - PAE、ESX Server 仮想マシンでの無効化 392
 - ゲスト OS のインストール 389
 - 異なる種類のプロセッサへの移行の回避 393
 - スクリーン サーバー、実行 392
 - タイムキーピング構成 392
- SUSE Linux Enterprise Server 9 386
 - 4 ビット カラー、使用不可 386
 - 64 ビット版 381
 - AMD Opteron プロセッサを使用するホストでの SMP モード時のモニタ パニック 387
 - PAE、ESX Server 仮想マシンでの無効化 387
 - ゲスト OS のインストール 378
 - 異なる種類のプロセッサへの移行の回避 387
 - コピーした仮想マシンでのネットワーク 386
 - スクリーン サーバー、実行 387
 - タイムキーピング構成 386

T

- TSC クロックソースのパフォーマンス
 - Asianux 3.0 155
 - CentOS 4 167
 - CentOS 5 161
 - Debian 4.0 173
 - Debian 5.0 169
 - Mandriva Linux 2008 199
 - Open SUSE Linux 10.2 411,413
 - Open SUSE Linux 10.3 406
 - Red Hat Enterprise Linux 5 266

- Ubuntu 8.04 LTS 495
- Ubuntu 8.10 488
- Ubuntu Linux 7.10 500
- Turbolinux 10 Desktop
 - ゲスト OS のインストール 469
 - 異なる種類のプロセッサへの移行の回避 471
 - スクリーン セーバー、実行 471
 - タイムキーピング構成 471
- Turbolinux 10 Server 467
 - 黒い画面表示 467
 - ゲスト OS のインストール 465
 - 異なる種類のプロセッサへの移行の回避 467
 - スクリーン セーバー、実行 467
 - タイムキーピング構成 467
- Turbolinux 7.0
 - X サーバのインストール 481
 - ゲスト OS のインストール 480
 - 異なる種類のプロセッサへの移行の回避 483
 - スクリーン セーバー、実行 483
 - タイムキーピング構成 483
- Turbolinux Enterprise Server 8
 - ゲスト OS のインストール 472
 - 異なる種類のプロセッサへの移行の回避 475
 - スクリーン セーバー、実行 475
 - タイムキーピング構成 475
- Turbolinux Workstation 8
 - ゲスト OS のインストール 476
 - 異なる種類のプロセッサへの移行の回避 479
 - スクリーン セーバー、実行 478
 - タイムキーピング構成 478

U

- Ubuntu 8.04 LTS

- 64 ビット版 491
- root、有効にして VMware Tools をインストール 493
- TSC クロックソースのパフォーマンス 495
- カーネル モジュール、事前作成済みのサポート 490, 491
- ゲスト OS のインストール 489
- 異なる種類のプロセッサへの移行の回避 495
- タイムキーピング構成 495

- Ubuntu 8.10
 - 64 ビット版 485
 - root、有効にして VMware Tools をインストール 487
 - TSC クロックソースのパフォーマンス 488
 - ゲスト OS のインストール 484
 - 異なる種類のプロセッサへの移行の回避 488
 - タイムキーピング構成 488
- Ubuntu Linux 5.04
 - 64 ビット版 522
 - root、有効にして VMware Tools をインストール 524
 - ゲスト OS のインストール 522
 - 異なる種類のプロセッサへの移行の回避 525
 - タイムキーピング構成 525
- Ubuntu Linux 5.10
 - 64 ビット版 518
 - root、有効にして VMware Tools をインストール 519
 - ゲスト OS のインストール 517
 - 異なる種類のプロセッサへの移行の回避 521
 - タイムキーピング構成 520
- Ubuntu Linux 6.06
 - 64 ビット版 513

- root、有効にして VMware Tools をインストール 514
 - ゲスト OS のインストール 512
 - 異なる種類のプロセッサへの移行の回避 516
 - タイムキーピング構成 515
 - Ubuntu Linux 6.10
 - 64 ビット版 508
 - root、有効にして VMware Tools をインストール 509
 - ゲスト OS のインストール 507
 - 異なる種類のプロセッサへの移行の回避 511
 - タイムキーピング構成 511
 - Ubuntu Linux 7.04
 - 64 ビット版 502
 - root、有効にして VMware Tools をインストール 504
 - ゲスト OS のインストール 501
 - 異なる種類のプロセッサへの移行の回避 506
 - タイムキーピング構成 506
 - Ubuntu Linux 7.10
 - 64 ビット版 497
 - root、有効にして VMware Tools をインストール 498
 - TSC クロックソースのパフォーマンス 500
 - ゲスト OS のインストール 496
 - 異なる種類のプロセッサへの移行の回避 500
 - タイムキーピング構成 500
- V**
- VMware Server のサウンド アダプタ 80
 - VMware Tools
 - ESXi 4.0 のサポート 65
 - ISO ファイルフォーマット 63
 - MS-DOS 6.22 または Windows 3.1x、未対応 151
 - NetWare 5.1 Server、ISO ファイルの切断 596
 - NetWare 6.0 Server、ISO ファイルの切断 590
 - Operating System Specific Package 64
 - Windows 2003 プロダクト アクティベーション機能 123
 - Windows 7 での標準ドライバの使用不可 82
 - Windows PE のドライバ 85
 - Windows Server 2008、インストール時の警告 94
 - Windows Server 2008、管理ユーザーでログイン 94
 - Windows Vista、インストール時の警告 102
 - Windows Vista へのインストール 102
 - Windows XP プロダクト アクティベーション機能 113
 - 概要 63
 - VMware Tools、IPv6 の無効化
 - Asianux 3.0 ゲスト 155
 - CentOS 4 ゲスト 165
 - CentOS 5 ゲスト 160
 - FreeBSD 4.0、4.1、4.2、4.3 ゲスト 572
 - FreeBSD 4.4、4.5、4.6.2、4.8 ゲスト 568
 - Mandrake Linux 10.1 ゲスト 213
 - Mandrake Linux 10 ゲスト 218
 - Mandrake Linux 8.0 または 8.1 ゲスト 243
 - Mandrake Linux 8.2 ゲスト 238
 - Mandrake Linux 9.0 ゲスト 233
 - Mandrake Linux 9.1 ゲスト 229

Mandrake Linux 9.2 ゲスト	224	SUSE Linux Enterprise Desktop 10 ゲスト	361
Mandriva Corporate Desktop 4 ゲスト	187	SUSE Linux Enterprise Desktop 11 ゲスト	354
Mandriva Corporate Server 4 ゲスト	192	SUSE Linux Enterprise Server 10 ゲスト	375
Mandriva Linux 2006 ゲスト	208	SUSE Linux Enterprise Server 11 ゲスト	366
Mandriva Linux 2007 ゲスト	202	SUSE Linux Enterprise Server 7 ゲスト	396
Mandriva Linux 2008 ゲスト	197	SUSE Linux Enterprise Server 8 ゲスト	391
Novell Linux Desktop 9 ゲスト	248	SUSE Linux Enterprise Server 9 ゲスト	385
Open SUSE Linux 10.2 ゲスト	410	Turbolinux 10 Desktop ゲスト	470
Open SUSE Linux 10.3 ゲスト	405	Turbolinux 10 Server ゲスト	466
Open SUSE Linux 11.1 ゲスト	399	Turbolinux 7.0 ゲスト	482
Oracle Enterprise Linux 5 ゲスト	253	Turbolinux Enterprise Server 8 ゲスト	474
Red Hat Enterprise Linux 2.1 ゲスト	300	Turbolinux Workstation 8 ゲスト	477
Red Hat Enterprise Linux 3 ゲスト	291	Ubuntu 5.04 ゲスト	524
Red Hat Enterprise Linux 4 ゲスト	278	Ubuntu 5.10 ゲスト	520
Red Hat Enterprise Linux 5 ゲスト	264	Ubuntu 6.06 ゲスト	515
Red Hat Linux 6.2 ゲスト	340	Ubuntu 6.10 ゲスト	510
Red Hat Linux 7.1 ゲスト	331	Ubuntu 7.04 ゲスト	505
Red Hat Linux 7.2 ゲスト	325	Ubuntu 7.10 ゲスト	499
Red Hat Linux 7.3 ゲスト	320	Ubuntu 8.04 LTS ゲスト	494
Red Hat Linux 7 ゲスト	336	Ubuntu 8.10 ゲスト	487
Red Hat Linux 8.0 ゲスト	315	VMware Tools、Linux ゲストへのインス トール	65
Red Hat Linux 9.0 ゲスト	306	VMware Tools、root を有効にしてイン ストール	
SUSE Linux 10.1 ゲスト	416	Debian 4.0	172
SUSE Linux 10 ゲスト	421	Debian 5.0	169
SUSE Linux 7.3 ゲスト	463	Ubuntu 8.04 LTS	493
SUSE Linux 8.0 ゲスト	458	Ubuntu 8.10	487
SUSE Linux 8.1 ゲスト	453	Ubuntu Linux 5.04	524
SUSE Linux 8.2 ゲスト	447		
SUSE Linux 9.0 ゲスト	442		
SUSE Linux 9.1 ゲスト	436		
SUSE Linux 9.3 ゲスト	425		

- Ubuntu Linux 5.10 519
 - Ubuntu Linux 6.06 514
 - Ubuntu Linux 6.10 509
 - Ubuntu Linux 7.04 504
 - Ubuntu Linux 7.10 498
 - VMware Tools と X サーバ
 - Mandrake Linux 10.1 ゲスト 212
 - Mandrake Linux 10 ゲスト 217
 - Mandrake Linux 8.2 ゲスト 237
 - Mandrake Linux 9.0 ゲスト 232
 - Mandrake Linux 9.1 ゲスト 227
 - Mandriva Corporate Desktop 4
ゲスト 186
 - Mandriva Corporate Server 4
ゲスト 191
 - Mandriva Linux 2006 ゲスト 207
 - Mandriva Linux 2007 ゲスト 201
 - Mandriva Linux 2008 ゲスト 196
 - Red Hat Enterprise Linux Workstation
2.1 ゲスト 298
 - Red Hat Linux 7.0 ゲスト 334
 - Red Hat Linux 7.1 ゲスト 329
 - Red Hat Linux 7.2 ゲスト 323
 - Red Hat Linux 7.3 ゲスト 318
 - Red Hat Linux 8.0 ゲスト 313
 - Red Hat Linux 9.0 ゲスト 304
 - SUSE Linux 7.3 ゲスト 462
 - SUSE Linux 8.0 ゲスト 457
 - SUSE Linux 8.1 ゲスト 452
 - SUSE Linux 8.2 ゲスト 446
 - SUSE Linux Enterprise Server 7
ゲスト 395
 - Turbolinux 7.0 ゲスト 481
 - VMware Tools の vmware-user プロセス
を手動で起動 65
 - VMware Tools のインストール、ESX
Server 2.5.x の再起動
 - Windows 2000 132
 - Windows NT 136
 - Windows Server 2003 115
 - Windows XP 124
 - vmware-user プロセス、VMware Tools
を手動で起動 65
 - vmxnet3 ネットワーク アダプタ リンク
スピード
 - Windows Server 2003 113
 - Windows XP 122
- ## W
- Windows 2000
 - ESX Server 2.5.x への VMware Tools
のインストール後の
再起動 132
 - PAE、ESX Server 仮想マシンでの
無効化 131
 - Service Pack 3 の起動エラー 131
 - ゲスト OS のインストール 125
 - Windows 2000 SP3 ゲストでの msgina.dll
および起動エラー 131
 - Windows 2000 SP3 ゲストでの起動
エラー 131
 - Windows 3.1x
 - VMware Tools 未対応 151
 - ゲスト OS のインストール 149
 - ネットワーク アダプタのインス
トール 150
 - マウスに関する問題の解決 150
 - Windows 7
 - 64 ビット版 81
 - VMware Tools SVGA ドライバ、使用
不可 82
 - ゲスト OS のインストール 81
 - Windows 95
 - DMA の有効化 146
 - USB ドライバ、未サポート 147

- イーサネット アダプタ用のドライバのインストール 145
- インストール後のネットワークの有効化 146
- ゲスト OS のインストール 143
- 実在しない COM ポート 147
- 中断したインストールのレジューム 145
- ネットワークの問題のトラブルシューティング 147
- Windows 95 ゲストの中断されたセットアップ 145
- Windows 95 のインストール時の MS-DOS プロンプト 145
- Windows 98
 - USB ドライバ、未サポート 142
 - インストール後のネットワークの有効化 142
 - ゲスト OS のインストール 140
 - 実在しない COM ポート 142
 - フロッピー ディスクから起動 141
- Windows Me
 - USB ドライバ、未サポート 138
 - ゲスト OS のインストール 137
- Windows NT
 - DMA の有効化 134
 - ESX Server 2.5.x への VMware Tools のインストール後の再起動 136
 - PAE、ESX Server 仮想マシンでの無効化 136
 - インストール後のネットワークの有効化 135
 - インストール中のメモリの設定 136
 - ゲスト OS のインストール 133
 - 複数のディスク、使用 135
- Windows NT ゲストで複数使用するディスク 135
- Windows Preinstallation Environment
 - 64 ビット版 83
 - PE 2.1 の ISO イメージの作成 84
 - VMware Tools ドライバの使用 85
 - ゲスト OS のインストール 83
- Windows Recovery Environment
 - 64 ビット版 87
 - ゲスト OS のインストール 87
- Windows Server 2003
 - 64 ビット版 108
 - Clustering Service および ESX Server 114
 - ESX Server 2.5.x への VMware Tools のインストール後の再起動 115
 - Intel Woodcrest ホスト上の 64 ビット R2 のクラッシュ 115
 - PAE、ESX Server 仮想マシンでの無効化 115
 - vmxnet3 リンク スピード 113
 - 拡張 vmxnet アダプタ、有効化 112
 - ゲスト OS のインストール 104
 - ディスプレイ設定 114
 - ハイバネーション機能 114
 - ビルドのチェック、実行 114
 - プロダクト アクティベーション機能 113
- Windows Server 2003 のグラフィック設定 114
- Windows Server 2008
 - 64 ビットのインストールの不規則な再起動 94
 - 64 ビット版 90
 - Server Core の機能、64 ビット 89, 91
 - VMware Tools インストール時の警告 94
 - VMware Tools を開く 94

- ゲスト OS のインストール 88
- Windows Vista
 - 64 ビット版 98
 - VMware Tools インストール時の警告 102
 - VMware Tools のインストール 102
 - ゲスト OS のインストール 96
 - ネットワーク アダプタ 103
- Windows XP
 - 64 ビット版 119
 - ESX Server 2.5.x への VMware Tools のインストール後の再起動 124
 - PAE、ESX Server 仮想マシンでの無効化 124
 - SCSI ドライバのサポート 120
 - vmxnet3 リンク スピード 122
 - インストール中に表示される PAE メッセージ 123
 - ゲスト OS のインストール 116
 - ハイバネーション機能 123
 - パラレル ポートを経由したデータの転送の失敗 122
 - ビルドのチェック、実行 124
 - プロダクト アクティベーション機能 122

X

- X ウィンドウ システムの起動エラー、Red Hat Enterprise Linux 3 294
- X サーバ、選択
 - Mandrake Linux 10.1 ゲスト 212
 - Mandrake Linux 10 ゲスト 217
 - Mandrake Linux 8.2 ゲスト 237
 - Mandrake Linux 9.0 ゲスト 232
 - Mandrake Linux 9.1 ゲスト 227
 - Mandriva Corporate Desktop 4 ゲスト 186

- Mandriva Corporate Server 4 ゲスト 191
- Mandriva Linux 2006 ゲスト 207
- Mandriva Linux 2007 ゲスト 201
- Mandriva Linux 2008 ゲスト 196
- Red Hat Enterprise Linux Workstation 2.1 ゲスト 298
- Red Hat Linux 7.0 ゲスト 334
- Red Hat Linux 7.1 ゲスト 329
- Red Hat Linux 7.2 ゲスト 323
- Red Hat Linux 7.3 ゲスト 318
- Red Hat Linux 8.0 ゲスト 313
- Red Hat Linux 9.0 ゲスト 304
- SUSE Linux 7.3 ゲスト 462
- SUSE Linux 8.0 ゲスト 457
- SUSE Linux 8.1 ゲスト 452
- SUSE Linux 8.2 ゲスト 446
- SUSE Linux Enterprise Server 7 ゲスト 395
- Turbolinux 7.0 ゲスト 481

あ

- アーキテクチャ、SUSE Linux 9.3 の 64 ビット ホストでの選択 426

い

- インストール中に表示される PAE メッセージ
 - Red Hat Enterprise Linux 3 291
 - Red Hat Enterprise Linux 4 278
 - Red Hat Enterprise Linux 5 265
 - Solaris 10 613
 - Windows XP 123
- インストール中の黒い画面、Turbolinux 10 Server 467
- インストール中の黒い画面表示、Turbolinux 10 Server 467

インストール中のハング アップ

- Mandrake Linux 8.0 または 8.1 244
- Red Hat Linux 7.1 331
- Red Hat Linux 7.2 326
- Sun Java Desktop System 2 344
- SUSE Linux 8.1 454
- SUSE Linux 8.2 448
- SUSE Linux 9.0 443
- SUSE Linux 9.1 437

え

エラー

- Pentium 4 ホスト上での NetWare 5.1 Server のページ違反 エラー 597
 - Red Hat Linux 9.0 での INIT 308
 - インストール、NetWare 6.0 Server 590
- エラー メッセージ、DVD からのインストール
- SUSE Linux 8.2 448
 - SUSE Linux 9.0 443
 - SUSE Linux 9.1 437

お

汚染された (Tainted) ドライバのメッセージ

- Red Hat Enterprise Linux 3 293
- Red Hat Linux 8.0 316
- Red Hat Linux 9.0 310

か

カーソル キー、ファイル システムの検索不可

- NetWare 5.1 Server ゲスト 598
 - NetWare 6.0 Server ゲスト 591
- カーネル、不適切な種類のインストールを回避、Red Hat Enterprise Linux 2.1 298

カーネル モジュール、事前作成済みのサポート

- SUSE Linux Enterprise Desktop 11 353
- SUSE Linux Enterprise Server 11 364
- Ubuntu 8.04.2 LTS 490, 491

解像度、変更

- Mandrake Linux 10.1 ゲスト 214
 - Mandrake Linux 10 ゲスト 219
 - Mandriva Corporate Desktop 4 ゲスト 187
 - Mandriva Corporate Server 4 ゲスト 192
 - Mandriva Linux 2006 ゲスト 208
 - Mandriva Linux 2007 ゲスト 203
 - Mandriva Linux 2008 ゲスト 198
 - Sun Java Desktop System 2 ゲスト 343
- 拡張 vmxnet アダプタ、Windows Server 2003 での有効化 112

仮想 CPU

- 4 VCPU での FreeBSD 7.1 の長時間のインストールおよび再起動 528
- FreeBSD 7.1 の奇数での停止 528

仮想ディスク

- パーティショニング 78
 - フォーマット 78
- 仮想ディスクの推奨、SCO OpenServer 5.0 345
- 仮想ディスクのパーティショニング 78
- 仮想ディスクのフォーマット 78
- 仮想ハードウェア、SMP のサポート 66
- 仮想ハードウェアでの SMP のサポート 66

画面解像度、VMware Tools のインストールなしでの FreeBSD 7.1 ゲストの変更不可 528

き

キーボードおよびマウス、NetWare 6.5
Server ゲストの再起動後のコン
トロールの回復 583

起動ディスクの作成

IBM OS/2.4.0 ゲスト 179

IBM OS/2 Warp 4.5.2 ゲスト 176

け

ゲスト OS のインストール

Asianux 3.0 ゲスト 152

CentOS 4 ゲスト 163

CentOS 5 ゲスト 157

Debian 4.0 ゲスト 171

Debian 5.0 168

FreeBSD 4.0、4.1、4.2、4.3
ゲスト 571

FreeBSD 4.10 ゲスト 563

FreeBSD 4.11 ゲスト 561

FreeBSD 4.4、4.5、4.6.2、4.8
ゲスト 567

FreeBSD 4.9 ゲスト 565

FreeBSD 5.0 ゲスト 559

FreeBSD 5.1 ゲスト 557

FreeBSD 5.2 ゲスト 555

FreeBSD 5.3 ゲスト 552

FreeBSD 5.4 ゲスト 549

FreeBSD 5.5 ゲスト 546

FreeBSD 6.0 ゲスト 543

FreeBSD 6.1 ゲスト 541

FreeBSD 6.2 ゲスト 539

FreeBSD 6.3 ゲスト 536

FreeBSD 6.4 ゲスト 533

FreeBSD 7.0 ゲスト 530

FreeBSD 7.1 ゲスト 526

IBM OS/2 Warp 4.0 ゲスト 178

IBM OS/2 Warp 4.5.2 ゲスト 175

Mac OS X Server 10.5 ゲスト 181

Mandrake Linux 10.1 ゲスト 211

Mandrake Linux 10 ゲスト 216

Mandrake Linux 8.0 および 8.1
ゲスト 241

Mandrake Linux 8.2 ゲスト 236

Mandrake Linux 9.0 ゲスト 231

Mandrake Linux 9.1 ゲスト 227

Mandrake Linux 9.2 ゲスト 221

Mandriva Corporate Desktop 4
ゲスト 185

Mandriva Corporate Server 4
ゲスト 190

Mandriva Linux 2006 ゲスト 205,
206

Mandriva Linux 2007 ゲスト 200

Mandriva Linux 2008 ゲスト 195

MS-DOS 6.22 ゲスト 149

NetWare 4.2 Server ゲスト 600

NetWare 5.1 Server ゲスト 592

NetWare 6.0 Server ゲスト 585

NetWare 6.5 Server ゲスト 577

Novell Linux Desktop 9 ゲスト 246

Open SUSE Linux 10.3 ゲスト 403

Open SUSE Linux 11.1 ゲスト 398

Oracle Enterprise Linux 5 251

Red Hat Enterprise Linux 2.1
ゲスト 295

Red Hat Enterprise Linux 3
ゲスト 281

Red Hat Enterprise Linux 4
ゲスト 267

Red Hat Enterprise Linux 5
ゲスト 256

Red Hat Linux 6.2 ゲスト 338

Red Hat Linux 7.0 ゲスト 333

Red Hat Linux 7.1 ゲスト 328

Red Hat Linux 7.2 ゲスト 322

Red Hat Linux 7.3 ゲスト	317	ゲスト	472
Red Hat Linux 8.0 ゲスト	312	Turbolinux Workstation 8	
Red Hat Linux 9.0 ゲスト	303	ゲスト	476
SCO OpenServer 5.0 ゲスト	345	Ubuntu 8.0.4 LTS ゲスト	489
SCO UnixWare 7 ゲスト	350	Ubuntu 8.10 ゲスト	484
Solaris 10 ゲスト	605	Ubuntu Linux 5.04 ゲスト	522
Solaris 8 ゲスト	620	Ubuntu Linux 5.10 ゲスト	517
Solaris 9 ゲスト	616	Ubuntu Linux 6.06 ゲスト	512
Sun Java Desktop System 2		Ubuntu Linux 6.10 ゲスト	507
ゲスト	342	Ubuntu Linux 7.04 ゲスト	501
SUSE Linux 10.1 ゲスト	413	Ubuntu Linux 7.10 ゲスト	496
SUSE Linux 10 ゲスト	418	Windows 2000 ゲスト	125
SUSE Linux 7.3 ゲスト	461	Windows 3.1x ゲスト	149
SUSE Linux 8.0 ゲスト	456	Windows 7 ゲスト	81
SUSE Linux 8.1 ゲスト	451	Windows 95 ゲスト	143
SUSE Linux 8.2 ゲスト	445	Windows 98 ゲスト	140
SUSE Linux 9.0 ゲスト	440	Windows Me ゲスト	137
SUSE Linux 9.1 ゲスト	434	Windows NT ゲスト	133
SUSE Linux 9.2 ゲスト	429	Windows Preinstallation	
SUSE Linux 9.3 ゲスト	423	Environment のゲスト	83
SUSE Linux Enterprise Desktop 10		Windows Recovery Environment の	
ゲスト	357	ゲスト	87
SUSE Linux Enterprise Desktop 11		Windows Server 2003 ゲスト	104
ゲスト	345	Windows Server 2008 ゲスト	88
SUSE Linux Enterprise Server 10		Windows Vista ゲスト	96
ゲスト	369	Windows XP ゲスト	116
SUSE Linux Enterprise Server 11		初期の 2.4 カーネルを使用した	
ゲスト	364	Red Hat Linux 7.1	331
SUSE Linux Enterprise Server 7		初期の 2.4 カーネルを使用した	
ゲスト	394	Red Hat Linux 7.2	326
SUSE Linux Enterprise Server 8		ゲスト OS のインストール、ISO イメー	
ゲスト	389	ジの使用	78
SUSE Linux Enterprise Server 9		ゲスト OS のライセンス	79
ゲスト	378	ゲスト、サポート廃止予定	62
Turbolinux 10 Desktop ゲスト	469		
Turbolinux 10 Server ゲスト	465		
Turbolinux 7.0 ゲスト	480		
Turbolinux Enterprise Server 8			

こ

コピーした仮想マシンでのネットワーク	
CentOS 4	166

- CentOS 5 161
- Novell Linux Desktop 9 249
- Open SUSE Linux 10.2 411
- Open SUSE Linux 10.3 406
- Open SUSE Linux 11.1 401
- Oracle Enterprise Linux 5 254
- Red Hat Enterprise Linux 4 279
- Red Hat Enterprise Linux 5 265
- SUSE Linux 10 421
- SUSE Linux 10.1 416
- SUSE Linux 9.1 438
- SUSE Linux 9.2 432
- SUSE Linux 9.3 427
- SUSE Linux Enterprise Desktop 10 362
- SUSE Linux Enterprise Desktop 11 355
- SUSE Linux Enterprise Server 10 376
- SUSE Linux Enterprise Server 11 367
- SUSE Linux Enterprise Server 9 386
- コピーした仮想マシン、ネットワークの使用
 - CentOS 4 166
 - CentOS 5 161
 - Novell Linux Desktop 9 249
 - Open SUSE Linux 10.2 411
 - Open SUSE Linux 10.3 406
 - Open SUSE Linux 11.1 401
 - Oracle Enterprise Linux 5 254
 - Red Hat Enterprise Linux 4 279
 - Red Hat Enterprise Linux 5 265
 - SUSE Linux 10 421
 - SUSE Linux 10.1 416
 - SUSE Linux 9.1 438
 - SUSE Linux 9.2 432
 - SUSE Linux 9.3 427
 - SUSE Linux Enterprise Desktop 10 362
 - SUSE Linux Enterprise Desktop 11 355
 - SUSE Linux Enterprise Server 10 376
 - SUSE Linux Enterprise Server 11 367
 - SUSE Linux Enterprise Server 9 386
- 再起動ごとの locations ファイルの増大
 - FreeBSD 4.0、4.1、4.2、4.3 ゲスト 573
 - FreeBSD 4.10 ゲスト 564
 - FreeBSD 4.11 ゲスト 562
 - FreeBSD 4.4、4.5、4.6.2、4.8 ゲスト 569
 - FreeBSD 4.9 ゲスト 566
 - FreeBSD 5.0 ゲスト 548, 560
 - FreeBSD 5.1 ゲスト 558
 - FreeBSD 5.2 ゲスト 556
 - FreeBSD 5.3 ゲスト 554
 - FreeBSD 5.4 ゲスト 551
 - FreeBSD 6.0 ゲスト 544
 - FreeBSD 6.1 ゲスト 542
 - FreeBSD 6.2 ゲスト 540
 - FreeBSD 6.3 ゲスト 538
 - FreeBSD 6.4 ゲスト 535
 - FreeBSD 7.0 ゲスト 531
 - FreeBSD 7.1 ゲスト 529
- サスペンド電源イベントのスキプトの実行不能
 - FreeBSD 6.3 ゲスト 538
 - FreeBSD 6.4 ゲスト 535
 - FreeBSD 7.1 ゲスト 528
- サポートされていない USB 2.0 ドライバ
 - Windows 95 ゲスト 147
 - Windows 98 ゲスト 142
 - Windows Me ゲスト 138

サポート廃止予定のゲスト 62

し

実在しない COM ポート

Windows 95 147

Windows 98 142

シャットダウン、Mandrake Linux
8.0 244

シリアル ポート

Windows 95 ゲスト 147

Windows 98 ゲスト 142

す

スクリーン セーバー、実行

Asianux 3.0 ゲスト 156

CentOS 4 ゲスト 167

CentOS 5 ゲスト 162

FreeBSD 4.0、4.1、4.2、4.3
ゲスト 575

FreeBSD 4.10 ゲスト 564

FreeBSD 4.11 ゲスト 562

FreeBSD 4.4、4.5、4.6.2、4.8
ゲスト 569

FreeBSD 4.9 ゲスト 566

FreeBSD 5.0 ゲスト 560

FreeBSD 5.1 ゲスト 558

FreeBSD 5.2 ゲスト 556

FreeBSD 5.3 ゲスト 554

FreeBSD 5.4 ゲスト 551

FreeBSD 5.5 ゲスト 548

FreeBSD 6.0 ゲスト 545

FreeBSD 6.1 ゲスト 542

FreeBSD 6.2 ゲスト 530, 539, 540

FreeBSD 7.0 ゲスト 532

Mandrake Linux 10.1 ゲスト 214

Mandrake Linux 10 ゲスト 219

Mandrake Linux 8.0 および 8.1
ゲスト 244

Mandrake Linux 8.2 ゲスト 239

Mandrake Linux 9.0 ゲスト 235

Mandrake Linux 9.1 ゲスト 230

Mandrake Linux 9.2 ゲスト 225

Mandriva Corporate Desktop 4
ゲスト 188

Mandriva Corporate Server 4
ゲスト 193

Mandriva Linux 2006 ゲスト 209

Mandriva Linux 2007 ゲスト 203

Mandriva Linux 2008 ゲスト 199

Red Hat Enterprise Linux 2.1
ゲスト 301

Red Hat Enterprise Linux 3
ゲスト 292

Red Hat Enterprise Linux 4
ゲスト 280

Red Hat Linux 6.2 ゲスト 341

Red Hat Linux 7.0 ゲスト 337

Red Hat Linux 7.1 ゲスト 332

Red Hat Linux 7.2 ゲスト 326

Red Hat Linux 7.3 ゲスト 321

Red Hat Linux 8.0 ゲスト 316

Red Hat Linux 9.0 ゲスト 308

Sun Java Desktop System 2
ゲスト 344

SUSE Linux 7.3 ゲスト 463

SUSE Linux 8.0 ゲスト 459

SUSE Linux 8.1 ゲスト 454

SUSE Linux 8.2 ゲスト 449

SUSE Linux 9.0 444

SUSE Linux 9.1 439

SUSE Linux 9.2 ゲスト 433

SUSE Linux 9.3 ゲスト 428

SUSE Linux Enterprise Server 7
ゲスト 396

SUSE Linux Enterprise Server 8
ゲスト 392

SUSE Linux Enterprise Server 9
 ゲスト 387
 Turbolinux 10 Desktop ゲスト 471
 Turbolinux 10 Server ゲスト 467
 Turbolinux 7.0 ゲスト 483
 Turbolinux Enterprise Server 8
 ゲスト 475
 Turbolinux Workstation 8
 ゲスト 478
 スクリーン サーバー、ホストでオフ 78

た

タイムキーピング構成

Asianux 3.0 156
 CentOS 4 167
 CentOS 5 161
 Debian 4.0 173
 Debian 5.0 170
 Mandrake Linux 10 219
 Mandrake Linux 10.1 214
 Mandrake Linux 8.0 および 8.1 244
 Mandrake Linux 8.2 239
 Mandrake Linux 9.0 235
 Mandrake Linux 9.1 230
 Mandrake Linux 9.2 225
 Mandriva Corporate Desktop 4 188
 Mandriva Corporate Server 4 193
 Mandriva Linux 2006 209
 Mandriva Linux 2007 203
 Mandriva Linux 2008 199
 Novell Linux Desktop 9 249
 Open SUSE Linux 10.2 412
 Open SUSE Linux 10.3 406
 Oracle Enterprise Linux 5 254
 Red Hat Enterprise Linux 2.1 301
 Red Hat Enterprise Linux 3 292
 Red Hat Enterprise Linux 4 279

Red Hat Enterprise Linux 5 266
 Red Hat Linux 6.2 341
 Red Hat Linux 7.0 336
 Red Hat Linux 7.1 332
 Red Hat Linux 7.2 326
 Red Hat Linux 7.3 321
 Red Hat Linux 8.0 315
 Red Hat Linux 9.0 308
 SUSE Linux 10 422
 SUSE Linux 10.1 417
 SUSE Linux 7.3 463
 SUSE Linux 8.0 459
 SUSE Linux 8.1 454
 SUSE Linux 8.2 449
 SUSE Linux 9.0 444
 SUSE Linux 9.1 438
 SUSE Linux 9.2 433
 SUSE Linux 9.3 427
 SUSE Linux Enterprise Desktop
 10 362
 SUSE Linux Enterprise Desktop
 11 356
 SUSE Linux Enterprise Server 10 376
 SUSE Linux Enterprise Server 11 367
 SUSE Linux Enterprise Server 7 396
 SUSE Linux Enterprise Server 8 392
 SUSE Linux Enterprise Server 9 386
 Turbolinux 10 Desktop 471
 Turbolinux 10 Server 467
 Turbolinux 7.0 483
 Turbolinux Enterprise Server 8 475
 Turbolinux Workstation 8 478
 Ubuntu 8.04 LTS 495
 Ubuntu 8.10 488
 Ubuntu Linux 5.04 525
 Ubuntu Linux 5.10 520

Ubuntu Linux 6.06 515

Ubuntu Linux 6.10 511

Ubuntu Linux 7.04 506

Ubuntu Linux 7.10 500

て

ディスクの追加

IBM OS/2 Warp 4.0 ゲスト 180

IBM OS/2 Warp 4.5.2 ゲスト 177

ディスク パーティション、Mac OS X
Server 10.5 ゲストのサイズ 184

ディスプレイ

Solaris 10 で小さい 612

Windows Server 2003 の設定 114

ディスプレイ、解像度の変更

Mandrake Linux 10.1 ゲスト 214

Mandrake Linux 10 ゲスト 219

Mandriva Corporate Desktop 4
ゲスト 187

Mandriva Corporate Server 4
ゲスト 192

Mandriva Linux 2006 ゲスト 208

Mandriva Linux 2007 ゲスト 203

Mandriva Linux 2008 ゲスト 198

Sun Java Desktop System 2
ゲスト 343

テキスト モード、NetWare 6.5 Server で
の検索 583

と

ドライバ

NetWare 5.1 Server、LSI Logic SCSI
の使用 596

Solaris 10、サポート対象のネット
ワーク アダプタ 612

Windows XP、SCSI サポート 120

ドライバ、「汚染された (Tainted)」
メッセージ

Red Hat Enterprise Linux 3 293

Red Hat Linux 8.0 316

Red Hat Linux 9.0 310

トラブルシューティング

Asianux 3.0 155

CentOS 4 166

CentOS 5 161

Debian 4.0 173

Debian 5.0 169

FreeBSD 4.0、4.1、4.2、4.3 573

FreeBSD 4.10 564

FreeBSD 4.11 562

FreeBSD 4.4、4.5、4.6.2、4.8 569

FreeBSD 4.9 566

FreeBSD 5.0 560

FreeBSD 5.1 558

FreeBSD 5.2 556

FreeBSD 5.3 554

FreeBSD 5.4 551

FreeBSD 5.5 548

FreeBSD 6.0 544

FreeBSD 6.1 542

FreeBSD 6.2 540

FreeBSD 6.3 538

FreeBSD 6.4 535

FreeBSD 7.0 531

FreeBSD 7.1 528

IBM OS/2 Warp 4.0 180

IBM OS/2 Warp 4.5.2 176

Mandrake Linux 10 219

Mandrake Linux 10.1 214

Mandrake Linux 8.0 または 8.1 244

Mandrake Linux 8.2 239

Mandrake Linux 9.0 235

Mandrake Linux 9.1 230

Mandrake Linux 9.2 225

Mandriva Corporate Desktop 4 187

- Mandriva Corporate Server 4 192
- Mandriva Linux 2006 208
- Mandriva Linux 2007 203
- Mandriva Linux 2008 198
- MS-DOS 6.22 150
- NetWare 5.1 Server 596
- NetWare 6.0 Server 590
- NetWare 6.5 Server 583
- Novell Linux Desktop 9 249
- Open SUSE Linux 10.2 411
- Open SUSE Linux 10.3 406
- Open SUSE Linux 11.1 401
- Oracle Enterprise Linux 5 254
- Red Hat Enterprise Linux 3 291
- Red Hat Enterprise Linux 4 278
- Red Hat Enterprise Linux 5 265
- Red Hat Enterprise Linux
Workstation 2.1 301
- Red Hat Linux 6.2 341
- Red Hat Linux 7.0 336
- Red Hat Linux 7.1 331
- Red Hat Linux 7.2 326
- Red Hat Linux 7.3 321
- Red Hat Linux 8.0 315
- Red Hat Linux 9.0 307
- SCO OpenServer 5.0 348
- SCO OpenServer 7 352
- Solaris 10 612
- Sun Java Desktop System 2 343
- SUSE Linux 10 421
- SUSE Linux 10.1 416
- SUSE Linux 7.3 463
- SUSE Linux 8.0 459
- SUSE Linux 8.1 454
- SUSE Linux 8.2 448
- SUSE Linux 9.0 443
- SUSE Linux 9.1 437
- SUSE Linux 9.2 432
- SUSE Linux 9.3 426
- SUSE Linux Enterprise
Desktop 10 362
- SUSE Linux Enterprise
Desktop 11 355
- SUSE Linux Enterprise Server 10 375
- SUSE Linux Enterprise Server 11 366
- SUSE Linux Enterprise Server 7 396
- SUSE Linux Enterprise Server 8 392
- SUSE Linux Enterprise Server 9 386
- Turbolinux 10 Desktop 471
- Turbolinux 10 Server 467
- Turbolinux 7.0 483
- Turbolinux Enterprise Server 8 475
- Turbolinux Workstation 8 478
- Ubuntu 5.04 525
- Ubuntu 5.10 520
- Ubuntu 6.06 515
- Ubuntu 6.10 511
- Ubuntu 7.04 505
- Ubuntu 8.04 LTS 495
- Ubuntu 8.10 488
- Windows 2000 131
- Windows 3.1x 150
- Windows 95 147
- Windows 98 142
- Windows Me 138
- Windows NT 136
- Windows PE 85
- Windows Server 2003 112
- Windows Server 2008 93
- Windows Vista 102
- Windows XP 122

ね

ネットワーク

- Windows 3.1x 向けアダプタ 150
- Windows 95 ゲスト、動作不能 147
- Windows 95 ゲストへのドライバのインストール 145
- Windows 95 ゲスト、有効化 146
- Windows 98 ゲスト、有効化 142
- Windows NT ゲスト 135

ネットワーク アダプタ

- Netware 5.1 Server を使用した同一ネットワークで複数 597
- Windows Vista での変更 103
- ネットワーク アダプタ ドライバは ESX Server 3.x 上の Solaris 10 をサポート 612
- ネットワーク アダプタ プロトコル、SCO OpenServer 5.0 ゲストでの構成 349
- ネットワークの構成時に発生する SCO UnixWare 7.1.1 のカーネルパニック 352

は

ハイバネーション機能

- Windows Server 2003 ゲスト 114
- Windows XP ゲスト 123
- パラレル ポートを介したデータの転送の失敗、Windows XP 122

ハング アップ

- SP3 および SP5 を適用した NetWare 6.5 Server 583
- Virtual SMP を使用する Solaris 10 614

ひ

ビルドのチェック、実行

- Windows Server 2003 114
- Windows XP 124

ふ

プロセッサの種類、変更の回避

- CentOS 4 167
- CentOS 5 162
- Debian 4.0 174
- Debian 5.0 170
- FreeBSD 4.0、4.1、4.2、4.3 576
- FreeBSD 4.4、4.5、4.6.2、4.8 570
- Mandrake Linux 10 220
- Mandrake Linux 10.1 215
- Mandrake Linux 8.0 および 8.1 245
- Mandrake Linux 8.2 240
- Mandrake Linux 9.0 235
- Mandrake Linux 9.1 230
- Mandrake Linux 9.2 225
- Mandriva Corporate Desktop 188
- Mandriva Corporate Server 4 193
- Mandriva Linux 2006 209
- Mandriva Linux 2007 204
- Mandriva Linux 2008 199
- Novell Linux Desktop 9 249
- Open SUSE Linux 10.2 412
- Open SUSE Linux 10.3 407
- Open SUSE Linux 11.1 402
- Oracle Enterprise Linux 5 255
- Red Hat Enterprise Linux 2.1 302
- Red Hat Enterprise Linux 3 293
- Red Hat Enterprise Linux 4 280
- Red Hat Enterprise Linux 5 266
- Red Hat Linux 6.2 341
- Red Hat Linux 7.0 337
- Red Hat Linux 7.1 332
- Red Hat Linux 7.2 327
- Red Hat Linux 7.3 321
- Red Hat Linux 8.0 316
- Red Hat Linux 9.0 309

- SUSE Linux 10 422
 - SUSE Linux 10.1 417
 - SUSE Linux 7.3 464
 - SUSE Linux 8.0 459
 - SUSE Linux 8.1 455
 - SUSE Linux 8.2 449
 - SUSE Linux 9.0 444
 - SUSE Linux 9.1 439
 - SUSE Linux 9.2 433
 - SUSE Linux 9.3 428
 - SUSE Linux Enterprise Desktop 10 363
 - SUSE Linux Enterprise Desktop 11 356
 - SUSE Linux Enterprise Server 10 376
 - SUSE Linux Enterprise Server 11 367
 - SUSE Linux Enterprise Server 7 397
 - SUSE Linux Enterprise Server 8 393
 - SUSE Linux Enterprise Server 9 387
 - Turbolinux 10 Desktop 471
 - Turbolinux 10 Server 467
 - Turbolinux 7.0 483
 - Turbolinux Enterprise Server 8 475
 - Turbolinux Workstation 8 479
 - Ubuntu 8.04 LTS 495
 - Ubuntu 8.10 488
 - Ubuntu Linux 5.04 525
 - Ubuntu Linux 5.10 521
 - Ubuntu Linux 6.06 516
 - Ubuntu Linux 6.10 511
 - Ubuntu Linux 7.04 506
 - Ubuntu Linux 7.10 500
 - プロダクト アクティベーション機能
 - Windows Server 2003 113
 - Windows XP 122
 - プロダクトのアクティベーション
 - Windows Server 2003 113
 - Windows XP 122
 - フロッピー ディスクと Windows 98 のインストール 141
- ほ**
- ホット アドのサポート
 - CPU、メモリ、プラグ デバイス 67
- ま**
- マウス、Windows 3.1x ゲストでの問題の解決 150
 - マウスのスクロール アップ操作不能
 - FreeBSD 6.3 ゲスト 538
 - FreeBSD 6.4 ゲスト 535
 - FreeBSD 7.1 ゲスト 529
 - VI Client を使用した IBM OS/2 Warp 4.0 ゲスト 180
 - VI Client を使用した IBM OS/2 Warp 4.5.2 ゲスト 177
 - マウスの正常な操作不能、Red Hat Enterprise Linux WS 2.1 UP6 301
 - マウス ポインタ、有効化
 - NetWare 5.1 Server ゲスト 598
 - NetWare 6.0 Server ゲスト 590
- み**
- 未検証のサウンド
 - FreeBSD 4.0、4.1、4.2、4.3 575
 - FreeBSD 4.10 564
 - FreeBSD 4.11 562
 - FreeBSD 4.4、4.5、4.6.2、4.8 569
 - FreeBSD 4.9 566
 - FreeBSD 5.0 560
 - FreeBSD 5.1 558
 - FreeBSD 5.2 556
 - FreeBSD 5.3 554
 - FreeBSD 5.4 551

FreeBSD 5.5 548
FreeBSD 6.0 544
FreeBSD 6.1 542
FreeBSD 6.2 529, 540
FreeBSD 6.3 538
FreeBSD 6.4 535
FreeBSD 7.0 531

め

メモリ

Solaris 10 の要件 611
Windows 2003 プロダクト アクティ
ベーション機能 113
Windows NT のインストール中の
制限 136
Windows XP プロダクト アクティ
ベーション機能 123
大容量での FreeBSD 7.1 の
ストール 528
メンテナンス パック、SCO UnixWare 7
ゲスト用にインストール 351

わ

ワークスペース、Linux ゲストでの切り
替え 65